千葉県教育振興財団調査報告第725集

西八千代北部地区
埋蔵文化財調査報告書4

― 八千代市東向遺跡・坪井向遺跡・川向遺跡・庚申山塚群・八王子台遺跡 ―

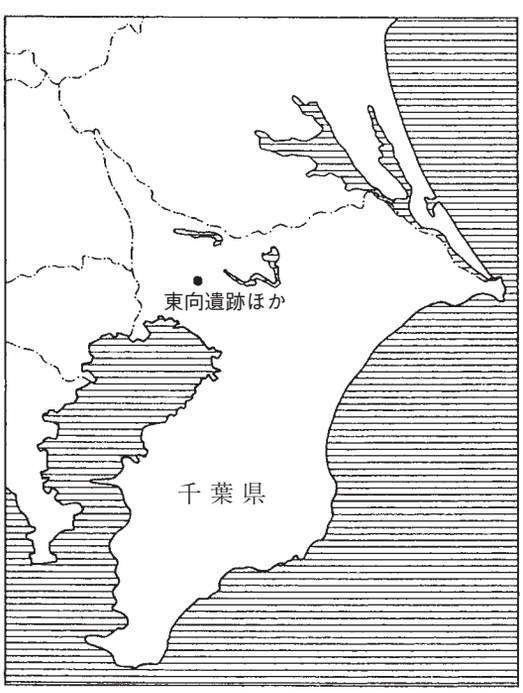
平成26年３月

独立行政法人　都市再生機構

公益財団法人　千葉県教育振興財団

西八千代北部地区
埋蔵文化財調査報告書4

— 八千代市東向遺跡・坪井向遺跡・川向遺跡・庚申山塚群・八王子台遺跡 —



序　　文

公益財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その結果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告書第725集として、独立行政法人都市再生機構の西八千代北部地区土地区画整理事業に伴って実施した、八千代市東向遺跡、坪井向遺跡、川向遺跡、庚申山塚群、及び八王子台遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、旧石器時代、縄文時代、平安時代及び近世の遺構や遺物が出土し、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、本書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を始めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成26年３月

公益財団法人　千葉県教育振興財団
理 事 長　　錦　織　總　夫

凡　　例

1　本書は、独立行政法人都市再生機構による西八千代北部地区土地区画整理事業にともなう埋蔵文化財の発掘調査報告書第４集である。

2　本書に収録した遺跡は、以下のものである。

東向遺跡	八千代市吉橋字宮前3079ほか	（遺跡コード221-029）
坪井向遺跡	八千代市大和田新田坪井向1207-3ほか	（遺跡コード221-032）
川向遺跡	八千代市吉橋3039-2ほか	（遺跡コード221-036）
庚申山塚群	八千代市大和田新田1233-1ほか	（遺跡コード221-035）
八王子台遺跡	八千代市大和田新田1220-1ほか	（遺跡コード221-031）

3　発掘調査から報告書に至る業務は、独立行政法人都市再生機構の委託を受け、公益財団法人千葉県教育振興財団が実施した。

4　発掘調査と整理作業の経緯及び担当者は、各章の調査の経過に記した。

5　本書の執筆・編集は、橋本勝雄、島立　桂、森本和男、雨宮龍太郎、髙橋博文、蔀　淳一、倉内郁子が担当した。

6　発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、独立行政法人都市再生機構、八千代市教育委員会の御指導、御協力を得た。

7　本書で使用した地形図は、以下のとおりである。

第５図・第７図　国土地理院発行1/25,000地形図　「習志野」「白井」

第６図　地図資料編纂会編　明治前期　関東平野地誌図集成　「習志野」「白井」　柏書房

8　遺跡周辺の航空写真は、京葉測量株式会社による平成16年撮影のものを使用した。

9　本書で使用した座標値は、日本測地系にもとづく平面直角座標で、図面の方位はすべて座標北である。

10　東向遺跡の旧石器時代の挿図及び表に関しては以下の記号を使用した。

石器：ナイフ形石器（Kn ★）、台形石器（Tp ⊕）、槍先形石器（Po ▲）、角錐状石器（Kp ⊕）、掻器（Es ◎）、削器（Ss ○）、彫器（Gr ⊕）、錐状石器（Dr ◐）、楔形石器（Pq ○）、加工痕ある剥片（Rf ○）、使用痕ある剥片（Uf ○）、石刃（Bl ▲）、石斧（Ax ◆）、礫器（Pt ⊕）、敲石（Hs ■）、台石（As ⊕）、その他の石器（Uk ⊕）、剥片（Fl ●）、砕片（Ch •）、石核（Co □）、細石刃（Mb ▽）、細石刃核（Mc ◪）、原石（Ge ⊕）、礫（Pe ＊）

石材：黒曜石Ａ（ObA：栃木県・高原山産 ●）、黒曜石Ｂ（ObB：信州・和田峠周辺産 ■）、黒曜石Ｃ（ObC：信州・八ヶ岳周辺産 ⊕）、黒曜石Ｄ（ObD：箱根・畑宿産 ◒）、黒曜石Ｅ（ObE：伊豆半島周辺産 ◙）、黒曜石Ｆ（ObF：神津島産 ◑）、黒曜石Ｇ（ObG：不明 ◆）、安山岩（An ○）、軟質の安山岩＝トロトロ石（To ◇）、流紋岩（Rh ▲）、頁岩Ａ（ShA：東北産の頁岩 ◎）、頁岩Ｂ（ShB：北関東産の頁岩 ★）、頁岩Ｃ（ShC：県南嶺岡産の頁岩 □）、頁岩Ｄ（ShD：珪化度の高い頁岩で産地不明のもの ▼）、頁岩Ｅ（ShE：黒色頁岩 ▽）、頁岩Ｘ（ShX：上記以外の頁岩 •）、凝灰岩（Tu ◬）、チャート（Ch △）、砂岩（Sa ◐）、ホルンフェルス（Ho ◉）、珪化木（Sw ⊕）、玉髄（Cc ☆）、緑色岩（Gr ⊕）、閃緑岩（Di ⊕）　⊕は該当なし。

本文目次

第１章　はじめに…… 1
　第１節　調査の概要と調査の方法…… 1
　第２節　基本土層…… 4
　第３節　遺跡の位置と環境…… 5
第２章　東向遺跡…… 14
　第１節　調査の経過…… 14
　第２節　旧石器時代…… 23
　第３節　縄文時代以降…… 154
　　１．縄文時代…… 154
　　２．平安時代…… 168
　　３．近世…… 171
　第４節　まとめ…… 184
第３章　坪井向遺跡…… 193
　第１節　調査の経過…… 193
　第２節　旧石器時代…… 200
　第３節　縄文時代以降…… 213
　　１．縄文時代…… 214
　　２．平安時代…… 217
　　３．中・近世…… 221
　第４節　まとめ…… 224
第４章　川向遺跡…… 228
　第１節　調査の経過…… 228
　第２節　旧石器時代…… 234
　第３節　縄文時代…… 246
　第４節　まとめ…… 247
第５章　庚申山塚群…… 251
　第１節　調査の経過…… 251
　第２節　調査の成果…… 251
第６章　八王子台遺跡…… 254
　第１節　調査の経過…… 254
　第２節　縄文時代…… 258
　第３節　まとめ…… 264

挿図目次

第 1 図　西八千代北部地区の事業範囲と遺跡範囲 … 2
第 2 図　西八千代北部地区の遺跡群 …… 3
第 3 図　グリッド模式図 …… 4
第 4 図　基本土層図 …… 5
第 5 図　遺跡群の位置と周辺の地形（1）…… 6
第 6 図　遺跡群の位置と周辺の地形（2）…… 7
第 7 図　西八千代北部地区周辺の遺跡 …… 13
第 8 図　東向遺跡と周辺地形図 …… 19
第 9 図　東向遺跡年次別調査範囲とグリッド図 …… 20
第 10 図　東向遺跡上層確認トレンチと本調査区 …… 21
第 11 図　東向遺跡下層確認トレンチと本調査区 …… 22
第 12 図　旧石器時代のブロック分布図 …… 24
第 13 図　16Q - Aブロック出土遺物分布図（1）
－石器別分布図－ …… 28
第 14 図　16Q - Aブロック出土遺物分布図（2）
－石材別分布図－ …… 28
第 15 図　16Q - Aブロック出土遺物実測図…… 29
第 16 図　4O - Aブロック出土遺物分布図（1）
－石器別分布図－ …… 30
第 17 図　4O - Aブロック出土遺物分布図（2）
－石材別分布図－ …… 31
第 18 図　4O - Aブロック出土遺物実測図（1）…… 33
第 19 図　4O - Aブロック出土遺物実測図（2）…… 34
第 20 図　10Q - Aブロック出土遺物分布図（1）
－石器別分布図－ …… 36
第 21 図　10Q - Aブロック出土遺物分布図（2）
－石材別分布図－ …… 37
第 22 図　10Q - Aブロック出土遺物実測図…… 38
第 23 図　14Q - Aブロック出土遺物分布図（1）
－石器別分布図－ …… 40
第 24 図　14Q - Aブロック出土遺物分布図（2）
－石材別分布図－ …… 41
第 25 図　14Q - Aブロック出土遺物実測図（1）…… 43
第 26 図　14Q - Aブロック出土遺物実測図（2）…… 44
第 27 図　14Q - Aブロック出土遺物実測図（3）…… 45
第 28 図　14Q - Aブロック出土遺物実測図（4）…… 46
第 29 図　14Q - Bブロック出土遺物分布図（1）
－石器別分布図－ …… 49
第 30 図　14Q - Bブロック出土遺物分布図（2）
－石材別分布図－ …… 50
第 31 図　14Q - Bブロック出土遺物実測図（1）…… 52
第 32 図　14Q - Bブロック出土遺物実測図（2）…… 53
第 33 図　14Q - Bブロック出土遺物実測図（3）…… 54
第 34 図　9L - Aブロック出土遺物分布図（1）
－石器別分布図－ …… 57
第 35 図　9L - Aブロック出土遺物分布図（2）
－石材別分布図－ …… 57
第 36 図　9L - Aブロック出土遺物実測図 …… 58
第 37 図　9L - Bブロック出土遺物分布図（1）
－石器別分布図－ …… 59
第 38 図　9L - Bブロック出土遺物分布図（2）
－石材別分布図－ …… 60
第 39 図　9L - Bブロック出土遺物実測図（1）…… 61
第 40 図　9L - Bブロック出土遺物実測図（2）…… 62
第 41 図　9L - Bブロック出土遺物実測図（3）…… 63
第 42 図　9L - Bブロック出土遺物実測図（4）…… 64
第 43 図　9L - Cブロック出土遺物分布図（1）
－石器別分布図－ …… 67
第 44 図　9L - Cブロック出土遺物分布図（2）
－石材別分布図－ …… 67
第 45 図　9L - Cブロック出土遺物実測図 …… 68
第 46 図　9M - Aブロック出土遺物分布図（1）
－石器別分布図－ …… 69
第 47 図　9M - Aブロック出土遺物分布図（2）
－石材別分布図－ …… 69
第 48 図　9M - Aブロック出土遺物実測図（1）…… 70
第 49 図　9M - Aブロック出土遺物実測図（2）…… 71
第 50 図　15R - Bブロック出土遺物分布図（1）
－石器別分布図－ …… 73
第 51 図　15R - Bブロック出土遺物分布図（2）
－石材別分布図－ …… 74
第 52 図　15R - Bブロック出土遺物実測図（1）…… 77
第 53 図　15R - Bブロック出土遺物実測図（2）…… 78
第 54 図　15R - Cブロック出土遺物分布図（1）
－石器別分布図－ …… 80
第 55 図　15R - Cブロック出土遺物分布図（2）
－石材別分布図－ …… 81
第 56 図　15R - Cブロック出土遺物実測図（1）…… 82
第 57 図　15R - Cブロック出土遺物実測図（2）…… 83
第 58 図　17R - Aブロック出土遺物分布図（1）
－石器別分布図（1）－ …… 85
第 59 図　17R - Aブロック出土遺物分布図（2）
－石器別分布図（2）－ …… 86
第 60 図　17R - Aブロック出土遺物分布図（3）
－石材別分布図－ …… 87
第 61 図　17R - Aブロック出土遺物実測図（1）…… 90
第 62 図　17R - Aブロック出土遺物実測図（2）…… 91
第 63 図　17R - Aブロック出土遺物実測図（3）…… 92
第 64 図　17R - Aブロック出土遺物実測図（4）…… 93
第 65 図　17R - Aブロック出土遺物実測図（5）…… 94
第 66 図　17R - Aブロック出土遺物実測図（6）…… 95
第 67 図　11Q - Aブロック出土遺物分布図（1）
－石器別分布図－ …… 98
第 68 図　11Q - Aブロック出土遺物分布図（2）
－石材別分布図－ …… 99
第 69 図　11Q - Aブロック出土遺物実測図（1）……102
第 70 図　11Q - Aブロック出土遺物実測図（2）……103
第 71 図　12P - Aブロック出土遺物分布図（1）
－石器別分布図－ ……105
第 72 図　12P - Aブロック出土遺物分布図（2）
－石材別分布図－ ……105
第 73 図　12P - Aブロック出土遺物実測図 ……106
第 74 図　13P - Aブロック出土遺物分布図（1）
－石器別分布図－ ……108
第 75 図　13P - Aブロック出土遺物分布図（2）
－石材別分布図－ ……108
第 76 図　13P - Aブロック出土遺物実測図 ……110
第 77 図　8K - Aブロック出土遺物分布図（1）
－石器別分布図－ ……112
第 78 図　8K - Aブロック出土遺物分布図（2）

－石材別分布図－ ……113
第 79 図　８Ｋ - Ａブロック出土遺物実測図 ……114
第 80 図　８Ｋ - Ｂブロック出土遺物分布図（１）
－石器別分布図－ ……116
第 81 図　８Ｋ - Ｂブロック出土遺物分布図（２）
－石材別分布図－ ……116
第 82 図　８Ｋ - Ｂブロック出土遺物実測図 ……117
第 83 図　15Ｒ - Ａブロック出土遺物分布図（１）
－石器別分布図－ ……119
第 84 図　15Ｒ - Ａブロック出土遺物分布図（２）
－石材別分布図－ ……120
第 85 図　15Ｒ - Ａブロック出土遺物実測図（１）……122
第 86 図　15Ｒ - Ａブロック出土遺物実測図（２）……123
第 87 図　15Ｒ - Ａブロック出土遺物実測図（３）……124
第 88 図　16Ｒグリッド出土遺物分布図（１）
－石器別分布図（１）－ ……126
第 89 図　16Ｒグリッド出土遺物分布図（２）
－石器別分布図（２）－ ……127
第 90 図　16Ｒグリッド出土遺物分布図（３）
－石器別分布図（３）－ ……128
第 91 図　16Ｒグリッド出土遺物分布図（４）
－石器別分布図（４）－ ……129
第 92 図　16Ｒグリッド出土遺物分布図（５）
－石器別分布図（５）－ ……130
第 93 図　16Ｒグリッド出土遺物分布図（６）
－石材別分布図（１）－ ……132
第 94 図　16Ｒグリッド出土遺物分布図（７）
－石材別分布図（２）－ ……133
第 95 図　16Ｒグリッド出土遺物実測図（１）……137
第 96 図　16Ｒグリッド出土遺物実測図（２）……138
第 97 図　16Ｒグリッド出土遺物実測図（３）……139
第 98 図　16Ｒグリッド出土遺物実測図（４）……140
第 99 図　16Ｒグリッド出土遺物実測図（５）……141
第100図　16Ｒグリッド出土遺物実測図（６）……142
第101図　16Ｒグリッド出土遺物実測図（７）……143
第102図　16Ｒグリッド出土遺物実測図（８）……144
第103図　16Ｒグリッド出土遺物実測図（９）……145
第104図　16Ｒ-Ａブロック出土遺物分布図（１）
－石器別分布図－ ……149
第105図　16Ｒ-Ａブロック出土遺物分布図（２）
－石材別分布図－ ……149
第106図　16Ｒ-Ａブロック出土遺物実測図 ……150
第107図　単独出土遺物実測図（１）……152
第108図　単独出土遺物実測図（２）……153
第109図　東向遺跡上層遺構配置図 ……155
第110図　土坑・陥穴（１） ……158
第111図　土坑・陥穴（２） ……159
第112図　土坑・陥穴（３） ……160
第113図　土坑・陥穴（４） ……161
第114図　土坑・陥穴（５） ……162
第115図　縄文土器（１） ……163
第116図　縄文土器（２） ……164
第117図　縄文土器（３） ……165
第118図　縄文時代石器 ……167
第119図　SI-001住居跡と出土遺物 ……169
第120図　SI-002住居跡と出土遺物 ……170
第121図　SM-01塚 ……172
第122図　SM-01塚とSK-16土坑 ……173
第123図　溝と野馬土手・堀（１） ……174
第124図　溝と野馬土手・堀（２） ……175
第125図　溝と野馬土手・堀（３） ……176
第126図　溝と野馬土手・堀（４） ……177
第127図　溝と野馬土手・堀（５） ……178
第128図　溝と野馬土手・堀（６） ……179
第129図　SX-01シシ穴（１） ……180
第130図　SX-01シシ穴（２） ……181
第131図　近世の遺物 ……183
第132図　東向遺跡旧石器時代石器群の変遷（１） …187
第133図　東向遺跡旧石器時代石器群の変遷（２） …188
第134図　県内のシシ穴集成図 ……192
第135図　坪井向遺跡と周辺地形図 ……196
第136図　坪井向遺跡年次別調査範囲とグリッド図 …197
第137図　坪井向遺跡上層確認トレンチ ……198
第138図　坪井向遺跡下層確認グリッドと本調査区 …199
第139図　第１・第２ブロック出土遺物状況図 ……201
第140図　第１ブロック出土遺物分布図（１）
－石器別分布図－ ……202
第141図　第１ブロック出土遺物分布図（２）
－石材別分布図－ ……202
第142図　第１ブロック出土遺物実測図 ……203
第143図　第２ブロック出土遺物分布図（１）
－石器別分布図－ ……205
第144図　第２ブロック出土遺物分布図（２）
－石材別分布図－ ……206
第145図　第２ブロック出土遺物実測図（１） ……207
第146図　第２ブロック出土遺物実測図（２） ……208
第147図　単独出土・表面採集遺物実測図 ……209
第148図　坪井向遺跡上層遺構分布図 ……213
第149図　土坑・陥穴 ……215
第150図　土錘・縄文土器 ……216
第151図　石鏃 ……216
第152図　SI-001住居跡 ……218
第153図　SI-001住居跡出土土師器 ……219
第154図　SA-001野馬土手 ……222
第155図　銭貨 ……223
第156図　泥メンコ ……223
第157図　坪井向遺跡旧石器時代石器群の変遷 ……226
第158図　川向遺跡と周辺地形図 ……230
第159図　川向遺跡年次別調査範囲 ……231
第160図　川向遺跡上層確認トレンチと遺構分布図 …232
第161図　川向遺跡下層確認トレンチと本調査区 ……233
第162図　第１ブロック出土遺物分布図（１）
－石器別分布図－ ……235
第163図　第１ブロック出土遺物分布図（２）
－石材別分布図－ ……235
第164図　第１ブロック出土遺物実測図（１） ……236
第165図　第１ブロック出土遺物実測図（２） ……237
第166図　第２ブロック出土遺物分布図（１）
－石器別分布図－ ……238
第167図　第２ブロック出土遺物分布図（２）
－石材別分布図－ ……238
第168図　第２ブロック出土遺物実測図 ……239
第169図　第３ブロック出土遺物分布図（１）
－石器別分布図－ ……240
第170図　第３ブロック出土遺物分布図（２）
－石材別分布図－ ……240

第171図　第３ブロック出土遺物実測図 ……241
第172図　単独出土遺物実測図 ……242
第173図　石鏃 ……246
第174図　SK-01、SK-02陥穴 ……246
第175図　川向遺跡旧石器時代石器群の変遷 ……248
第176図　庚申山塚群と周辺の地形 ……252
第177図　トレンチ配置図と土層断面図 ……253
第178図　八王子台遺跡調査範囲（全体） ……255
第179図　確認状況図（全体） ……256
第180図　八王子台遺跡縄文時代遺構分布図(全体) …257
第181図　H24-SI-001住居跡 ……259
第182図　縄文土器（１） ……260
第183図　縄文土器（２） ……261
第184図　縄文時代石器 ……262
第185図　近世の遺物 ……263
第186図　八王子台遺跡の縄文時代集落跡 ……265

表目次

第 1 表　東向遺跡文化層・ブロック別石器組成表 …　25
第 2 表　東向遺跡文化層・ブロック別石材組成表 …　26
第 3 表　16Q - Aブロック母岩別石器組成表 ……　27
第 4 表　16Q - Aブロック石材別石器組成表 ……　27
第 5 表　４O - Aブロック母岩別石器組成表 ……　32
第 6 表　４O - Aブロック石材別石器組成表 ……　32
第 7 表　10Q - Aブロック母岩別石器組成表 ……　39
第 8 表　10Q - Aブロック石材別石器組成表 ……　39
第 9 表　14Q - Aブロック母岩別石器組成表 ……　47
第 10 表　14Q - Aブロック石材別石器組成表 ……　47
第 11 表　14Q - Bブロック母岩別石器組成表 ……　55
第 12 表　14Q - Bブロック石材別石器組成表 ……　55
第 13 表　９L - Aブロック母岩別石器組成表 ……　56
第 14 表　９L - Aブロック石材別石器組成表 ……　56
第 15 表　９L - Bブロック母岩別石器組成表 ……　65
第 16 表　９L - Bブロック石材別石器組成表 ……　65
第 17 表　９L - Cブロック母岩別石器組成表 ……　66
第 18 表　９L - Cブロック石材別石器組成表 ……　66
第 19 表　９M - Aブロック母岩別石器組成表 ……　72
第 20 表　９M - Aブロック石材別石器組成表 ……　72
第 21 表　15R - Bブロック母岩別石器組成表 ……　75
第 22 表　15R - Bブロック石材別石器組成表 ……　75
第 23 表　15R - Cブロック母岩別石器組成表 ……　79
第 24 表　15R - Cブロック石材別石器組成表 ……　79
第 25 表　17R - Aブロック母岩別石器組成表 ……　96
第 26 表　17R - Aブロック石材別石器組成表 ……　96
第 27 表　11Q - Aブロック母岩別石器組成表 ……100
第 28 表　11Q - Aブロック石材別石器組成表 ……100
第 29 表　11Q - Aブロック母岩別礫組成表 ……100
第 30 表　11Q - Aブロック石材別礫組成表 ……100
第 31 表　12P - Aブロック母岩別石器組成表 ……107
第 32 表　12P - Aブロック石材別石器組成表 ……107
第 33 表　12P - Aブロック母岩別礫組成表 ……107
第 34 表　12P - Aブロック石材別礫組成表 ……107
第 35 表　13P - Aブロック母岩別石器組成表 ……109
第 36 表　13P - Aブロック石材別石器組成表 ……109
第 37 表　８K - Aブロック母岩別石器組成表 ……115
第 38 表　８K - Aブロック石材別石器組成表 ……115
第 39 表　８K - Bブロック石材別石器組成表 ……117
第 40 表　15R - Aブロック母岩別石器組成表 ……118
第 41 表　15R - Aブロック石材別石器組成表 ……118
第 42 表　15R - Aブロック母岩別礫組成表 ……118
第 43 表　15R - Aブロック石材別礫組成表 ……118
第 44 表　16Rグリッド母岩別石器組成表 ……146
第 45 表　16Rグリッド石材別石器組成表 ……147
第 46 表　16Rグリッド母岩別礫組成表 ……147
第 47 表　16Rグリッド石材別礫組成表 ……147
第 48 表　16R - Aブロック母岩別石器組成表 ……151
第 49 表　16R - Aブロック石材別石器組成表 ……151
第 50 表　東向遺跡縄文時代以降の遺構一覧 ……156
第 51 表　東向遺跡の縄文時代石器 ……167
第 52 表　東向遺跡の平安時代土師器観察表 ……170
第 53 表　東向遺跡の近世遺物 ……183
第 54 表　坪井向遺跡石器組成表　第１ブロック ……200
第 55 表　坪井向遺跡石器組成表　第２ブロック ……204
第 56 表　坪井向遺跡石器組成表 ブロック外・単独出土 …209
第 57 表　坪井向遺跡（下層）出土遺物一覧 ……210
第 58 表　坪井向遺跡縄文時代以降の遺構一覧 ……214
第 59 表　坪井向遺跡の平安時代土師器観察表 ……220
第 60 表　坪井向遺跡の銭貨計測表 ……223
第 61 表　坪井向遺跡旧石器時代石器組成表（全体)…224
第 62 表　川向遺跡石器組成表　第１ブロック ……234
第 63 表　川向遺跡石器組成表　第２ブロック ……237
第 64 表　川向遺跡石器組成表　第３ブロック ……241
第 65 表　川向遺跡石器組成表　ブロック外・単独出土…242
第 66 表　川向遺跡(下層)出土遺物一覧　第１ブロック…244
第 67 表　川向遺跡(下層)出土遺物一覧　第２ブロック…244
第 68 表　川向遺跡(下層)出土遺物一覧　第３ブロック…244
第 69 表　川向遺跡(下層)出土遺物一覧　単独出土　…245
第 70 表　川向遺跡旧石器時代石器組成表（全体)……247
第 71 表　八王子台遺跡の縄文時代石器 ……263
第 72 表　八王子台遺跡の近世遺物 ……263

図版目次

図版１　遺跡周辺航空写真（2004 年、1/10,000）
図版２　東向遺跡
・立川ローム層基本土層（11Q-06 グリッド）
・第１文化層　16Q-A ブロック
・第２文化層　４O-A ブロック（平成 21 年度分）
図版３　東向遺跡
・第２文化層　10Q-A ブロック
・第２文化層　14Q-A ブロック
・第２文化層　14Q-B ブロック
図版４　東向遺跡
・第３文化層　９L-A・B・C　９M-A ブロック
・第３文化層　15R-A ブロック
第６文化層　15R-B ブロック
・第３文化層　15R-A ブロック
第６文化層　15R-B ブロック
図版５　東向遺跡
・第３文化層　15R-C ブロック
・第３文化層　17R-A ブロック
第７文化層　16R-A ブロック
・第４文化層　11Q-A ブロック
図版６　東向遺跡
・第４文化層　12P-A・13P-A ブロック
・第５文化層　８K-A ブロック
第６文化層　８K-B ブロック
・第７文化層　16R グリッド
図版７　東向遺跡
・SK-01 陥穴（土層断面）
・SK-05 土坑
・SK-06 陥穴
図版８　東向遺跡
・SK-07 陥穴
・SK-08 土坑
・SK-09 土坑
図版９　東向遺跡
・SK-10 陥穴
・SK-11 土坑
・SK-12 土坑
図版 10　東向遺跡
・SK-14 陥穴
・SK-14 陥穴（土層断面）
・SK-15 土坑
図版 11　東向遺跡
・SI-001 住居跡
・SI-001 住居跡遺物出土状況
・SI-002 住居跡
図版 12　東向遺跡
・SM-01 塚
・SM-01 塚（土層断面）
・SK-16 塚土坑
図版 13　東向遺跡
・SD-01 溝
・SD-03 野馬土手・堀
・SD-04 溝
図版 14　東向遺跡
・SD-05 野馬土手・堀 (土層断面）
・SD-07 野馬土手・堀
・SD-07 野馬土手・堀（土層断面）
図版 15　東向遺跡
・SX-01 シシ穴
・SX-01 シシ穴（土層断面）
・SX-01 シシ穴（遺物出土状況）
図版 16　東向遺跡
・縄文土器（１）
図版 17　東向遺跡
・縄文土器（２）
図版 18　東向遺跡
・縄文土器（３）・縄文時代石器
図版 19　東向遺跡
・平安時代土師器、近世遺物（１）
図版 20　東向遺跡
・近世遺物（２）
図版 21　坪井向遺跡
・土層（26F-45 グリッド）
・第１・第２ブロック
・27H-56 グリッド
図版 22　坪井向遺跡
・トレンチ12（第２次調査）
・トレンチ19（第２次調査）
・トレンチ２（第３次調査）
図版 23　坪井向遺跡
・SK-001 陥穴
・SK-002 陥穴
・SK-003 陥穴
・SK-004 土坑
図版 24　坪井向遺跡
・SI-001 住居跡遺物出土状況
・SI-001 住居跡
・SA-001 野馬土手・土層断面・トレンチ A
図版 25　坪井向遺跡
・土錘・縄文土器
・縄文時代石器（坪井向・川向）、近世遺物
図版 26　坪井向遺跡
・平安時代土師器
図版 27　川向遺跡
・第１ブロック
・第２ブロック
・第３ブロック
図版 28　川向遺跡
・SK-01 陥穴（土層断面）
・SK-01 陥穴
・SK-02 陥穴
図版 29　庚申山塚群
・調査前風景
・確認トレンチ
・確認トレンチ
図版 30　八王子台遺跡
・八王子台遺跡（13）調査前風景
・H24-SI001 住居跡土層断面と遺物出土状況
・H24-SI001 住居跡
図版 31　八王子台遺跡

・縄文土器（１）
図版 32　八王子台遺跡
・縄文土器（２）・近世遺物
図版 33　八王子台遺跡
・縄文時代石器
図版 34　東向遺跡旧石器時代遺物（１）
図版 35　東向遺跡旧石器時代遺物（２）
図版 36　東向遺跡旧石器時代遺物（３）
図版 37　東向遺跡旧石器時代遺物（４）
図版 38　東向遺跡旧石器時代遺物（５）
図版 39　東向遺跡旧石器時代遺物（６）
図版 40　東向遺跡旧石器時代遺物（７）
図版 41　東向遺跡旧石器時代遺物（８）
図版 42　東向遺跡旧石器時代遺物（９）
図版 43　東向遺跡旧石器時代遺物（10）
図版 44　東向遺跡旧石器時代遺物（11）
図版 45　東向遺跡旧石器時代遺物（12）
図版 46　東向遺跡旧石器時代遺物（13）
図版 47　東向遺跡旧石器時代遺物（14）
図版 48　東向遺跡旧石器時代遺物（15）
図版 49　東向遺跡旧石器時代遺物（16）
図版 50　東向遺跡旧石器時代遺物（17）
図版 51　東向遺跡旧石器時代遺物（18）
図版 52　坪井向遺跡旧石器時代遺物（１）
図版 53　坪井向遺跡旧石器時代遺物（２）
図版 54　川向遺跡旧石器時代遺物（１）
図版 55　川向遺跡旧石器時代遺物（２）
図版 56　川向遺跡旧石器時代遺物（３）

第１章　はじめに

第１節　調査の概要と調査の方法

１．調査の概要

西八千代北部地区は、千葉県八千代市の北西部地域における大規模な土地区画整理事業であり、現在、独立行政法人都市再生機構（旧住宅・都市整備公団）により宅地造成が進められている。施行面積は約140.5ha、計画人口は14,000人、事業期間は平成14年１月18日から平成31年３月31日（清算期間を含む）までで、総事業費は約320億円である。2010年に街の愛称が公募され、「はぐみの杜」と命名された。

ちなみにこの地域は国道296号線（成田街道）、京成電鉄などの基幹交通網から少し離れているため、長らく近郊農村的様相をとどめていたが、平成８年の東葉高速鉄道の開通後、新駅の八千代緑が丘駅周辺には大規模商業施設が進出し、現在は活況を呈している。

さて土地区画整理事業の施行にあたり、事業地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて、千葉県教育委員会と都市再生機構をはじめとする関係諸機関との間で慎重な協議が重ねられた。その結果、事業地内に存在する埋蔵文化財で保存が不可能な部分については、やむを得ず記録保存の処置をとることとなった。発掘調査と整理作業は、公益財団法人千葉県教育振興財団（旧財団法人千葉県文化財センター）が受託して実施した。

事業地内に所在した遺跡は、川向遺跡、東向遺跡、八王子台遺跡、庚申山塚群、西芝山遺跡、西芝山南遺跡、坪井向遺跡である。これらの遺跡は事業地内の主に北側、桑納川に面した舌状台地の縁辺から台地中央に分布していた（第１図）。発掘調査は平成８年度に始まり、平成24年度まで継続的に実施された。調査面積は、川向遺跡28,662㎡、東向遺跡153,806㎡、八王子台遺跡82,154㎡、庚申山塚群塚２基、西芝山遺跡24,309㎡、西芝山南遺跡30,440㎡、坪井向遺跡46,711㎡であった。野外での発掘調査と平行して屋内の整理作業も随時行ない、これまでに西芝山遺跡[1)]、西芝山南遺跡[2)]、八王子台遺跡の３冊の報告書が刊行された[3)]。

本書は西八千代北部地区に関する調査報告書の４冊目に相当し、収載した遺跡は東向遺跡、坪井向遺跡、川向遺跡、庚申山塚群の４遺跡と、八王子台遺跡の一部である。本書をもって西八千代北部地区の遺跡調査報告はすべて完了となる。

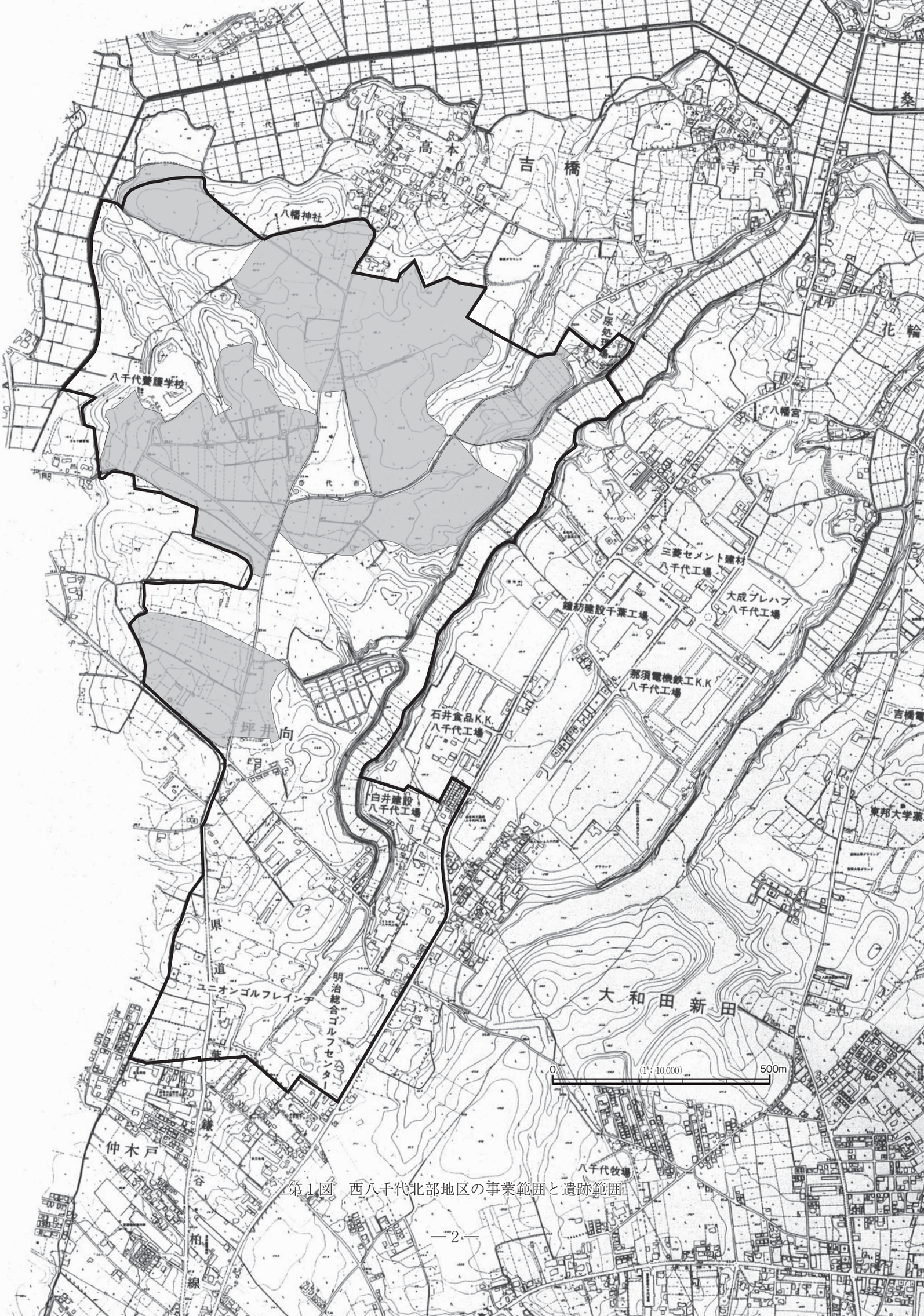
２．調査の方法

収録した遺跡の発掘調査期間、整理期間、担当者等は、別に遺跡単位で記述した。

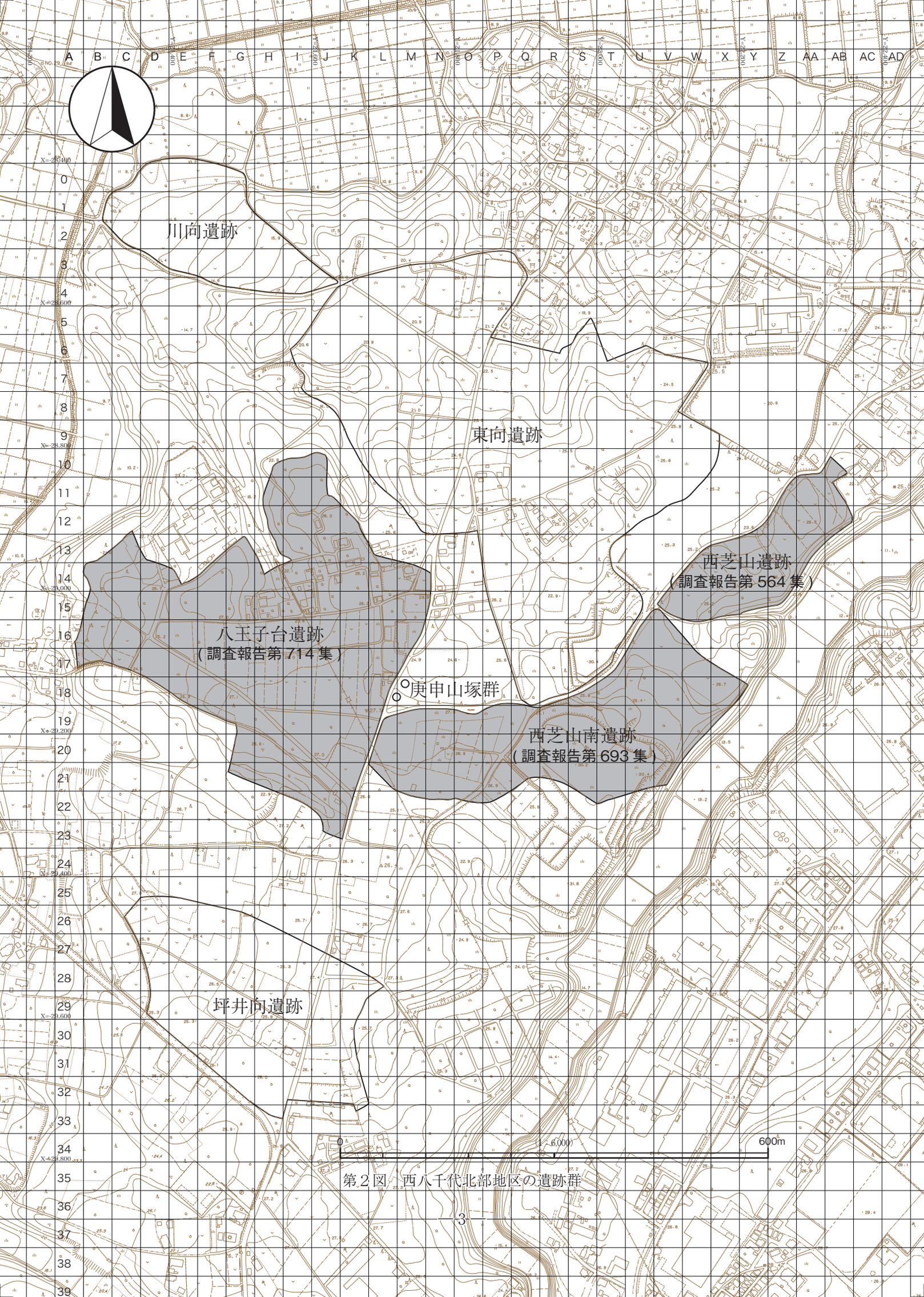
西八千代北部地区の調査では、事業予定地内を公共座標にもとづいて40ｍ×40ｍの大グリッドの方眼網で全体をおおった。大グリッドの呼称方法は、北西を起点に西から東へＡ、Ｂ、Ｃ・・・ＡＡ、ＡＢとし、北から南へ１、２、３・・・32、33に設定して、横縦列を組み合わせて大グリッドの名称とした（第２図）。各遺跡の調査に際しては、この大グリッド網に準じて測量杭を設定した。

大グリッドは４ｍ×４ｍの小グリッドで100分割され、北西端を起点に東へ00、01、02・・・09まで、南へ00、10、20・・・90とし、南東端は99となる。小グリッドの呼称は、大グリッド名と小グリッド名を組み合わせて、８Ｌ-27、30Ｆ-05などとなる（第３図）。

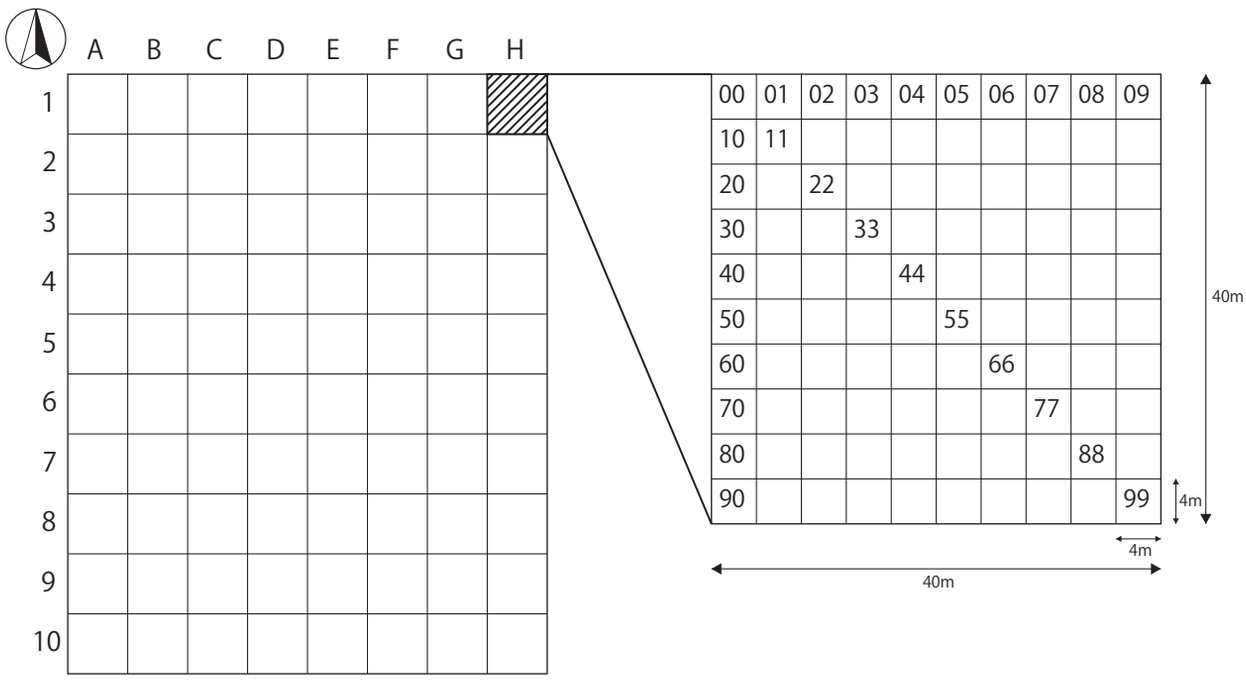
各遺跡の発掘は、縄文時代以降を対象とする上層の調査と、旧石器時代以前を対象とする下層の調査に



第1図　西八千代北部地区の事業範囲と遺跡範囲



第２図　西八千代北部地区の遺跡群



第３図　グリッド模式図

分けて実施した。上層については調査対象範囲の10％について、地形の状況もしくはグリッドの方向に則して幅２ｍの細長いトレンチを設定し、縄文時代以降の遺構の有無を確認した。遺構が確認された場合には、周囲を拡張して範囲と性格や隣接する遺構の有無を調べた。周辺に多数の遺構が分布していれば、本調査範囲を設定してその範囲内の表土を除去して、遺構の調査を行なった。

下層の確認調査は、調査対象範囲の４％以下の面積に相当する２ｍ×２ｍのグリッドを複数設定して、地表下約２ｍの立川ローム層最下層まで人力で掘り下げた。旧石器時代石器の出土が確認されたグリッドについては､周囲を拡張して石器の平面的な広がりを調査した。多数の石器の出土が確認された場合には、本調査範囲を設定して本調査を実施した。

第２節　基本土層

立川ローム層の基本層序は、当財団が平成４年度以降に実施している区分に従っている（第４図)。

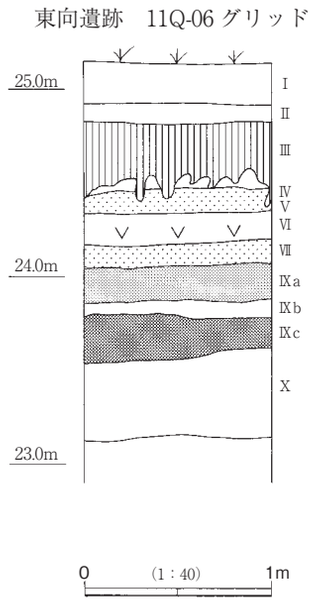
Ⅲ　層　　黄褐色の軟質ローム層で、層厚は30㎝～ 50㎝ほどである。第４文化層は、本層の中位に包含される石器群である。また、第５文化層は本層上部を中心に包含されると考えられるが、傾斜地から出土したこともあり､本来の出土層準は不明瞭である。また第６文化層と第７文化層は、本層最上部から上位層のⅡ層にかけて包含される石器群である。ただし調査の中で両文化層の層位的上下関係は、把握できなかった。

Ⅳ　層　　黄褐色の硬質ローム層で、層厚は10cm～15cmほどであるが、その大半が軟質化しており、Ⅲ層と区別できなかった地点が多い。第３文化層は、本層を中心として、Ⅲ層下部からⅤ層にかけて包含されている石器群である。

Ⅴ　層　　やや赤みを帯びた硬質のローム層で、層厚は10cm～20cmほどである。Ⅲ層とⅥ層の間にある硬質ローム層は、大半が本層と考えられるが、わずかに残るⅣ層との区別が困難であり、Ⅳ～Ⅴ層としたところが多い。

Ⅵ　層　　明黄褐色の硬質ローム層で、層厚は10cm～25cmほどである。姶良Tn火山灰（AT）が含まれている。

Ⅶ　層　　Ⅵ層に比べて、やや暗い黄褐色の硬質ローム層で、層厚は15cm～25cmほどである。立川ローム層第２黒色帯上部に相当する。第２文化層はⅦ層～Ⅸ層上部（Ⅸａ層）にかけて包含される石器群である。



第４図　基本土層図

Ⅸ　層　　暗褐色の硬質ローム層で、大粒の赤色スコリアを多く含む。Ⅸ層内の細分は困難な地点が多いが、図示した11Q－06グリッドでは、やや赤みを帯びた暗褐色の上半部（Ⅸａ層：層厚15cm～25cm）と、薄墨を流したように黒みの強い暗褐色の下層（Ⅸｃ層：層厚20cm～30cm）及び両者の中間に位置する黄褐色の間層（Ⅸｂ層：層厚5cm～10cm）に区分できた。第１文化層は、Ⅸ層下部（Ⅸｃ層）に包含される石器群である。

Ⅹ　層　　黄褐色の硬質ローム層であるが、Ⅸ層よりはかなり軟化する土層である。層厚は20cm～40cmほどである。立川ローム層の最下層に位置づけている。

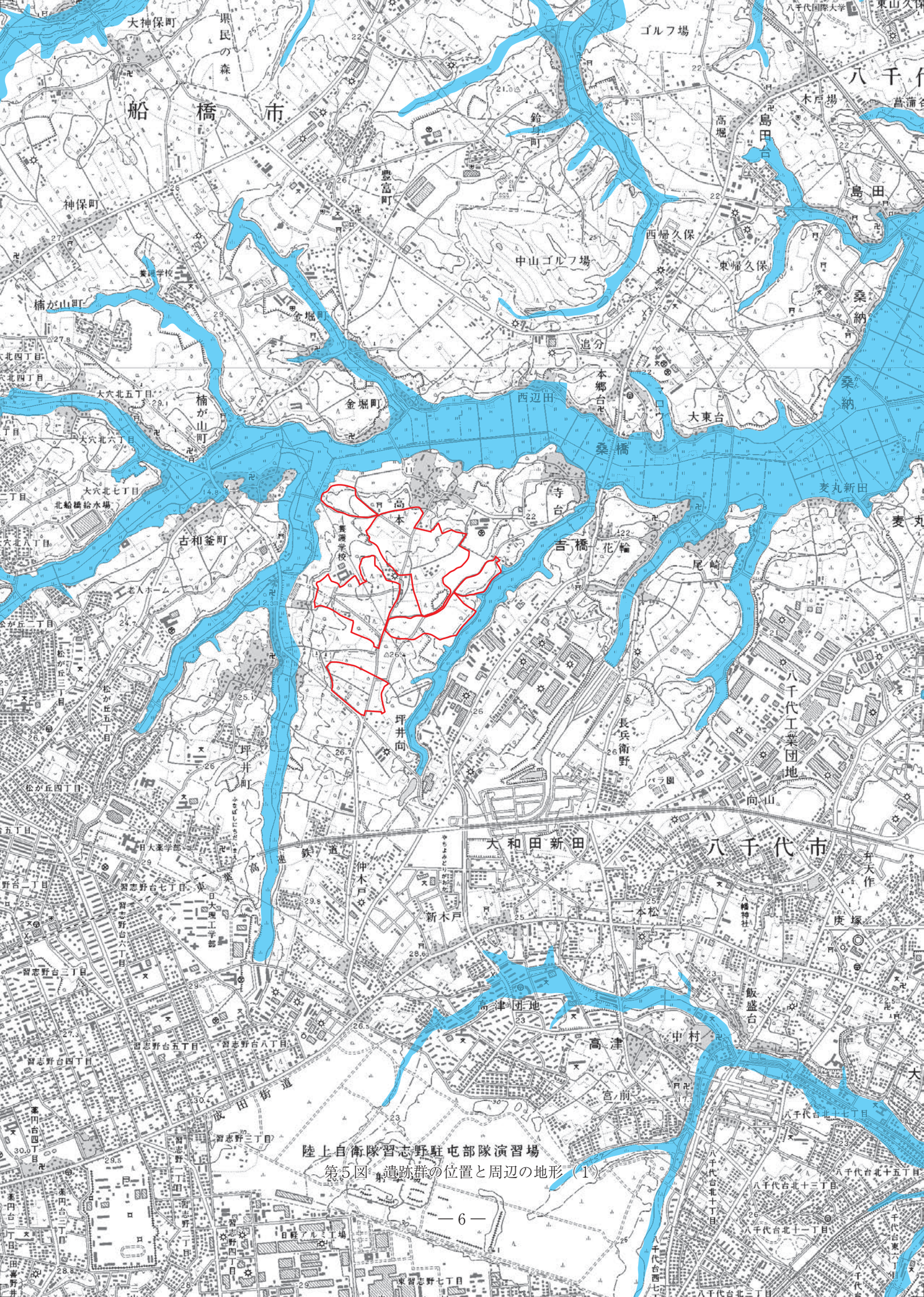
第３節　遺跡の位置と環境

１．遺跡の位置

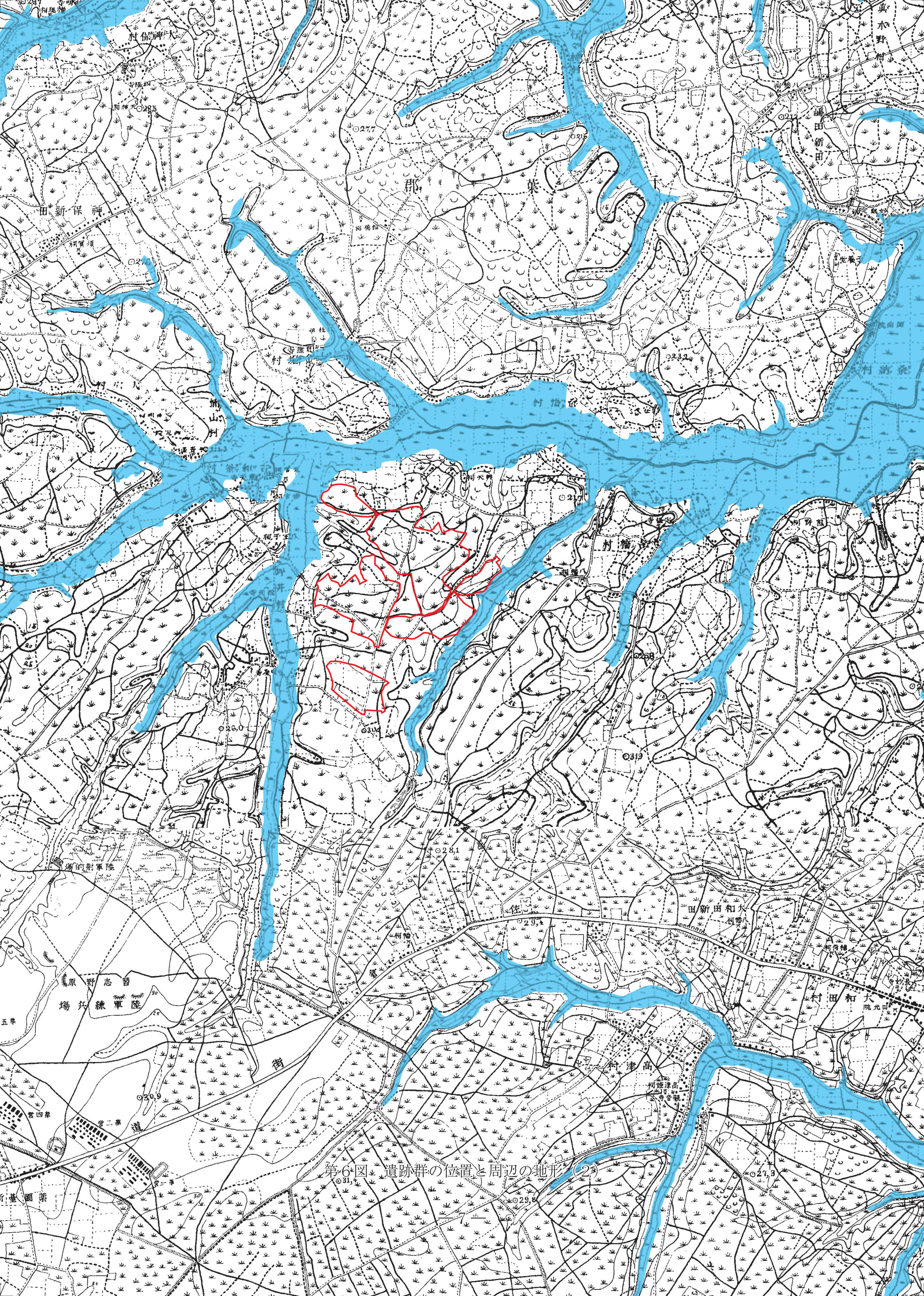
西八千代北部地区の遺跡群は、房総半島北部中央にある印旛沼から西に約15km、印旛沼に流入する新川の支流、西から東へ流れる桑納川（かんのうがわ）南岸の舌状台地上に位置する。桑納川の支流によって遺跡群の所在する台地の東西両端が開折され、やや三角形をした台地先端部に遺跡が分布している（第５図）。都市区画整理事業が開始される前、付近一帯には畑、果樹園、荒蕪地、山林が広がっていた。19世紀後半に作製された地図によると（第６図）、桑納川の南側、成田街道（佐倉街道）沿いでは区画された耕地が見られるが、街道から離れると不整形な荒蕪地が広がっていたようである。遺跡周辺の台地が農業用耕地として積極的に利用されるようになったのは、20世紀後半の戦後の入植からと思われる。

現在の地図と100年以上前の地図を見比べると、19世紀後半には南側の街道筋に、少数の家屋からなる集落がわずかに点在し、それ以外の土地は農耕地もしくは山林であった。現在の地図を見ると、南側の街道筋と鉄道沿線には住宅街、工場団地、大学、自衛隊演習場などが密集する市街地となっている。

一方、桑納川の北側には農耕地や山林の間に集落が点在し、近郊農村地帯の様相を見せている。西八千代北部地区は、この農村地帯と市街地との中間に位置する。



第5図　遺跡群の位置と周辺の地形（1）



第6図　遺跡群の位置と周辺の地形（2）

昭和29年（1954）に八千代町が発足した頃の町の人口は15,618人、昭和42年（1967）に市制施行した時の人口は41,574人、平成25年（2013）５月の人口は193,015人で、高度経済成長以後に八千代市の人口は約５倍に増加した。このように、この40～50年間に都市化が急激に進行し、八千代市の土地利用もかつてないほど激変したのである。

２．遺跡の環境

十数万年前、現在の鹿島灘から房総半島北部にかけて、東から西に古東京湾の浅い海が広い範囲を占めていた。房総半島南部は三浦半島と陸続きで、堆積岩からなる丘陵地域となっていた。その頃、印旛沼や手賀沼周辺にはバカガイ、アサリ、ハマグリ、サルボウ、クサビザラなどが生息して、外洋水も流入するような内湾中央部であった。八千代市で見られる古東京湾の海底堆積層は上岩橋層と木下（きおろし）層で、上岩橋層の堆積後海はいったん退き、その後再び海が進入して木下層が堆積した。

約13万年前から古東京湾は次第に陸化して、湿地と河川からなる海岸平野となり、箱根山の噴火物が湿地に降下して粘土化した。その上に、富士山や箱根山からの火山灰が降下して堆積したのが関東ローム層である。関東ローム層は武蔵野ローム層と立川ローム層に分かれている。武蔵野ローム層下部には、約５万年前に箱根火山の第２期カルデラ形成にともなって噴出したやや白色の軽石層がある。立川ローム層上部には、約２万4,000年前に鹿児島湾奥の姶良カルデラから噴出した火山灰層（姶良Tn火山灰）がある。

約12～13万年前は最終間氷期の始まりに相当し、海水面の上昇によって古東京湾が広がり、八千代市でも海底で上岩橋層と木下層が堆積した。その後海水面が低下し、古東京湾が陸化して湿地が形成された。最終氷期の到来とともに武蔵野ローム層や立川ローム層が八千代市でも堆積し、谷が開折されて勝田川や高津川、桑納川、神崎川の南岸に段丘が形成された。西八千代北部地区の旧石器遺跡は立川ローム層から検出され、寒冷な最終氷期に残された人類の活動痕跡といえる。

約１万年前に最終氷期が終了して温暖化が進み、海水面が上昇した。海面上昇は新たな海域の拡大をもたらした。温暖化によって東京湾は北へ伸び、群馬県南部まで奥東京湾が形成された。また銚子および霞ヶ浦方面から利根川低地沿いに、古鬼怒湾が東から西に細長く伸びていた。八千代市でも、現在印旛沼に流入している河川沿いにかつての古鬼怒湾が伸びていたと考えられている。印旛沼から新川をさかのぼると、保品、平戸、桑納の地点で地表下から海成の土層が見つかり、さらに川をさかのぼって新川流域の宮内、桑納川流域の麦丸、吉橋で海成層が、西八千代北部地区周辺の吉橋でも古鬼怒湾の痕跡が検出された。

宮内でのボーリング調査によると、約7100年前から約4100年前までの約3000年間に古鬼怒湾による海成土層が堆積していた。今までに刊行された西八千代北部地区の調査報告書には、縄文時代中期の遺構・遺物が多く含まれていた。縄文時代中期の年代を約5500年～4500年前とすると、西八千代北部地区で縄文人たちが暮していた頃、舌状台地の近隣にまで古鬼怒湾が達していた。狩猟採集民の生活圏を半径10kmとすると、西八千代北部地区の縄文人にとって、古鬼怒湾は重要な生態環境だったのだろう。

新川流域のボーリング調査で得られた花粉分析により、最終氷期から現代に至る植生変遷が判明している。最終氷期の約３万年前にはゴヨウマツの仲間とトウヒ属を主として、ツガ属やモミ属をともなったマツ科の針葉樹林が広がっていた。最終氷期末期の約１万7000年前～１万2000年前には、マツ科の針葉樹とコナラ亜属を中心とした落葉広葉樹との混交林に変化した。後氷期の約１万2000年前～4000年前には、コナラ亜属を主体とする落葉広葉樹林となった。約4000年前からコナラ亜属が減少し、代わってスギ、次いでマツ林が拡大した。農耕（焼畑農耕）によって明るい裸地が広がりマツ林が拡大したという[4)]。

３．周辺の遺跡

まず旧石器時代の遺跡を見てみると、本地区ではすでに報告書の刊行された西芝山遺跡、西芝山南遺跡、八王子台遺跡で旧石器遺跡が検出された。西芝山遺跡では旧石器のブロックが10か所あり、立川ロームⅨ層～Ⅶ層で６か所、Ⅵ層～Ⅲ層で４か所検出された。西芝山南遺跡ではブロックが34か所あり、内訳はⅨ層～Ⅶ層が30か所、Ⅴ層～Ⅲ層が３か所、Ⅳ～Ⅲ層が１か所となっている。八王子台遺跡ではブロックが31か所あり、そのうちⅨ層が１か所、Ⅶ層～Ⅵ層が10か所、Ⅴ層～Ⅲ層が７か所、Ⅲ層が９か所、Ⅲ層～Ⅱ層が３か所となっている。

本地区の東に隣接する台地に大和田新田芝山遺跡、仲ノ台遺跡、ヲイノ作遺跡がある。大和田新田芝山遺跡では19か所[5)]、仲ノ台遺跡では７か所[6)]、ヲイノ作遺跡では１か所のブロックが検出された[7)]。また西側に隣接する台地で源七山遺跡から29か所のブロックが検出された[8)]。南東側のやや離れた向山遺跡では１か所のブロック[9)]、一本松前遺跡でも１か所のブロックが検出された[10)]。

これらの旧石器遺跡は桑納川の南側に位置し、鉄道敷設もしくは宅地開発にともなって見つかっている。桑納川北側で調査された旧石器遺跡は見当たらないが、地形環境から北側でも南側と同様に旧石器遺跡が分布しているものと推定される。

縄文時代の遺跡は桑納川流域に多い。本地区では、西芝山遺跡で陥穴１基と縄文時代早期～後期の土器、西芝山南遺跡で土坑１基と中期の土器、八王子台遺跡で縄文時代中期後半を主体とする住居跡17軒、土坑11基、ピット状遺構１基、及び陥穴６基が検出された。

西芝山遺跡の東側に隣接する台地上に西内野遺跡があり、縄文時代前期～中期の住居跡、土坑、陥穴が[11)]南側の内野南遺跡では早期の土坑や炉穴、陥穴、集落が検出された[12)]。内野南遺跡南側にある小支谷の谷頭周辺で仲ノ台遺跡、ヲイノ作南遺跡[13)]、大和田新田芝山遺跡が調査され、縄文時代前期前半黒浜期の集落が検出された。その東側の谷頭にある長兵衛野南遺跡では縄文時代中期後半の小集落[14)]、さらに東側に位置する向山遺跡では縄文時代前期～中期の土器、南側の一本松前遺跡では、縄文時代中期～後期の土器とともに土坑、陥穴が検出された。

本地区の西側を南から北に流れる支流上流には源七山遺跡があり、縄文時代中期の土器群を中心に、竪穴状遺構、陥穴、土坑、礫群などが検出された。

桑納川をはさんで北側の台地上に、縄文時代後期・晩期の集落をともなう貝塚遺跡である金堀台貝塚がある[15)]。その東側台地上の桑納川沿いに本郷台遺跡、桑橋新田遺跡、桑納前畑遺跡がある。本郷台遺跡では早期の炉穴、後期主体の土器[16)]、桑橋新田遺跡では縄文時代中期～後期の住居跡[17)]、桑納前畑遺跡では縄文時代中期の土坑が検出された[18)]。

弥生時代の遺跡は少ない。新川流域では弥生時代中期の集落や、後期そして古墳時代に継続する集落遺跡が複数検出され、生活に適した環境だったと推測される。一方、桑納川流域の弥生時代遺跡の分布は希薄である。桑納川が新川に流入する付近に位置する桑橋新田遺跡で、弥生時代後期から古墳時代初頭までの集落、その東側にある桑納遺跡で弥生時代後期から古墳時代の集落が検出されたが[19)]、その他に桑納川流域で弥生時代遺跡は報告されていない。また桑橋新田遺跡と桑納遺跡は桑納川流域というよりも、新川流域の弥生時代遺跡といえるだろう。

古墳時代の遺跡も少ない。弥生時代と同様に新川流域では大規模な集落や古墳が多数分布しているが、支流の桑納川流域では遺跡の分布は希薄である。弥生時代から継続する集落が桑橋新田遺跡と桑納遺跡で

確認され両遺跡の近辺に桑納古墳群があった。この古墳群は円墳と帆立貝式前方後円墳の２基からなり、後者から人物埴輪が出土した[20]。これらの遺跡も桑納川流域というよりも新川流域の遺跡だろう。

本地区では八王子台遺跡で円墳の周溝が検出された。この遺構は桑納川流域では唯一の古墳時代の遺構である。円墳は直径約13mの小さい古墳である。今のところ周辺から古墳時代の集落などの報告例はなく、孤立した存在である。

奈良･平安時代の遺跡は少数分布している。本地区では西芝山遺跡で平安時代の住居跡１軒と土坑２基、八王子台遺跡で平安時代の住居跡７軒と竪穴状遺構１基が検出された。

南側の内野南遺跡で奈良時代の住居跡１軒が検出された。大和田新田芝山遺跡では平安時代を主体とする住居跡８軒と製鉄炉が検出されて、小規模な工人集団の工房跡と見られている。同じ遺跡の別な地点で平安時代の住居跡１軒と土坑１基が検出され、隣接する仲ノ台遺跡では、平安時代の住居跡４軒が分散した状態で検出された。

桑納川流域をはさんで北側の台地上にある本郷台遺跡で奈良時代の住居跡１軒が検出され、その北側に位置する追分遺跡で平安時代の住居跡６軒が確認された[21]。桑納川と新川との合流付近にある桑納前畑遺跡では、住居跡と掘立柱建物跡からなる集落跡が検出された。

新川流域には、村上込の内遺跡、萱田遺跡群、上谷・栗谷遺跡など多数の住居跡と建物跡で構成される大規模集落が分布していた。しかしその支流の桑納川流域では大集落はなく、単独もしくは10軒以下の住居跡からなる小規模な遺跡が点在している。大規模な拠点集落の後背地で、短期的に居住の営まれた周辺的生活圏の性格がうかがえる。

古代律令制の衰退とともに平将門の乱などの大きな戦乱が続いた。戦乱後に開発された農地や集落は、有力な貴族や大きな寺社の私領荘園として増加し始めた。税収確保のために荘園化に対抗して国衙領が設置されたのだが、鎌倉時代の香取文書によると、八千代市では萱田郷と吉橋郷が、船橋市の神保郷とともに国衙領だったことが判明している。吉橋郷は西八千代北部地区の隣接地に相当する。国衙領として成立した正確な時期は不明であるが、臼井庄領域内で萱田郷、吉橋郷、神保郷は桑納川流域に連なり、臼井氏の有力庶子であった神保氏の勢力圏だったと見られている。荘園開発の波とともに、前代まで希薄だった人間活動が桑納川流域にもおよんだと考えられる。

中世の遺跡として数か所の城館跡が知られている。新川の方面からたどっていくと南岸の尾崎館跡、本地区の東側台地にある吉橋城跡、その約２㎞西側の北岸に船橋市金堀城跡、さらに川をさかのぼって楠ヶ山館跡がある。そのうち吉橋城跡には郭や土塁が残存し、郭や周辺部で部分的調査が実施された。吉橋城跡の城主は高木伊勢守胤貞で、坪井、古和釜、楠ヶ山、金堀、麦丸など桑納川流域を支配していた。高木伊勢守は松戸市小金城の高城氏につながる人物とされ、また東側約2.5㎞に米本城跡があり、米本城の村上氏とともに臼井城の原氏とも関係が深いとされている。天文五～六年（1536 ～ 7）に吉橋城は北条氏に攻略され、城主らは千葉氏を頼って落ちのびたという。

城館跡以外の中世の遺跡として、本地区の南側に位置する源七山遺跡がある。この遺跡からは火葬墓や墓坑が多数検出され、溝、台地整形、土塁状遺構で墓域が形成されていた。墓坑以外に掘立柱建物跡も数棟検出された。出土した遺物には、骨蔵器や、副葬品として埋納された青磁碗などがあり、12世紀後半の火葬骨蔵器の常滑甕から、16世紀の瀬戸・美濃大窯期の擂鉢まで、年代幅の長い陶磁器が含まれていた[22]。この遺跡は、長期にわたって営まれた中世墓地の様相をしめしている。

文献などで中世の村落などが確認されているのだが、墓地であった源七山遺跡、中世末期の数ヶ所の城館跡以外に、桑納川流域で中世の遺跡は少ない。

近世の遺構として目につきやすい文化財は、古墳のように盛り上がった塚である。塚は房総地方の台地で普遍的に見られ、八千代市でも多数分布している。しかしながら実際に発掘調査が実施された例は少ない。

桑納川流域北岸に追分塚がある。高さ2.5m、一辺約20mの方形の塚だった。塚頂部には木造の小さな堂があり、中に大日如来像が安置されていた。大日如来像には「下総桑橋村講中」、「宝暦十三癸未十月吉日」の銘があり、また堂のわきには、「昭和十一年」と「昭和廿四年銘」、及び建立年銘なしの出羽三山の碑３基、明治廿六年銘の古峯神社の碑１基が建てられていた。塚は、黒褐色土とローム主体の褐色土とが相互に水平に積み上げられ、しっかりとした盛土だった。塚の旧表土下から平安時代の土坑が検出された。塚から４枚の古銭が出土した。北宋銭の元祐通宝（1086年～）、寛永通宝、銭種不明の穴開き鉄銭、大正13年（1924）の１銭貨であり、古銭には年代幅があった。この塚は、宝暦十三年（1763）に造られた大日如来像を祀るために築かれた可能性が高いという[23]。出羽三山の碑などは後世に寄せられたものだろう。

本地区の東方約2.5㎞の地点に金塚所在塚があった。塚は高さ１ｍ、直径約10mの不整形な円形をしていて、塚の下に東側に半周する溝状遺構が造られていた。塚の年代や性格に関連するような遺物は出土しなかった。金塚所在塚は、近世の麦丸村と大和田新田との境界に位置するように造られていた[24]。本地区の東方約1.5㎞の地点に尾崎群集塚があり、その中の第01号塚が調査された。塚は高さ2.9m、一辺14mの方形をしていた。塚に関連する遺物は出土しなかった。尾崎群集塚は近世の吉橋村と大和田新田の村境付近に築造され、大和田新田から吉橋に抜ける道から奥まった山林に点在する塚群である。金塚所在塚と同じく村の境界に立地している[25]。村境に位置するのが、塚の特徴の一つといえるかもしれない。

近世の遺構としてしばしば取り上げられるのが、野馬土手・野馬堀である。既に刊行された本地区の報告書でも、西芝山遺跡、八王子台遺跡で野馬土手・野馬堀の検出が記述されている。野馬土手の幅は約２ｍ、高さ約0.5m。野馬堀の幅は２ｍ～３ｍ、深さ約0.6mであった。

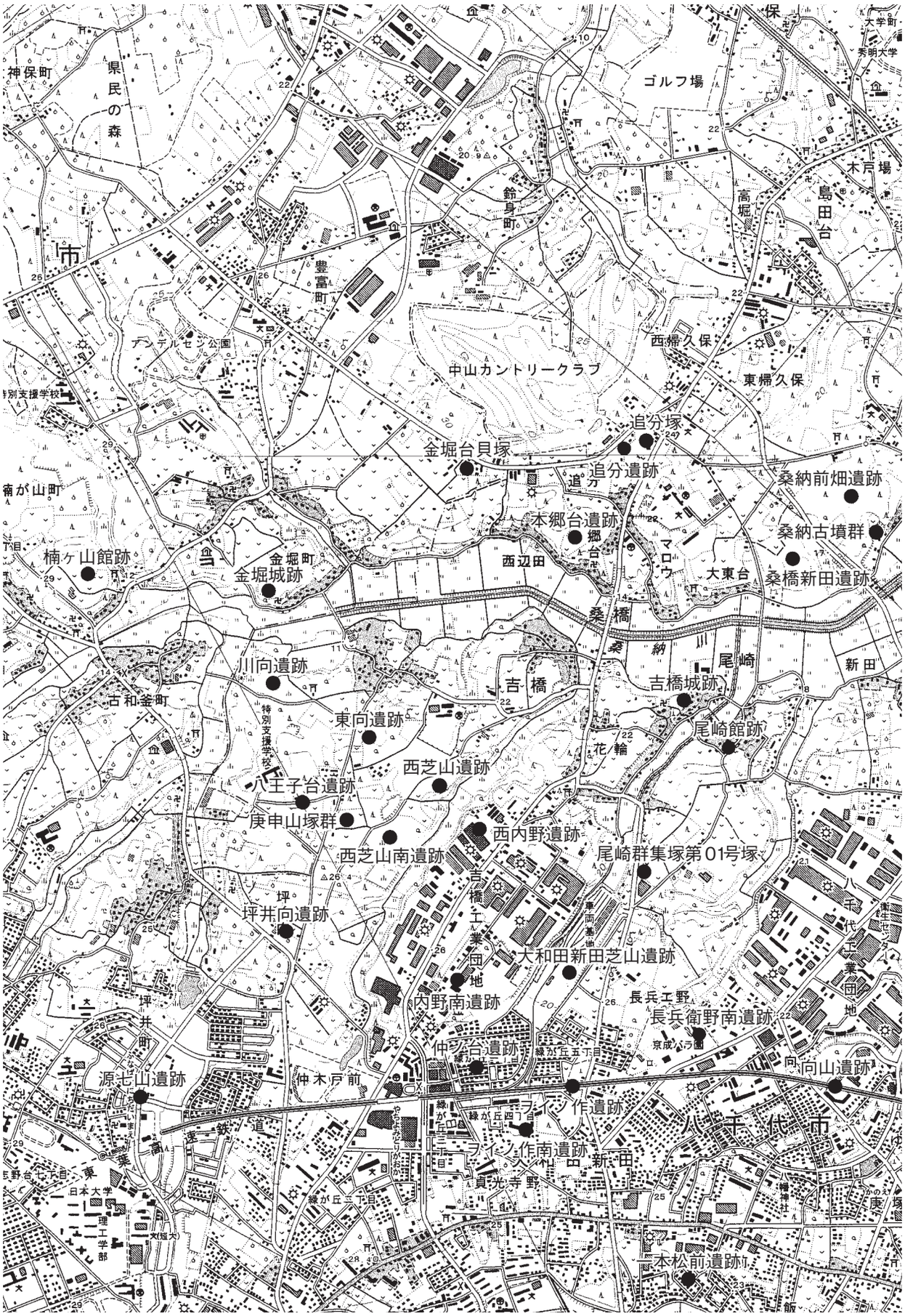
江戸時代の下総の牧は、西側に小金牧、東側に佐倉牧があった。南北に伸びる小金牧は、さらに高田牧、上野牧、中野牧、下野牧、印西牧の５牧に分かれ、現在の柏市、流山市、松戸市、鎌ケ谷市、習志野市、八千代市、千葉市、白井市、印西市に広がっていた。八王子台遺跡の野馬土手は、下野牧の東縁部を囲む野馬土手の一部を構成していた可能性が高いと報告された。千葉県の牧に関する報告書『房総の近世牧跡』によると、下野牧は本地区の南側約２㎞以南が想定されている[26]。つまり本地区は、下野牧本体から若干北側に離れた位置にあり、西芝山遺跡と八王子台遺跡で検出された野馬土手・野馬堀は、下野牧の周縁部分に相当すると考えられる。

なお『房総の近世牧跡』で図示された地図では、古道が西側隣接台地の船橋市古和釜町から南側へ坪井町をぬけ、南東に向きを変えて坪井向遺跡の南端を通って、ふたたび向きを南側に変えて成田街道へと達していた。

本地区の南に位置する源七山遺跡で、坪井・習志野台境野馬土手が調査された。この土手は、中心に溝（堀）を掘って両側に土手を築く二重土手の構造で、村と牧との境に設けられたものだった。両土手の端から端までの幅は７ｍ～８ｍ、高さは約１ｍあり、溝の底面から土手の頂部まで比高差は2.5mと推定された。

源七山遺跡で調査された坪井・習志野台境野馬土手では、村に馬が入らないように高低差のある比較的規模の大きい土手と堀が構築された。しかし周縁部では小規模な土手と堀もあったようである。本地区で検出された溝は牧周縁部の土手・堀であり、いつ頃どの様な畜養作業で造られたのかは詳らかではない。

注１　（財）千葉県教育振興財団　2007　『西八千代北部地区埋蔵文化財調査報告書１－八千代市西芝山遺跡－』
２　（公財）千葉県教育振興財団　2012　『西八千代北部地区埋蔵文化財調査報告書２－八千代市西芝山南遺跡－』
３　（公財）千葉県教育振興財団　2013　『西八千代北部地区埋蔵文化財調査報告書３－八千代市八王子台遺跡－』
４　八千代市史編さん委員会　2008　『八千代市の歴史　通史編（上)』
５　（財）千葉県文化財センター　1989　『八千代市仲ノ台遺跡・芝山遺跡』
６　（財）千葉県文化財センター　1989　『八千代市仲ノ台遺跡・芝山遺跡』
（財）千葉県文化財センター　1994　『八千代市沖塚遺跡・上の台遺跡他』
八千代市西八千代遺跡群調査会　1996　『仲ノ台遺跡・ヲイノ作遺跡他発掘調査報告書』
７　（財）千葉県文化財センター　1994　『八千代市沖塚遺跡・上の台遺跡他』
８　（財）千葉県教育振興財団　2006　『船橋市源七山遺跡』
９　（財）千葉県文化財センター　1994『八千代市沖塚遺跡・上の台遺跡他』
10　八千代市教育委員会　2005　『市内遺跡発掘調査報告書　平成16年度』
11　八千代市教育委員会　1999　『市内遺跡発掘調査報告書　平成10年度』
八千代市遺跡調査会　2007　『西内野遺跡発掘調査報告書』
12　八千代市遺跡調査会　1998　『内野南遺跡ａ地点発掘調査報告書』
八千代市教育委員会　1999　『市内遺跡発掘調査報告書　平成10年度』
八千代市教育委員会　2004　『市内遺跡発掘調査報告書　平成15年度』
八千代市教育委員会　2008　『内野南遺跡ｄ地点発掘調査報告書』
13　八千代市遺跡調査会　2000　『ヲイノ作南遺跡発掘調査報告書』
14　八千代市遺跡調査会　1998　『長兵衛野南遺跡発掘調査報告書』
15　（財）千葉県史料研究財団　2000　『千葉県の歴史　資料編、考古１（旧石器・縄文時代)』　千葉県
16　八千代市教育委員会　2004　『高津館跡ｂ地点・本郷台遺跡発掘調査報告書』
17　八千代市教育委員会　1993　『市内遺跡発掘調査報告書　平成４年度』
八千代市教育委員会　1994　『市内遺跡発掘調査報告書　平成５年度』
18　睦小学校北方遺跡調査会　1978　『桑納前畑遺跡』
19　八千代市史編さん委員会　1991『八千代市の歴史　資料編、原始・古代・中世』
20　八千代市史編さん委員会　1978　『八千代市の歴史』八千代市
21　八千代市教育委員会　1994　『市内遺跡発掘調査報告書　平成５年度』
22　注8
23　八千代市追分塚調査会　1995　『追分塚発掘調査報告書』
24　八千代市教育委員会　2002　『不特定遺跡発掘調査報告書１』
25　注24
26　千葉県教育委員会　2006　『房総の近世牧跡』



第７図　西八千代北部地区周辺の遺跡

第２章　東向遺跡

第１節　調査の経過

東向遺跡は西八千代北部地区の北側中央に位置する。この付近は桑納川流域南側の台地先端から少し奥まっている。遺跡の総面積は約196,000㎡である。標高は20m～26mでほぼ平坦な地形であるが、遺跡中央南側の比較的標高の高い場所から周囲に向かってなだらかに傾斜している（第８図）。調査前の現況は、畑、山林、及び荒蕪地であった。

発掘調査は平成９年度（1997年度）に始まり、平成23年度（2011年度）まで実施された。この間、調査は計24回に及び、調査面積の累積は約154,000㎡に達している（第９図～第11図）。

このうち上層については確認調査の総面積が17,887㎡、本調査面積が2,259㎡であり、本調査は第８次、第９次、及び第13次の計３回実施された。一方、下層については、確認調査の総面積は5,181㎡で、本調査面積は2,588㎡であり、本調査は第５次、第８次、第11次、第12次、及び第16次の計５回実施された。調査面積に比し本調査面積の割合が低く、遺構密度の低い遺跡といえる。

屋内の整理作業は平成20年度（2008年度）に始まり、平成25年度（2013年度）まで行われた。
以上の発掘調査・整理作業の実施期間・担当職員・内容は以下のとおりである。

（発掘調査）
平成９年度
（１）東向遺跡
期　間　平成９年12月１日～平成10年２月10日
組　織　調査部長　西山太郎、北部調査事務所長　折原　繁
担当者　研究員　猪股昭喜
内　容　上層確認調査　1,063㎡／ 10,630㎡、下層確認調査　213㎡／ 10,630㎡
平成10年度
（２）東向遺跡
期　間　平成11年２月１日～３月26日
組　織　調査部長　沼澤　豊、北部調査事務所長　折原　繁
担当者　研究員　花島理典
内　容　上層確認調査　2,340㎡／ 23,400㎡、下層確認調査　936㎡／ 23,400㎡
平成11年度
（３）東向遺跡
期　間　平成11年12月１日～ 12月28日
組　織　調査部長　沼澤　豊、北部調査事務所長　折原　繁
担当者　研究員　花島理典
内　容　上層確認調査1,810㎡／ 18,100㎡、下層確認調査　680㎡／ 16,965㎡
平成12年度

（４）東向遺跡

期　間　平成13年１月５日～１月31日

組　織　調査部長　沼澤　豊、北部調査事務所長　石田廣美

担当者　上席研究員　落合章雄

内　容　上層確認調査　120㎡／1,100㎡、下層確認調査　52㎡／1,100㎡

平成15年度

（５）東向遺跡

期　間　平成15年11月17日～平成16年１月19日

組　織　調査部長　斎木　勝、北部調査事務所長　古内　茂

担当者　上席研究員　木下圭司、西口　徹

内　容　上層確認調査　908㎡／8,720㎡、下層確認調査　380㎡／8,720㎡、下層本調査　524㎡

平成16年度

（６）東向遺跡

期　間　平成16年８月２日～９月30日

組　織　調査部長　矢戸三男、北部調査事務所長　古内　茂

担当者　主席研究員　雨宮龍太郎、上席研究員　竹内久美子、渡邊高弘

内　容　上層確認調査　940㎡／8,100㎡、下層確認調査　260㎡／8,100㎡

（７）東向遺跡（２）

期　間　平成16年12月６日～12月27日

組　織　調査部長　矢戸三男、北部調査事務所長　古内　茂

担当者　主席研究員　宮　重行

内　容　上層確認調査　680㎡／4,400㎡、下層確認調査　136㎡／4,400㎡

平成17年度

（８）東向遺跡

期　間　平成17年８月17日～平成18年１月31日

組　織　調査部長　矢戸三男、北部調査事務所長　古内　茂

担当者　主席研究員　雨宮龍太郎、上席研究員　渡邊高弘

内　容　上層確認調査　2,514㎡／21,200㎡、下層確認調査　868㎡／21,715㎡、上層本調査　1,135㎡、
下層本調査　1,020㎡

平成18年度

（９）東向遺跡

期　間　平成18年４月10日～６月２日

組　織　調査研究部長　矢戸三男、北部調査事務所長　古内　茂

担当者　主席研究員　岡田誠造

内　容　上層確認調査　576㎡／576㎡、下層確認調査　24㎡／576㎡、上層本調査　576㎡

(10) 東向遺跡②

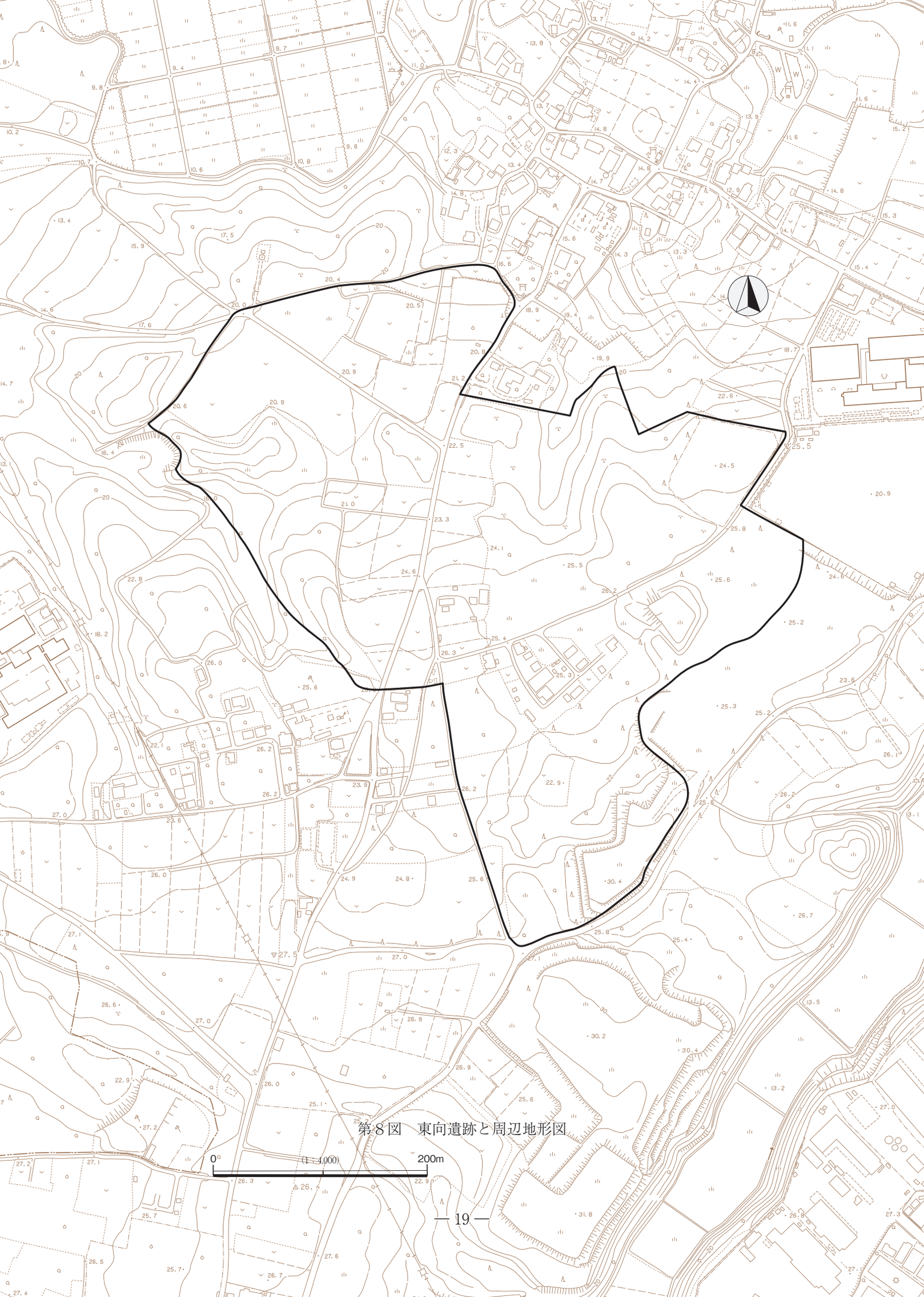
期　間　平成18年12月１日～12月26日

組　織　調査研究部長　矢戸三男、北部調査事務所長　古内　茂
担当者　上席研究員　沖松信隆
内　容　上層確認調査　368㎡／3,623㎡、下層確認調査　140㎡／3,623㎡
(11) 東向遺跡③
期　間　平成19年２月１日～３月28日
組　織　調査研究部長　矢戸三男、北部調査事務所長　古内　茂
担当者　主席研究員　岡田誠造
内　容　上層確認調査　1,026㎡／10,450㎡、下層確認調査　364㎡／10,450㎡、下層本調査416㎡
平成19年度
(12) 東向遺跡③
期　間　平成19年４月４日～４月10日
組　織　調査研究部長　矢戸三男、北部調査事務所長　豊田佳伸
担当者　主席研究員　雨宮龍太郎
内　容　下層本調査300㎡
(13) 東向遺跡
期　間　平成19年４月23日～５月８日
組　織　調査研究部長　矢戸三男、北部調査事務所長　豊田佳伸
担当者　主席研究員　雨宮龍太郎
内　容　下層確認調査　24／548㎡、上層本調査548㎡
(14) 東向遺跡（２）
期　間　平成19年11月15日～11月30日
組　織　調査研究部長　矢戸三男、北部調査事務所長　豊田佳伸
担当者　主席研究員　雨宮龍太郎
内　容　上層確認調査　539㎡／539㎡、下層確認調査　24㎡／539㎡
平成20年度
(15) 東向遺跡（６）
期　間　平成21年２月２日～２月27日
組　織　調査研究部長　大原正義、北部調査事務所長　豊田佳伸
担当者　上席研究員　森本和男
内　容　上層確認調査　380㎡／3,745㎡、下層確認調査　112㎡／3,745㎡
平成21年度
(16) 東向遺跡（２）
期　間　平成21年11月２日～11月30日
組　織　調査研究部長　及川淳一、北部調査事務所長　野口行雄
担当者　上席研究員　森本和男
内　容　下層本調査324㎡
(17) 東向遺跡（23）

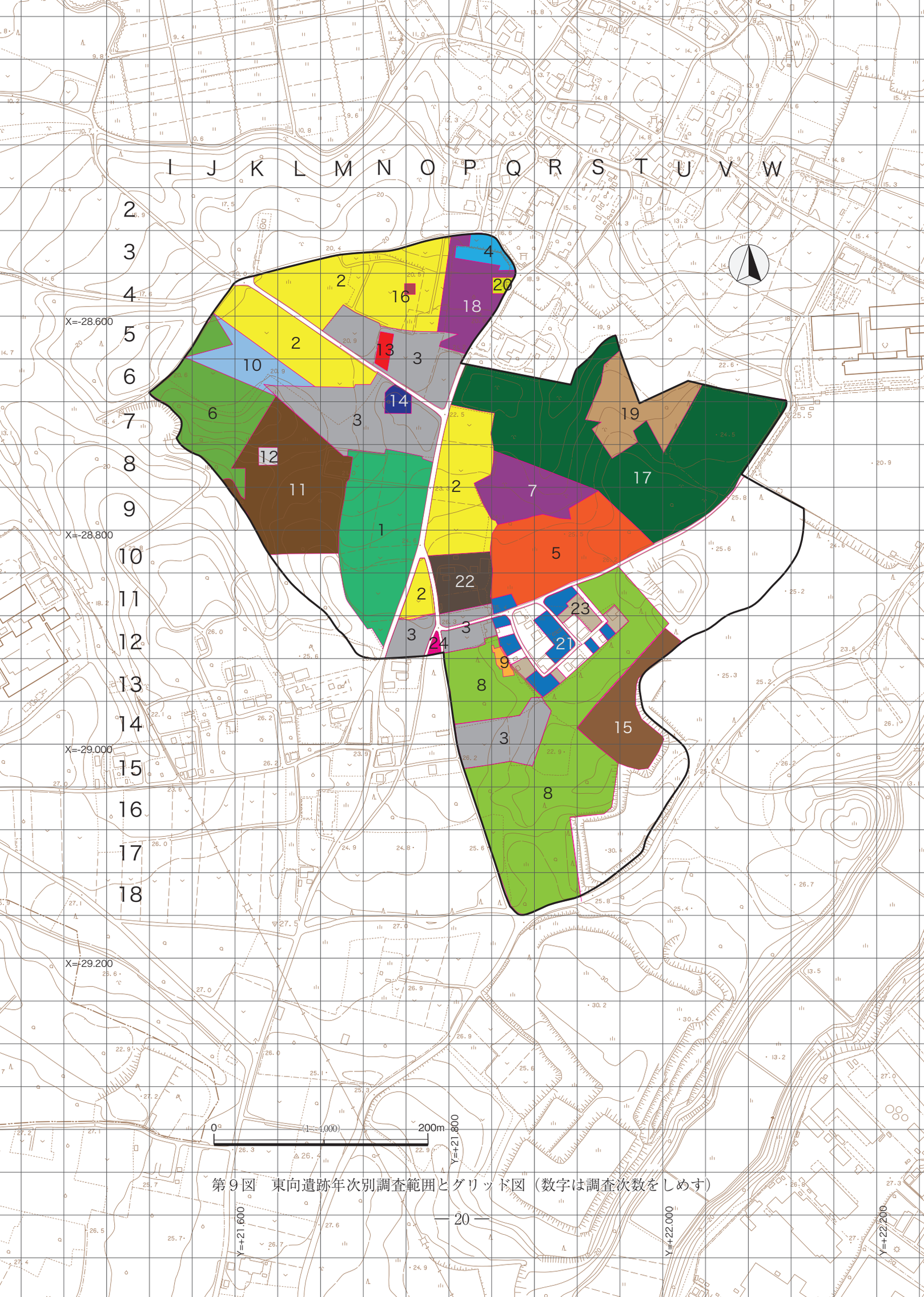
期　間　平成21年12月１日～平成22年２月26日
組　織　調査研究部長　及川淳一、北部調査事務所長　野口行雄
担当者　主席研究員　宮　重行
内　容　上層確認調査　2,598㎡／ 23,680㎡、下層確認調査　596㎡／ 23,680㎡
(18) 東向遺跡（２）②
期　間　平成22年２月１日～２月26日
組　織　調査研究部長　及川淳一、北部調査事務所長　野口行雄
担当者　上席研究員　川勝里文
内　容　上層確認調査　626㎡／ 4,051㎡、下層確認調査　128㎡／ 4,051㎡
平成22年度
(19) 東向遺跡（23）
期　間　平成22年８月６日～９月15日
組　織　調査研究部長　及川淳一、北部調査事務所長　野口行雄
担当者　上席研究員　山田貴久
内　容　上層確認調査　576㎡／ 4,795㎡、下層確認調査　96㎡／ 4,795㎡
(20) 東向遺跡（２）
期　間　平成22年９月16日～９月27日
組　織　調査研究部長　及川淳一、北部調査事務所長　野口行雄
担当者　上席研究員　山田貴久
内　容　上層確認調査　35㎡／ 150㎡
(21) 東向遺跡（５）
期　間　平成22年11月24日～ 12月24日
組　織　調査研究部長　及川淳一、北部調査事務所長　野口行雄
担当者　主席研究員　雨宮龍太郎
内　容　上層確認調査　360㎡／ 2,505㎡、下層確認調査　68㎡／ 2,505㎡
平成23年度
(22) 東向遺跡（29）
期　間　平成23年８月８日～８月29日
組　織　調査研究部長　及川淳一、北部調査事務所長　野口行雄
担当者　上席研究員　鵜沢正則
内　容　上層確認調査　280㎡／ 2,803㎡、下層確認調査　56㎡／ 2,803㎡
(23) 東向遺跡（５）
期　間　平成23年９月13日～９月22日
組　織　調査研究部長　及川淳一、北部調査事務所長　野口行雄
担当者　上席研究員　鵜沢正則
内　容　上層確認調査　138㎡／ 1,312㎡、下層確認調査　20㎡／ 1,312㎡
(24) 東向遺跡（28）

期　間　平成23年９月27日～９月29日
組　織　調査研究部長　及川淳一、北部調査事務所長　野口行雄
担当者　上席研究員　鵜沢正則
内　容　上層確認調査　10㎡／99㎡、下層確認調査　4㎡／99㎡

（整理作業）
（１）平成20年度
期　間　平成21年２月２日～３月31日
組　織　調査研究部長　大原正義、北部調査事務所長　豊田佳伸
担当者　主席研究員　髙橋博文、雨宮龍太郎、上席研究員　井上哲朗
内　容　水洗注記から分類の一部まで
（２）平成21年度
期　間　平成22年３月１日～３月31日
組　織　調査研究部長　及川淳一、北部調査事務所長　野口行雄
担当者　主席研究員　宮　重行、上席研究員　内山　健
内　容　分類・選別の一部から実測の一部まで
（３）平成24年度
期　間　平成24年４月２日～平成25年1月31日
組　織　調査研究部長　関口達彦、整理課長　高田　博
担当者　主任上席文化財主事　蔀　淳一、雨宮龍太郎、倉内郁子、島立　桂
内　容　実測の一部から編集まで
（４）平成25年度
期　間　平成25年４月１日～平成26年３月31日
組　織　調査研究部長　伊藤智樹、整理課長　今泉　潔
担当者　主任上席文化財主事　森本和男、上席文化財主事　橋本勝雄
内　容　編集から刊行まで

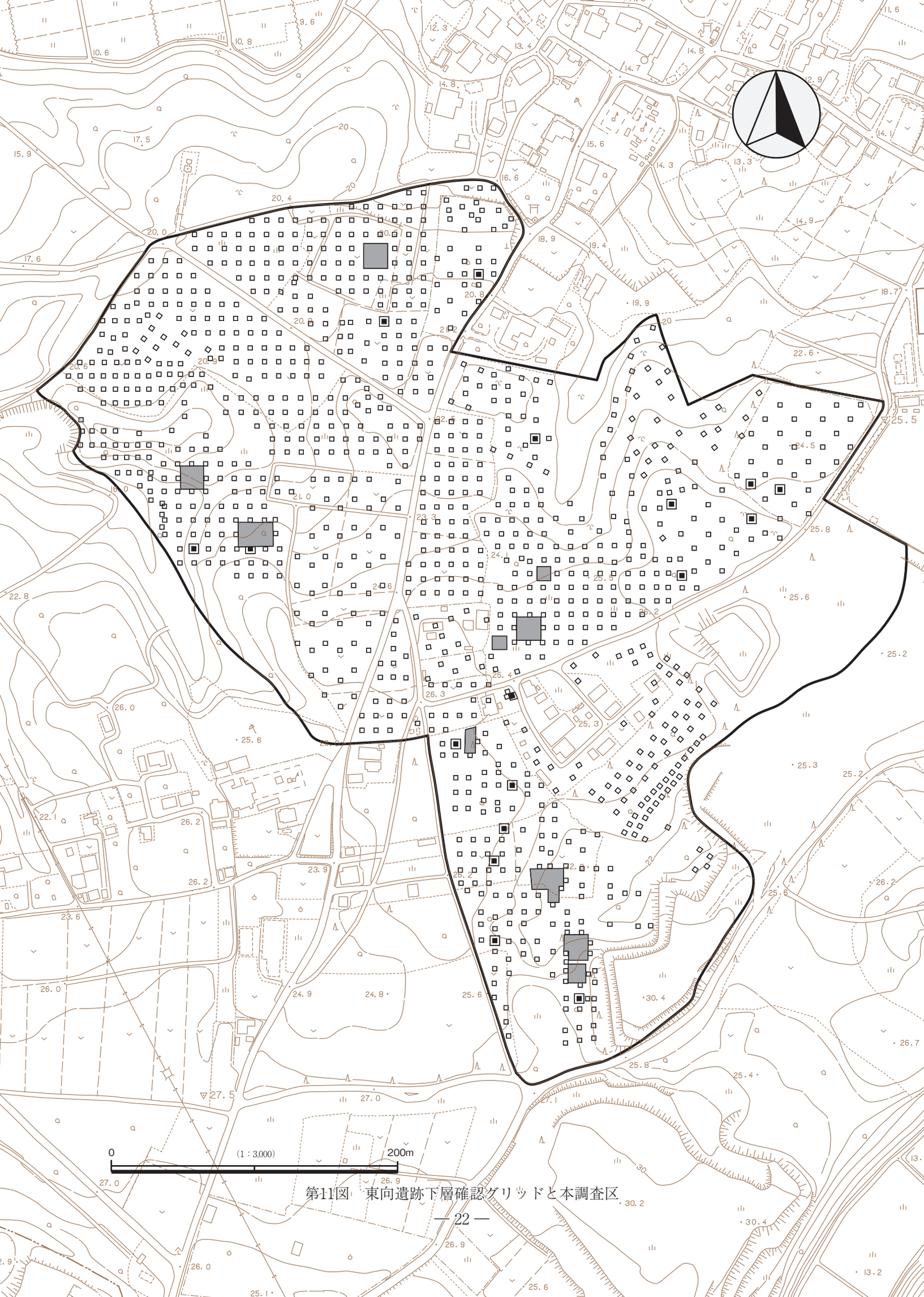


第８図　東向遺跡と周辺地形図



第９図　東向遺跡年次別調査範囲とグリッド図（数字は調査次数をしめす）

第10図　東向遺跡上層確認トレンチと本調査区



第11図　東向遺跡下層確認グリッドと本調査区

第２節　旧石器時代

１．石器群の概要

東向遺跡からは、24次にわたる発掘調査によって、20か所の石器集中地点（ブロック）と単独出土地点から、790点の旧石器時代石器群が出土した。出土層準及び石器群の内容等を勘案した結果、下位から順に７枚の文化層に区分した。なお、石器群の分布状況は、帰属時期にかかわらず、調査範囲西側で北西に向かう浅い谷の右側と、調査範囲南側の平坦地の２か所にまとまっている。

第１文化層は、立川ローム層Ⅸ層下部に包含される石器群で、16Q-Aブロック１か所が該当する。このブロックは４点の石器が散漫に分布し、珪化した頁岩による中型の石刃と安山岩による不定型の剥片で構成される。

第２文化層は、立川ローム層Ⅸ層上部～Ⅶ層に包含される石器群で、４O-A、10Q-A、14Q-A・Bブロックの４か所が該当する。14Q-A・Bブロックの資料は、安山岩と流紋岩を主体とする石刃石器群で、流紋岩製の石器群については、石刃を素材とする基部調整のナイフ形石器と、対向剥離によって急角度の背をもつナイフ形石器が特徴的である。一方、安山岩製の石器群については、不定型厚手の剥片を石核の素材として、小口部分より小型の石刃ないしは縦長剥片が生産され、ナイフ形石器が製作されている。また、10Q-Aブロックには、頁岩、凝灰岩等によるナイフ形石器や中型の石刃が搬入されている。

第３文化層は、立川ローム層Ⅴ層からⅢ層下部にかけて包含される石器群で、武蔵野台地における「Ⅳ下・Ⅴ層の石器群」にあたる。本遺跡では、９L-A・B・C、９M-A、15R-B・C、17R-Aブロックの７か所が該当し、資料が最も多い文化層である。石器の内容は、切出形や２側縁調整のナイフ形石器、掻器、削器を中心として、槍先形石器、錐状石器が含まれている。石器石材は、黒曜石A類（高原山産）、安山岩、チャートが目立つ。

第４文化層は、立川ローム層Ⅲ層上部を中心に包含されている石器群で、「砂川期」の石刃石器群である。11Q-A、12P-A、13P-Aブロックの３か所が該当するほか、周辺の単独出土の中にも当該期の資料が見られる。頁岩系による小振りのナイフ形石器、石刃が中心であるが、11Q-Aブロックには、高原山産黒曜石による両面調整の槍先形石器がある。

第５文化層は、立川ローム層Ⅲ層上部に包含される石器群で、８K-Aブロック１か所が該当する。槍先形石器本体はないが、特徴的な削片の存在から、「東内野型有樋尖頭器」を特徴とする石器群と考えられる。細石刃石器群と平面的に重なる。

第６文化層は、立川ローム層Ⅲ層上部からその上位のⅡ層にかけて包含される石器群で、８K-B、15R-Aブロックの２か所が該当する。信州産を中心とする黒曜石による野岳・休場型細石刃核を指標とする細石刃石器群で、15R-Aブロックには、細石刃、細石刃核に削器類が加わっている。また、ストーンリタッチャーと考えられる薄手の礫石器が注目される。

第７文化層は、立川ローム層Ⅲ層上面から、その直上のⅡ層（黒色土）にかけて包含される石器群で、細身の槍先形石器（本ノ木型尖頭器）と掻器を特徴とする。帰属時期については、槍先形石器の形態的特徴から、土器出現期と考えられる。16Rグリッド出土資料及び16R-Aブロックが該当する。房総半島では、当該期の掻器は少ないが、本遺跡では、安山岩、頁岩等各種石材による資料がまとまっている。

第12図　旧石器時代のブロック分布図

第１表　東向遺跡文化層・ブロック別石器組成表

	ブロック	クラスター	Kn	Po	Kp	Es	Ss	Gr	Dr	Pq	Rf	Uf	Bl	Ax	Hs	As	Uk	Fl	Ch	Co	Mb	Mc	Tp	合計	重量（g）	Pe	重量（g）
第１文化層 Ⅸ層下部	16Q-A												1					3						4	40.3		
	小　計		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	4	40.3	0	0
第２文化層 Ⅸ層上部～Ⅶ層	4O-A		1				1			1	2	5						13		1				24	135.2		
	10Q-A		1									1	3		1			3						9	240.0	1	148.9
	14Q-A		4								3		1					85		3				96	555.2		
	14Q-B		4							1	3	1	2					69	10	5				95	389.7		
	小　計		10	0	0	0	1	0	0	2	8	7	6	0	1	0	0	170	10	9	0	0	0	224	1,320.1	1	148.9
第３文化層 Ⅴ層～Ⅲ層下部 （Ⅳ下・Ⅴ層）	9L-A										1	1			1									3	597.8		
	9L-B											1						25	1	3				30	460.5		
	9L-C		1												1									2	394.1	1	33.5
	9M-A																	11		6				17	251.0		
	15R-B		4	1							5	2						113	30	1				156	256.6		
	15R-C					4	1					1						10		1				17	573.6		
	17R-A					7	6		1		5	2			1			43		2				67	900.8		
	小　計		5	1	0	11	7	0	1	0	11	7	0	0	3	0	0	202	31	13	0	0	0	292	3,434.4	1	33.5
第４文化層 Ⅲ層	11Q-A			1								2		1				8		5				17	226.1	4	69.6
	12P-A												1					7						8	61.2	2	35.6
	13P-A		3															4		1				8	145.9		
	小　計		3	1	0	0	0	0	0	0	0	2	1	1	0	0	0	19	0	6	0	0	0	33	433.2	6	105.2
第５文化層 Ⅲ層	8K-A						1					1						9						11	172.3		
	小　計		0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	9	0	0	0	0	0	11	172.3	0	0
第６文化層 Ⅲ層上面～Ⅱ層	8K-B											1									2	1		4	12.2		
	15R-A		1			2	2					4			1			44	5		14	1		74	298.2	2	64.5
	小　計		1	0	0	2	2	0	0	0	0	5	0	0	1	0	0	44	5	0	16	2	0	78	310.4	2	64.5
第７文化層 Ⅲ層上面～Ⅱ層	16R グリッド	16R-1		3		1				1	1	3						24						33	205.8		
		16R-2		6		11	2				5							25		5				54	1,059.9	2	17.3
		16R-3		1		5					1	1						5		7				20	188.4	1	11.2
		プレ4区一括										1												1	7.7		
		小　計	0	10	0	17	2	0	0	1	7	5	0	0	0	0	0	54	0	12	0	0	0	108	1,461.8	3	28.5
	16R-A			1			1								1									3	225.5		
	小　計		0	11	0	17	3	0	0	1	7	5	0	0	1	0	0	54	0	12	0	0	0	111	1,687.3	3	28.5
単　独			4							1		3	1		1			9		3			1	23	293.7	1	2.7
合　計			23	13	0	30	14	0	1	4	26	30	9	1	7	0	0	510	46	43	16	2	1	776	7,691.7	14	383.3

第２表　東向遺跡文化層・ブロック別石材組成表

	ブロック	クラスター	石器石材										石器合計	石器重量（g）	礫石材				礫合計	礫重量（g）
			Ob	An	To	Rh	Sh	Tu	Ch	Sa	Ho	Cc			Rh	Ch	Sa	Ho		
第１文化層 Ⅸ層下部	16Q-A			3			1						4	40.3					0	
	小　計		0	3	0	0	1	0	0	0	0	0	4	40.3	0	0	0	0	0	0
第２文化層 Ⅸ層上部～Ⅶ層	4O-A		3				6		15				24	135.2					0	
	10Q-A						3	4		1	1		9	240.0	1				1	148.9
	14Q-A			22	9	65							96	555.2					0	
	14Q-B			19	27	38	7		1		3		95	389.7					0	
	小　計		3	41	36	103	16	4	16	1	4	0	224	1,320.1	1	0	0	0	1	148.9
第３文化層 Ⅴ層～Ⅲ層下部 （Ⅳ下・Ⅴ層）	9L-A			1					2				3	597.8					0	
	9L-B			1					29				30	460.5					0	
	9L-C			1					1				2	394.1	1				1	33.5
	9M-A		1						15		1		17	251.0					0	
	15R-B		146	8	1						1		156	256.6					0	
	15R-C		12	3			2						17	573.6					0	
	17R-A		14	48						1		4	67	900.8					0	
	小　計		173	62	1	0	2	0	47	1	2	4	292	3,434.4	1	0	0	0	1	33.5
第４文化層 Ⅲ層	11Q-A		15	1							1		17	226.1	3	1			4	69.6
	12P-A						7				1		8	61.2			2		2	35.6
	13P-A					1	6	1					8	145.9					0	
	小　計		15	1	0	1	13	1	0	0	2	0	33	433.2	3	1	2	0	6	105.2
第５文化層 Ⅲ層	8K-A		1	5			1					4	11	172.3					0	
	小　計		1	5	0	0	1	0	0	0	0	4	11	172.3	0	0	0	0	0	0
第６文化層 Ⅲ層上面～Ⅱ層	8K-B		4										4	12.2					0	
	15R-A		32	17		19				3	3		74	298.2	1	1			2	64.5
	小　計		36	17	0	19	0	0	0	3	3	0	78	310.4	1	1	0	0	2	64.5
第７文化層 Ⅲ層上面～Ⅱ層	16R グリッド	16R-1	6	15			4		1	1	6		33	205.8					0	
		16R-2	1	19		2	12	1	1	5	7	6	54	1,059.9		1	1		2	17.3
		16R-3	2	1		2	8					7	20	188.4				1	1	11.2
		プレ4区一括	1										1	7.7					0	
		小　計	10	35	0	4	24	1	2	6	13	13	108	1,461.8	0	1	1	1	3	28.5
	16R-A			2		1							3	225.5					0	
	小　計		10	37	0	5	24	1	2	6	13	13	111	1,687.3	0	1	1	1	3	28.5
単　独			3	4		3	4	1	1		2	5	23	293.7		1			1	2.7
合　計			241	170	37	131	61	7	66	11	26	26	776	7,691.7	6	4	3	1	14	383.3

２．遺構と遺物

第１文化層

本文化層は、立川ローム層Ⅸ層下部に包含される石器群で、16Q-Aブロック１か所が該当する。出土資料は、石器４点と零細なことから、詳細は不明である。

１．16Q-Aブロック（第13図～第15図、第３表・第４表、図版34）

１）概　要（第13図・第14図、第４表）

本ブロックは、遺跡南端の16P-59、16Q-40・50グリッドに位置し、標高24m～26mの台地平坦面に立地する。ブロックの規模は、長軸3.6m、短軸0.7mの範囲で、３点の石器が散漫に分布する。また、クラムシェルによる確認調査の際に、16Q-50グリッドから石器が１点出土していることから、本ブロックに帰属する資料は合計４点と判断した。出土層準は、立川ローム層Ⅸ層下部で、0.3mの高低差をもって、地形に沿って包含されている。

石器組成は、石刃１点、剥片３点、石器石材は、安山岩３点、頁岩Ｄ類１点である。

２）母岩別資料（第３表）

本ブロックでは、石器４点のうち１点を母岩分類した（母岩識別率25％）。内訳は、頁岩Ｄ類１母岩（16Q-１：１点）である。

母岩分類できなかった資料に、安山岩３点（30.4ｇ）がある。自然面は紙やすり状の円礫面で、全体に灰褐色を呈している。このような安山岩は、房総半島における立川ローム層Ⅸ層下部の石器群に通有であり、上総丘陵砂礫層を含む河川下流域に由来すると考えられる。

16Q-１：自然面は褐色を呈する滑らかな円礫面、内部は緑色を帯びた橙色を呈する珪化した頁岩である。中型の石刃１点（9.9ｇ）の単独資料である。

３）出土遺物（第15図）

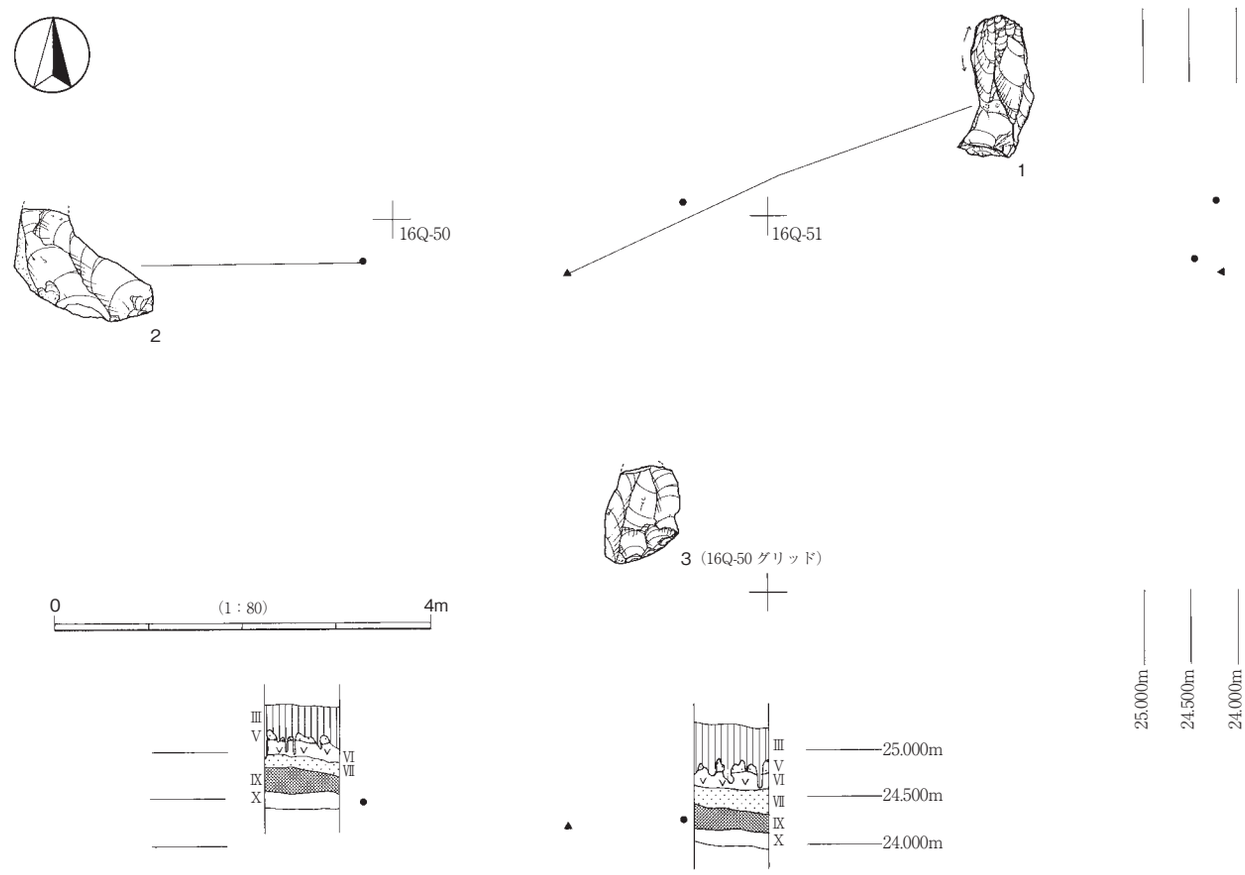
１は、頁岩Ｄ類による石刃である。上端に広く平坦な打面があり、表面の打面直下には頭部調整が見られる。また、表面左上半部には、微細な剥離痕が連続する。なお、裏面下部はウートラパッセになっており、

第３表　16Q-Aブロック母岩別石器組成表

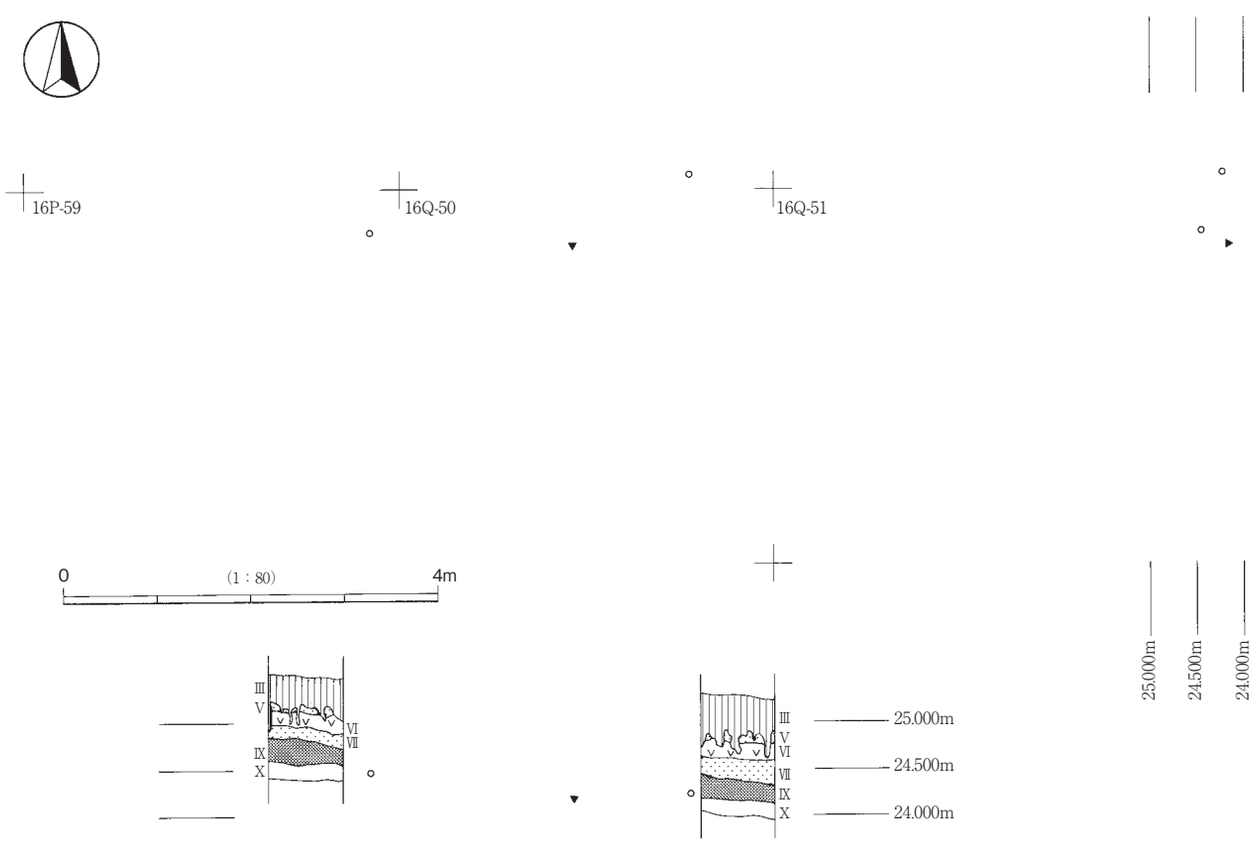
母岩番号	石材	Kn	Po	Kp	Es	Ss	Gr	Dr	Pq	Rf	Uf	Bl	Ax	Hs	As	Uk	Fl	Ch	Co	合計	重量(g)
16Q-1	ShD											1								1	9.9
16Q-その他	An																3			3	30.4
合　計		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	3	0	0	4	40.3

第４表　16Q-Aブロック石材別石器組成表

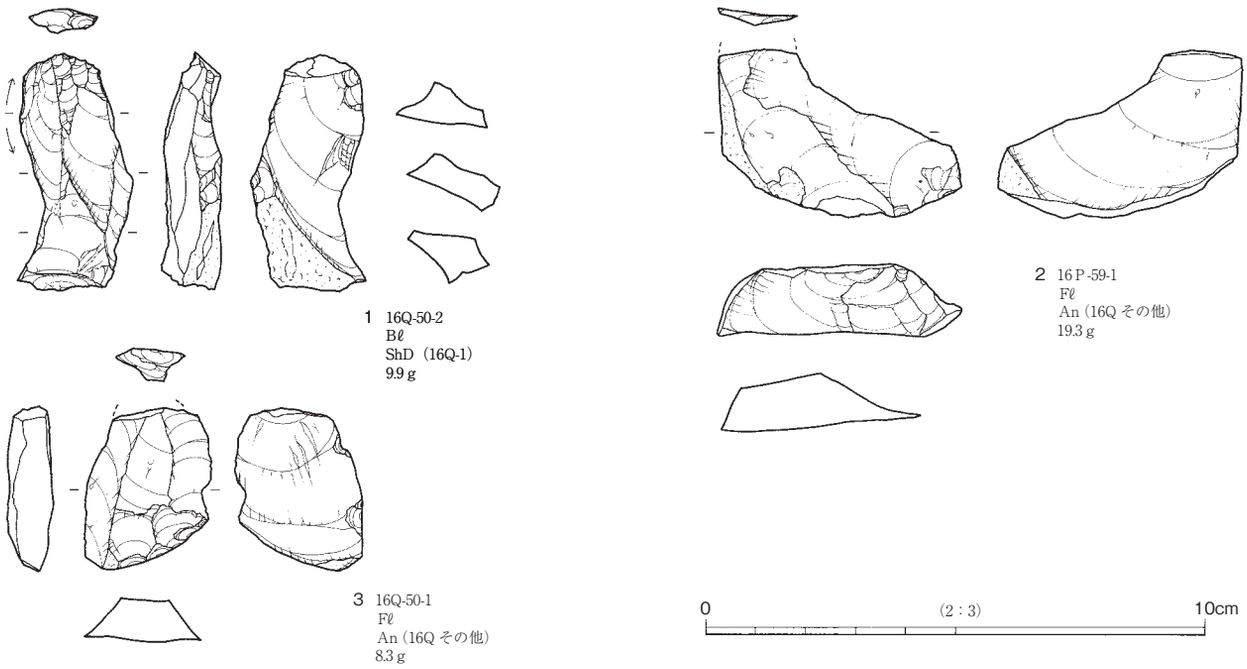
石　　材	石材	Kn	Po	Kp	Es	Ss	Gr	Dr	Pq	Rf	Uf	Bl	Ax	Hs	As	Uk	Fl	Ch	Co	合計	重量(g)
安山岩	An																3			3	30.4
頁岩Ｄ	ShD											1								1	9.9
合　計		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	3	0	0	4	40.3



第13図　16Q-Aブロック出土遺物分布図（1）－石器別分布図－



第14図　16Q-Aブロック出土遺物分布図（2）－石材別分布図－



第15図　16Q-Aブロック出土遺物実測図

自然面が付着している。２は、安山岩による中型不定型の剥片である。表面は、裏面（主要剥離面）と異なる方向からの剥離面で構成される。打面は欠損する。３は、安山岩による幅広の縦長剥片である。表面下端部に細かく潰れた剥離痕が多数見られること、裏面（主要剥離面）の打瘤が発達しないことから、本剥片は両極打撃によって剥離された可能性がある。

第２文化層

本文化層は、立川ローム層Ⅸ層上部からⅦ層にかけて包含される石器群で、４O-A、10Q-A、14Q-A・Bブロックが該当する。資料数の多い14Q-A・Bブロックは、相互に隣接して分布しており、石材構成に共通点が多い。また、同一母岩、接合資料も見られる。

石器石材は、灰白色に風化して軟化した粗悪な流紋岩とトロトロ石、安山岩が多用され、石刃及び小型不定型の剥片によるナイフ形石器が見られる。剥片剥離技術には、中型厚手の剥片を石核の素材として、その小口面から縦長剥片（あるいは石刃）が剥離されるものがある。

１．４O-Aブロック（第16図～第19図、第５表・第６表、図版34）

１）概　要（第16図・第17図、第６表）

４O-Aブロックは、遺跡北端の４O-21・31・40グリッドに位置し、標高20m～22mの台地平坦面に立地する。ブロックの規模は、長軸8.8m、短軸4.0mの不整形の範囲で、24点の石器が散漫に分布する。出土層準は、立川ローム層Ⅸ層上部を中心として、0.5mの高低差をもって、ほぼ水平に包含されている。

石器組成は、ナイフ形石器１点、削器１点、楔形石器１点、加工痕ある剥片２点、使用痕ある剥片５点、剥片13点、石核１点、石器石材は、黒曜石A類２点、黒曜石G類１点、頁岩C類５点、頁岩D類１点、チ

ャート15点である。

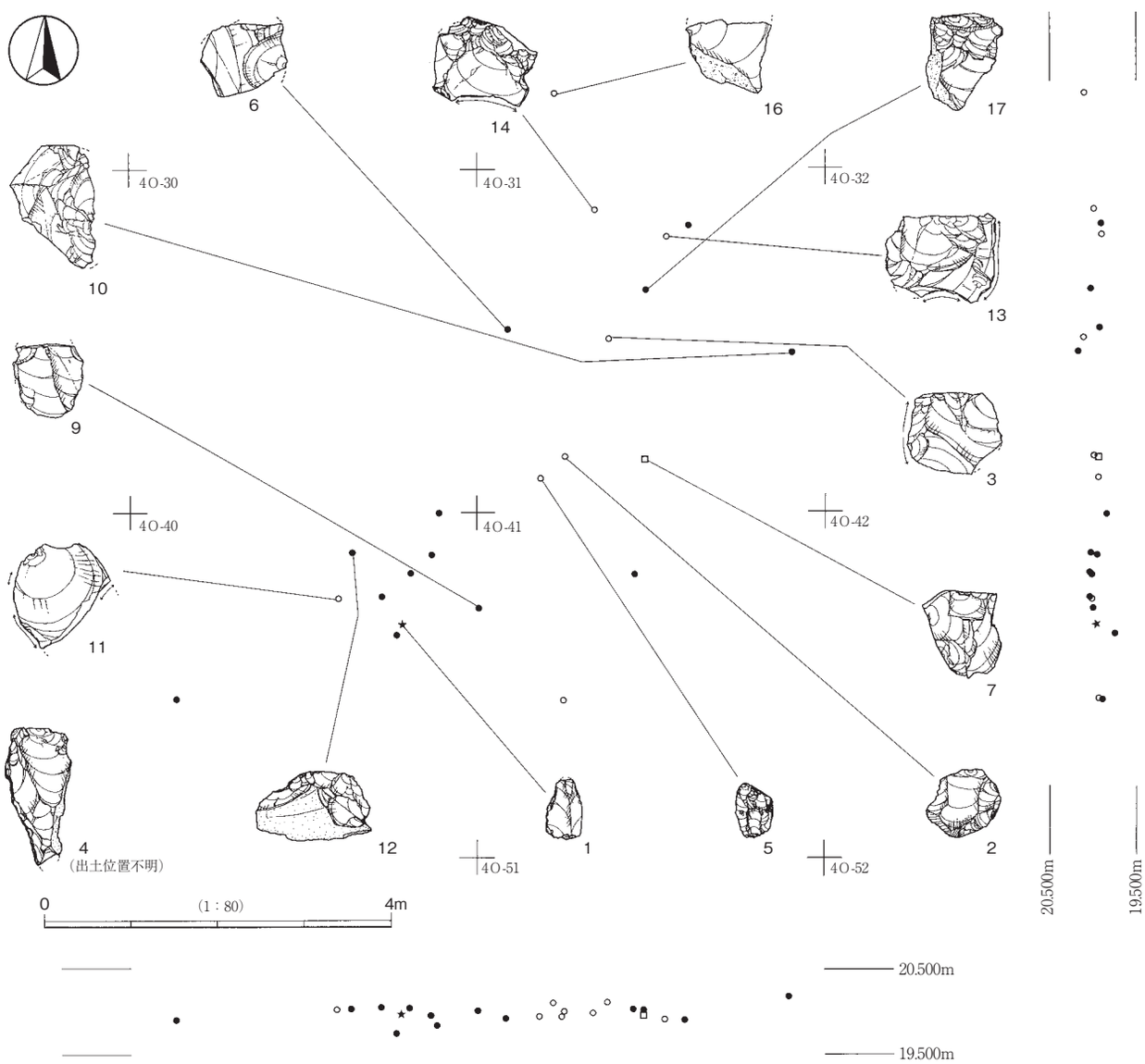
２）母岩別資料（第５表）

本ブロックでは、石器24点のうち10点を４母岩に区分した（母岩識別率42％）。内訳は、頁岩Ｃ類１母岩（４O-３：１点）、頁岩Ｄ類１母岩（４O-４：１点）、チャート２母岩（４O-１・２：８点）である。

なお、母岩分類できなかった資料に、黒曜石Ａ類２点（2.9ｇ）、黒曜石Ｇ類１点（0.2ｇ）、頁岩Ｃ類４点（10.9ｇ）、チャート７点（33.9ｇ）がある。

４O-１：自然面は暗灰緑色を呈する滑らかな円礫面、内部は暗灰緑色の地に、黒色の縞と白色の縞（節理）が網目状に入るチャートである。中型不定型の剥片を利用した使用痕ある剥片３点、中・小型不定型の剥片３点、合計６点（59.0ｇ）で構成され、このうち使用痕ある剥片１点と剥片２点が表裏で接合する（４O-１Ａ）。３点の接合距離は、最長で６ｍある。

４O-２：青灰色の地に黒色の縞が多方向に入るチャートである。自然面は不明瞭であるが、暗青灰色を



第16図　4O-Aブロック出土遺物分布図（１）－石器別分布図－

呈する古い節理面があり、これが自然面（角礫面）の可能性もある。中型不定型の剥片を利用した使用痕ある剥片１点（欠損品）、剥片１点、合計２点（13.6ｇ）で構成され、表裏で接合する（４Ｏ-２Ａ）。２点の接合距離は、2.5mである。

４Ｏ-３：自然面は明橙色の角礫面、内部は黄灰色の地に暗紫色の斑が入る石材で、頁岩Ｃ類に分類した。中型不定型の剥片を素材とする石核１点（9.6ｇ）の単独資料である。

４Ｏ-４：暗褐色の地に淡黒褐色の縞が平行して入る、良質な頁岩Ｄ類である。小型不定型の剥片を素材とする加工痕ある剥片１点（5.1ｇ）の単独資料である。

３）出土遺物（第18図・第19図）

１は、チャートによるナイフ形石器である。小型の縦長剥片を素材として、素材の打面を基部にあて、左側縁に対向剥離による粗い調整加工が施されている。２は、頁岩Ｄ類による加工痕ある剥片である。小型不定型の剥片を素材として、表裏の上部に粗い調整加工がなされている。３は、チャートによる中型不

第17図　4O-Aブロック出土遺物分布図（２）－石材別分布図－

第５表　4O-Aブロック母岩別石器組成表

母岩番号	石材	Kn	Po	Kp	Es	Ss	Gr	Dr	Pq	Rf	Uf	Bl	Ax	Hs	As	Uk	Fl	Ch	Co	合計	重量（g）
4O-1	Ch										3						3			6	59.0
4O-2	Ch										1						1			2	13.6
4O-3	ShC																		1	1	9.6
4O-4	ShD									1										1	5.1
4O-その他	ObA								1								1			2	2.9
4O-その他	ObG																1			1	0.2
4O-その他	ShC									1							3			4	10.9
4O-その他	Ch	1				1					1						4			7	33.9
合　計		1	0	0	0	1	0	0	1	2	5	0	0	0	0	0	13	0	1	24	135.2
遺物不明	4O-41-1																			1	0.1

第６表　4O-Aブロック石材別石器組成表

石　材	石材	Kn	Po	Kp	Es	Ss	Gr	Dr	Pq	Rf	Uf	Bl	Ax	Hs	As	Uk	Fl	Ch	Co	合計	重量（g）
黒曜石Ａ	ObA								1								1			2	2.9
黒曜石Ｇ	ObG																1			1	0.2
頁岩Ｃ	ShC									1							3		1	5	20.5
頁岩Ｄ	ShD									1										1	5.1
チャート	Ch	1				1					5						8			15	106.5
合　計		1	0	0	0	1	0	0	1	2	5	0	0	0	0	0	13	0	1	24	135.2
遺物不明	4O-41-1																			1	0.1

定型の剥片を利用した、使用痕ある剥片である。鋭利な表面左側縁と裏面右側縁及び末端に刃こぼれが見られる。４は、チャートによる削器である。縦長剥片を素材として、左側縁全体に細かな剥離痕が連続している。５は、黒曜石Ａ類による楔形石器である。小型で厚手の剥片を素材として、素材剥片の打面を下端にあて、両極打撃がなされており、上端は著しく潰れている。表面左側面には、楔形石器特有の縦長の剥離面が見られる。６は、チャートによる中型不定型の剥片である。上下両端が欠損する。７は、頁岩Ｃ類による石核である。中型不定型の剥片を素材として、上端及び左側面を打面、主要剥離面を作業面にあてて、小型不定型の剥片が剥離されている。上端の打面は、素材剥片の打面側に新たに作られたものであるが、左側面の打面は、節理面ないしは角礫面がそのまま利用されている。

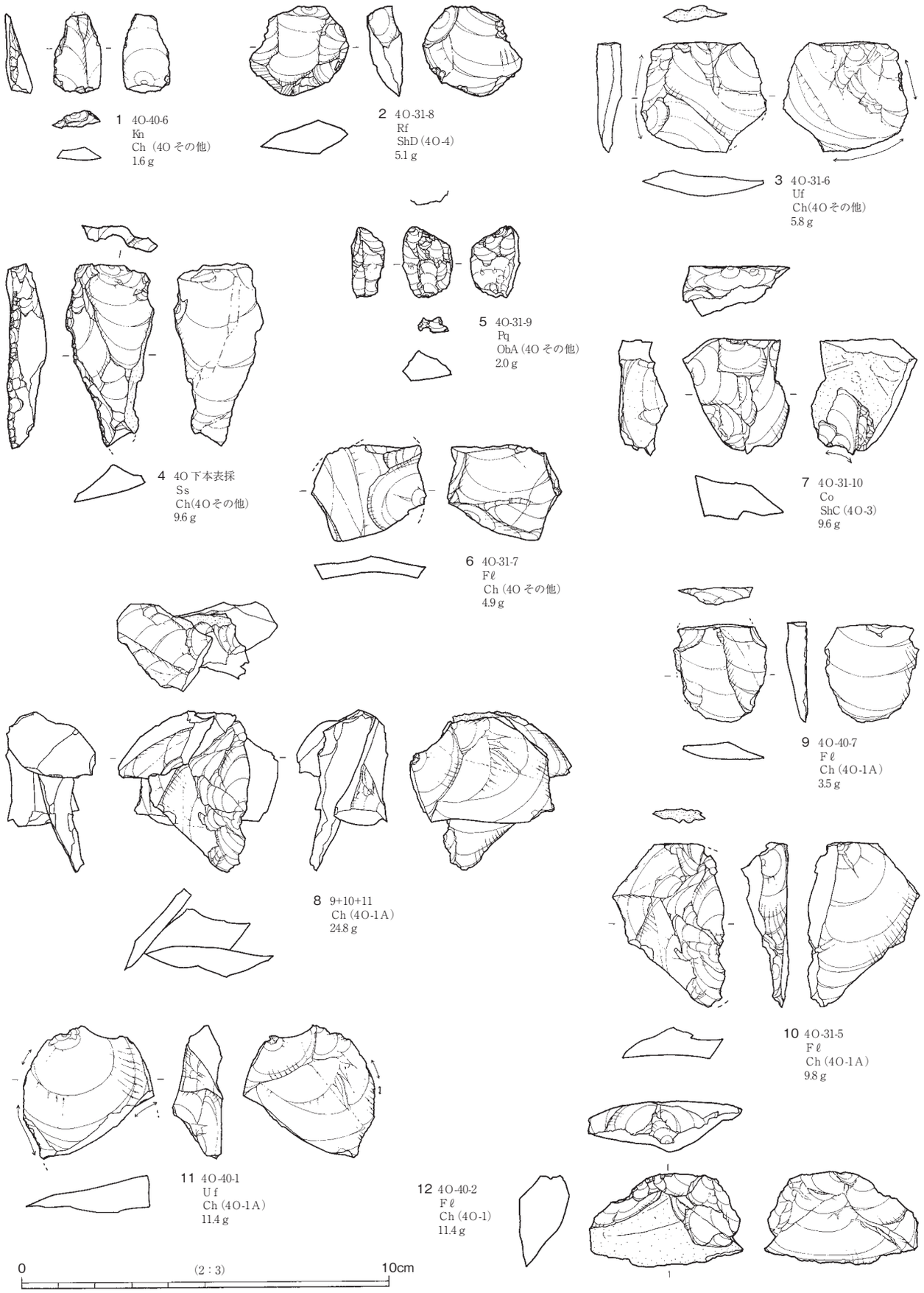
本ブロックで実測図を掲載しなかった資料は、黒曜石Ａ類１点、黒曜石Ｇ類１点、頁岩Ｃ類４点、チャート３点、合計９点であるが、いずれも小型不定型の剥片類である。

４）接合資料（第18図・第19図）

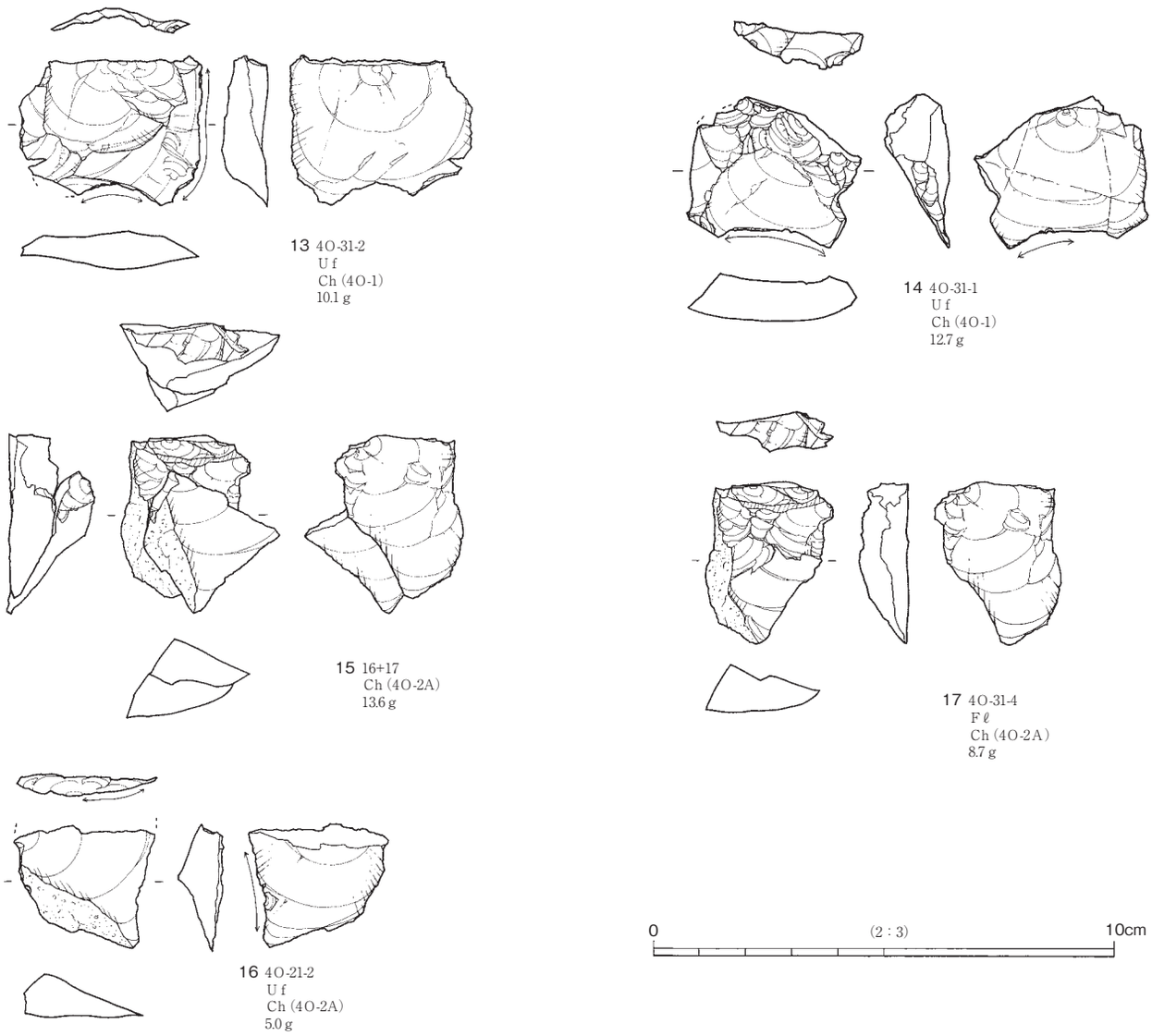
４O-１（チャート）：８は、中型不定型の剥片を利用した使用痕ある剥片１点（11）、中型不定型の剥片２点（９・10）の接合資料である（４O-１Ａ）。本資料から見た剥片剥離作業の手順は、以下のとおりである。

①接合図８の右側を打面、上面を作業面として、９を含む剥片が剥離される。

②接合図８の上面にある自然面を打面、表面を作業面として10＋11が剥離される。その後、10と11が表裏で二つに分かれる。10と11の分離が意図したものか、偶発的なものかは不明であるが、10の打瘤はきわめて平坦であることから、意図したものであれば、両極打撃による可能性がある。また、10は、11と分離した際に打点で二つに割れており、さらにその割れ面から表面左側に向けて剥離面が形成されている。



第18図　4O-Aブロック出土遺物実測図（1）



第19図　4O-Aブロック出土遺物実測図（２）

10を剥片としたが、加工痕ある剥片ないしは剥片素材の石核かもしれない。なお、11には、表面左側縁を中心として、刃こぼれが見られる。

12 ～ 14は、同一母岩の非接合資料である。調整加工はなされていないが、13・14には刃こぼれが見られる。

４O- ２（チャート）：15は、中型不定型の剥片を利用した使用痕ある剥片１点（16）と、剥片１点（17）の接合資料である（４O- ２A）。接合図15の上面を打面、表面を作業面として、16→17の順に連続して剥離している。

２．10Q-Aブロック（第20図～第22図、第７表・第８表、図版34）

１）概　要（第20図・第21図、第８表）

10Q-Aブロックは、遺跡中央部の９Q-98、10Q-08･19グリッドに位置し、標高24m～ 26mの台地上で、

北に向かう浅い谷の谷頭まで50mの距離に立地する。ブロックの規模は、長軸9.4m、短軸2.2mの帯状の範囲で、10点の石器・礫が散漫に分布する。出土層準は、立川ローム層Ⅸ層を中心として、0.3mの高低差をもって、地形に沿って包含されている。

石器組成は、ナイフ形石器１点、使用痕ある剥片１点、石刃３点、剥片３点、敲石１点、礫１点で、石器石材は、頁岩Ｄ類３点、凝灰岩４点、砂岩１点、ホルンフェルス１点、礫石材は、流紋岩１点である。出土資料は、全て製作痕跡のない搬入品で構成される。

２）母岩別資料（第７表）

本ブロックでは、石器９点の全てを８母岩に区分した（母岩識別率100％）。内訳は、頁岩Ｄ類２母岩（10Q-１・２：３点）、凝灰岩４母岩（10Q-３～６：４点）、砂岩１母岩（10Q-８：１点）、ホルンフェルス１母岩（10Q-７：１点）である。なお、礫１点も母岩番号を付した（R10Q-１：１点）。

10Q-１：明褐色を主体として、白色、明灰緑色の部分が混じる、硬質緻密で珪化度の高い頁岩Ｄ類である。搬入品と想定される中型の石刃２点（14.2ｇ）で構成される。

10Q-２：明褐色の部分と、灰色の部分とが斑になり、珪化してチャートに似た質感の頁岩Ｄ類である。中型不定型の剥片１点（18.3ｇ）の単独資料である。

10Q-３：自然面は暗緑色を呈し、磨滅した稜をもつ円礫面、内部は暗灰緑色から褐色にかけての色調で、珪化度が高い凝灰岩である。中型不定型の剥片を素材とするナイフ形石器１点（7.1ｇ）の単独資料である。

10Q-４：自然面は、わずかに緑がかった灰白色で、磨滅した稜をもつ円礫面、内部は灰緑色の地に、直径0.5㎜以下の夾雑物がわずかに含まれる凝灰岩である。節理面は、薄い褐色を呈する。中型で不整形の縦長剥片１点（10.5ｇ）の単独資料である。

10Q-５：灰緑色から褐色に漸移的に変化する色調の地に、黄白色の縞が入る凝灰岩である。小型不定型の剥片１点（3.4ｇ）の単独資料である。

10Q-６：明灰緑色を呈する珪化度の高い凝灰岩である。中型不整形の縦長剥片を利用した使用痕ある剥片１点（26.6ｇ）の単独資料である。

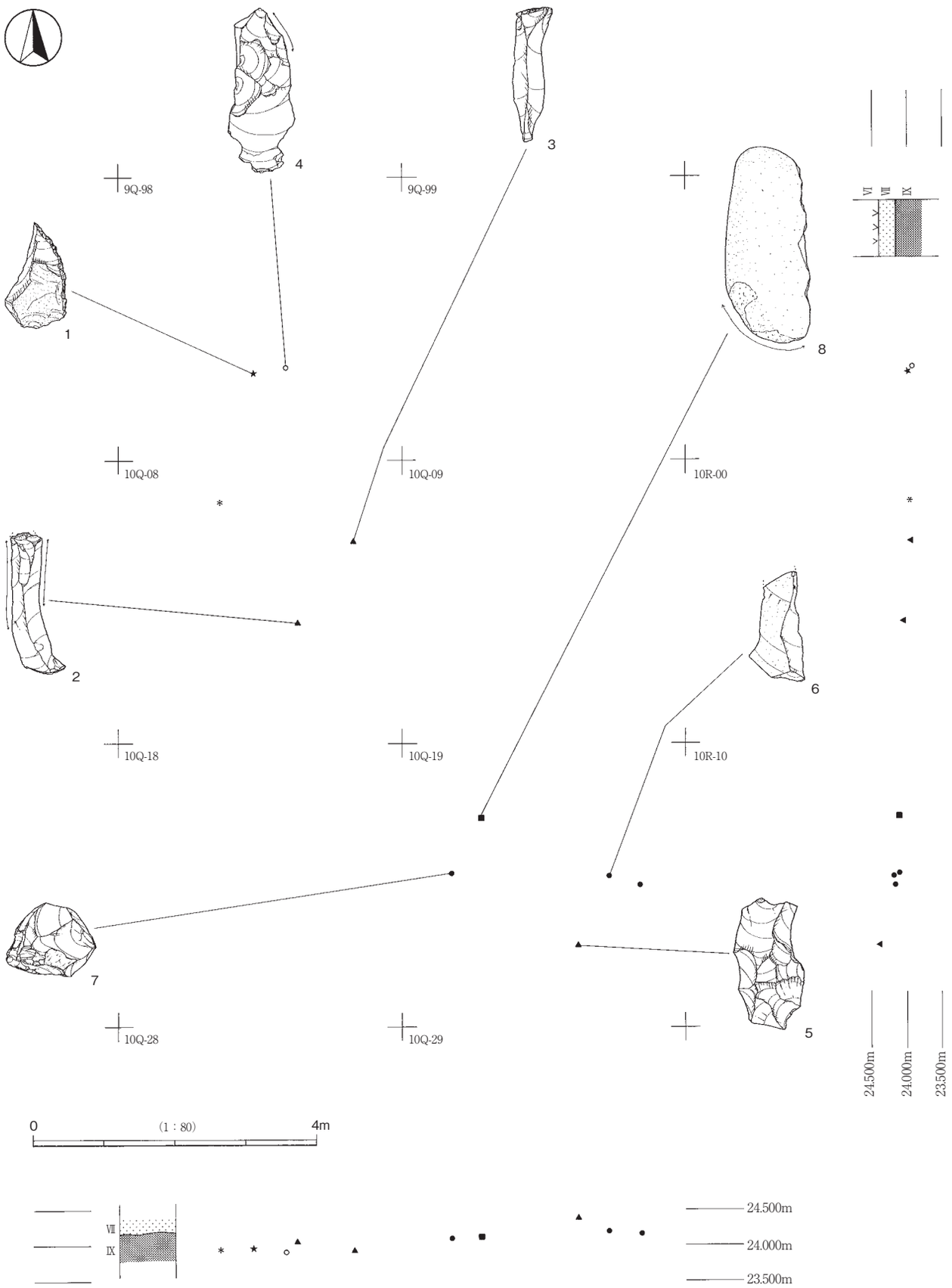
10Q-７：黒灰色を呈する砂岩質のホルンフェルスである。中型の石刃１点（17.7ｇ）の単独資料である。

10Q-８：自然面は滑らかな円礫面で、内外とも黒灰色の砂岩である。原石は、９㎝×５㎝×2.5㎝程度と想定される。半分ほど欠損した敲石１点（142.2ｇ）の単独資料である。

R10Q-１：緑色がかった淡灰褐色を呈する流紋岩で、9.5㎝×５㎝×2.5㎝の扁平な完形の円礫である（148.9ｇ）。潰れや擦痕等の使用痕、被熱による変色や割れは見られない。

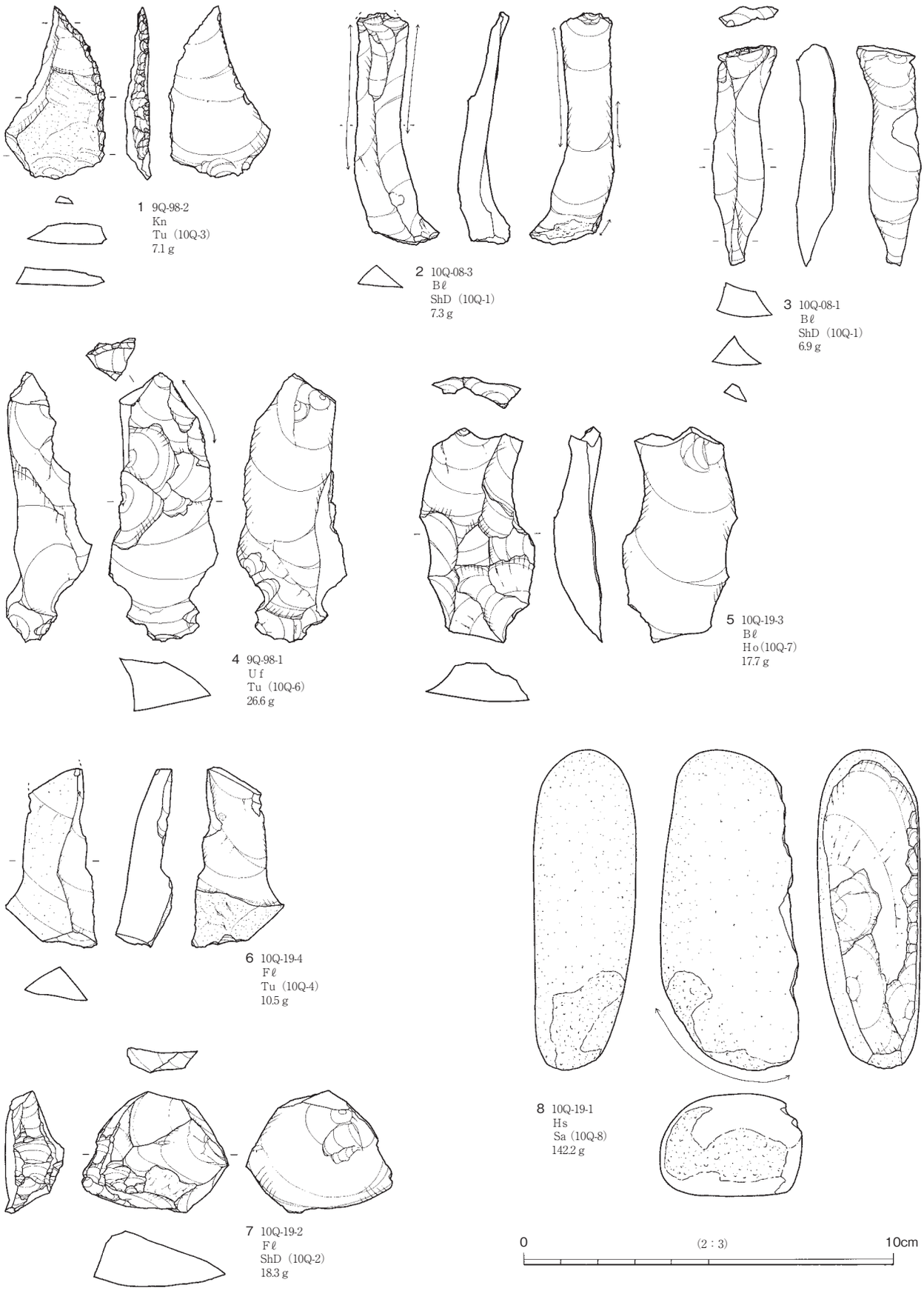
３）出土遺物（第22図）

１は、凝灰岩による１側縁調整のナイフ形石器である。中型不定型の剥片を素材として、素材の打面側を先端部にあてて、裏面からの細かな調整剥離によって製作されている。斜め整形の場合、先端部周辺は、打瘤を反映して厚くなる傾向にあるが、本資料は薄く仕上げられている。加工量が多く、打面から打瘤までの部分が、きれいに除去されたものと考えられる。２、３は頁岩Ｄ類による中型細身の石刃で、同一母岩と判断した。３は、平坦な１枚の剥離面による打面で、作業面上端には頭部調整が見られる。表面の剥離面は、全て裏面（主要剥離面）と同一方向であるが、２の表面には反対方向の剥離面もあり、両設打面の石核から剥離された可能性が高い。４は、凝灰岩による使用痕ある剥片である。中型不整形の縦長剥片を利用しており、右側縁上部に刃こぼれが見られる。実測図の表面と左側面には、長軸に直交する方向で



第20図　10Q-Aブロック出土遺物分布図（1）－石器別分布図－

第21図　10Q-Aブロック出土遺物分布図（２）－石材別分布図－



第22図　10Q-Aブロック出土遺物実測図

第７表　10Q-Aブロック母岩別石器組成表

母岩番号	石材	Kn	Po	Kp	Es	Ss	Gr	Dr	Pq	Rf	Uf	Bl	Ax	Hs	As	Uk	Fl	Ch	Co	合計	重量（g）
10Q-1	ShD											2								2	14.2
10Q-2	ShD																1			1	18.3
10Q-3	Tu	1																		1	7.1
10Q-4	Tu																1			1	10.5
10Q-5	Tu																1			1	3.4
10Q-6	Tu										1									1	26.6
10Q-7	Ho											1								1	17.7
10Q-8	Sa													1						1	142.2
合　　計		1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3	0	1	0	0	3	0	0	9	240.0

第８表　10Q-Aブロック石材別石器組成表

石　　材	石材	Kn	Po	Kp	Es	Ss	Gr	Dr	Pq	Rf	Uf	Bl	Ax	Hs	As	Uk	Fl	Ch	Co	合計	重量（g）
頁岩Ｄ	ShD											2					1			3	32.5
凝灰岩	Tu	1									1						2			4	47.6
砂岩	Sa													1						1	142.2
ホルンフェルス	Ho											1								1	17.7
合　　計		1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3	0	1	0	0	3	0	0	9	240.0

交互剥離があり、石刃技法の稜形成剥片（クロステッドフレイク）に似る。５は、ホルンフェルスによる中型幅広の石刃とした資料である。表面下半部に多方向からの剥離面が見られることから、石刃技法による作業面には、そぐわないようにも見えるが、主要剥離面と同一打面による上半部の剥離面が下半部の剥離面を切っていることから、下半部の剥離面は石核整形段階のものかもしれない。６は、凝灰岩による縦長剥片である。裏面には、ウートラパッセ（自然面の部分）が見られる。打面周辺は欠損する。７は、頁岩Ｄ類による不定型厚手の剥片である。左側面や下端部などに多方向からの剥離面が見られることから、打面、作業面の転移が頻繁な石核から剥離されたと考えられる。８は、砂岩による敲石である。表面下端に使用による潰れ（敲打痕）がある。また、右側面の割れ面にも、使用によると想定される細かな剥離面が見られる。

３．14Q-Aブロック（第23図～第28図、第９表・第10表、図版34 ～図版35）

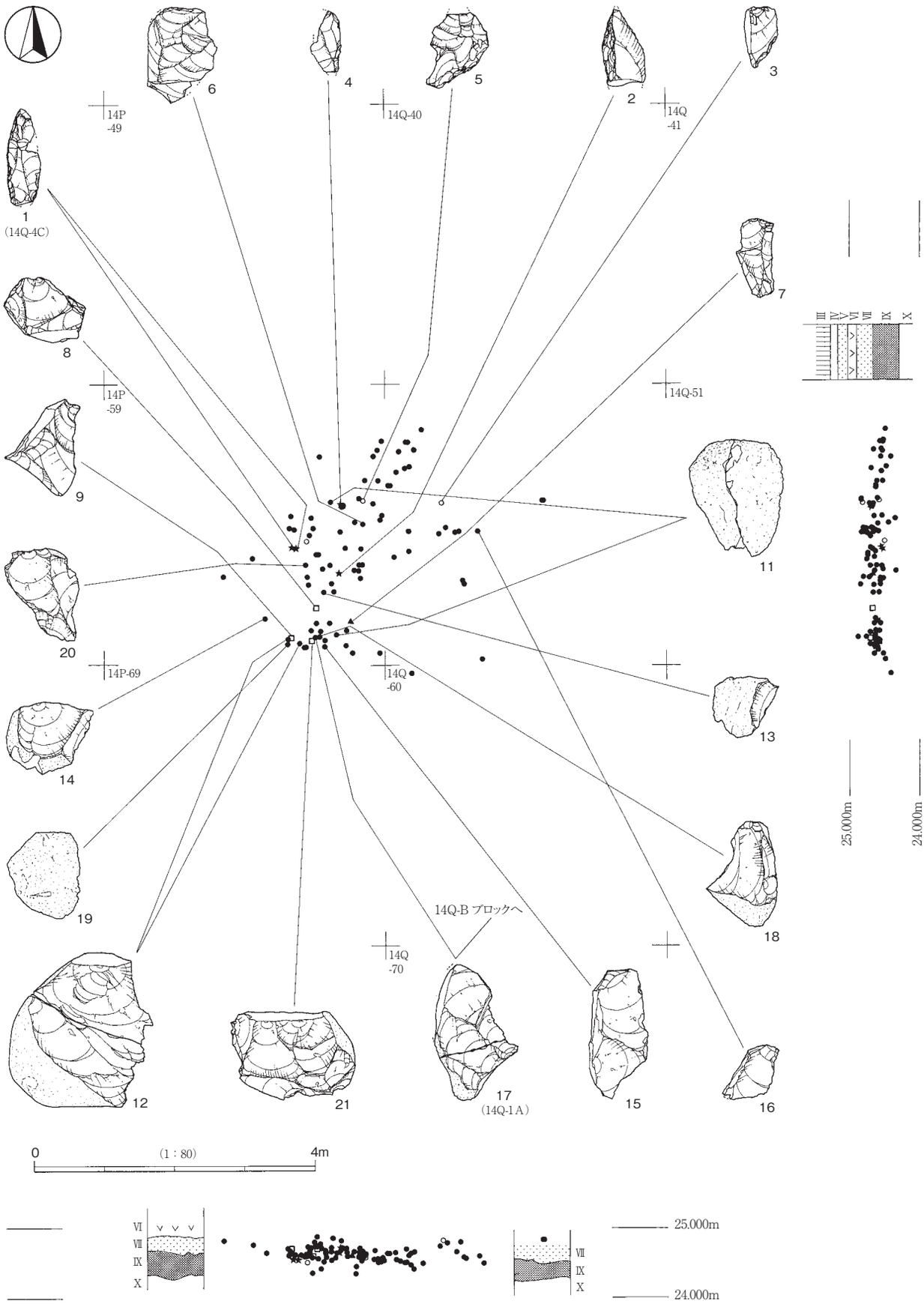
１）概　要（第23図・第24図、第10表）

14Q-Aブロックは、遺跡南部の14Ｐ-59、14Q-50・60グリッドに位置し、標高26m～ 28mの台地平坦面に立地する。ブロックの規模は、長軸4.7m、短軸3.8mの略円形の範囲で、96点の石器が分布する。出土層準は、立川ローム層Ⅸ層上部からⅦ層にかけてで、0.5mの高低差をもって、地形に沿って包含されている。

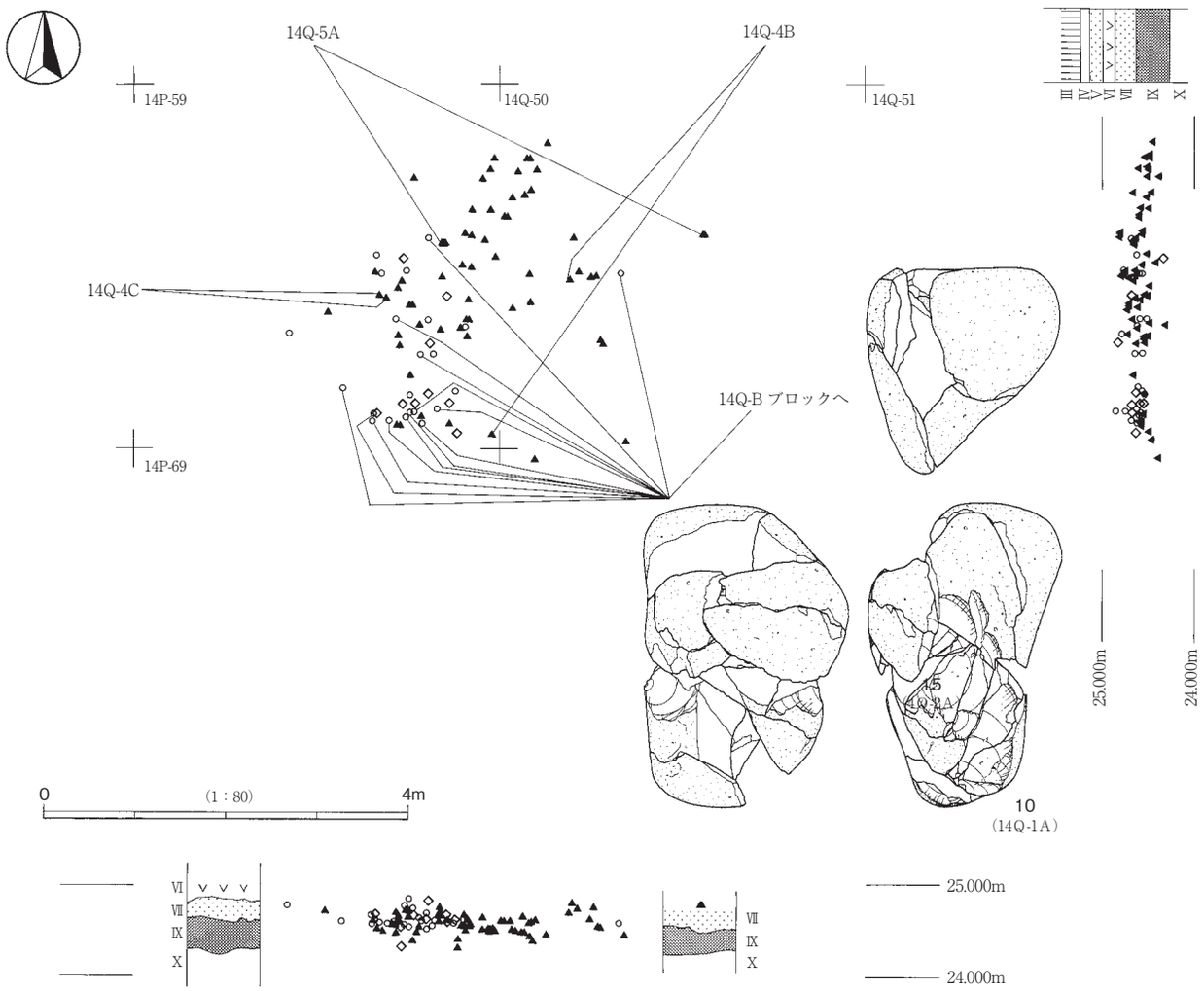
石器組成は、ナイフ形石器４点（接合して３個体）、加工痕ある剥片３点、石刃１点、剥片85点、石核３点、石器石材は、安山岩22点、トロトロ石９点、流紋岩65点である。石材別の分布状況は、ブロックの北半分に流紋岩、南西部に安山岩がまとまっている。

２）母岩別資料（第９表）

本ブロックでは、96点のうち77点を３母岩に区分した（母岩識別率80％）。内訳は、安山岩１母岩（14Q-１：13点）、流紋岩２母岩（14Q-２・３：64点）である。この他、母岩分類できなかった資料に、安



第23図　14Q-Aブロック出土遺物分布図（1）－石器別分布図－



第24図　14Q-Aブロック出土遺物分布図（２）－石材別分布図－

山岩９点（27.4ｇ）、トロトロ石９点（48.0ｇ）、流紋岩１点（0.1ｇ）がある。また、14Q-１母岩と14Q-４母岩は、隣接する14Q-Bブロックと接合関係がある。

14Q-１：自然面は、灰褐色で紙やすり状の円礫面、内部はやや青みがかった灰褐色で、直径１㎜ほどの夾雑物を多く含む安山岩である。原石は､資料の接合によって､10㎝×８㎝×６㎝に復元される。本資料は、欠落部分はあるものの、原石から最終状態の石核に至るまでの各工程のものが残されている。中・小型不定型の剥片12点（接合して10個体）、石核１点、合計13点（366.7ｇ）で構成され、全てが接合する（14Q-１A）。また、14Q-Bブロックに分布する剥片１点が接合する（破片のため、接合しても剥片の個体数は10個体）。

本母岩の分布は、剥片、石核を含む11点が本ブロック南西部の直径1.5mの範囲にまとまっており、それ以外に剥片２点がブロック東側と中央北寄りに位置する。本ブロック内の資料については、長軸3.4m、短軸2.0mの範囲に全て分布する。また、剥片１点が14Q-Bブロック北西部の、安山岩が密集する部分に分布しており、本母岩の集中する範囲の中央部分からは８m離れている。

14Q-４：自然面は黄白色の細かな痘痕状の窪みがある円礫面で、内部は灰白色を呈し、直径が１㎜～３

㎜の夾雑物を多く含む流紋岩である。風化によって、かなり軟質、脆弱になっている。石器群の大半は、小型不定型の剥片であり、軟質のため破損が著しい。これに、縦長剥片や不定型の剥片を素材とするナイフ形石器や剥片素材の石核が加わるが、原石の全体像は不明である。

本母岩は、ナイフ形石器４点、加工痕ある剥片１点、剥片48点、石核１点、合計54点（96.8ｇ）で構成される。接合資料は、小型不定型の剥片２点が表裏で接合するもの（14Q-４B：接合距離1.9m）、ナイフ形石器の破片同士が接合して１個体になるもの（14Q-C：接合距離0.1m）がある。なお、14Q-Bブロックに同一母岩が37点分布する。

14Q-５：橙色がかった黄白色を呈し、直径１㎜～２㎜の夾雑物を多く含む流紋岩である。14Q-４母岩に似るが、本母岩の方が風化による軟質度が少ない。小型不定型の剥片による石器群で、加工痕ある剥片２点、剥片８点の合計10点（16.2ｇ）で構成される。接合資料は、小型不定型の剥片２点が表裏で接合するもの（14Q-５A）があり、接合距離は2.9mである。

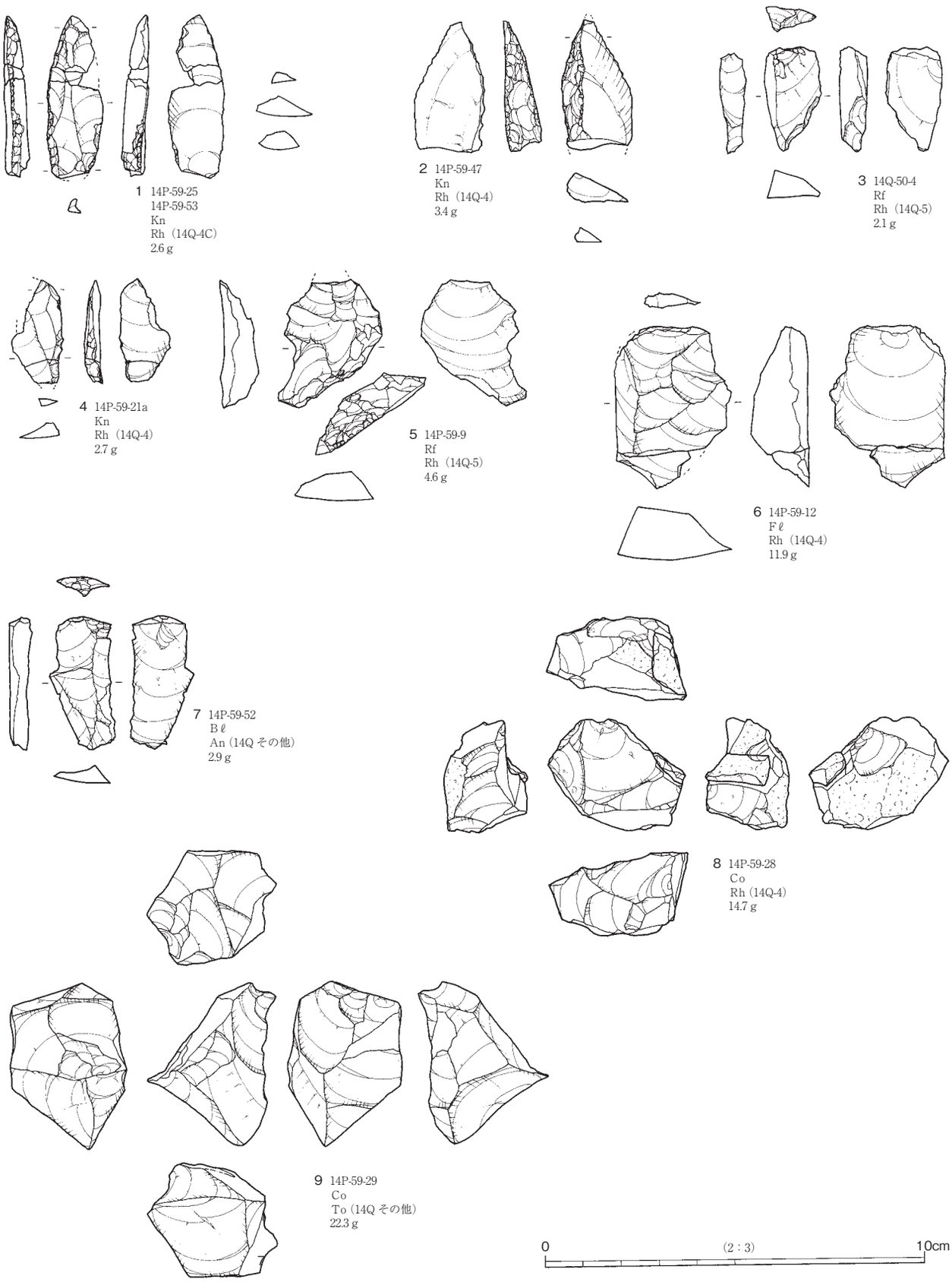
３）出土遺物（第25図）

１は、流紋岩によるナイフ形石器である。中型の石刃を素材として、素材打面を基部にあてて、左側縁全体と右側縁の基部寄りに、裏面から調整加工がなされている。両側縁に調整加工がされているが、石器の長軸と素材の長軸が一致していること、左側縁の調整加工が著しく小さいことなどから、基部調整のナイフ形石器に分類した。石器の表面は、主要剥離面と同一方向の剥離面で構成される。なお、本ブロック及び隣接する14Q-Bブロックには、同一母岩（14Q-４母岩）が多量に分布するが、石刃に関連した資料は、本資料と４のナイフ形石器の２個体にすぎない。２も流紋岩によるナイフ形石器である。横長剥片を素材として、素材剥片の打面側１側縁に調整加工がなされている。調整加工は表裏両面から細かくなされており、裏面と背部との成す角度は直角に近い。１・４のナイフ形石器と同一母岩である。４は、流紋岩による小型の石刃を素材とするナイフ形石器である。表面右側縁の下部には、ナイフ形石器特有の調整加工（ブランティング）が見られるが、左側縁上半部には調査時の新たな欠損がある。詳細は不明であるが、調整加工が部分的であることから、未成品の可能性もある。１と同様、石器の表面は主要剥離面と同一方向の剥離面で構成されており、単設打面の石核から剥離された石刃が素材と考えられる。

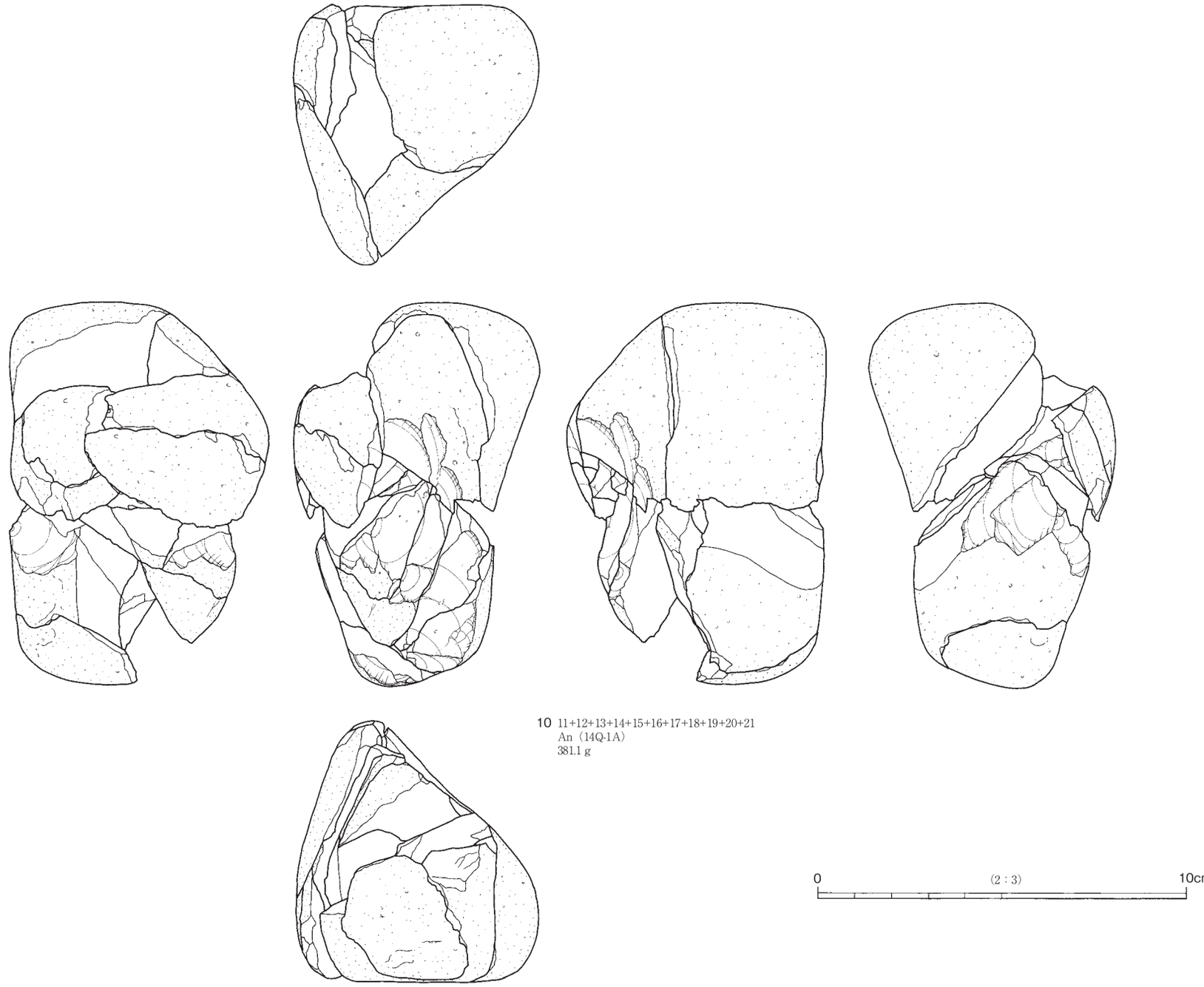
３は、流紋岩による加工痕ある剥片である。剥離時に打点で二つに割れた小型不定型の剥片の一方を素材として、表面右側縁に調整加工がなされている。錐状石器とすべきかもしれない。５も流紋岩による加工痕ある剥片である。小型不定型の剥片を素材として、末端部に裏面から細かな調整加工がなされている。調整加工の中央部は、ノッチ状に深く抉り込まれている。３と５は、同一母岩と考えられる。６は、流紋岩による中型不定型の剥片である。８は、流紋岩による分割礫を素材とする小型の石核である。打面と作業面を頻繁に入れ替えながら、小型不定型の剥片が剥離されている。ナイフ形石器１・２・４及び剥片６とは、同一母岩である。７は、安山岩による石刃である。打面の直下には細かな剥離面が連続しており、頭部調整と考えられる。表面は、全て主要剥離面と同一方向からの剥離面に覆われている。９は、トロトロ石による石核である。８と同様、分割礫を素材として、打面と作業面を頻繁に入れ替えながら小型の剥片が剥離されている。

４）接合資料（第26図～第28図）

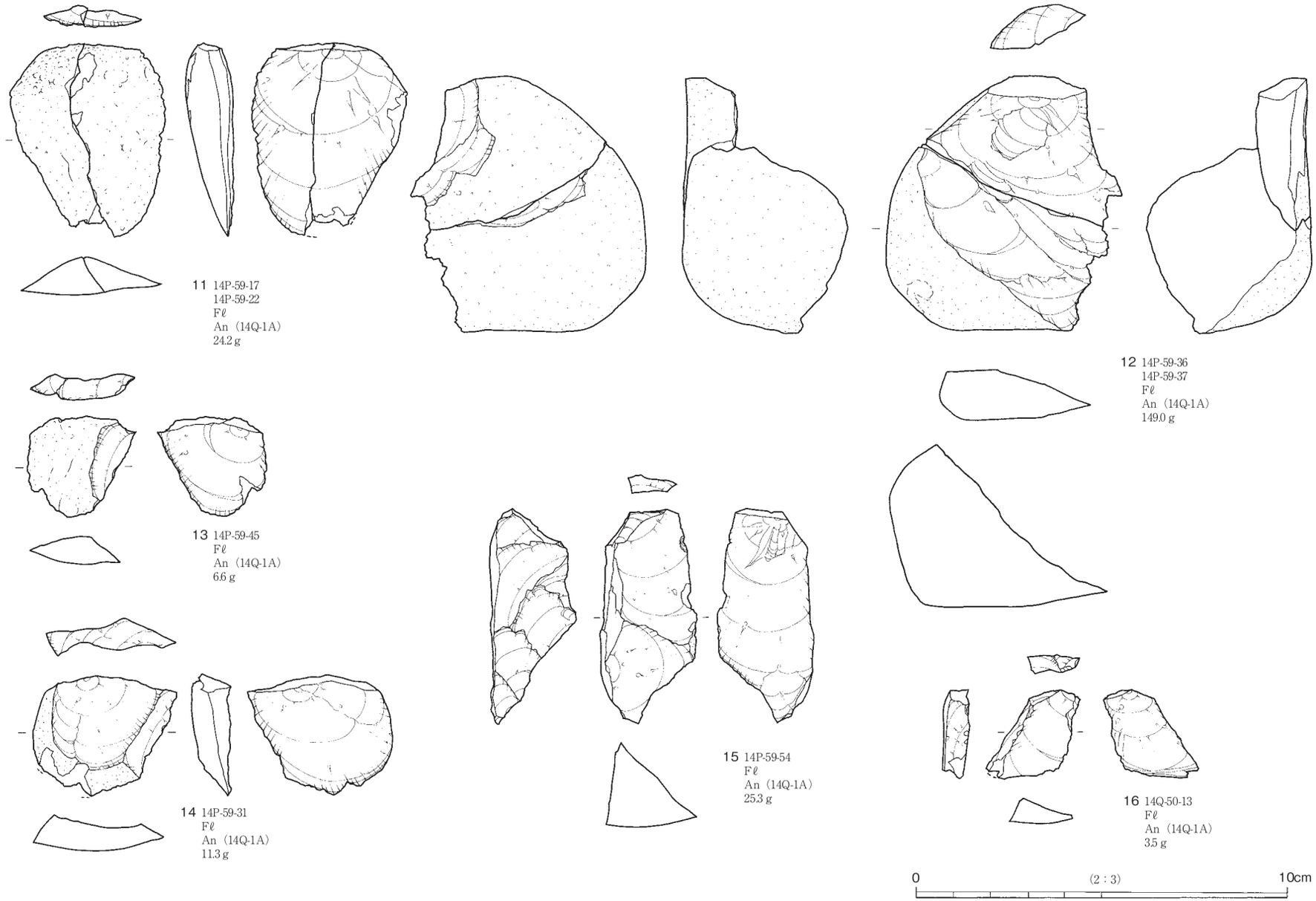
14Q-１A（安山岩）：10は、剥片13点（接合して10個体：11～20）と石核１点（21）の接合資料で、原石の形状がわかる良好な資料である。本資料から見た作業手順は、以下のとおりである。



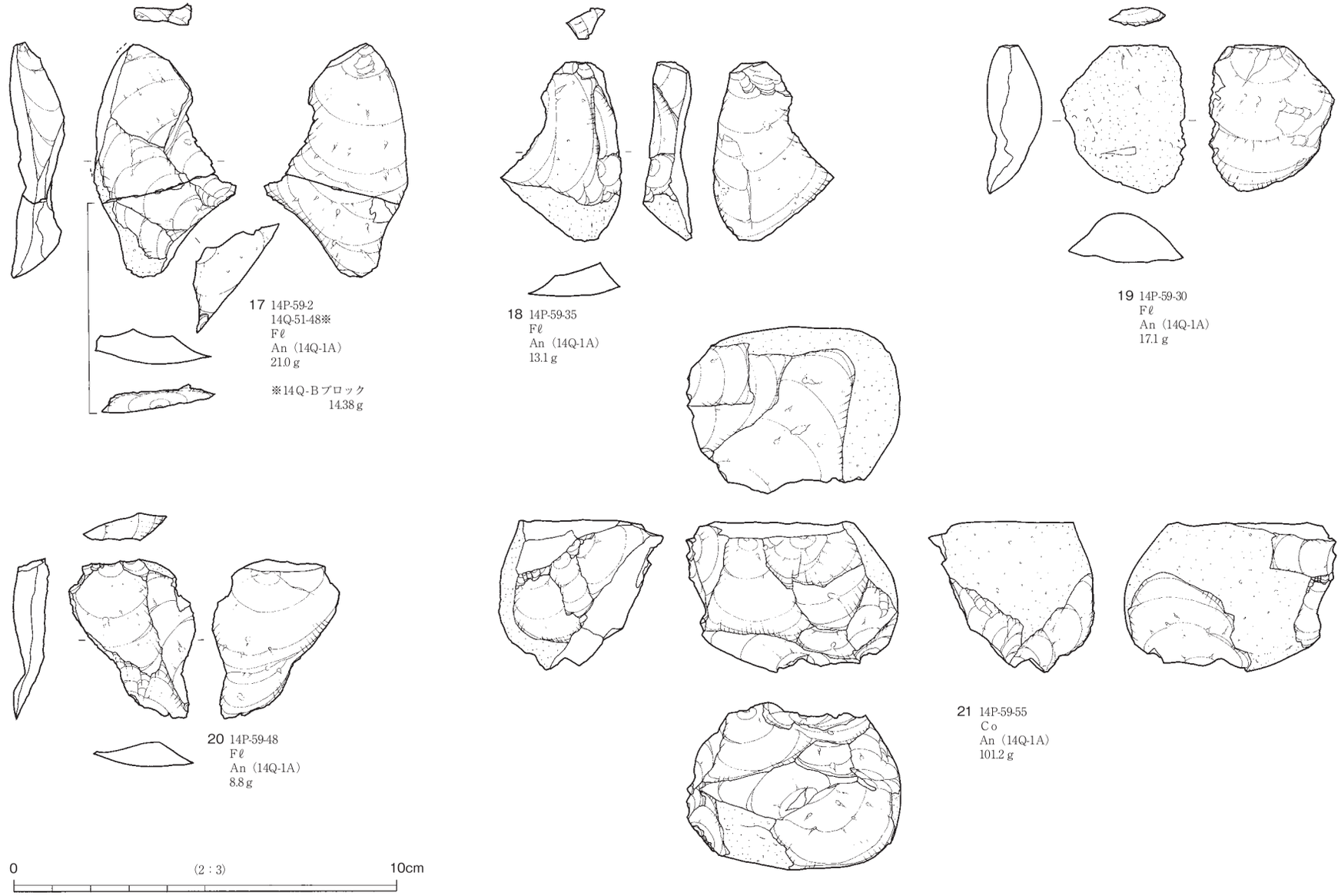
第25図　14Q-Aブロック出土遺物実測図（1）



第26図　14Q-Aブロック出土遺物実測図（2）



第27図　14Q-Aブロック出土遺物実測図（3）



第28図　14Q-Aブロック出土遺物実測図（4）

第９表　14Q-Aブロック母岩別石器組成表

母岩番号	石材	Kn	Po	Kp	Es	Ss	Gr	Dr	Pq	Rf	Uf	Bl	Ax	Hs	As	Uk	Fl	Ch	Co	合計	重量（g）
14Q-1	An																12		1	13	366.7
14Q-4	Rh	4								1							48		1	54	96.8
14Q-5	Rh									2							8			10	16.2
14Q-その他	An											1					8			9	27.4
14Q-その他	To																8		1	9	48.0
14Q-その他	Rh																1			1	0.1
合　　計		4	0	0	0	0	0	0	0	3	0	1	0	0	0	0	85	0	3	96	555.2

第10表　14Q-Aブロック石材別石器組成表

石　　材	石材	Kn	Po	Kp	Es	Ss	Gr	Dr	Pq	Rf	Uf	Bl	Ax	Hs	As	Uk	Fl	Ch	Co	合計	重量（g）
安山岩	An											1					20		1	22	394.1
トロトロ石	To																8		1	9	48.0
流紋岩	Rh	4								3							57		1	65	113.1
合　　計		4	0	0	0	0	0	0	0	3	0	1	0	0	0	0	85	0	3	96	555.2

①10cm×８cm×６cmの円礫を石核の素材とする。
②接合図10の左側面を打面、表面を作業面として、剥片が剥離される。
③接合図10の表面（②で形成された剥離面）を打面、左側面を作業面として、11を含む剥片が剥離される。
④接合図10の左側面（③で形成された剥離面）を打面、表面～右側面・上面を作業面として、12を含む剥片が剥離される（12を剥離した後の資料は、大幅に欠落する）。
⑤接合図10の上面（④で形成された剥離面）を打面、左側面を作業面として、13、14を含む剥片が剥離される。
⑥接合図10の表面を打面、左側面～上面を作業面として、15、16を含む剥片が剥離される。
⑦接合図10の裏面～上面を打面、上面～表面・左側面を作業面として、17、18が剥離される。この作業では、作業面が⑥と共通するが、打面の位置を上下逆にしている。
⑧接合図10の表面下端を打面、下面を作業面として、19が剥離される。
⑨接合図10の右側面～上面（④で形成された剥離面）を打面、表面を作業面として、20が剥離される。10の右側面下部、裏面下部、左側面下部にかけての範囲は、剥片剥離作業面がほとんど及ばず、自然面が残されている。

４．14Q-Bブロック（第29図～第33図、第11表・第12表、図版35～図版36）

１）概　要（第29図・第30図、第12表）

14Q-Bブロックは、遺跡南部の14Q-51・52・71～73グリッドに位置し、標高26m～28mの台地平坦面に立地する。ブロックの規模は、長軸7.4m、短軸5.4mの楕円形の範囲で、95点の石器が分布する。ブロックの形状を細かく見ると、ブロックの西側に直径２m程の密集部があり、東に向かって緩やかに広がっている。出土層準は、立川ローム層Ⅸ層上部からⅦ層にかけてで、0.5mの高低差をもって、地形に沿って包含されている。

石器組成は、ナイフ形石器４点、楔形石器１点、加工痕ある剥片３点、使用痕ある剥片１点、石刃２点、剥片69点、砕片10点、石核５点、石器石材は、安山岩19点、トロトロ石27点、流紋岩38点、頁岩Ｃ類４点、頁岩Ｄ類３点、チャート１点、ホルンフェルス３点である。石材別分布は、安山岩、トロトロ石、流紋岩がブロック西側の密集部に集中し、頁岩Ｃ・Ｄ類、チャート、ホルンフェルスなど、数量の少ない石材がブロック東側に散漫に分布する。

２）母岩別資料（第11表）

本ブロックでは、95点のうち55点を15母岩に区分した（母岩識別率58％）。内訳は、安山岩３母岩（14Q-１～３：７点）、流紋岩２母岩（14Q-４・６：37点）、頁岩Ｃ類４母岩（14Q-７～10：４点）、頁岩Ｄ類２母岩（14Q-11・12：３点）、チャート１母岩（14Q-13：１点）、ホルンフェルス３母岩（14Q-14～16：３点）である。この他、母岩分類できなかった資料に、安山岩12点（13.1ｇ）、トロトロ石27点（99.8ｇ）、流紋岩１点（0.2ｇ）がある。

14Q-１：自然面は、灰褐色で紙やすり状の円礫面、内部はやや青みがかった灰褐色で、直径１㎜ほどの夾雑物を多く含む安山岩である。本ブロックでは、剥片１点（欠損品：14.4ｇ）の単独資料であるが、14Q-Aブロックに剥片12点、石核１点が分布しており、本ブロックの資料を含めて全てが接合する（14Q-１Ａ）。同一母岩の分布状況は、14Q-Aブロックで記したとおりである。

14Q-２：自然面は、灰褐色で紙やすり状の円礫面、内部も灰褐色で、直径0.5㎜ほどの夾雑物が散在する安山岩である。大型厚手の剥片を素材とする石核から剥片生産がなされた資料で、小型の縦長剥片３点、打面再生によって生じた小型不定型の剥片１点、剥片素材の石核１点、合計５点（39.2ｇ）で構成される（14Q-２Ａ）。小型のナイフ形石器や剥片の中に、本母岩の可能性が高い資料も見られるが、接合資料に限って同一母岩とした。

本母岩の分布状況は、ブロック北西部の長軸3.3m、短軸0.6mの長楕円形の範囲に点在する。

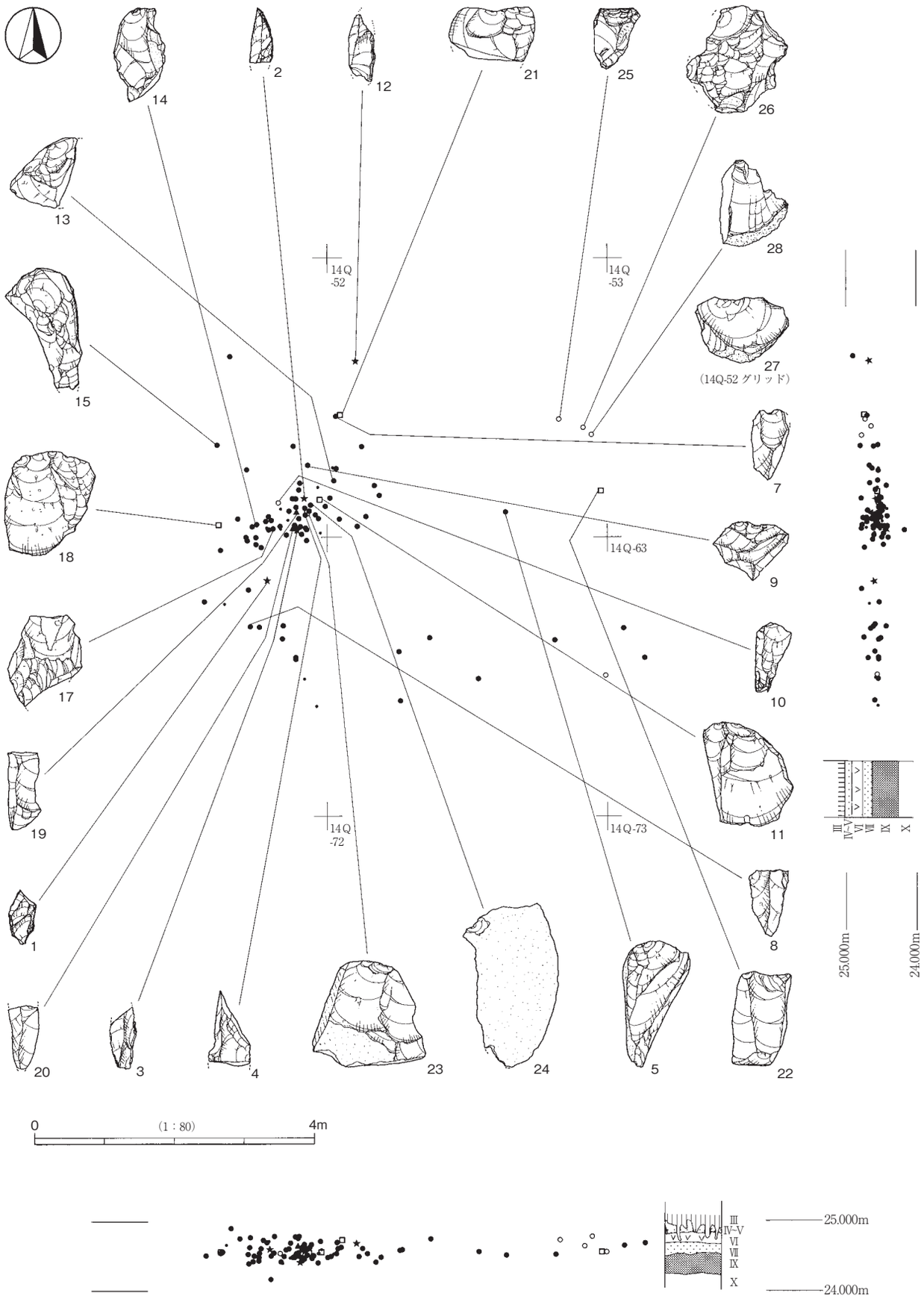
14Q-３：自然面は、青みがかった灰褐色で紙やすり状の円礫面、内部は灰褐色の地に黒灰色の細い縞が平行して多数入り、直径0.5㎜～１㎜の白色の夾雑物を多く含む安山岩である。中型不定型の剥片１点（21.4ｇ）の単独資料である。

14Q-４：自然面は、黄白色を呈し、細かな痘痕状の窪みがある円礫面、内部は灰白色で、直径１㎜～３㎜の夾雑物を多く含む流紋岩である。風化によって、かなり軟質、脆弱になっている。中型不定型の剥片を素材とするナイフ形石器１点、中・小型不定型の剥片31点、砕片３点、石核１点、合計36点（106.3ｇ）で構成される。本母岩は、隣接する14Q-Aブロックに、ナイフ形石器、剥片類、石核等合計54点が分布するが、両ブロックともに接合資料が少ないため、細かな状況は不明である。

接合資料には、中型不定型の剥片１点と石核１点によるものがあり（14Q-４Ａ）、両者はブロックの北西部に分布する。接合距離は0.8mと近い。

14Q-６：自然面は、黄白色を呈し、細かな痘痕状の窪みがある円礫面、内部は灰白色で、直径１㎜～３㎜の夾雑物を多く含む流紋岩である。14Q-４母岩に類似するが、本母岩の方が堅くしまった質感があり、脆弱さは見られない。本来、14Q-４母岩と同一母岩で、埋没過程における条件の違いによって質感に違いがでたのかもしれない。中型不定型の剥片１点（4.9ｇ）の単独資料である。

14Q-７：紫がかった灰色の地に、灰白色の平行する縞が多数入る頁岩Ｃ類（嶺岡産頁岩）である。よく珪化しており、チャートに近い質感である。中型厚手の剥片を素材とする加工痕ある剥片１点（36.1ｇ）



第29図　14Q-Bブロック出土遺物分布図（1）－石器別分布図－

の単独資料である。

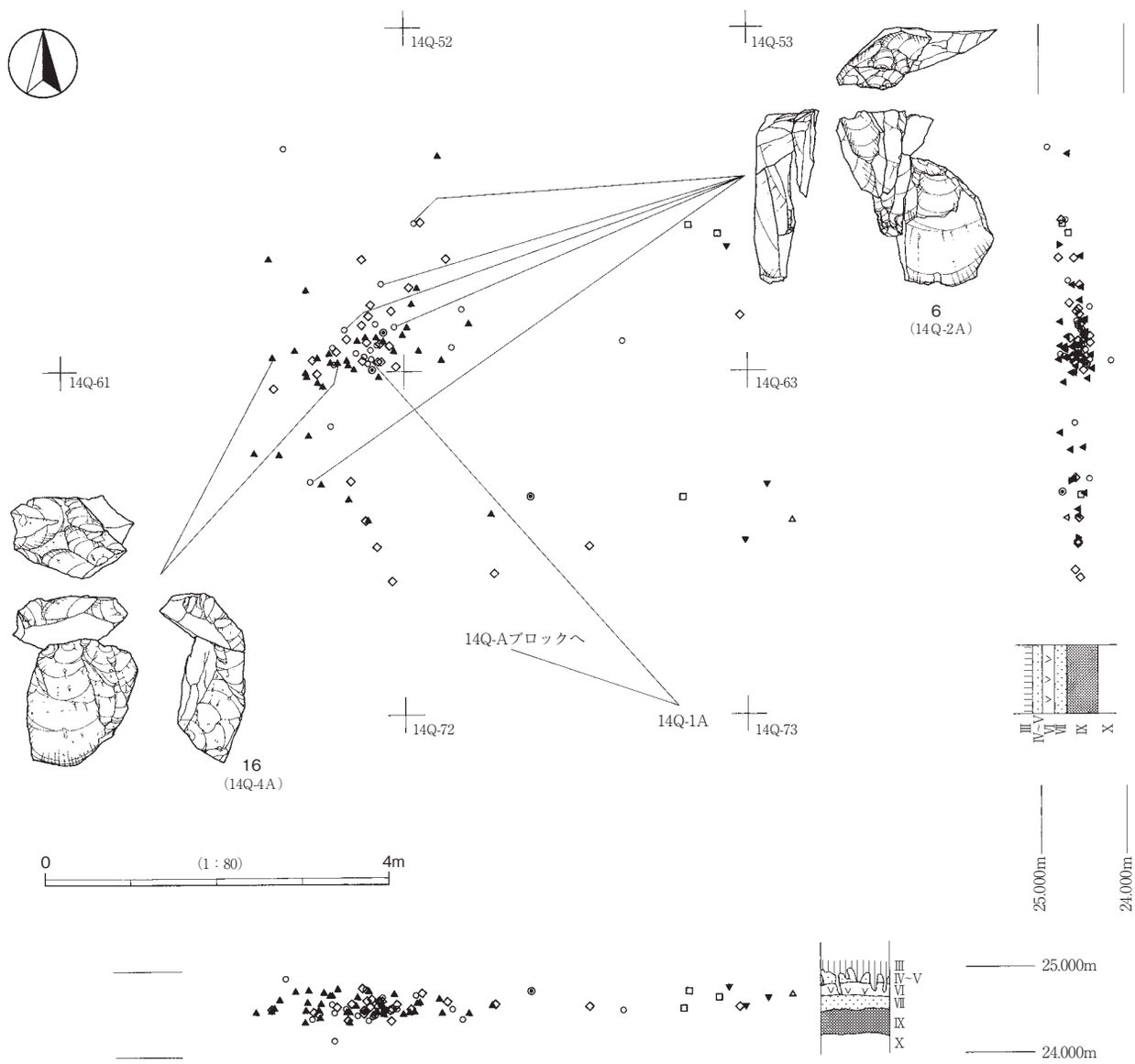
14Q- 8：褐色がかった灰色の地に、暗紫色の細かな斑が散在する頁岩Ｃ類（嶺岡産頁岩）である。よく珪化しており、チャートに近い質感である。小型の楔形石器１点（5.7ｇ）の単独資料である。

14Q- 9：被熱により、自然面は赤褐色、内部は黄褐色に変色した頁岩Ｃ類（嶺岡産頁岩）と推定される石材である。中型不定型の剥片１点（7.6ｇ）の単独資料である。

14Q-10：灰色の部分と灰白色の部分とがあり、紫がかった暗灰色の縞が入る頁岩Ｃ類（嶺岡産頁岩）である。よく珪化しており、チャートに近い質感である。小型不定型の剥片１点（0.4ｇ）の単独資料である。

14Q-11：白色と明黄褐色の部分がある頁岩Ｄ類である。いずれにも薄い同心円状の細い縞があり、ノジュールと考えられる。小型不定型の剥片の末端に、大きさの揃った細かな剥離痕が連続する、加工痕ある剥片１点（1.2ｇ）の単独資料である。

14Q-12：自然面は、明黄褐色で、細かな凹凸のある円礫面、内部は灰色の地に紫がかった暗灰色の縞が入る珪化した部分と、明黄褐色の節理とがある頁岩Ｄ類である。中型不定型の剥片を素材とした使用痕あ



第30図　14Q-Ｂブロック出土遺物分布図（２）－石材別分布図－

る剥片１点、小型の剥片１点（破片）、合計２点（11.6ｇ）で構成される。

14Q-13：全体に灰白色を呈するが、やや青みがかった部分と褐色がかった部分とがあるチャートである。珪化した頁岩や玉髄にも似る。小型不定型の剥片１点（破片：1.3ｇ）の単独資料である。

14Q-14：自然面は、風化により脆弱となり、部分的に剥落していることから、詳細は不明である。灰白色を呈する大型の円礫面、内部は、灰色の地に暗灰色の縞が入る砂岩質のホルンフェルスである。大型不定型の剥片１点（19.0ｇ）の単独資料である。

14Q-15：自然面は、灰白色で浅い爪痕状の傷と痘痕状の小さな窪みがある円礫面、内部は灰色を呈する砂岩質のホルンフェルスである。小型不定型の剥片１点（3.4ｇ）の単独資料である。

14Q-16：黒灰色を呈する砂岩質のホルンフェルスで、石斧に利用されることの多い石材である。小型不定型の剥片１点（4.1ｇ）の単独資料である。

３）出土遺物（第31図～第33図）

１は、安山岩によるナイフ形石器である。小型不定型の剥片を素材として、表面右側縁及び上端にある素材打面やその周辺をそのまま残して、末端部（左側縁）に細かな調整加工が施されている。「Ⅳ下・Ⅴ層」の切出形のナイフ形石器に類似した作り方である。２も安山岩によるナイフ形石器である。小型の縦長剥片を素材とし、右側縁に調整加工がなされている。下端にある表面側からの調整加工（稜上調整）は、下端の折れ面や、折れ面の可能性がある表面左側の剥離面を切っていることから、再加工による完成品と見るべきかも知れない。３も安山岩による小型のナイフ形石器である。小型で薄手の縦長剥片を素材として、素材の打面を基部にあてて、右側縁の基部寄りに調整加工がなされている。左側縁の微細な剥離面も調整加工の可能性がある。上半部は欠損する。４は、安山岩による横長剥片である。なお、１と４は、後述する接合資料６の打面再生剥片及びそれを素材とするナイフ形石器、２、３は作業面から剥離された小型の縦長剥片を素材とするナイフ形石器と推定され、いずれも14Q-２母岩の可能性がある。

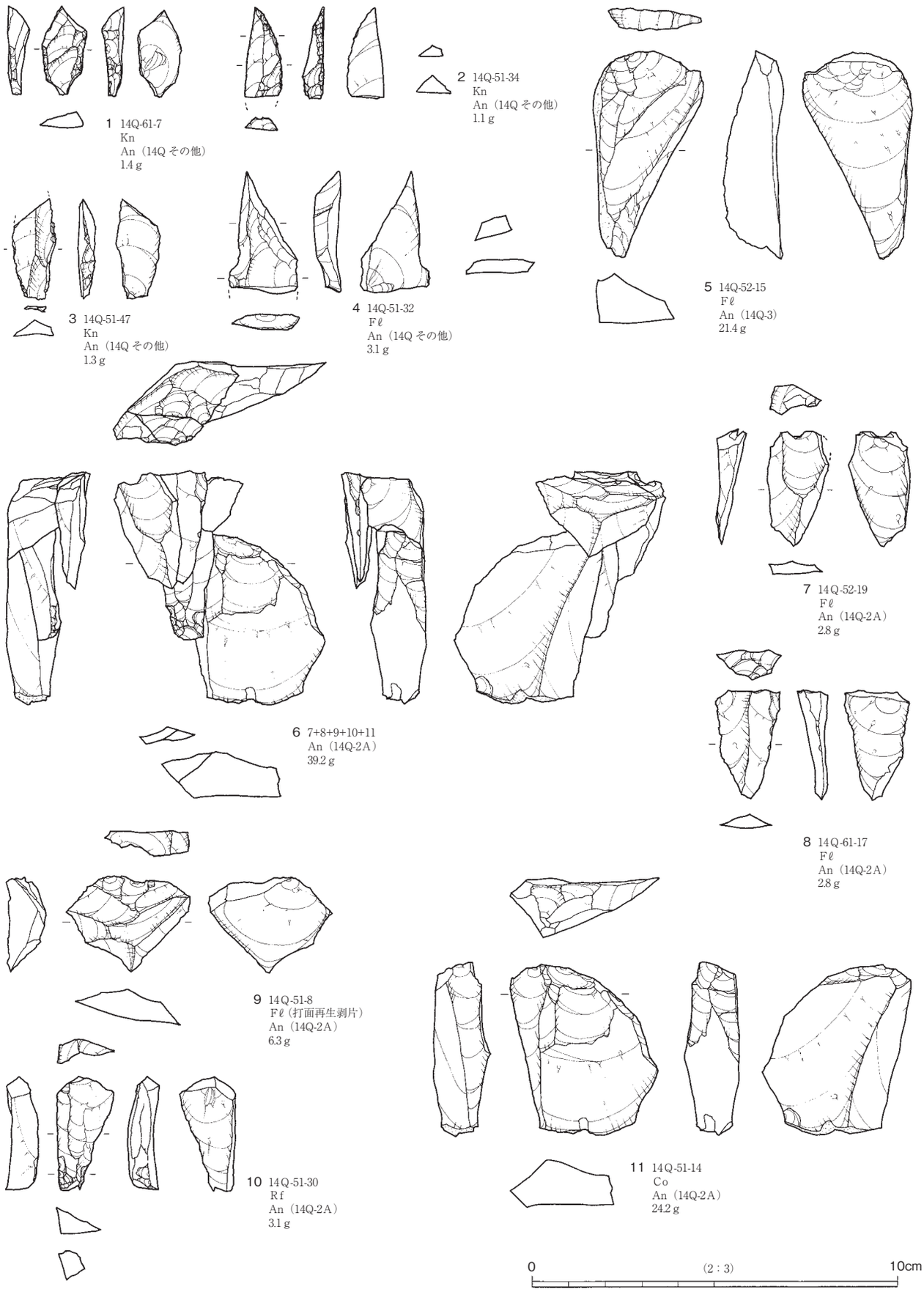
12～15は、流紋岩による石器群で、15以外は14Q-４母岩に帰属する。12は、不定型の剥片を素材とするナイフ形石器である。素材剥片の打面部に、裏面から急角度の調整加工がなされている。上下両端は欠損する。13～15は、中型不定型の剥片である。

19～23は、トロトロ石による石器群である。19・20は小型の石刃、21～23は石核である。21は、中型不定型の剥片を素材として、表面と上面とで交互剥離がなされ、小型不定型の剥片が剥離されている。22は、中型の縦長剥片（ないしは石刃）を剥離した石核である。左側面は、ポジティブな剥離面で、素材時の主要剥離面（あるいは分割面）と考えられる。実測図の裏面は節理面である。23は、中型不定型の剥片を素材とする石核で、末端の小口部分から小振りの縦長剥片（ないしは石刃）が剥離されている。

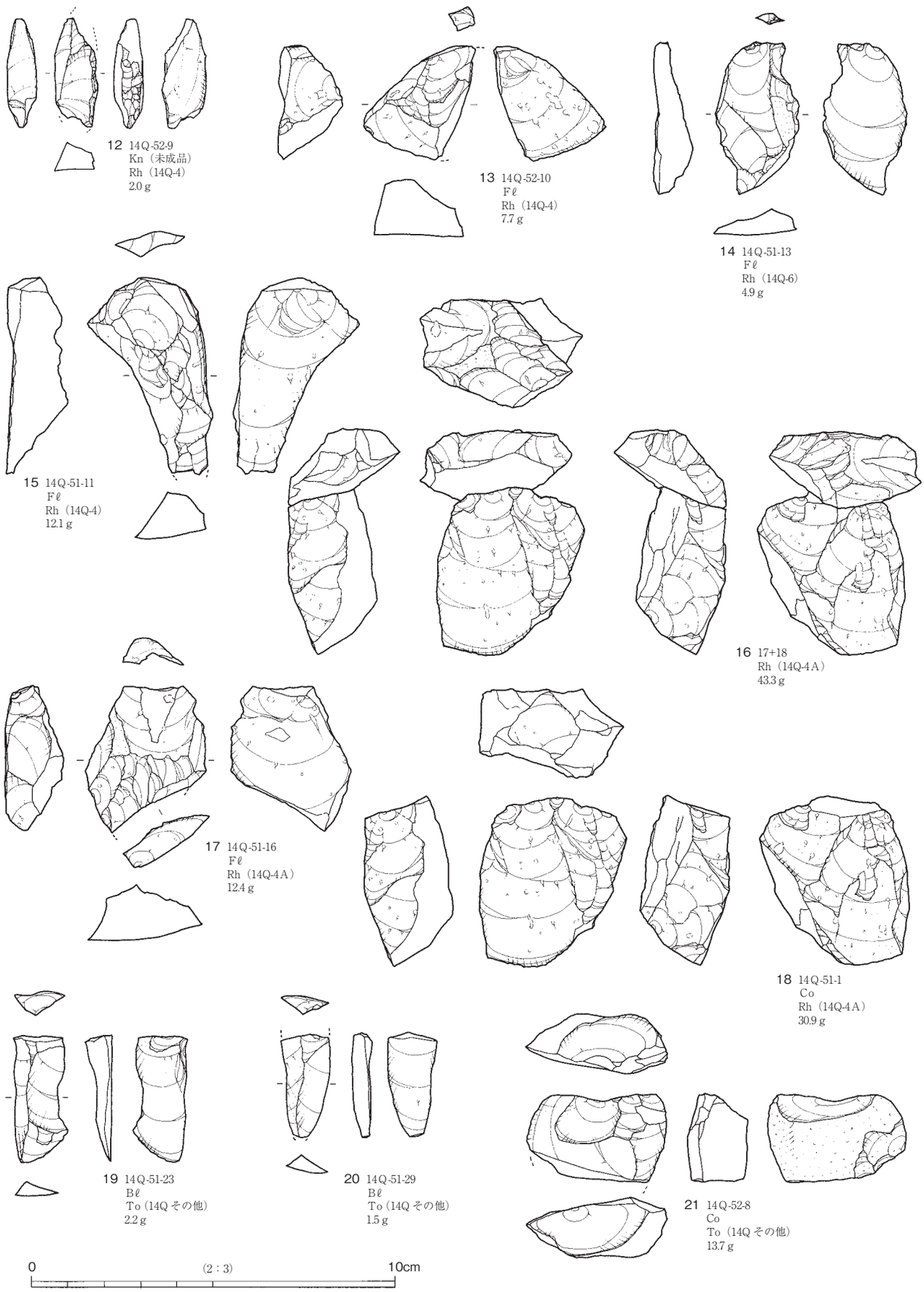
24は、ホルンフェルスによる中型不定型の剥片、25～27は頁岩Ｃ類による楔形石器及び不定型の剥片類、28は頁岩Ｄ類による使用痕ある剥片である。28には小型の剥片（破片）の同一母岩が１点見られるが、それ以外はいずれも単独母岩である。

４）接合資料（第31図・第32図）

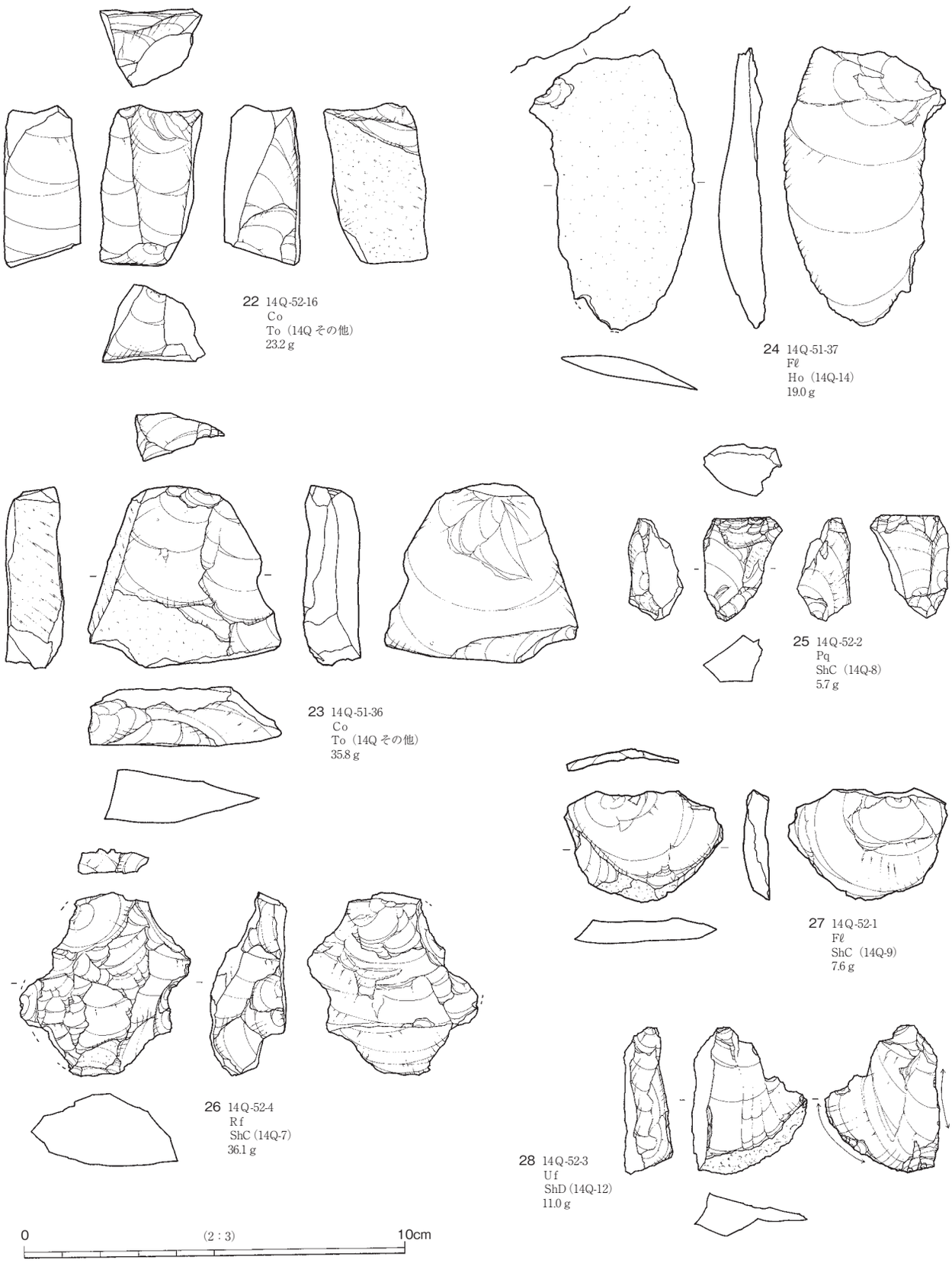
14Q-２Ａ（安山岩）：６は、小型の縦長剥片を素材とする加工痕ある剥片１点（10）、縦長剥片２点（７・８）、打面再生剥片１点（９）、剥片素材の石核１点（11）で構成される。この資料は、大型厚手の剥片を石核の素材とし、幅の狭い小口部分を作業面として、小型の縦長剥片（小型の石刃とすべきか）が剥離される内容である。細かな作業手順は、以下のとおりである。



第31図　14Q-Bブロック出土遺物実測図（1）



第32図　14Q-Bブロック出土遺物実測図（2）



第33図　14Q-Bブロック出土遺物実測図（3）

第11表　14Q-Bブロック母岩別石器組成表

母岩番号	石材	Kn	Po	Kp	Es	Ss	Gr	Dr	Pq	Rf	Uf	Bl	Ax	Hs	As	Uk	Fl	Ch	Co	合計	重量（g）
14Q-1	An																1			1	14.4
14Q-2	An									1							3		1	5	39.2
14Q-3	An																1			1	21.4
14Q-4	Rh	1															31	3	1	36	106.3
14Q-6	Rh																1			1	4.9
14Q-7	ShC									1										1	36.1
14Q-8	ShC								1											1	5.7
14Q-9	ShC																1			1	7.6
14Q-10	ShC																1			1	0.4
14Q-11	ShD									1										1	1.2
14Q-12	ShD										1						1			2	11.6
14Q-13	Ch																1			1	1.3
14Q-14	Ho																1			1	19.0
14Q-15	Ho																1			1	3.4
14Q-16	Ho																1			1	4.1
14Q-その他	An	3															8	1		12	13.1
14Q-その他	To											2					16	6	3	27	99.8
14Q-その他	Rh																1			1	0.2
合　　計		4	0	0	0	0	0	0	1	3	1	2	0	0	0	0	69	10	5	95	389.7

第12表　14Q-Bブロック石材別石器組成表

石　　材	石材	Kn	Po	Kp	Es	Ss	Gr	Dr	Pq	Rf	Uf	Bl	Ax	Hs	As	Uk	Fl	Ch	Co	合計	重量（g）
安山岩	An	3								1							13	1	1	19	88.1
トロトロ石	To											2					16	6	3	27	99.8
流紋岩	Rh	1															33	3	1	38	111.4
頁岩Ｃ	ShC								1	1							2			4	49.8
頁岩Ｄ	ShD									1	1						1			3	12.8
チャート	Ch																1			1	1.3
ホルンフェルス	Ho																3			3	26.5
合　　計		4	0	0	0	0	0	0	1	3	1	2	0	0	0	0	69	10	5	95	389.7

①大型厚手の剥片を石核の素材とする。接合図６の表面下部に広く残る剥離面は、素材時の主要剥離面である。

②接合図６の表面側から上面（素材時の打面側）に向けて剥片剥離が行われ、打面が設定される。

③接合図６の上面を打面、左側面を作業面として、小型の縦長剥片７、８が剥離される。

④接合図６の表面を打面、上面を作業面として、小型不定型の剥片９が剥離される。これは、打面再生剥片と考えられる。

⑤接合図６の上面を打面、左側面を作業面として、小型の縦長剥片が剥離され、その末端に調整加工がなされる（10）。

14Q-４A（流紋岩）：16は、中型不定型の剥片（17）と石核（18）の接合資料である。打面と作業面が頻繁に入れ替えられて、各所から中・小型不定型の剥片が剥離されている。なお、同一母岩に複数の石核が含まれることから、18も厚手の剥片ないしは分割礫を素材とする可能性が高いが、素材時の剥離面は不明である。

第３文化層

本文化層は、切出形のナイフ形石器と厚手の掻器等を指標とする石器群で、立川ローム層Ⅴ層からⅢ層下部にかけて包含される。９L-A・B・C、９M-A、15R-B・C、17R-Aブロックが該当する。

１．９L-Aブロック（第34図～第36図、第13表・第14表、図版44）

１）概　要（第34図・第35図、第14表）

９L-Aブロックは、遺跡中央西側の９L-08・18グリッドに位置し、標高22m～24mの台地上で、北東へ向かう浅い谷まで50mほどの地点に立地する。ブロックの規模は、長軸3.0m、短軸1.0mの楕円形の範囲で、３点の石器が分布する。出土層準は、立川ローム層Ⅳ・Ⅴ層を中心とし、ほぼ水平に包含されている。

石器組成は、加工痕ある剥片１点、使用痕ある剥片１点、敲石１点で、石器石材は、安山岩２点、チャート１点である。

２）母岩別資料（第13表）

本ブロックでは、３点のうち２点を２母岩に区分した（母岩識別率は67%）。内訳は、安山岩１母岩（９L-８：１点）、チャート１母岩（９L-６：１点）である。この他に、母岩分類できなかった資料に、チャート１点（8.3ｇ）がある。

９L-６：暗灰緑色の部分と灰白色の部分とが斑になるチャートである。中型不定型の剥片を素材とする加工痕ある剥片１点（14.5ｇ）の単独資料である。

９L-８：暗褐色の地に、直径１㎜～３㎜ほどの白色の夾雑物を多量に含む安山岩である。きめが粗く、剥片石器には不向きな石質である。12㎝×７㎝×６㎝の円礫で、敲打痕、摩耗痕等の使用痕は不明瞭であるが、全体の形状から敲石に分類した（575ｇ）。

３）出土遺物（第36図）

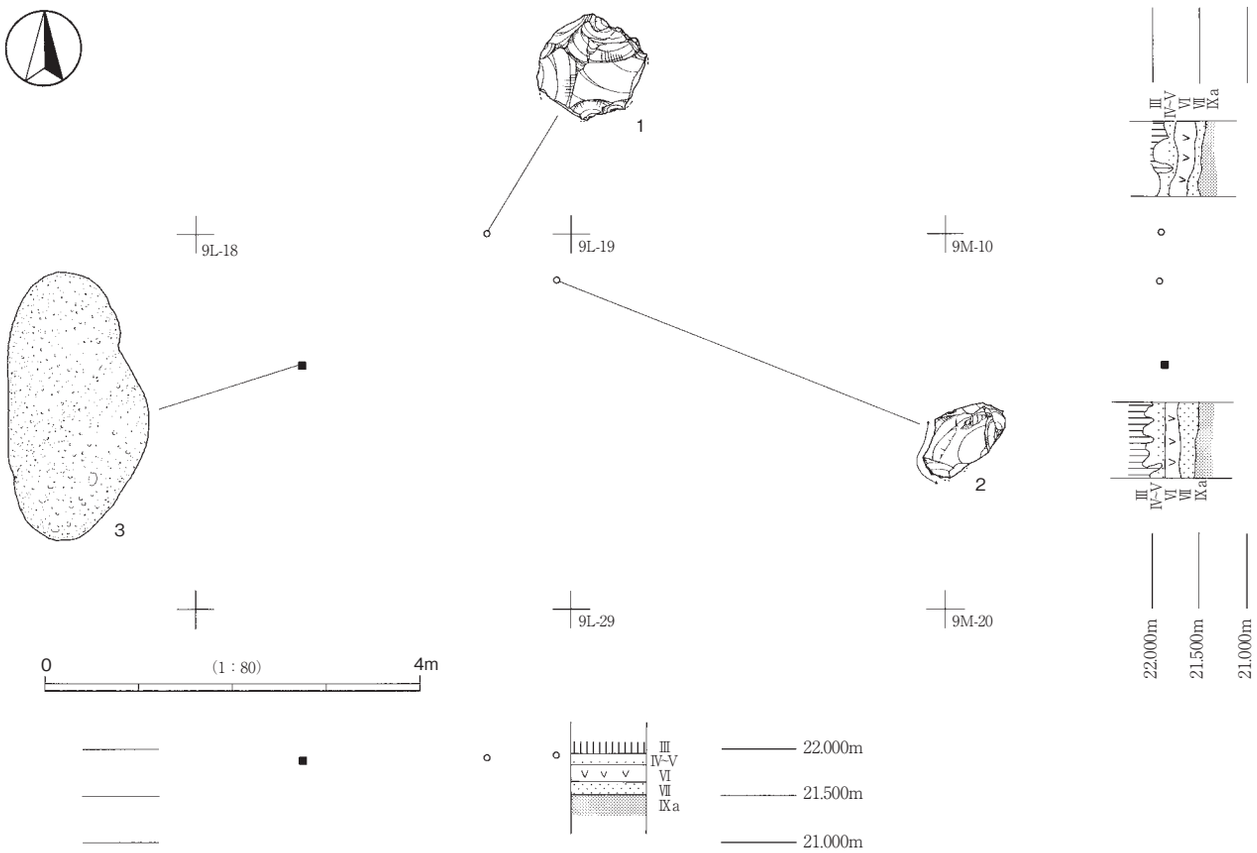
１は、チャートによる加工痕ある剥片である。表面が多方向からの剥離面によって構成される不定型の剥片を素材として、表面の右上部及び下端には、急角度で粗い剥離痕が見られる。一方、裏面の右側縁に

第13表　9L-Aブロック母岩別石器組成表

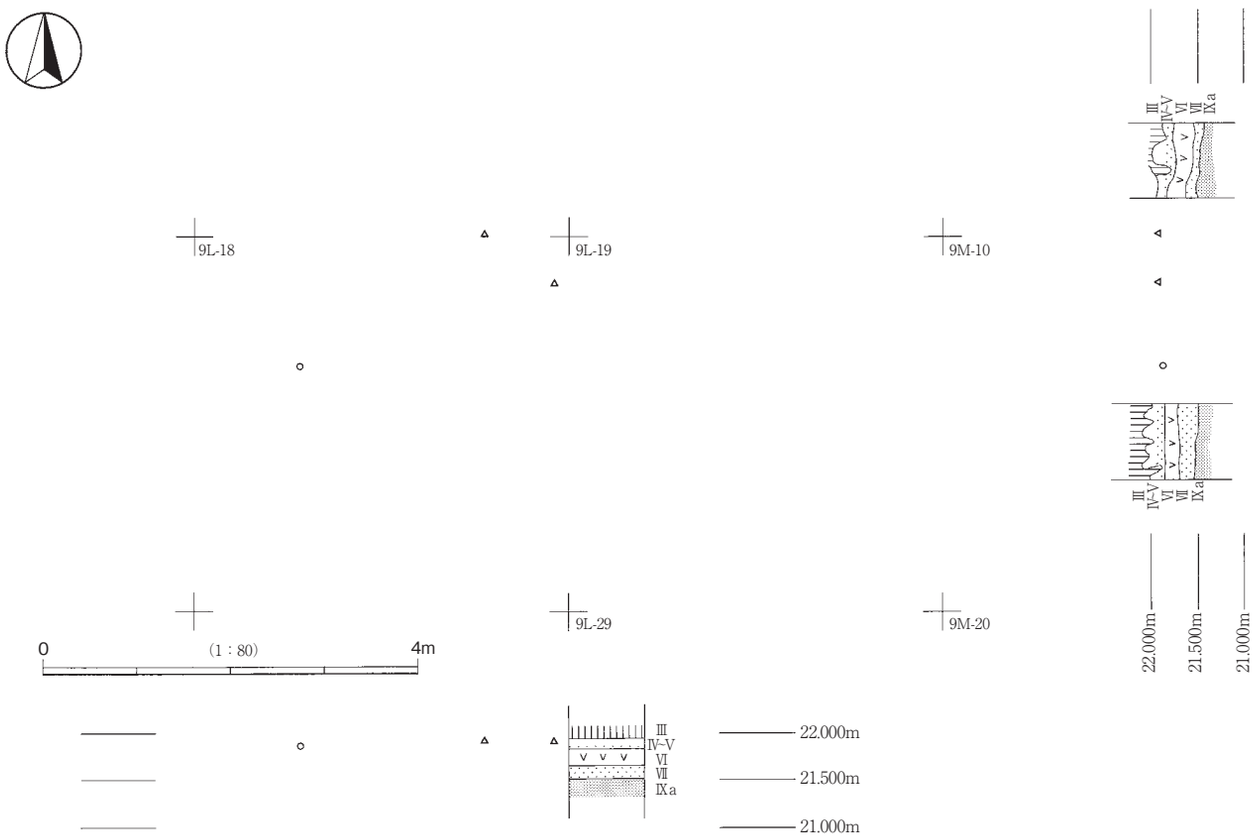
母岩番号	石材	Kn	Po	Kp	Es	Ss	Gr	Dr	Pq	Rf	Uf	Bl	Ax	Hs	As	Uk	Fl	Ch	Co	合計	重量（ｇ）
9L-6	Ch									1										1	14.5
9L-8	An													1						1	575.0
9L-その他	Ch										1									1	8.3
合　計		0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0	3	597.8

第14表　9L-Aブロック石材別石器組成表

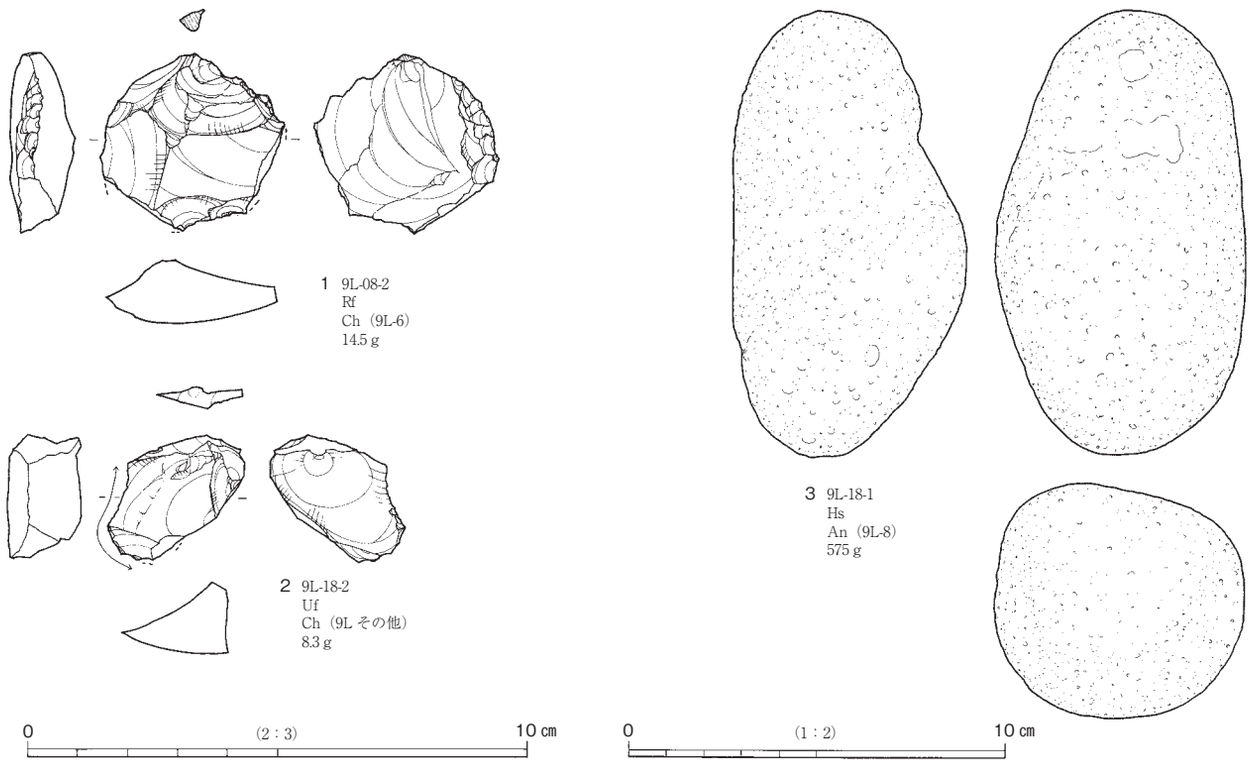
石　　材	石材	Kn	Po	Kp	Es	Ss	Gr	Dr	Pq	Rf	Uf	Bl	Ax	Hs	As	Uk	Fl	Ch	Co	合計	重量（ｇ）
安山岩	An													1						1	575.0
チャート	Ch									1	1									2	22.8
合　計		0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0	3	597.8



第34図　９Ｌ-Ａブロック出土遺物分布図（１）－石器別分布図－



第35図　9L-Ａブロック出土遺物分布図（２）－石材別分布図－



第36図　9L-Aブロック出土遺物実測図

は、平坦で細かな調整加工がある。２は、チャートによる使用痕ある剥片である。小型で厚手の不定型な剥片を素材としており、鋭利な左側縁に刃こぼれが残されている。３は、安山岩による敲石に分類した資料である。上下両端は潰れているようにも見えるが、石質が粗いため不明瞭である。

２．９L-Bブロック（第37図～第42図、第15表・第16表、図版38～図版39））

１）概　要（第37図・第38図、第16 表）

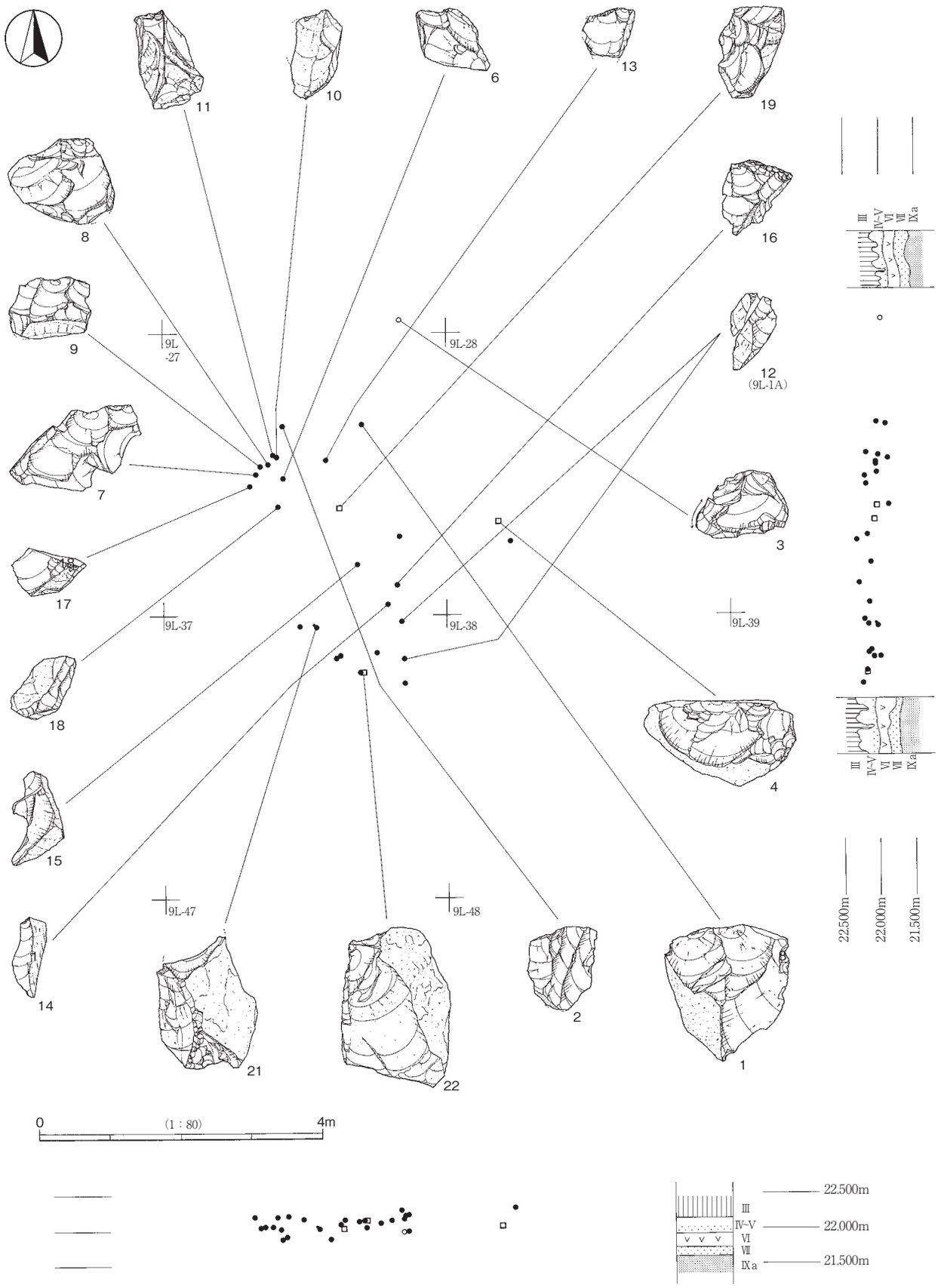
９L-Bブロックは、遺跡中央西よりの９L-17･27･28･37グリッドに位置し、標高22m～24mの台地上で、北東へ向かう浅い谷まで40mほどの地点に立地する。ブロックの規模は、長軸5.3m、短軸3.8mの楕円形の範囲で、30点の石器が分布する。出土層準は、立川ローム層Ⅳ・Ⅴ層を中心とし、0.5mの高低差をもって、ほぼ水平に包含されている。

石器組成は、使用痕ある剥片１点、剥片25点、砕片１点、石核３点、石器石材は、安山岩１点、チャート29点である。

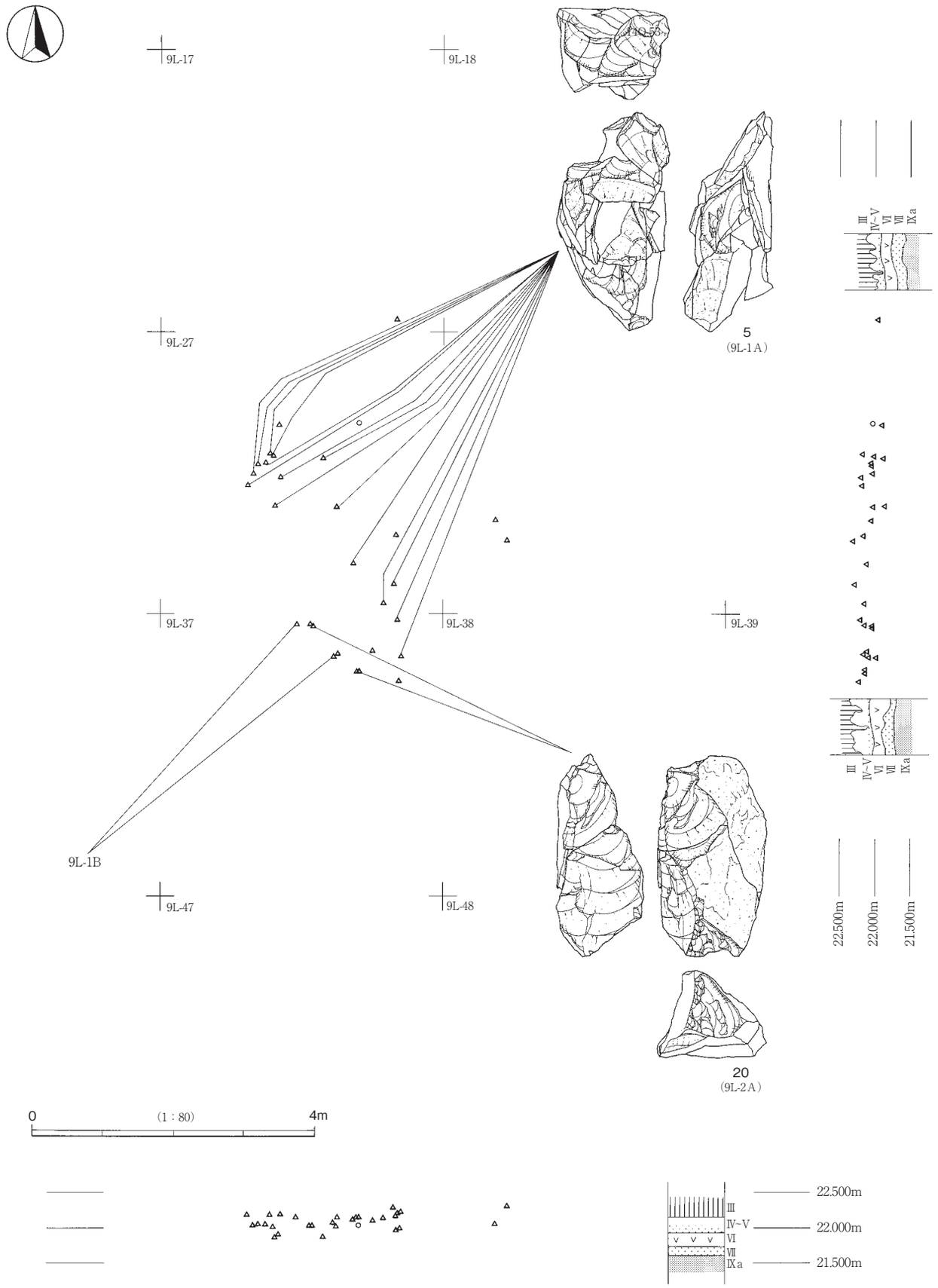
２）母岩別資料（第15表）

本ブロックでは、30点のうち22点を４母岩に区分した（母岩識別率は73％）。内訳は、チャート４母岩（９L-１～３・５：22点）である。この他に、母岩分類できなかった資料に、安山岩１点（59.3ｇ）、チャート７点（15.7ｇ）がある。

９L-１：自然面は、青灰色を呈する平滑な古い剥離面と、黄褐色を呈する表面の荒れた曲面とで構成され、内部は青灰色の地に、灰白色の節理が入るチャートである。中・小型不定型の剥片16点（接合して15個体）、石核１点、合計17点（127.9ｇ）で構成される。接合資料は、中・小型不定型の剥片14点（接合し



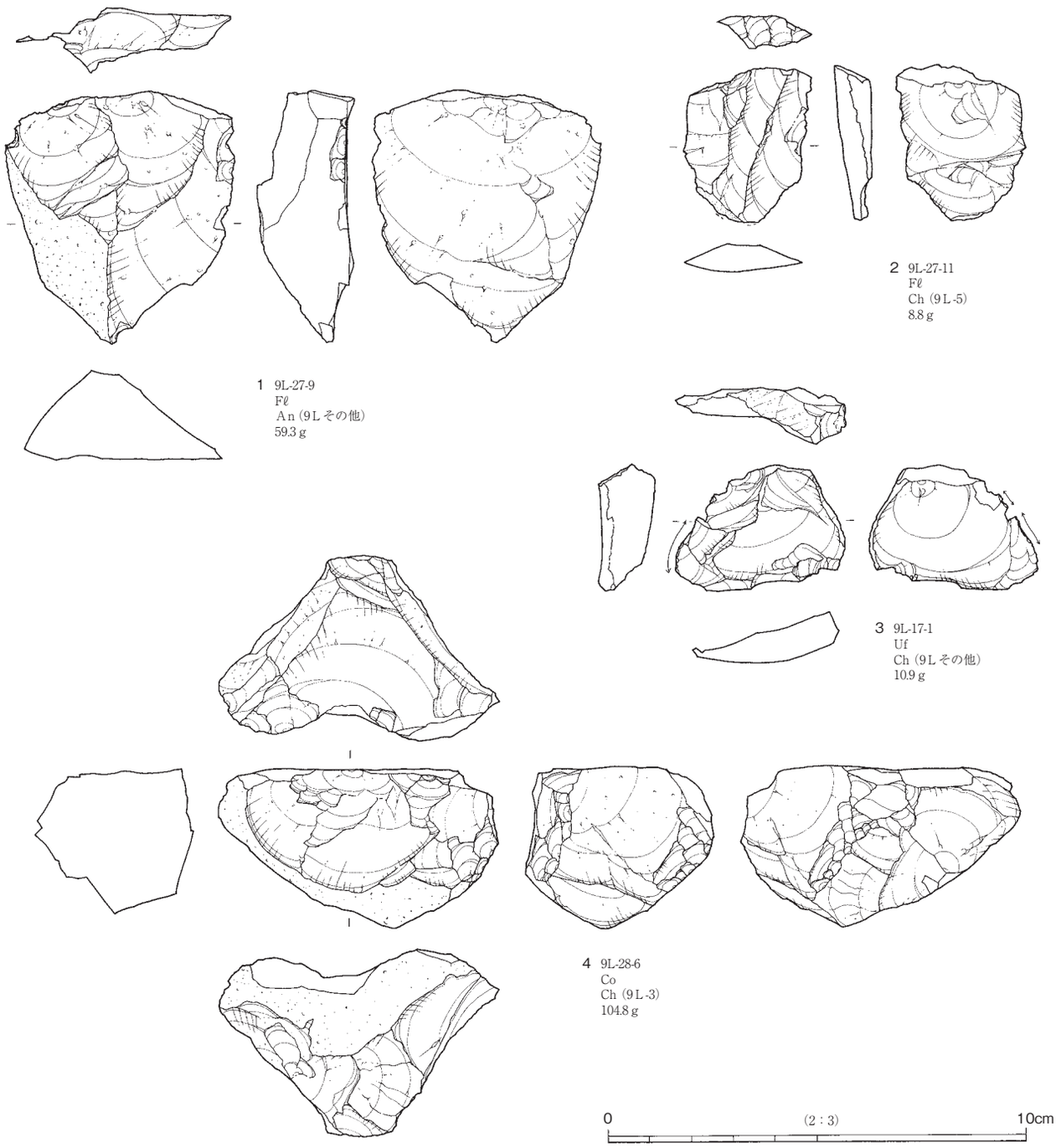
第37図　9L-Bブロック出土遺物分布図（1）－石器別分布図－



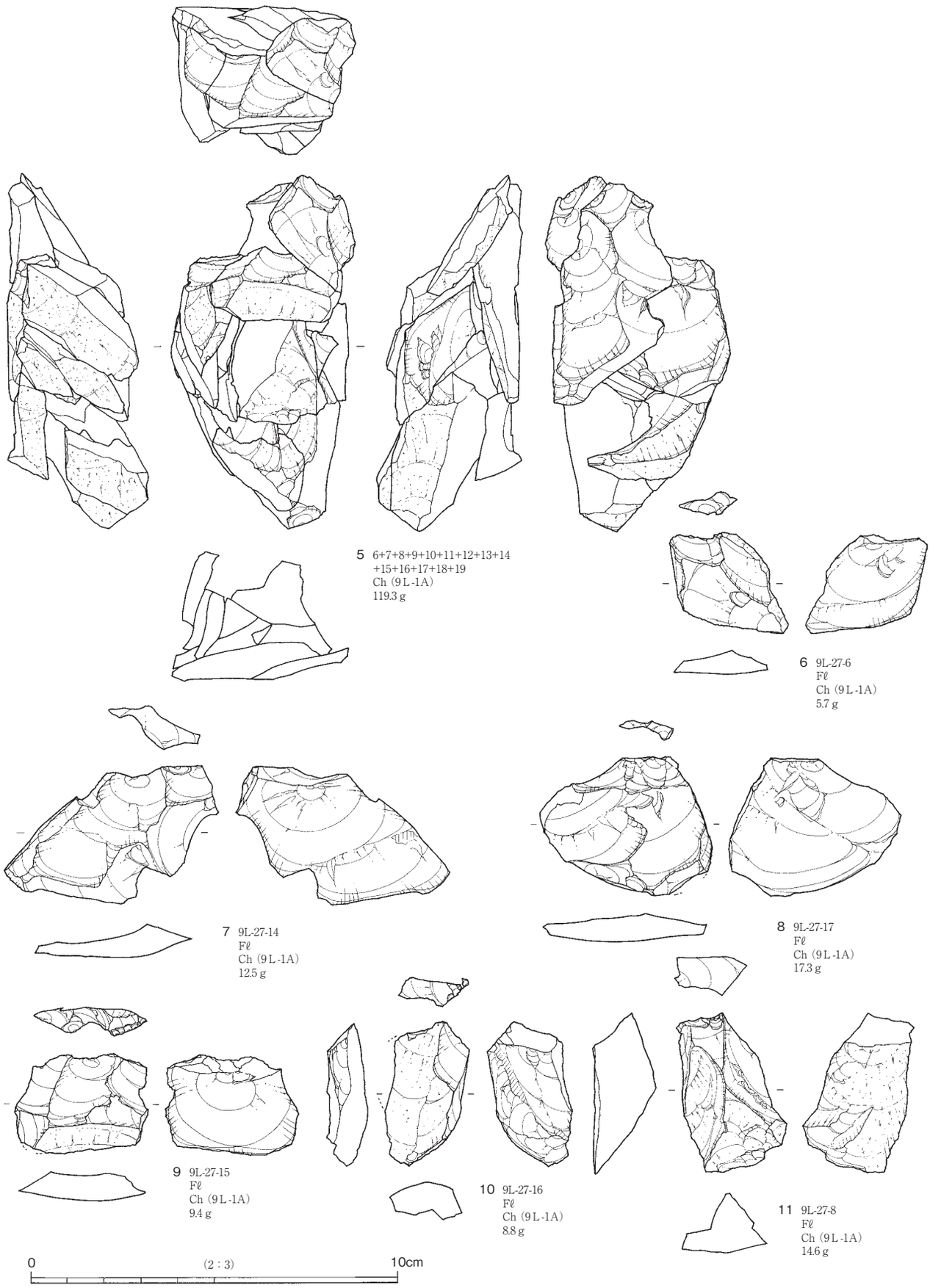
第38図　9L-Bブロック出土遺物分布図（2）－石材別分布図－

て13個体)、石核１点（９Ｌ-１Ａ）と、中・小型不定型の剥片２点が表裏で接合するもの（９Ｌ-１Ｂ）とが存在する。９Ｌ-１Ａの分布状況は、ブロック中央の長軸3.5m、1.2mの長楕円形の範囲に15点の剥片、石核が散在する。この分布範囲については、北側に多少のまとまりはあるものの、本接合資料が狭い範囲に密集する状況にはない。９Ｌ-１Ｂは、ブロックの西南部に２点が分布し、接合距離は0.7mである。

９Ｌ-２：自然面は、明褐色で緩やかな曲面となる円礫面、内部は暗灰緑色の部分と灰白色の部分とが斑になるチャートである。また、褐色がかった節理が入り込んでいる。自然面は、被熱のためか、埋没過程における条件のためかは不明であるが、表面の一部が剥落しており、節理面との識別が困難な部分もある。



第39図　9L-Bブロック出土遺物実測図（１）



第40図　9L-Bブロック出土遺物実測図（2）

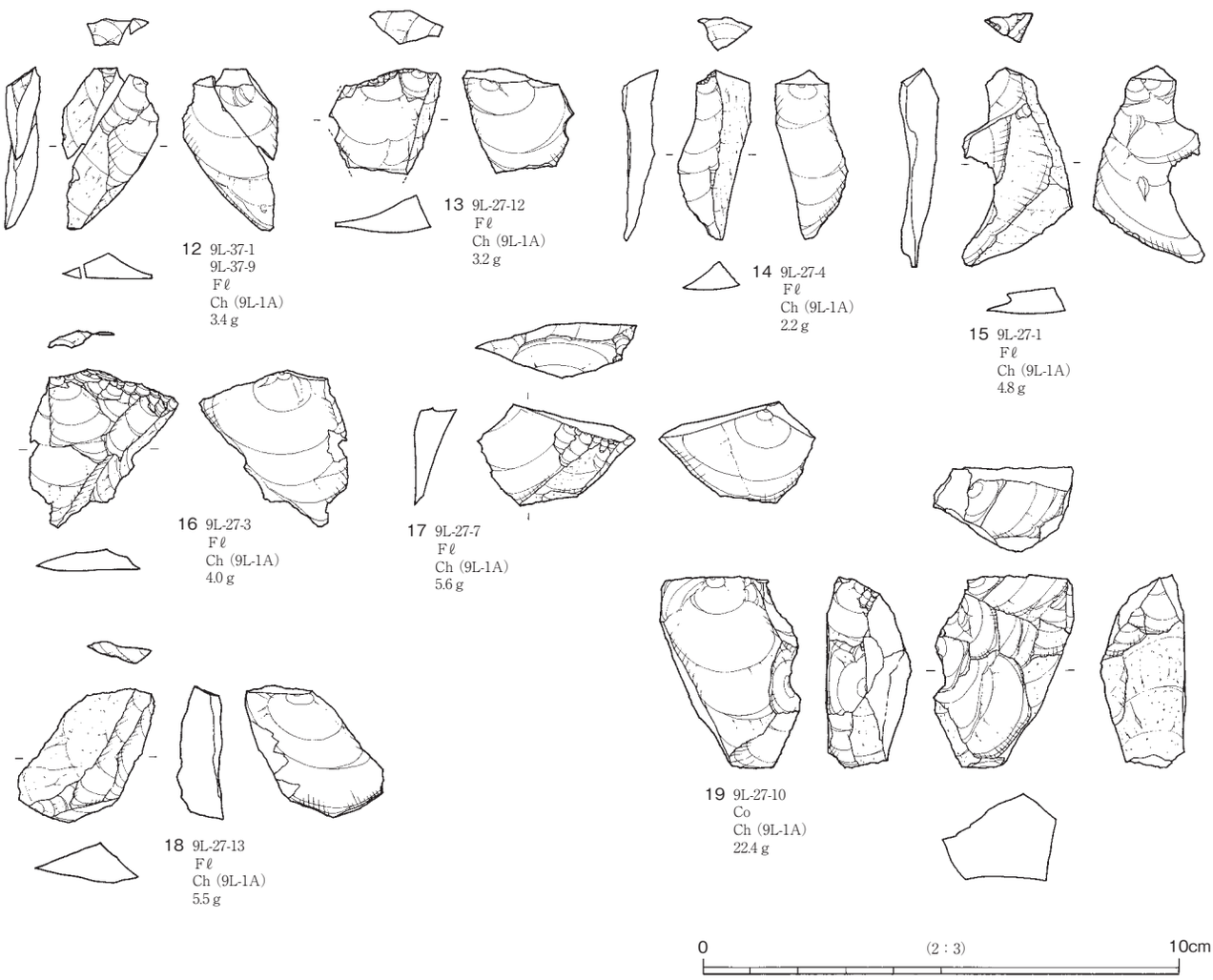
大型不定型の剥片１点（欠損品）、小型の剥片１点、分割礫を素材とする石核１点、合計３点（144.0ｇ）で構成され、大型の剥片１点と石核１点とが接合する（９Ｌ-２Ａ）。両者はブロック西南部に分布し、接合距離は0.9mである。

９Ｌ-３：自然面は橙褐色で緩やかな曲面となる円礫面、内部は青灰色の地に黒色の縞が入るチャートである。分割礫素材と想定される石核１点（104.8ｇ）の単独資料である。

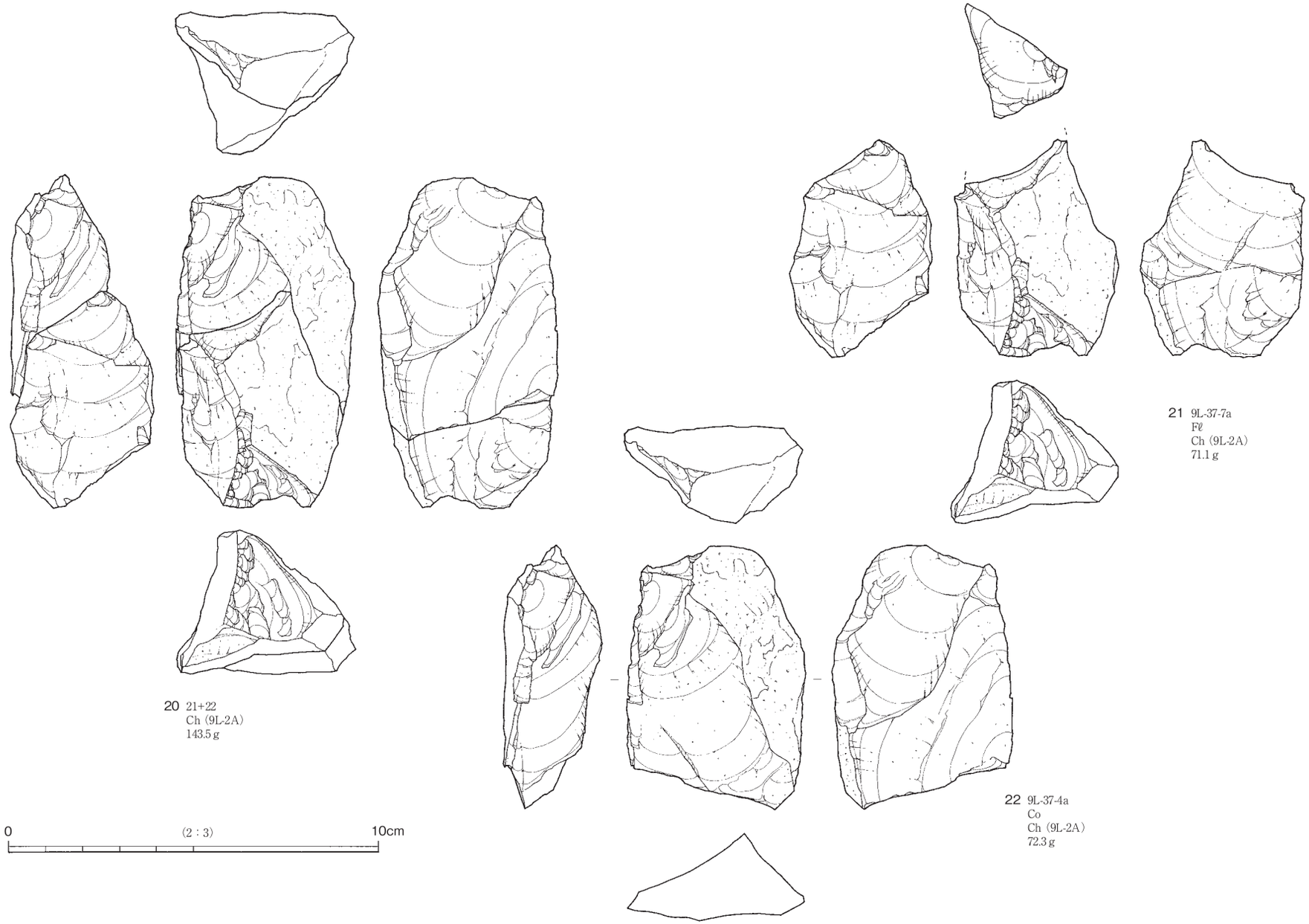
９Ｌ-５：淡黒灰色を呈するチャートである。中型不定型の剥片１点（8.8ｇ）の単独資料である。

３）出土遺物（第39図）

１は、安山岩による中型不定型の剥片である。自然面は粗い紙やすり状の円礫面であるが、湾曲が小さく、原石はかなり大型の礫と考えらえる。打瘤は発達していない。２は、チャートによる中型不定型の剥片、３は、チャートによる使用痕ある剥片で、中型不定型の剥片を利用している。４は、チャートによる石核である。実測図上面に残る広い剥離面（ネガティブな面）を打面、表面を作業面として、不定型の剥片が剥離されている。裏面にも剥離方向の一定しない剥離面が多く見られるが、剥離が通っていないものが多く、良好な剥片が剥離された様子はない。自然面は、下端に帯状に残されているだけで、他の面には見られないことから、本石核は円礫をいくつかに分割したものを素材とした可能性が高い。



第41図　9L-Bブロック出土遺物実測図（３）



第42図　9L-Bブロック出土遺物実測図（4）

第15表　9L-Bブロック母岩別石器組成表

母岩番号	石材	Kn	Po	Kp	Es	Ss	Gr	Dr	Pq	Rf	Uf	Bl	Ax	Hs	As	Uk	Fl	Ch	Co	合計	重量（g）
9L-1	Ch																16		1	17	127.9
9L-2	Ch																2		1	3	144.0
9L-3	Ch																		1	1	104.8
9L-5	Ch																1			1	8.8
9L-その他	An																1			1	59.3
9L-その他	Ch										1						5	1		7	15.7
合　　計		0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	25	1	3	30	460.5

第16表　9L-Bブロック石材別石器組成表

石　　材	石材	Kn	Po	Kp	Es	Ss	Gr	Dr	Pq	Rf	Uf	Bl	Ax	Hs	As	Uk	Fl	Ch	Co	合計	重量（g）
安山岩	An																1			1	59.3
チャート	Ch										1						24	1	3	29	401.2
合　　計		0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	25	1	3	30	460.5

４）接合資料（第40図～第42図）

９Ｌ-１（チャート）：５は、剥片14点（接合して13個体：６～18）、石核１点（19）の接合資料である。本資料から見た剥片剥離作業の手順は、以下のとおりである。なお、剥離された資料は、中・小型不定型の剥片である。

①大型の円礫を分割して石核の素材とする。接合図５の裏面右下に小さく残された節理面が、分割面の可能性がある。

②接合図５の裏面上端を打面、上面を作業面として、６を含む剥片が剥離される。

③接合図５の表面上端を打面（②の作業面）、裏面を作業面として、７を含む剥片が剥離される。

④接合図５の裏面上部を打面、上面を作業面として、剥片数枚が剥離される。

⑤接合図上面（④の作業面）を打面、裏面を作業面として、８を含む剥片が剥離される。

⑥接合図５の裏面上部（⑤の作業面）を打面、上面を作業面として、９→10→11→12→13→14の順に剥片が剥離される。

⑦接合図５の上面を打面、裏面を作業面として、15を含む剥片が剥離される。

⑧接合図５の裏面（⑦の作業面）を打面、上面を作業面として、16を含む剥片が剥離される。

⑨接合図５の上面（⑧の作業面）を打面、裏面を作業面として、剥片数枚が剥離される。

⑩接合図５の裏面（⑨の作業面）を打面、上面を作業面として、17、18が剥離され、石核19が残される。

　なお、19は、中型の剥片を素材とする石核のように見えるが、上記の一連の作業では他に石核はなく、接合図５の中で唯一の石核である。

９Ｌ-２（チャート）：20は、剥片１点（21）、石核１点（22）の接合資料である。

①円礫を粗く分割したものを石核の素材とする。接合図20の裏面に広く残る剥離面は、本石核の素材時の剥離面（分割面）と考えられる。

②接合図20の上端を打面、表裏を作業面として、21を含む剥片が剥離される。21は、末端が肥厚してウートラパッセとなっており、作業が終了している。

３．９Ｌ-Ｃブロック（第43図～第45図、第17表・第18表、図版44）

１）概　要（第43図・第44図、第18表）

９Ｌ-Ｃブロックは、遺跡中央西よりの９Ｌ-29グリッドに位置し、標高22m～24mの台地上で、北東へ向かう浅い谷まで50mほどの地点に立地する。ブロックの規模は、長軸1.8m、短軸0.6mの楕円形の範囲で、３点の石器が分布する。出土層準は、立川ローム層Ⅳ・Ⅴ層を中心とし、ほぼ水平に包含されている。

石器組成は、ナイフ形石器１点、敲石１点、礫１点である。石器石材は、安山岩１点、チャート１点、礫石材は、流紋岩１点である。

２）母岩別資料（第17表）

本ブロックでは､石器２点を２母岩に区分した（母岩識別率は100％）。内訳は､安山岩１母岩（９Ｌ-７：１点)、チャート１母岩（９Ｌ-４：１点）である。なお礫１点は、流紋岩（33.5ｇ）であるが、本遺跡内に関連資料が存在する可能性があることから、母岩分類できなかった。

９Ｌ-４：緑がかった青灰色を呈する良質なチャートである。切出形ナイフ形石器１点（4.1ｇ）の単独資料である。

９Ｌ-７：赤みを帯びた灰色を呈し、直径0.5㎜～１㎜の夾雑物を多量に含む多孔質の安山岩である。大きさは、11㎝×７㎝×５㎝ほどの完形円礫で、わずかな赤化は被熱によるものか否か、はっきりしない。端部の使用痕は不明瞭であるが、敲石（390ｇ）に分類した。

３）出土遺物（第45図）

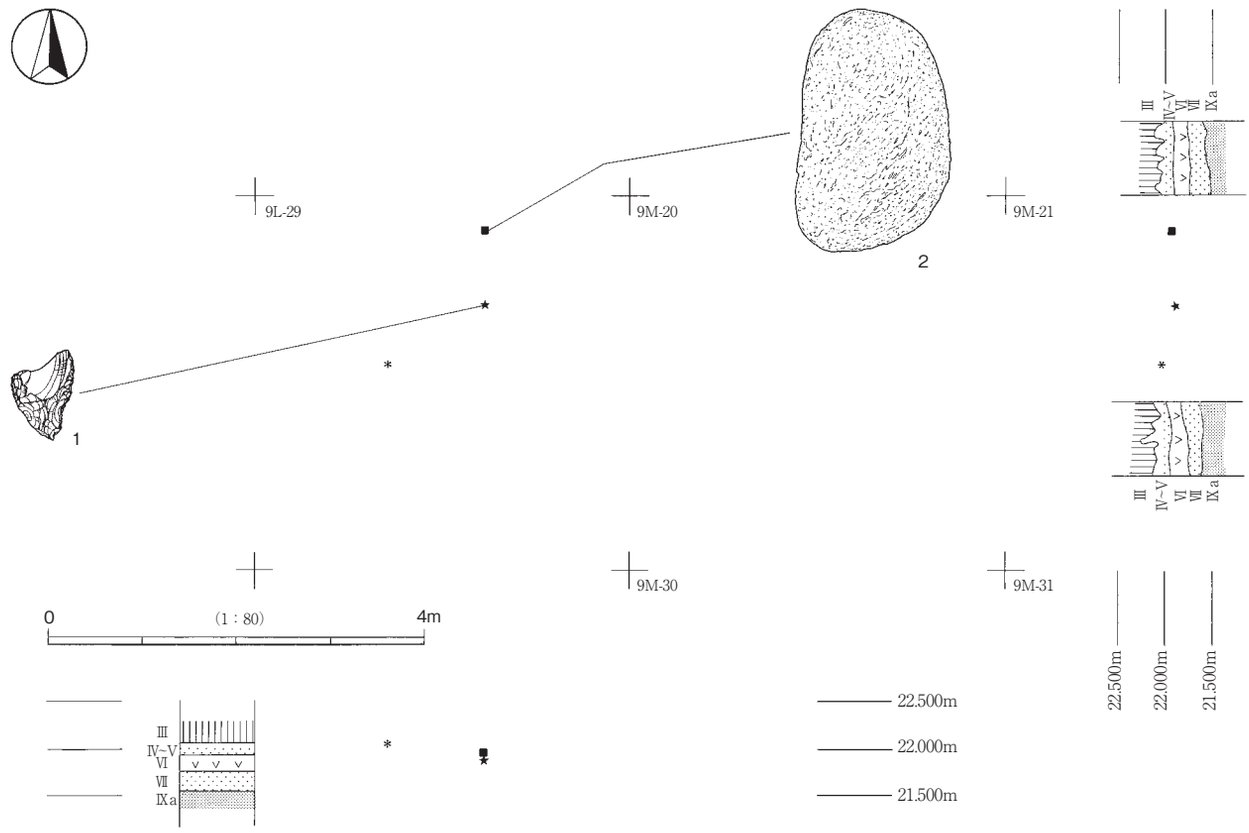
１は、小型不定型の剥片を素材とするナイフ形石器である。右側縁全体と左側縁の基部寄りに調整加工がなされ、全体が切出形に整えられている。素材の打面は、左側面に広く残されており、その打面から頭部調整のような平坦な調整加工がなされている。一方、右側縁は、裏面から急角度の調整加工がなされている。２は、多孔質の安山岩による敲石と分類した資料である。上下両端に、明瞭な敲打痕や摩耗痕はないが、粗い石質のため詳細は不明である。

第17表　9L-Cブロック母岩別石器組成表

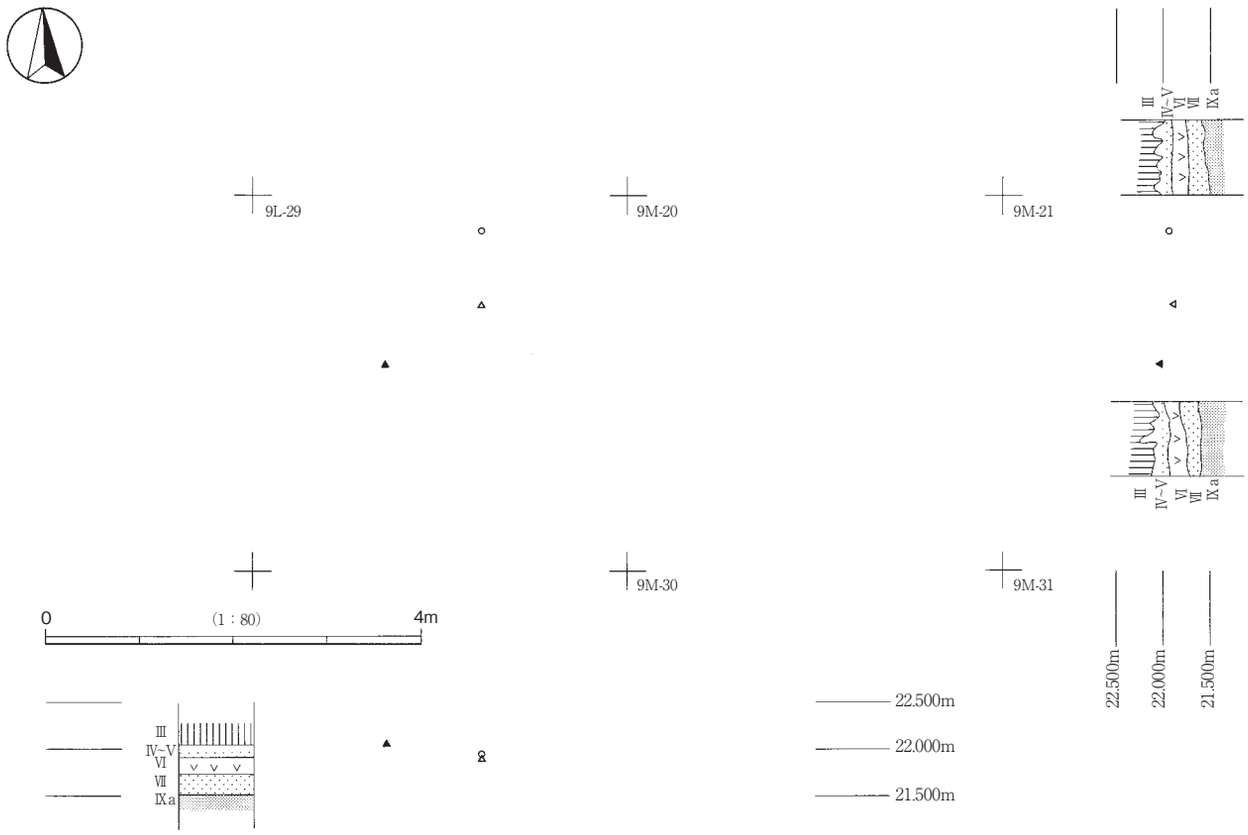
母岩番号	石材	Kn	Po	Kp	Es	Ss	Gr	Dr	Pq	Rf	Uf	Bl	Ax	Hs	As	Uk	Fl	Ch	Co	合計	重量（ｇ）
9L-4	Ch	1																		1	4.1
9L-7	An													1						1	390.0
合　　計		1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2	394.1

第18表　9L-Cブロック石材別石器組成表

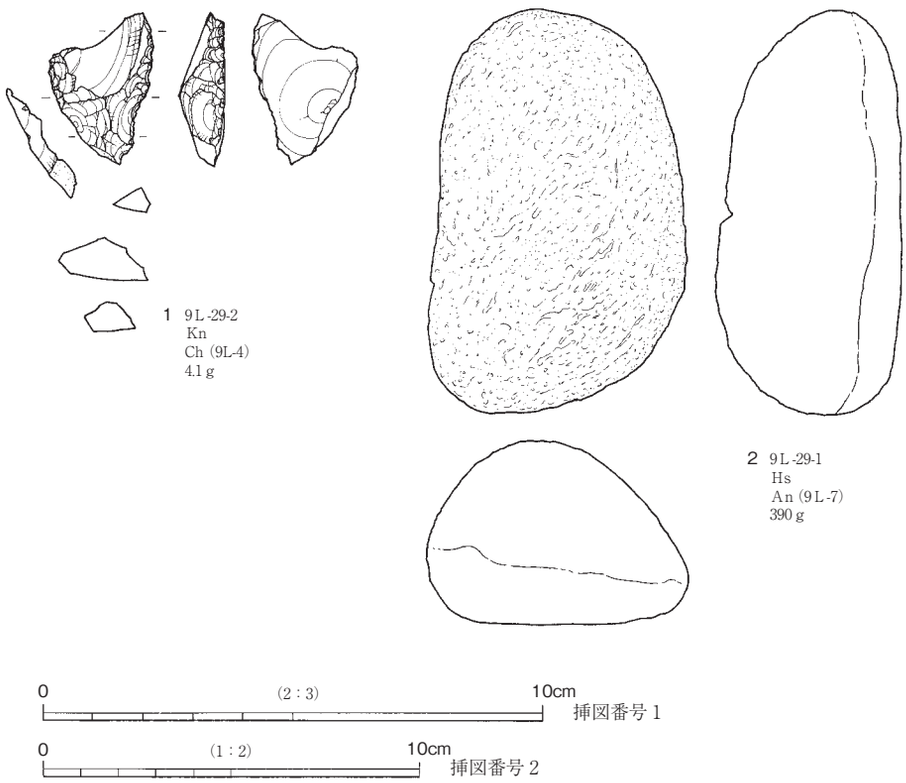
石　　材	石材	Kn	Po	Kp	Es	Ss	Gr	Dr	Pq	Rf	Uf	Bl	Ax	Hs	As	Uk	Fl	Ch	Co	合計	重量（ｇ）
安山岩	An													1						1	390.0
チャート	Ch	1																		1	4.1
合　　計		1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2	394.1



第43図　9L-Cブロック出土遺物分布図（1）－石器別分布図－



第44図　9L-Cブロック出土遺物分布図（2）－石材別分布図－



第45図　9L-Cブロック出土遺物実測図

４．９M-Aブロック（第46図～第49図、第19表・第20表、図版39）

１）概　要（第46図・第47図、第20表）

９M-Aブロックは、遺跡中央西よりの９M-20・30グリッドに位置し、標高22m～24mの台地上で、北東へ向かう浅い谷まで60mほどの地点に立地する。ブロックの規模は、長軸2.6m、短軸１mほどの楕円形の範囲で、17点の石器が分布する。出土層準は、立川ローム層Ⅳ・Ⅴ層を中心とし、14点の資料は0.2mの高低差をもって水平に包含されている。それ以外の３点は、0.2m～0.5m下位に位置するが、同一ブロックと判断した。

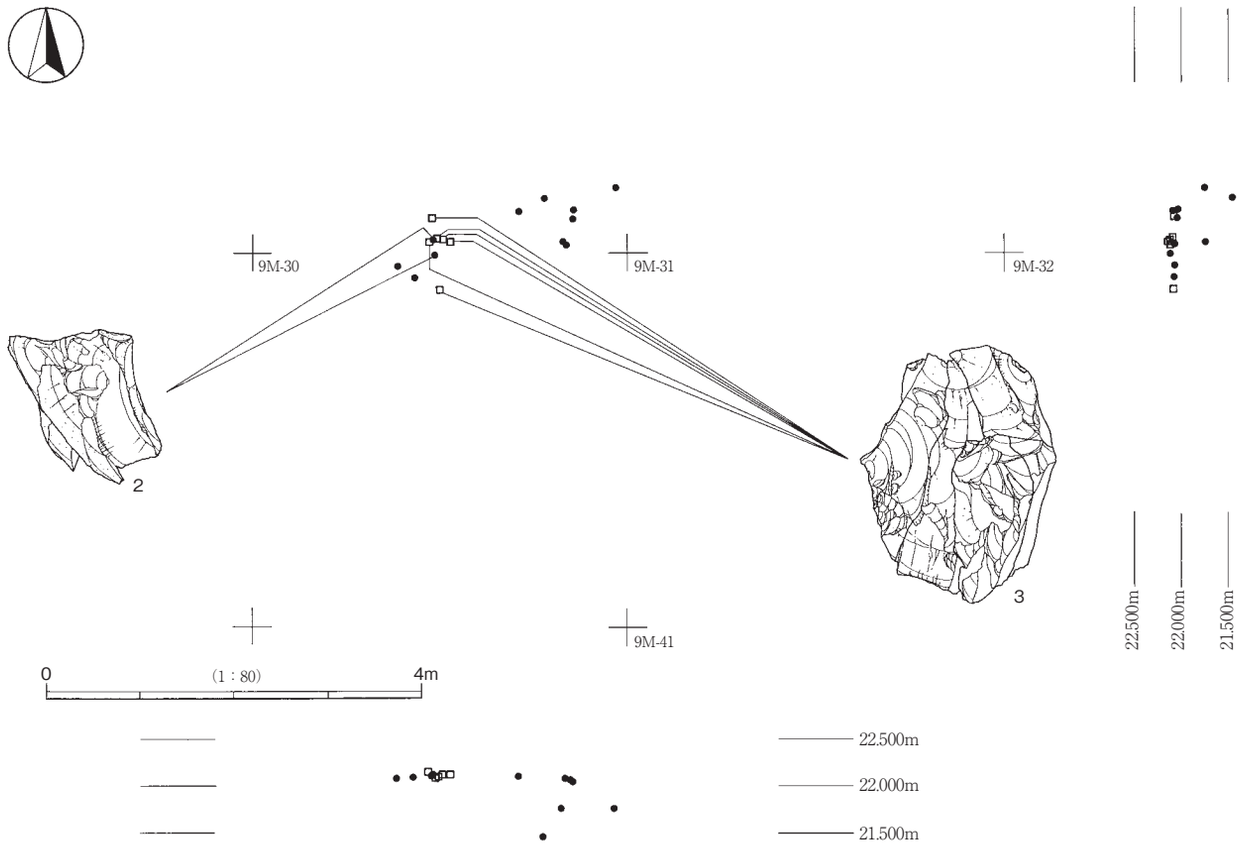
石器組成は、剥片11点、石核６点（接合して１個体）、石器石材は、黒曜石Ａ類（高原山産）１点、チャート15点、ホルンフェルス１点である。

２）母岩別資料（第19表）

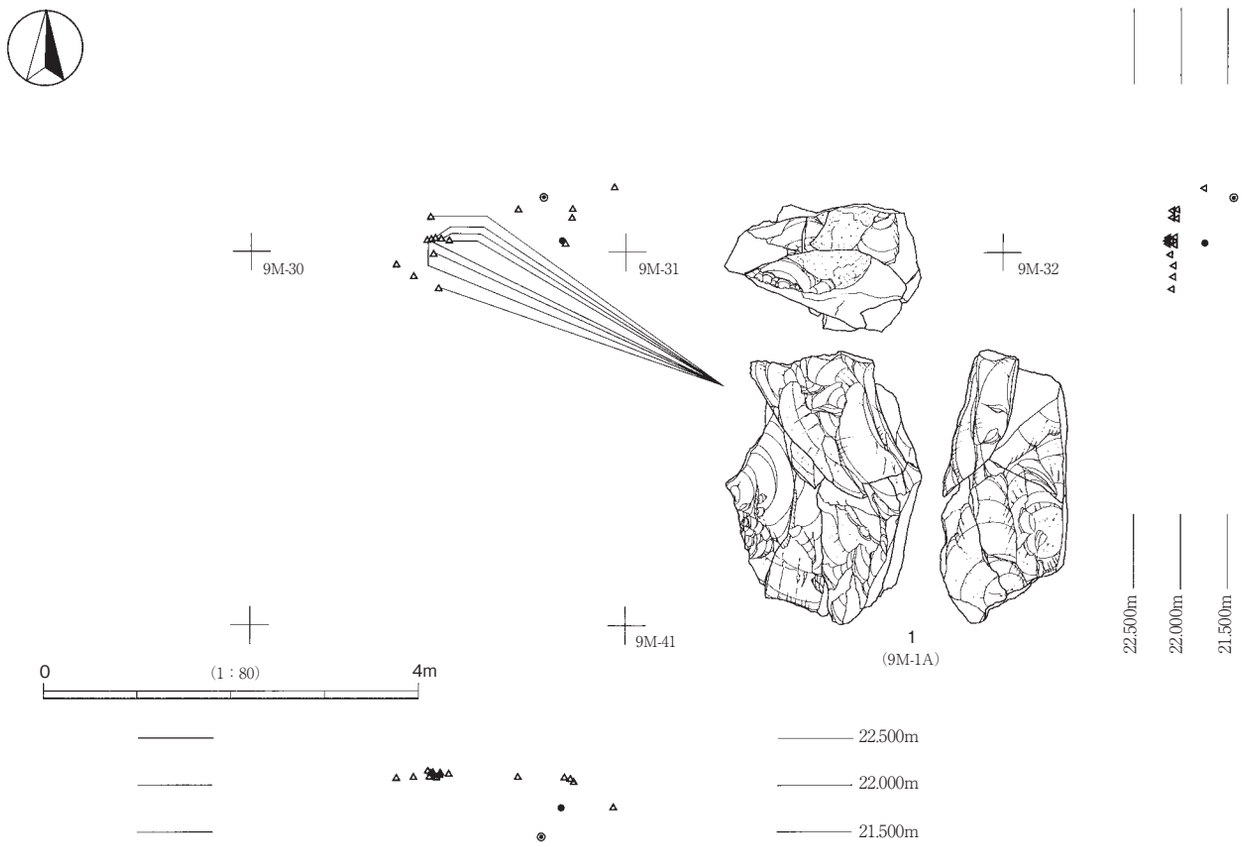
本ブロックでは、17点のうち８点を１母岩に区分した（母岩識別率は47％）。内訳は、チャート１母岩（９M-１：８点）である。この他に、母岩分類できなかった資料に黒曜石Ａ類１点（1.5ｇ）、チャート７点（6.3ｇ）、ホルンフェルス１点（7.6ｇ）がある。

９M-１：青灰色を呈し、黄灰色や灰白色の節理面や不純物の層が明瞭なチャートである。中型不定型の剥片２点（接合して１個体）、石核６点（接合して１個体）、合計８点（235.6ｇ）で構成され、全て接合する（９M-１Ａ）。

接合資料の分布状況は、ブロック西側の直径0.8mの範囲に、８点の剥片、石核がまとまっている。



第46図　9M-Aブロック出土遺物分布図（1）－石器別分布図－



第47図　9M-Aブロック出土遺物分布図（2）－石材別分布図－

３）接合資料（第48図・第49図）

9M-１（チャート）：１は、剥片２点（接合して１個体：２）と石核６点（接合して１個体：３）の接合資料である。本資料から見た剥片剥離作業の手順は、以下のとおりである。

①大型の原石が分割されて、石核の素材となる。接合図１の裏面には、分割面（ポジティブな面）が広く残されており、その上端には節理面の打面が見られる。表面中央にも素材時の面と想定される節理面があり、節理に沿って分割されて、直方体の石核の素材が得られる。

②接合図１の裏面を打面、右側面上部を作業面として、中型不定型の剥片が剥離される。

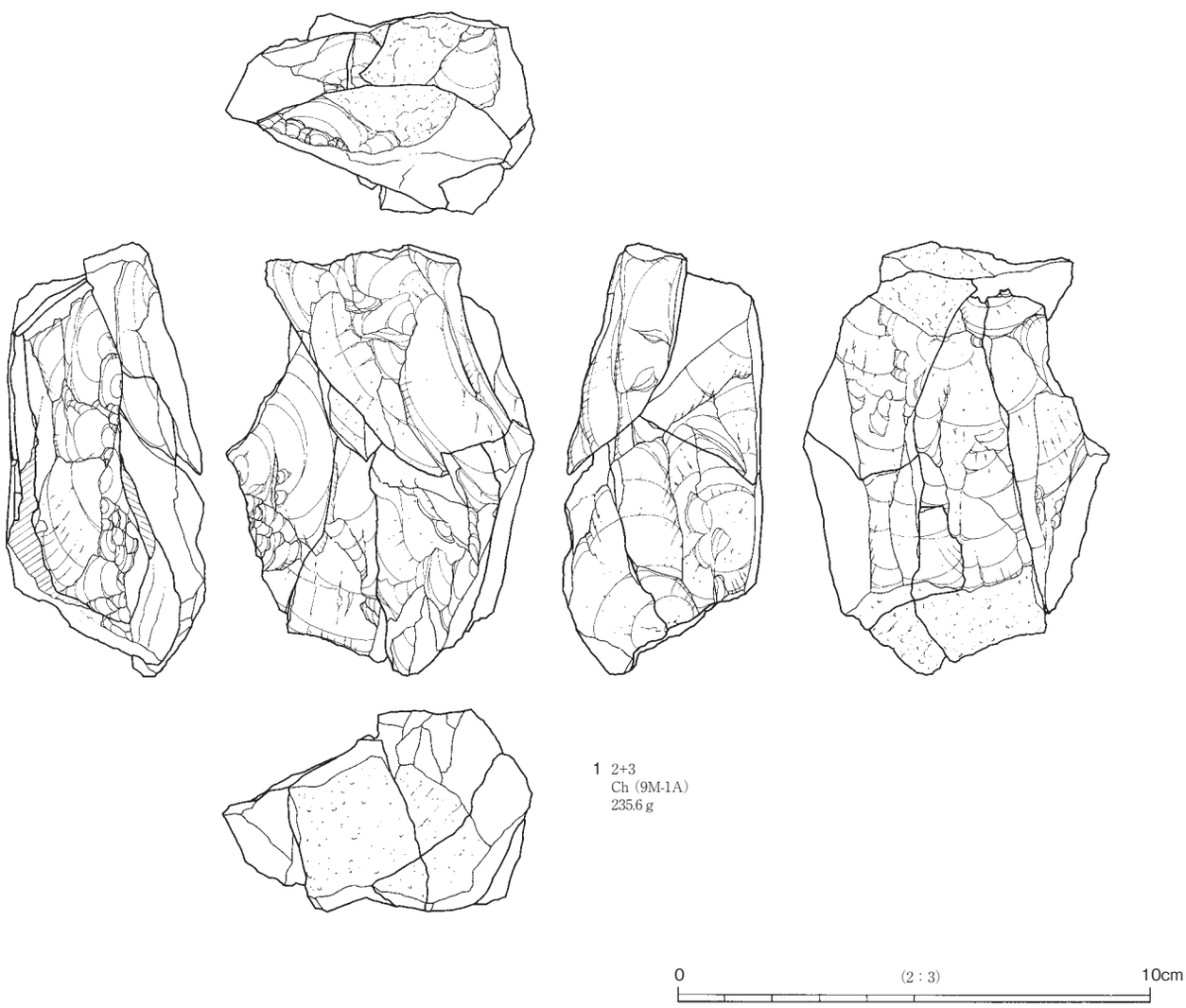
③接合図１の下端にある節理面を打面、右側面下部を作業面として、剥片が剥離される。

④接合図１の上端にある節理面を打面、表面を作業面として、２が剥離される。

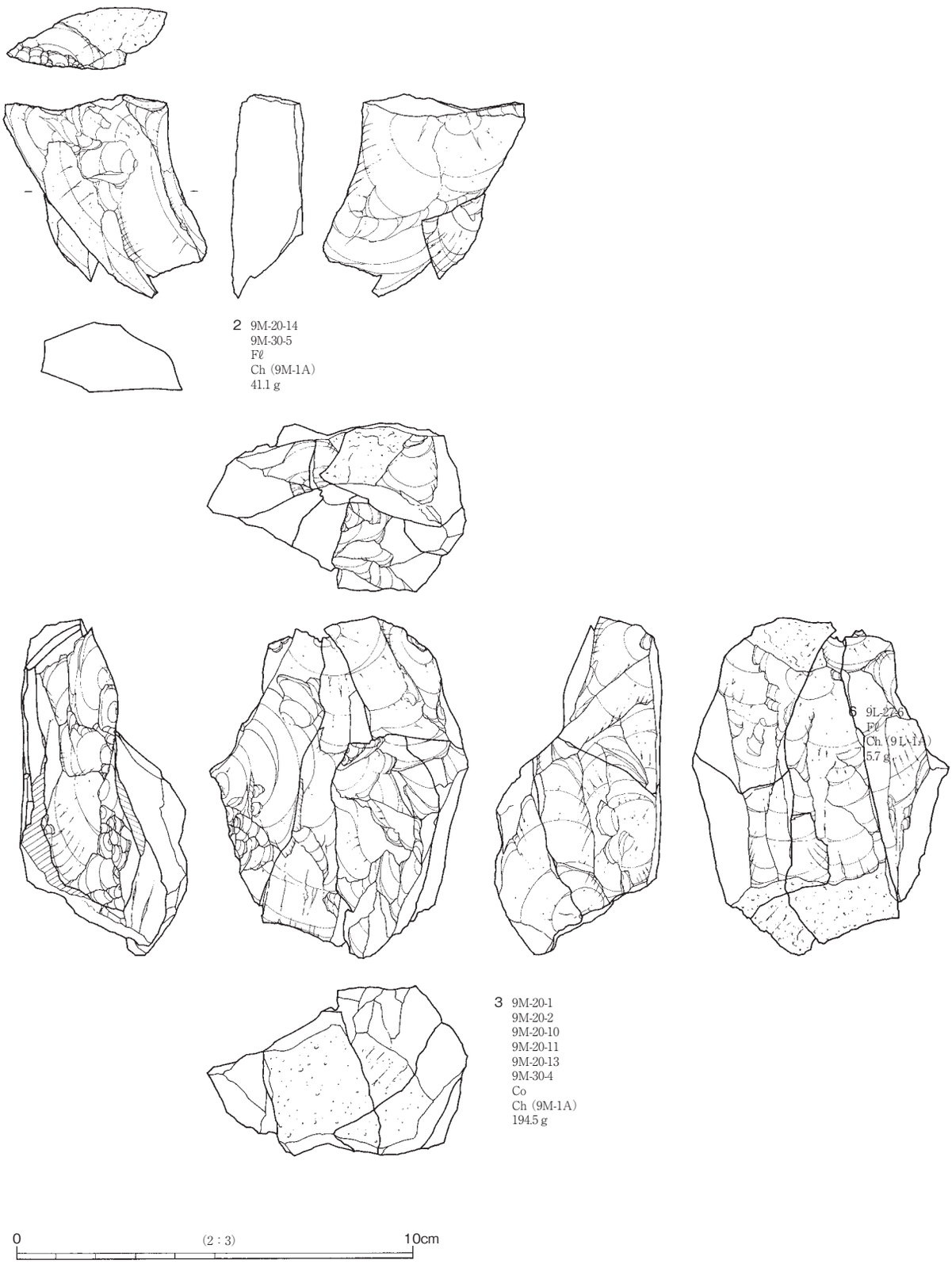
⑤接合図１の左側面を打面、表面を作業面として、剥片が剥離される。

⑥接合図１の表面（⑤で形成された剥離面）を打面、左側面を作業面として、剥片が剥離される。

なお、④以降、本石核は節理に沿って割れていったと考えられる。また、本接合資料以外の石器は、黒曜石、チャート、ホルンフェルスによる小型不定型の剥片があるが、実測図は掲載しなかった。



第48図　9M-Aブロック出土遺物実測図（１）



第49図　9M-Aブロック出土遺物実測図（2）

第19表　9M-Aブロック母岩別石器組成表

母岩番号	石材	Kn	Po	Kp	Es	Ss	Gr	Dr	Pq	Rf	Uf	Bl	Ax	Hs	As	Uk	Fl	Ch	Co	合計	重量（g）
9M-1	Ch																2		6	8	235.6
9M-その他	ObA																1			1	1.5
9M-その他	Ch																7			7	6.3
9M-その他	Ho																1			1	7.6
合　　計		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	11	0	6	17	251.0

第20表　9M-Aブロック石材別石器組成表

石　　材	石材	Kn	Po	Kp	Es	Ss	Gr	Dr	Pq	Rf	Uf	Bl	Ax	Hs	As	Uk	Fl	Ch	Co	合計	重量（g）
黒曜石Ａ	ObA																1			1	1.5
チャート	Ch																9		6	15	241.9
ホルンフェルス	Ho																1			1	7.6
合　　計		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	11	0	6	17	251.0

５．15Ｒ-Ｂブロック（第50図～第53図、第21表・第22表、図版36）

１）概　要（第50図・第51図、第22表）

15Ｒ-Ｂブロックは、遺跡南部の15Ｑ-39・49、15Ｒ-20・21・30・31・40・41グリッドに位置し、標高24ｍ～26ｍの台地平坦面に立地する。ブロックの規模は、直径6.5ｍほどの略円形の範囲で、156点の石器が分布する。細かくみると、15Ｒ-30グリッドの東側を中心とした、長軸3.6ｍ、短軸2.8ｍの範囲に全体の８割以上の資料が密集する。出土層準は、立川ローム層Ⅳ・Ⅴ層を中心とし、0.4ｍの高低差をもって、凸レンズ状に包含されている。

石器組成は、ナイフ形石器４点、槍先形石器１点、加工痕ある剥片５点、使用痕ある剥片２点、剥片113点、砕片30点、石核１点である。石器石材は、黒曜石Ａ類（高原山産）119点、黒曜石Ｇ類27点、安山岩８点、トロトロ石１点、ホルンフェルス１点である。資料の大半が黒曜石Ａ類であるため、石材別分布について特段記載すべきことはないが、そうした中にあって、安山岩はブロックの中心から北西部にかけて、やや偏った分布をしている。

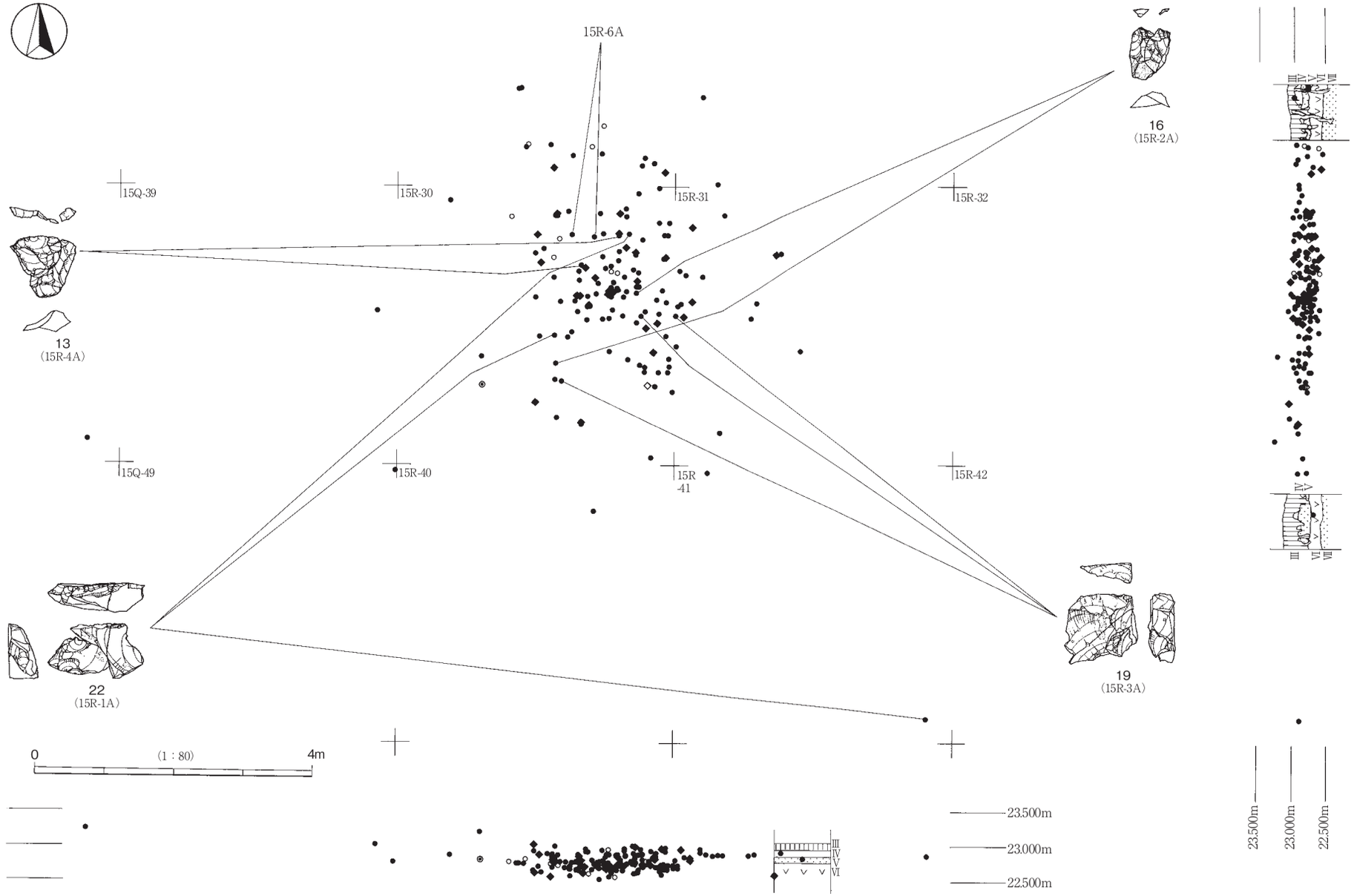
２）母岩別資料（第21表）

本ブロックでは、156点のうち14点を７母岩に区分した（母岩識別率は９％）。内訳は、黒曜石Ａ類５母岩（15Ｒ-１～４・６：12点）、トロトロ石１母岩（15Ｒ-７：１点）、ホルンフェルス１母岩（15Ｒ-12：１点）である。なお、主体を占める黒曜石Ａ類は、いずれも岩相が共通していることから、接合資料に限って母岩番号を付し、それ以外の資料については、その他としてまとめた。また、母岩分類できなかった資料には、黒曜石Ａ類107点（97.6ｇ）、黒曜石Ｇ類27点（5.4ｇ）、安山岩８点（27.3ｇ）がある。

15Ｒ-１：黒灰色不透明の地に、直径１㎜～２㎜ほどの夾雑物を多く含む黒曜石Ａ類である。地の色調は、全体に灰色みが強い。小型不定型の剥片を利用した使用痕ある剥片１点、小型不定型の剥片２点、合計３点（9.0g）で構成され、全て接合する（15Ｒ-１Ａ）。この資料は、中型不定型の剥片を素材とする石核から剥離された小型不定型の剥片類である。このうち剥片２点は、ブロックの中心部に位置するが、使用痕ある剥片１点はブロック南端にあり、それぞれ７ｍ以上離れている。

15Ｒ-２：自然面は、黒灰色を呈する平滑な角礫面、内部は黒灰色不透明で直径１㎜ほどの夾雑物が散在

第50図　15R-Bブロック出土遺物分布図（1）－石器別分布図－



第51図　15R-Bブロック出土遺物分布図（2）－石材別分布図－

する黒曜石Ａ類である。小型不整形の縦長剥片を素材とする加工痕ある剥片１点、剥片１点、合計２点（2.7ｇ）で構成され、接合する（15Ｒ-２Ａ）。両者ともブロックの中心に分布し、接合距離は1.6ｍである。

15Ｒ-３：黒灰色不透明の地に、直径１㎜～３㎜ほどの夾雑物を多く含む黒曜石Ａ類である。地の色調は全体に灰色みが強く、15Ｒ-１母岩と類似しているが、本母岩の場合、長軸が５㎜を超える大型の夾雑物を含む点で異なっている。中型不定型の剥片を素材とする加工痕ある剥片２点（接合して１個体、ただし欠損部分あり）、加工によって生じた小型の調整剥片１点、合計３点（10.7ｇ）で構成され、全て接合する（15Ｒ-３Ａ）。３点ともブロック中央部やや南寄りに分布し、長さ1.9ｍの直線状に並んでいる。

15Ｒ-４：黒灰色不透明の地に、直径0.5㎜～２㎜ほどの夾雑物が散在する黒曜石Ａ類である。中・小型不定型の剥片２点（5.2ｇ）で構成され、表裏で接合する（15Ｒ-４Ａ）。２点ともブロックの中心部に位置し、接合距離は0.7ｍである。

15Ｒ-６：黒灰色不透明の地に、直径１㎜～２㎜の夾雑物を多く含む黒曜石Ａ類である。中型不定型の剥片を縦位に用いたナイフ形石器２点（接合して１個体：3.1ｇ）で構成される（15-６Ａ）。２点ともブロックの中央部に位置し、接合距離は0.3ｍである。

15Ｒ-７：自然面は、灰白色の滑らかな円礫面、内部も灰白色に風化したトロトロ石である。原石は、拳の半分程度の大きさと想定される。小型不定型の剥片を生産した石核１点（82.7ｇ）の単独資料である。

15Ｒ-12：青みがかった灰色を呈する粘土質の部分と、灰白色を呈する粗粒の砂岩質の部分とが層状となるホルンフェルスで自然面は滑らかな円礫面である。中型不定型の剥片１点（12.9ｇ）の単独資料である。

第21表　15R-Bブロック母岩別石器組成表

母岩番号	石材	Kn	Po	Kp	Es	Ss	Gr	Dr	Pq	Rf	Uf	Bl	Ax	Hs	As	Uk	Fl	Ch	Co	合計	重量（ｇ）
15R-1	ObA										1						2			3	9.0
15R-2	ObA									1							1			2	2.7
15R-3	ObA									2							1			3	10.7
15R-4	ObA																2			2	5.2
15R-6	ObA	2																		2	3.1
15R-7	To																		1	1	82.7
15R-12	Ho																1			1	12.9
15R-その他	ObA	1	1							2	1						95	7		107	97.6
15R-その他	ObG	1															3	23		27	5.4
15R-その他	An																8			8	27.3
合　　計		4	1	0	0	0	0	0	0	5	2	0	0	0	0	0	113	30	1	156	256.6

第22表　15R-Bブロック石材別石器組成表

石　　材	石材	Kn	Po	Kp	Es	Ss	Gr	Dr	Pq	Rf	Uf	Bl	Ax	Hs	As	Uk	Fl	Ch	Co	合計	重量（ｇ）
黒曜石Ａ	ObA	3	1							5	2						101	7		119	128.3
黒曜石Ｇ	ObG	1															3	23		27	5.4
安山岩	An																8			8	27.3
トロトロ石	To																		1	1	82.7
ホルンフェルス	Ho																1			1	12.9
合　　計		4	1	0	0	0	0	0	0	5	2	0	0	0	0	0	113	30	1	156	256.6

３）出土遺物（第52図）

１は、黒曜石による２側縁調整のナイフ形石器である。石材は、黒灰色不透明の地に直径0.5㎜～２㎜の夾雑物が散在しており、黒曜石Ａ類に類似する。ただし、他の資料と比べて、全体に光沢が乏しく、くすんでいること、信州産の一部にも類似資料があることから、黒曜石Ｇ類とした。また、本遺跡内では類似する黒曜石が見当たらないため、通常は単独母岩とするが、弱い被熱によって変質した可能性を排除できないため、母岩分類をしなかった。石器の形態等については、不整形の縦長剥片を素材として、素材の打面を基部側に残し、左側縁全体と右側縁基部寄りに、裏面から調整加工がなされている。調整加工は、軽い鋸歯状を呈しており、立川ローム層Ⅳ下・Ⅴ層の石器群の特徴を示している。２は、黒曜石Ａ類による２側縁調整のナイフ形石器の欠損品である。素材の打面は除去されているが、素材の用い方や想定される調整加工の部位は、１と共通する。上半部を大きく欠損するほか、基部側も上下に割れたものが接合している。これは、左側縁の加工途中に生じたと考えられることから、本資料は未成品となる可能性が高い。３も黒曜石Ａ類によるナイフ形石器の欠損品である。横長剥片を素材として、素材の打面側（右側縁）全体と、左側縁の基部寄りに調整加工が施され、左上半部に未加工の部分がある切出形のナイフ形石器と考えられる。４は、黒曜石Ａ類による槍先形石器とした資料である。横長剥片を素材として、右側縁全体と左側縁の一部に調整加工がなされ、小型の木葉形に仕上げられている。調整加工は、ナイフ形石器一般と比べると緩やかな剥離角でなされており、先端を鋭利にした削器といった印象である。面的調整が少ないこと、出土位置はブロックの外縁部ではあるが、立川ローム層Ⅳ下・Ⅴ層に帰属する本ブロックの石器群に伴うと考えられることから、出現期の槍先形石器の可能性が高い。裏面には段差があり、素材の打面と主要剥離面のようにも見えるが、全体で主要剥離面１枚と判断した。

５～８は、黒曜石Ａ類による剥片類である。５・６の一部には加工痕があり、７の鋭利な縁辺には刃こぼれが見られる。いずれも中型不定型の剥片を素材とする。８は小型不定型の剥片である。

９は、ホルンフェルス、10・11は安山岩による中型不定型の剥片である。12は、トロトロ石による石核である。拳の半分程度の円礫を素材とし、表面の上端及び左側縁上部、裏面上部を作業面として、交互剥離によって中・小型不定型の剥片が剥離されている。

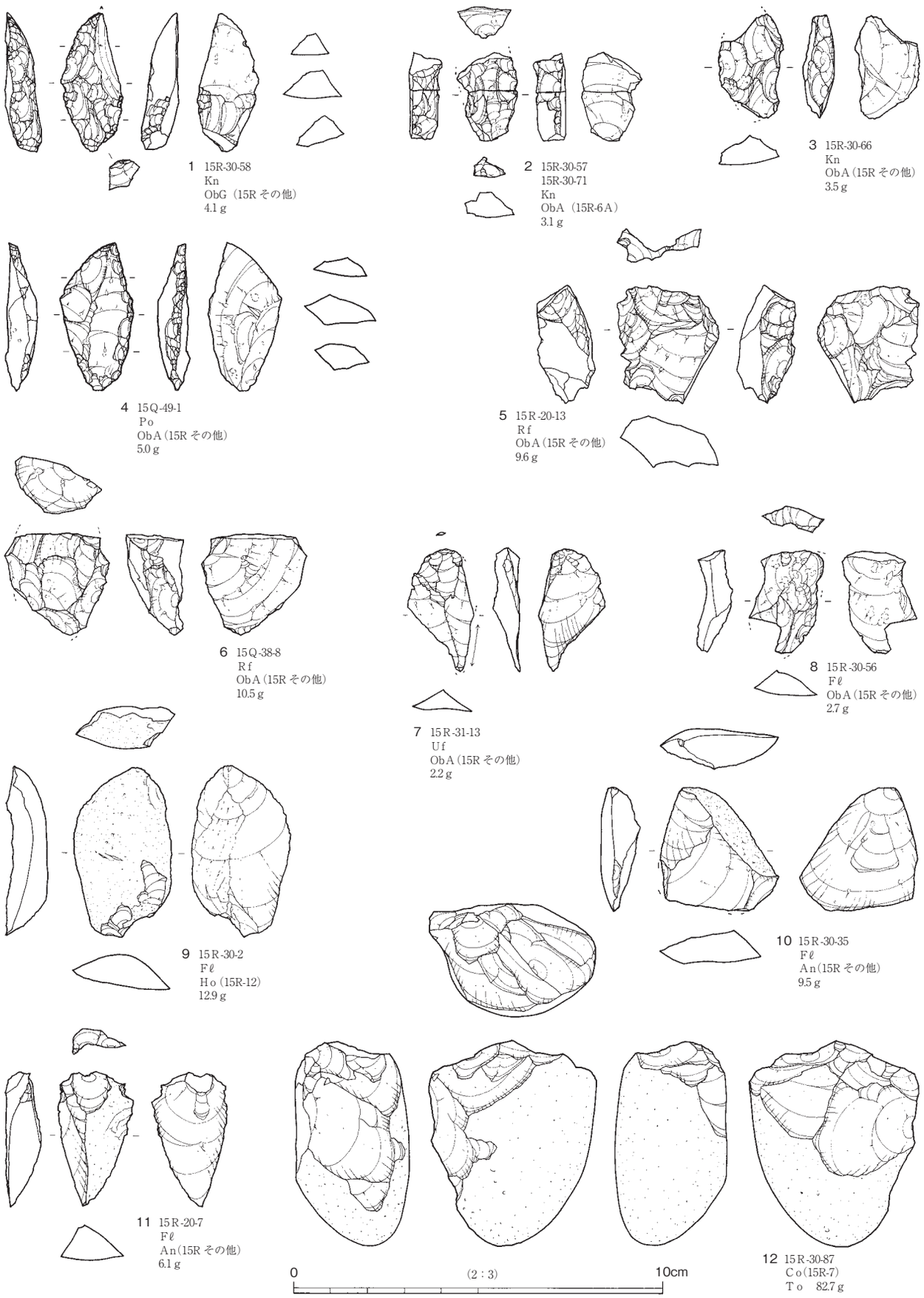
以上のほか、接合資料以外の実測図を掲載しなかった石器は、黒曜石Ａ類及びＧ類による小型不定型の剥片、砕片、安山岩による小型不定型の剥片である。

４）接合資料（第53図）

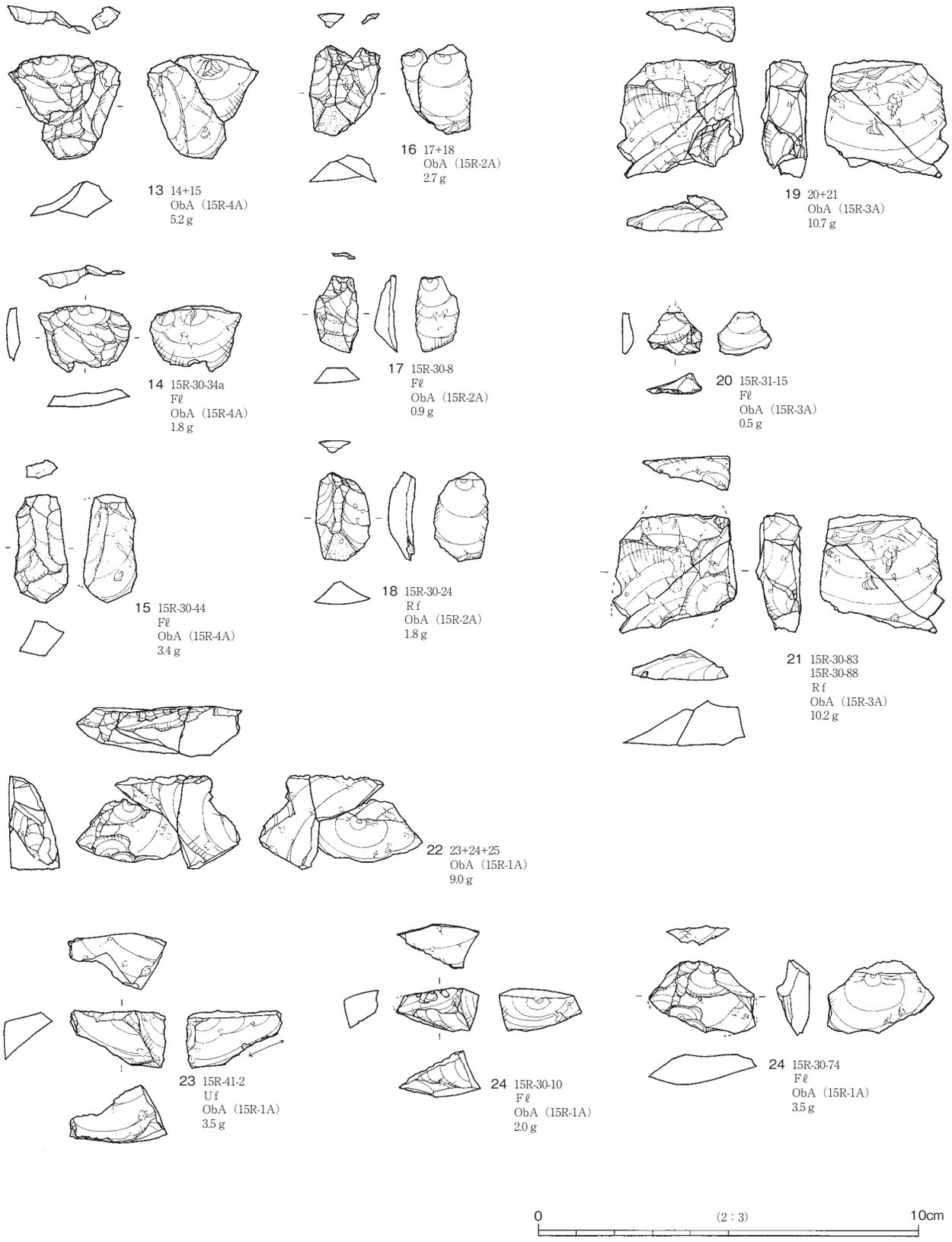
15Ｒ-４Ａ（黒曜石Ａ類）：13は、中型不定型の剥片１点（15）と小型不定型の剥片１点（14）の接合資料である。同一の打面、作業面により、14→15の順に剥離されている。両者の表面に残された剥離面も、おおむね同一の打面と考えられる。なお、15は、打点から二つに割れている。

15Ｒ-２Ａ（黒曜石Ａ類）：16は、加工痕ある剥片１点（18）と剥片１点（17）の接合資料である。同一打面から小型不整形の縦長剥片が連続して剥離されており、その過程で17→18の順に剥離されている。なお、18の端部には、わずかながら調整加工が見られる。

15Ｒ-３Ａ（黒曜石Ａ類）：19は、加工痕ある剥片２点（21：接合して１個体）と調整加工に由来する剥片１点（20）の接合資料である。中型不定型の剥片を石器の素材とし、下端が折れた（折り取った）後に、裏面（主要剥離面）側からやや急な剥離角で小型の剥片（20）が剥離されている。こうした状況から本資料を考えると、剥片の上下（打面と末端）を切断した後、鋭利な左側縁を上位に向けて、２か所の切断面



第52図　15R-Bブロック出土遺物実測図（1）



第53図　15R-Bブロック出土遺物実測図（2）

に調整加工を施す切出形のナイフ形石器を製作する過程で、中央から斜めに折れたため製作作業を中止したナイフ形石器未成品の可能性がある。

15R-１A（黒曜石A類）：22は、使用痕ある剥片１点（23）と剥片２点（24・25）の接合資料である。本接合資料から見た剥片剥離作業の手順は、以下のとおりである。

①中型不定型の剥片を石核の素材とする。接合図22の裏面左側に広く残る剥離面は、素材時の主要剥離面である。

②接合図裏面を打面、表面を作業面として、23→24→25の順に小型不定型の剥片が剥離される。つまり、素材剥片の末端側から、主要剥離面を打面として剥片剥離作業がなされている。なお、23の裏面末端部には刃こぼれが見られる。また、25の末端部は折損する。

③剥片剥離作業の終了した石核は、かなり小型になったと想定されるが、本ブロック内には見られない。

６．15R-Cブロック（第54図～第57図、第23表・第24表、図版36・図版37）

１）概　要（第54図・第55図、第24表）

15R-Cブロックは、遺跡南部の15Q-50・51・61グリッドに位置し、標高24m～26mの台地平坦面に立地する。ブロックの規模は、長軸4.5m、短軸2.6mの楕円形の範囲で、16点の石器が散漫に分布し、さらに石器群のまとまりから東に３mほど離れた位置に１点が分布する。出土層準は、立川ローム層Ⅳ・Ⅴ層を中心とし、0.5mの高低差をもって、地形に沿って包含されている。

石器組成は、掻器４点、削器１点、使用痕ある剥片１点、剥片10点、石核１点である。石器石材は、黒曜石A類（高原山産）６点、黒曜石E類６点、安山岩３点、頁岩C類２点である。製品の割合が高く、石器製作作業に関連する資料が乏しいブロックである。また、掻器が４点含まれる点は注目される。

第23表　15R-Cブロック母岩別石器組成表

母岩番号	石材	Kn	Po	Kp	Es	Ss	Gr	Dr	Pq	Rf	Uf	Bl	Ax	Hs	As	Uk	Fl	Ch	Co	合計	重量（g）
15R-5	ObE				1												1			2	16.9
15R-8	ShC																		1	1	435.0
15R-9	ShC					1														1	71.3
16R-28	ObE																1			1	0.3
15R-その他	ObA				2												4			6	20.6
15R-その他	ObE				1												2			3	4.1
15R-その他	An										1						2			3	25.4
合　　計		0	0	0	4	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	10	0	1	17	573.6

第24表　15R-Cブロック石材別石器組成表

石　　材	石材	Kn	Po	Kp	Es	Ss	Gr	Dr	Pq	Rf	Uf	Bl	Ax	Hs	As	Uk	Fl	Ch	Co	合計	重量（g）
黒曜石A	ObA				2												4			6	20.6
黒曜石E	ObE				2												4			6	21.3
安山岩	An										1						2			3	25.4
頁岩C	ShC					1													1	2	506.3
合　　計		0	0	0	4	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	10	0	1	17	573.6

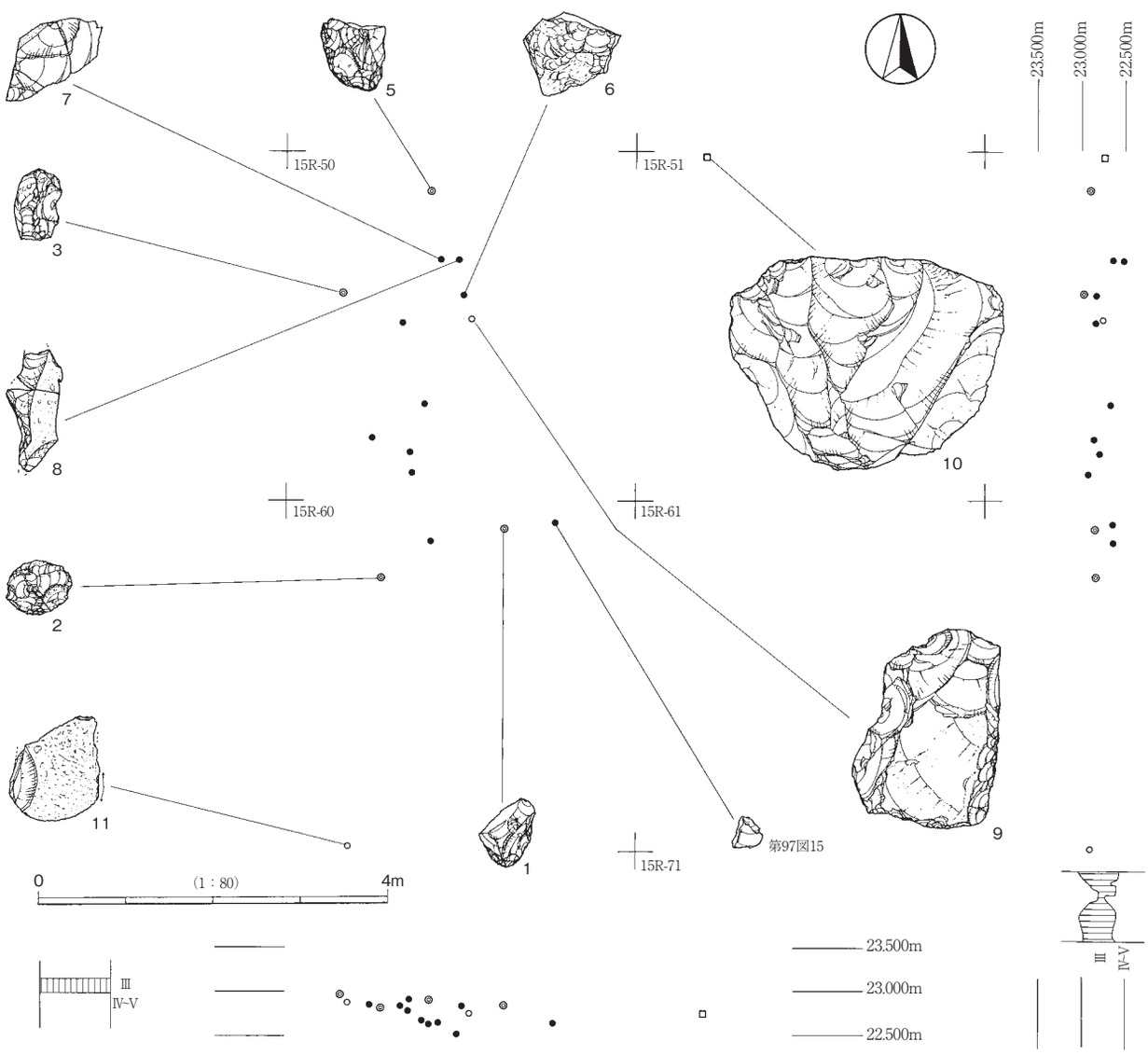
２）母岩別資料（第24表）

本ブロックでは、17点のうち５点を４母岩に区分した（母岩識別率は29％）。内訳は、黒曜石Ｅ類２母岩（15Ｒ-５・18：３点）、頁岩Ｃ類２母岩（15Ｒ-８・９：２点）である。

この他に、母岩分類できなかった資料に、黒曜石Ａ類６点（20.6ｇ）、黒曜石Ｅ類３点（4.1ｇ）、安山岩３点（25.4ｇ）がある。

15Ｒ-５：青みがかった黒灰色不透明の地に、直径１㎜ほどの乳白色の夾雑物を含む黒曜石Ｅ類である。細かく見ると、地の色調は、黒みの強い部分と灰色みの強い部分とが帯状になっている。中型不定型の剥片を素材とする掻器１点、中型不定型の剥片１点、合計２点（16.9g）で構成され、両者は1.3mの距離で接合する（15Ｒ-５Ａ）。２点ともブロック北端に位置する。

15Ｒ-８：自然面はくすんだ橙褐色を呈し、爪痕状の傷が多数見られる曲面と比較的滑らかな平坦面とがある円礫面、内部は橙褐色の地に褐色の斑や灰色のよく珪化した部分が入る頁岩Ｃ類である。大型の石核



第54図　15R-Ｃブロック出土遺物分布図（１）－石器別分布図－

１点（435ｇ）の単独資料である。

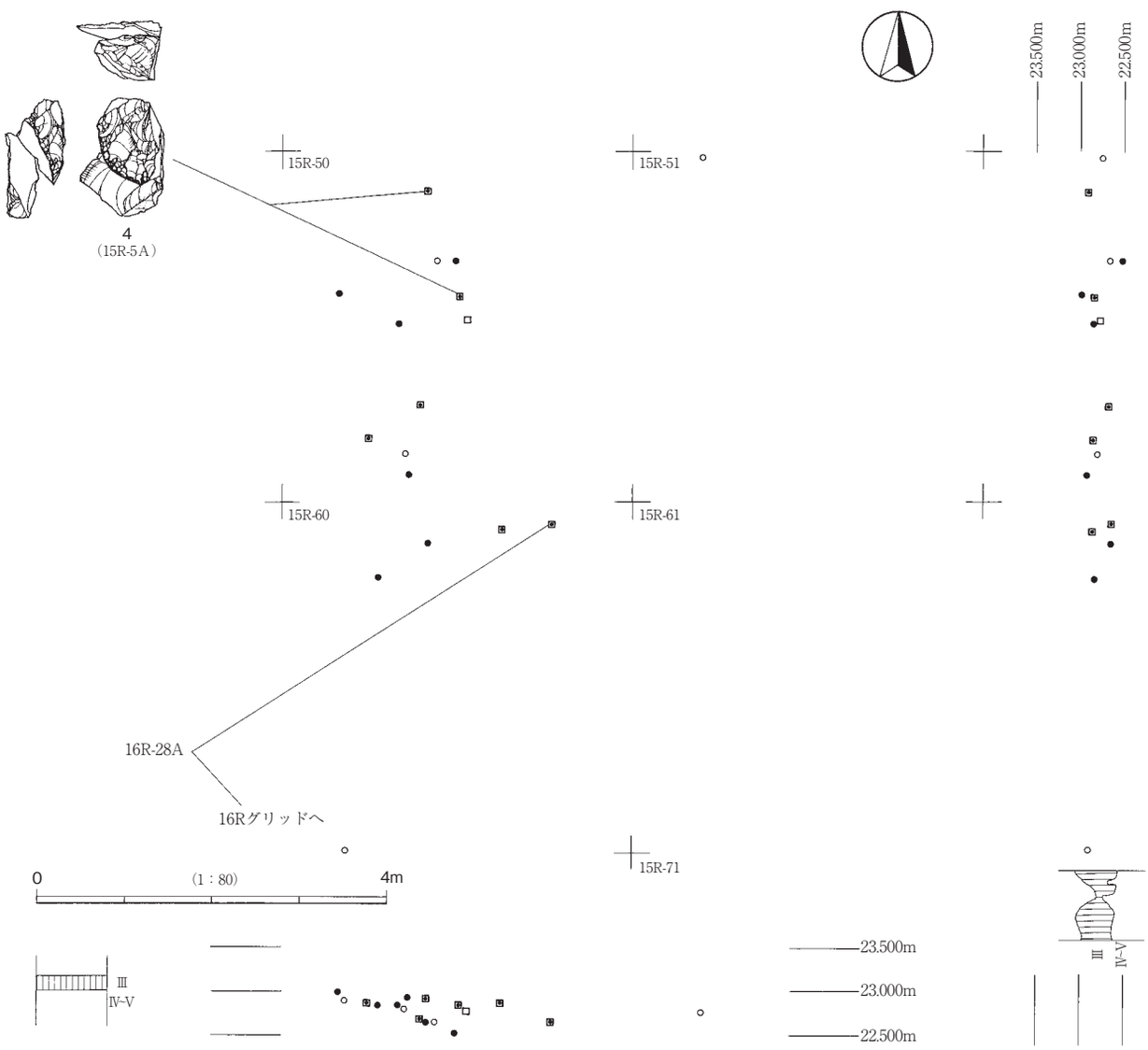
15R-９：灰色の地に灰白色と黒灰色の縞が入る頁岩Ｃ類である。大型不定型の剥片を素材とする削器１点（71.3ｇ）の単独資料である。

16R-28：青みがかった黒色の地に、灰色の縞が入る黒曜石Ｅ類である。本母岩は、小型不定型の剥片を素材とする掻器１点とその調整剥片１点、合計２点（1.4ｇ）で構成され、両者は接合する。

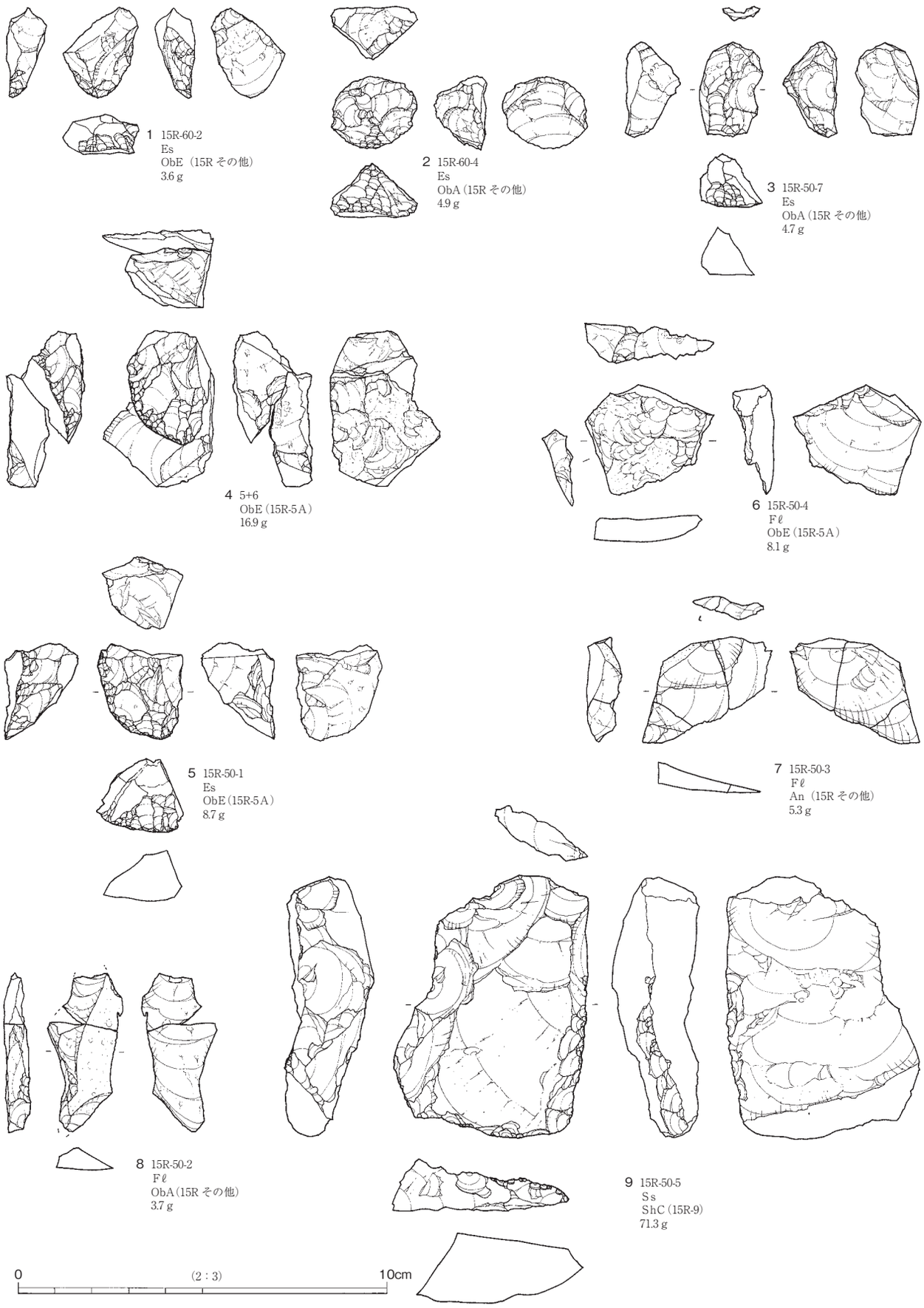
掻器本体は、第７文化層（土器出現期）の資料がまとまって分布する16Ｒグリッドのクラスター３に位置し、当該期の槍先形石器とともに掻器も数多く分布する。一方、本ブロックには小型の調整剥片１点が分布する。帰属時期の決定が困難であるが、掻器も含めて、第３文化層に帰属する可能性が高い。

３）出土遺物（第56図・第57図）

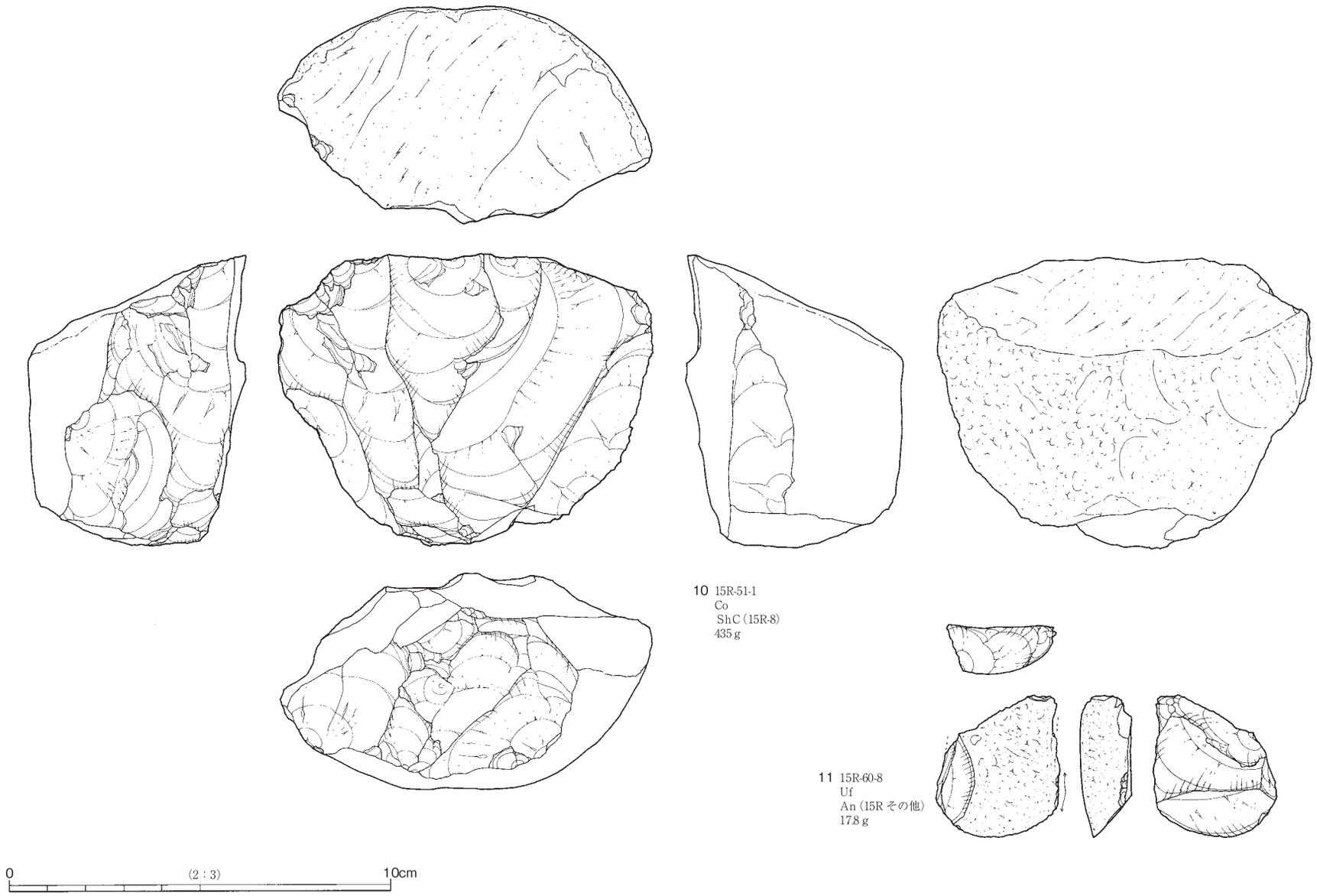
１は、黒曜石Ｅ類による掻器に分類した石器である。小型でやや厚手の不定型な剥片を素材として、素材剥片の右側縁から末端の一部にかけて調整加工がなされている。上端には、素材時の打面の一部が残されている。刃部角は70°ほどで、掻器通有の角度であるが、刃部の平面観が緩やかな弧ではなく、中央に



第55図　15R-Ｃブロック出土遺物分布図（２）－石材別分布図－



第56図　15R-Cブロック出土遺物実測図（1）



第57図　15R-C ブロック出土遺物実測図（2）

稜があり、掻器一般とは異なる形状である。２は、黒曜石Ａ類による掻器である。小型で厚手の剥片を素材としており、末端に施された急角度の調整加工によって、平面的に緩やかな弧を描く刃部が作られている。裏面の上端右側に、素材時の主要剥離面が残されている。３も黒曜石Ａ類による掻器である。小型で厚手の剥片を素材として、末端に急角度の調整加工がなされている。刃部の幅は1.1cmと狭い。

７は安山岩による中型不定型の剥片、８は黒曜石Ａ類による不整形の縦長剥片である。９は、頁岩Ｃ類による削器である。大型不定型の剥片を素材として、右側縁の下半部に裏面からの粗い調整加工が連続する。裏面の末端は、ウートラパッセとなっている。

10は、頁岩Ｃ類による石核である。拳よりも一回り程大きい円礫を素材として、上面の平坦な自然面を打面、表面を作業面として、中型不整形の縦長剥片が剥離されている。11は、安山岩による石核である。中型不定型の剥片を素材として、裏面を打面、左側面を作業面として、小型不定型の剥片が剥離されている。上半部が欠損したため、剥片剥離作業が中断したと考えられる。

実測図を掲載しなかった資料は、黒曜石Ａ類、黒曜石Ｅ類、安山岩による小型不定型の剥片が中心である。なお、黒曜石Ｅ類のうち２点は、掻器を製作ないしは再加工した際に生じる調整剥片の可能性がある小剥片である。

４）接合資料（第56図）

15R-５（黒曜石Ｅ類）：４は、黒曜石Ｅ類による掻器１点（５）と中型不定型の剥片１点（６）の接合資料である。接合図右側面が両者の打面にあたり、交互剥離によって６→５の順で中型不定型の剥片が剥離され、５は掻器に加工されている。

７．17R-Ａブロック（第58図～第66図、第25表・第26表、図版37～図版38）

１）概　要（第58図～第60図、第26表）

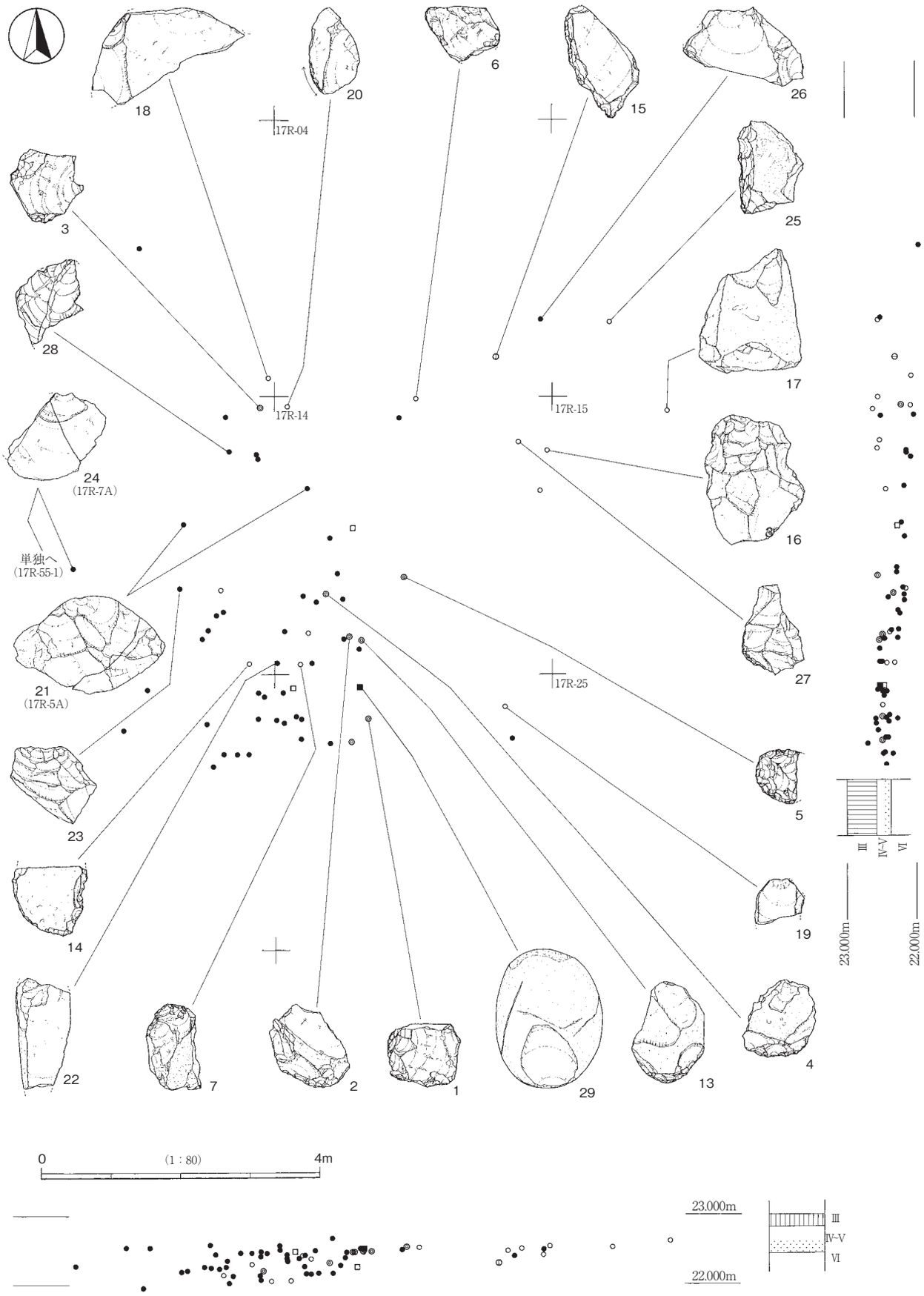
17R-Ａブロックは、遺跡南端の17R-03～05・13～15・23・24グリッドに位置し、標高24m～26mの台地平坦面に立地する。ブロックの規模は、東西8.6m、南北7.6mほどの略円形の範囲で、69点の石器が分布する。分布形状の概略は、17R-24グリッド基準杭周辺のブロック南端に石器群の分布密度が高く、北に向かって拡散する状況である。出土層準は、立川ローム層Ⅳ・Ⅴ層を中心としており、0.4m～0.5mの高低差をもって、地形に沿って包含されている。

石器組成は、掻器７点　削器６点、錐状石器１点、加工痕ある剥片５点、使用痕ある剥片２点、剥片45点、石核２点、敲石１点で、焼け礫は見られない。石器石材は、黒曜石Ａ類（高原山産）14点、安山岩Ⅰ類46点、安山岩Ⅱ類４点、砂岩１点、玉髄４点である（安山岩の区分は、第７文化層と同じ）。石材別分布を見ると、主体となる安山岩がブロック全域に広がっており、次に多い黒曜石Ａ類がブロックの南側に多く分布しているが、概ね石器群全体の分布傾向と一致しており、石材による分布上の偏りはない。

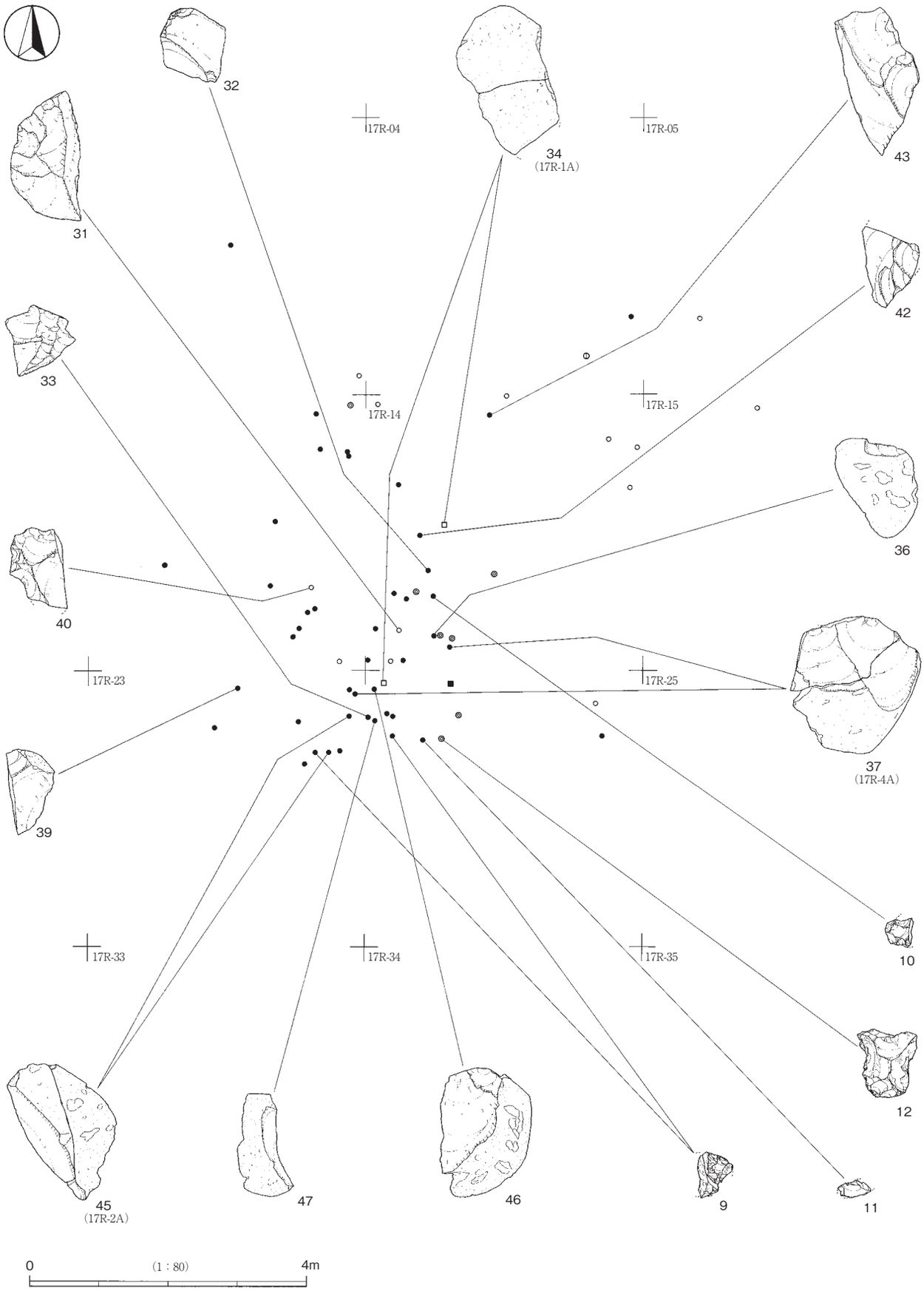
２）母岩別資料（第25表）

本ブロックでは、69点のうち30点を12母岩に区分した（母岩識別率は43％）。内訳は、黒曜石Ａ類１母岩（17R-12：５点）、安山岩Ⅰ類７母岩（17R-１・２・４～８：20点）、安山岩Ⅱ類３母岩（17R-３・９・11：４点）、砂岩１母岩（17R-14：１点）である。

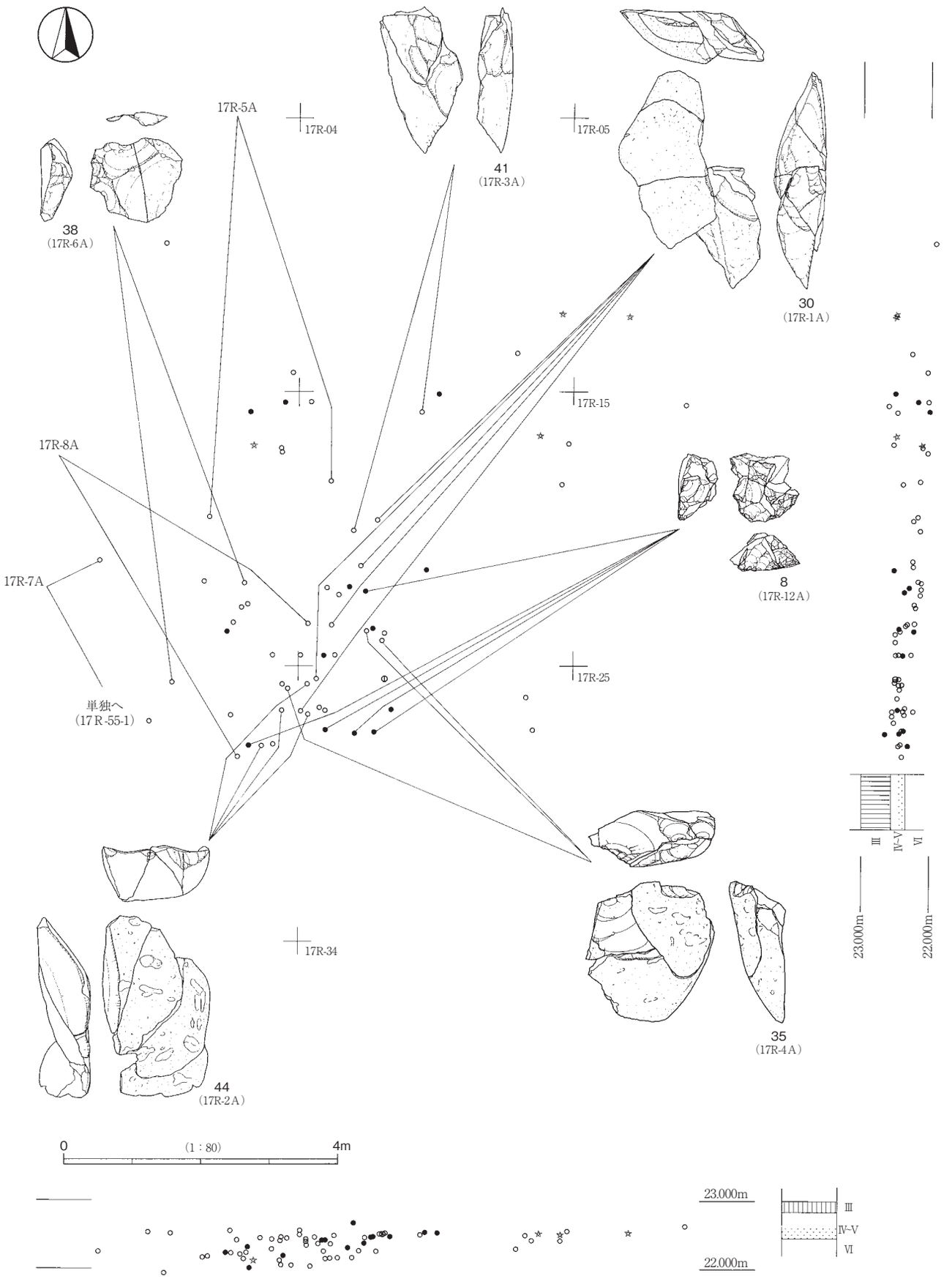
なお、安山岩Ⅰ類と黒曜石Ａ類については、それぞれの岩相が個性的ではなかったことから、接合資料に限って母岩番号を付し、それ以外の資料は、その他としてまとめた。したがって、母岩分類できなかっ



第58図　17R-Aブロック出土遺物分布図（1）－石器別分布図（1）－



第59図　17R-Aブロック出土遺物分布図（2）－石器別分布図（2）－



第60図　17R-Aブロック出土遺物分布図（3）－石材別分布図－

た資料の中に、母岩番号を付したものと同じ母岩が含まれる可能性がある。一方、別々の母岩に分類した資料についても、同じ母岩に統合される可能性がある。なお、母岩分類できなかった資料に、黒曜石Ａ類９点（82.2ｇ）、安山岩Ⅰ類26点（232.9ｇ）、玉髄４点（48.6ｇ）がある。

17Ｒ-１：自然面は灰褐色を呈し、極めて浅い爪痕状の傷のある部分と、紙やすり状の部分とがある円礫面、内部は暗灰褐色の地に直径１㎜ほどの夾雑物が散在する安山岩である。また、内部に黄灰色の不純物の薄層が見られる。中型不定型の剥片による削器１点､剥片２点､剥片素材の石核２点（接合して１個体)、合計５点（85.9ｇ）で構成され、全て接合する。この５点は、ブロックの南側の密集部で、長さ３ｍの直線状の範囲に並んで分布する。

17Ｒ-２：自然面は灰褐色を呈し、紙やすり状の面に長軸５㎜ほどの不整楕円形の痘痕が散在する円礫面、内部は灰褐色で、夾雑物の乏しい安山岩である。中型不定型の剥片４点（接合して３個体：84.0ｇ）で構成され、全て接合する。ブロック南端の、直径１ｍほどの範囲に分布する。

17Ｒ-３：灰褐色を呈し、夾雑物が乏しく硬質緻密な質感の安山岩である。中型の横長剥片と小型の剥片各１点（合計29.9ｇ）で構成され、表裏で接合する。なお、小型の剥片は黒灰色に変色しており、被熱したと考えられる。両者は、ブロックの中心部よりも北側で、相互に２ｍ離れて分布する。

17Ｒ-４：自然面は灰褐色を呈し、紙やすり状の面に長軸５㎜ほどの不整楕円形の痘痕が散在する円礫面、内部は灰褐色で、夾雑物の乏しい安山岩である。中型不定型の剥片３点（接合して２個体：78.7ｇ）で構成され、全て接合する。ブロック南端の、直径1.5ｍほどの範囲に分布する。

17Ｒ-５：自然面は、灰褐色を呈する紙やすり状の円礫面、内部は灰褐色で、夾雑物の乏しい安山岩である。中型厚手の剥片２点（接合して１個体：49.4ｇ）で構成される。ブロックの北側で相互に２ｍ離れて分布する。

17Ｒ-６：自然面は灰褐色を呈し、紙やすり状の面に長軸３㎜ほどの不整楕円形の痘痕が散在する円礫面、内部は灰褐色で､夾雑物の乏しい安山岩である。削器１点､剥片１点､合計２点（19.4ｇ）で構成されるが、本資料は、中型不定型の剥片が剥離時に打点で二つに割れ、その一方が削器に加工されたものである。両者ともブロック密集部の外縁部に位置し、相互に1.8ｍ離れて分布する。

17Ｒ-７：灰褐色を呈し、直径１㎜ほどの夾雑物が散在する安山岩である。中型不定型の剥片２点（接合して１個体：6.7ｇ）で構成される。一方は本ブロックの西側外縁部（17Ｒ-13グリッド）に、もう一方は17Ｒ-55グリッドに単独資料として分布しており、両者は18ｍ離れている。17Ｒ-55グリッドから出土した資料は、わずかに赤みを帯びていることから、被熱したか、あるいは埋没過程で条件が異なった可能性がある。

17Ｒ-８：自然面は、灰褐色を呈し、紙やすり状の円礫面、内部は灰褐色で夾雑物の乏しい安山岩である。小型不定型の剥片２点（接合して１個体：2.3ｇ）で構成される。

17Ｒ-９：青みがかった黒灰色を呈し、直径１㎜ほどの乳白色の鉱物を含む夾雑物が散在する、硬質緻密な質感の安山岩である。中型不定型の剥片を素材とする錐状石器１点（15.9ｇ）の単独資料である。

17Ｒ-11：暗灰褐色を呈し、直径１㎜ほどの夾雑物が散在する安山岩である。中型不定型の剥片を素材とする加工痕ある剥片１点（23.5ｇ）の単独資料である。

17Ｒ-12：黒色不透明で、直径１㎜～２㎜の夾雑物を多量に含む黒曜石Ａ類である。中型厚手の剥片を素材とする掻器１点とその調整剥片４点（接合して３個体)、合計５点（12.3ｇ）で構成される。関連資料

が乏しいことから、この調整剥片は、製作初期のものではなく、再生作業の一環で生じたものと想定される。ブロック南側の密集部を中心として、直径３ｍほどの範囲に分布する。

17R-14：青みがかった黒灰色を呈する硬質細粒の砂岩である。6.5㎝×５㎝×３㎝ほどの円礫を利用した敲石１点（131.2ｇ）の単独資料である。

以上、安山岩については、先述したとおり、接合資料に限って母岩番号を付し７母岩としたが、相互に類似しており、２ないしは３母岩に統合される可能性がある。

３）出土遺物（第61図～第63図・第65図）

１～５は、黒曜石Ａ類による掻器である。中型不定型の剥片を素材として、素材剥片の末端部（１・４）、打面側（２）、側縁側（３・５）など、各所に刃部が設けられている。５は、左側縁から下端にかけて細かく加工され、右側は欠損している。これは、剥離時に打点で二つに割れた剥片を素材としたようにも見えるが、下端の細かな剥離面（刃部の加工）は右の折れ面に切られていると観察されることから、左右両側縁を加工されたものが、脆弱になっていた打点下で二つに折れたと考えられる。８は、掻器１点（12）と調整剥片４点（接合して３個体：９～11）の接合資料である。刃部の再生作業に伴って調整剥片を剥離したと考えられるが、残された資料は、刃部の一部（10）、側縁の再加工（９･11）など各所に及んでいる。

６・７は、黒曜石Ａ類による削器で、中型不定型の剥片を素材とする。６は、薄手の表面左側縁に大きさの揃った微細な剥離痕が連続する。７も左側縁の上部に調整加工が見られる。左側縁の中央から下部にかけては、調査時の傷（ガジリ）があり、本来の刃部の範囲は不明である。

13～24は、安山岩による石器群で、13は掻器、14は削器である。両者とも、比較的薄手で不定型の剥片を素材として、裏面から調整加工がなされている。15は錐状石器である。中型不定型で板状の剥片を素材として、上半部を斜めに切断し、左側縁の全体と右側面下部を裏面から急角度の剥離で調整されている。16～19は、不定型の剥片を素材とする加工痕ある剥片である。16は、両側縁の上半部に裏面からの粗い調整加工があり、大型のナイフ形石器のようにも見える。それ以外は、剥片の一部に、主要剥離面を打面とする剥離面がわずかに見られるにすぎない。20は、小型の剥片を利用した使用痕ある剥片である。剥片末端部に、不揃いで微細な剥離痕が連続する。21～24は、不定型の剥片である。

25～28は、玉髄による石器群である。25は、不定型厚手の剥片を素材として、表面左側縁に厚手で粗い刃部のある削器である。27も削器とした資料である。比較的薄手の不定型な剥片を素材として、表面左側縁の下部に細かな剥離痕が連続する。26は中型の横長剥片、28は不定型の剥片である。28の右側は、剥離時に剥落している。

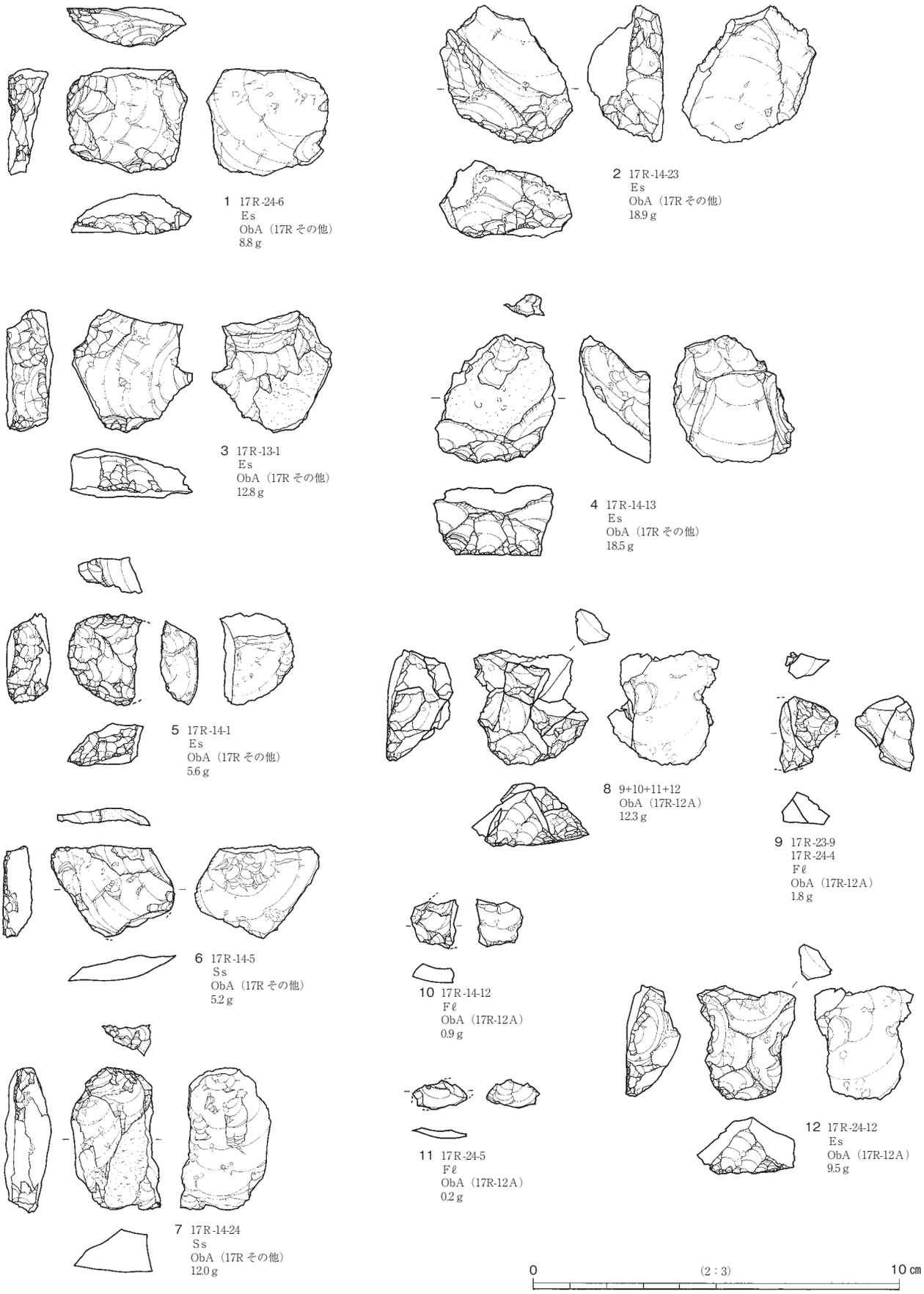
29は、砂岩による敲石である。小型の円礫を素材としたもので、上下両端が潰れている。

38は、安山岩による加工痕ある剥片１点（40）と剥片１点（39）の接合資料である。この資料は、中型不定型の剥片が剥離された時に、打点から二つに割れたもので、表面右側（39）はそのままの状態、左側は裏面から調整加工がなされている。

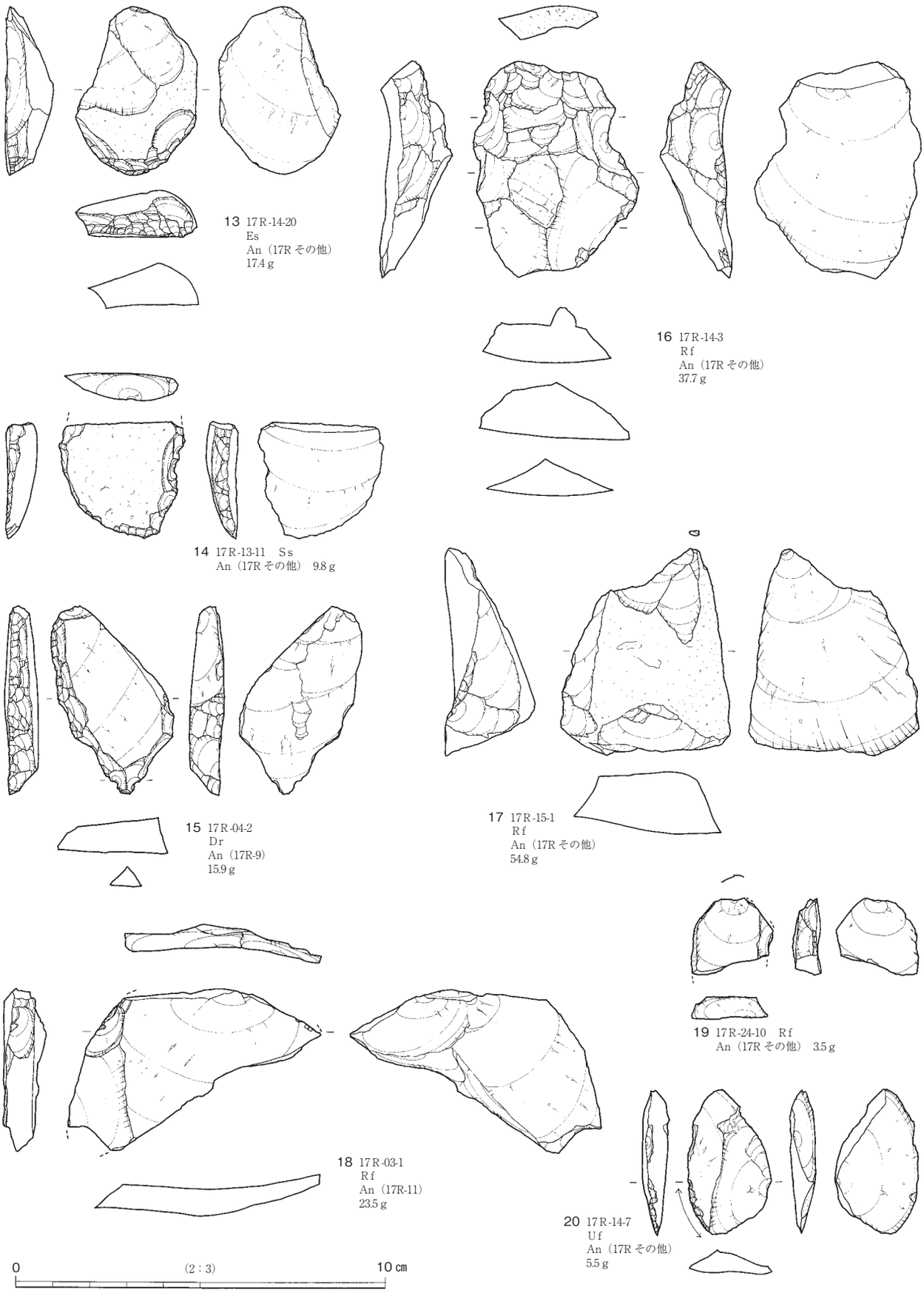
４）接合資料（第64図～第66図）

17R-１Ａ（安山岩）：30は、削器１点（31）、剥片２点（32・33）、石核２点（接合して１個体：34）の接合資料である。大型厚手の剥片を石核の素材として、中・小型の横長剥片が生産される資料である。本資料から見た作業手順は以下のとおりである。

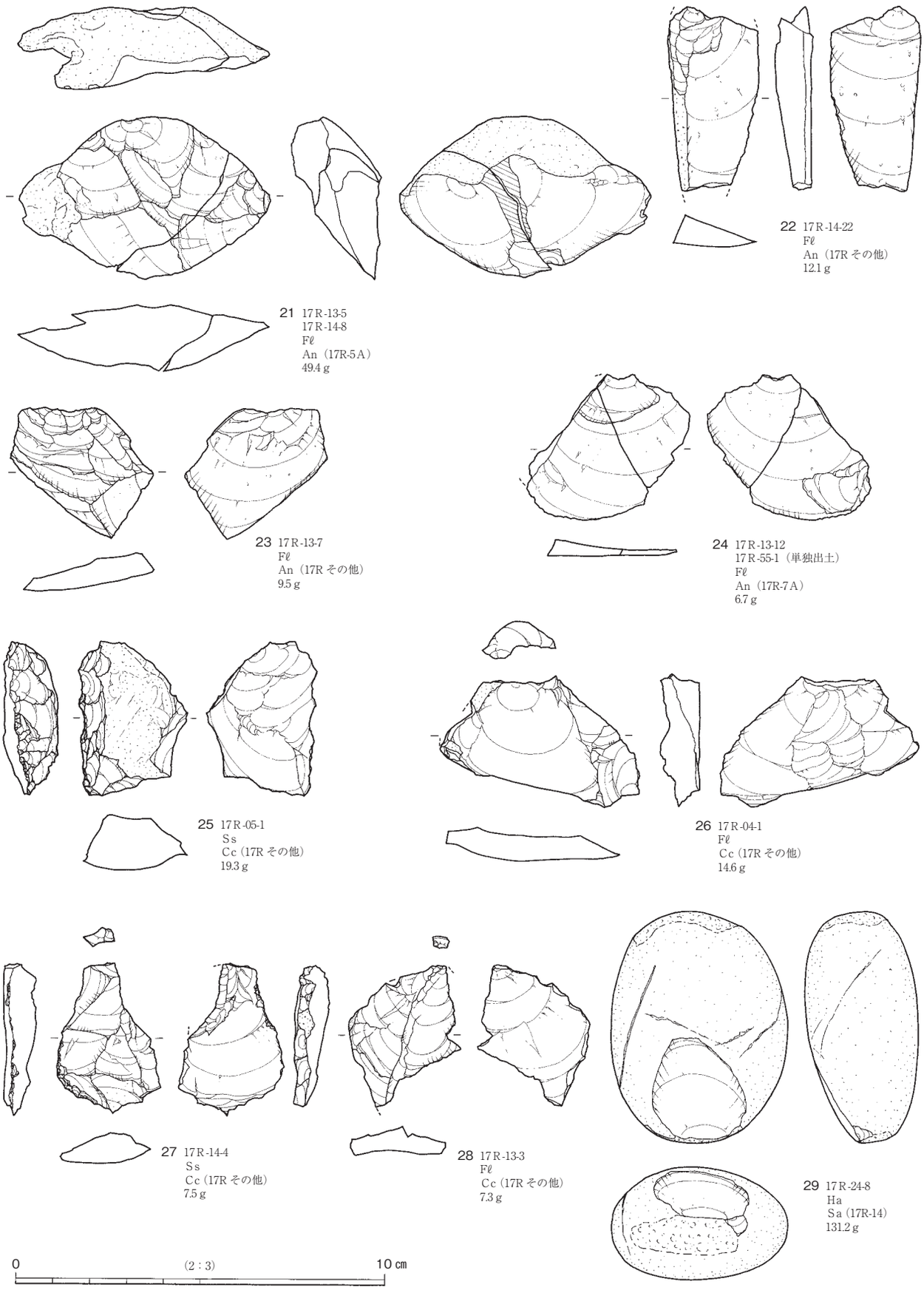
①拳よりも一回りほど大きな円礫から、長さ７㎝、幅11㎝ほどの大型剥片を剥離して、石核の素材とする。



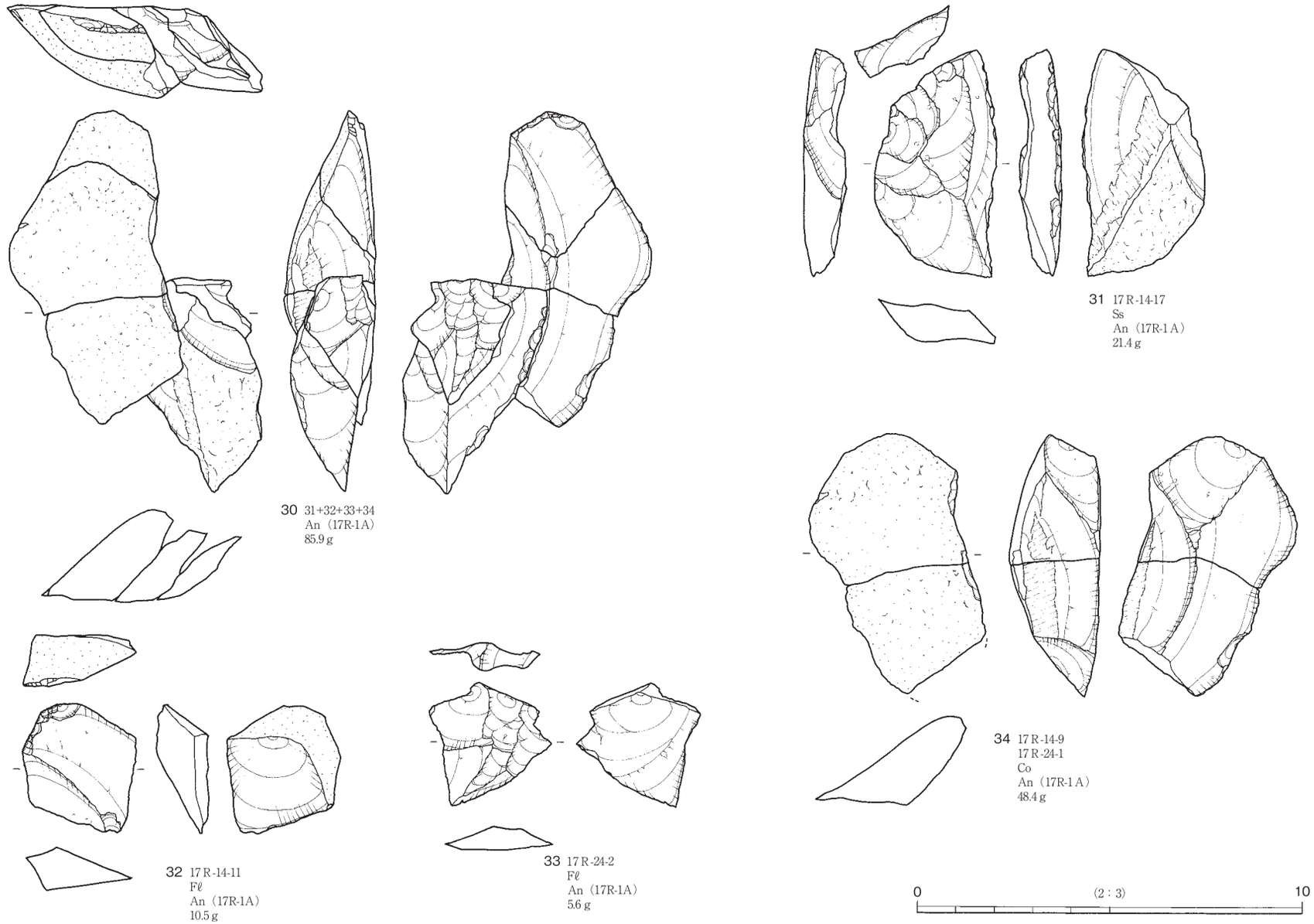
第61図　17R-Aブロック出土遺物実測図（1）



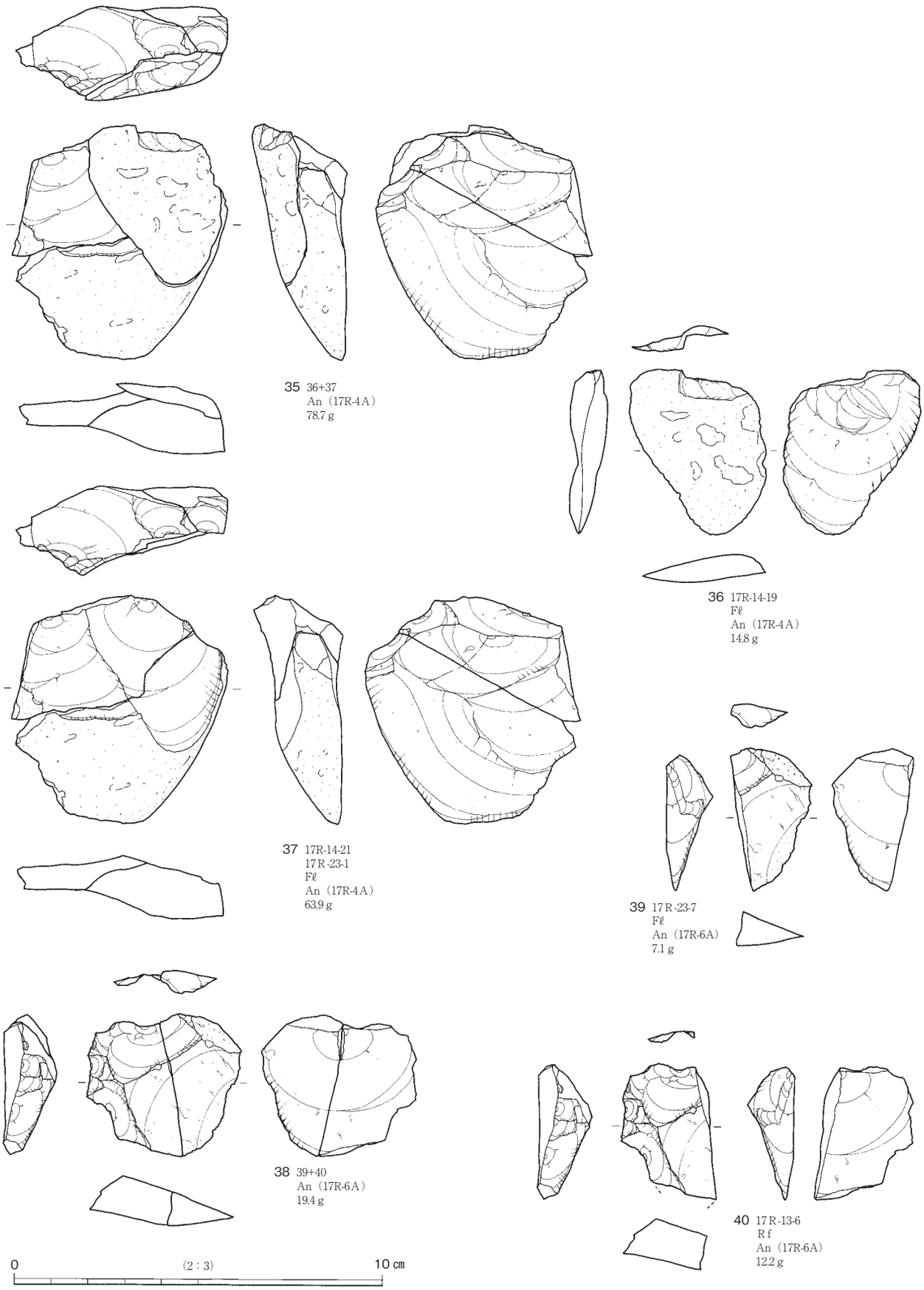
第62図　17R-Aブロック出土遺物実測図（2）



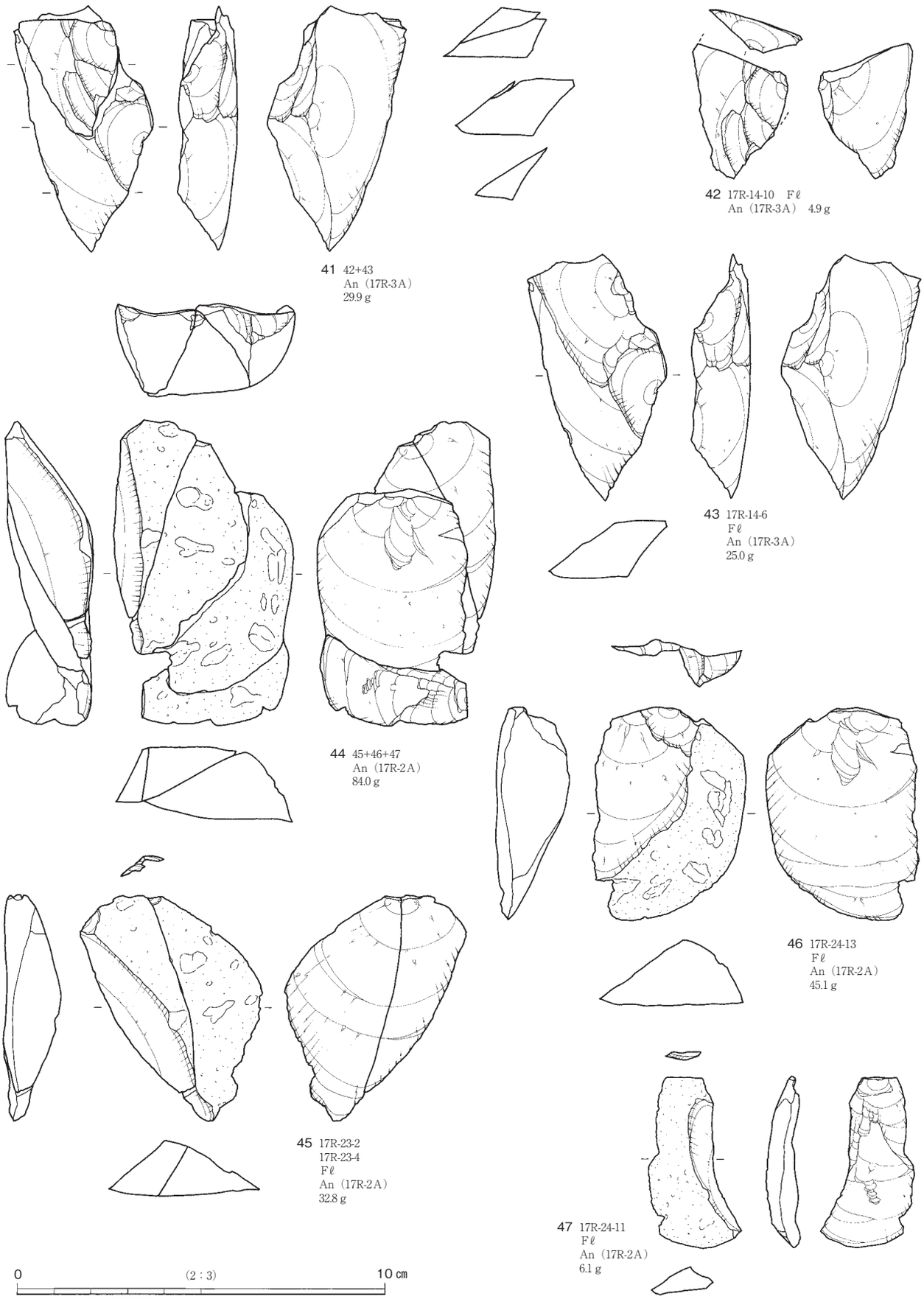
第63図　17R-Aブロック出土遺物実測図（3）



第64図　17R-Aブロック出土遺物実測図（4）



第65図　17R-Aブロック出土遺物実測図（5）



第66図　17R-Aブロック出土遺物実測図（6）

②素材剥片の打面側で、打面と作業面を交互に入れ替えながら、横長剥片が剥離される。この最終段階で31と33を含む大型の横長剥片が剥離される。

③31と33を含む横長剥片は、上半部が折れ（あるいは切断され）、その折れ面を打面として33が剥離される。33の剥離については、31が石核としてなされたものか、削器の加工の一環としてなされたかは不明であるが、最終的に31は右側縁が細かく加工され、削器となっている。

④残された石核の上端から32が剥離され、作業が終了している。

17R-４A（安山岩）：35は、剥片３点（接合して２個体：36・37）の接合資料である。本資料から見た作業手順は、以下のとおりである。

①自然面の広く残る安山岩円礫の一端に打面が設定され、接合図35の上端を打面、表面を作業面として、36が剥離される。

②接合図35の表面側を打面、上面を作業面として、剥片が剥離される。

③再び、接合図35の上端を打面、表面を作業面として、37が剥離される。

17R-３A（安山岩）：41は、横長剥片２点（42・43）が表裏で接合した資料である。本資料から見た作業手順は、以下のとおりである。

①はじめに、大型厚手の剥片が剥離され、石核の素材となる。接合図41の表面左側にある広い剥離面は、

第25表　17R-Aブロック母岩別石器組成表

母岩番号	石材	Kn	Po	Kp	Es	Ss	Gr	Dr	Pq	Rf	Uf	Bl	Ax	Hs	As	Uk	Fl	Ch	Co	合計	重量（g）
17R-1	An					1											2		2	5	85.9
17R-2	An																4			4	84.0
17R-3	An																2			2	29.9
17R-4	An																3			3	78.7
17R-5	An																2			2	49.4
17R-6	An									1							1			2	19.4
17R-7	An																1			1	4.6
17R-8	An																2			2	2.3
17R-9	An							1												1	15.9
17R-11	An									1										1	23.5
17R-12	ObA				1												4			5	12.3
17R-14	Sa													1						1	131.2
17R-その他	ObA				5	2											2			9	82.2
17R-その他	An				1	1				3	2						18			25	232.9
17R-その他	Cc					2											2			4	48.6
合　　計		0	0	0	7	6	0	1	0	5	2	0	0	1	0	0	43	0	2	67	900.8

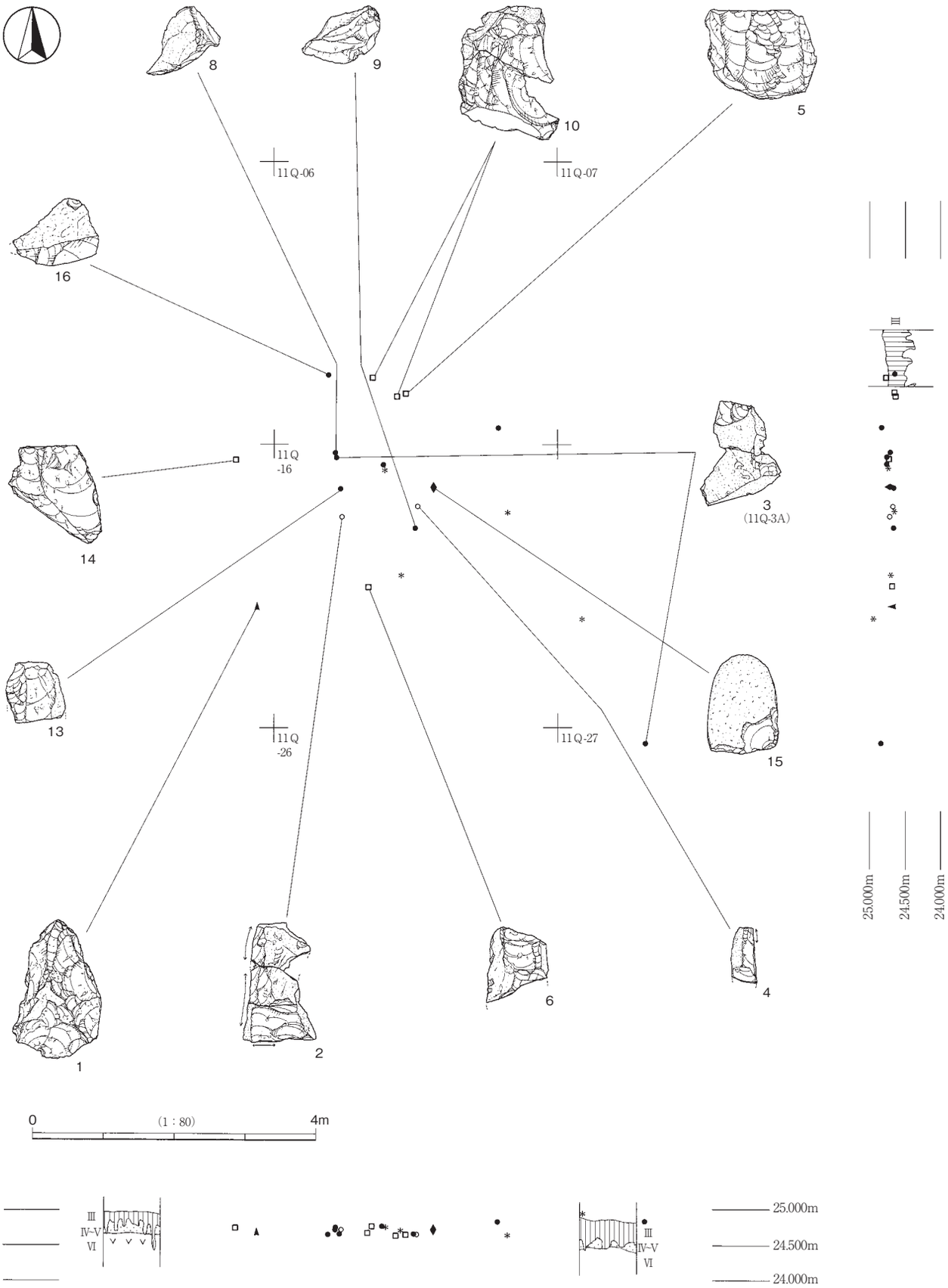
第26表　17R-Aブロック石材別石器組成表

石　　材	石材	Kn	Po	Kp	Es	Ss	Gr	Dr	Pq	Rf	Uf	Bl	Ax	Hs	As	Uk	Fl	Ch	Co	合計	重量（g）
黒曜石Ａ	ObA				6	2											6			14	94.5
安山岩	An				1	2		1		5	2						35		2	48	626.5
砂岩	Sa													1						1	131.2
玉髄	Cc					2											2			4	48.6
合　　計		0	0	0	7	6	0	1	0	5	2	0	0	1	0	0	43	0	2	67	900.8

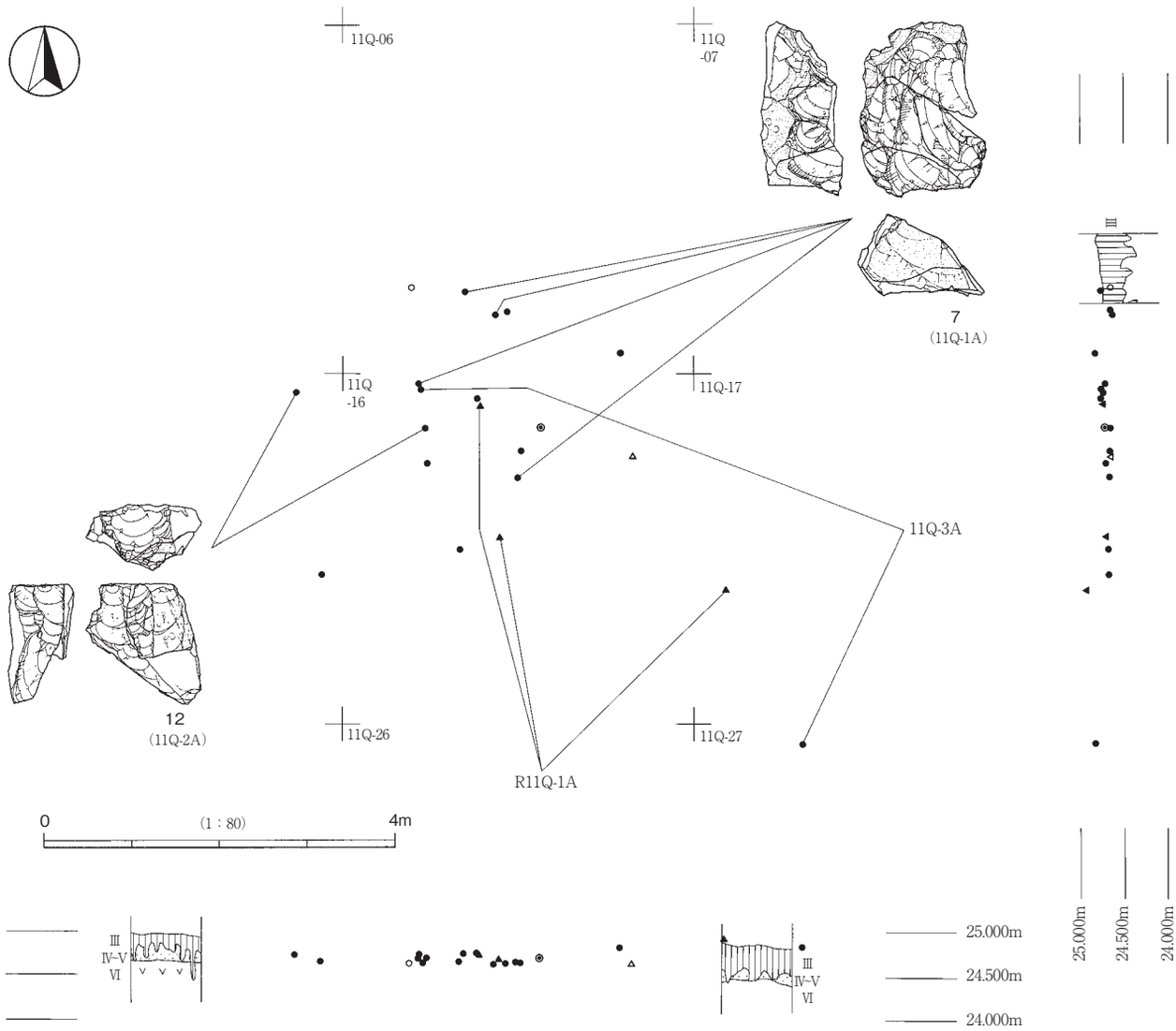
素材剥片の主要剥離面である。
②素材剥片の打面部で、打面と作業面を交互に入れ替えながら、横長剥片が剥離される。作業の順序は、接合図41の裏面下部の剥離面→41表面下部の剥離面→42→41裏面上部の剥離面→43で、交互剥離がなされながら、下から上に向けて作業が進行している。
17R-２A（安山岩）：44は、剥片４点（接合して３個体：45 ～ 47）の接合資料である。表面に自然面が広く残る資料が多く、比較的剥片が大きいことから、剥片剥離作業の前半の工程で生じた資料と考えられる。本資料から見た作業手順は、以下のとおりである。
①接合図44の上端に打面が設定され、表面を作業面として、45が剥離される。なお、45の表面には45の剥離方向と直交する古い剥離面があるが、①以前の作業については、詳細不明である。
②接合図44の表面を打面、上面を作業面として、剥片が剥離される。
③接合図44の上面を打面、表面を作業面として、46が剥離される。
④接合図44の左側面を打面、表面を作業面として、47が剥離される。
以上、打面と作業面を交互に入れ替えながら、剥片剥離作業の前半の工程が進行している。

第４文化層
本文化層は、立川ローム層Ⅲ層中位を中心に包含される石器群で、「砂川期石器群」に相当すると考えられる。中・小型の石刃石器群で、定型的な石器には、ナイフ形石器と両面調整の槍先形石器がある。11Q-A、12P-A、13P-Aブロックが該当する。

１．11Q-Aブロック（第67図～第70図、第27表～第30表、図版40）
１）概　要（第67図・第68図、第28表・第30表）
11Q-Aブロックは、遺跡中央の11Q-06・15 ～ 17・27グリッドに位置し、標高24m～ 26mの台地上で、北に向かう浅い谷の谷頭まで90mの地点に立地する。ブロックの規模は、長軸6.9m、短軸4.2mほどの楕円形の範囲で、21点の石器・礫が散漫に分布する。出土層準は、立川ローム層Ⅲ層上半部を中心としており、0.3m～ 0.4mの高低差をもって、ほぼ水平に包含されている。
石器組成は、槍先形石器１点、使用痕ある剥片２点、剥片８点、石核５点、石斧１点、礫４点である。石器石材は、黒曜石Ａ類（高原山産）15点、安山岩１点、ホルンフェルス１点、礫石材は、流紋岩３点、チャート１点である。石器・礫ともに散漫な分布状況で、石器製作作業の痕跡は乏しいが、剥片と石核や礫相互など、合計４組の接合資料がある。
２）母岩別資料（第27表・第29表）
本ブロックでは、石器類17点のうち、14点を８母岩に分類した（母岩識別率82％）。内訳は、黒曜石Ａ類６母岩（11Q-１～６：12点）、安山岩１母岩（11Q-８：１点）、ホルンフェルス１母岩（11Q-７：１点）である。なお、母岩分類できなかった資料に黒曜石Ａ類３点（1.8ｇ）がある。
礫は、流紋岩３点、チャート１点があり、そのうち接合関係のある流紋岩３点に母岩番号を付した（R11Q-１）。
11Q-１：自然面は、くすんだ黒色を呈し、きめ細かな紙やすり状の部分と、風化した剥離面とで構成される角礫面、内部はくすんだ黒色不透明で、直径１㎜～３㎜の夾雑物を多く含む黒曜石Ａ類である。小



第67図　11Q-Aブロック出土遺物分布図（1）－石器別分布図－



第68図　11Q-Aブロック出土遺物分布図（２）－石材別分布図－

型不定型の剥片２点、石核２点（接合して１個体）、合計４点（59.9ｇ）で構成され、全て接合する（11Q-１A）。この４点の資料は、ブロックの中央北寄りに位置し、長軸2.3m、短軸1.2mの楕円形の範囲に散漫に分布する。なお、本ブロックから出土した黒曜石Ａ類は、総じて表面が曇ったように風化している。一般的に、弱い被熱の場合は、接合資料の中で個体差が生じるので、表面が曇ったような風化は埋没過程ないしはそれ以後に生じたと考えられる。

11Q-２：自然面は、くすんだ黒色を呈し、きめ細かな紙やすり状の部分と、風化した剥離面とで構成される角礫面、内部は黒灰色不透明で、直径１㎜～２㎜の夾雑物が散在する黒曜石Ａ類である。中型の縦長剥片１点（欠損品）と石核１点、合計２点（31.8ｇ）で構成され、接合する（11Q-２A）。２点ともブロックの西側に位置し、接合距離は、1.5mである。

11Q-３：自然面は、黒灰色できめ細かな紙やすり状を呈する複数の面で構成される角礫面、内部は黒灰色不透明で、直径１㎜～２㎜の夾雑物を含む黒曜石Ａ類である。表面が自然面に覆われた中型不定型の剥

片２点（接合して１個体：12.9ｇ）で構成される。１点はブロックの中央部に、もう１点はブロック南東端に位置し、接合距離は６ｍである。

11Q- 4：自然面は、黒灰色を呈する風化した古い剥離面、内部は灰色がかった黒色不透明で、直径１㎜～２㎜の夾雑物が散在する黒曜石Ａ類である。中型の縦長剥片を利用した使用痕ある剥片１点（10.0ｇ）の単独資料である。

11Q- 5：自然面は、黒灰色で風化した剥離面、内部は灰色がかった黒色不透明で、直径１㎜～２㎜の夾雑物が散在する黒曜石Ａ類である。中・小型の石刃が剥離された薄手の石核２点（別個体：48.5ｇ）で構成される。

11Q- 6：自然面は、黒灰色を呈する風化した剥離面、内部は灰色がかった黒色不透明で、直径１㎜～２㎜の夾雑物を多く含む黒曜石Ａ類である。両面調整の槍先形石器１点（36.9ｇ）の単独資料である。

11Q- 7：灰色で粘板岩質のホルンフェルスである。小型で扁平な石斧１点（14.3ｇ）の単独資料である。

11Q- 8：自然面は、灰褐色で爪痕状の傷が多数入る円礫面、内部は、黒みがかった灰褐色の地に直径0.5㎜の夾雑物がわずかに入る安山岩である。自然面は湾曲が小さいことから、原石はやや大型の円礫と想定されるが、風化した色調は房総半島の旧石器時代石器に通有の安山岩であり、上総丘陵砂礫層を含む河川

第27表　11Q-Aブロック母岩別石器組成表

母岩番号	石材	Kn	Po	Kp	Es	Ss	Gr	Dr	Pq	Rf	Uf	Bl	Ax	Hs	As	Uk	Fl	Ch	Co	合計	重量（ｇ）
11Q-1	ObA																2		2	4	59.9
11Q-2	ObA																1		1	2	31.8
11Q-3	ObA																2			2	12.9
11Q-4	ObA										1									1	10.0
11Q-5	ObA																		2	2	48.5
11Q-6	ObA		1																	1	36.9
11Q-7	Ho												1							1	14.3
11Q-8	An																1			1	10.0
11Q- その他	ObA										1						2			3	1.8
合　　計		0	1	0	0	0	0	0	0	0	2	0	1	0	0	0	8	0	5	17	226.1

第28表　11Q-Aブロック石材別石器組成表

石　　材	石材	Kn	Po	Kp	Es	Ss	Gr	Dr	Pq	Rf	Uf	Bl	Ax	Hs	As	Uk	Fl	Ch	Co	合計	重量（ｇ）
黒曜石Ａ	ObA		1								2						7		5	15	201.8
安山岩	An																1			1	10.0
ホルンフェルス	Ho												1							1	14.3
合　　計		0	1	0	0	0	0	0	0	0	2	0	1	0	0	0	8	0	5	17	226.1

第29表　11Q-Aブロック母岩別礫組成表

母岩番号	石材	個数	重量（ｇ）
R11Q-1	Rh	3	63.5
R11Q- その他	Ch	1	6.1
合　　計		4	69.6

第30表　11Q-Aブロック石材別礫組成表

石　材	石材	個数	重量（ｇ）
流紋岩	Rh	3	63.5
チャート	Ch	1	6.1
合　　計		4	69.6

下流域に産する安山岩と考えられる。小型不定型の剥片１点（10.0ｇ）の単独資料である。

R11Q-１：表面は淡赤褐色、内部は灰白色の地に直径１㎜ほどを中心とする夾雑物を含む流紋岩で、円礫の一部分である。被熱により赤化、破砕しており、３点の破片が接合したが、遺存率は25％以下である。この３点は、ブロックの中央及び東側に位置し、長軸3.6m、短軸1.4mの楕円形の範囲に分布する。

３）出土遺物（第69図・第70図）

１は、黒曜石Ａ類による槍先形石器である。表裏両面に調整加工が及ぶが、表面（実測図左面）中央に自然面が残されること、横断面形は背の低い三角形に近い形状であることから、素材は厚手の剥片で、裏面に素材時の主要剥離面があったと考えられる。表面下端の剥離面は、他の剥離面と風化の度合いが異なること、また、他の剥離面には全体に細かな傷が見られることから、製作地からの長距離移動→欠損→再加工があったと想定される。２、４は、黒曜石Ａ類による中･小型の縦長剥片を利用した使用痕ある剥片、３は、黒曜石による中型不定型の剥片である。５は、黒曜石Ａ類による石刃石核である。上端の折れ面を打面、表面を作業面として、中型の石刃が連続して剥離されており、扁平な形状になっている。裏面に広く残る面は、角礫面（自然面）と考えられる。６は、５と同一母岩の石核の破片である。上端の裏面側に細かな剥離面による打面が設けられ、表面側で剥片が剥離されている。裏面の角礫面が５ときわめて類似していることから、作業工程のある段階に５から折れた一部と想定される。15は、ホルンフェルスによる小型の石斧とした資料である。形状は、横断面形が薄い凸レンズ状を呈し、平面形は、上部が緩やかな弧状、下端が直線的である。下端は薄い両刃の刃部で、使用痕か加工痕かは判然としないが、剥離面が並んでいる。左右両側縁には、わずかながら平坦な面が形成されている。このような石器は、当該期には類例がなく、縄文時代の資料が混在した可能性もある。16は、安山岩による小型不定型の剥片である。

４）接合資料（第69図・第70図）

11Q-１（黒曜石Ａ類）：７は、小型不定型の剥片２点（８・９）と石核２点（10・11）の接合資料である（11Q-１Ａ）。本資料から想定される剥片剥離作業は、以下のとおりである。

①原石は、接合資料の表裏両面に自然面が残されていることから、７㎝×６㎝×３㎝程度の角礫と考えられる。

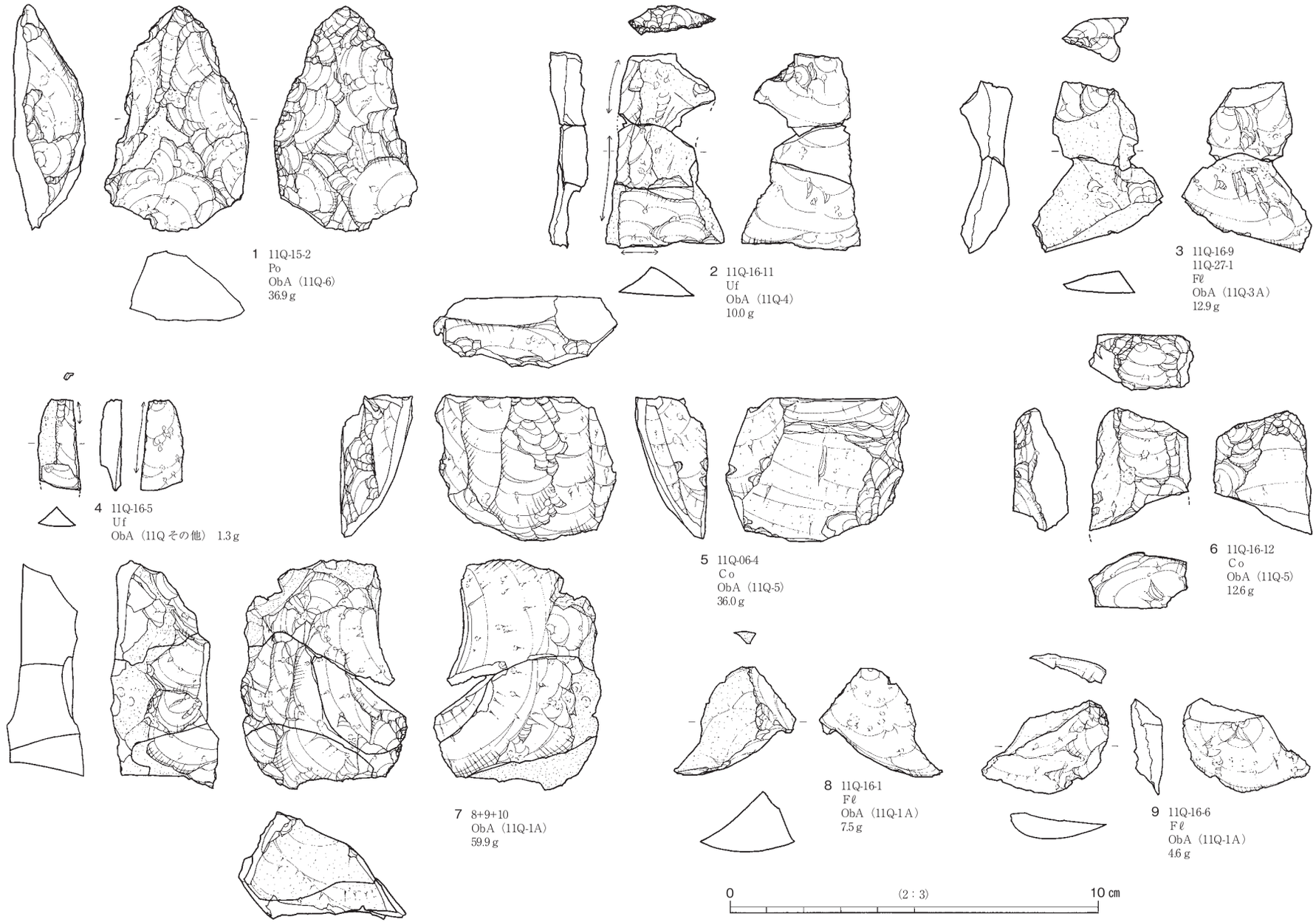
②接合図７の表面右側で交互剥離がなされ、中型不定型の剥片が剥離される。表裏に残る広い剥離面は、いずれもネガティブな剥離面である。

③接合図７の裏面を打面、下端を作業面として、小型不定型の剥片（８）が剥離される。

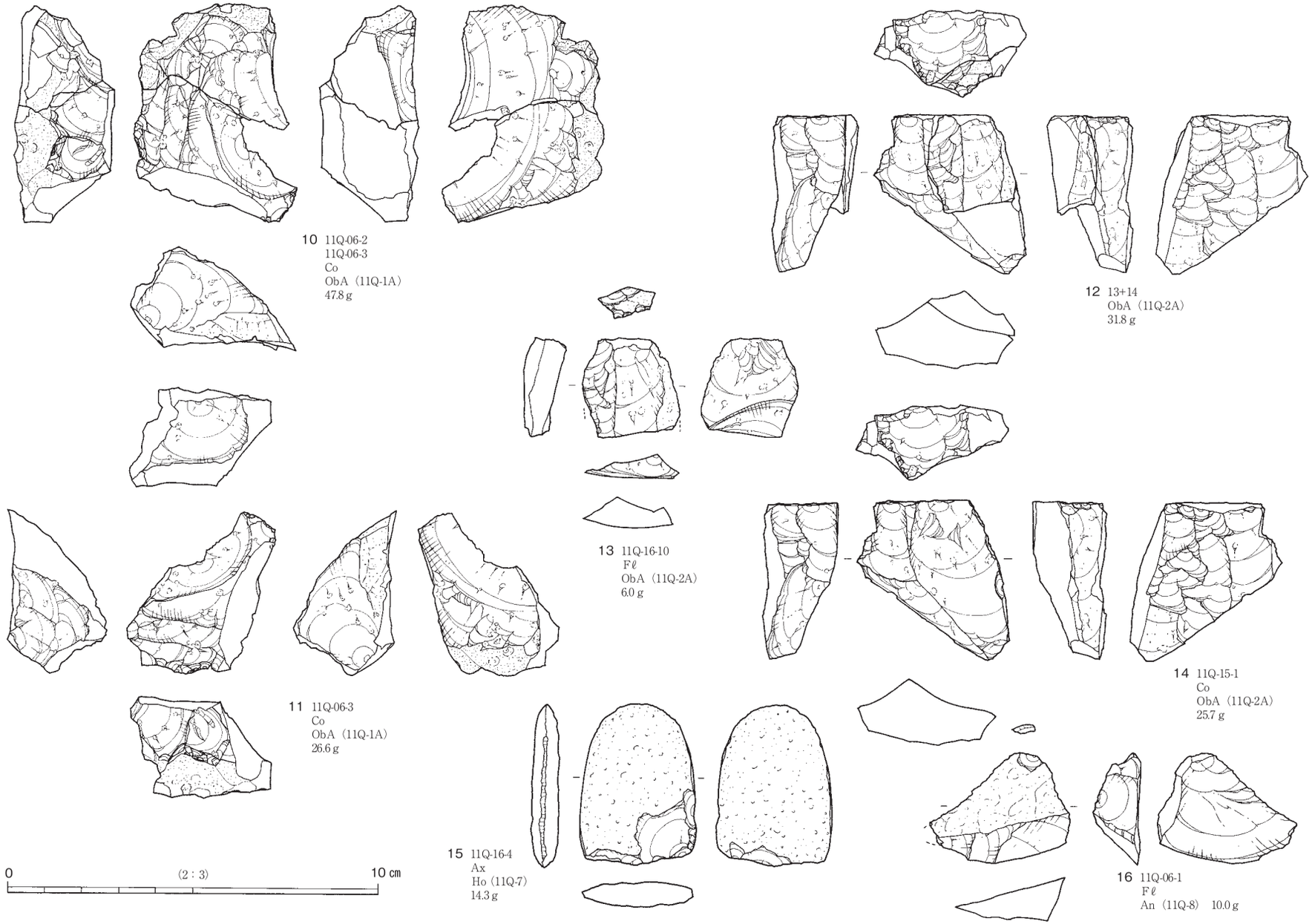
④石核が上下に割れ、上半部は作業が放棄される。

⑤接合図７の下半部で、裏面を打面、表面を作業面として、小型不定型の剥片（９）が剥離される。最終的には、石核11が残される。

11Q-２（黒曜石Ａ類）：12は、中型の縦長剥片１点（13）と石核１点（14）の接合資料である（11Q-２Ａ）。本資料も表裏両面及び右側面に角礫面が見られることから、石核の素材は小振りの角礫と想定される。上端にある自然面を薄く削ぐようにして打面が作られ、次に表裏両面を作業面として、縦長剥片が剥離される。その過程で、縦長剥片（13）も剥離されている。



第69図　11Q-Aブロック出土遺物実測図（1）



第70図　11Q-Aブロック出土遺物実測図（2）

２．12Ｐ-Ａブロック（第71図～第73図、第31表～第34表、図版40）

１）概　要（第71図・第72図、第32表・第34表）

本ブロックは、遺跡中央の12Ｐ-84・85グリッドに位置し、標高26m～28mの台地平坦面に立地する。ブロックの規模は、長軸2.1m、短軸1.8mの範囲で、10点の石器・礫が散漫に分布する。出土層準は、立川ローム層Ⅲ層中位を中心として、0.3mの高低差をもって、地形に沿って包含されている。

石器組成は、石刃１点、剥片７点、礫２点、石器石材は、頁岩Ｅ類７点、ホルンフェルス１点、礫石材は、砂岩２点である。礫は、小型扁平の完形礫で、被熱の有無が、はっきりしないものと、被熱により赤化、破損しているものが各１点ある。

２）母岩別資料（第31表）

本ブロックでは、石器類８点の全てを６母岩に分類した（母岩識別率100％）。内訳は、頁岩Ｅ類５母岩（12Ｐ-３～５・８・９：７点）、ホルンフェルス１母岩（12Ｐ-10：１点）である。また、砂岩の礫が２点あり、そのうち１点を母岩分類した（R12Ｐ-１）。

12Ｐ-３：自然面は、灰白色～灰色までの変異がある滑らかな円礫面、内部も同系色の頁岩Ｅ類（黒色頁岩）である。石刃石核の打面再生剥片と考えられる、中・小型不定型の剥片３点（25.3ｇ）で構成され、このうち剥片２点が接合する（12Ｐ-３Ａ）。接合資料２点は、ブロックの東端に位置し、接合距離は0.3mである。

12Ｐ-４：自然面は、黄色みを帯びた灰色の円礫面、内部は灰色の地に灰白色の縞が入る、ザラついた質感の頁岩Ｅ類である。本ブロックでは、小型の縦長剥片１点（2.1ｇ）の単独資料であるが、同一母岩によるナイフ形石器１点、打面再生剥片１点が13Ｐ-Ａブロックに分布する。

12Ｐ-５：自然面は、灰褐色の滑らかな円礫面、内部は灰色の頁岩Ｅ類である。中型不整形の縦長剥片１点（6.9ｇ）の単独資料である。

12Ｐ-８：自然面は黒灰色を呈し、滑らかで光沢のある円礫面、内部は黒灰色の地に、直径0.5㎜以下の細かな灰白色の斑点と灰白色の縞が見られる、硬質緻密な頁岩Ｅ類である。本ブロックでは石刃１点（4.8ｇ）の単独資料であるが、同一母岩による中型の剥片１点が13Ｐ-Ａブロックに分布する。

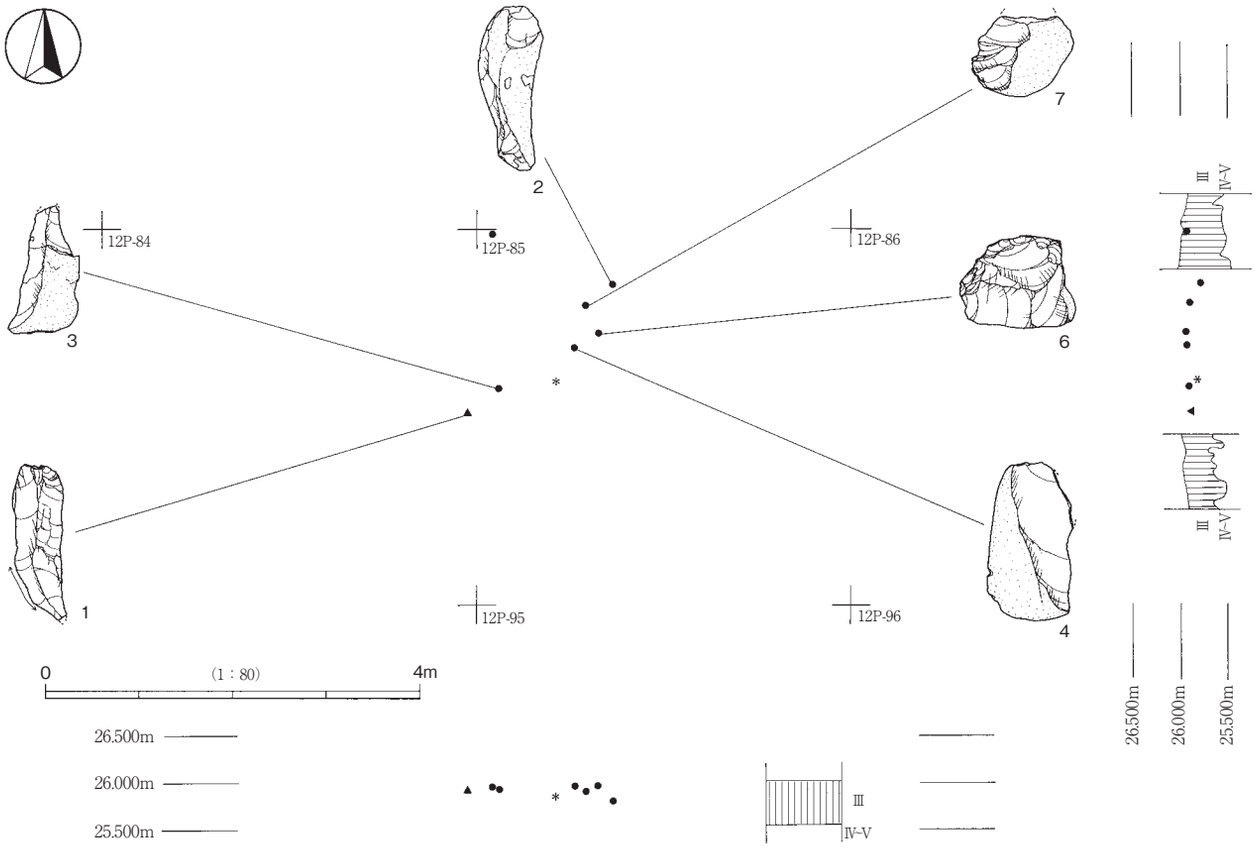
12Ｐ-９：自然面は、灰色の地に灰白色と黒灰色の斑が散在する滑らかな円礫面、内部も同色の頁岩Ｅ類である。中型不整形の縦長剥片１点（11.4ｇ）の単独資料である。

12Ｐ-10：自然面は、灰色の地に灰白色の斑が入る円礫面、内部も同色の粘板岩質のホルンフェルスである。風化により軟化しており、自然面の一部は剥落している。中型不整形の縦長剥片１点（10.7ｇ）の単独資料である。

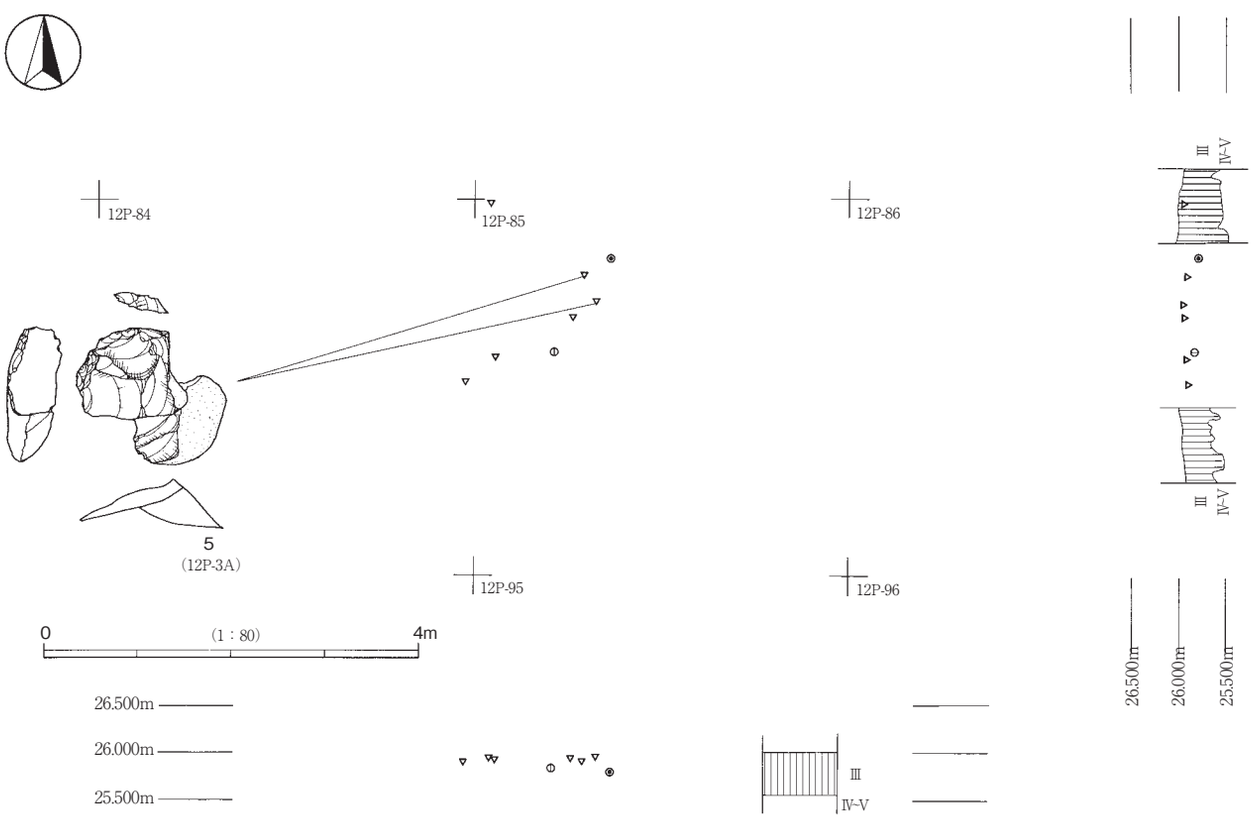
R12Ｐ-１：砂岩の小型扁平円礫（完形）で、大きさは、５㎝×3.5㎝×１㎝（19.2ｇ）である。色調は赤みがかった灰褐色で、比較的硬質である。被熱の有無は不明瞭である。

３）出土遺物（第73図）

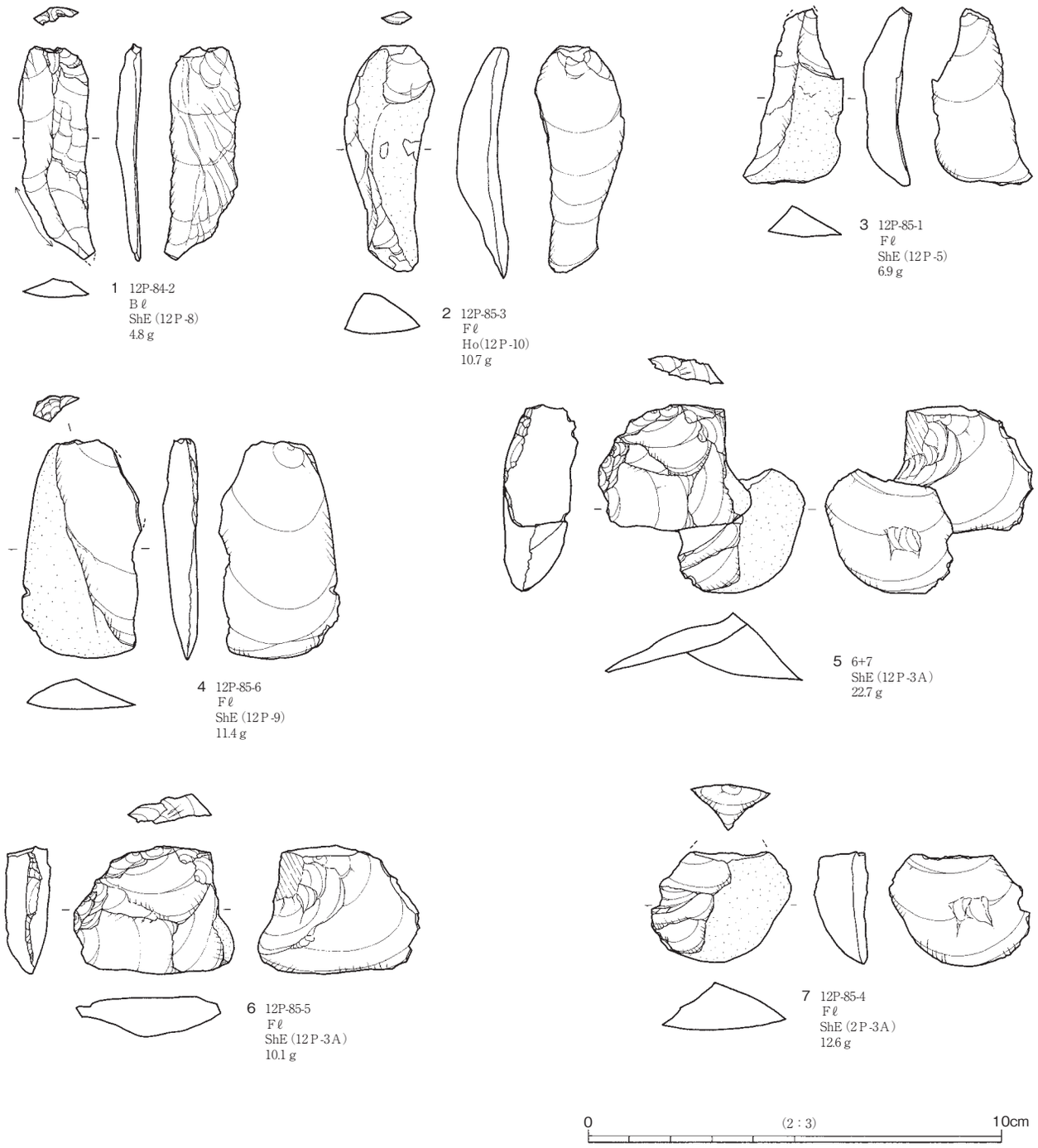
１は、頁岩Ｅ類による中型の石刃である。表面の左側と右側上半部は、主要剥離面と同一方向の剥離面であるが、右側下半部には、逆方向の剥離面がある。頭部調整、打面調整は見られない。13P-Ａブロックに同一母岩の剥片１点がある。２は、ホルンフェルスによる縦長剥片、３・４は、頁岩Ｅ類による縦長剥片である。２～４は、いずれも単独資料である。



第71図　12P-Aブロック出土遺物分布図（1）－石器別分布図－



第72図　12P-Aブロック出土遺物分布図（2）－石材別分布図－



第73図　12P-Aブロック出土遺物実測図

4）接合資料（第73図）

12P-3（頁岩E類）：5は、不定型の剥片2点（6・7）の接合資料である。6の表面は、主要剥離面と同一方向の剥離面に加えて、直交する方向の剥離面があること、左側面から打面にかけて、表面からの剥離面が見られること、頁岩E類には石刃や縦長剥片が含まれることから、6、7は打面再生剥片の可能性がある。6→7の順に、上位の同一打面から連続して剥片が剥離されている。

第31表　12P-Aブロック母岩別石器組成表

母岩番号	石材	Kn	Po	Kp	Es	Ss	Gr	Dr	Pq	Rf	Uf	Bl	Ax	Hs	As	Uk	Fl	Ch	Co	合計	重量（g）
12P-3	ShE																3			3	25.3
12P-4	ShE																1			1	2.1
12P-5	ShE																1			1	6.9
12P-8	ShE											1								1	4.8
12P-9	ShE																1			1	11.4
12P-10	Ho																1			1	10.7
合　　計		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	7	0	0	8	61.2

第32表　12P-Aブロック石材別石器組成表

石　　材	石材	Kn	Po	Kp	Es	Ss	Gr	Dr	Pq	Rf	Uf	Bl	Ax	Hs	As	Uk	Fl	Ch	Co	合計	重量（g）
頁岩Ｅ	ShE											1					6			7	50.5
ホルンフェルス	Ho																1			1	10.7
合　　計		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	7	0	0	8	61.2

第33表　12P-Aブロック母岩別礫組成表

母岩番号	石材	個数	重量（g）
R12P-1	Sa	1	19.2
R12P-その他	Sa	1	16.4
合　　計		2	35.6

第34表　12P-Aブロック石材別礫組成表

石　材	石材	個数	重量（g）
砂岩	Sa	2	35.6
合　　計		2	35.6

３．13Ｐ-Ａブロック（第74図～第76図、第35表・第36表、図版40）

１）概　要（第74図・第75図、第36表）

本ブロックは、遺跡中央の12Ｐ-94、13Ｐ-05・06グリッドに位置し、標高26m～28mの台地平坦面に立地する。ブロックの規模は、長軸3.6m、短軸1.2mの範囲で、８点の石器が散漫に分布する。出土層準は、立川ローム層Ⅲ層中位を中心として、0.2mの高低差をもって、ほぼ水平に包含されている。

石器組成は、ナイフ形石器３点、剥片４点、石核１点、石器石材は、流紋岩１点、頁岩Ｅ類６点、凝灰岩１点である。

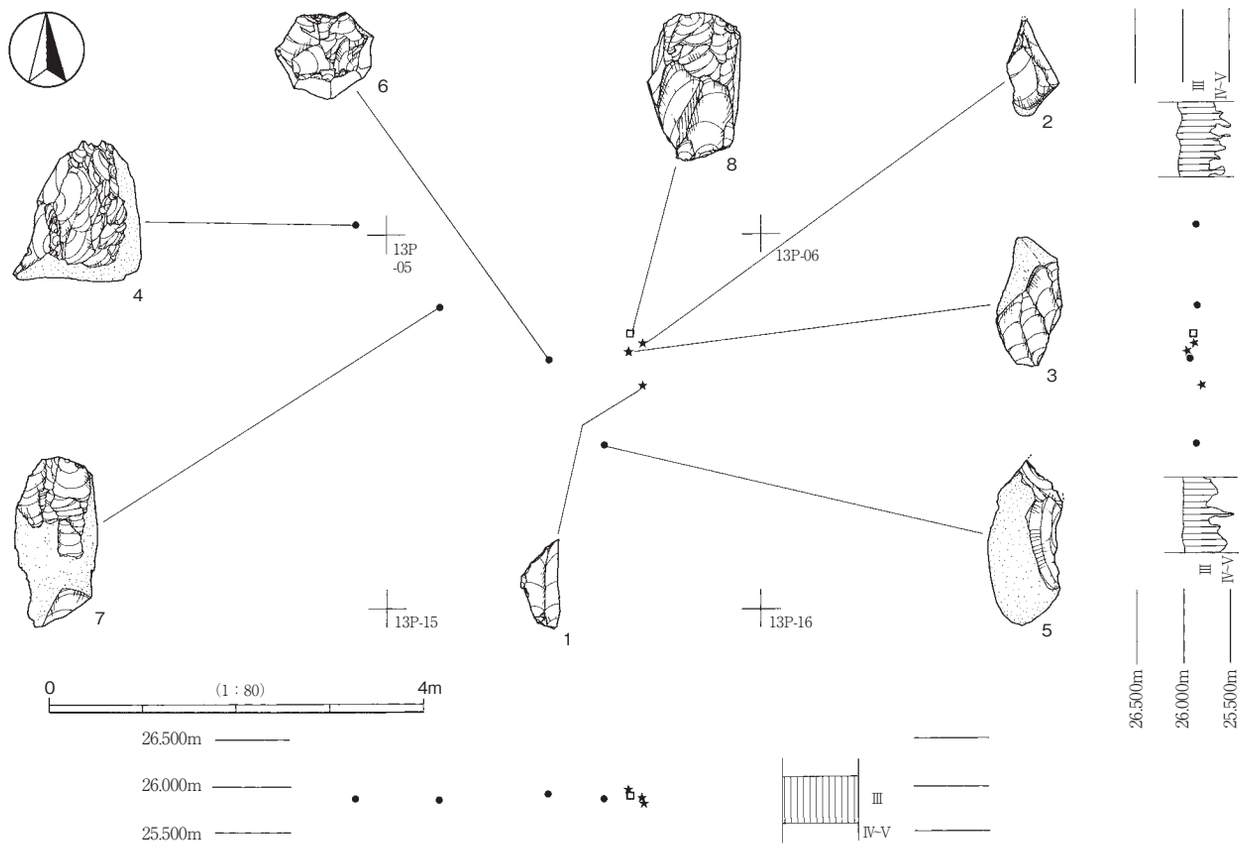
２）母岩別資料（第35表）

本ブロックでは、８点全てを６母岩に区分した（母岩識別率100％）。内訳は、流紋岩１母岩（12Ｐ-14：１点）、頁岩Ｅ類４母岩（12Ｐ-４・６～８：６点）、凝灰岩１母岩（12Ｐ-12：１点）である。

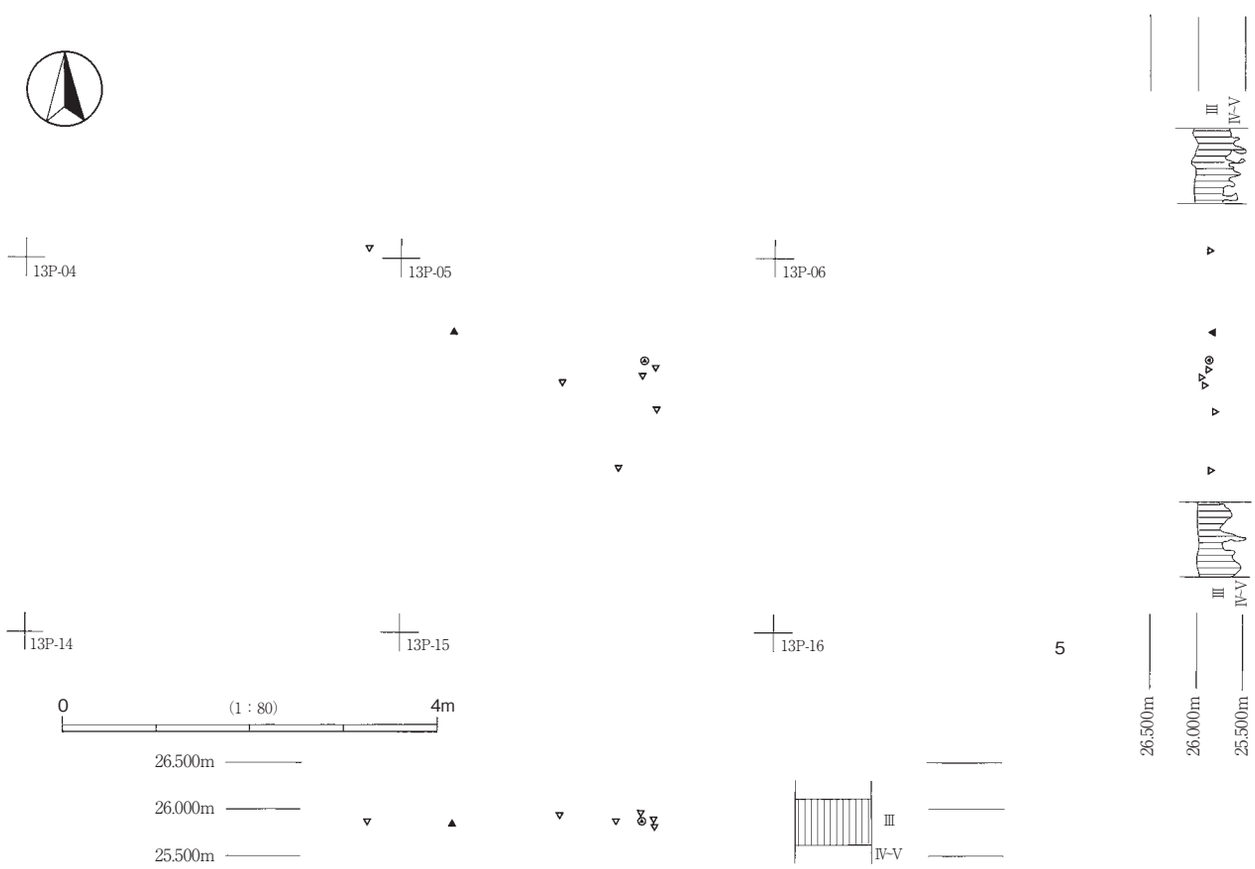
12Ｐ-４：自然面は、黄色みを帯びた灰色の円礫面、内部は灰色の地に灰白色の縞が入る、ザラついた質感の頁岩Ｅ類である。本ブロックには、ナイフ形石器１点、打面再生剥片１点、合計２点（11.3ｇ）が分布するが、このほか、12Ｐ-Ａブロックに小型の剥片１点が分布する。

12Ｐ-６：自然面は、黒灰色と灰色の部分が互層のようになり、さらに灰白色の細い直線状の縞が平行して入る、滑らかな円礫面、内部も同色の頁岩Ｅ類である。ナイフ形石器２点（6.5ｇ）で構成される。

12Ｐ-７：自然面は、灰色の地に灰白色の細い縞が入る滑らかな円礫面、内部は、黒灰色の地に灰白色の



第74図　13P-Aブロック出土遺物分布図（1）－石器別分布図－



第75図　13P-Aブロック出土遺物分布図（2）－石材別分布図－

縞が入る、硬い質感の頁岩Ｅ類である。中型不定型の剥片１点（15.9ｇ）の単独資料である。

12Ｐ- ８：自然面は黒灰色を呈し、滑らかで光沢のある円礫面、内部は黒灰色の地に、直径0.5㎜以下の細かな灰白色の斑点と灰白色の縞が見られる、硬質緻密な頁岩Ｅ類である。本ブロックでは中型の剥片１点（28.9ｇ）の単独資料であるが、同一母岩による石刃１点が12Ｐ-Ａブロックに分布する。

12Ｐ-12：自然面は灰緑色を呈し、横断面形が隅丸方形となる滑らかな円礫面、内部も灰緑色で、ザラついた質感の凝灰岩である。小型の石核１点（57.9ｇ）の単独資料である。

12Ｐ-14：自然面は、淡褐色の地に灰白色の斑が散在する滑らかな円礫面、内部は黄灰色で、粗い質感の流紋岩である。微細な夾雑物がわずかに含まれる。中型不整形の縦長剥片１点（25.4ｇ）の単独資料である。

３）出土遺物（第76図）

１～３は、頁岩Ｅ類によるナイフ形石器である。１は、小型の石刃を素材として、素材の打面を基部にあて、素材の末端部を斜めに切り取るようにして、調整加工がなされている。２も小型の石刃を素材として、素材の打面側を先端にあて、打面部を切り取るように調整加工がなされている。１、２は、素材の用い方が上下逆であるが、小型の石刃の一部を切り取るように調整加工が施され、先端部が鋭利に作られている点で共通する。３は、中型の縦長剥片を素材とする。素材の打面部を基部にあて、表面右側面に急角度の調整加工がなされている。調整加工が少なく、鋭利な先端部が作られていないこと、表面上半部に自然面が広く残ることなどから、未成品の可能性がある。

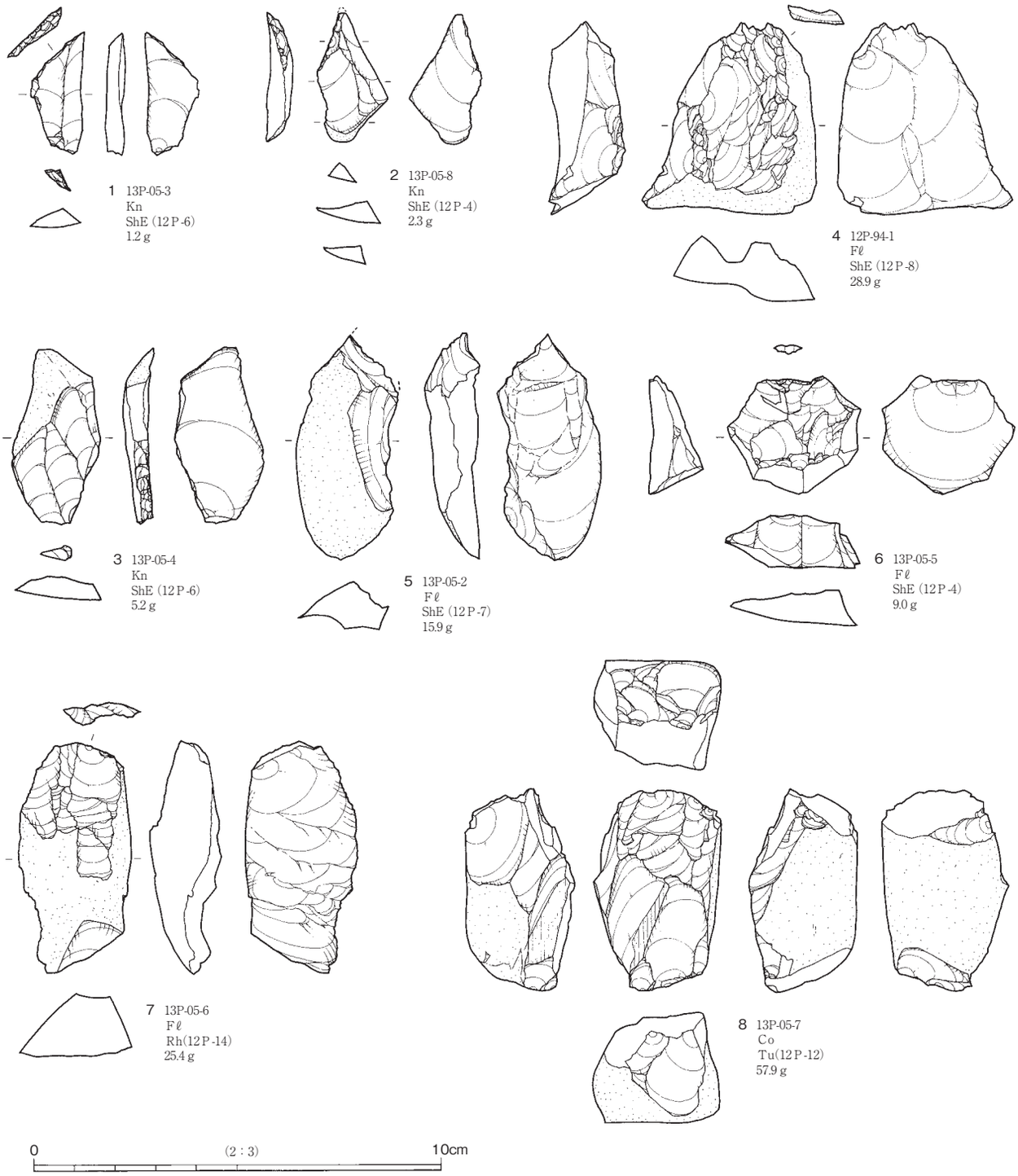
４は、頁岩Ｅ類による中型で幅広の剥片である。表面に、主要剥離面と直交する方向の細かな剥離面が重なっており、左側面に表面側からの剥離面が見られることから、打面再生剥片の可能性がある。12Ｐ-Ａブロックに分布する石刃と同一母岩である。６は、頁岩Ｅ類による打面再生剥片である。実測図の表面が、石核時の打面、下面が作業面にあたる。本剥片は、小型の石刃が生産された後になされた打面再生作業の一環で剥離されたものである。小振りの石刃石核から剥離されたと想定されるが、石核の大きさは、

第35表　13P-Aブロック母岩別石器組成表

母岩番号	石材	Kn	Po	Kp	Es	Ss	Gr	Dr	Pq	Rf	Uf	Bl	Ax	Hs	As	Uk	Fl	Ch	Co	合計	重量（ｇ）
12P-4	ShE	1															1			2	11.3
12P-6	ShE	2																		2	6.5
12P-7	ShE																1			1	15.9
12P-8	ShE																1			1	28.9
12P-12	Tu																		1	1	57.9
12P-14	Rh																1			1	25.4
合　　計		3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	1	8	145.9

第36表　13P-Aブロック石材別石器組成表

石　　材	石材	Kn	Po	Kp	Es	Ss	Gr	Dr	Pq	Rf	Uf	Bl	Ax	Hs	As	Uk	Fl	Ch	Co	合計	重量（ｇ）
流紋岩	Rh																1			1	25.4
頁岩Ｅ	ShE	3															3			6	62.6
凝灰岩	Tu																		1	1	57.9
合　　計		3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	1	8	145.9



第76図　13P-Aブロック出土遺物実測図

石材が異なるものの、８の石核が目安になると思う。２のナイフ形石器と同一母岩である。５、７は、頁岩Ｅ類及び流紋岩による不整形の縦長剥片で、それぞれ表面に自然面が広く残る。８は、凝灰岩による石核である。表面下部が節理に沿って割れたため、わかりにくいが、上下両端を打面、表面を作業面とする小型の石刃石核と考えられる。左右両側面から裏面にかけては、自然面が残されている。

第５文化層

本文化層は、立川ローム層Ⅲ層上部に包含される石器群で、「東内野型有樋尖頭器」を指標とする。８K-Aブロックが該当する。なお、時期の近接する第４文化層の「砂川期石器群」、第６文化層の細石刃石器群と層位的に分離されたわけではない。

８K-Aブロック（第77図～第79図、第37表・第38表、図版41）

１）概　要（第77図・第78図、第38表）

本ブロックは、遺跡北西部の８K-16･26 ～ 28･36 ～ 39グリッドに位置し、標高20m～ 22mの台地上で、北東に向かう浅い谷を望む傾斜変換点付近に立地する。ブロックの規模は、長軸12.8m、短軸6.4mの楕円形の範囲で、11点の石器が散漫に分布する。出土層準は、立川ローム層Ⅲ層上部から立川ローム層直上のⅡｃ層にかけてで、0.5m～ 0.6mの高低差をもって、地形に沿って包含されている。

石器組成は、削器１点、使用痕ある剥片１点、剥片９点で、剥片の中には東内野型有樋尖頭器の削片１点が含まれている。石器石材は、黒曜石Ａ類１点、安山岩５点、頁岩Ｅ類１点、玉髄４点である。なお、本ブロックの分布範囲からは、黒曜石Ｂ類による野岳・休場型細石刃核を指標とする細石刃石器群が出土したが、帰属時期が異なると判断し、第６文化層の８K-Bブロックとして分離した。

２）母岩別資料（第37表）

本ブロックでは、11点の石器のうち７点を４母岩に区分した（母岩識別率64％）。内訳は、安山岩１母岩（８K-１：２点）、頁岩Ｅ類１母岩（８K-２：１点）、玉髄２母岩（８K-３・４：４点）である。この他、母岩分類できなかった資料に、黒曜石Ａ類１点（10.8ｇ）、安山岩３点（103.8ｇ）がある。

８K-１：灰褐色を呈する安山岩で、小型不定型の剥片２点（3.8ｇ）で構成される。表裏で接合する（８K-１Ａ）。

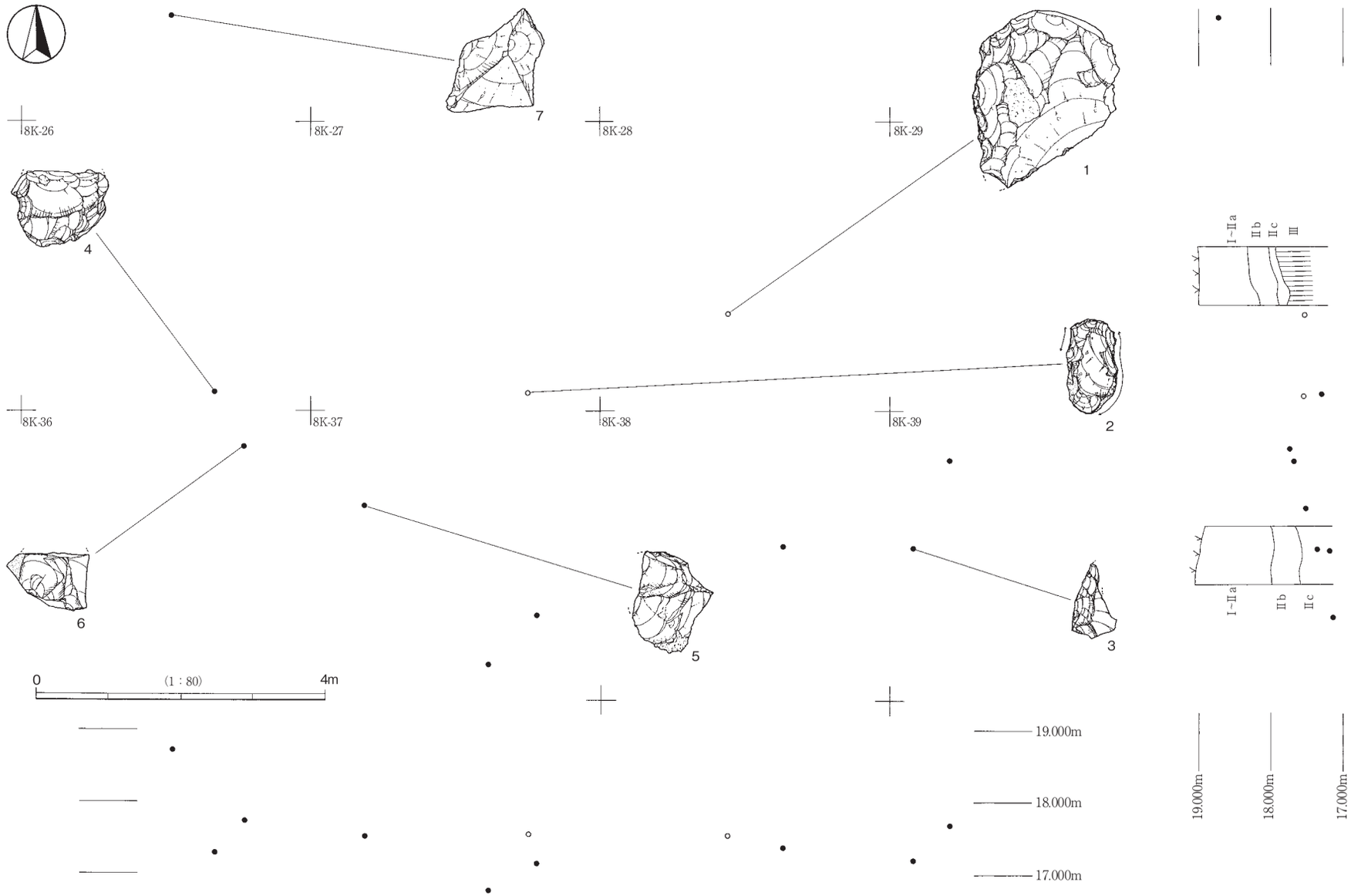
８K-２：自然面は、灰褐色を呈する滑らかな円礫面、内部は、淡黒灰色の地に黄灰色の帯が入る頁岩Ｅ類である。中型不定型の剥片１点（欠損品：8.5ｇ）の単独資料である。

８K-３：自然面は、暗黄褐色を呈する滑らかな円礫面、内部は暗黄褐色の地に黄白色の帯が入る玉髄（黄玉石）である。小型の剥片２点（3.7ｇ）で構成されるが、このうち１点は東内野型有樋尖頭器から剥離された削片である。

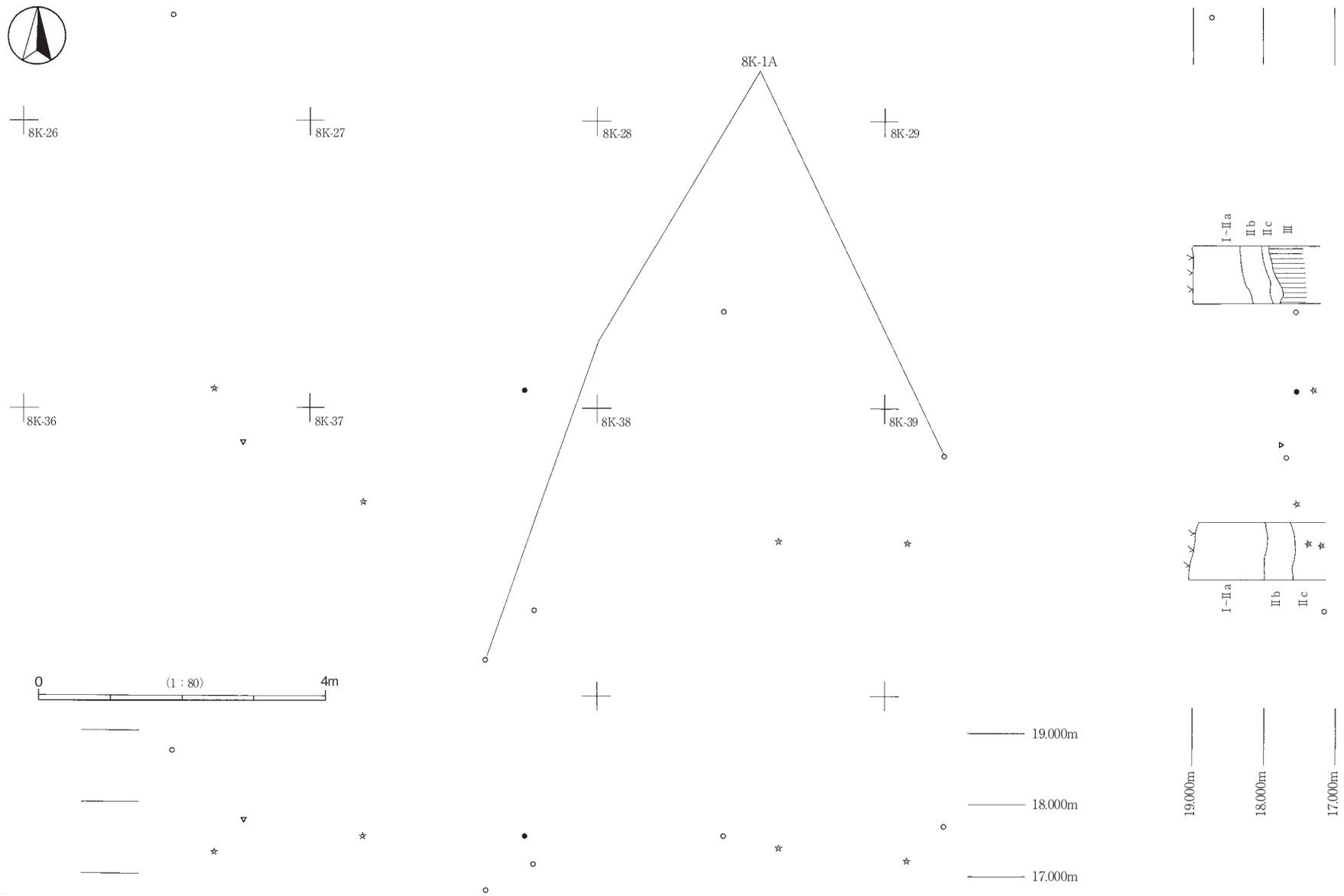
８K-４：紫がかった灰白色不透明の地に、橙色や灰白色の不純物層が入る玉髄である。中型不定型の剥片２点（41.7ｇ）で構成される。

３）出土遺物（第79図）

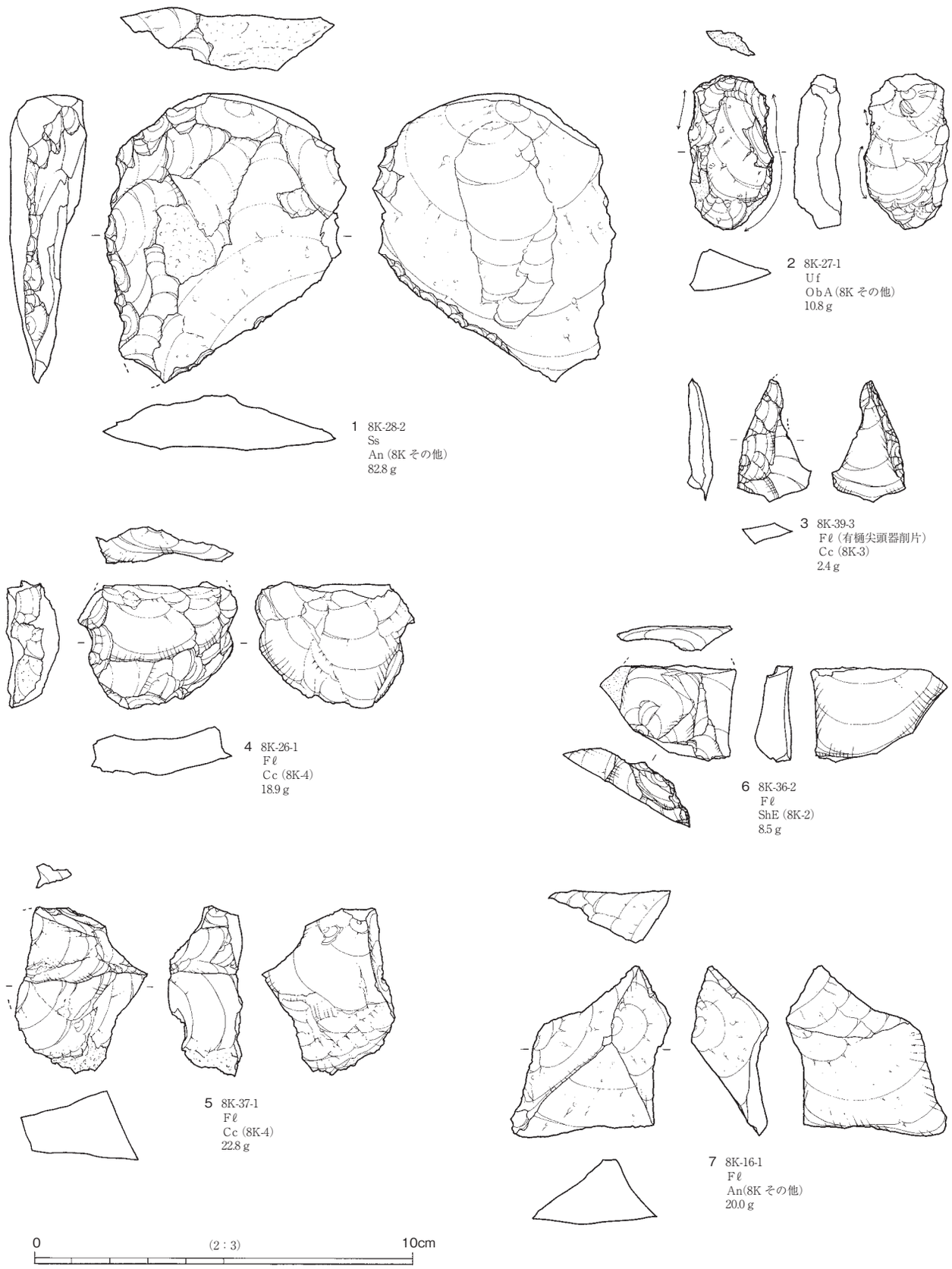
１は、安山岩による削器である。大型不定型の剥片を素材として、裏面の末端部に細かな調整加工が施されている。原石は、比較的大型の円礫と推定されるが、質感は利根川産の安山岩よりは、上総丘陵砂礫層産と考えられる安山岩に近い。２は、黒曜石Ａ類による使用痕ある剥片である。中型不整形の縦長剥片を利用しており、右側縁に刃こぼれが連続する。なお、本資料は、表裏両面に細かな傷が多数観察される。３は、玉髄（黄玉石）による東内野型有樋尖頭器の削片である。本削片の左側縁を見ると、表面→裏面の順に調整加工がなされており、その後、有樋尖頭器の上端右側から左側縁にかけて、削片を剥離したと考えられる。左側縁の調整加工が浅いことから、有樋尖頭器本体は周辺調整と想定される。本削片の打面は欠損する。なお、同一母岩に、小型の槍先形石器調整剥片（ポイントフレイク）１点がある。実測図を掲載しなかったが、表面に小さく自然面を残していること、細かな剥離面に覆われていないこと、剥離軸が



第77図　8K-Aブロック出土遺物分布図（1）－石器別分布図－



第78図　8K-Aブロック出土遺物分布図（2）－石材別分布図－



第79図　8K-Aブロック出土遺物実測図

第37表　8K-Aブロック母岩別石器組成表

母岩番号	石材	Kn	Po	Kp	Es	Ss	Gr	Dr	Pq	Rf	Uf	Bl	Ax	Hs	As	Uk	Fl	Ch	Co	合計	重量（g）
8K-1	An																2			2	3.8
8K-2	ShE																1			1	8.5
8K-3	Cc																2			2	3.7
8K-4	Cc																2			2	41.7
8K-その他	ObA										1									1	10.8
8K-その他	An					1											2			3	103.8
合　　計		0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	9	0	0	11	172.3

第38表　8K-Aブロック石材別石器組成表

石　　材	石材	Kn	Po	Kp	Es	Ss	Gr	Dr	Pq	Rf	Uf	Bl	Ax	Hs	As	Uk	Fl	Ch	Co	合計	重量（g）
黒曜石Ａ	ObA										1									1	10.8
安山岩	An					1											4			5	107.6
頁岩Ｅ	ShE																1			1	8.5
玉髄	Cc																4			4	45.4
合　　計		0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	9	0	0	11	172.3

強く湾曲してはいないことから、槍先形石器製作の後半段階に発生する、典型的な調整剥片（ポイントフレイク）とは異なる。４、５は玉髄による中型不定型で厚手の剥片である。表面は複数方向からの剥離面によって構成されており、剥片剥離作業の過程で、打面と作業面を転移させる手法がとられていたことがわかる。不純物が層状に嵌入しており、剥離時に欠損したと考えられる。７は、安山岩による中型不定型の剥片である。上半部が大きく欠損する。石材は、淡黒灰色の安山岩で、北関東方面に由来する可能性がある。

第６文化層

本文化層は、立川ローム層Ⅲ層上部から、その上位にある黒褐色土層にかけて包含される石器群で、野岳・休場型細石刃核を指標とする細石刃石器群である。８K-B、15R-Aブロックが該当する。

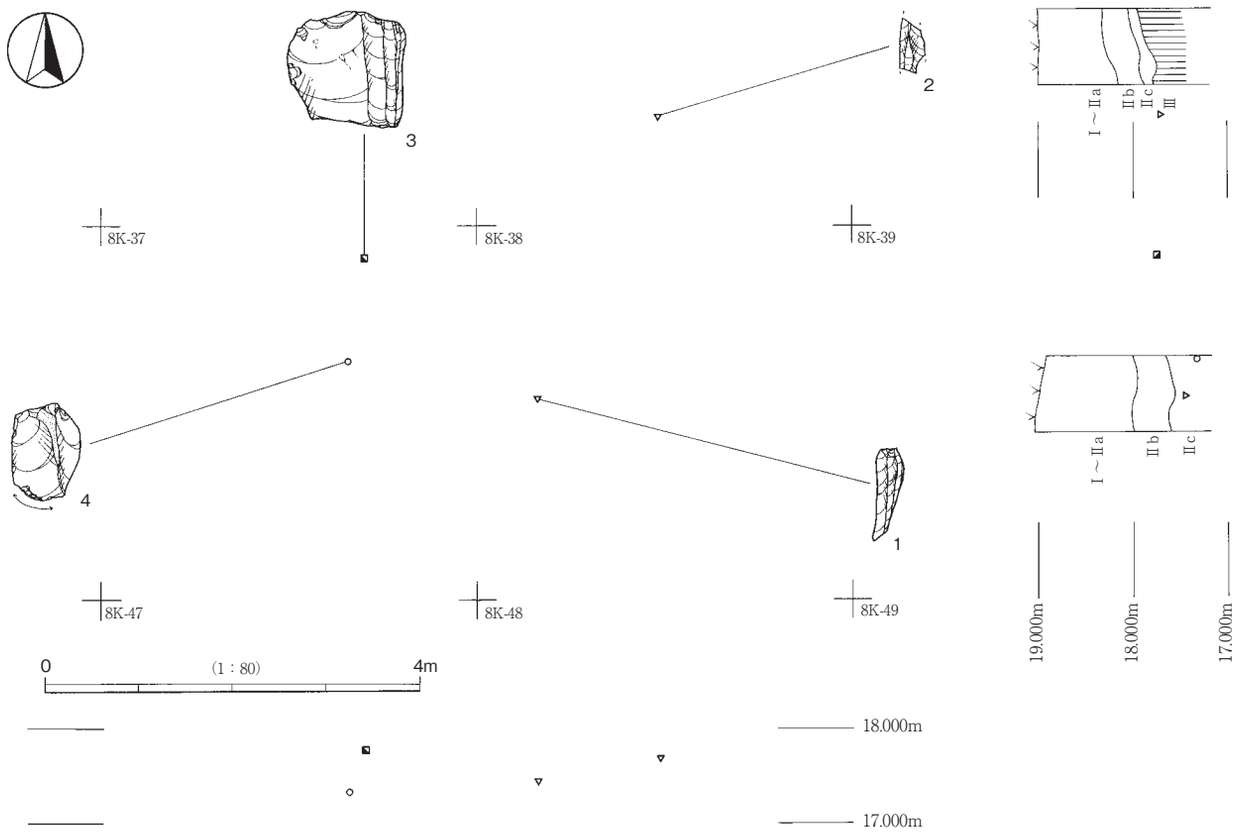
１．８K-Bブロック（第80図～第82図、第39表、図版41）

１）概　要（第80図・第81図、第39表）

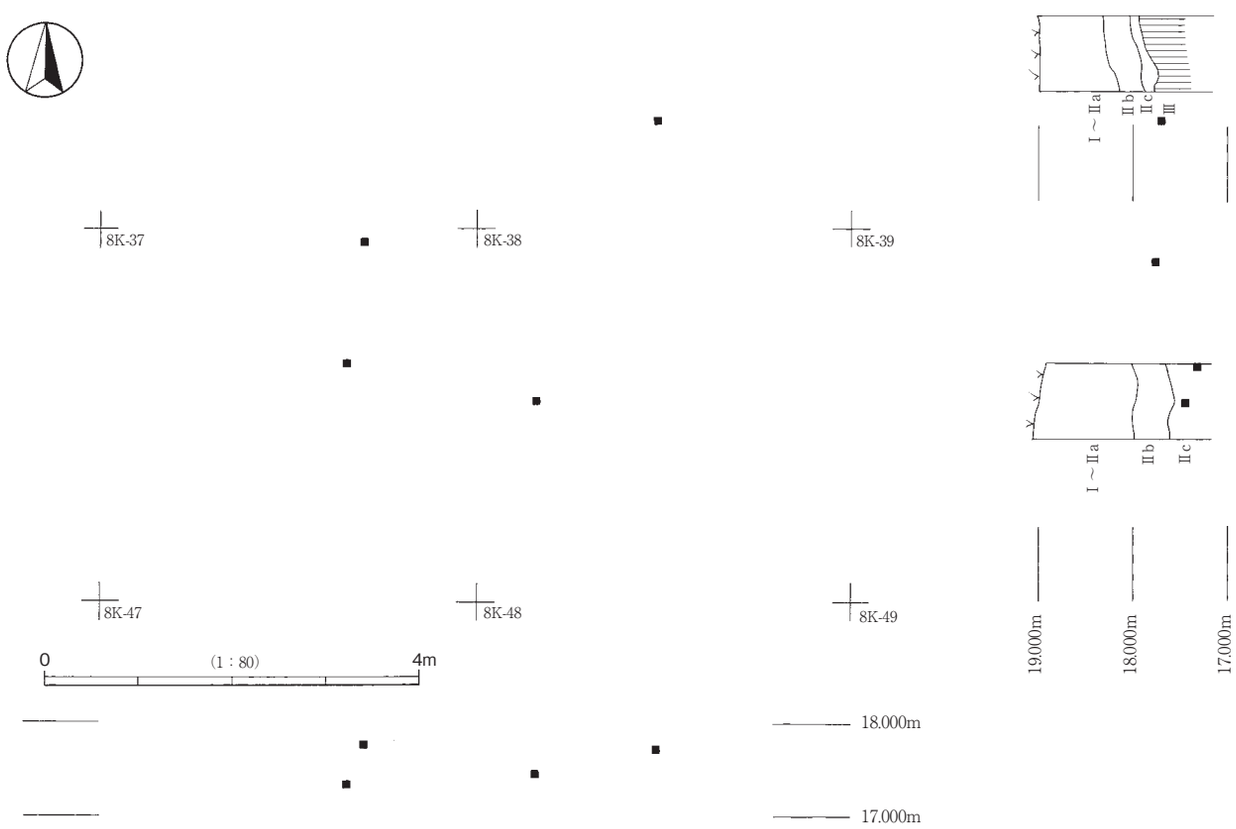
本ブロックは、遺跡北西部の８K-28・37・38グリッドに位置し、標高20m～22mの台地上の、北東方向に向かう浅い谷を望む傾斜変換点付近に立地する。ブロックの規模は、長軸4.3m、短軸2.5mの楕円形の範囲で、４点の石器群が散漫に分布する。

ところで、８K-16・26～28・36～39グリッドからは、「東内野型有樋尖頭器」を指標とする槍先形石器群と野岳・休場型細石刃核を指標とする細石刃石器群とが、ほぼ同一層準から出土した。ただし、両者は伴わないと考えられることから、細石刃、細石刃核、およびこの両者と類似した石材（黒曜石Ｂ類：信州産黒曜石）の資料を細石刃石器群として第６文化層の８K-Bブロックに帰属させ、残りを第５文化層の８K-Aブロックとした。したがって、黒曜石以外の資料については、なお検討の余地がある。

出土層準は、立川ローム層Ⅲ層上部から、その上位にある黒褐色土層にかけてで、0.5mの高低差をもって、地形に沿って包含されている。



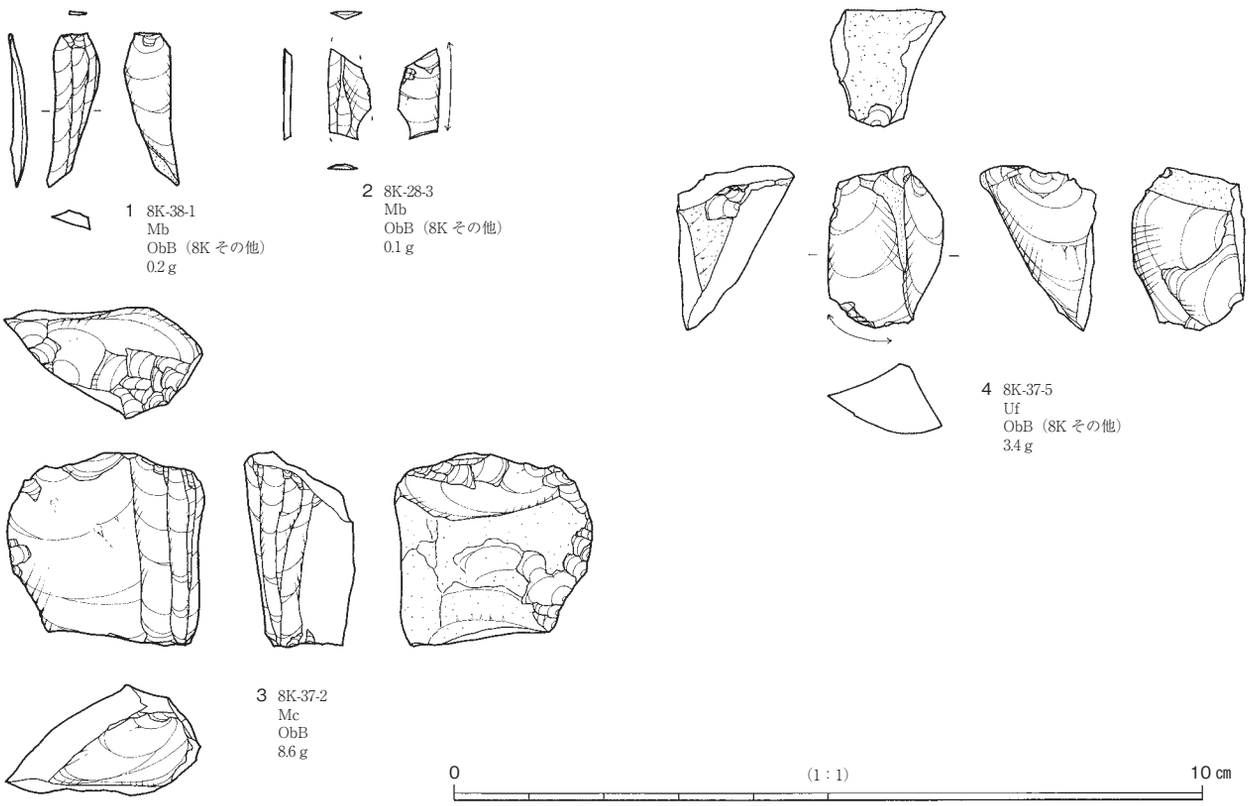
第80図　8K-Bブロック出土遺物分布図（1）－石器別分布図－



第81図　8K-Bブロック出土遺物分布図（2）－石材別分布図－

第39表　8K-Bブロック石材別石器組成表

石　　材	石材	Kn	Es	Ss	Gr	Dr	Pq	Rf	Uf	Bl	Ax	Hs	As	Uk	Fl	Ch	Co	Mb	Mc	合計	重量（g）
黒曜石Ｂ	ObB								1									2	1	4	12.2
合　　計		0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	4	12.2



第82図　8K-Ｂブロック出土遺物実測図

石器組成は、細石刃２点、使用痕ある剥片１点、細石刃核１点、石器石材は、全て黒曜石Ｂ類である。なお、本ブロックの資料は母岩分類ができなかった。

２）出土遺物（第82図）

１、２は、黒曜石Ｂ類による細石刃である。１は完形であるが、２は頭部を欠損する。３は、黒曜石Ｂ類による細石刃核である。表面が自然面（平滑な角礫面）に広く覆われた中型厚手の剥片を石核の素材として、素材の主要剥離面側から打面部を作り出している。実測図左面（通常の表面）に残る広い剥離面は、素材の主要剥離面である。細石刃剥離の作業面は、剥片の小口部にあたる。打面の作業面に接する部分には、細かな調整が見られる。また、作業面の上端に頭部調整がなされている。下端は折り取られ、作業面の高さが調節されている。４は、黒曜石Ｂ類による使用痕ある剥片である。小型不定型の剥片が利用されており、表面の末端部に微細な刃こぼれが見られる。

２．15Ｒ-Ａブロック（第83図～第87図、第40表～第43表、図版41）

1）概　要（第83図・第84図、第41表・第43表）

本ブロックは、遺跡南部の15Q-28・29・37～39・48・49、15R-20・30グリッドに位置し、標高24m～26mの台地平坦面に立地する。ブロックの規模は、東西13.0m、南北10.8mの楕円形の範囲で、76点の石器・礫が分布する。出土層準は、立川ローム層Ⅲ層上部から、その上位の黒褐色土層にかけてで、0.6mの高低差をもって、地形に沿って包含されている。

なお、本ブロックの分布範囲には、黒褐色土を中心とした層準から縄文土器の細片が出土していることから、石器群の中に縄文時代の資料が含まれている可能性がある。また、隣接地点には第３文化層に帰属する石器群が分布していることから、安山岩によるナイフ形石器や掻器、削器類の中には、第３文化層の石器群が含まれている可能性もある。

第40表　15R-Aブロック母岩別石器組成表

母岩番号	石材	Kn	Es	Ss	Gr	Dr	Pq	Rf	Uf	Bl	Ax	Hs	As	Uk	Fl	Ch	Co	Mb	Mc	合計	重量（g）
15R-10	Sa														3					3	10.4
15R-13	An											1								1	99.9
15R-14	ObB								1						1					2	6.4
15R-15	ObB														2					2	3.0
15R-16	ObB																	2		2	0.2
15R-17	ObB																		1	1	4.0
15R-その他	ObB								1						6	1		11		19	10.5
15R-その他	ObE															1				1	0.1
15R-その他	ObG														3	1		1		5	1.9
15R-その他	An	1	1	2											11	1				16	110.0
15R-その他	Rh		1						2						16					19	49.6
15R-その他	Ho														2	1				3	2.2
合　　計		1	2	2	0	0	0	0	4	0	0	1	0	0	44	5	0	14	1	74	298.2

第41表　15R-Aブロック石材別石器組成表

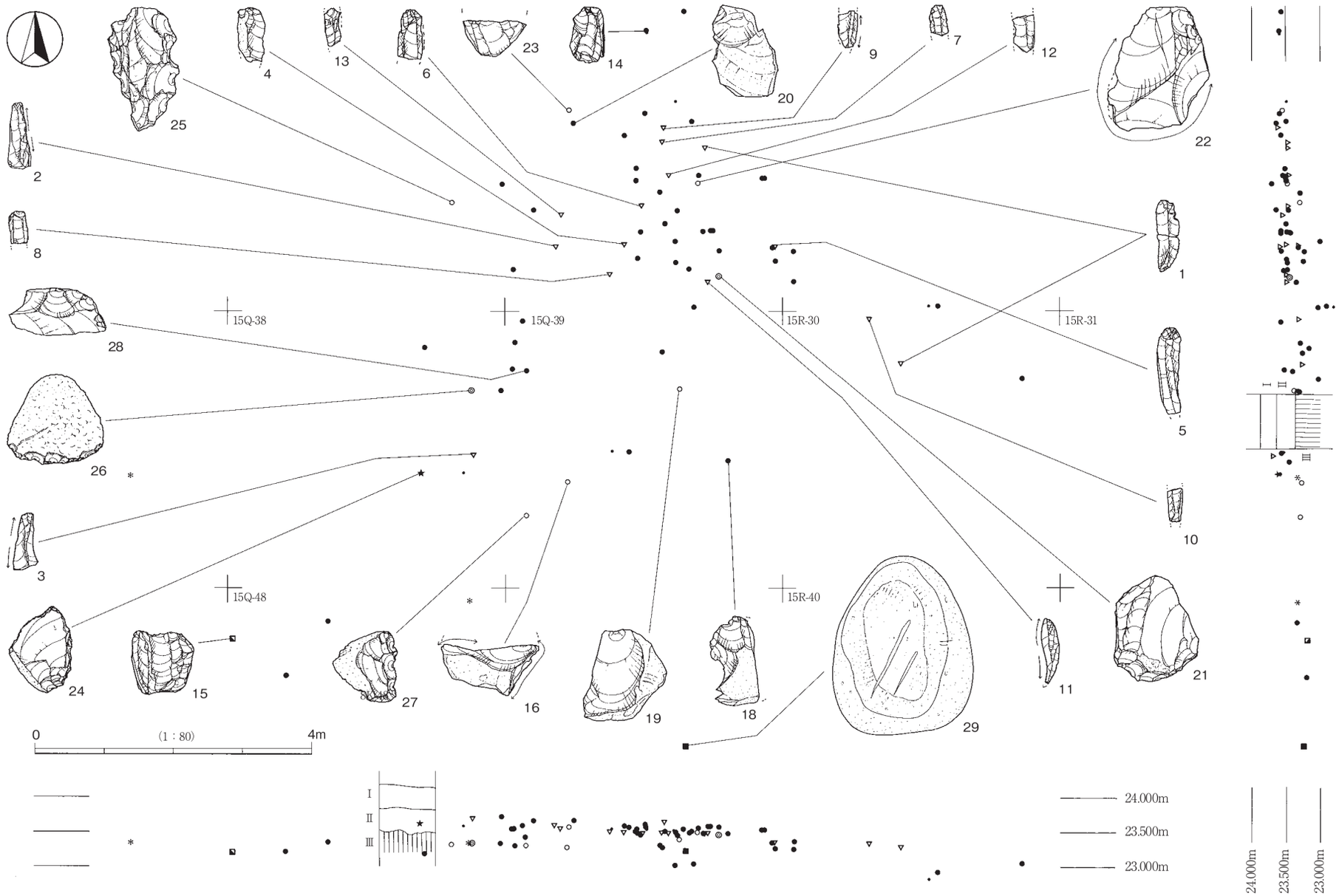
石　　材	石材	Kn	Es	Ss	Gr	Dr	Pq	Rf	Uf	Bl	Ax	Hs	As	Uk	Fl	Ch	Co	Mb	Mc	合計	重量（g）
黒曜石Ｂ	ObB								2						9	1		13	1	26	24.1
黒曜石Ｅ	ObE															1				1	0.1
黒曜石Ｇ	ObG														3	1		1		5	1.9
安山岩	An	1	1	2								1			11	1				17	209.9
流紋岩	Rh		1						2						16					19	49.6
砂岩	Sa														3					3	10.4
ホルンフェルス	Ho														2	1				3	2.2
合　　計		1	2	2	0	0	0	0	4	0	0	1	0	0	44	5	0	14	1	74	298.2

第42表　15R-Aブロック母岩別礫組成表

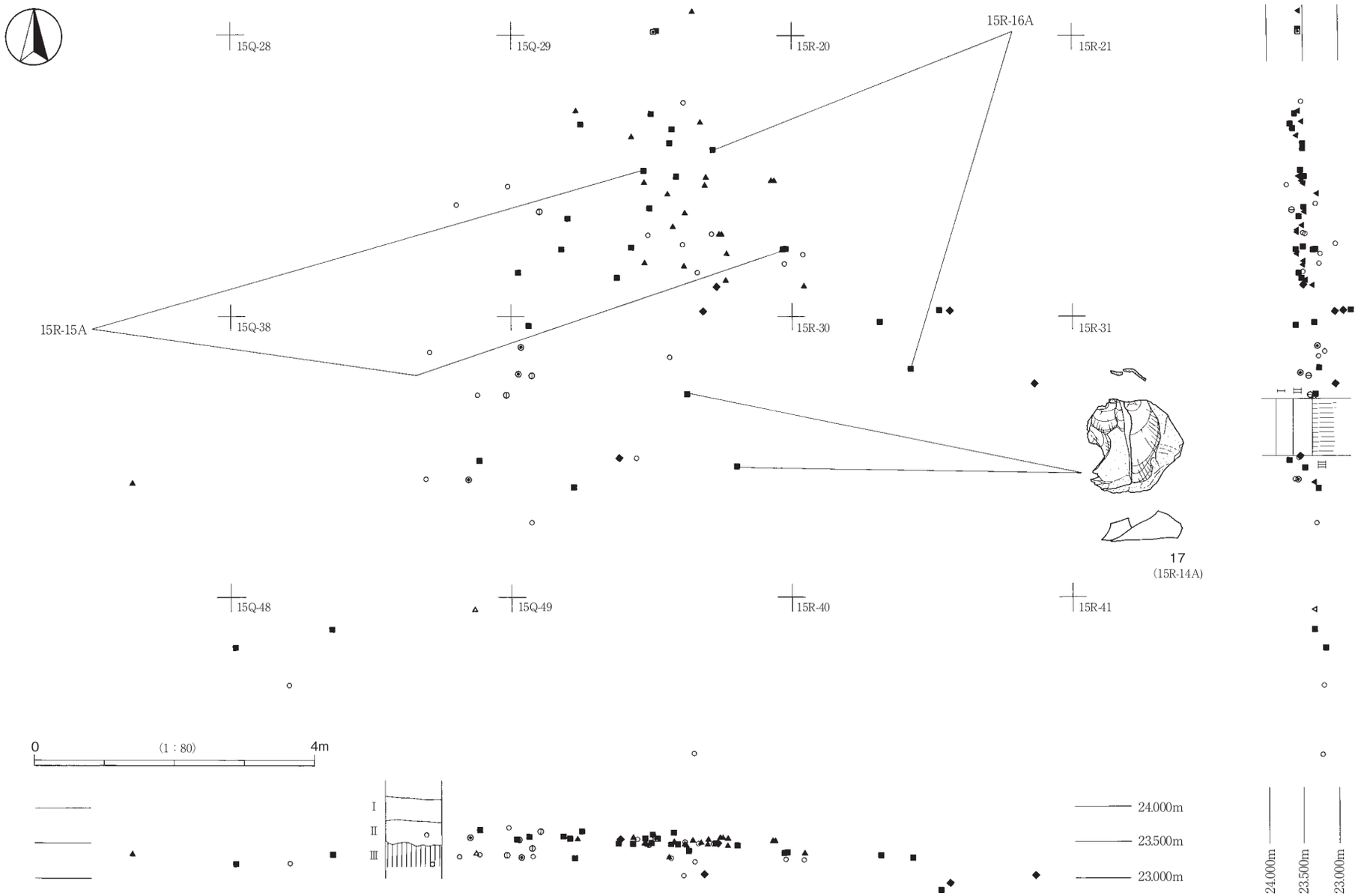
母岩番号	石材	個数	重量（g）
R15R-その他	Rh	1	61.5
R15R-その他	Ch	1	3.0
合　　計		2	64.5

第43表　15R-Aブロック石材別礫組成表

石　　材	石材	個数	重量（g）
流紋岩	Rh	1	61.5
チャート	Ch	1	3.0
合　　計		2	64.5



第83図　15R-Aブロック出土遺物分布図（1）－石器別分布図－



第84図　15R-Aブロック出土遺物分布図（2）－石材別分布図－

石器組成は、細石刃14点、細石刃核１点、ナイフ形石器１点、掻器２点、削器２点、使用痕ある剥片４点、剥片44点、砕片５点、ストーンリタッチャー１点、礫２点、石器石材は黒曜石Ｂ類26点、黒曜石Ｅ類１点、黒曜石Ｇ類５点、安山岩17点、流紋岩19点、砂岩３点、ホルンフェルス３点、礫石材は、流紋岩１点、チャート１点である。

２）母岩別資料（第40表・第42表）

本ブロックでは、74点の石器群のうち11点を６母岩に区分した（母岩識別率15％）。内訳は、黒曜石Ｂ類４母岩（15Ｒ-14 ～ 17：７点）、安山岩１母岩（15Ｒ-13：１点）、砂岩１母岩（15Ｒ-10：３点）である。この他、母岩分類できなかった資料に、黒曜石Ｂ類19点（10.5ｇ）、黒曜石Ｅ類１点（0.1ｇ）、黒曜石Ｇ類５点（1.9ｇ）、安山岩16点（110.0ｇ）、流紋岩19点（49.6ｇ）、ホルンフェルス３点（2.2ｇ）がある。

なお、礫は、流紋岩１点（61.5ｇ）、チャート１点（3.0ｇ）があるが、いずれも母岩分類できなかった。

15Ｒ-10：自然面は、淡灰褐色を呈する平滑な円礫面、内部は淡灰褐色の地に黒色粒等が密集する砂岩である。小型不定型の剥片３点（10.4ｇ）で構成される。

15Ｒ-13：淡褐色の地に、直径２㎜～３㎜の夾雑物が散在する安山岩で、８㎝×6.5㎝×1.5㎝の扁平で滑らかな自然面をもつ完形の円礫である。端部に数条の短い傷跡があり、ストーンリタッチャーと判断した（99.9ｇ）。

15Ｒ-14：自然面は、淡黒色でリングやフィッシャーの観察される角礫面、内部はわずかに褐色みを帯びた無色透明の地に、淡黒色を呈する障壁のような縞が入る良質な黒曜石Ｂ類である。小型不定型の剥片２点（6.4ｇ）で構成され、両者は表裏で接合する（15Ｒ-14Ａ）。

15Ｒ-15：自然面は、淡黒色で摩滅した稜をもち、各面が磨りガラス状になった亜角礫面、内部は、わずかに褐色みを帯びた無色透明の地に、淡黒色の縞が入る良質な黒曜石Ｂ類である。小型不定型の剥片２点（3.0ｇ）で構成され、両者は表裏で接合する（15Ｒ-15Ａ）。

15Ｒ-16：無色透明の地に、灰白色のモヤが入る黒曜石Ｂ類である。細石刃２点（接合して完形１個体：0.2ｇ）で構成される（15Ｒ-16Ａ）。

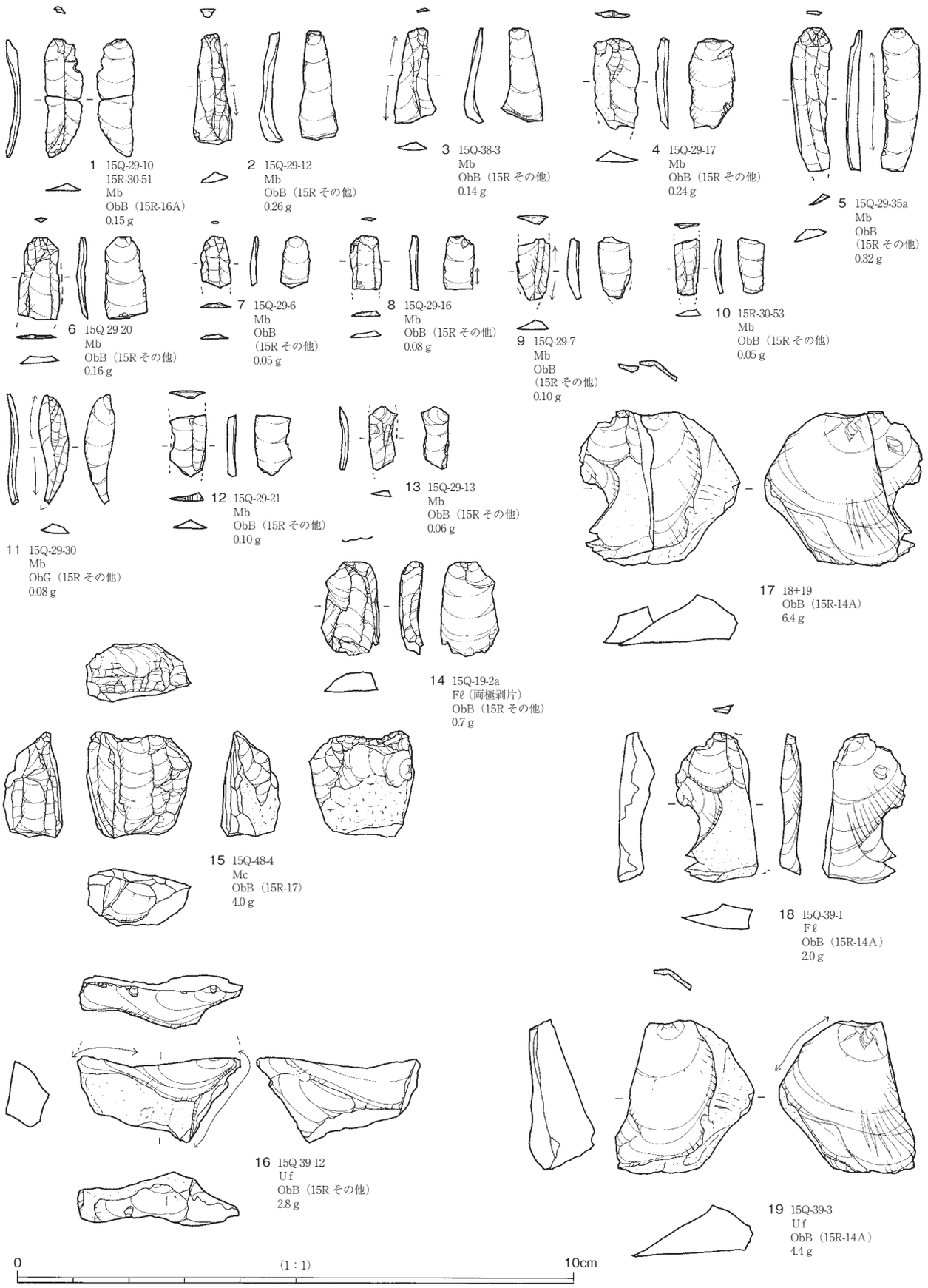
15Ｒ-17：自然面は、黒灰色で細かな凹凸のある亜円礫面、内部は黒色不透明の地に黒灰色のモヤが入る黒曜石Ｂ類である。夾雑物は見られない。細石刃核１点（4.0ｇ）の単独資料である。

３）出土遺物（第85図～第87図）

１～13は黒曜石による細石刃で、11は黒曜石Ｆ類、それ以外は黒曜石Ｂ類である。１は、中央で上下二つに折れているが、接合して完形品となる。この他、２・３が完形品で、４～８が頭部（下半部欠または末端部欠）、９・10・12・13が中間部である。11は、打面部と末端部がわずかに欠損する資料である。他の資料と比べて、湾曲度合いが異なること、石材が本資料のみ黒曜石Ｆ類であることなど、やや異質である。彫器の削片の可能性もある。

14は､黒曜石Ｂ類による小型幅広の縦長剥片である。表面右側に細い縦長の剥離面が見られることから、細石刃核から剥離された作業面再生剥片の可能性があるが、打面が線状で、表面が上下両方向からの剥離面で構成されること、上下両端が細かく潰れていること、打瘤が平坦であることから、両極打撃によって剥離された資料と判断した。

15は、黒曜石Ｂ類による細石刃核である。最終形状は、上端に傾斜する打面をもち、正面は幅広の作業



第85図　15R-Aブロック出土遺物実測図（1）

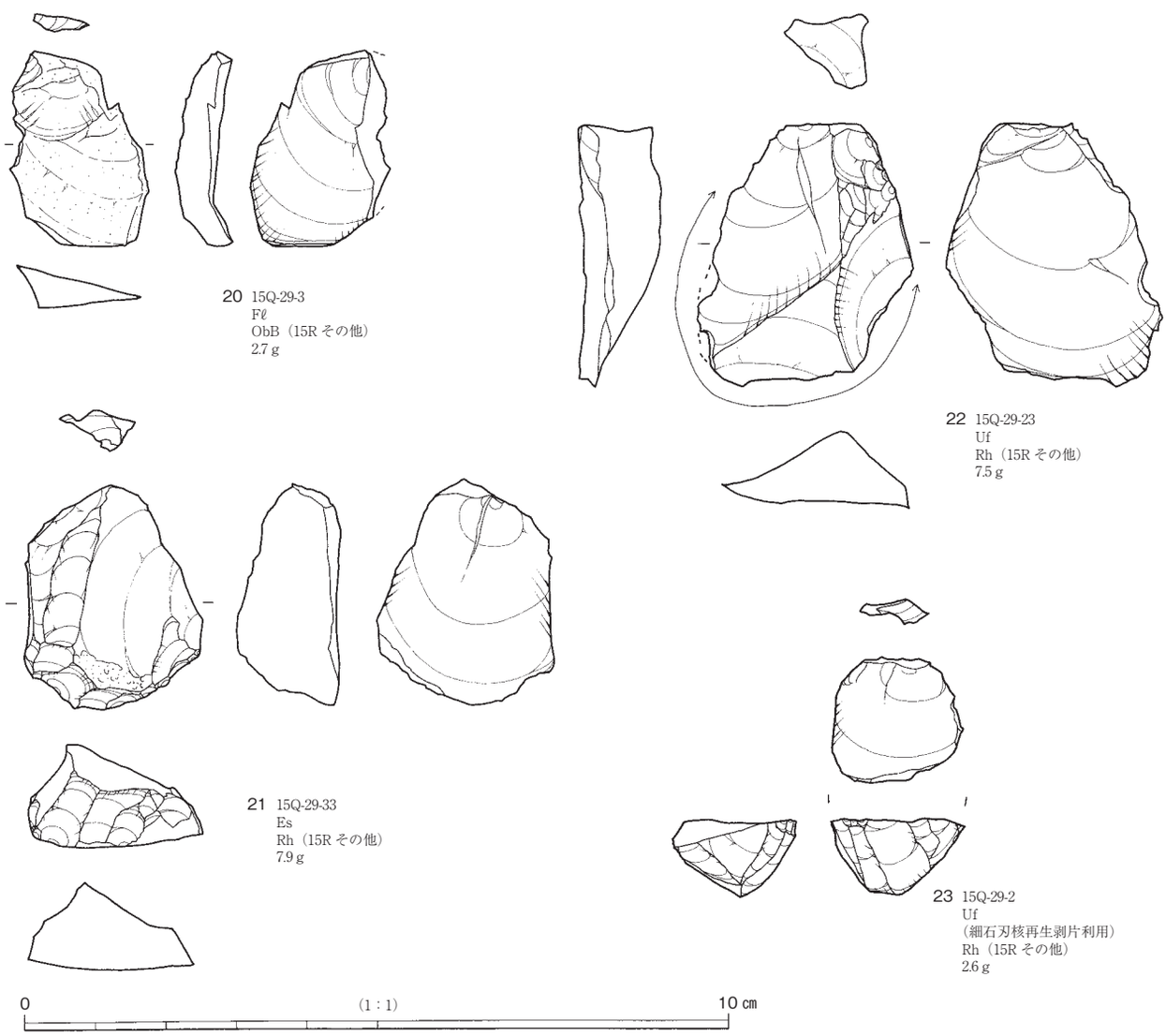
面、裏面は自然面が広く残る、薄手の細石刃核となっている。打面は、裏面右方向からの剥離面によって大略が作られ、作業面に接した部分に細かな打面調整がなされている。なお、作業面の上端は、打面調整によって切られており、細かな打面調整をもって作業が終了している。また、左側面には、下方からの細石刃剥離面が見られることから、細石刃生産の過程で、打面が上下両端にあったと考えられる。本細石刃核の下端に見られる平坦面は、打面再生、あるいは作業面長を限定するための剥離かもしれない。

16～20は、黒曜石Ｂ類による中・小型不定型の剥片及び使用痕ある剥片である。16は、中型不定型の剥片を利用した使用痕ある剥片である。上端の折れ面と右側縁に刃こぼれが見られる。

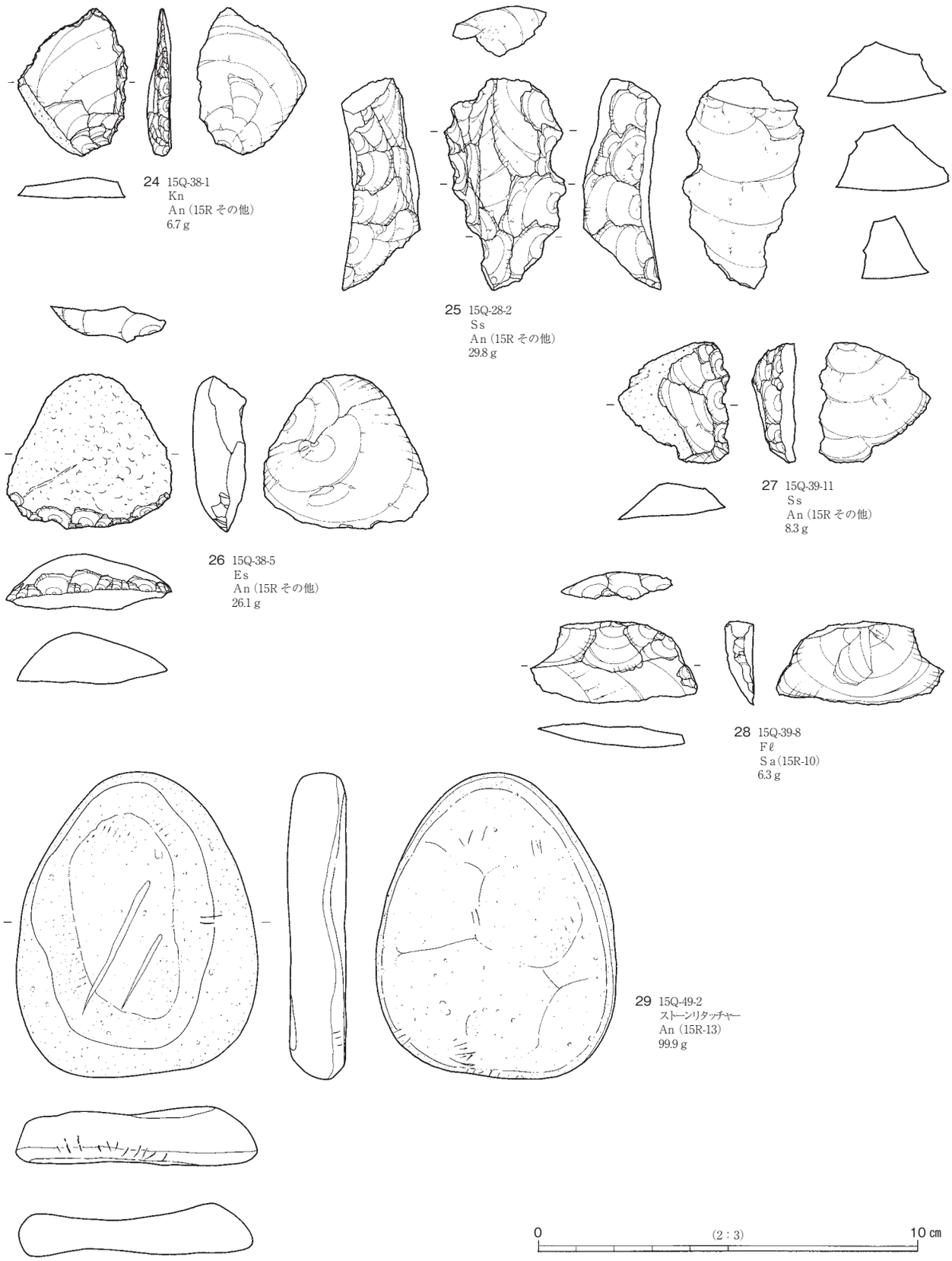
17は、小型不定型の剥片１点（18）と使用痕ある剥片１点（19）との接合資料である。同一打面から、18→19の順に剥離されている。

上記の剥片類は、細石刃、細石刃核と共通する良質な黒曜石が用いられていること、搬入品の可能性が高いにも関わらず、自然面が広く残る剥片が多いことから、原石は小振りの角礫が利用され、石器及び細石刃核の素材を得る目的で生産され、本遺跡に搬入された一群の資料と考えられる。

21～23は、灰白色に風化した軟質の流紋岩による石器群である。21は小型不定型の剥片を素材とした



第86図　15R-Aブロック出土遺物実測図（２）



第87図　15R-Aブロック出土遺物実測図（3）

掻器、22は使用痕ある剥片、23も使用痕ある剥片であるが、細石刃核の下端を剥離した剥片を利用したものである。細石刃生産の作業途中で、打面再生ないしは側面調整等の石核調整を行った際に、剥落したのであろうか。なお、21～23は、石材が互いに類似するが、同一母岩とすることはできなかった。また、この流紋岩による細石刃は見られない。

24～27は、安山岩による石器群である。24は、小型で薄手の剥片を素材とするナイフ形石器である。素材の打面を基部にあてて、右側縁に裏面から調整加工がなされている。なお、野岳・休場型細石刃核を指標とする石器群では、一般的にナイフ形石器を伴わないこと、右側縁の平面形が鋸歯状であることから、この部分を刃部とする削器かもしれない。25は、厚手の剥片を素材とする削器である。左右両側縁に、粗い鋸歯状の剥離面が連続する。上端には、素材の打面が残されている。26は、中型不定型の剥片を素材とする掻器である。表面全体が自然面に覆われた厚手の剥片を素材として、端部に調整加工がなされている。27は、小型不定型の剥片を素材とする削器である。表面右側縁に裏面から粗い調整加工がなされている。

28は、砂岩による小型不定型の剥片である。29は、安山岩（あるいは流紋岩）の扁平礫を利用したストーンリタッチャーと考えた資料である。表面下端と裏面の一部に、細く短い線状の傷が２～４条ずつまとまって見られる。なお、表面中央にある長い２条の傷は、調査時のものである。

第７文化層

本文化層は、両面調整の槍先形石器を指標とし、立川ローム層Ⅲ層上部からその上位の黒褐色土にかけて包含される石器群で、16Ｒグリッドの一群、16Ｒ-Ａブロックの資料が該当する。

槍先形石器は、両面調整による柳葉形が特徴的で、富里市南大溜袋遺跡に代表される土器出現期の石器群にあたる。これに、中・小型木葉形の未成品を含む。また、不定型の剥片を素材とする定型的な掻器がまとまっている。一方、土器出現期に特徴的な石斧や石刃、細石刃等の石器や土器は見られない。

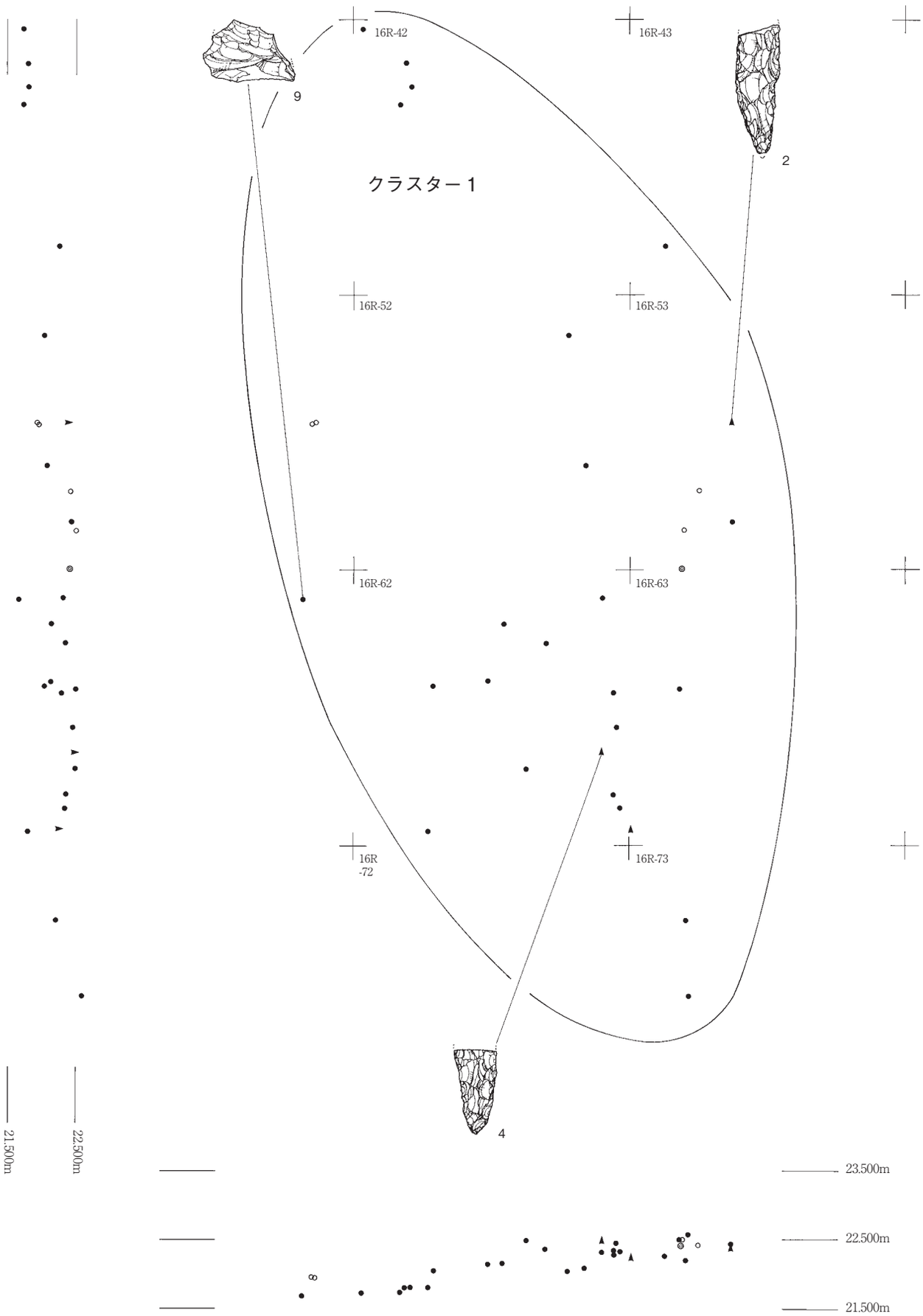
当初、16Ｒグリッドに分布する石器群については、①各種石材による掻器がまとまっていること、②出土資料の一部が立川ローム層Ⅲ層上部に入り込んでいること、③隣接する17Ｒ-Ａブロック（立川ローム層Ⅳ・Ⅴ層）には、黒曜石Ａ類（高原山産）と安山岩による掻器がまとまって分布することから、土器出現期の石器群に加えて、「Ⅳ下・Ⅴ層」の石器群と細石刃石器群直前の槍先形石器群（例えば、八千代市坊山遺跡、千葉市小金沢古墳群など）とが混在している可能性を考え、３者を分離する方向で検討した。しかし、平面的にも垂直的にも石器群を明確に分離することができなかったことから、今回、一括して報告することとした。

１．16Ｒグリッド出土の石器群（第88図～第103図、第44表～第47表、図版42～図版44）

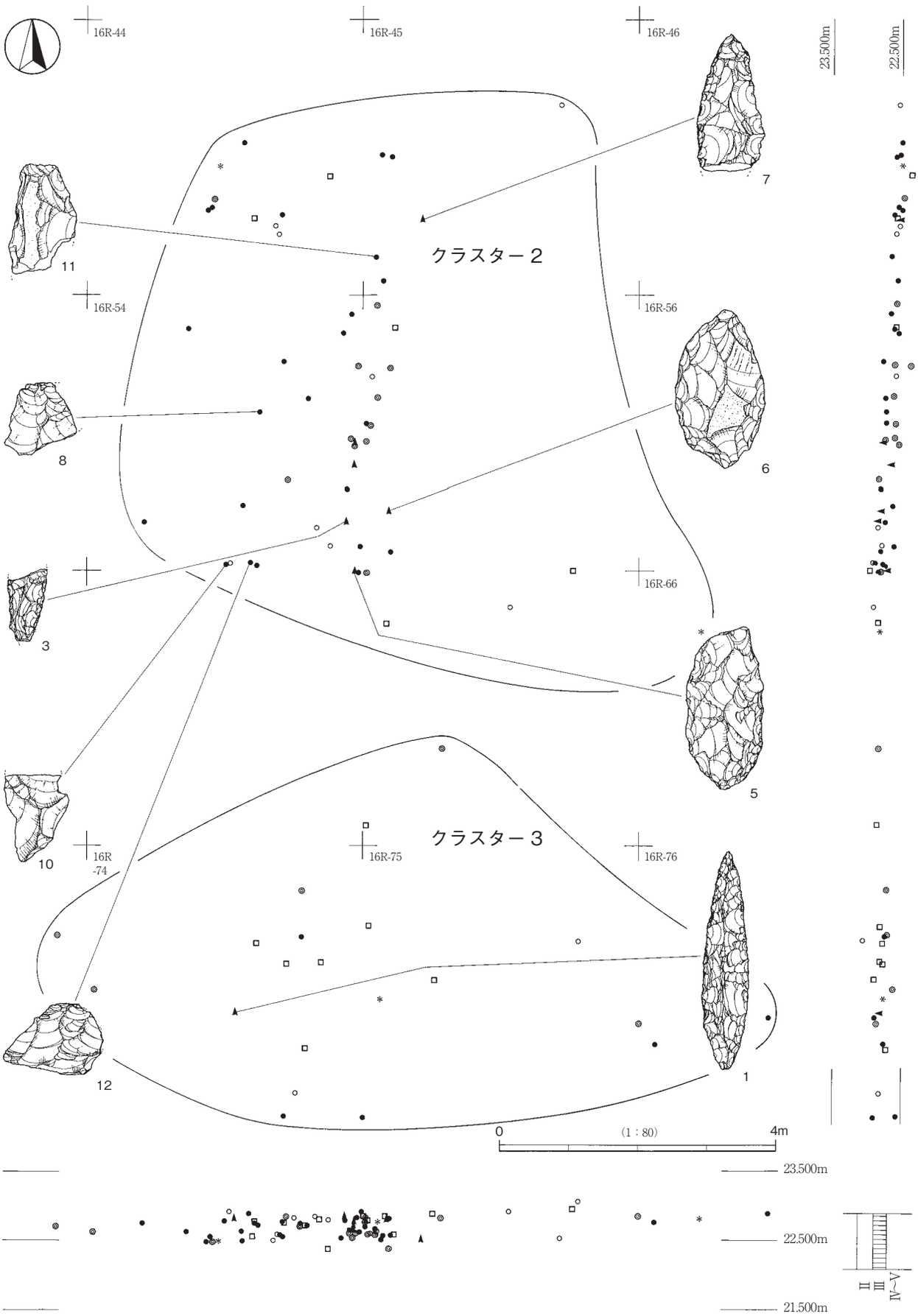
１）概　要（第88図～第94図、第45表・第47表）

16Ｒグリッドは、遺跡南端の16Ｒ-33・42～45・51～55・61～66・73～76グリッドに位置し、標高24m～26mの台地平坦面に立地する。石器群の分布範囲は、大略12m四方で、111点の石器・礫が出土した（16Ｒ-33グリッド出土資料は表採１点）。出土層準は、立川ローム層Ⅲ層とその上位の黒褐色土（Ⅱ層）の境界付近を中心として、0.4m～0.5mの高低差をもって、地形に沿って包含されている。

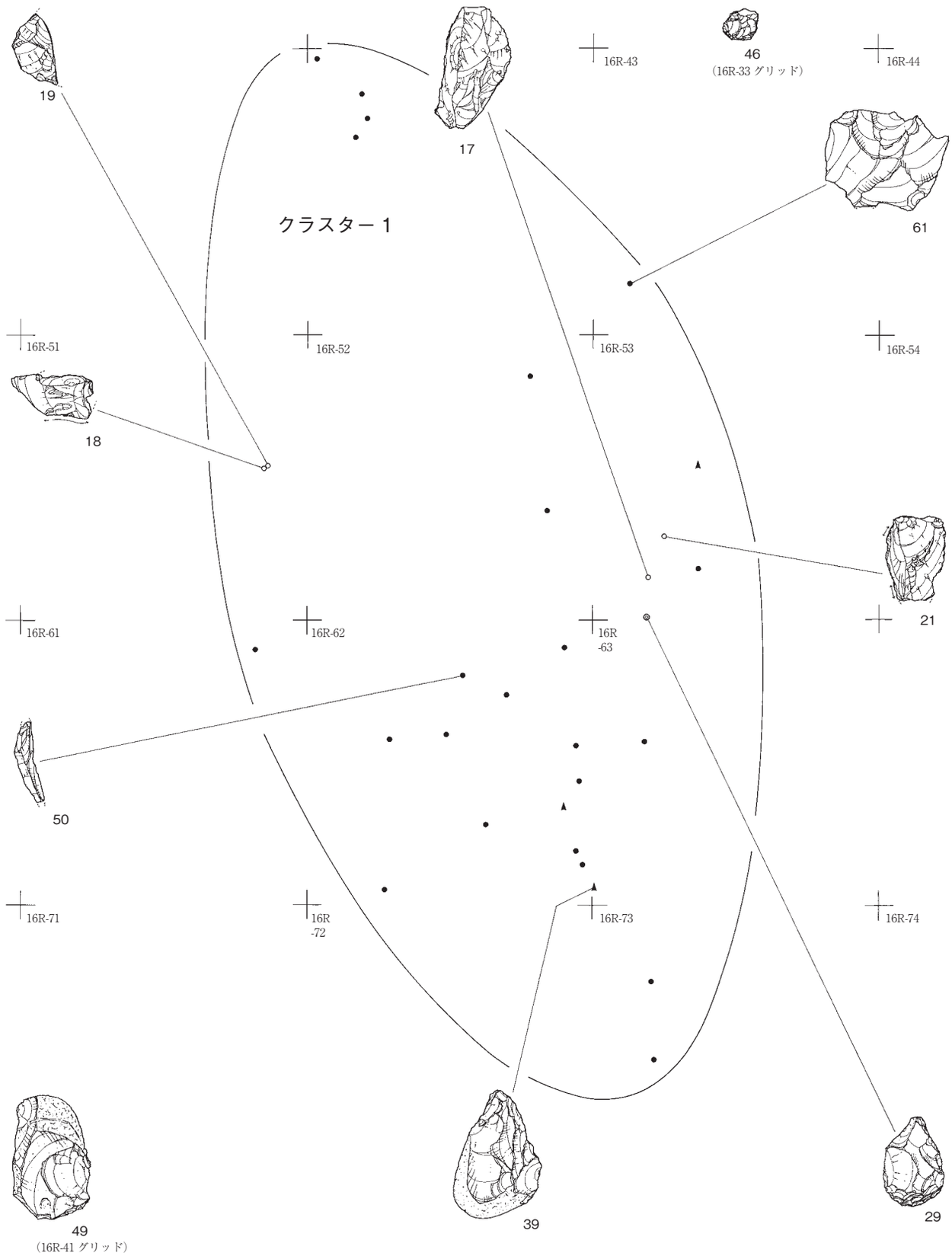
石器群の内容は、槍先形石器10点、掻器17点、削器２点、楔形石器１点、加工痕ある剥片６点、使用痕ある剥片５点、剥片55点、石核12点、礫３点である。石器群の中に、大・中型両面調整の柳葉形と木葉形



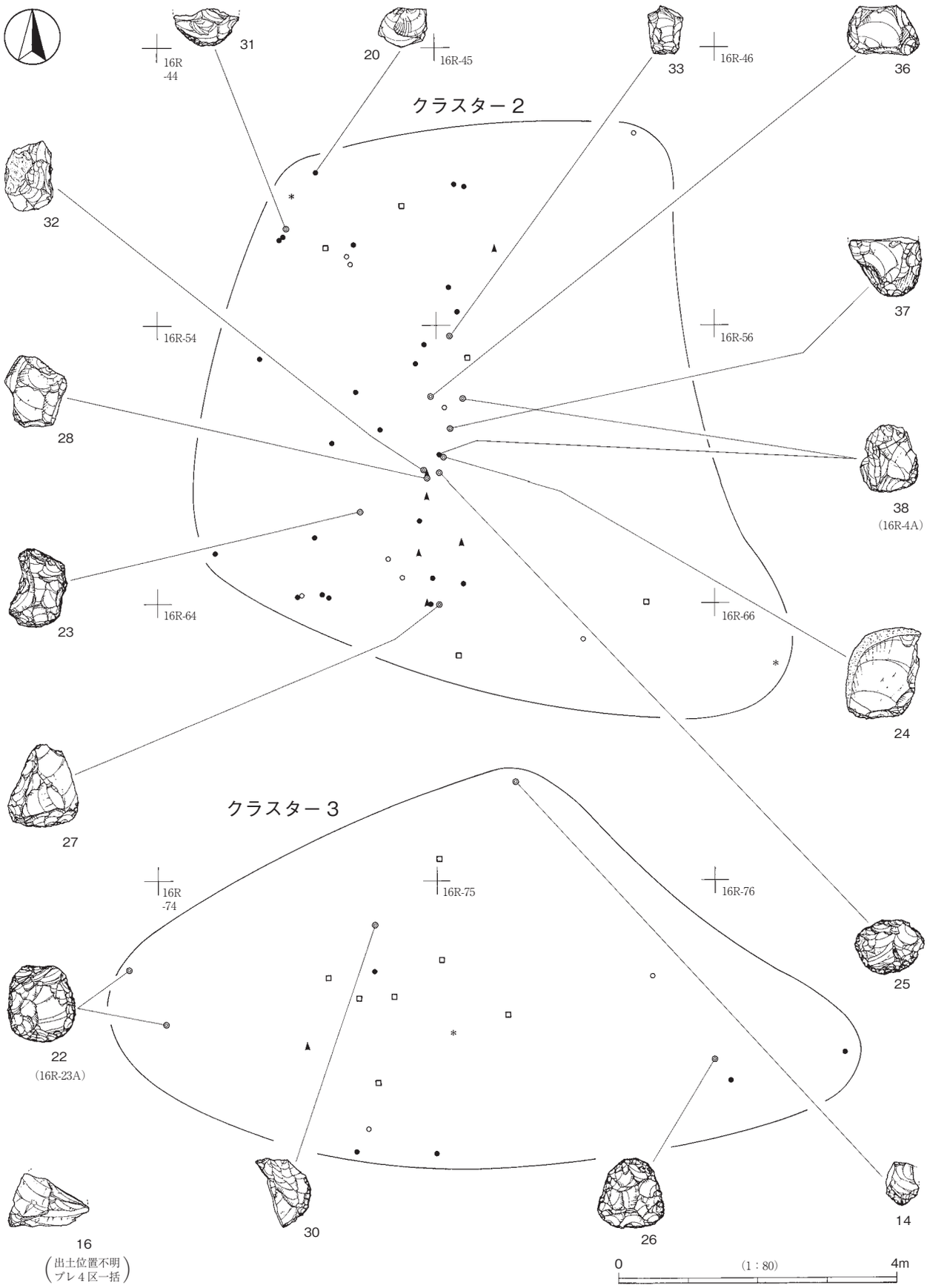
第88図　16Rグリッド出土遺物分布図（１）－石器別分布図（１）－



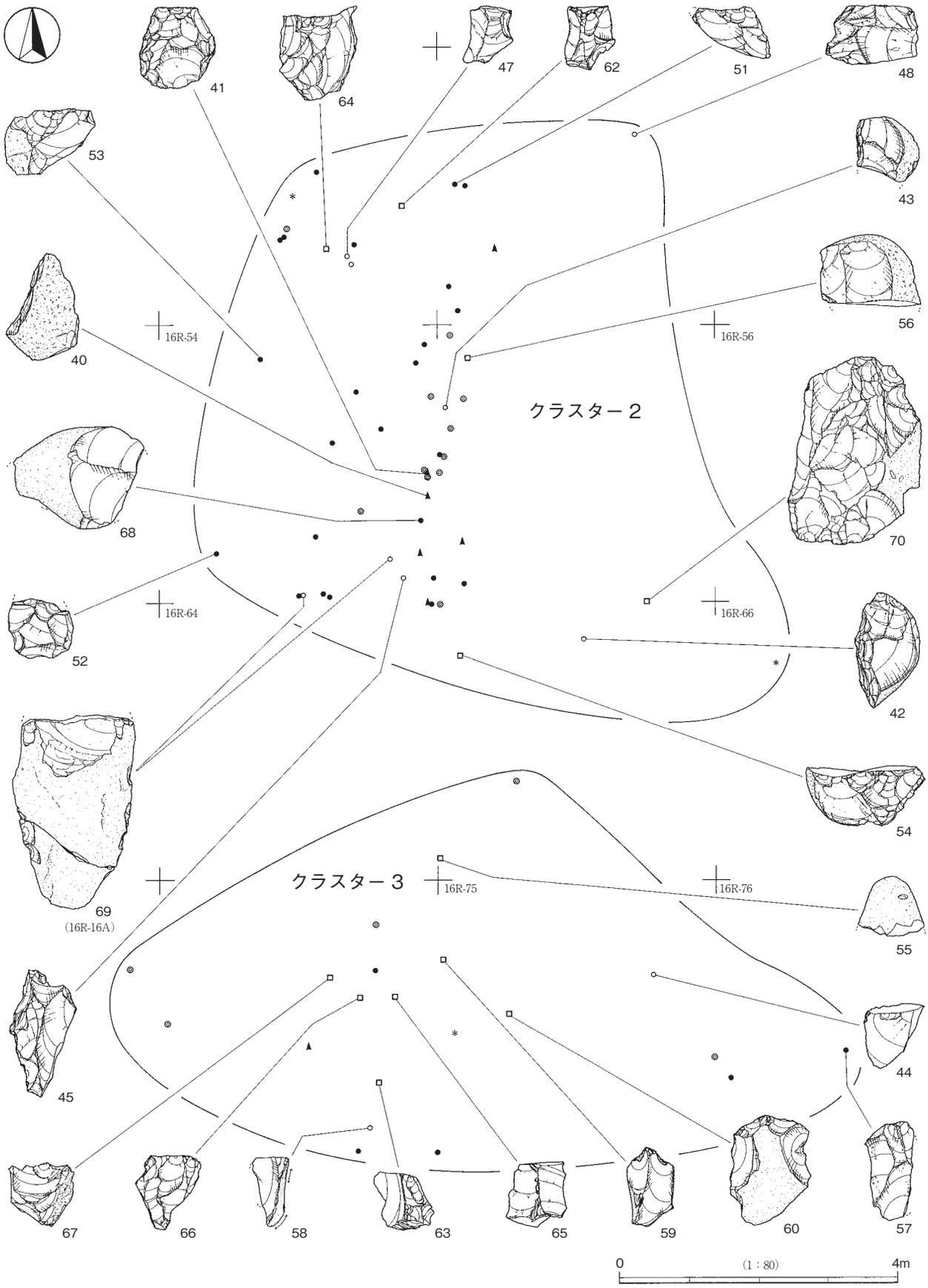
第89図　16Rグリッド出土遺物分布図（２）－石器別分布図（２）－



第90図　16Rグリッド出土遺物分布図（３）－石器別分布図（３）－



第91図　16Rグリッド出土遺物分布図（４）－石器別分布図（４）－



第92図　16Rグリッド出土遺物分布図（５）－石器別分布図（５）－

の槍先形石器が含まれることから、土器出現期の石器群と考えられる。この時期の石器群は、房総半島では、立川ローム層Ⅲ層上部から黒褐色土にかけて出土しており、一般的傾向に合致する。石器石材は、黒曜石Ｂ類２点、黒曜石Ｄ類１点、黒曜石Ｅ類１点、黒曜石Ｆ類５点、安山岩35点、流紋岩４点、頁岩Ａ類２点、頁岩Ｂ類１点、頁岩Ｃ類10点、頁岩Ｄ類２点、頁岩Ｅ類２点、頁岩Ｘ類７点、凝灰岩１点、チャート２点、砂岩６点、ホルンフェルス13点、玉髄13点、礫の石材は、チャート、砂岩、ホルンフェルス各１点ずつである。なお、本石器群については、複数時期の混在を考慮して、ブロックを設定しなかったので、３か所のまとまり（クラスター）に分けて記述する。

クラスター１は、16Ｒグリッド西側の、16Ｒ-42・43・51 ～ 53・61 ～ 63・73グリッドにかけて位置し、長軸14.8m、短軸6.8mの長楕円形の範囲に33点の石器が散漫に分布する。石器組成は、槍先形石器３点、掻器１点、楔形石器１点、加工痕ある剥片１点、使用痕ある剥片３点、剥片24点で、石材構成は、黒曜石Ｂ類１点、黒曜石Ｄ類１点、黒曜石Ｆ類４点、安山岩15点、頁岩Ａ類１点、頁岩Ｅ類１点、頁岩Ｘ類２点、チャート１点、砂岩１点、ホルンフェルス６点である。石材別の分布状況は、安山岩がクラスター１の中央部の16Ｒ-62グリッドを中心とする部分にまとまり、ホルンフェルスはクラスター１の北側の16Ｒ-42・43・52・53グリッドに散在する。

クラスター２は、16Ｒグリッド北東部の、16Ｒ-44・45・54・55・64 ～ 66グリッドにかけて位置し、長軸7.2m、短軸4.0mの範囲に51点の石器が分布し、さらに、その東側に５点の石器･礫がある。石器組成は、槍先形石器６点、掻器11点、削器２点、加工痕ある剥片５点、剥片25点、石核５点、礫２点、石器の石材構成は、黒曜石Ｂ類１点、安山岩19点、流紋岩２点、頁岩Ａ類１点、頁岩Ｂ類１点、頁岩Ｃ類８点、頁岩Ｄ類１点、頁岩Ｘ類１点、凝灰岩１点、チャート１点、砂岩５点、ホルンフェルス７点、玉髄６点、礫の石材は、チャート１点、砂岩１点である。石材別分布は、頁岩Ｃ類、ホルンフェルスが中央にまとまり、その西側に砂岩が散在する。また、玉髄は北西部の直径２ｍ～３ｍの範囲にまとまっている。安山岩は、クラスター２の全域に分布する。

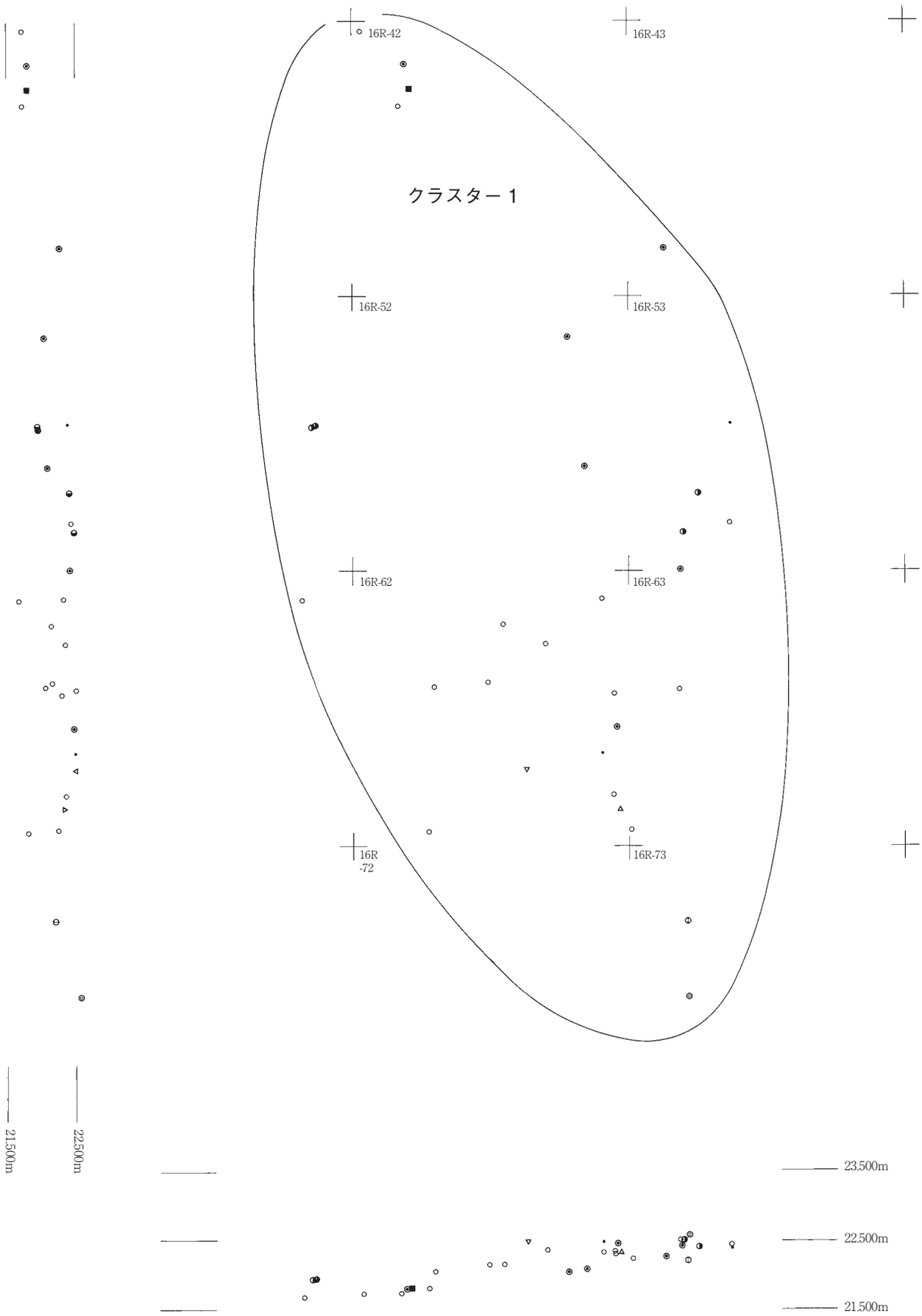
クラスター３は、16Ｒグリッド南東部の、16Ｒ-65・73 ～ 76グリッドにかけて位置し、長軸10.4m、短軸5.5mの範囲に21点の石器・礫が分布する。

石器組成は、槍先形石器１点、掻器５点、加工痕ある剥片１点、使用痕ある剥片１点、剥片５点、石核７点、礫１点、石器の石材組成は、黒曜石Ｅ類１点、黒曜石Ｇ類１点、安山岩１点、流紋岩２点、頁岩Ｃ類２点、頁岩Ｄ類１点、頁岩Ｅ類１点、頁岩Ｘ類４点、玉髄７点、礫の石材は、ホルンフェルス１点である。石材別分布は、クラスター３の中央西寄りで玉髄がまとまり、それ以外の石材が全体に散在する。特に、クラスター１・２に多い安山岩が１点しか見られない。

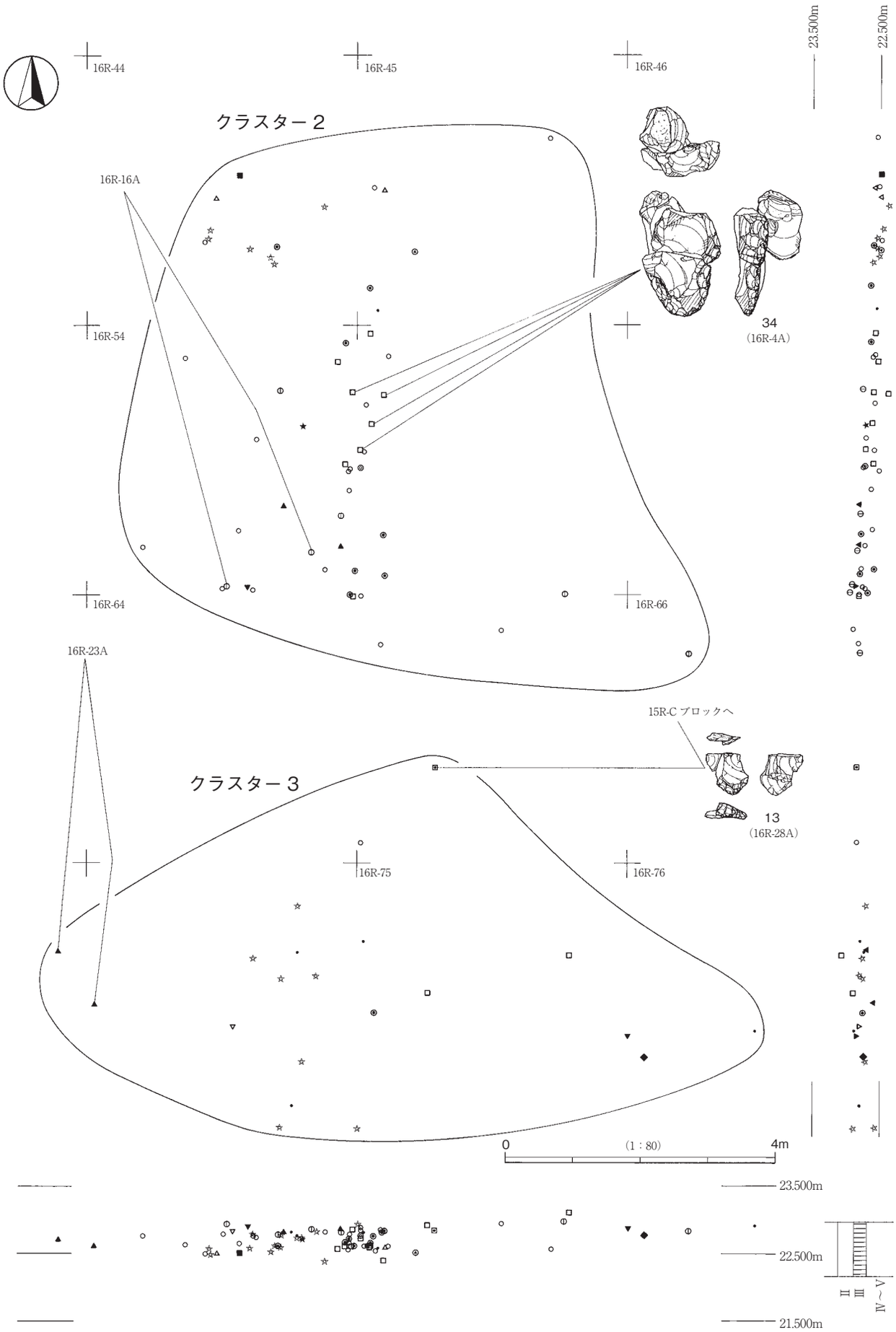
なお、上記各クラスターに共通することであるが、本石器群は、縄文時代早期以降各時期の土器と、ほぼ同一の層準から出土していることから、黒曜石Ｂ類（信州産）及び黒曜石Ｆ類（神津島産）は、縄文時代早期以降に伴う可能性もある。

２）母岩別資料（第44表・第46表）

母岩別資料については、石器総数108点のうち37点を28母岩に分類した（母岩の識別率34％）。内訳は、黒曜石Ｅ類１母岩（16Ｒ-28：２点、うち１点は16Ｒグリッド）、流紋岩３母岩（16Ｒ-１・23・24：４点）、頁岩Ａ類１母岩（16Ｒ-２：１点）、頁岩Ｂ類１母岩（16Ｒ-３：１点）、頁岩Ｃ類３母岩（16Ｒ-４～６：６点）、頁岩Ｄ類２母岩（16Ｒ-７・８：２点）、頁岩Ｅ類２母岩（16Ｒ-９・10：２点）、頁岩Ｘ類４母岩（16



第93図　16Rグリッド出土遺物分布図（６）－石材別分布図（１）－



第94図　16Rグリッド出土遺物分布図（７）－石材別分布図（２）－

R-11 ～ 13･19：４点)、凝灰岩１母岩（16R-14：１点)、砂岩１母岩（16R-16：５点)、チャート２母岩（16R-21・22：２点)、ホルンフェルス４母岩（16R-15・17・18・20：４点)、玉髄３母岩（16R-25 ～ 27：４点）である。本石器群は、製品の占める割合が高く、大半が単独資料である。

なお、母岩に分類できなかった石器は、黒曜石Ｂ類２点（2.3ｇ)、黒曜石Ｄ類１点（2.3ｇ)、黒曜石Ｆ類５点（41.4ｇ)、黒曜石Ｇ類１点（0.8ｇ)、安山岩35点（413.7ｇ)、頁岩Ａ類１点（1.2ｇ)、頁岩Ｃ類４点（19.4ｇ)、頁岩Ｘ類３点（8.9ｇ)、砂岩１点（1.9ｇ)、ホルンフェルス９点（55.3ｇ)、玉髄９点（76.1ｇ)、礫は、チャート１点（2.0ｇ)、砂岩１点（15.3ｇ)、ホルンフェルス１点（11.2ｇ）がある。また、安山岩製石器の記述にあたっては、原石が拳大程度以下の円礫で、やや赤みを帯びた灰褐色に風化したものと、原石の大きさは不明であるが前者よりも大型と想定され、やや青みがかった灰色に風化したものに区分し、前者をⅠ類、後者をⅡ類とした。Ⅰ類は、自然面が浅い爪痕状の傷が無数にあるものや紙やすり状のものがあり、小振りの円礫であることから、河川下流域の河原や礫層より採取されたと想定され、房総半島の上総丘陵砂礫層も候補地に含まれる。Ⅱ類は、大型の円礫と想定されることから、より上流域の産地（群馬県から栃木県）からもたらされたと考えられる。

16R- 1：灰白色を呈し、微細な夾雑物をわずかに含む硬質緻密な流紋岩である。中型不定型で厚手の剥片を素材とする掻器１点（13.0ｇ）の単独資料である。クラスター２に分布する。

16R- 2：灰白色を呈し、硬質緻密で油脂状光沢のある頁岩Ａ類（東北産頁岩）である。小型不定型で薄手の剥片を素材とする掻器１点（5.8ｇ）の単独資料である。クラスター２に分布する。

16R- 3：自然面は黄灰色で滑らかな円礫面、内部も黄灰色を呈する緻密質な頁岩Ｂ類（北関東産頁岩）である。小型不定型の剥片１点（0.5ｇ）の単独資料であるが、形態的特徴から、槍先形石器の調整剥片（後半段階の工程）と考えられる。クラスター２に分布する。

16R- 4：自然面は橙褐色を呈し、爪痕状の傷が多い円礫面、内部は黄色みを帯びた灰色で、紫色の斑が散在する頁岩Ｃ類（嶺岡産頁岩）である。全体に、チャートに近い質感である。掻器３点、剥片１点、合計４点（42.1ｇ）で構成され、全て接合する（16R- ４Ａ)。この接合資料は、掻器２個体が表裏で接合したものであるが、そのうち１個体は２つに折れており、それぞれに対して再加工がなされている。もう１個体は、欠損または加工のために剥落した破片が接合している。全ての資料は、クラスター２の中央にまとまって分布する。

16R- 5：自然面は褐色で滑らかな円礫面、内部は灰褐色の地に紫色の斑が入る頁岩Ｃ類（嶺岡産頁岩）である。中型厚手の剥片を素材とする石核１点（33.6ｇ）の単独資料である。クラスター３に分布する。

16R- 6：緑色がかった灰色の地に紫色の縞が入る頁岩Ｃ類（嶺岡産頁岩）である。小型で厚手の剥片を素材とする加工痕ある剥片１点（8.5ｇ）の単独資料である。クラスター３に分布する。

16R- 7：灰色の地に薄紫色の縞が数条入る、よく珪化した頁岩Ｄ類である。中型不定型の剥片を素材とする扁平な掻器１点（10.0ｇ）の単独資料である。クラスター３に分布する。

16R- 8：紫がかった暗灰色の地に、さらに暗い色調の縞が多方向に入る、珪化度の高い頁岩Ｄ類である。中型不定型の剥片１点（7.6ｇ）の単独資料であるが、形態的特徴から、槍先形石器の調整剥片と考えられる。クラスター２に分布する。

16R- 9：黄灰色でザラついた質感を呈する頁岩Ｅ類（黒色頁岩）である。大型柳葉形の槍先形石器１点（20.6ｇ）の単独資料である。クラスター３に分布する。

16R-10：黄灰色でザラついた質感を呈する頁岩Ｅ類（黒色頁岩）である。小型不定型の剥片１点（1.0ｇ）の単独資料である。形態的特徴から、槍先形石器の調整剥片の可能性がある。クラスター１に分布する。

16R-11：黄灰色の地に、紫がかった暗灰色の縞が入る頁岩Ｘ類である。中型柳葉形の槍先形石器１点（基部破片：5.0ｇ）の単独資料である。クラスター１に分布する。

16R-12：自然面は灰白色を呈する滑らかな円礫面、内部は灰白色の地に灰色の縞が入る頁岩Ｘ類である。不定型厚手の剥片を素材とする石核１点（8.6ｇ）の単独資料である。クラスター３に分布する。

16R-13：自然面は黄灰色を呈する滑らかな円礫面、内部は黄灰色でザラついた質感の頁岩Ｘ類である。剥離時に打点から割れた中型不定型の剥片を利用した使用痕ある剥片１点（4.1ｇ）の単独資料である。クラスター３に分布する。

16R-14：緑がかった灰色を呈する硬質の石材で、凝灰岩としたが、砂岩ないしはホルンフェルスかもしれない。中型両面調整の槍先形石器未成品１点（基部を欠損する：31.1ｇ）の単独資料である。クラスター２に分布する。

16R-15：自然面は灰色を呈する滑らかな円礫面、内部も灰色できめ細かな粘土質のホルンフェルスである。中型両面調整の槍先形石器未成品１点（52.1ｇ）の単独資料である。クラスター２に分布する。

16R-16：自然面は灰褐色を呈する滑らかな円礫面、内部も灰褐色で粒子の粗い砂岩である。大型不定型の剥片を素材とする加工痕ある剥片２点（接合して１個体）、中・小型不定型の剥片２点、拳よりも一回りほど小振りの石核１点、合計５点（438.8ｇ）で構成される。全てクラスター２に分布する。剥片類４点はクラスター２の西側に散在し、石核１点はクラスター２の東端に離れている。

16R-17：灰褐色を呈する粘土質のホルンフェルスで、風化により脆弱となっている。中型両面調整の槍先形石器１点（未成品の可能性あり：61.3ｇ）の単独資料である。クラスター２に分布する。

16R-18：灰白色を呈する粘土質のホルンフェルスである。中型扁平な不定型の剥片を素材とする掻器１点（10.7ｇ）の単独資料である。クラスター１に分布する。

16R-19：黒灰色を呈する硬質緻密な頁岩Ｘ類である。粘板岩に似た質感である。被熱特有の剥落が見られることから、変色している可能性が高い。両面調整で中型柳葉形の槍先形石器１点（上半部欠損：13.0ｇ）の単独資料である。クラスター１に分布する。

16R-20：灰褐色を呈する粘土質のホルンフェルスである。中型不定型の剥片１点（14.9ｇ）の単独資料である。形態的特徴から、槍先形石器の調整剥片と考えられる。クラスター２に分布する。

16R-21：青灰色で珪化度の高い部分と、灰白色であまり珪化していない部分とが明瞭に分かれ、灰白色の細い縞が平行するチャートである。小型不定型の剥片１点（0.6ｇ）の単独資料である。クラスター１に分布する。

16R-22：青灰色の一般的なチャートである。小型不定型の剥片１点（0.3ｇ）の単独資料である。形態的特徴から、槍先形石器の調整剥片と考えられる。クラスター２の北端に分布する。

16R-23：灰白色を呈し、直径0.5㎜ほどの夾雑物が散在する硬質緻密な流紋岩である。掻器２点（接合して１個体：12.4ｇ）で構成される。クラスター３に分布する。

16R-24：黄白色を呈し、直径１㎜以下の夾雑物が散在する、粗い質感の流紋岩である。中型柳葉形の槍先形石器１点（基部破片：3.6ｇ）の単独資料である。クラスター２に分布する。

16R-25：自然面は黄褐色を呈し、緩やかな凹凸のある円礫面、内部は赤みを帯びた褐色（飴色）を呈す

る玉髄である。中型不定型の剥片を素材とする掻器（刃部破片）１点､剥片素材の石核１点､合計２点（28.5ｇ）で構成される。両者は、クラスター２の北西部に分布する。

16R-26：白色不透明の玉髄である。小型不定型の剥片１点（1.8ｇ）の単独資料である。クラスター２に分布する。

16R-27：黄褐色半透明の地に、灰白色の不純物が塊状に入る玉髄である。剥片素材の石核１点（7.5ｇ）の単独資料である。クラスター３に分布する。

16R-28：青みがかった黒色の地に、灰色の縞が入る黒曜石Ｅ類（天城峠産）である。小型不定型の剥片を素材とする掻器１点と小型の調整剥片１点、合計２点（1.4ｇ）で構成され、両者は接合する（16R-28Ａ）。掻器本体は16Ｒグリッドのクラスター３北端に位置するが､調整剥片は15Ｒ-Ｃブロック（第３文化層）に分布する。掻器を含めて、本母岩は第３文化層に帰属する可能性が高い。

３）出土遺物（第95図～第103図）

１～４は、大･中型柳葉形の槍先形石器である。１は、黄灰色の頁岩Ｅ類（黒色頁岩）による柳葉形で、最大幅が基部寄りにある形状である。表面はやや急角度、裏面は比較的平坦な剥離によって調整加工がなされている。２は、柳葉形の先端部を欠いた資料、３・４は、基部の破片である。２・４は頁岩Ｘ類、３は流紋岩が用いられている。いずれの資料も、わずかながら左右非対称であるが、当初からの意図した形状というよりは、欠損後の再加工で変形した可能性がある。ただし、折れ面に調整加工は見られない。

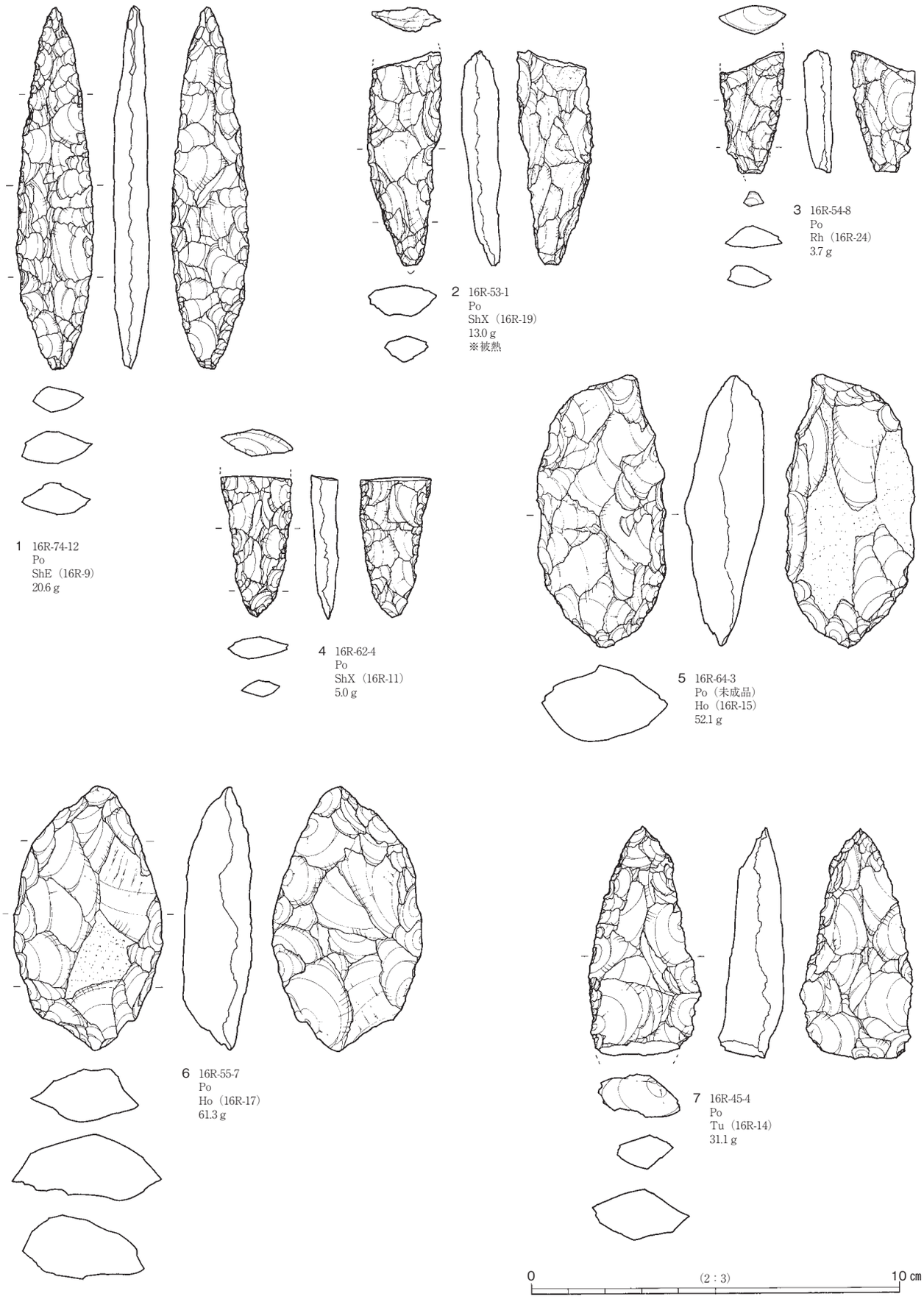
５～７は、槍先形石器の未成品である。５は、灰色に風化したホルンフェルスによる槍先形石器未成品である。実測図左面は細かな調整加工に覆われているが、裏面には自然面が広く残されており、横断面は円形に近い。また、先端部も作り出されていない。槍先形石器としての製作を中断した理由は、剥離がスムーズに通らず、薄手の両面体に仕上げることが困難になったためと考えられるが、本遺跡内に同一母岩がないことから、槍先とは異なる性格の石器として持ち込まれたと考えられる。６・７も周辺部に細かな調整加工が見られないことから、未成品と考えられる資料である。特に、７の縁辺は大きく波打っており、未調整である。６も未成品と判断したが、形状は幅広の木葉形と考えられる。

柳葉形は頁岩類とそれに類する質感の流紋岩、木葉形はホルンフェルスと凝灰岩が利用されており、石材と形状に相関性があるかも知れない。

８～12は、両面調整の槍先形石器を製作する際に生じた調整剥片である。剥片の大きさや主軸の湾曲度合いから、槍先形石器製作の半ばの工程で生じたものと考えられる。９～11は、剥片の末端部に打面とは反対方向からの剥離面が見られる。なお、11・12はホルンフェルスと頁岩Ｄ類による単独母岩、８～10は安山岩のためはっきりしないが、おそらく単独母岩と考えられる。いずれも安山岩Ⅱ類である。

13～21は、天城峠産及び神津島産と想定される黒曜石製の資料である。13は、天城峠産と想定される黒曜石による掻器（14）と、小型不定型剥片（15）の接合資料である。掻器の基部裏面を薄くするために15を含む小型の剥片が剥離されたと考えられる。なお、15は15R-Ｃブロックに位置し、両者ともに第３文化層に帰属する可能性の方が高いと考えられる。

16～19・21は、神津島産と想定される黒曜石による剥片類である。中・小型不定型の剥片を利用した使用痕ある剥片、加工痕ある剥片で、表裏両面に細かな傷が多いことから、製品ないしは剥片の状態で持ち込まれたと考えられる。17・21は、不整形の縦長剥片が打点から折れたものを利用している。20は、信州産と考えられる黒曜石による小型不定型の剥片である。

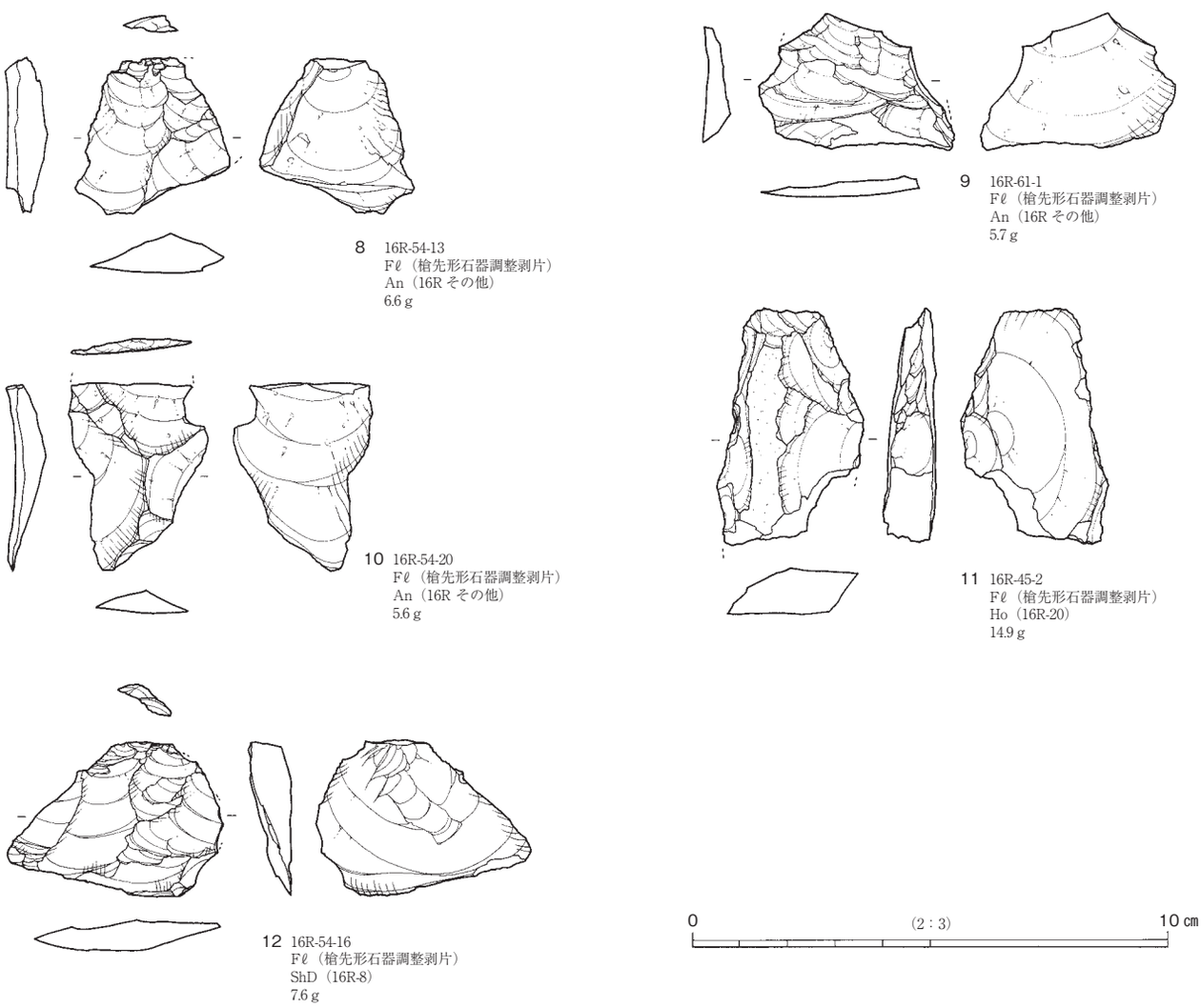


第95図　16Rグリッド出土遺物実測図（１）

22～38は、掻器及びその関連資料である。中・小型不定型の剥片を素材としているが、おそらく刃部の再生によって長さが短くなると推定され、最終的に長幅比１対１程度の形状になっている。石材は、安山岩Ⅰ類３点（24・27・28）、流紋岩２点（22・23）、頁岩Ａ類１点（25）、頁岩Ｃ類６点（32・33・36～38：５個体）、頁岩Ｄ類１点（26）、ホルンフェルス１点（29）、玉髄２点（30・31）と、多彩である。完形品が多い中で、31は刃部破片であるが、これは刃部再生に伴って切断された破片の可能性がある。

34は、頁岩Ｃ類による掻器の接合資料である。連続して剥離された、中型でやや厚手の剥片を素材として、２個体の掻器（35・38）が製作される。その後、35は上下２つに折れ、上半部（36）は折れ面を中心に、下半部（37）は右側縁に調整加工がなされている。

39は、安山岩Ⅰ類による槍先形石器（未成品）とした資料である。中型厚手で不定型の剥片を素材として、表面右側縁（及び裏面左側縁）を中心に、調整加工がなされている。また、先端部は、左右両側から調整加工がなされている。下半部については、表面には自然面、裏面には主要剥離面が残されており、調整加工が及んでいない。40も同類の石器と考えられる。中型不定型の剥片を素材として、表面左側縁と裏面左側縁に調整加工がなされている。表面には自然面が広く残されている他、裏面の右側に素材時の主要

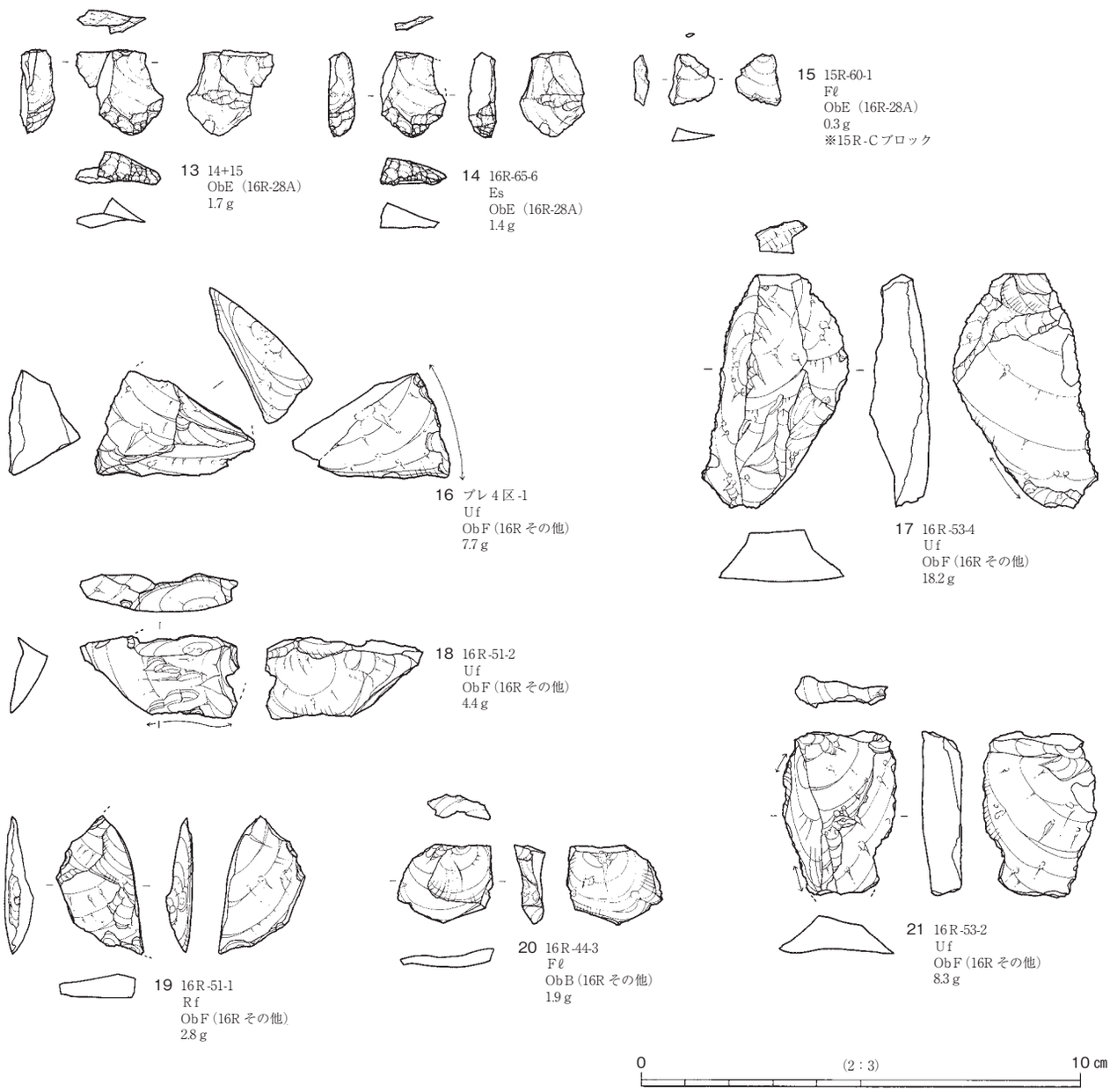


第96図　16Rグリッド出土遺物実測図（２）

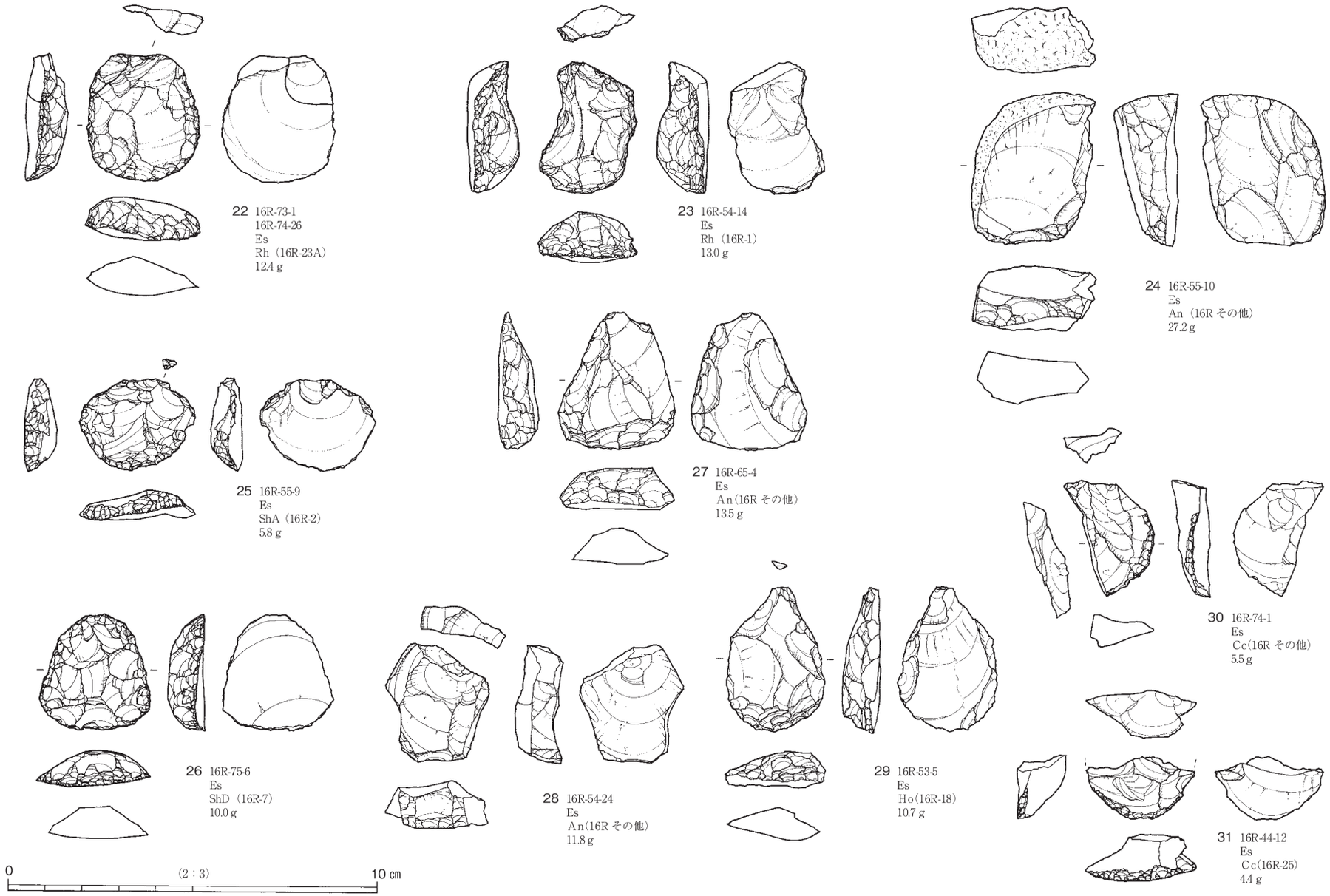
剥離面が見られ、全体に調整加工が少ない。なお、主要剥離面は打瘤が発達していないことから、両極打撃によって得られた可能性がある。また、原石は拳大程度の大きさで、槍先形石器を製作する材料としては小振りである。富津市前三舟台遺跡では、隆線文土器に伴う有茎尖頭器の素材に、小型扁平の安山岩円礫が利用されており、また、素材の生産には両極打撃が多用されるなど、共通点がうかがえる。なお、先述した８～10は、大型の原石から製作された槍先形石器の調整剥片で、石材も形態も大きく異なっている。

41は、安山岩Ⅰ類による両面調整の石器で、槍先形石器の欠損品と考えた。上端は欠損しており、表面には欠損面を打面とする剥離面が見られる。表裏両面とも平坦な調整加工に覆われており、素材時の剥離面は見られない。なお、欠損した小型の石斧が再加工された可能性もある。

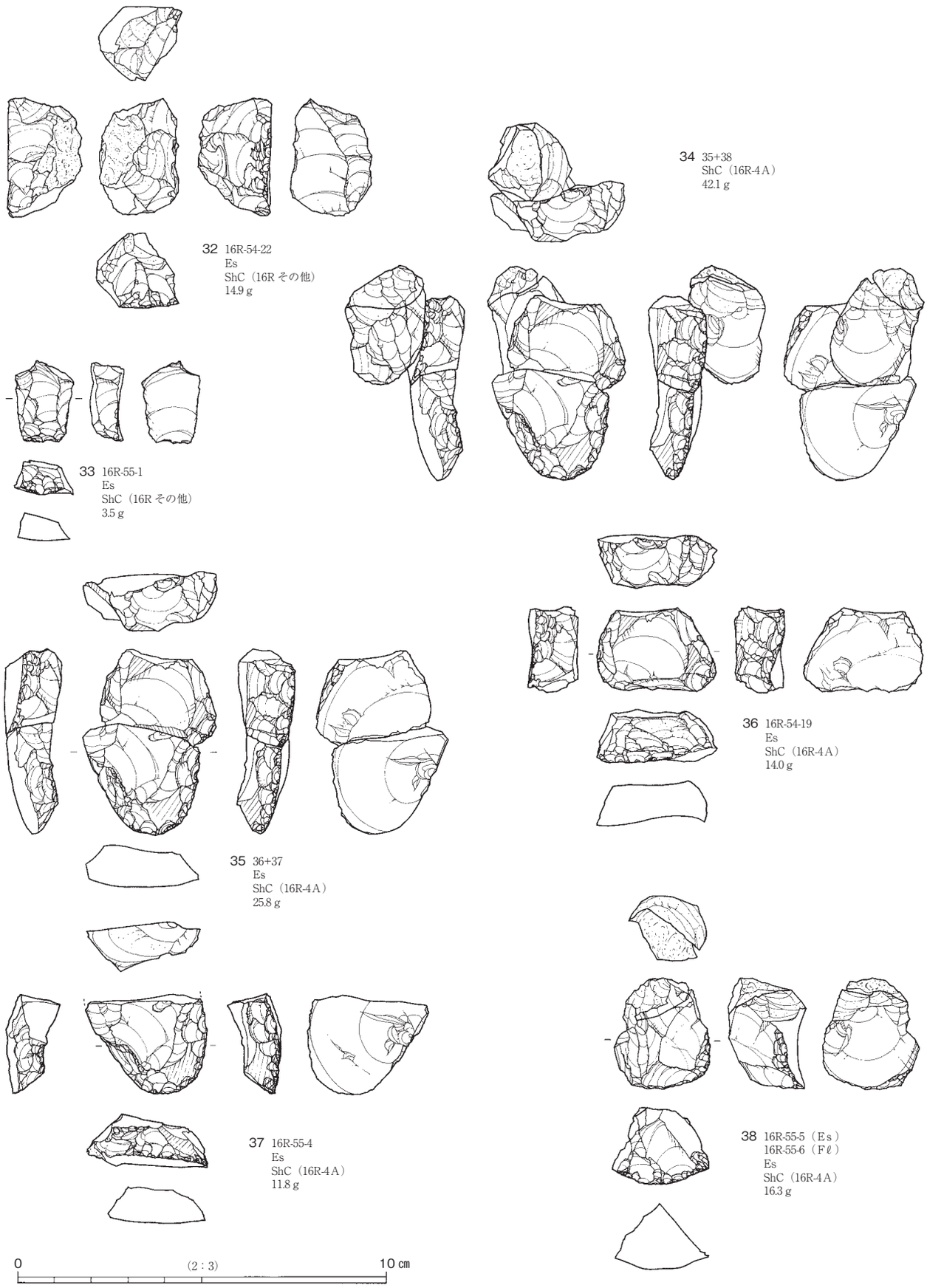
42は、安山岩Ⅰ類による中型不定型の剥片を素材とする削器である。表面左側縁に急角度の調整加工がなされている。右側面は自然面の打面が広く残され、裏面左側には、素材時の打点、打瘤が見られる。43



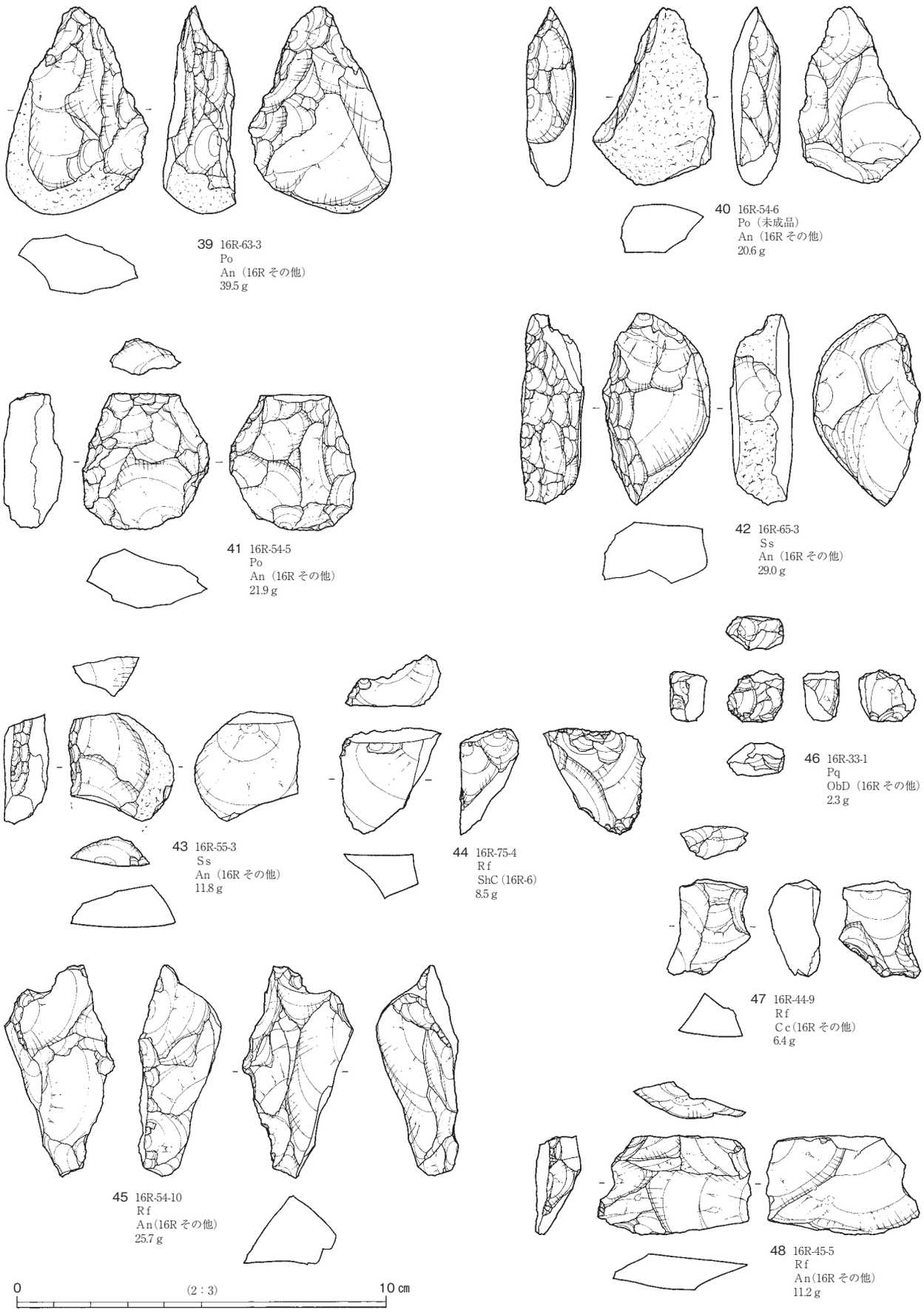
第97図　16Rグリッド出土遺物実測図（３）



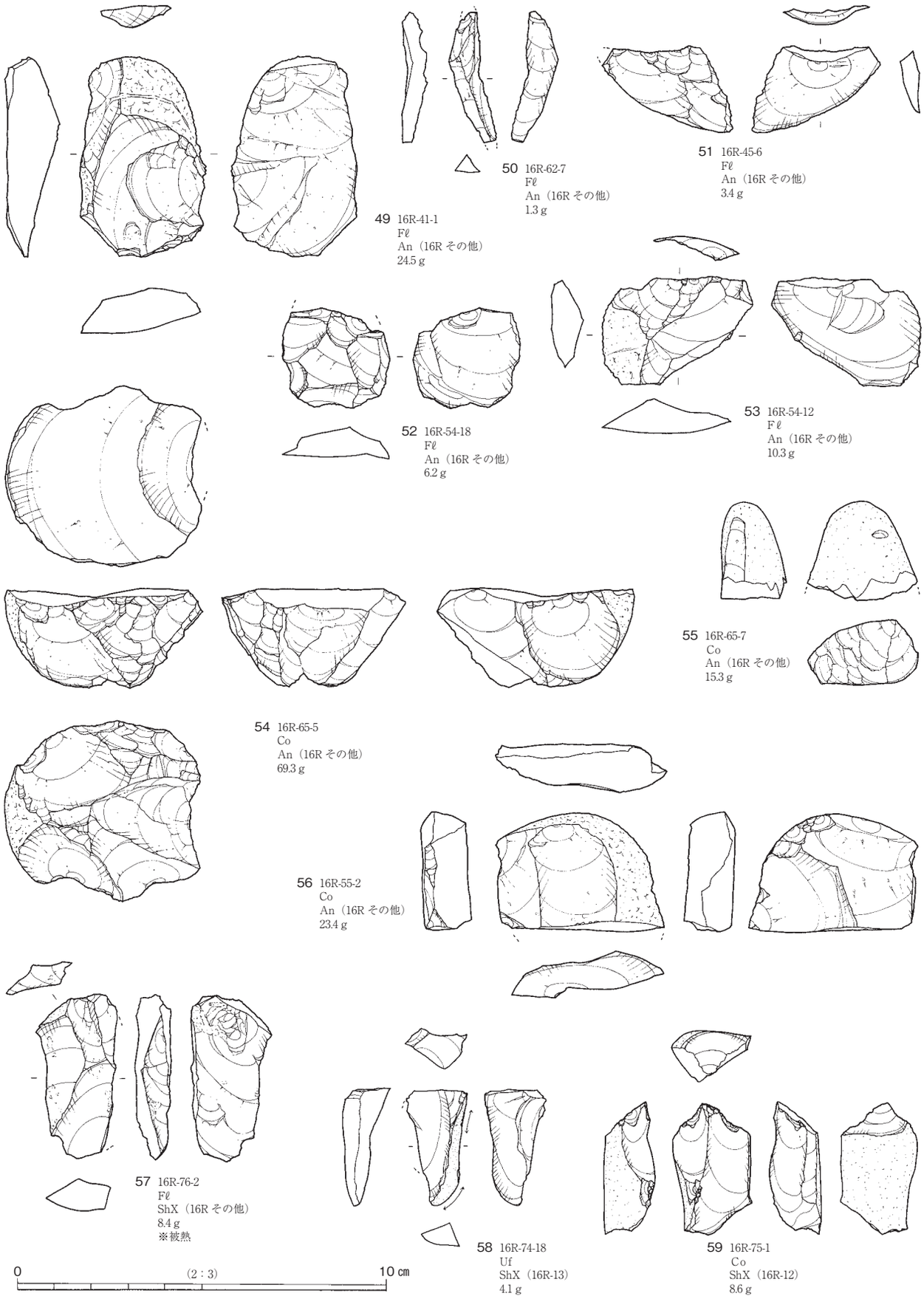
第98図　16Rグリッド出土遺物実測図（４）



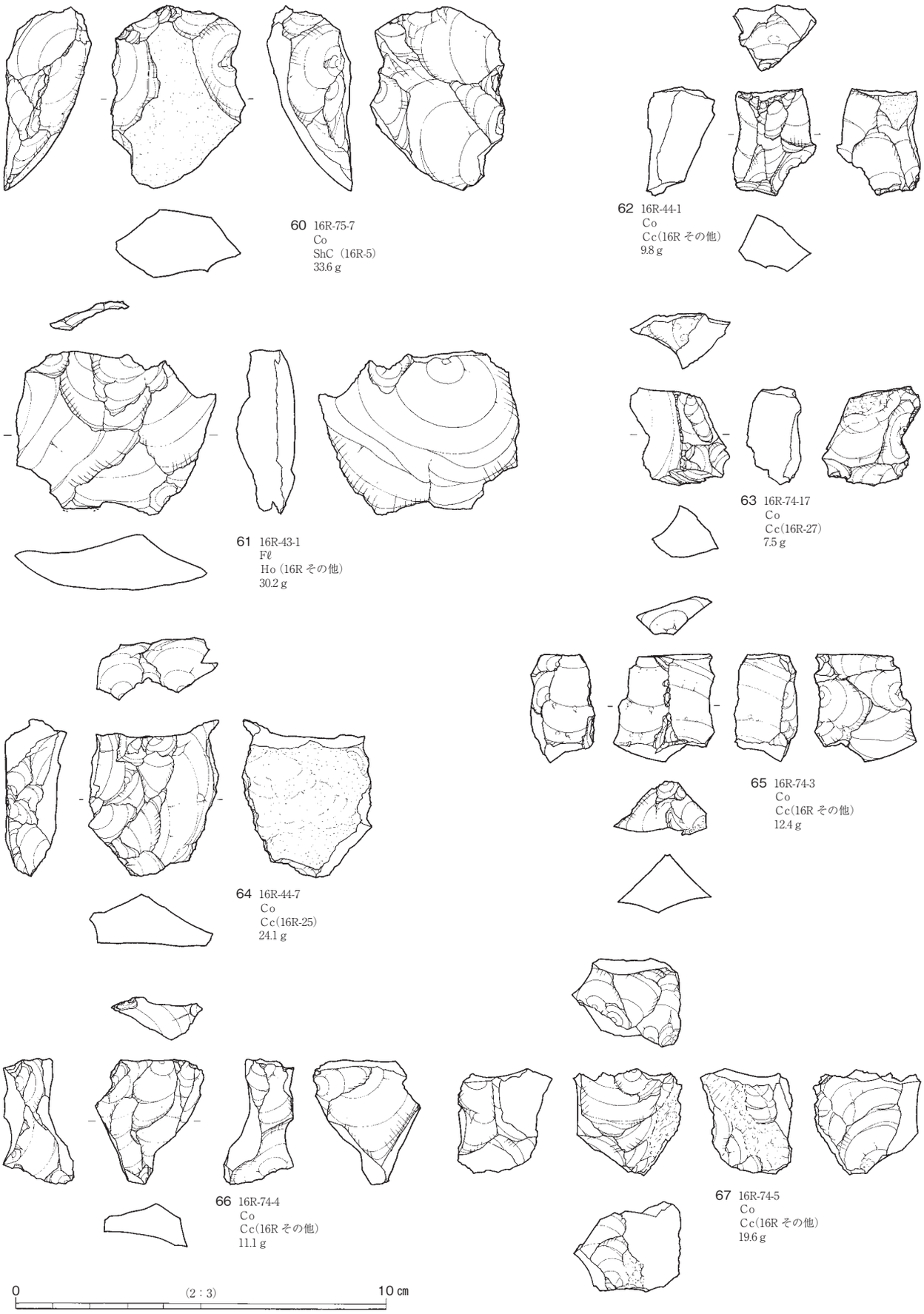
第99図　16Rグリッド出土遺物実測図（5）



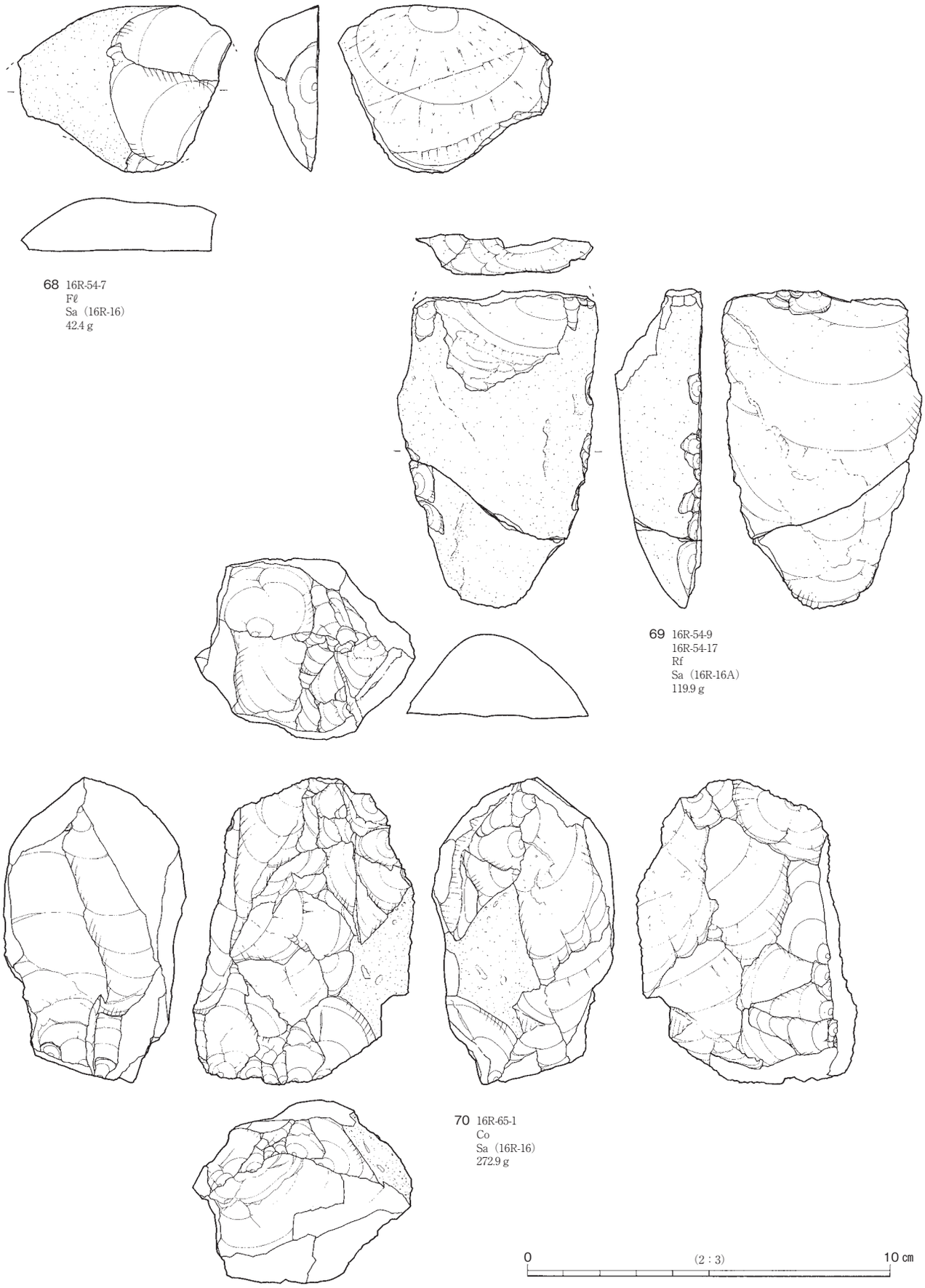
第100図　16Rグリッド出土遺物実測図（6）



第101図　16Rグリッド出土遺物実測図（７）



第102図　16Rグリッド出土遺物実測図（8）



第103図　16Rグリッド出土遺物実測図（９）

第44表　16Rグリッド母岩別石器組成表

母岩番号	石材	Kn	Po	Kp	Es	Ss	Gr	Dr	Pq	Rf	Uf	Bl	Ax	Hs	As	Uk	Fl	Ch	Co	合計	重量（g）
16R-1	Rh				1															1	13.0
16R-2	ShA				1															1	5.8
16R-3	ShB																1			1	0.5
16R-4	ShC				3												1			4	42.1
16R-5	ShC																		1	1	33.6
16R-6	ShC									1										1	8.5
16R-7	ShD				1															1	10.0
16R-8	ShD																1			1	7.6
16R-9	ShE		1																	1	20.6
16R-10	ShE																1			1	1.0
16R-11	ShX		1																	1	5.0
16R-12	ShX																		1	1	8.6
16R-13	ShX										1									1	4.1
16R-14	Tu		1																	1	31.1
16R-15	Ho		1																	1	52.1
16R-16	Sa									2							2		1	5	438.8
16R-17	Ho		1																	1	61.3
16R-18	Ho				1															1	10.7
16R-19	ShX		1																	1	13.0
16R-20	Ho																1			1	14.9
16R-21	Ch																1			1	0.6
16R-22	Ch																1			1	0.3
16R-23	Rh				2															2	12.4
16R-24	Rh		1																	1	3.6
16R-25	Cc				1														1	2	28.5
16R-26	Cc																1			1	1.8
16R-27	Cc																		1	1	7.5
16R-28	ObE				1															1	1.4
16R-その他	ObB																2			2	2.3
16R-その他	ObD								1											1	2.3
16R-その他	ObF									1	4									5	41.4
16R-その他	ObG																1			1	0.8
16R-その他	An		3		3	2				2							22		3	35	413.7
16R-その他	ShA																1			1	1.2
16R-その他	ShC				2												2			4	19.4
16R-その他	ShX																3			3	8.9
16R-その他	Sa																1			1	1.9
16R-その他	Ho																9			9	55.4
16R-その他	Cc				1					1							3		4	9	76.1
合　　計		0	10	0	17	2	0	0	1	7	5	0	0	0	0	0	54	0	12	108	1,461.8

は、安山岩Ⅰ類による小型不定型の剥片を素材とする削器である。表面左側縁に調整加工が見られる。下端は欠損する。

46は、黒曜石Ｄ類（箱根畑宿産）による小型の楔形石器である。素材は、小型不定型の剥片で、裏面が主要剥離面と考えられる。表面左側縁と下端部が潰れている。

44・45・47・48は、加工痕ある剥片である。44は頁岩Ｃ類（嶺岡産頁岩）による小型不定型の剥片を素材として、裏面（主要剥離面）の末端と、打面直下の打瘤部分に調整加工がなされている。末端部の調整

第45表　16Rグリッド石材別石器組成表

石　　材	石材	Kn	Po	Kp	Es	Ss	Gr	Dr	Pq	Rf	Uf	Bl	Ax	Hs	As	Uk	Fl	Ch	Co	合計	重量（g）
黒曜石 B	ObB																2			2	2.3
黒曜石 D	ObD								1											1	2.3
黒曜石 E	ObE				1															1	1.4
黒曜石 F	ObF									1	4									5	41.4
黒曜石 G	ObG																1			1	0.8
安山岩	An		3		3	2				2							22		3	35	413.7
流紋岩	Rh		1		3															4	29.0
頁岩 A	ShA				1												1			2	7.0
頁岩 B	ShB																1			1	0.5
頁岩 C	ShC				5					1							3		1	10	103.6
頁岩 D	ShD				1												1			2	17.6
頁岩 E	ShE		1														1			2	21.6
頁岩 X	ShX		2								1						3		1	7	39.6
凝灰岩	Tu		1																	1	31.1
チャート	Ch																2			2	0.9
砂岩	Sa									2							3		1	6	440.7
ホルンフェルス	Ho		2		1												10			13	194.4
玉髄	Cc				2					1							4		6	13	113.9
合　　計		0	10	0	17	2	0	0	1	7	5	0	0	0	0	0	54	0	12	108	1,461.8

第46表　16Rグリッド母岩別礫組成表

母岩番号	石材	個数	重量（g）
R16R- その他	Ch	1	2.0
R16R- その他	Sa	1	15.3
R16R- その他	Ho	1	11.2
合　　計		3	28.5

第47表　16Rグリッド石材別礫組成表

石　　材	石材	個数	重量（g）
チャート	Ch	1	2.0
砂岩	Sa	1	15.3
ホルンフェルス	Ho	1	11.2
合　　計		3	28.5

加工は、小型ではあるが、掻器の刃部に似る。45は、安山岩による中型不定型の剥片を素材とする。右端の実測図の左半部にある広い剥離面が主要剥離面であるが、上端及び左側の剥離面が主要剥離面を切っていることから、加工痕と判断した。石核の可能性もある。47は、玉髄による小型不定型の剥片を素材として、裏面（主要剥離面）の左側下部に調整加工がなされている。48は、安山岩による小型不定型の剥片を素材として、表面左側縁に不揃いな調整加工が見られる。

49 ～ 53は、安山岩Ⅰ類による中・小型不定型の剥片、54・56は剥片素材の石核である。52は調整剥片と考えられるが、41と色調、質感がよく似ており、同一母岩の可能性がある。また、55は細身の円礫の末端部である。54は、厚手の剥片を素材とする石核で、素材剥片の主要剥離面を打面として、周囲を巡りながら中・小型不定型の剥片が剥離されている。56は、中型の剥片を素材として、裏面で剥片が剥離されている。

57 ～ 59は、頁岩Ｘ類による剥片、石核類である。57は中型不整形の縦長剥片、58は小型不定型の剥片を利用した使用痕ある剥片である。素材剥片は、剥離時に打点で二つに折れている。59は、中型の剥片を素材とする石核で、上端に打面が設定され、素材の主要剥離面側を作業面として、小型の縦長剥片が剥離されている。

60は、頁岩Ｃ類による石核である。中型不定型の剥片を素材として、表裏両面を作業面にあて、両側縁から小型不定型の剥片が剥離されている。裏面下半部の最も広い剥離面が、素材時の主要剥離面である。

61は、ホルンフェルスによる中型不定型の剥片である。表面は、おおむね同一方向からの剥離面によって構成されている。

62～67は、玉髄による剥片ないしは礫片を素材とする石核である。色調や質感が相互に類似しており、中には同一母岩もあるかもしれないが、接合しなかったため、母岩の設定をしなかった。おそらく、同一母岩と石材産地が、おおむね同一のものとがあるのだろう。本遺跡外で分割された石核素材や石核が持ち込まれたと考えられる。また、各石核とも小型で、主要剥離面や分割面が確認できる資料が多いことから、小型不定型の剥片がわずかに剥離された状況である。石器から転用された可能性の高い資料もある（例えば64）。

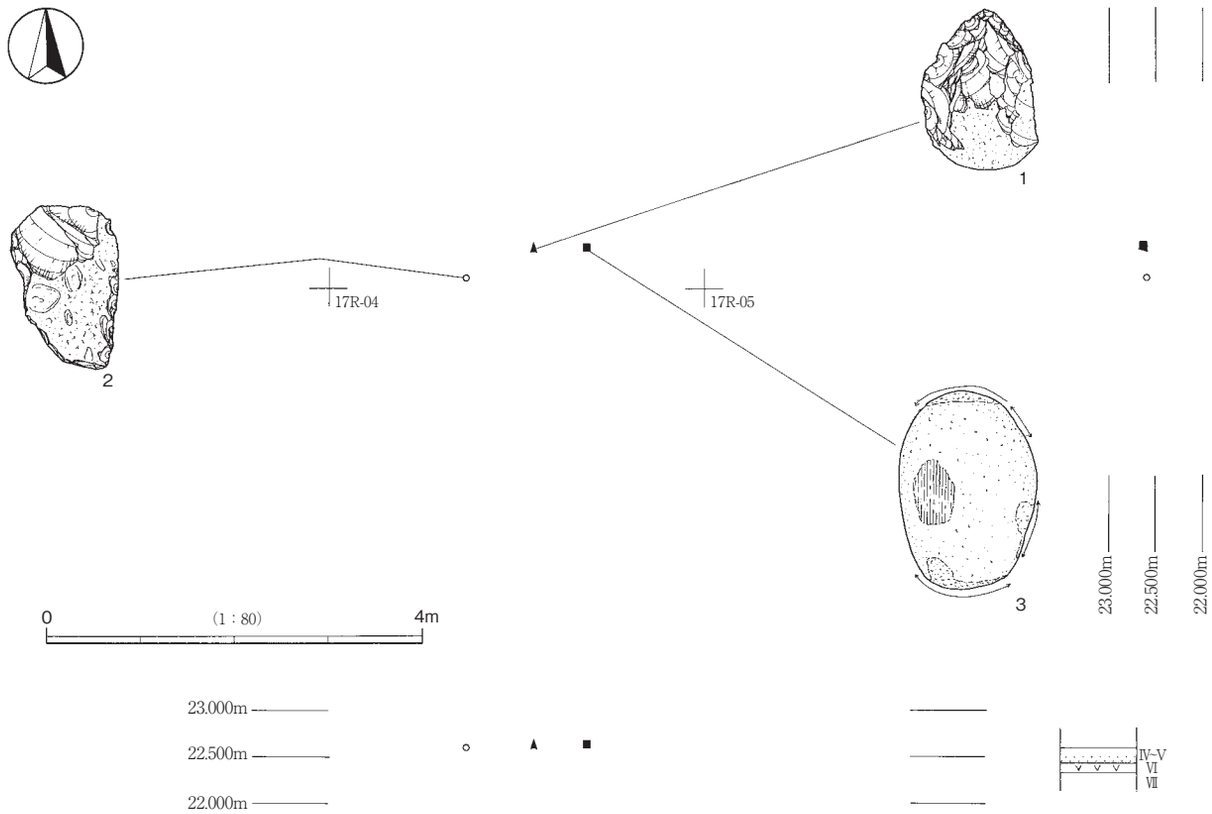
62の表面は上端からの剥離面、裏面は下端からの剥離面に覆われている。素材時の剥離面（主要剥離面、分割面）は不明である。ただ、上設打面は比較的古い剥離面である。63は、中型の剥片を素材とする石核で、表面右上部の剥離面が素材時の主要剥離面である。表面下半部、裏面下部及び右側で小型の剥片が剥離されている。64は、素材時の主要剥離面を作業面として、小型不定型の剥片が剥離されている。なお、31の掻器刃部破片は、本資料と唯一の同一母岩であり、もともと一個体の掻器であったものが、刃部欠損後に石核に転用された可能性がある。65は、断面三角形の厚手の剥片を素材とし、裏面（主要剥離面）を作業面として、左右両側から小型の剥片が剥離されている。上下が折れているため、詳細は不明であるが、石器の未成品の可能性もある。裏面下部に素材時の主要剥離面が残る。66は、中型不定型の剥片を素材とする。素材剥片の打面直下に小さな剥離面が見られるが、これ以外は、素材剥片が剥離される以前に形成された剥離面の可能性が高い。67は、分割礫が素材と考えられるが、剥片剥離作業が進行しており、分割面は残されていない。表面及び上面を中心として、不規則に小型の剥片が剥離されている。

68～70は、砂岩による剥片類･石核で、いずれも同一母岩と判断した。68は、中型不定型の剥片である。主要剥離面は、節理に沿って割れた平滑な面である。69は、大型不定型の剥片を素材とする加工痕ある剥片である。左右両側縁に、大きさの不揃いな剥離面が連続する。上端は欠損する。70は、中・小型不定型の剥片が剥離された石核である。表面右下に自然面がわずかに残るが、それ以外に分割面等の剥離面が見られないことから、礫素材か分割礫、あるいは大型厚手の剥片素材かは不明である。打面と作業面を頻繁に転移させながら剥片剥離作業が行われ、作業がかなり進行した石核である。表面の上下両端及び裏面右側の小さな剥離面が作業終盤の剥離面であるが、いずれも剥離が深く入っていないため、相互の切り合い関係は不明である。

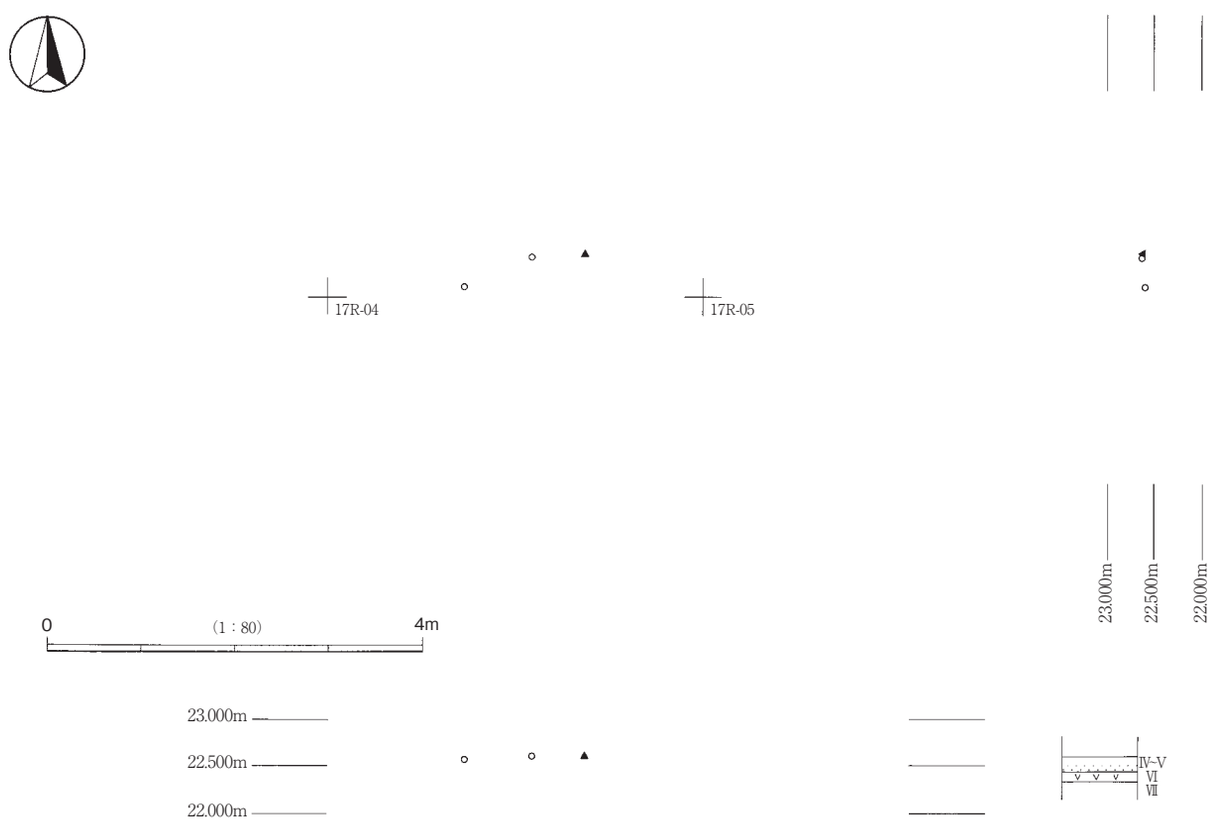
２．16Ｒ-Ａブロック（第104図～第106図、第48表・第49表、図版44）

１）概　要（第104図・第105図、第49表）

16Ｒ-Ａブロックは、遺跡南端の16Ｒ-94グリッドに位置し、標高24m～26mの台地平坦面に立地する。ブロックの規模は、長さ1.5mの直線上に３点の石器が並んで出土した。出土層準は、立川ロ-ム層Ⅲ層とその上位の黒褐色土（Ⅱ層）の境界付近である。石器群の内容は、槍先形石器１点、削器１点、敲石１点で、石器石材は、安山岩２点、流紋岩１点である。16Ｒグリッドから出土した石器群に隣接して分布しており、出土層準、内容も共通することから、同時期の石器群と考えられる。



第104図　16R-Aブロック出土遺物分布図（1）－石器別分布図－



第105図　16R-Aブロック出土遺物分布図（2）－石材別分布図－

２）母岩別資料（第48表）

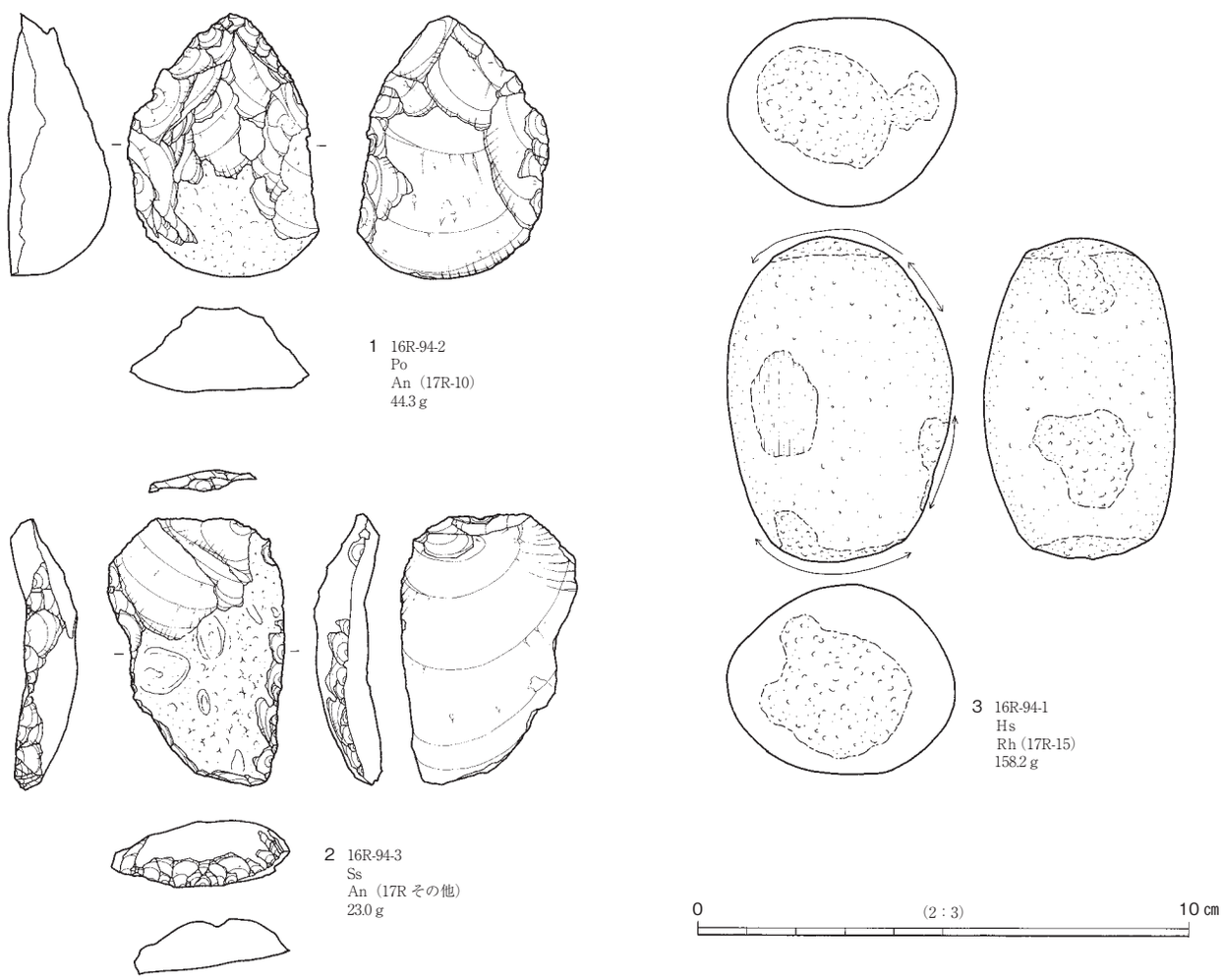
３点の石器については、２点を母岩分類した。内訳は、安山岩１母岩（17R-10: １点）、流紋岩１母岩（17R-15：１点）である（母岩の識別率67％）。なお、安山岩１点（安山岩Ⅰ類）は、周辺ブロック等から出土した資料と分離できないため、母岩分類しなかった。

17R-10：自然面は灰褐色を呈し、浅い爪痕状の傷が無数に見られる円礫面、内部も灰褐色で直径１㎜～３㎜の夾雑物を多く含む安山岩である。やや青みがかった灰褐色に風化しているが、自然面の様子から、原石は、拳大程度までの小振りの円礫と想定される。槍先形石器１点（44.3ｇ）の単独資料である。

17R-15：自然面、内部ともに淡黄褐色を呈し、直径２㎜ほどの夾雑物が散在する流紋岩である。6.5㎝×4.5㎝×４㎝ほどの小振りの円礫を利用した敲石１点（158.2ｇ）の単独資料である。

３）出土遺物（第106図）

１は、安山岩Ⅰ類による槍先形石器である。片側に自然面が広く残る厚手の剥片を素材として、上半部（素材の打面側）を中心に、表裏両面とも調整加工がなされている。裏面の調整加工は平坦で、石器の横断面はカマボコ状を呈する。下端は調整加工がなく、自然面が広く残されている。未成品なのか、先端部を機能部位とする削器の一種なのか不明である。２は、安山岩Ⅰ類による削器である。中型不定型の剥片を素材として、末端部から両側縁下半部にかけて、裏面から調整加工がなされている。３は流紋岩による



第106図　16R-Aブロック出土遺物実測図

第48表　16R-Aブロック母岩別石器組成表

母岩番号	石材	Kn	Po	Kp	Es	Ss	Gr	Dr	Pq	Rf	Uf	Bl	Ax	Hs	As	Uk	Fl	Ch	Co	合計	重量（g）
17R-10	An		1																	1	44.3
17R-15	Rh													1						1	158.2
17R-その他	An					1														1	23.0
合　　計		0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	3	225.5

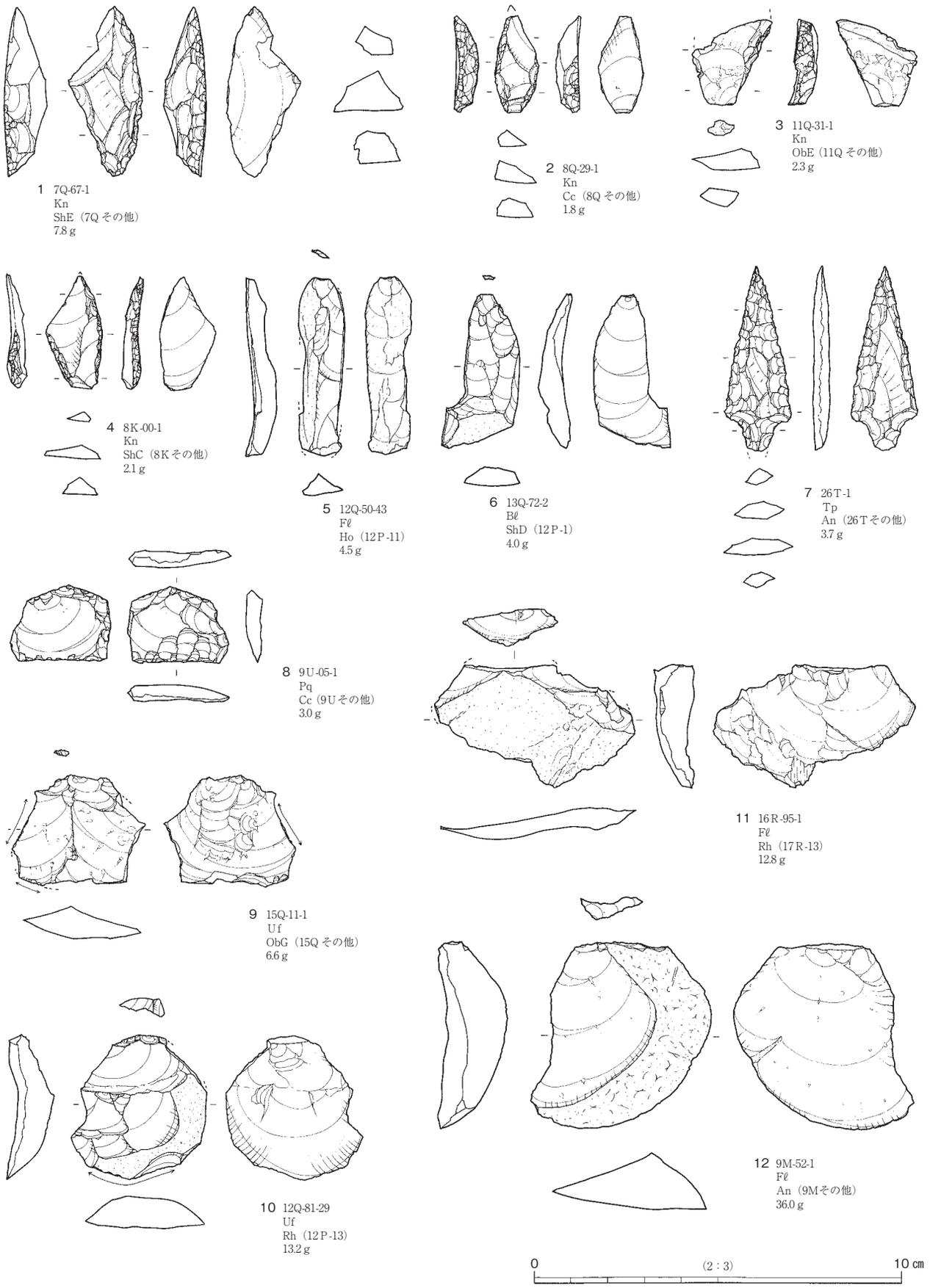
第49表　16R-Aブロック石材別石器組成表

石　　材	石材	Kn	Po	Kp	Es	Ss	Gr	Dr	Pq	Rf	Uf	Bl	Ax	Hs	As	Uk	Fl	Ch	Co	合計	重量（g）
安山岩	An		1			1														2	67.3
流紋岩	Rh													1						1	158.2
合　　計		0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	3	225.5

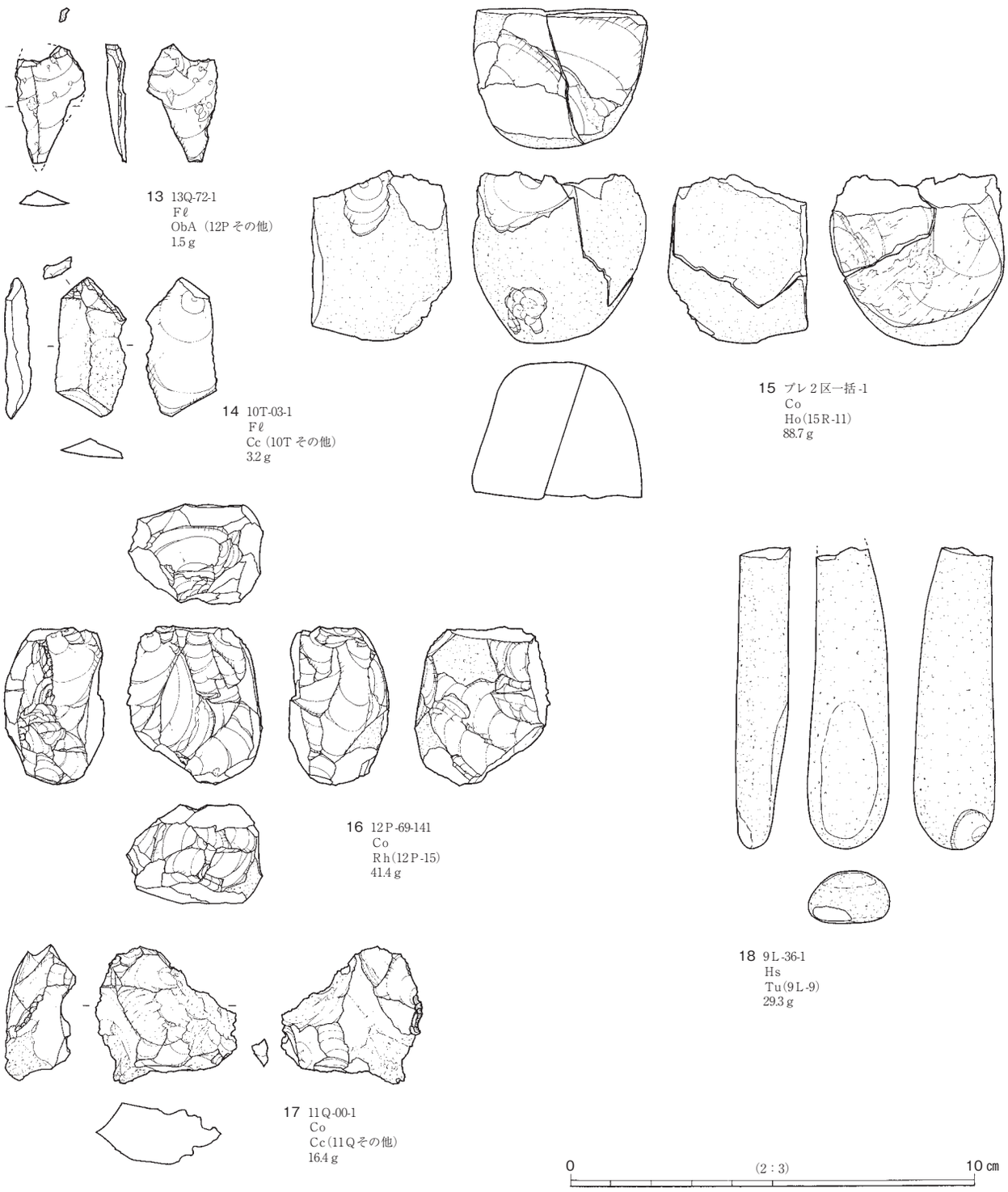
敲石である。上下両端が敲打によって潰れているほかに、側面にも敲打の痕跡がある。色調がうすく赤みがかっており、被熱した可能性がある。

単独出土遺物（第107図・第108図、図版46）

１は、７Q-67グリッドから出土した切出形のナイフ形石器である。石材は、淡黒灰色に風化した頁岩Ｅ類（黒色頁岩）である。横長剥片を素材として、素材時の打面側である右側縁全体と左側縁の基部側に、裏面から調整加工が施されている。本遺跡第３文化層に帰属すると考えられる。２は、８Q-29グリッドから出土した２側縁調整のナイフ形石器である。石材は、乳白色半透明の玉髄である。小型の縦長剥片を素材として、素材打面を基部にあて、左側縁全体と右側縁の基部側に調整加工がなされている。先端部左側は、対向剥離によって調整加工がなされており、急角度の背が作られている。３は、11Q-31グリッドから出土したナイフ形石器である。石材は、灰色の地に黒色の縞が平行して入り、直径１㎜ほどの夾雑物を多く含む黒曜石Ｅ類である。中型で不定型の剥片を素材として、素材の打面を基部側にあてて、右側縁に対向剥離によって調整加工がなされている。上半部が大きく欠損するため、形態は不明である。４は、上層遺構確認調査時に、８K-00グリッドから出土した２側縁調整のナイフ形石器である。石材は、淡灰緑色の地に紫がかった灰色の斑模様が入る頁岩Ｃ類（嶺岡産の頁岩）である。縦長剥片を素材として、打面を先端側にあてて、斜め整形によって作られている。基部端は調整加工が及んでいないが、欠損品ではない。５は、12Q-50グリッドの上層遺構覆土中から出土した中型で細身の縦長剥片である。石材は、黄灰色の部分と淡黒灰色の部分とがある、粘板岩質のホルンフェルスである。淡黒灰色の部分は、黄灰色の部分が剥落した可能性が高い。６は、13Q-72グリッドの立川ローム層Ⅶ層から出土した石刃である。自然面は淡灰褐色を呈する滑らかな円礫面、内部は灰白色の地に黒色の細い縞が多方向に入る、珪化度の高い頁岩Ｄ類である。表面は、末端部に自然面を残す他は、裏面と同一方向の剥離面で構成されている。７は、26トレンチの黒褐色土層（Ⅱ層）から出土した有茎尖頭器である。石材は、灰褐色に風化した安山岩である。裏面に素材時の剥離面（おそらく主要剥離面）を広く残す。隆線文土器に伴う時期の資料と考えられるが、本遺跡で該当する資料は、この１点だけである。８は、９U-05グリッドから出土した楔形石器である。石材は、白色不透明な玉髄である。不定型で薄手の剥片を素材として、両極打撃によって作られている。縄文時代の石鏃の素材かもしれない。９は、15Q-11グリッドの立川ローム層Ⅴ層から出土し



第107図　単独出土遺物実測図（1）



第108図　単独出土遺物実測図（２）

た使用痕ある剥片である。石材は、淡黒色の地に黒色の縞がわずかに入り、直径１㎜～２㎜の夾雑物を多く含む黒曜石Ｇ類である。中型で不定型の剥片の鋭利な左側縁に刃こぼれが見られる。10は、12Q-81グリッドの上層遺構覆土中から出土した使用痕ある剥片である。石材は、淡灰褐色を呈する流紋岩である。中型で不定型の剥片を利用している。11は、16R-95グリッドの立川ローム層Ⅳ-Ⅴ層から出土した剥片である。その自然面には黒灰褐色の部分と黄白色の部分とがある滑らかな円礫面、内部は黒灰色の地に直径１㎜ほどの夾雑物が散在する硬質緻密な流紋岩である。12は、９M-52グリッドから出土した中型で不定

型の剥片である。自然面は灰褐色で爪痕状の傷が多数ある円礫面、内部も灰褐色に風化した、夾雑物の少ない安山岩である。13は、13Q-72グリッドの攪乱部分から出土した不定型の剥片である。石材は、漆黒色不透明の地に直径１㎜～３㎜の夾雑物を含む黒曜石Ａ類でる。14は、10T-03グリッドの立川ローム層Ⅳ-Ⅴ層から出土した剥片である。石材は、乳白色半透明の地に白色の斑が入る玉髄である。15は、上層遺構確認調査中に15Ｒグリッドから出土した石核である。自然面は淡黒灰色の地に黄灰色と黒灰色の縞が入る、緩やかな曲面の円礫面、内部は黒灰色の粘板岩質のホルンフェルスである。原石は、おそらく拳の半分程度の大きさの円礫で、これを粗く分割して石核の素材としたと考えられる。本資料は、まとまった量の剥片が剥離された形跡がないことから、剥片剥離作業の初期の段階で石核が割れ、作業を終了した資料と考えられる。16は、12Ｐ-69グリッドの上層遺構覆土中から出土した石核である。石材は、淡灰褐色を呈する流紋岩である。打面は、上面にある１枚の剥離面によって作られ、作業面は、表面及び左右両側面の範囲で、主に上位方向から剥離面で構成されるが、作業面の剥離面で打点周辺が切られているものもあり、打面の更新がなされていると考えられる。裏面は、作業面とは直交方向の剥離面が連続する。第４文化層に関連する資料と考えられる。17は､11Q-00グリッドの立川ローム層Ⅴ層から出土した石核である。石材は、乳白色から橙白色半透明で、白色の不純物が顕著な玉髄である。中型で厚手の剥片を素材としており、裏面の左端に素材時の打面、裏面全体に素材時の主要剥離面が残されている。裏面の上部及び右側で、小型の剥片が数枚剥離されている。18は、９Ｌ-36グリッドの立川ローム層Ⅲ-Ⅴ層から出土した敲石とした資料である。石材は淡灰緑色の凝灰岩で、細身の円礫をそのまま利用している。

以上の他に、実測図を掲載しなかった資料として、12Q-82グリッドから頁岩Ｘ類による中型不定型の剥片１点（欠損品）、13Ｐ-02グリッドから頁岩Ｄ類及びチャートによる小型不定型の剥片各１点が出土している。

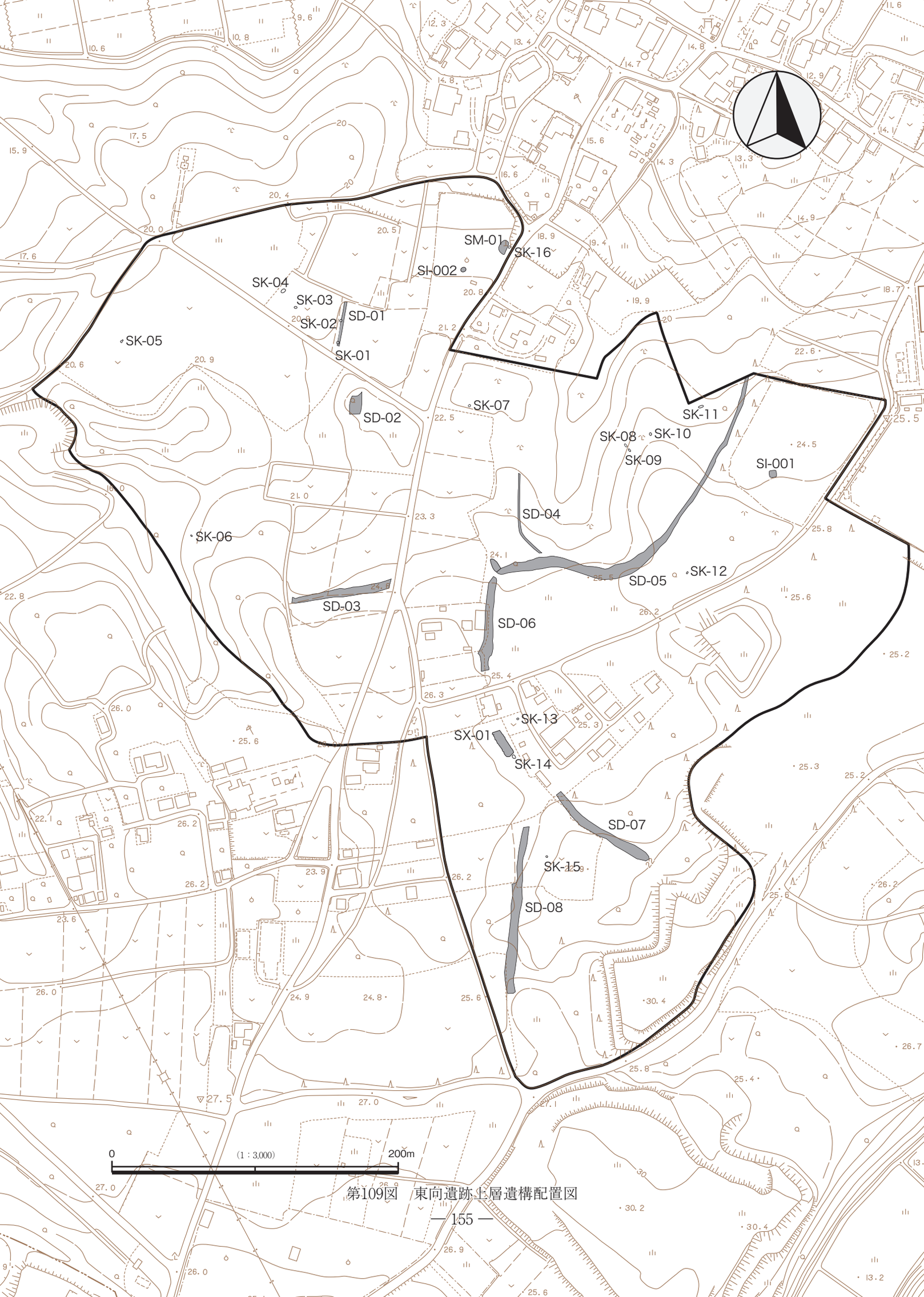
第３節　縄文時代以降

縄文時代以降の遺構としては、縄文時代の陥穴６基及び土坑９基、平安時代の住居跡２軒、近世の塚１基、土坑１基、溝と野馬土手・堀８条、シシ穴１基が検出された（第50表）。これらの遺構の内外から縄文時代の土器・石器、平安時代の土師器、近世の砥石、古銭、泥メンコ、陶磁器及び馬骨などの遺物が出土した。

遺構の分布状況を見ると（第109図）、縄文時代の陥穴・土坑（SK-01 ～ SK-15）はまとまって集中することなく、遺跡全体に散在していた。平安時代の２軒の住居跡（SI-001、SI-002）も隣接することなく、離れた地点でそれぞれ単独で検出された。近世の塚（SM-01）は遺跡範囲の北端付近に位置していた。溝と野馬土手・堀（SD-01 ～ SD-08）は、遺跡範囲の中央南側のやや標高の高い地点を囲みながら等高線のラインに沿うようにして伸びていた。シシ穴（SX-01）は、野馬土手・堀の途切れた地点で検出された。

１　縄文時代

縄文時代の遺構は、陥穴６基、土坑９基が検出された。これらの陥穴・土坑は、広い遺跡範囲内に単独に点在するものが多く、まとまりのある分布を見せていない。遺構にともなう遺物はほとんど出土せず、遺構の年代を推定するのは困難だったが、一応縄文時代の遺構と判断した。



第109図　東向遺跡上層遺構配置図

第50表　東向遺跡縄文時代以降の遺構一覧

時代	挿図番号	遺構番号	種別	位置	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	調査次	旧遺構番号
縄文時代	第110図	SK-01	陥穴	5N93	1.80	1.80	2.06	第3次	SK-002
縄文時代	第110図	SK-02	陥穴	5N53	1.75	1.60	2.60	第3次	SK-003
縄文時代	第111図	SK-03	土坑	5M35	2.64	1.49	0.55	第3次	SK-006
縄文時代	第111図	SK-04	土坑	5M03	1.82	1.68	0.44	第3次	SK-008
縄文時代	第114図	SK-05	土坑	5J95	1.54	1.22	0.72	第10次	SK-010
縄文時代	第112図	SK-06	陥穴	9K37	2.40	1.20	0.90	第11次	SK-011
縄文時代	第113図	SK-07	陥穴	7P06	2.05	1.50	2.57	第17次	SK-001
縄文時代	第112図	SK-08	土坑	7S73	1.94	0.62	0.24	第19次	SK-001
縄文時代	第112図	SK-09	土坑	7S84	1.50	0.34	0.34	第19次	SK-002
縄文時代	第113図	SK-10	陥穴	7S57	1.92	1.30	2.55	第19次	SK-003
縄文時代	第112図	SK-11	土坑	7T06	3.18	1.50	0.20	第19次	SK-004
縄文時代	第114図	SK-12	土坑	10T04	1.50	0.74	0.30	第5次	SK-001
縄文時代	第114図	SK-13	土坑	12Q54	1.38	1.20	0.50	第21次	SK-01
縄文時代	第111図	SK-14	陥穴	13Q13, 14	2.47	1.80	2.32	第9次	陥穴
縄文時代	第114図	SK-15	土坑	14Q99	1.00	1.00	0.44	第3次	SK-001
平安時代	第119図	SI-001	住居跡	8U29	3.52		0.05	第17次	SI-001
平安時代	第120図	SI-002	住居跡	4P65, 75	3.55	3.08	0.10	第18次	SI-001
近世	第121･第122図	SM-01	塚	4Q21, 31, 41	(8.00)			第20次	SM-001
近世	第122図	SK-16	塚土坑	4Q33	1.60	1.00	0.70	第20次	SK-001
近世	第123図	SD-01	溝	5N	(30.55)		0.35	第3次	SD-007
近世	第123図	SD-02	野馬土手・堀	6N～7N	(12.00)		0.30	第14次	境土手
近世	第123図	SD-02	野馬土手・堀	6N～7N				第14次	境溝
近世	第124図	SD-03	野馬土手・堀	10M～10O	(25.50)		0.80	第1次	溝002
近世	第124図	SD-04	溝	8Q～9Q	(62.50)		0.25	第7次	SD-101
近世	第125図	SD-05	野馬土手・堀	8T～9T	(220.00)		0.80	第17次	SX-101
近世	第125図	SD-05	野馬土手・堀	6U～7U				第19次	SD-002
近世	第126図	SD-06	野馬土手・堀	9Q～9S	(55.00)			第5次	野馬土手
近世	第126図	SD-06	野馬土手・堀	9Q～10S				第5次	野馬堀
近世	第126図	SD-06	野馬土手・堀	9Q				第7次	SX-101
近世	第126図	SD-06	野馬土手・堀	9T				第7次	土手
近世	第127図	SD-07	野馬土手・堀	13R～14R	(76.00)		0.80	第8次	野馬土手
近世	第127図	SD-07	野馬土手・堀	14S				第15次	野馬土手
近世	第127図	SD-07	野馬土手・堀	14S				第15次	野馬堀
近世	第127･第128図	SD-08	野馬土手・堀	15Q～17Q	(102.00)		0.50	第8次	SA-01
近世	第127･第128図	SD-08	野馬土手・堀	14Q～17Q				第8次	SD-01
近世・近代	第129･第130図	SX-01	シシ穴	12P～13Q	30.00	6.50	3.00	第9次	SX-001

遺構

SK-01陥穴（第110図、図版7）

調査区の５N-93グリッドに位置する。SD-01溝と重複するが、新旧関係は不明である。上端の平面形は円形で、径1.8mを測る。底面は0.95×0.72mの楕円を呈し、長軸の方向はほぼ真北である。確認面からの深さは最大で2.06mを測る。壁の立ち上がりは急で、底部から１m程のところからやや開き気味になる。覆土は全体にしまりがなく、密度が低い。遺物は検出されなかった。

SK-02陥穴（第110図）

調査区の５N-53グリッドに位置する。SD-01溝と重複するが、新旧関係は不明である。上端は1.75m×1.6m、底面は0.58m×0.48mを測り、それぞれ円形を呈す。確認面からの深さは最深で2.6mを測る。壁は

直線的に立ち上がる。遺物は検出されなかった。

SK-03土坑（第111図）

調査区の５M-35グリッド付近に位置する。平面形は2.64m×1.49mの楕円形を呈し、確認面からの深さは55cmを測る。長軸の方向はN-37°-Eを指す。床面はほぼ平坦である。

SK-04土坑（第111図）

調査区の５M-03グリッドに位置する。平面形は上端1.82m×1.68m、底面は1.64m×1.22mの隅丸方形を呈し、確認面からの深さは44cmを測る。長軸の方向はN-78°-Wを指す。覆土上部から、比較的大きい土器片が出土した。

SK-05土坑（第114図、図版７）

調査区の５J-95グリッドに位置する。二つの不整円形の土坑が重複しており、南西側が1.54m×1.22m、北東側が径１m前後を測　調査区の９K-37グリッドに位置する。平面形は、上面は2.4m×1.2mの楕円形、底面は1.17m×0.44mの隅丸方形を呈す。長軸の方向はN-35°-W。底面から0.5m～0.6mは直線的に立ち上がり、上部は大きく広がる。確認面からの深さは90cmを測り、底面は平坦である。底面に長軸方向に沿って３基のピットを有する。深さは、北側から48cm、17cm、40cmである。このピットは、陥穴の底面に逆茂木を立てた痕跡だろう。

SK-07陥穴（第113図、図版８）

調査区の７P-06グリッドに位置する。上端の平面形は2.05m×1.50mの楕円形、底面は0.77×0.40mの、隅丸円形を呈す。長軸方向はN-18°-Eで、確認面からの深さは最大で2.57mを測る。壁は南端底部近くでややオーバーハングするものの直線的に立ち上がる。遺物は検出されなかった。

SK-08土坑（第112図、図版８）

調査区の７S-73グリッド付近に位置する。平面形は1.94m×0.62mの不整な長楕円形を呈す。長軸方向はN-45°-Wで、確認面からの深さは最大で24cmを測る。遺物は検出されなかった。

SK-09土坑（第112図、図版８）

調査区の７S-84グリッドに位置する。平面形は南東端を欠くが、現況で1.50m×0.34mの不整な長楕円形を呈す。長軸方向はN-45°-Wで、SK-08土坑と同一線上に並ぶ。確認面からの深さは最大で34cmを測る。遺物は検出されなかった。

SK-10陥穴（第113図、図版９）

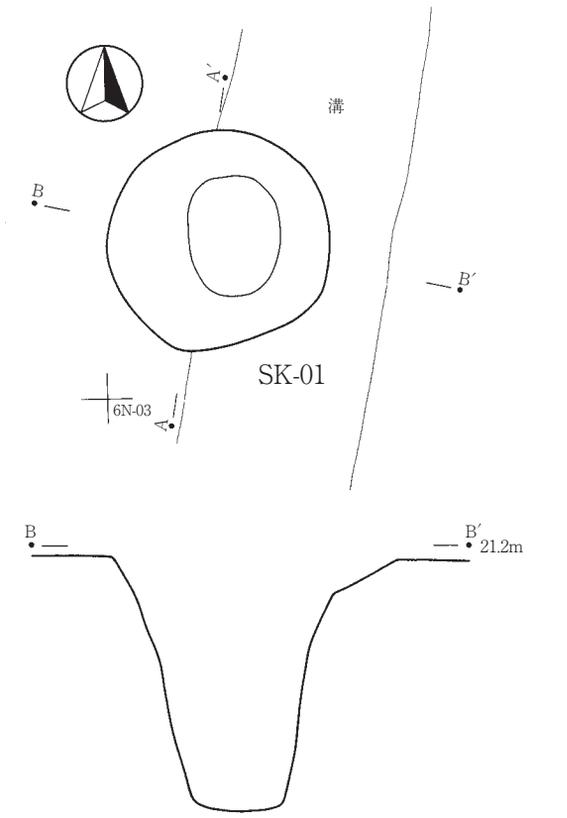
調査区の７S-57グリッドに位置する。上端の平面形は1.92m×1.30mの楕円形、底面は0.77×0.39mの矩形に近い楕円形を呈す。長軸方向はN-14°-Wで、確認面からの深さは最大で2.55mを測る。壁は直線的に立ち上がる。遺物は検出されなかった。

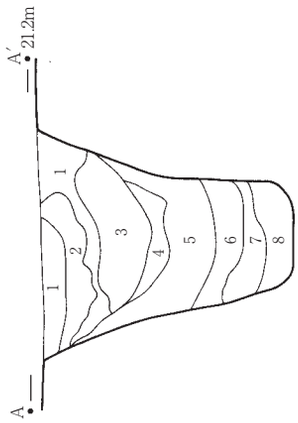
SK-11土坑（第112図、図版９）

調査区の７T-06グリッド付近に位置する。平面形は3.18m×1.50mの長楕円形を呈し、長軸方向はN-71°-Eを指す、断面は船底形で、確認面からの深さは20cmを測る。遺物は検出されなかった。

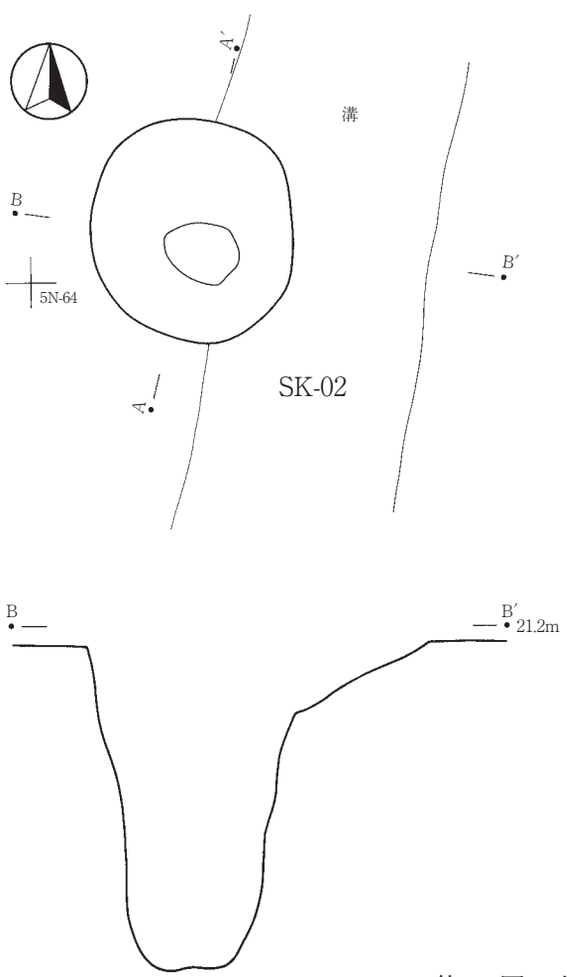
SK-12土坑（第114図、図版９）

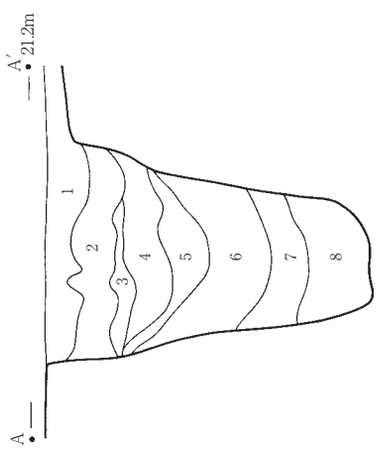
調査区の10T-04グリッドに位置する。1.50m×0.74mの長方形を呈し、確認面からの深さは最大で30cmを測る。長軸の方向はN-23°-Eを指す。床面は平坦で、ほぼ中央に径15cm、深さ20cmのピットを有する。遺物は検出されなかった。



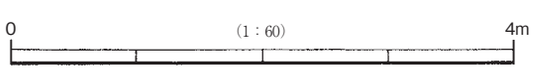


SK-01
1. 茶褐色土層
2. 黄褐色土層
3. 黄色土層　ロームブロック
4. 暗茶褐色土層
5. 黒褐色土層
6. 明黒褐色土層
7. 黄色土層　ロームブロック
8. 黒褐色土層

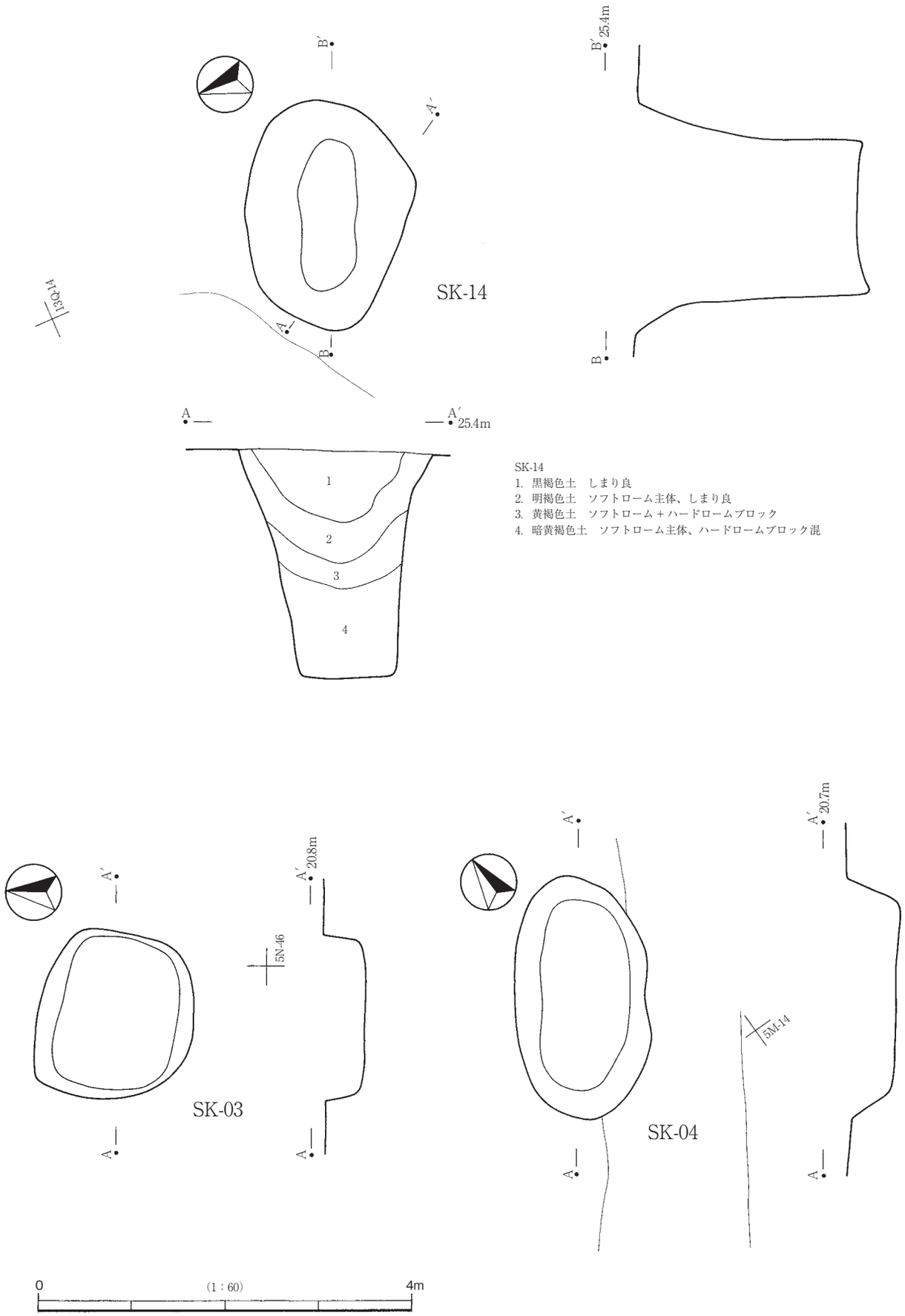




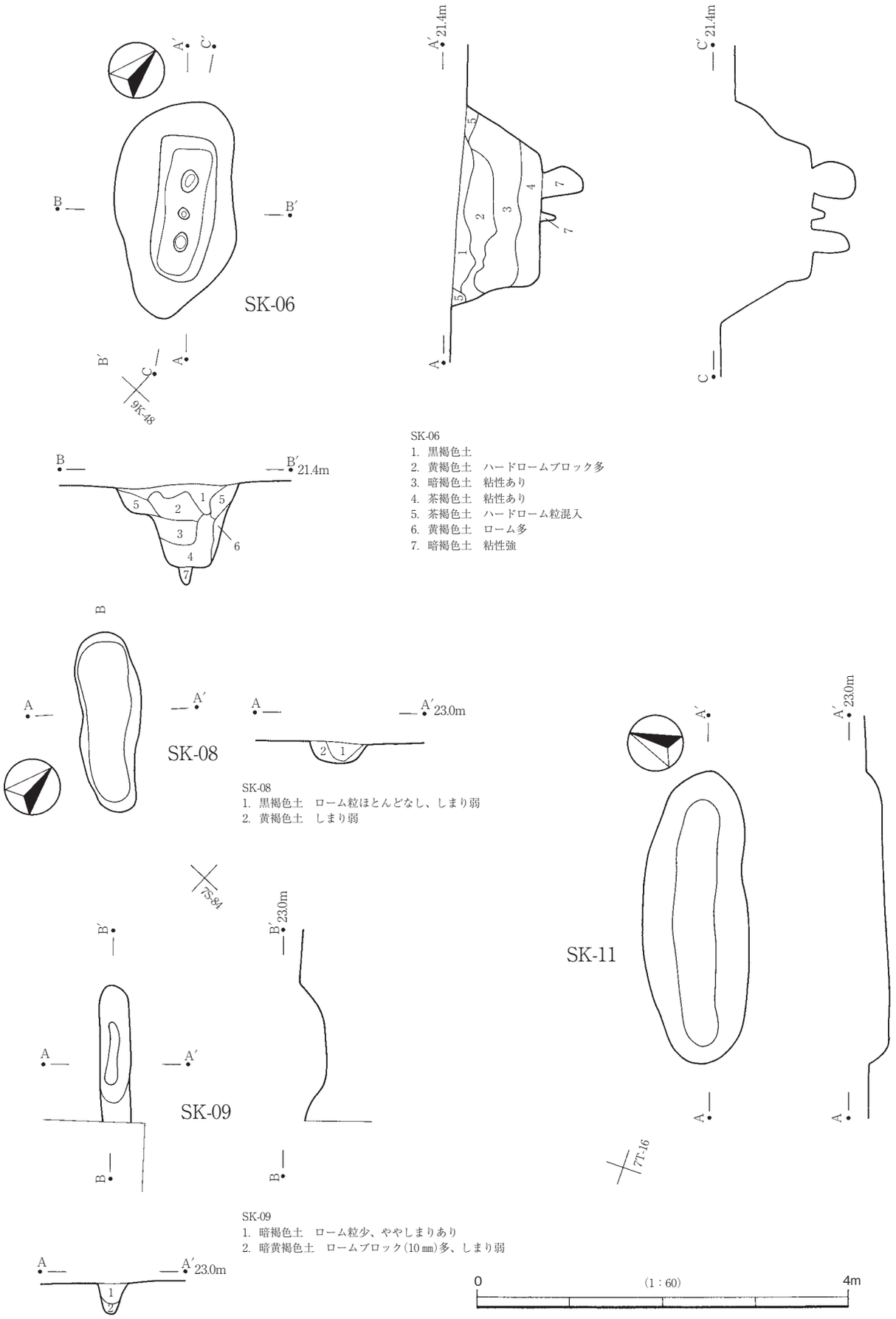
SK-02
1. 茶褐色土層　ロームブロック(5㎜)含む
2. 黄褐色土層　ロームブロック
3. 暗茶褐色土層
4. 黄褐色土層　ロームブロック
5. 黒褐色土層
6. 暗黒褐色土層
7. 明黒褐色土層
8. 黒色土層



第110図　土坑・陥穴（1）


SK-14
SK-03
SK-04
A
A′
B
B′
25.4m
20.8m
20.7m
1
2
3
4
SK-14
1. 黒褐色土　しまり良
2. 明褐色土　ソフトローム主体、しまり良
3. 黄褐色土　ソフトローム＋ハードロームブロック
4. 暗黄褐色土　ソフトローム主体、ハードロームブロック混
0
(1：60)
4m

第111図　土坑・陥穴（2）

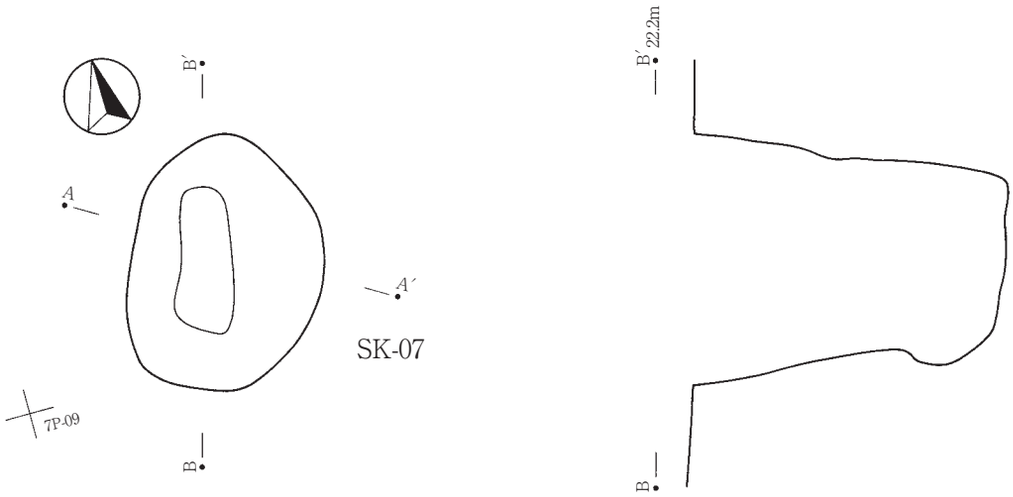


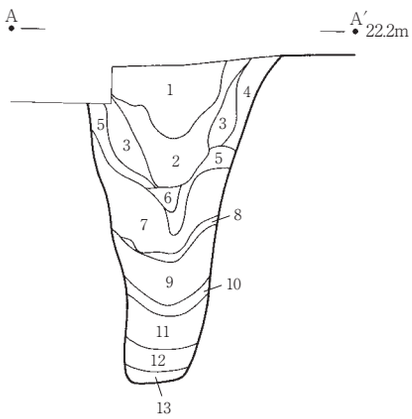
SK-06
1. 黒褐色土
2. 黄褐色土　ハードロームブロック多
3. 暗褐色土　粘性あり
4. 茶褐色土　粘性あり
5. 茶褐色土　ハードローム粒混入
6. 黄褐色土　ローム多
7. 暗褐色土　粘性強

SK-08
1. 黒褐色土　ローム粒ほとんどなし、しまり弱
2. 黄褐色土　しまり弱

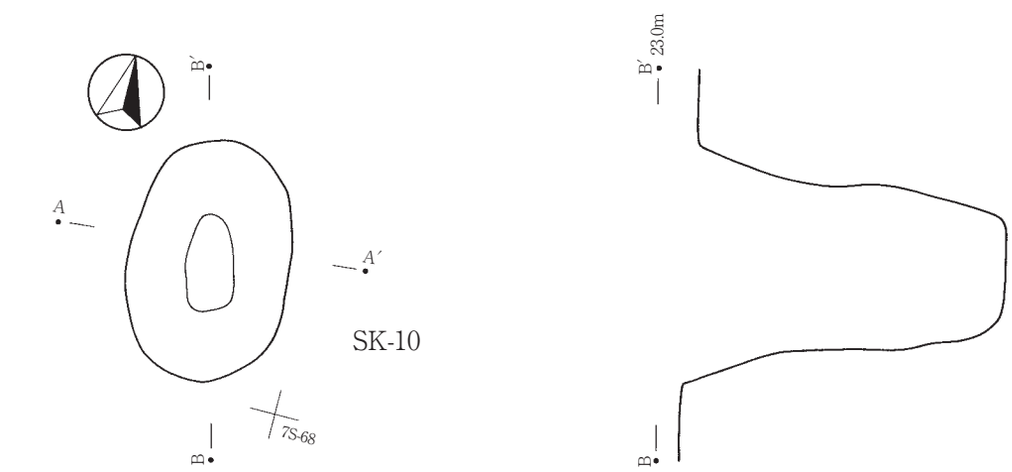
SK-09
1. 暗褐色土　ローム粒少、ややしまりあり
2. 暗黄褐色土　ロームブロック(10㎜)多、しまり弱

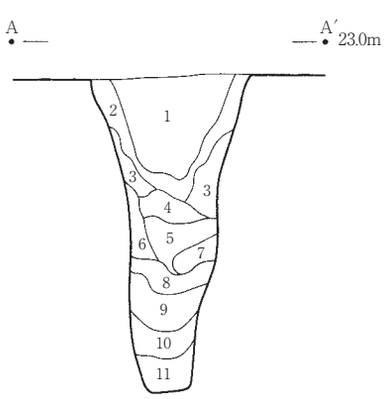
第112図　土坑・陥穴（3）





SK-07
1．暗褐色土　ローム粒混、しまりあり
2．暗褐色土　ロームブロック(10㎜)・ローム粒混、ややしまり欠く
3．褐色土　　ローム粒混、ややしまり欠く
4．黄褐色土　ローム細ブロック混
5．褐色土　　ロームブロック混、しまり欠く
6．暗褐色土　ロームブロック(～20㎜)混、しまり欠く
7．黄褐色土　ロームブロック＋ローム粒、暗褐色土粒混、しまり全くなし
8．暗褐色土　ローム細ブロック混、軟質、しまりなし
9．黄褐色土　7層と同質、しまりなし
10．褐色土　　ローム細ブロック＋暗褐色度ブロック、粗粒、しまり欠く
11．黄褐色土　9層と同質
12．黄褐色土　褐色～暗褐色土ブロック、しまり全くなし
13．黄褐色土　粘性あり、ややしまりなし

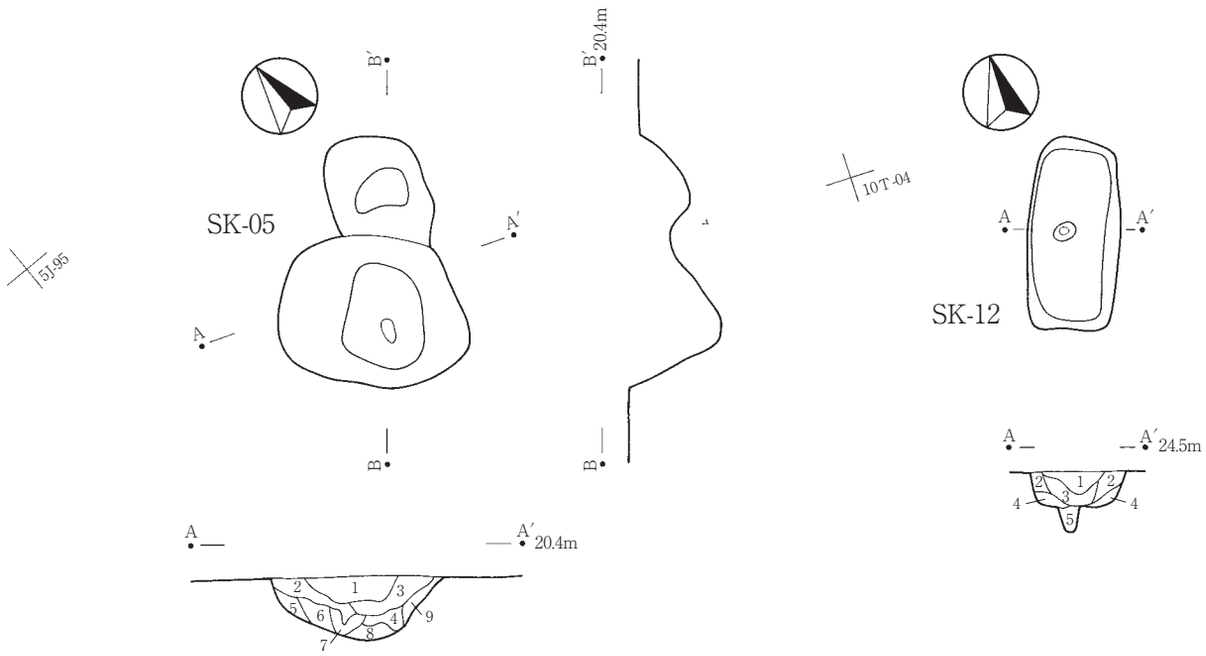




SK-10
1．黒褐色土　ローム少量混
2．暗褐色土　ローム粒多
3．褐色土　　ローム粒多
4．暗黄褐色土　ローム粒多、しまりなし
5．暗褐色土　4層より黒色、ローム粒多
6．暗褐色土　5層に類似、ハードロームブロック(～20㎜)混
7．暗褐色土　6層に黒褐色土混
8．黒褐色土　ローム粒多
9．黄褐色土　しまりなくボソボソ、ハードロームブロック(30㎜)多
10．暗褐色土　ロームブロック(10㎜)多、しまりなし
11．黒褐色土　ローム粒多、しまりなし

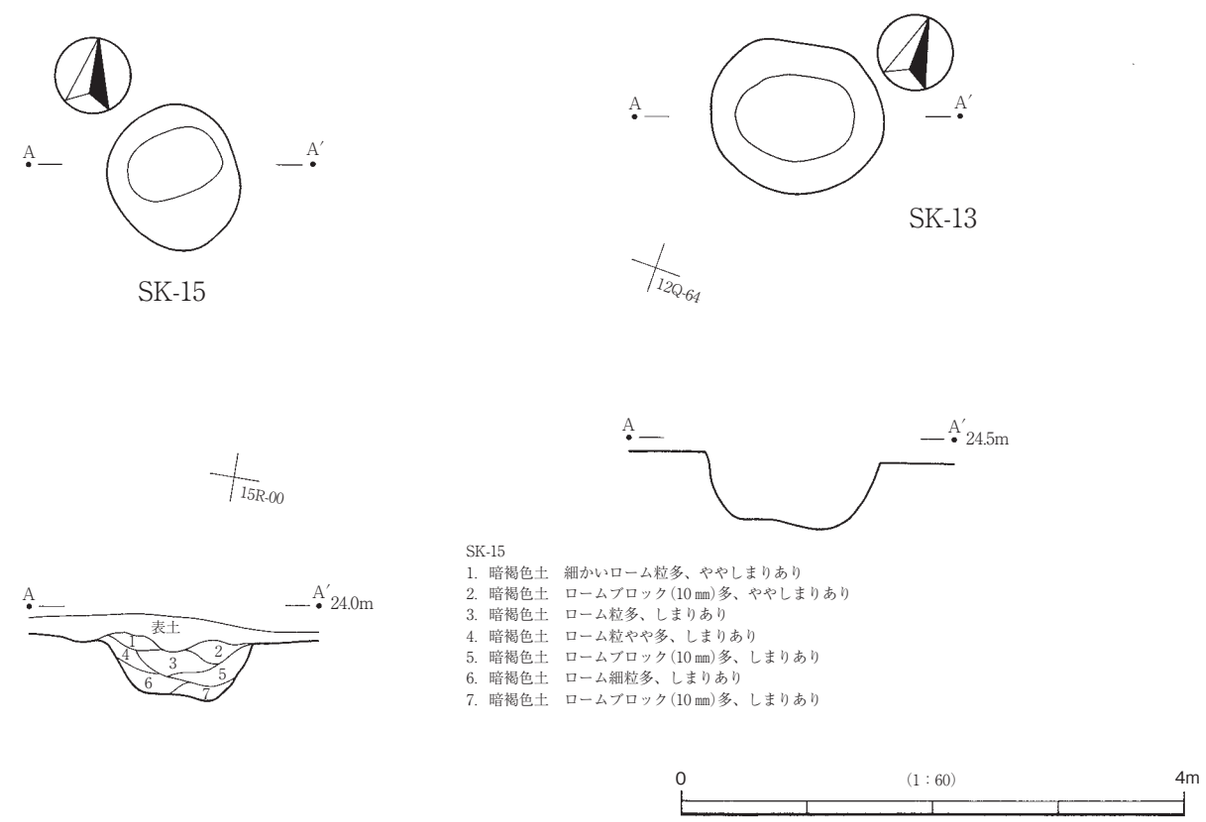
0　(1：60)　4m

第113図　土坑・陥穴（4）



SK-05
1. 暗褐色土　ローム粒(2～3㎜)散在、ハードロームブロック(20㎜)若干、炭化物粒含む、褐色土混在、しまり・粘性中程度
2. 暗褐色土　ローム粒(2～5㎜)やや多く散在、ハードロームブロック(10㎜弱)若干、炭化物粒少量、黄褐色土混、しまり・粘性中程度
3. 暗褐色土　ローム粒(2～4㎜)少量、炭化物粒少量、褐色土・黄褐色土を斑文状に混、しまり・粘性中程度
4. 暗褐色土　ローム粒(2～5㎜)やや多、ハードロームブロック塊(100㎜)、黄褐色土混、しまり・粘性中程度
5. 黄褐色土　ソフトローム主体
6. 灰黄褐色土　ローム粒(3～5㎜)、ロームブロック(10～20㎜)混多、ソフトローム＋暗灰色土基調、しまり・粘性中程度
7. 黄褐色土　ハードローム塊(5～15㎜)主体、しまり・粘性中程度
8. 灰黄褐色土　ローム粒(5～15㎜)、ロームブロック(10～20㎜)混多、しまり強、粘性中程度
9. 黄褐色土　ソフトローム主体、暗褐色土を斑文状に混、しまり・粘性中程度

SK-12
1. 暗褐色土　粘性、しまりあり、ローム粒(2～3㎜)、ローム土少量混入
2. 黄褐色土　ロームブロック(50～100㎜)主体、粘性・しまり強、褐色土少量混
3. 暗褐色土　粘性やや強、しまりあり、ローム土主体、褐色土少量混、ロームブロック(20～30㎜)・ローム粒子(2～3㎜)少量混
4. 黒褐色土　粘性やや強、しまりあり、黒色土主体、ローム土少量混、ローム粒子(2～3㎜)少量混入
5. 暗褐色土　粘性・しまりあり、ローム主体、褐色土少量混、ロームブロック(20～30㎜)少量混入



SK-15
1. 暗褐色土　細かいローム粒多、ややしまりあり
2. 暗褐色土　ロームブロック(10㎜)多、ややしまりあり
3. 暗褐色土　ローム粒多、しまりあり
4. 暗褐色土　ローム粒やや多、しまりあり
5. 暗褐色土　ロームブロック(10㎜)多、しまりあり
6. 暗褐色土　ローム細粒多、しまりあり
7. 暗褐色土　ロームブロック(10㎜)多、しまりあり

0　(1：60)　4m

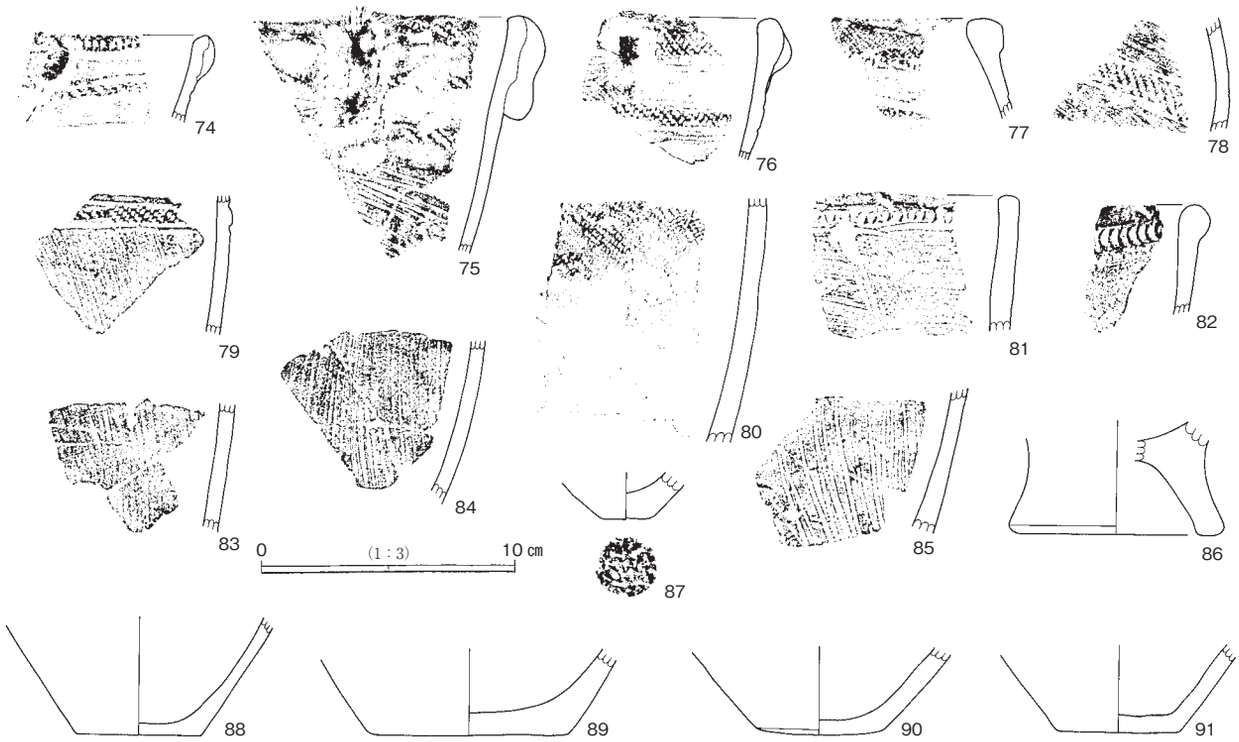
第114図　土坑・陥穴（5）

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
0
(1：3)
10 cm

第115図　縄文土器（1）

38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
0
(1：3)
10 cm

第116図　縄文土器（2）



第117図　縄文土器（３）

SK-13土坑（第114図）

調査区の12Q-54グリッドに位置する。平面形は1. 38m×1.20mの楕円形を呈し、確認面からの深さは50cmを測る。時期・性格は不明である。遺物は検出されなかった。

SK-14陥穴（第111図、図版10）

調査区の13Q-13グリッド付近に位置する。SX-01シシ穴の南端に隣接するが、軸方向や形状が異なり、シシ穴との関連性はうかがわれない。上端の平面形は2.47m×1.8mの不整円形、底面は1.62m×0.52mの楕円形を呈す。確認面からの深さは最大で2.32mを測る。底面は中央がやや高く、壁は直線的に立ち上がる。遺物は検出されなかった。

SK-15土坑（第114図、図版10）

調査区の14Q-99グリッド付近に位置する。平面形は上面は約１mの円形、底面は0.84m×0.52mの楕円形を呈す。断面形は半球状で、確認面からの深さは44cmを測る。遺物は検出されなかった。

遺物　縄文時代の遺物として縄文土器と石器があった。まとまって出土した遺物はなく、おもにグリッドやトレンチ、あるいは近世の溝から出土した。

縄文土器（第115図 ～第117図、図版16 ～ 18）

１～３は撚糸文土器である。１・２は同一個体で、無文の肥厚した口縁下にＲＬの縄を３段押圧し、その下に同じ原体で縦走する回転縄文を施す。３はＲＬの縦走縄文を密接して施す。井草式ないしは夏島式であろう。４～７は同一個体で、厚手で、胎土中に繊維を含む。表裏とも擦痕が付く。子母口式であろう。８は関山式で０段多条の羽状縄文が施されている。９・10は阿玉台式である。９は扇状突起が一部に残る口縁部破片で、突起の右端から垂下した背の高い隆帯の横に角押文を施す。阿玉台1b式であろう。10は

枠状の刻み付隆線の下に縦位ひだ状文様と波状沈線を施す。阿玉台2式と思われる。

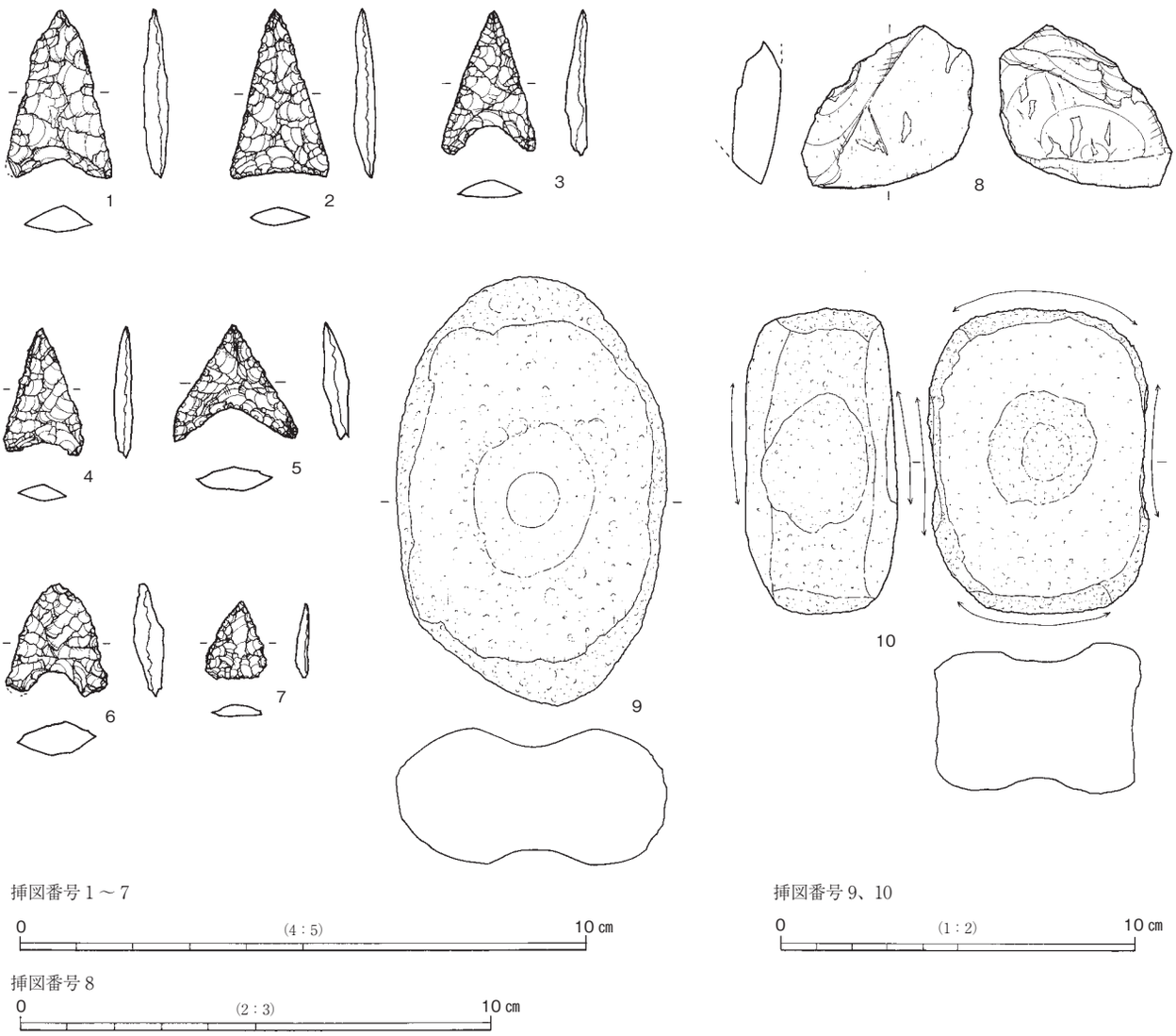
11 ～ 24は加曽利Ｅ式後半の土器である。11は口縁部文様帯部分の破片で、低い枠状隆帯区画内を沈線で縁取り、ＲＬ縄文を充填する。12は口縁部文様帯の下端から胴部文様帯の上部にかけての破片で、両文様帯の境は隆帯ではなく単なる段に退化している。胴部は磨消された逆Ｕ字状の縄文帯となっている。13は口縁部文様帯に小型化した渦巻文を配し、胴部に磨消懸垂文を施す。口縁突起は欠失している。14は棒状の口縁突起下に、渦巻文ではなく単純な円形の枠状文を配している。枠内には充填されていない。15は横に展開する沈線文様が残る。口縁部文様帯の下端部分と思われる。16 ～ 20は磨消懸垂文の胴部破片である。17・18の縄文は複節のＲＬＲ、20の縄文は０段多条のＲＬである。21・22は同一個体で、口縁下に丸棒工具による刺突列を配し、その下に太い沈線でネガ逆Ｕ字状文を施す。刺突列直下には横位回転の縄文が付き、胴部の縦位回転縄文と羽状の効果をあげている。23は幅の狭いネガ逆Ｕ字状文である。口縁部裏側に沈線が認められる。24は無文の口縁を画する横位の沈線とポジ逆Ｕ字状文が認められる。沈線はごく浅く、太い。25・26は曽利式系の破片である。隆帯と半截竹管による平行沈線文様が付く。27は壺状の器形をした無文の破片である。

28・29は称名寺式で、28はＶ字状のポジ文様を施している。29は浅鉢状の器形となる。30は口縁部に橋状にかかる突起部分の破片で、口縁内側はくびれて受け口状になっている。堀之内１式であろう。31・32は同一個体で、焼成良く堅緻である。縄文のみが付く。堀之内２式の粗製土器であろう。33 ～ 37は加曽利Ｂ２式から３式の精製土器であろう。33は拓影下端にも横位沈線があり、口縁部は幅広の縄文帯となっている。36の磨消縄文は、胴部の乱れたコンパス文様ないしは類似の文様であろう。37はくびれた胴部を無文帯とし、胴下部の斜線文との境に刺突列を施す。

38 ～ 73は加曽利Ｂ式の粗製土器である。38 ～ 43は紐線が付く口縁部破片で、紐線は太く指頭圧痕がしっかり付くが、43のみ紐線は低く、指頭圧痕も浅い。44 ～ 46は同一個体で、頚部の紐線は断面が台形をなすほど高い。指頭圧痕は浅い。47の紐線上の圧痕は先端が直線状のへらによるものである。頚部のくびれが強い。48は紐線が細く、押圧も浅い。49・50は同一個体で、紐線が低平である。51 ～ 59も同一個体で、口縁部から底部付近までの破片がそろうが接合しない。口縁と胴部に低平な紐線を付ける。紐線上には先端が直線状のへらによる連続刺突を施す。67・68は粗大な縄文のみを施す。70は低い山形の波状口縁で、口縁部に粗い縄文地に斜線を施し、頚部は無文帯となるもので、加曽利Ｂ３式であろう。71も同様の文様構成をとる胴部破片である。72・73は横位の条線のみを施す。

74・75は曽谷式であろう。74は口縁部に「の」字状の貼り瘤を施す。「の」字の下端に取り付くのは、沈線で画された縄文帯、「の」字の上端に取り付くのは沈線で画された刻み目帯である。75の「の」字状の貼り瘤は長大である。中段が窪み、安行１式の貼り瘤に近い。貼り瘤に取り付く縄文帯は３帯あり、各帯の間は指頭で磨り消される。胴部は条線となる。76 ～ 85は後期安行式である。76は安行１式、77は波状突起をもつ安行２式と思われる。78は胴部の帯縄文の破片である。79も同様の破片で、胴下部は条線となる。83・84は79と同一個体である。81・85も同一個体で、口縁には棒状工具の刺突列が付き、以下に条線を施す。安行１式の粗製土器であろう。82は紐線文の付く安行２式の粗製土器である。87 ～ 91は底部である。87は安行１式から２式の小型土器で、底面には網代痕が残る。86は台付土器、88・91の底部がすぼまるものは安行式の底部であろう。

石器（第118図、第51表、図版18）



第118図　縄文時代石器

第51表　東向遺跡の縄文時代石器

挿図番号	器種	石材	最大長(㎜)	最大幅(㎜)	最大厚(㎜)	重量(ｇ)	出土遺構	調査次	遺物番号
1	石鏃	チャート	29.4	18.2	4.3	1.85	SD-04	第７次	SD-101-1
2	石鏃	チャート	30.3	17.3	3.9	1.57	遺跡内	第１次	002
3	石鏃	黒曜石	25.4	16.3	4.1	0.84	グリッド	第12次	8K39-2
4	石鏃	チャート	21.8	14.5	3.3	0.76	グリッド	第11次	8L27-1
5	石鏃	チャート	19.7	21.5	4.1	0.89	グリッド	第11次	8K40-1
6	石鏃	黒曜石	20.3	18.2	5.3	1.29	トレンチ	第２次	4トレ-1
7	石鏃	黒曜石	14.0	10.5	2.1	0.25	グリッド	第11次	9L26-1
8	磨製石斧片	凝灰岩	31.2	33.0	9.1	14.54	グリッド	第11次	9L45-1
9	凹石	流紋岩	120.2	75.8	39.0	570.00	トレンチ	第２次	10トレ-1
10	敲石（凹石？）	安山岩	86.8	61.4	42.1	330.00	グリッド	第17次	8V62-1

１～７は石鏃で、１、２、４、５の石材がチャート、３、６、７が黒曜石である。１、２、４の形態は、長い斜辺と、やや凹んだ短い底辺からなる細長い二等辺三角形をしている。５は逆に、長い底辺で、横幅の広がる形態を示している。８は凝灰岩製の磨製石斧の刃部片である。９は流紋岩製の楕円形をした凹石で、平坦な両面中央がくぼみ、その周囲には磨滅痕がある。10は扁平な直方体をした安山岩の敲石で、両面の中央がややくぼみ、周囲に打撃痕が見られた。

２　平安時代

平安時代の遺構として、竪穴住居跡２軒が遺跡範囲の北側で、互いに約250m離れてそれぞれ単独で検出された。

SI-001住居跡（第119図、第52表、図版11・図版19）

調査区東北側の８U-29グリッド付近に位置する。主軸方位はN- 95°-Eである。西側は削平により失われ、1/3程度が遺存していた。南北方向は一辺3.52mを測り、主軸方向も同程度の長さで、方形を呈すと思われる。壁高は最も深い東辺で５cmである。覆土は黒褐色土ないしは暗褐色土である。遺存が少ないため明瞭ではないが、部分的にしまりの良い茶褐色土が床面近くで確認されており、貼り床であった可能性もある。周溝は、北壁と東壁の一部で確認された。柱穴は検出できなかった。カマドは東壁の南コーナー寄りに位置する。上部は削平されているが、袖基部や火床部分は遺存している。このカマド内およびカマド前面からまとまって遺物が検出された。

遺物　８点を図示した。いずれも土師器である。１、２はロクロ成形の坏、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁は外反する。３、４は高台付の坏である。体部は大きく外反する。高台は、３はあまり開かず、４は外方へ大きく開く。５、６はロクロ成形の小型坏で底部は回転糸切りである。５は体部が内湾気味に立ち上がり、６は大きく外反する。７、８は甕で、７はカマド付近から出土した。ともに最大径が肩部やや下にある。胴部上半が縦位、下半が横位のヘラ削りを施す。口縁部を受け口状に調整し、口唇が内側に折れ曲がる。７は底部に回転糸切り痕が残る。

SI-002住居跡（第120図、第52表、図版11・図版19）

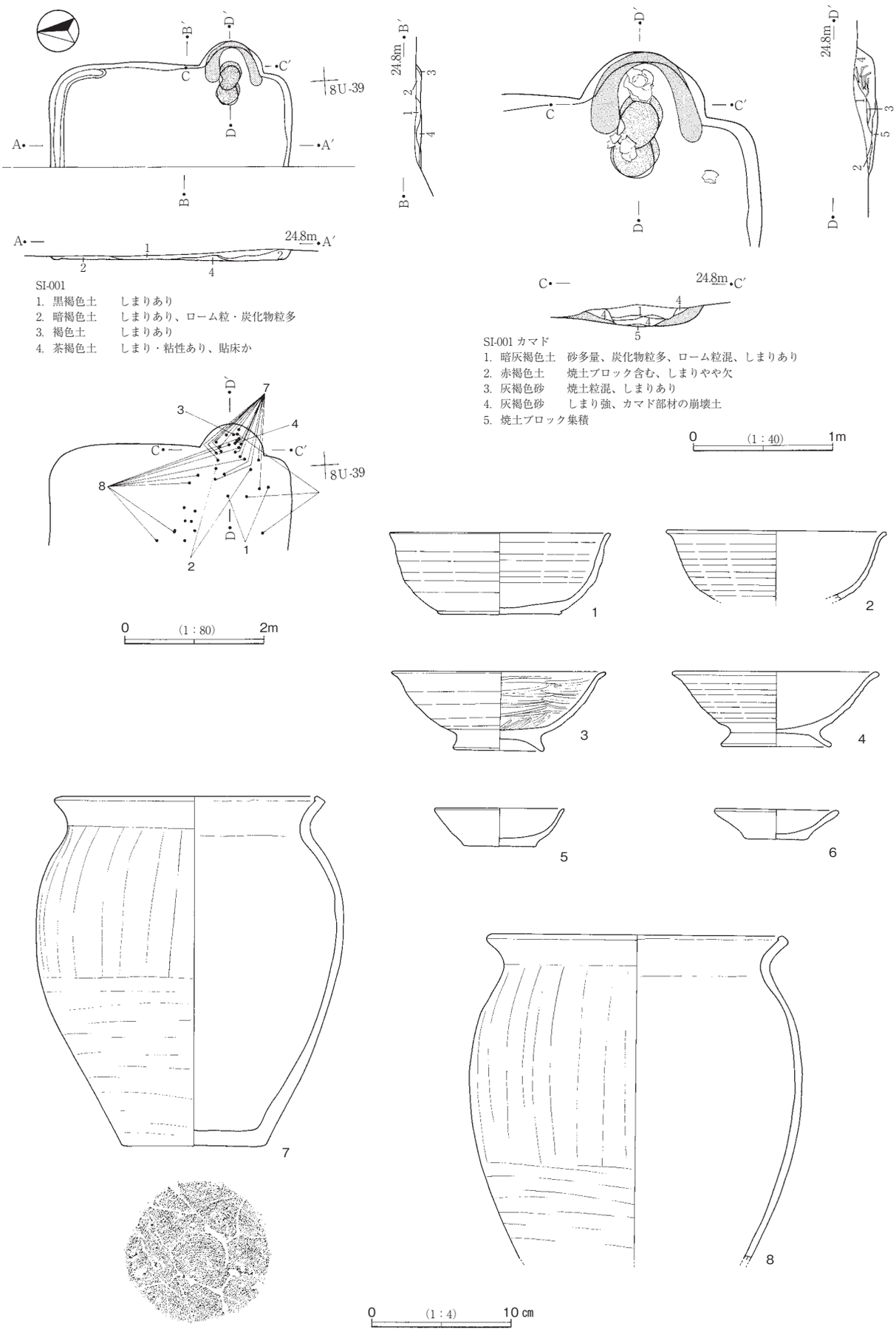
調査区北側の４P-65グリッド付近に位置する。耕作機械による撹乱を縞状に受けており、床面を断片的に調査し得たのみである。3.55m×3.08mの隅丸方形、主軸方位はN-53.5°-Eと思われる。覆土は黒色土１層のみを確認した。壁高は最大で10cmである。周溝、カマド、柱穴は検出されなかった。遺物の出土量は少なく、出土位置が確認できたものは１点のみで、そのほかは撹乱内、もしくは覆土中からの出土である。

遺物　図示できるものは４点で、いずれも土師器である。１は小型甕の胴部下端である。外面は縦方向に丁寧なミガキが施される。２～４はいずれも坏の底部である。２は回転糸切りである。貼り付け高台の痕跡が残る。３、４はいずれも小型で、SI-001住居跡出土の６と同様、体部が大きく外反する形状と思われる。

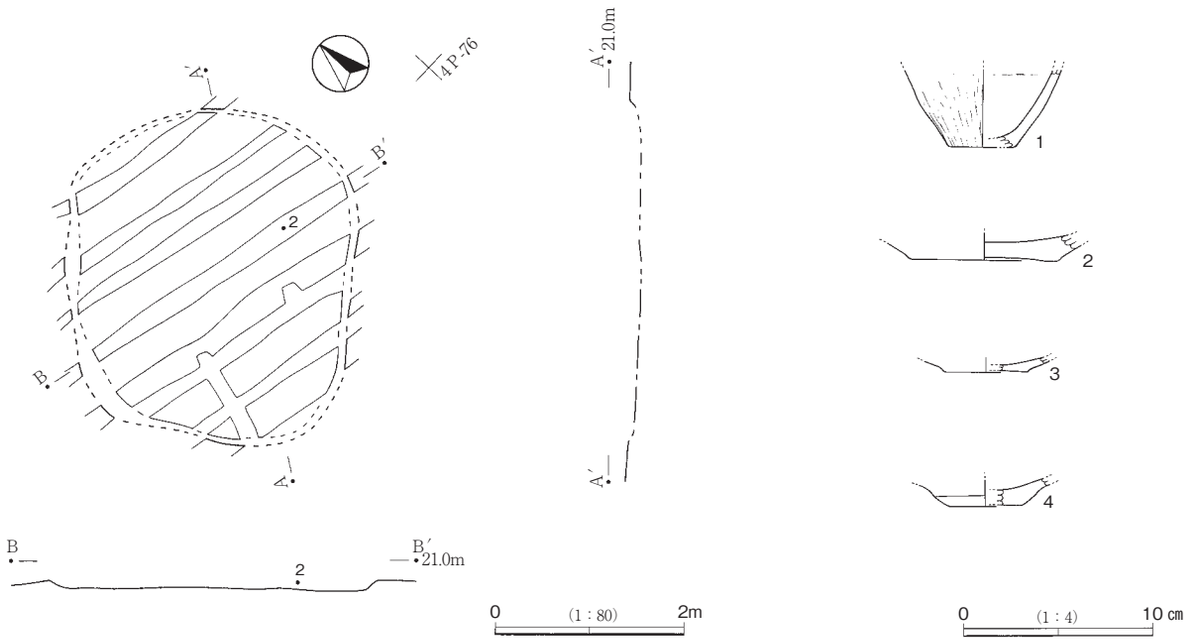
３　近世

近世の遺構として、塚１基と土坑１基、溝と野馬土手・堀８条、シシ穴１基が検出された。

塚は遺跡範囲北端付近に位置し、盛土の下から土坑が検出された。



第119図　SI-001住居跡と出土遺物



第120図　SK-002住居跡と出土遺物

第52表　東向遺跡の平安時代土師器観察表

挿図番号		実測番号	遺構番号	種別	器種	遺存度%	単位：cm 口径	底径	器高	色調 内面	外面	胎土	焼成	整形・調整 内面	外面	備考
第119図	1	4	SI-001	土師器	杯	40%	(15.8)	(8.4)	6.0	赤褐色	赤褐色	精緻、白色粒多	良好	ロクロ	ロクロ	底部：回転糸切り
	2	7	SI-001	土師器	杯	30%	(15.8)		【5.0】	赤褐色	赤褐色	白色細粒	良好	ロクロ	ロクロ	
	3	3	SI-001	土師器	高台付坏	90%	15.3	6.3	5.9	明赤褐色	橙	精緻、白色粒多	良好	ミガキ	ロクロ	底部：回転糸切り
	4	6	SI-001	土師器	高台付坏	50%	(14.5)	7.8	5.9	明赤褐色	明赤褐色	精緻、白色粒	良好	ロクロ	ロクロ	底部：回転糸切り
	5	5	SI-001	土師器	杯	70%	9.2	5.2	2.8	橙	橙	精緻、白色粒少	良好	ロクロ	ロクロ	底部：回転糸切り
	6	8	SI-001	土師器	杯	20%	(8.8)	(4.6)	2.2	暗褐色	暗褐色	やや粗、雲母粒	良好	ナデ	ナデ	底部：回転糸切り
	7	1	SI-001	土師器	甕	60%	18.6	10.4	25.3	明赤褐色	明赤褐色	白色粒多	良好	ヘラケズリ	ヘラケズリ	底部：回転糸切り
	8	2	SI-001	土師器	甕	40%	(21.0)			明褐色	明褐色	白色粒多	良好	ヘラケズリ	ヘラケズリ	
第120図	1	1	SI-002	土師器	甕	胴部～底部5%		(3.6)	【4.2】	明褐色	橙	精緻、白色粒	良好	ヘラナデ	ナデ、ミガキ	
	2	2	SI-002	土師器	坏	底部40%		(4.5)	【0.8】	明褐色	明褐色	精緻、白色砂粒	良好	ヨコナデ ヘラナデ	ヘラケズリ ヨコナデ、ミガキ	底部：回転糸切り
	3	3	SI-002	土師器	高台付坏	底部70%		(7.9)	【1.4】	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	精緻、白色粒多	良好	ヨコナデ ヘラナデ	ヨコナデ ヘラケズリ	底部：回転ヘラ切り
	4	4	SI-002	土師器	坏	底部40%		(4.0)	【1.4】	明褐色	明褐色	白色粒	良好	ヘラナデ	ヘラケズリ ヘラナデ、タタキ	底部：回転糸切り後、体部下端回転ヘラ削り

（　）は復元値　【　】は現存値

溝と野馬土手・堀については、確認調査で検出された溝と、野馬土手として観察されていた土手、およびそれに沿って検出された溝を指す。便宜上、土手部分についてもSDとして通し番号を設定し、図化した。土手を伴う溝については、調査が多年次に渡ること、耕作等による地形の改変が多いことなどから構築時期を確定することはできなかった。また、現在の土地境界線と重なる箇所も多いが、野馬土手等を基準に土地境界を設定した可能性もあるところから、一概に近代の地割りの溝、土手とも断じがたい。

シシ穴は遺跡範囲中央南側から検出された。本遺構は、縄文時代の陥穴のような深い土坑が２条にわたって多数並列していたことから、当初、土坑の集合体という意味で土坑列と命名されていた。その後、類似した遺構がシシとして報告されていることが分かったので、本遺構もシシ穴として報告する。

SM-01塚（第121図・122図、図版12）

遺跡範囲の北端、４Q-21グリッド周辺にあり、東向遺跡北側に隣接する高本集落南端から南側へ数10ｍの位置にあたる。『千葉県文化財分布地図』（昭和60年）に記載されている「庚申山塚群」、「吉橋宮ノ前塚群」はいずれも現在では所在が確認できないが、本塚は分布地図上には記載されていない。隣接する道路から石段が設けられていること、頂上部に板碑や石祠があること等から、現在でも信仰の対象となっているようである。南側の石祠や樹木のある部分の約３分の２が保存地区となったため、北側部分および周辺にトレンチを入れて調査を行なった。

現況の盛土の形状はややいびつな半円状、高さは約１ｍである。東側部分は後世の道路普請で削平されており、本来は盛土裾部径約８ｍであろう。盛土は木の根の攪乱が激しく、表土下は50㎝程度しか確認できなかった。土層観察の分層も難しかったが、整形され、わずかに残るⅢ層上面に旧表土かと思われる黒っぽい腐植土層が観察できる部分もあった。

盛土の裾部分には周溝状に溝が検出されたが、ほぼ同じ地点に複数の溝が確認でき、撹乱や、貯蔵穴と思われる長方形の土坑等が重複するため、塚に伴う周溝とは断言できない。貯蔵穴と思われる長方形の土坑以外では、北寄りの盛土下に規模0.8ｍ×0.55ｍ、深さ15㎝の不整楕円形を呈する浅い掘り込みが検出された。遺物は出土せず、遺構の性格は不明であるが、埋納施設であろうか。また、東側盛土裾部から1.6ｍ×1.0ｍ、深さ70㎝のSK-16土坑が検出された。隣接する道路と同じ方向に主軸を向ける。伴出した遺物はなく性格は不明である。

少量の遺物が塚から出土した。

SD-01溝（第123図、図版13）

５Ｎグリッドに位置する。ほぼ南北に走る溝で、幅は上端で1.6ｍ～ 1.8ｍ、底面で0.3ｍ、深さは30㎝～35㎝を測る。SK-01土坑、SK-02土坑が重複するが新旧関係は不明である。

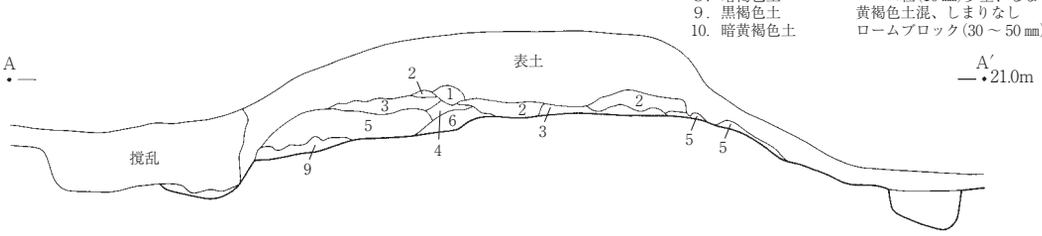
SD-02野馬土手・堀（第123図）

６N-95から７N-26グリッドに位置する。ほぼ南北に走る土手状の高まりと、東側に沿った溝からなる。土手の幅は下部で5.0ｍ～ 5.5ｍ、高さは地表面から50㎝程度である。内部の状況は不明である。溝の規模は確認面で幅1.6ｍ、底面は土手寄りにあり、幅0.9ｍ～ 0.6ｍ、底面には、さらに幅0.5ｍ、深さ0.3ｍの掘り込みがある。遺構の性格や時期を明確にするような遺物は検出されなかった。当該年度の調査範囲外で本遺構に連結する遺構の報告はない。土地境界と重なるところから、近年まで境界土手・溝として使用されていたと思われる。

SD-03野馬土手・堀（第124図、図版13）

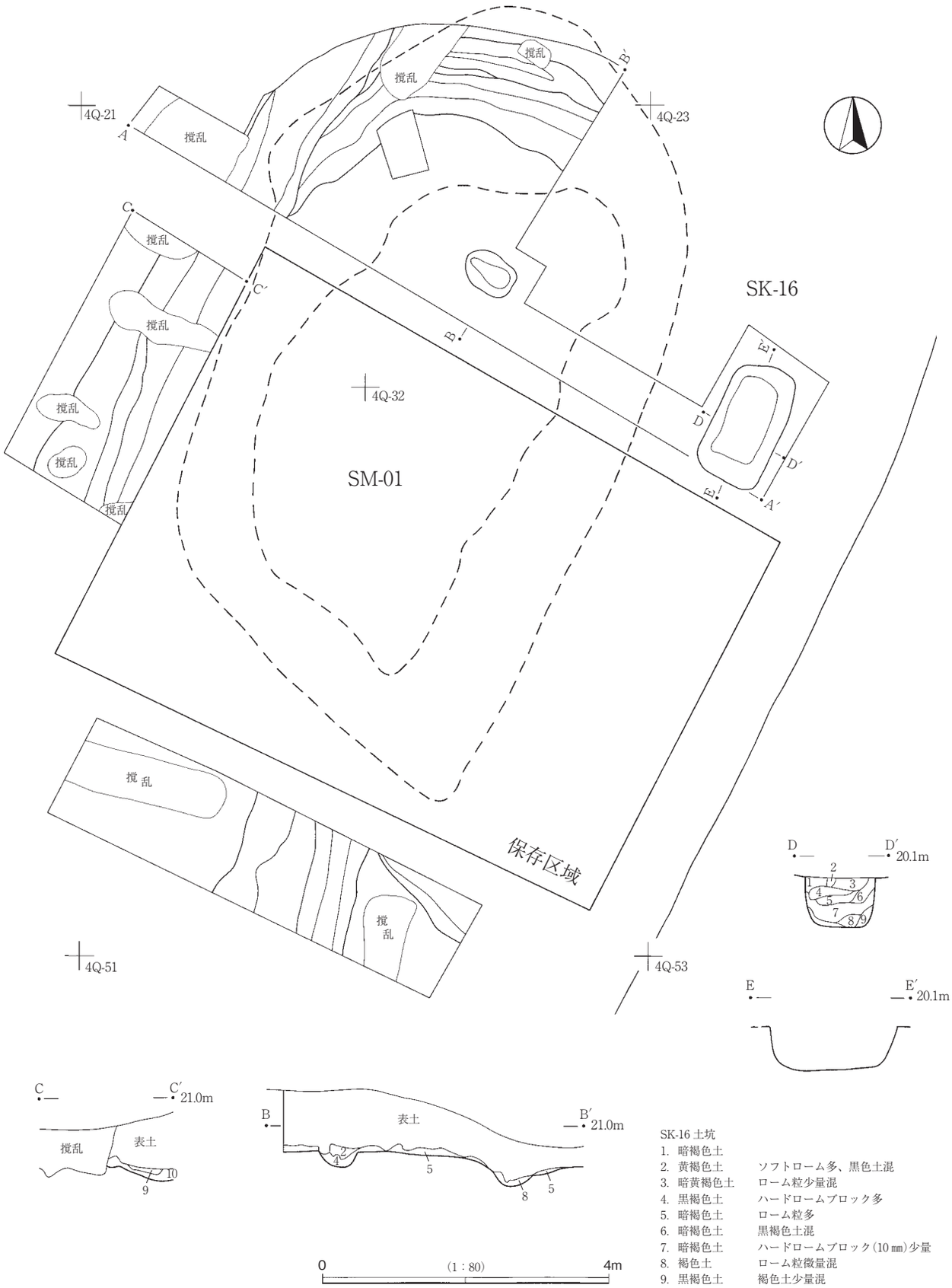
SM-01 塚

1．褐色土＋黒色土	
2．黒色土＋暗褐色土	
3．黄褐色土	ローム主体、ハードロームブロック(10㎜)多
4．黒色土＋暗褐色土	1より黒色土少、ソフトローム含む
5．黄褐色土	ソフトローム、Ⅲ層相当、人為的盛土の可能性あり
6．黄褐色土	ソフトローム、Ⅲ層相当、人為的盛土の可能性あり
7．黄褐色土	ハードローム、Ⅵ層
8．暗褐色土	ローム粒(10㎜)少量、しまりなし
9．黒褐色土	黄褐色土混、しまりなし
10．暗黄褐色土	ロームブロック(30～50㎜)多、しまりなし



0 (1：80) 4m

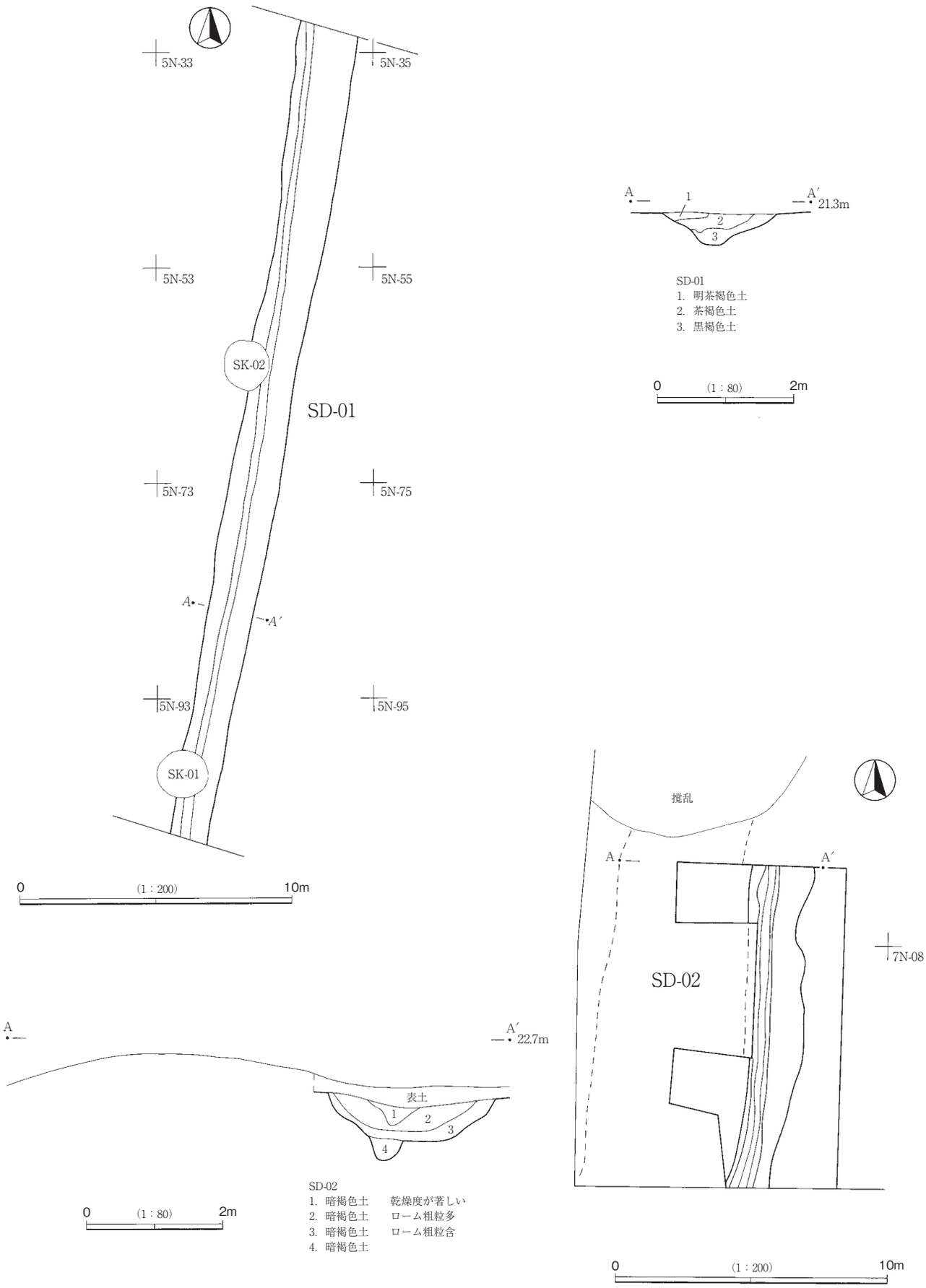
第121図　SM-01塚



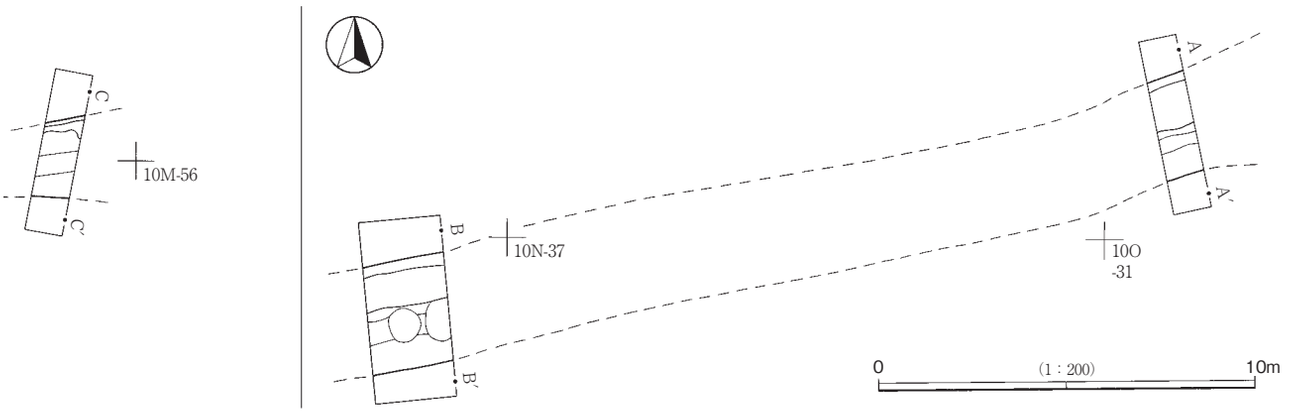
SK-16 土坑

1.	暗褐色土	
2.	黄褐色土	ソフトローム多、黒色土混
3.	暗黄褐色土	ローム粒少量混
4.	黒褐色土	ハードロームブロック多
5.	暗褐色土	ローム粒多
6.	暗褐色土	黒褐色土混
7.	暗褐色土	ハードロームブロック(10㎜)少量
8.	褐色土	ローム粒微量混
9.	黒褐色土	褐色土少量混

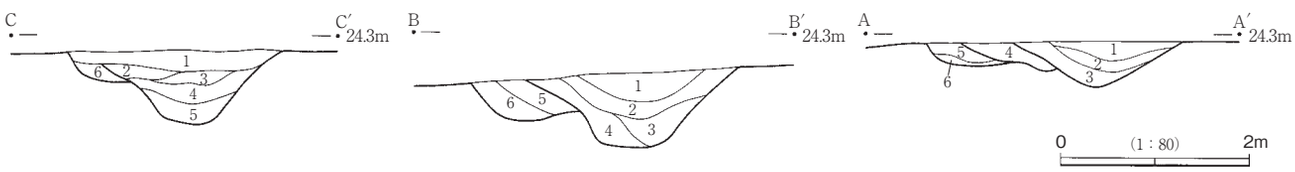
第122図　SM-01塚とSK-16土坑



第123図　溝と野馬土手・堀（1）



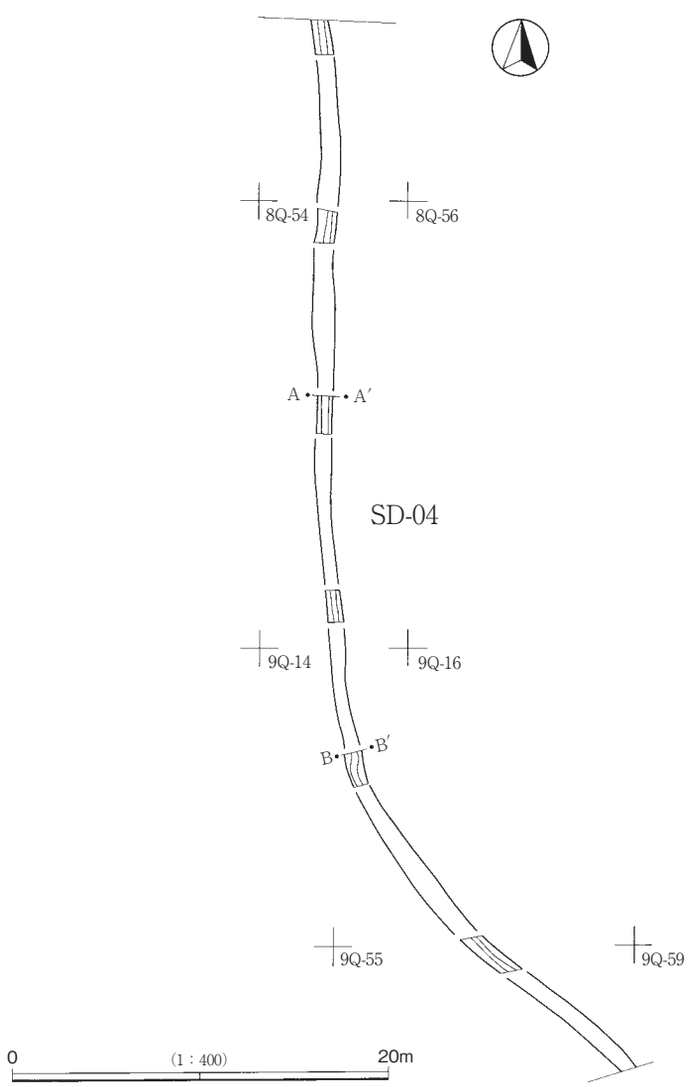
SD-03

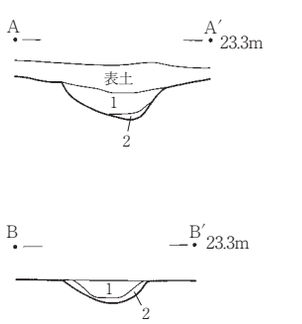


SD-03 A
1. 暗黄褐色土　やや軟質
2. 暗黄褐色土　やや濃い、やや軟質
3. 暗黄褐色土　黒色土少量混入、やや軟質
4. 暗黄褐色土　黒色土混入
5. 暗褐色土　黒色土混入
6. 暗黄褐色土

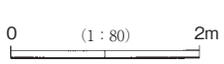
SD-03 B
1. 暗褐色土　軟質
2. 暗褐色土　やや軟質
3. 暗褐色土　やや濃い、やや軟質
4. 暗褐色土　黒色土混入、ローム粒少量含、ややしまりあり
5. 暗褐色土　しまりあり
6. 暗褐色土　黒色土混入、ローム粒含、しまりあり

SD-03 C
1. 暗褐色土　耕作土
2. 暗褐色土
3. 暗褐色土　ローム少量混入
4. 暗褐色土　黒色土少量混入、しまりあり
5. 暗褐色土　黒色土混入、やや軟質
6. 暗褐色土　ローム粒少量含

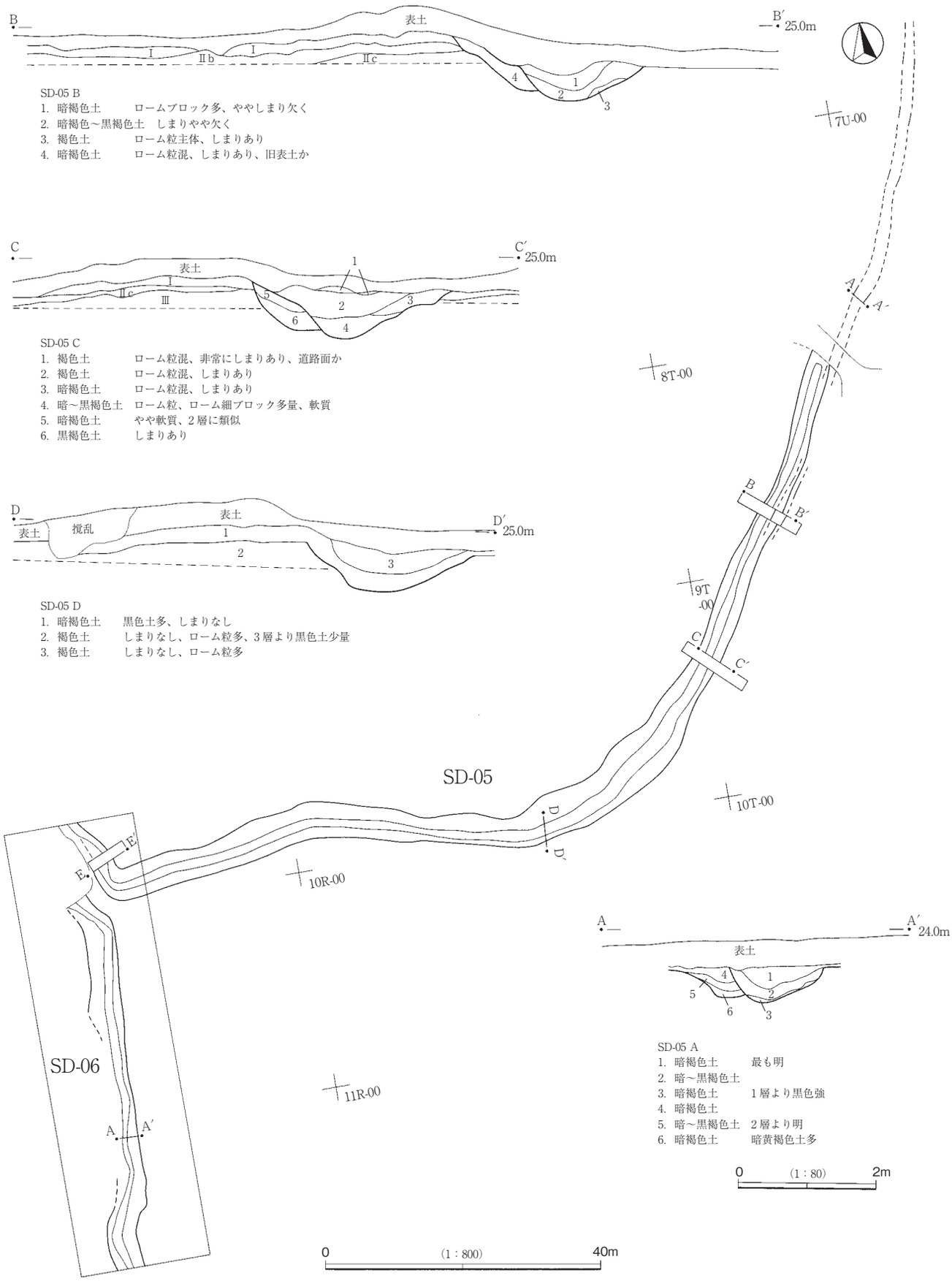




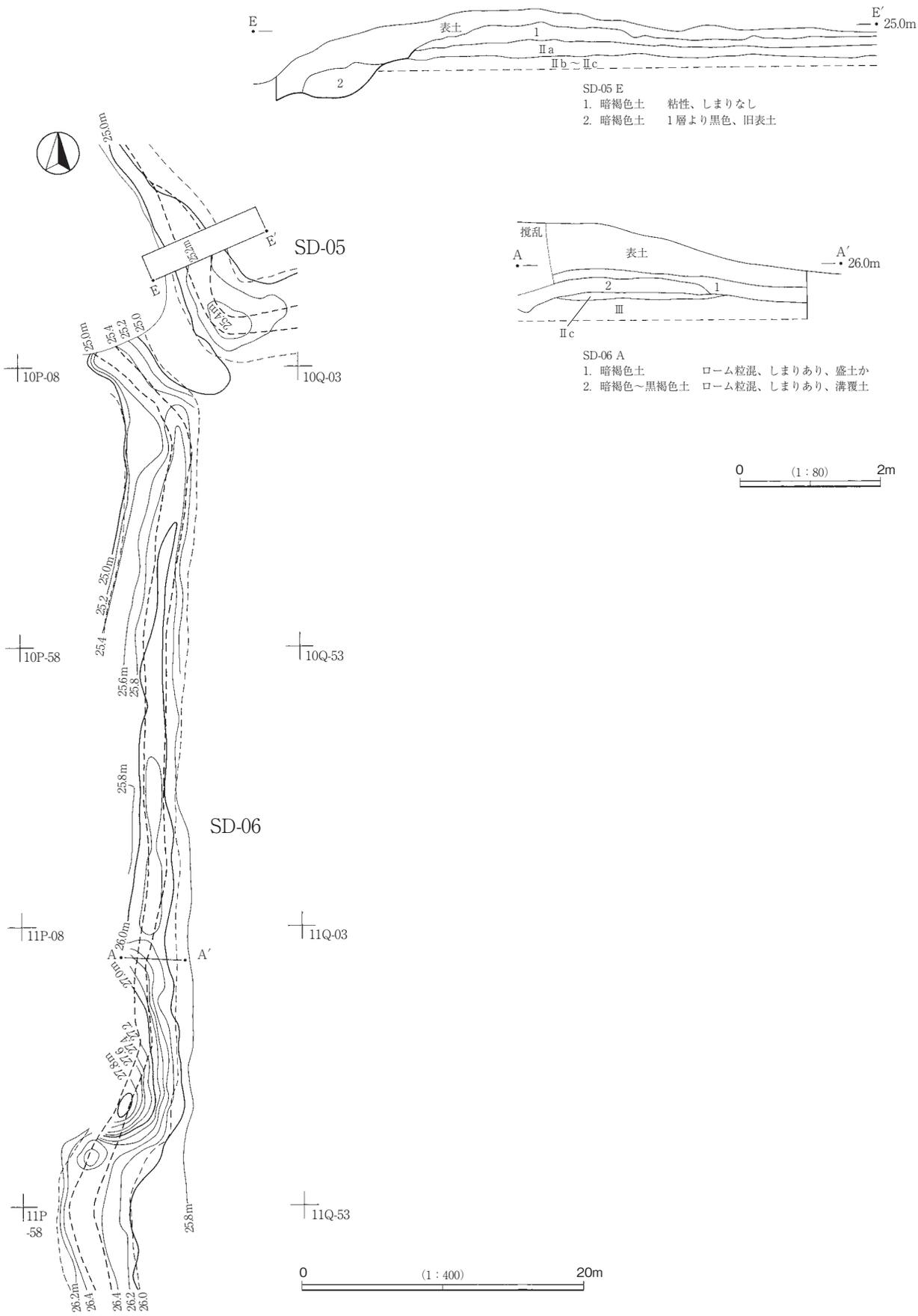
SD-04
1. 黒褐色土　ソフトロームブロック若干、しまりあり
2. 暗褐色土　ソフトローム、ブロック状混



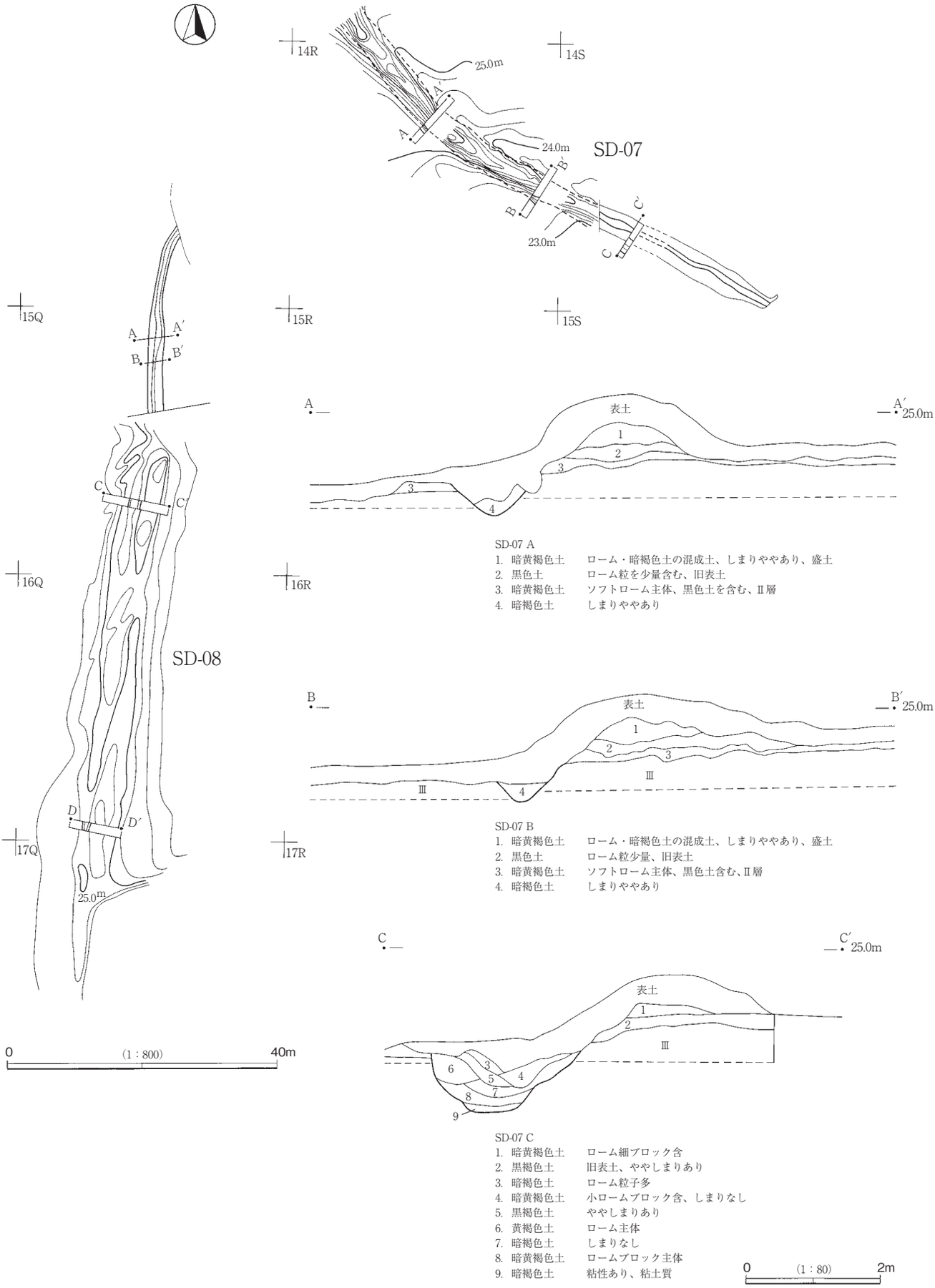
第124図　溝と野馬土手・堀（2）



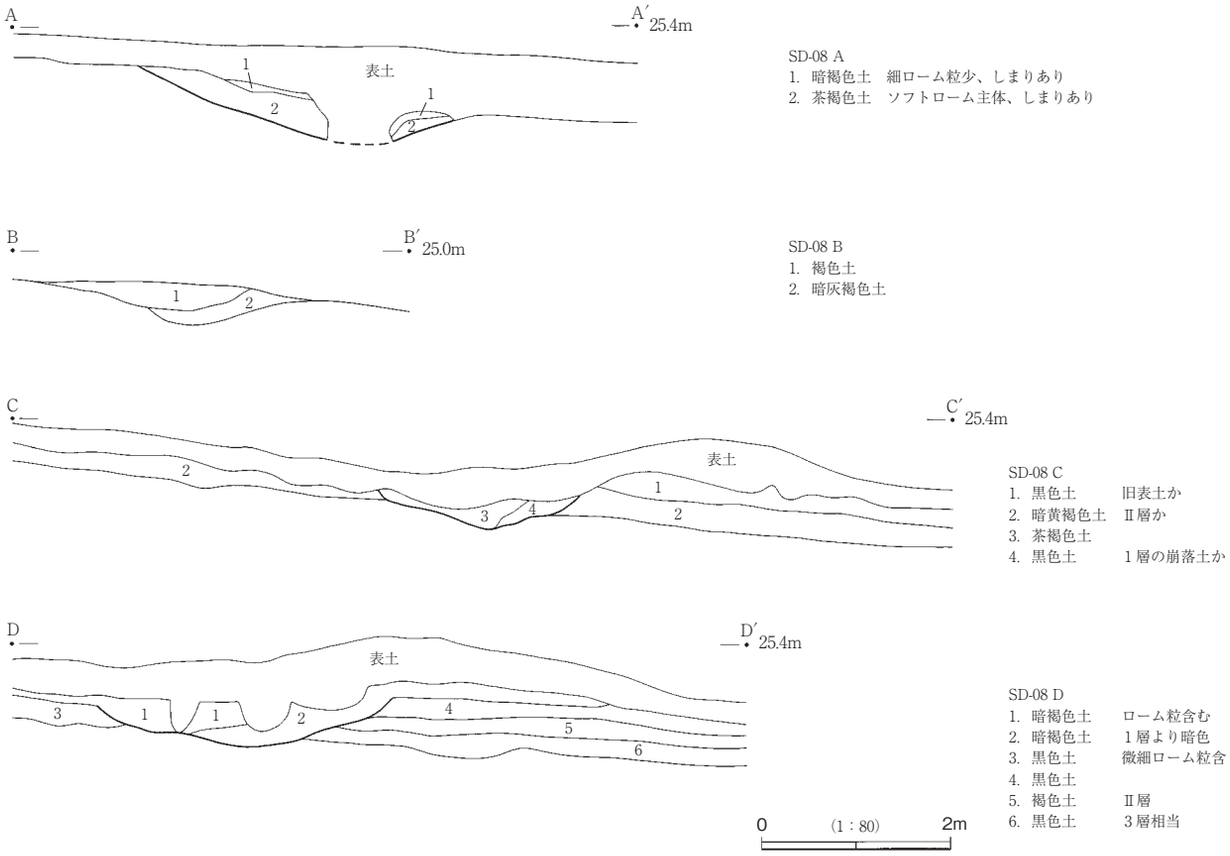
第125図　溝と野馬土手・堀（3）



第126図　溝と野馬土手・堀（4）



第127図　溝と野馬土手・堀（5）



第128図　溝と野馬土手・堀（６）

10M-45から10O-21グリッドにかけて位置する。幅は確認面で2.3m～2.7m、２回ないしは３回の掘り直しの形跡があり、最新の部分で、底部幅0.4m～0.5m、深さ50cm～80cmを呈す。遺構の性格や時期を明確にするような遺物は検出されなかった。方向的に、東側の9Qグリッドにある SD-05、SD-06野馬土手・堀に向かって走っているが、中間の9O～9Pグリッドで両者をつなぐような遺構は確認できなかった。

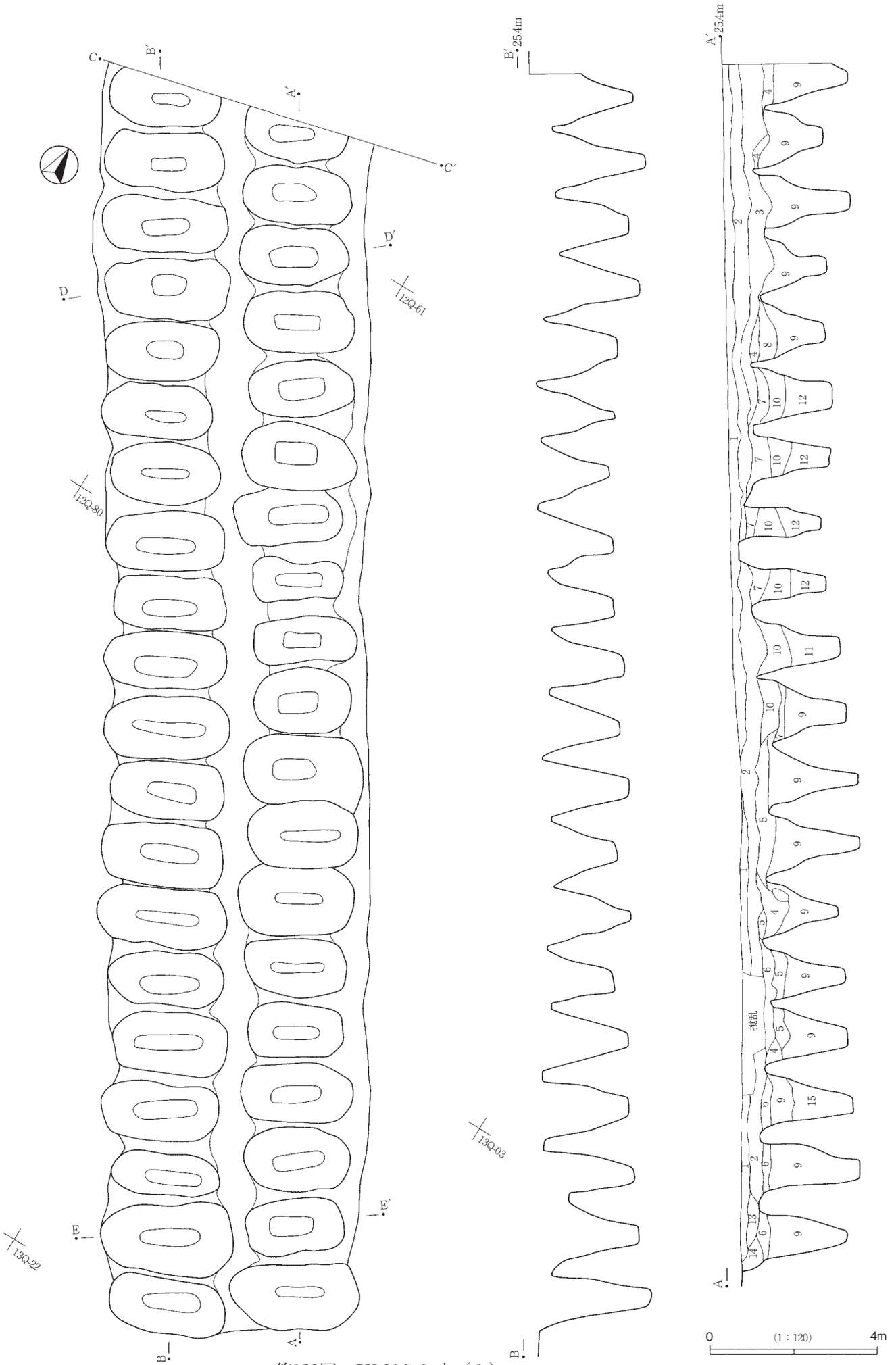
SD-04溝（第124図、図版13）

8Qから9Qグリッドに位置する。北側から入り込む谷の最奥部に、谷の形状に沿うように緩やかに湾曲する。確認面で幅0.8m～1.0m、深さ20cm～25cm、断面の形状はU字状である。Ⅱa層から掘り込まれ、床はソフトローム中で硬化面はないが、しっかりしている。調査時の記録によれば、土の色やしまり方から中世以前と思われるとのことである。北端はさらに北へ延びると思われるが、確認できなかった。南端についてもSD-05との関係は確認できなかった。

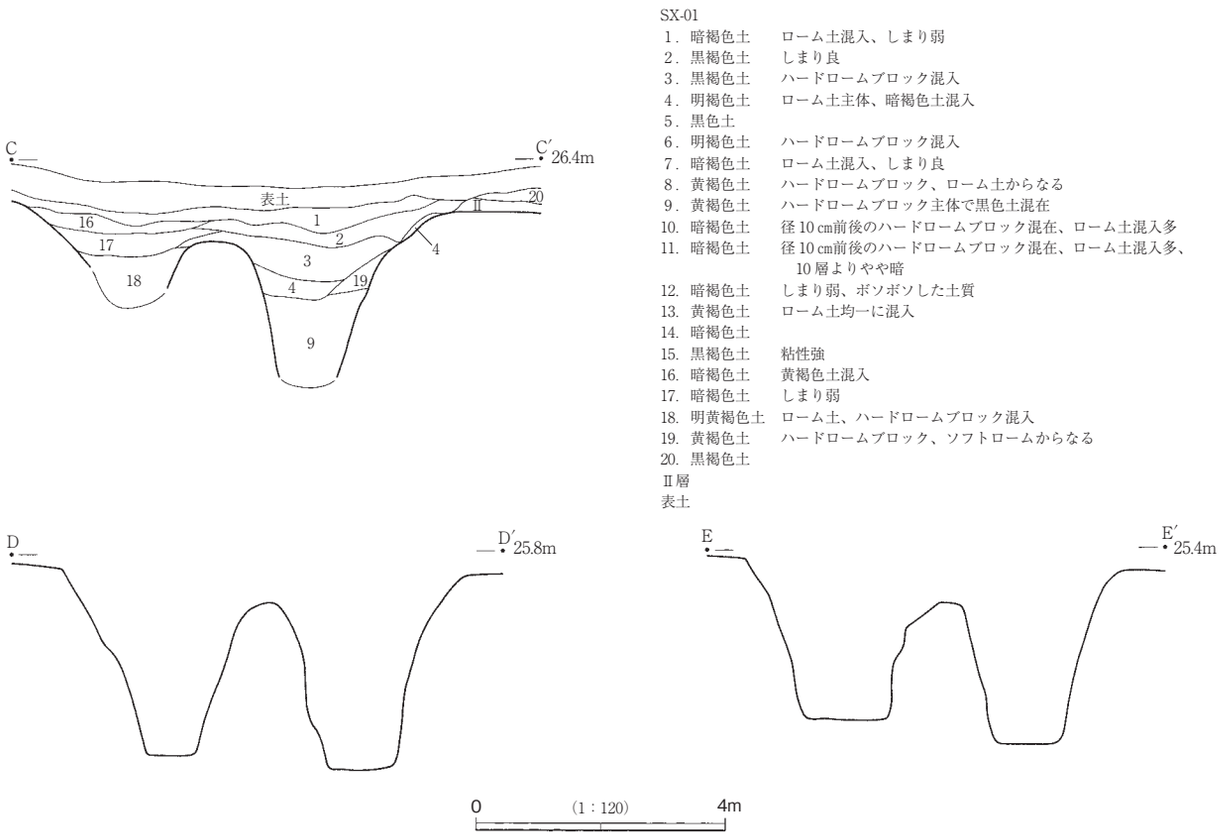
SD-05野馬土手・堀（第125図・第126図、図版14）

６Uから９Qグリッドに位置する。北側から入り込む谷の東側に沿って南西方向へ向い、９Sグリッドでほぼ西へ向きを変える。９Qグリッド南西端で南北に走るSD-06と重なるが、一体化せずに２条のまま幅約３mの間隔をおいて、北西方向へ、平行して向かうようである。しかし、北西の先端から先については確認できなかった。確認面で幅2.5m～3.0m、深さ60cm～80cm、断面の形状は船底状である。調査前の観察では溝の西側および北側にやや高い部分が確認されたが、土層断面からは明確な盛土部分は検出されなかった。

SD-06野馬土手・堀（第126図）



第129図　SX-01シシ穴（1）



第130図　SX-01シシ穴（２）

10Ｑから11Ｑグリッドに位置し、ほぼ南北に走る。基部の幅約７ｍの土手状部分が確認されたが、溝が伴うかどうかは不明である。方向的には南側のSX-01シシ穴付近を経由して、SD-07野馬土手・堀へつながる可能性がある。

SD-07野馬土手・堀（第127図、図版14）

14Ｒから14Ｓグリッドに位置し､北西から南東方向へ走る土手状部分および南側に併走する溝からなる。南東端は谷にあたって止まっているようである。土手は、旧表土上に40㎝前後の盛土が確認できた。南側に併走する溝は広い部分で幅２ｍ、深さ80㎝を測る。

SD-08野馬土手・堀（第127図・第128図）

14Ｑから17Ｑグリッドに位置し、ほぼ南北に走る土手状部分および西側に併走する溝からなる。西側の溝は確認面で深さ50㎝前後、幅は２ｍ～３ｍである。

SX-01シシ穴（第129図・第130図、図版15）

12Pから13Ｑグリッドにかけて２条の土坑列を検出した。土坑数は東側が19基、1ｍ程度の間隔をあけて西側が20基の計39基、列の軸方向はＮ-32°-Ｗで、長さ30ｍにわたる。残念ながら北西部分は調査区域外となり、土坑全部の総数は不明である。土坑の規模は、上端で長さ2.3ｍ～ 3.1ｍ、幅0.8ｍ～ 1.6ｍ、底面は幅0.3ｍ～ 0.6ｍ、長さ0.8ｍ～ 1.3ｍの範囲である。深さは確認面から2.1ｍ～ 3.0ｍで、深いものは武蔵野ローム層に達している。上辺近くは崩落により形が崩れているものもあるため、当初の正確なプランは

不明だが、形状や規模はほぼ同一と思われる。南東端の２基ずつ計４基以外は、東西の土坑の長軸が一直線上に重ならないように配置されている。

この２条の土坑列全体でシシ穴が構成され、長さ約30m、幅約6.5mであった。

所在地は西から東に向かって緩やかに傾斜している。北側と南東側それぞれ40mほど離れた位置に野馬土手が検出されており、本遺構の東側にも土手等が存在していた可能性も考えられる。

表土層直下の覆土１層・２層からのみ馬骨・馬歯が数多く出土した。土坑列があらかた埋まって窪地状になった状況で遺棄されたと思われる。顎骨と馬歯が目立ち、四肢骨はあまり見られない。いずれも遺存状況が悪く、且つ、ばらばらで出土しており、個体ごとのまとまりは推定できない。埋葬というより投棄が想定される。３層以下の覆土から出土した遺物はなく、シシ穴の構築時期を推定するのは困難である。

馬骨・馬歯に混じって陶磁器片や墓石片も出土した。陶磁器片は近世のものと思われるが、なかには鮮やかなコバルトブルー色の染付けのある近代の陶磁器も含まれていた。墓石片には「安永五」（1776年）の記銘があった。いずれの遺物も破片で接合しても完形品にならなかったことから、元来から破損していたものが、窪地となっていたシシ穴に投棄されたと考えられる。

シシ穴の構築時期は不明であるが、遺物の出土状況から、近世後期から近代にかけて最終的に埋まったと判断される。

近世の遺物（第131図、第53表、図版19・図版20）

広い調査範囲から少量の近世遺物が出土した。１、５、６はSX-01シシ穴、２、３、４はSM-01塚から出土した。

１はSX-01シシ穴の覆土上層から出土した砂岩製の墓石片である。現存する大きさは長さ190.3㎜、幅200.3㎜、厚さ113.3㎜で、重量は4,680ｇであった。「妙法」と「安永五」文字が読み取れる。妙法の冠字を入れるのは、一般的に日蓮宗といわれている。安永五年は1776年である。墓石片はこの１点しかなかったので、すでに損壊していた墓石片がSX-01シシ穴に投棄されたのだと思われる。

２～４は砥石でSM-01塚から出土した。２は長さ146.5㎜、幅26.0㎜、厚さ23.0㎜で、重量は104.8ｇである。頂部に径3.5㎜の孔があり、孔の上半以上が欠損していた。３は長さ112㎜、幅29.5㎜、厚さ30.0㎜で、重量は135ｇである。４は長さ60.5㎜、幅38.0㎜、厚さ15.5㎜で、重量は49.2ｇである。

５はSX-01シシ穴から出土した煙管で、長さ59㎜、径10.5㎜、火口の径16㎜で、重量は8.34ｇである。

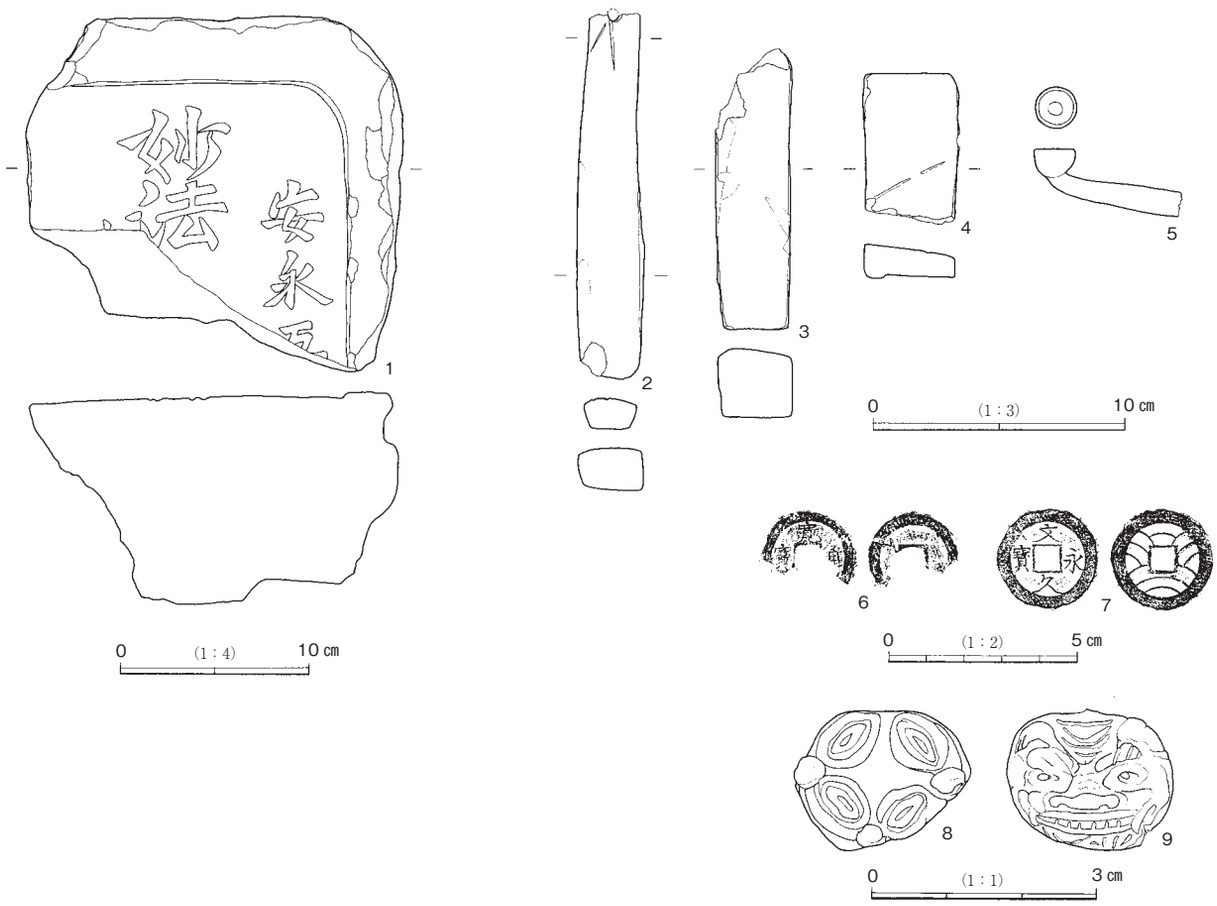
６はSX-01シシ穴から出土した寛永通宝で、残存率50％、縁外径24.3㎜、縁内径19.2㎜、縁厚１㎜、肌厚0.5㎜、重量0.91ｇである。７は近世末期の文久永宝四文銭で、裏面に波文がある。縁外径27.1㎜、縁内径20.3㎜で、郭外径7.8㎜、郭内径6㎜、縁厚1.1㎜、肌厚0.4㎜、重量3.56ｇである。

８と９は泥メンコで、８は四葉模様、９は獅子頭模様である。８の大きさは長さ38㎜、幅46.5㎜、厚さ13.5㎜で、重量は2.93ｇである。９の大きさは長さ38㎜、幅44㎜、厚さ15㎜で、重量は2.56ｇである。

第４節　まとめ

１　旧石器時代（第132図・第133図）

本遺跡では、20か所のブロック等から旧石器時代の石器・礫が790点出土した。これらの石器群につい



第131図　近世の遺物

第53表　東向遺跡の近世遺物

挿図番号	種別	出土遺構	調査	遺物番号	備　　考
第131図1	墓石	SX-01	第９次	SX001-4	「妙法」、「安永五」：安永五年＝1776年
第131図2	砥石	SM-01	第20次	SM001-5	
第131図3	砥石	SM-01	第20次	SM001-5	
第131図4	砥石	SM-01	第20次	SM001-5	
第131図5	煙管	SX-01	第９次	12P69-53	
第131図6	寛永通宝	SX-01	第９次	12P59-21	
第131図7	文久永宝		第14次	境溝-1	
第131図8	泥メンコ	グリッド	第18次	4P64-1	
第131図9	泥メンコ	グリッド	第３次	SD015-1	

注：計測値は本文参照。

ては、その技術形態的な特徴と出土層位から、７枚の文化層に区分した。本節では、石器群の特徴を文化層ごとに概観し、まとめとしたい。

第１文化層は、立川ローム層Ⅸ層下部に包含される石器群であるが、16Q-Aブロックから４点の石器が出土したにすぎない。その内容は、珪化した頁岩（D類）による中型の石刃１点と安山岩による不定型の剥片３点である。いずれも遺跡内で製作された形跡のない搬入品と考えられるが、詳細は不明である。

第２文化層は、立川ローム層Ⅸ層上部からⅦ層にかけて包含される石器群で、中規模なブロック２か所（14Q-A・Bブロック）と小規模なブロック２か所（４O-A、10Q-Aブロック）から225点の石器・礫が出土した。このうち、14Q-A・Bブロックは相互に隣接しており、安山岩と流紋岩の中に母岩の共有関係がある。

本文化層の石器組成は、ナイフ形石器10点、削器１点、楔形石器２点、加工痕ある剥片８点、使用痕ある剥片７点、石刃６点、敲石類１点と剥片170点、砕片10点、石核９点、礫１点である。ナイフ形石器は、中型の石刃を素材とする基部調整（４）、不整形の縦長剥片や横長剥片を素材とする１側縁調整（３・５）とともに、小型品（７～11）が数例見られる。

小型品は、安山岩とチャートによるものであるが、前者は厚手の剥片を石核の素材として、主に小口部分に作業面を設定し、打面再生を伴いながら、小型の石刃ないしは縦長剥片を生産する技術に関連する。こうした技術は、同じ西八千代北部地区の事業地内にある八千代市西芝山遺跡や同西芝山南遺跡、同北海道遺跡第３文化層、印西市泉北側第３遺跡第２文化層など、Ⅸ層上部からⅦ層にかけて包含される石器群に散見され、さらに後出する香取郡多古町千田台遺跡、市原市草刈遺跡第５文化層など、Ⅵ層の石器群にも含まれている。石材は、安山岩、東北産頁岩を含む各種頁岩類や黒曜石など多様なものが利用されており、東北産頁岩や北関東産黒色頁岩と密接に結びついた「下総型石刃再生技法」ほどには定型化してはいない。小型の石刃を生産する点で、「下総型石刃再生技法」に共通するが、利用期間は環状ブロック群とⅣ下・Ⅴ層の間の時期を中心としており、「下総型石刃再生技法」よりも早くに出現し、後半は併行すると考えられる。

この他のナイフ形石器は、灰白色を呈する粗悪な流紋岩や凝灰岩が用いられている。石刃（12～14）は、珪化した頁岩やホルンフェルスによる中型品で、遺跡内で生産された形跡はない。

石器石材は、黒曜石（A類）３点、安山岩41点、トロトロ石36点、流紋岩103点、頁岩16点、凝灰岩４点、チャート16点、砂岩１点、ホルンフェルス４点である。流紋岩と安山岩には、中・小型の剥片類や砕片が一定量含まれており、母岩数は限定されるが、遺跡内で剥片生産が行われたと考えられる。石材構成は、おおむね栃木県から茨城県北部地域を中心とするものと想定される。

第３文化層は、立川ローム層Ⅴ層からⅢ層下部にかけて包含される石器群で、武蔵野台地における「Ⅳ下・Ⅴ層」の石器群と共通する内容である。大規模なブロック１か所（15R-Bブロック）、中規模なブロック２か所（９L-B、17R-Aブロック）、小規模なブロック４か所（９L-A・C、９M-A、15R-Cブロック）から293点の石器・礫が出土した。

石器組成は、ナイフ形石器５点、槍先形石器１点、掻器11点、削器７点、錐状石器１点、加工痕ある剥片11点、使用痕ある剥片７点、敲石類３点、剥片202点、砕片31点、石核13点、礫１点である。ナイフ形石器は、黒曜石、チャートによる２側縁調整（22）、基部調整（24）、切出形（23・25）が見られる。槍先形石器（21）は、黒曜石A類による横長剥片を素材として、周辺調整によって製作されたものである。房

総半島では、八千代市権現後遺跡第３文化層や同井戸向井遺跡Ｓ－２・３ブロック、同坊山遺跡第２文化層などで、黒曜石Ａ・Ｂ類による周辺調整を主体とする当該時期の槍先形石器が出土しており、本地域における出現時期の様相と考えられる。その他、本文化層を特徴づけるものとして、掻器、削器がある。掻器は、黒曜石Ａ類を主体として、一部黒曜石Ｅ類（伊豆半島柏峠周辺）、安山岩による中型厚手の剥片が素材として用いられており、その多くは素材剥片の末端部に幅の狭い刃部が作られている。その一方で、Ⅳ下・Ⅴ層の石器群に通有の角錐状石器は見当たらない。

石器石材は、黒曜石173点、安山岩62点、トロトロ石１点、頁岩２点、チャート47点、砂岩１点、ホルンフェルス２点、玉髄４点である。黒曜石の大半はＡ類であるが、ナイフ形石器１点はＧ類（信州産の可能性が考えられる）、掻器２点がＥ類（伊豆半島柏峠周辺）など、製品には他の産地のものが混入している。また、ブロックごとに石材構成を見ると、15Ｒ-Ｂブロックでは全体の94％が黒曜石Ａ類、17Ｒ-Ａブロックでは72％が安山岩、９Ｌ-Ａ～Ｃ、９Ｍ-Ａブロックでは全体の数量が少ないものの、チャートが占める割合が高いなど、ブロックごとの変異が大きい。

第４文化層は、立川ローム層Ⅲ層中位に包含される「砂川期」に相当する石器群で、小規模なブロック３か所（11Ｑ-Ａ、12Ｐ-Ａ、13Ｐ-Ａブロック）から39点の石器・礫が出土した。

石器組成は、ナイフ形石器３点、槍先形石器１点、使用痕ある剥片２点、石刃１点、石斧１点、剥片19点、石核６点である。ナイフ形石器（43～45）は、頁岩Ｅ類（黒色頁岩）による小型の石刃ないしは縦長剥片を素材とするもので、素材の一端を断ち切るような斜め整形によって製作されている。関連資料に、石刃や縦長剥片（46・47）がある。また、黒曜石Ａ類、頁岩Ｅ類による剥片、石核が数点あるが、いずれも石刃生産に関連する資料である。槍先形石器（42）は、黒曜石Ａ類による両面調整で、横断面がカマボコ形を呈する厚手の大型木葉形である（下半部は、欠損後に再加工）。

本地域における当該期の槍先形石器は、①四街道市御山遺跡第Ⅷａ文化層や松戸市上貝塚貝塚に代表される、先端部周辺に面取りをもつ中型で横断面が凸レンズ状を呈する両面調整（男女倉型有樋尖頭器）と、②佐倉市御塚山遺跡第７地点第２文化層、市原市武士遺跡第７文化層Ａ１のように面取りを持たない中型両面調整とが見られる。石材は、①に黒曜石（高原山産、信州産）が多いものの、①、②ともに各種頁岩類や安山岩、流紋岩が用いられている。本遺跡の資料は、高原山産黒曜石で製作されている点では特例ではないが、大型厚手である形態は特異である。また、当該期は、ナイフ形石器、石刃と槍先形石器との石材は異なることが多いが、本遺跡では、石刃用の石核にも槍先形石器と同じ石材（高原山産黒曜石）が利用されており、この点も一般的ではないようである。

その他、小型の石斧も類例のない資料である。素材はホルンフェルスによる扁平な小円礫と考えられ、下端に粗い剥離による刃部がつけられている。

石器石材は、黒曜石15点、安山岩１点、流紋岩１点、頁岩13点、凝灰岩１点、ホルンフェルス２点で、黒曜石はＡ類、頁岩はＥ類が主体である。

第５文化層は、立川ローム層Ⅲ層上位に包含される石器群で、小規模なブロック１か所（８Ｋ-Ａブロック）から11点の石器群が出土した。石器組成は、削器１点、使用痕ある剥片１点、剥片９点と少数であるが、剥片の中に玉髄（黄玉石）による「東内野型尖頭器」の削片が含まれることから、第４文化層（砂川期石器群）、第６文化層（細石刃石器群）から分離した。特に、第６文化層の８Ｋ-Ｂブロックとは平面分布が重なっており、垂直分布でも明瞭に分かれなかったので、石器の形態と石材から分離した。石器石材

は、黒曜石（Ａ類）１点、安山岩５点、頁岩１点、玉髄４点である。

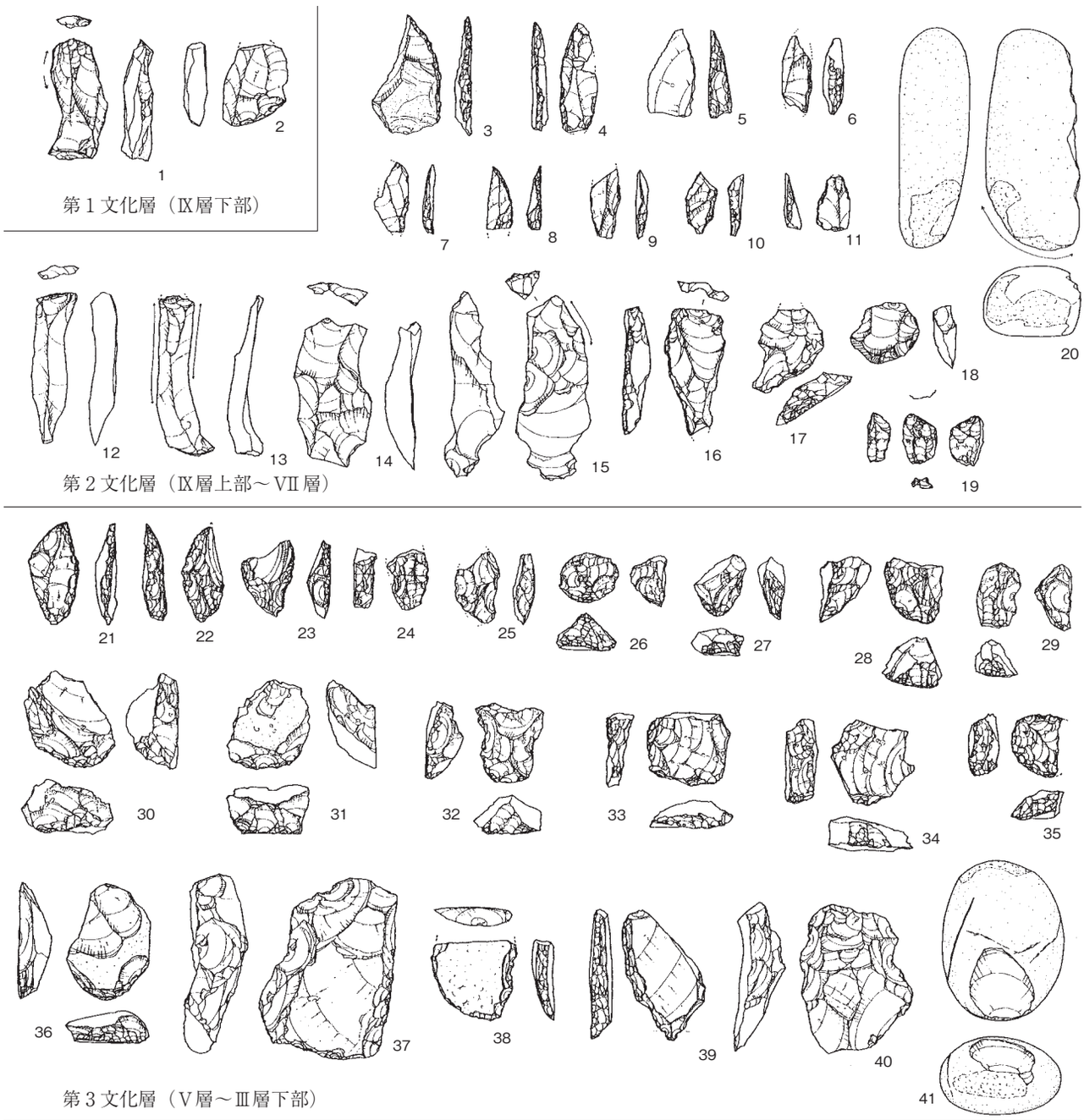
第６文化層は、立川ローム層Ⅲ層上部から黒色土にかけて包含される石器群で、中規模なブロック１か所（15Ｒ-Ａブロック）と小規模なブロック１か所（８Ｋ-Ｂブロック）から80点の石器・礫が出土した。石器組成は、細石刃16点、細石刃核２点、ナイフ形石器１点、掻器２点、削器２点、使用痕ある剥片５点、敲石類１点、剥片44点、砕片５点、礫２点である。細石刃核は、黒曜石Ｂ類による野岳・休場型２点で、この他に流紋岩による細石刃核の破片と考えられる資料がある。また、ストーンリタッチャーとした礫が注目される。これは、扁平な円礫の端部に短い線状の傷が連続しており、平坦面には摩耗痕がある石器である。なお、安山岩によるナイフ形石器（72）や削器（74）は、第３文化層に帰属する可能性もある。

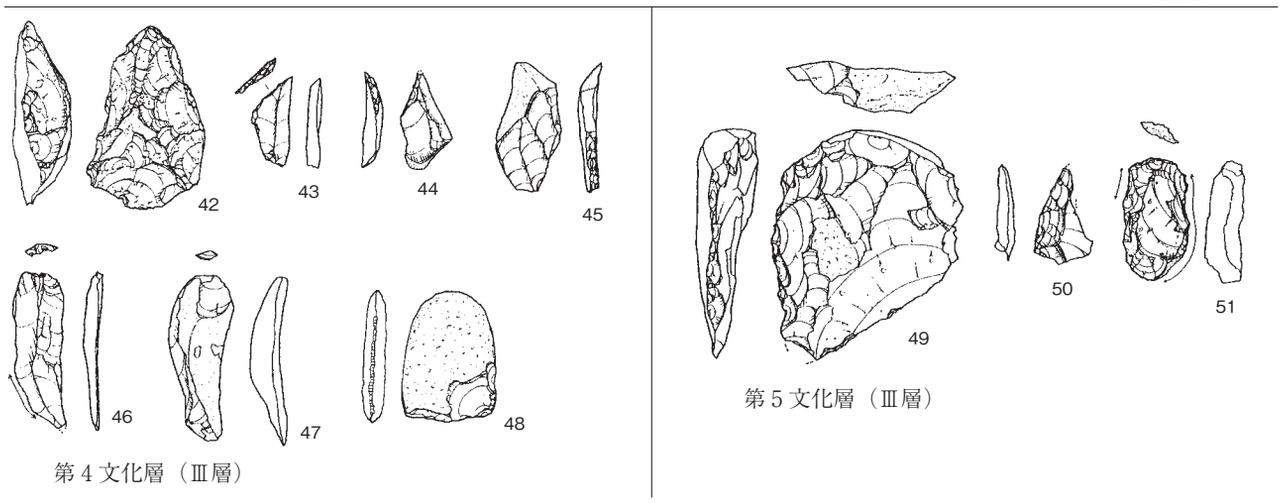
第７文化層は、立川ローム層Ⅲ層上部から黒色土にかけて包含される。小さなブロック１か所（16Ｒ-Ａブロック）と、ブロックに区分できなかったが16Ｒグリッドの広い範囲から114点の遺物が出土した。

石器組成は、槍先形石器11点、掻器17点、削器３点、楔形石器１点、加工痕ある剥片７点、使用痕ある剥片５点、敲石類１点、剥片54点、石核12点、礫３点である。槍先形石器は、大・中型の柳葉形（76 ～ 79）が特徴的であり、これに中型の木葉形（80 ～ 82）が加わる。また、槍先形石器の未成品の可能性があるが、厚手の剥片を素材として、先端部を中心に加工した特殊な一群（99･100）がある。その他、小型の掻器（83 ～ 98）がまとまっている。槍先形石器の石材は、柳葉形に頁岩Ｅ類（黒色頁岩）およびＸ類（詳細不明）、木葉形にホルンフェルスと凝灰岩、特殊な一群に安山岩が用いられている。掻器については、硬質緻密な流紋岩、頁岩Ｃ類（嶺岡産）を含む各種頁岩類、安山岩、玉髄等多種多様な石材が用いられている。第３文化層から掻器がまとまって出土したが、形態的特徴に目立った差異はなく、使用石材の傾向において、第３文化層では黒曜石Ａ類の割合が高い点で異なっている。掻器以外の石器を含めて、石器形態は多様であるが、製品は、安山岩による石器の一部を除いて、基本的には搬入品である。これは、石材原産地＝製作地と消費地とが分離している土器出現期の遺跡にあっては、一般的なあり方と考えられる。

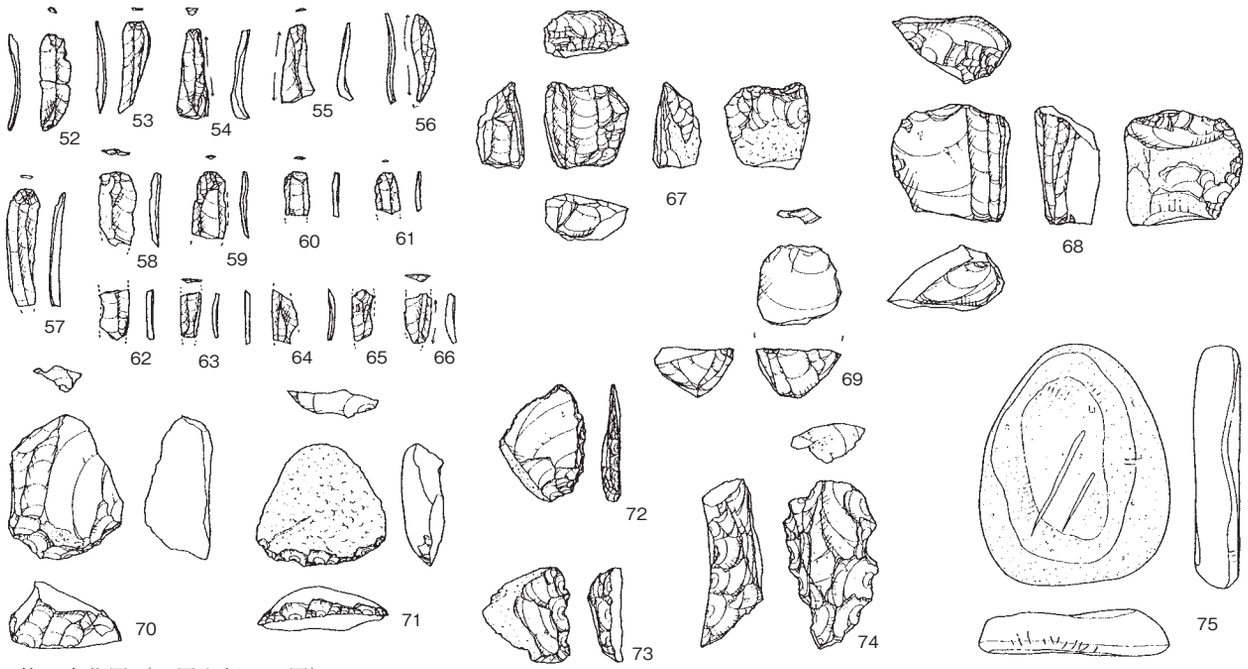
石器石材は、黒曜石10点、安山岩37点、流紋岩５点、頁岩24点、凝灰岩１点、チャート２点、砂岩６点、ホルンフェルス13点、玉髄13点である。黒曜石は、Ｆ類（神津島産）による剥片類で、いずれも搬入品である。安山岩は、褐色に風化した、拳よりも小振りの円礫を利用したものが多く、上総丘陵砂礫層を含む河川下流域に由来すると考えられるが、槍先形石器の調整剥片の中には青みを帯びた灰色の例があり、北関東産の可能性がある。

第７文化層の石器群は本遺跡を代表する重要な資料である。槍先形石器の形態的特徴から土器出現期にあたると考えられ、千葉市弥三郎第２遺跡や柏市元割遺跡、富里市南大溜袋遺跡などと関連する可能性がきわめて高い。その一方で、抉入削器や石斧など当該期通有の石器が見られず、反面、小型の掻器がまとまっている点は特異である。小型の掻器については、本石器群よりも後出の土器出現期の後半期（多縄文土器）に出土例が多く、また、前半期でも隆線文土器には一定数が伴うものの、それよりも古期では、東京都あきる野市前田耕地遺跡などの諸遺跡に少量含まれるだけで、まとまって出土した遺跡の類例は乏しい。房総半島では、香取郡多古町林小原子台遺跡で当該期に帰属すると想定される掻器がまとまっている例もあり、今後注視していく必要があろう。

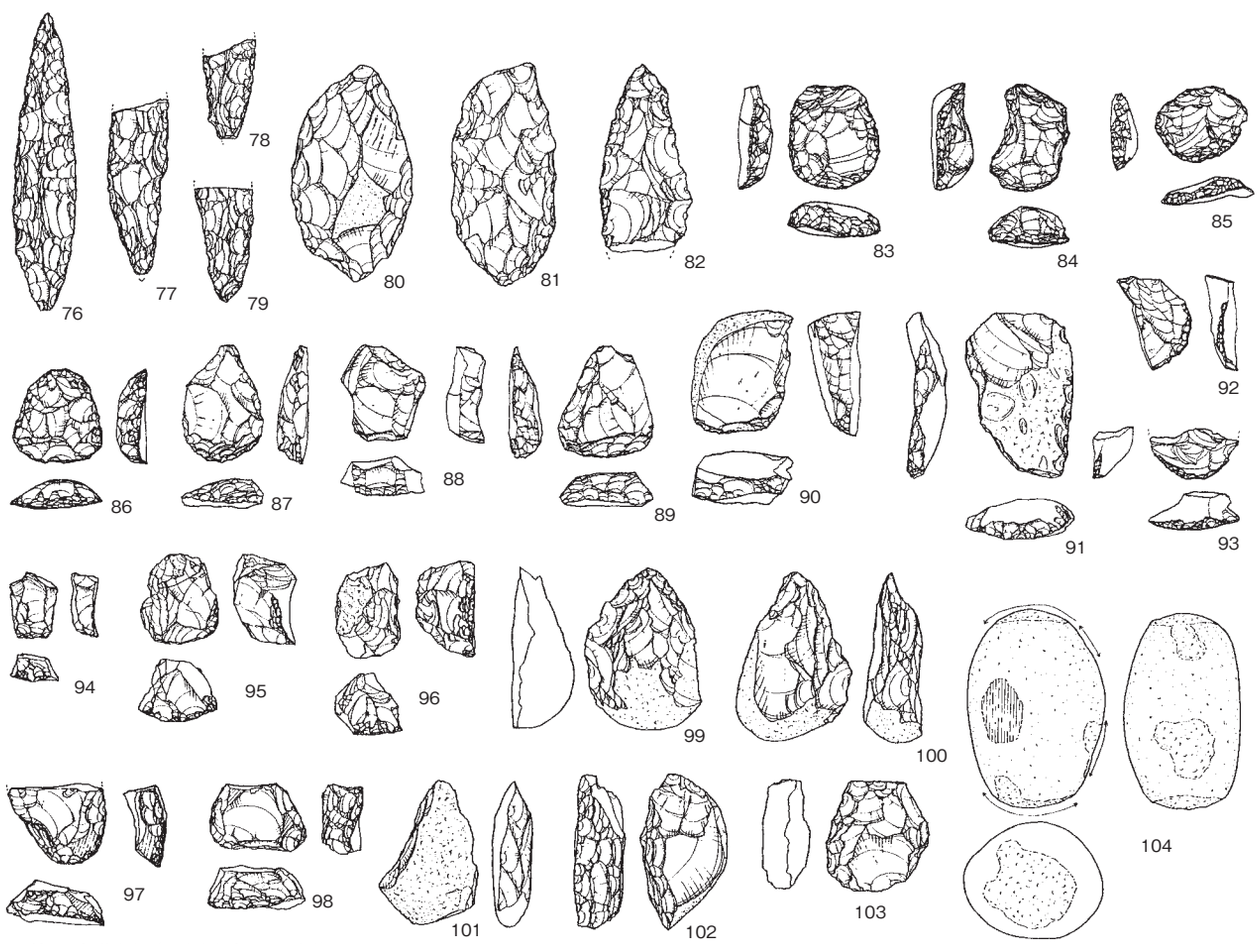




第132図　東向遺跡旧石器時代石器群の変遷（１）



第６文化層（Ⅲ層上部～Ⅱ層）



第７文化層（Ⅲ層上部～Ⅱ層）

第133図　東向遺跡旧石器時代石器群の変遷（２）

文献
（財）千葉県文化財センター　1984『八千代市権現後遺跡－萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅰ－』
（財）千葉県文化財センター　1986『多古工業団地内遺跡群発掘調査報告書－林小原子台・巣根・土持台・林中ノ台・吹入台』
（財）千葉県文化財センター　1987『八千代市井戸向遺跡－萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅳ－』
（財）千葉県文化財センター　1993『八千代市坊山遺跡－萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅵ－』
（財）千葉県文化財センター　1993『佐倉市南志津地区埋蔵文化財発掘調査報告書２－御塚山遺跡第７地点の調査－』
（財）千葉県文化財センター　1994『四街道市御山遺跡（１）－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－』
（財）千葉県文化財センター　1996『主要地方道松戸野田線埋蔵文化財調査報告書』
（財）千葉県文化財センター　1996『市原市武士遺跡１－福増浄水場埋蔵文化財調査報告書－』
（財）千葉県文化財センター　2003『千原台ニュータウンＸ－市原市草刈遺跡（東部地区旧石器時代）－』
（財）千葉県教育振興財団　2007『西八千代北部地区埋蔵文化財調査報告書１－八千代市西芝山遺跡－』
（公財）千葉県教育振興財団　2012『西八千代北部地区埋蔵文化財調査報告書２－八千代市西芝山南遺跡－』
（財）千葉市文化財調査協会　1992『土気南遺跡群Ⅱ　弥三郎第２遺跡』
千葉県　2000『千葉県の歴史　資料編考古１（旧石器・縄文時代）』
戸田哲也　1973「千葉県南大溜袋遺跡の調査」『考古学ジャーナル』第78号
東京都教育委員会　2002『前田耕地遺跡－縄文時代草創期資料集－』

２　縄文時代

縄文時代の遺構は、陥穴６基、土坑９基が点在していた。遺構にともなう遺物が少なく、その年代を比定するのは困難だった。住居跡などが検出されず東向遺跡はおもに居住空間の後背地だったと考えられる。

西八千代北部地区の他の遺跡を見てみると、八王子台遺跡で６軒の住居跡からなる西側遺構群、11軒の住居跡からなる中央－東側遺構群が検出され、これらの遺構群は合せて１つの集落と見なされた。おもに縄文時代中期後半の加曽利Ｅ式の土器が出土し、きわめて短期間に形成された集落と報告された。その他に、西芝山遺跡で陥穴１基、西芝山南遺跡で陥穴１基、坪井向遺跡で陥穴３基、川向遺跡で陥穴２基が検出された。八王子台遺跡の集落と、他の遺跡で検出された陥穴との直接的な関連性は不明である。

東向遺跡以外にも、縄文時代早期以後の各時期の縄文土器が少量ながら出土していて、まったく人跡が絶えた状態ではなかった。八王子台遺跡の集落がきわめて短期間に形成された集落だったことを考慮すると、西八千代北部地区は、縄文時代に人跡の絶えたことはなかったが、かといって長期にわたって人間の居住した場所でもなかったといえるだろう。

３　平安時代

平安時代の住居跡が２軒検出された。両者ともに遺存状態が悪く、SI-001住居跡は西半分、SI-002住居跡はほとんど攪乱されていた。SI-002住居跡から出土した土器類は、小片のために詳しいことはわからないが、SI-001住居跡から出土した土器類は器種構成が明らかで、ある程度時期を絞り込むことが可能である。土師器坏類は、ロクロ成形で、底面には回転糸切り痕が残る。このなかで特徴的なのが、５・６の土師器坏である。器高は３㎝以下で、径高指数30以下になり、坏というよりも小皿に近い形態になり、とくに６にそれが顕著である。通常、この種の器形は10世紀後半以降に出現すると考えられている。高台付坏

にしても、高台部の立ち上がりが低い傾向がある。甕は、７の底面には回転糸切り痕が残り、その周囲をヘラケズリしていることからもわかるように、ロクロ成形によるものである。８も底部こそ欠損しているが、器形・調整技法の特徴から、７と同種の甕と考えられる。これらはそれまでの常総型や武蔵型の土師器甕が衰退していくなかで、９世紀後半に出現する在地色の濃い甕になる。以上から、SI-001住居跡は10世紀後半から11世紀前半と考えておきたい。

西八千代北部地区では東向遺跡以外に、西芝山遺跡で１軒、八王子台遺跡で７軒、坪井向遺跡で１軒の平安時代の住居跡が検出された。住居跡は１辺の長さ３ｍ～４ｍの方形ないしは横長の長方形をしていて、いずれも隣接することなく、かなりの距離をおいて単独に点在していた。出土した遺物は土師器でほぼ同じような特徴を示し、時期的には同じような時期を想定しておきたい。

西八千代北部地区では平安時代前半に小規模な竪穴住居が点々と営まれていた。当時は氏族社会が基本だったので、小規模な住居で孤立して生活を営むのは困難だったと思われる。この種の小規模な住居跡は、通年的な日常生活の場所としてではなく、季節的もしくは一時的な作業小屋のような性格が想定されるだろう。

４　近世（第134図）

近世の遺構として塚、野馬土手・堀と溝、シシ穴が検出された（第109図参照）。

SM-01塚は遺跡範囲の北端付近にあり、東向遺跡北側に隣接する高本集落の境界に位置していた。塚の築造年代は不明であるが、現在でも信仰の対象になっているようである。西八千代北部地区の東方に金塚所在塚があり、近世の麦丸村と大和田新田との境界に位置するように造られていた。同じく西八千代北部地区の東方に尾崎群集塚第10号塚があり、この塚も吉橋村と大和田新田との村境付近に立地していた。そして東向遺跡でも、村の境界に塚が立地することが確認できたといえよう。

野馬土手･堀は、遺跡範囲中央南側の標高のやや高い部分から、四囲に派生するかのように伸びていた。つまり中央南側の小集落のある平坦面を囲むように、SD-05が北側、SD-06とSD-07が西側から南東側に位置している。さらにやや距離をおいて西側にSD-03、南西側にSD-08がほぼ等高線にそって伸びていた。

SD-05の北西側に位置するSD-04溝には土手がともなっていないが、元来土手と溝とが一体となっていて、後世に土手が取り除かれた可能性も考えられる。北側から入る小さな谷を、SD-04とSD-05がＪ字型に囲むように見受けられる。SD-05とSD-06は連結せず、北西端の角部分は幅約３ｍの間隙が設けられていた。中央南側の平地から北西へと動物を追い込んでSD-05とSD-06との間隙で捕らえる。あるいは群をまとめる目的で、抜け道のような空間をわざわざ設けたのだろうか。SD-06とSD-07の中間から野馬土手・堀が検出されなかったが､付近は小集落の縁辺に相当し家屋などの建設によって消滅したのかもしれない。

これらの野馬土手・堀の構築年代を知る手がかりはなく、またどのような畜養作業を目的にしたのか具体的に想定するのは困難である。

野馬土手・堀の周辺で検出されたSX-01シシ穴は特異な遺構であった。東向遺跡の他に、千葉県内の３遺跡から類似した遺構が報告されている（第134図、押沼第１遺跡のみ縮尺1:1,000、その他は縮尺1:500）。

白井市根にあった根シシアナと同じく白井市にあった唐沢シシアナは、ほぼ同じ構造であった[1)]。長さ約30m、幅約12mの範囲内に、長さ約８ｍ、幅約2.5m、深さ約１ｍの細長い土坑８基が連続して並列に設置されていた。周囲に排土を利用して土手が築かれていた。位置的には牧に近接し、集落からは少し離れた場所にあった。遺構の時期、機能などの詳細は不明であるが、鹿や猪などの農耕害獣を駆除する施設

とされた。

千葉市と市原市が接するちはら台ニュータウンの造成工事で押沼第１遺跡が調査され、シシ穴が検出された[2)]。長さ170mの２条の土手の間に、長さ約７ｍ、幅約３ｍ、深さ約２ｍの細長い土坑が44基連続して並列に設置されていた。周囲の土手は土坑の排土を利用して盛土したもので、その下部に宝永の火山灰層があった。つまりシシ穴が造られた時期は、宝永四年（1707）の富士火山の噴火以後だった。位置的には下総の牧から相当距離があり、近隣の集落からは少し離れていた。白井市のシシ穴と比較すると、内部の細長い土坑の規模と相互に接する間隔は両者ともにほぼ同じであるが、押沼第１遺跡のシシ穴はきわめて長蛇な土坑列だった。押沼第１遺跡のシシ穴も害獣駆除の施設とするならば、土坑列８基と土坑列44基とではかなり様相が違っているので、あるいはシシ穴としての機能も異なっていたのかもしれない。

東向遺跡のシシ穴は、上記した３遺跡と形態的に異なる。東向遺跡のシシ穴は長さ約30m、幅約６ｍで、内部には長さ約２ｍ～３ｍ、幅１ｍ～1.6m、深さ約２ｍの土坑39基が２条の並列をなして設置されていた。白井市の例と比べて長さはほぼ同じだが、幅は半分しかない。白井市と押沼第１遺跡のシシ穴の内部に掘られた土坑はほぼ同じ形態で、長さ７ｍ～８ｍの細長いものだった。それに対して東向遺跡のシシ穴には、長さ２ｍ～３ｍの楕円形もしくは隅丸長方形の小規模な土坑が掘られていた。これらシシ穴の土坑にはしっかりとした規格性がうかがえるので、それぞれ異なる動物を想定して、それに適した大小の土坑を選択してシシ穴を掘ったと考えられる。すなわち白井市や押沼第１遺跡では鹿や猪などの大型獣を対象に、そして東向遺跡ではより小型な犬などの動物を対象に造られた可能性がある。

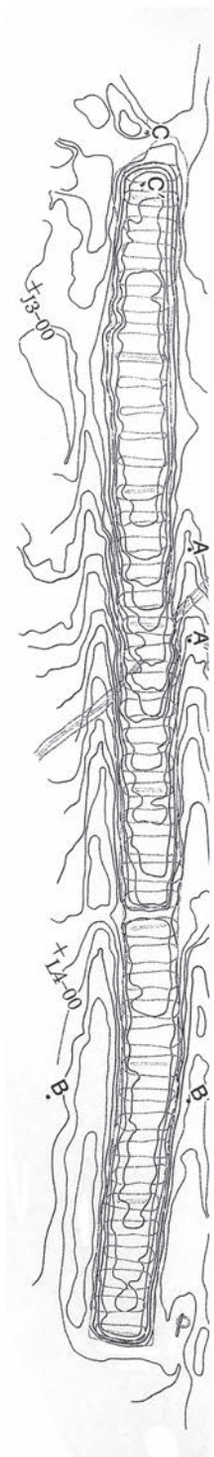
牧の研究者である松下邦夫氏は、シシ穴と異なる直径１ｍ～２ｍ、深さ１ｍ～２ｍの穴を一面に数多く掘った「狼落し穴」、「犬落し穴」について記述している。この種の犬落し穴は、野馬の繁殖期である春に幼馬を襲う野犬退治を目的に掘られ、シシ穴とは異なって、野馬放牧経営の面から必要な施設として、野馬御用役所が野付村農民を督励して作らせたものだろうと推測している。野馬の安全のために、牧内には犬落し穴は作らないことになっていたというから[3)]、牧から外れた場所に位置する東向遺跡に、犬落し穴が掘られていてもおかしくないだろう。

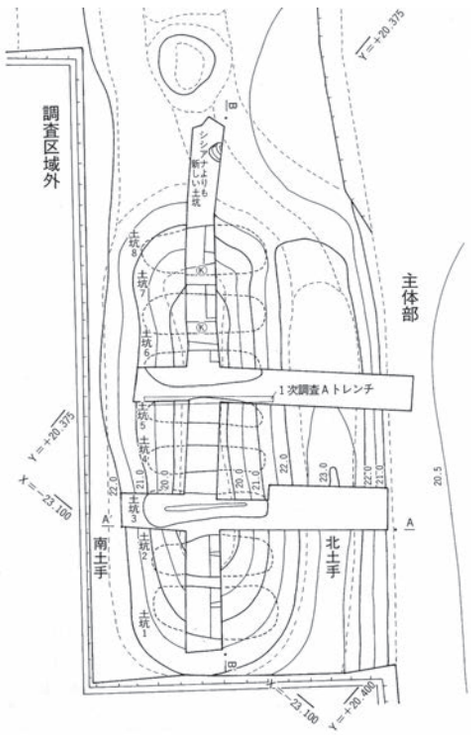
別の形態の犬落し穴も存在したようである。直径10mの深くて丸い大きな池があり、真ん中に丸い島が浮き上がっていた。真ん中の島に馬の肉をおいて野犬をおびきよせ、肉に食らいついた野犬は池に落ちたまま逃げられず、鉄砲で撃たれたりしたという。多数の土坑からなる犬落し穴とは違い、このタイプの犬落し穴は大きな池と島の組み合わせからなっている。もしもこのタイプの犬落し穴が発掘で見つかるとするならば、ドーナツ状の大きな土坑として検出されるであろう。

東向遺跡で検出されたSX-01シシ穴は、他と比較して小型の土坑を多数並べていて、松下氏の推測する犬落し穴であった可能性がうかがえる。他の類例や文献資料などがまだ僅少で、また犬落し穴の形態には別の種類も想定されているので、SX-01の遺構名称について、とりあえず、「シシ穴」としておく。

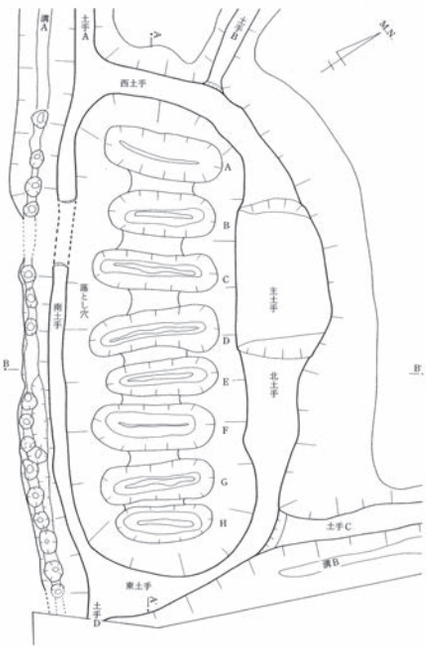
長らく続いた江戸幕府の牧が、19世紀中頃に明治維新政府によって廃止され、代わって農地開墾が盛んとなった。SX-01シシ穴は、害獣駆除の用途を失い斃馬の頭部やもろもろのゴミ捨て場となったのだろう。

注１　白井町教育委員会　1979『白井町根シシアナ遺跡発掘調査報告書』
　　白井市教育委員会　2003 『根シシアナ遺跡（第２次)』
　　（財）千葉県文化財センター　1989 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅸ』
２　（財）千葉県文化財センター　2003 『千原台ニュータウンⅨ－市原市押沼第１・第２遺跡（上層）－』
３　青木更吉　2003 『小金牧を歩く』 崙書房

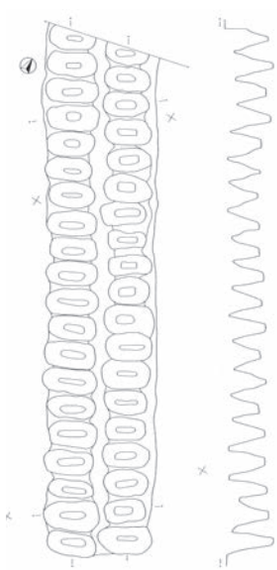




根シシアナ



唐沢シシアナ



東向遺跡

押沼第１遺跡

0 (1：500) 20m

0 (1：1,000) 50m

第134図　県内のシシ穴集成図

第３章　坪井向遺跡

第１節　調査の経過

坪井向遺跡は西八千代北部地区の最南端に位置する。遺跡全体の面積は約70,000㎡である。標高25m～26mのほぼ平坦な地形で、遺跡の中央がやや凹んでいる（第135図）。調査前の現況は、畑、山林、荒蕪地である。

発掘調査は平成９年度（1997年度）に始まり、平成22年度（2010年度）まで実施された。この間、調査は計10回に及び、総面積は約52,000㎡に達している（第136図～第138図）。確認調査（上層：計5,421㎡、下層：計1,621㎡）の結果、上層については本調査に至らなかったが、下層については第４次調査において、遺物集中地点が２か所（本調査面積601㎡）検出されている。以上の調査結果が示すように、相対的に遺構密度の低い遺跡といえよう。

一方、屋内の整理作業は平成19年度（2007年度）に始まり、平成25年度（2013年度）まで実施された。

以上の発掘調査・整理作業の実施期間・担当職員・内容は以下のとおりである。

（発掘調査）

平成９年度

（１）坪井向遺跡

期　間　平成９年12月１日～平成10年３月30日

組　織　調査部長　西山太郎、北部調査事務所長　折原　繁

担当者　研究員　花島理典・猪股昭善

内　容　上層確認調査　557㎡／5,566㎡、下層確認調査　223㎡／5,566㎡

平成11年度

（２）坪井向遺跡

期　間　平成12年３月１日～平成12年３月29日

組　織　調査部長　沼澤　豊、北部調査事務所長　折原　繁

担当者　研究員　花島理典

内　容　上層確認調査　1,130㎡／11,300㎡、下層確認調査　452㎡／11,300㎡

平成12年度

（３）坪井向遺跡

期　間　平成13年１月５日～平成13年１月31日

組　織　調査部長　沼澤　豊、北部調査事務所長　石田廣美

担当者　上席研究員　落合章雄

内　容　上層確認調査　580㎡／4,400㎡、下層確認調査　180㎡／4,400㎡

平成14年度

（４）坪井向遺跡

期　間　平成14年９月２日～平成15年３月25日

組　織　調査部長　斎木　勝、北部調査事務所長　古内　茂
担当者　研究員　沖松信隆
内　容　上層確認調査　1,754㎡／17,149㎡、下層確認調査　348㎡／17,149㎡、下層本調査　601㎡
平成15年度
（５）坪井向遺跡
期　間　平成15年４月７日～平成15年４月22日
組　織　調査部長　斎木　勝、北部調査事務所長　古内　茂
担当者　北総調査室長　蔀　淳一
内　容　上層確認調査　192㎡／1,750㎡、下層確認調査　78㎡／1,750㎡
平成17年度
（６）坪井向遺跡
期　間　平成17年７月１日～平成17年７月29日
組　織　調査部長　矢戸三男、北部調査事務所長　古内　茂
担当者　主席研究員　雨宮龍太郎
内　容　上層確認調査　257㎡／2,150㎡、下層確認調査　88㎡／2,150㎡
平成18年度
（７）坪井向遺跡①
期　間　平成18年６月14日～平成18年６月30日
組　織　調査研究部長　矢戸三男、北部調査事務所長　古内　茂
担当者　主席研究員兼副所長　岡田誠造
内　容　上層確認調査　144㎡／1,380㎡、下層確認調査　44㎡／1,380㎡
（８）坪井向遺跡②
期　間　平成19年３月１日～平成19年３月20日
組　織　調査研究部長　矢戸三男、北部調査事務所長　古内　茂
担当者　主席研究員　土屋治雄
内　容　上層確認調査　272㎡／2,712㎡、下層確認調査　112㎡／2,712㎡
平成22年度
（９）坪井向遺跡（22）
期　間　平成22年７月５日～平成22年７月28日
組　織　調査研究部長　及川淳一、北部調査事務所長　野口行雄
担当者　上席研究員　山田貴久
内　容　上層確認調査　415㎡／3,540㎡、下層確認調査　72㎡／3,540㎡
（10）坪井向遺跡（27）
期　間　平成22年９月28日～平成22年10月19日
組　織　調査研究部長　及川淳一、北部調査事務所長　野口行雄
担当者　主席研究員　雨宮龍太郎
内　容　上層確認調査　120㎡／1,164㎡、下層確認調査　24㎡／1,164㎡

（整理作業）

（１）平成19年度

期　間　平成19年４月１日～平成19年８月31日

組　織　調査研究部長　矢戸三男、北部調査事務所長　豊田佳伸

担当者　副所長　髙橋博文、上席研究員　小高幸弘、上席研究員　島田裕之

内　容　整理作業　記録・整理から原稿執筆まで

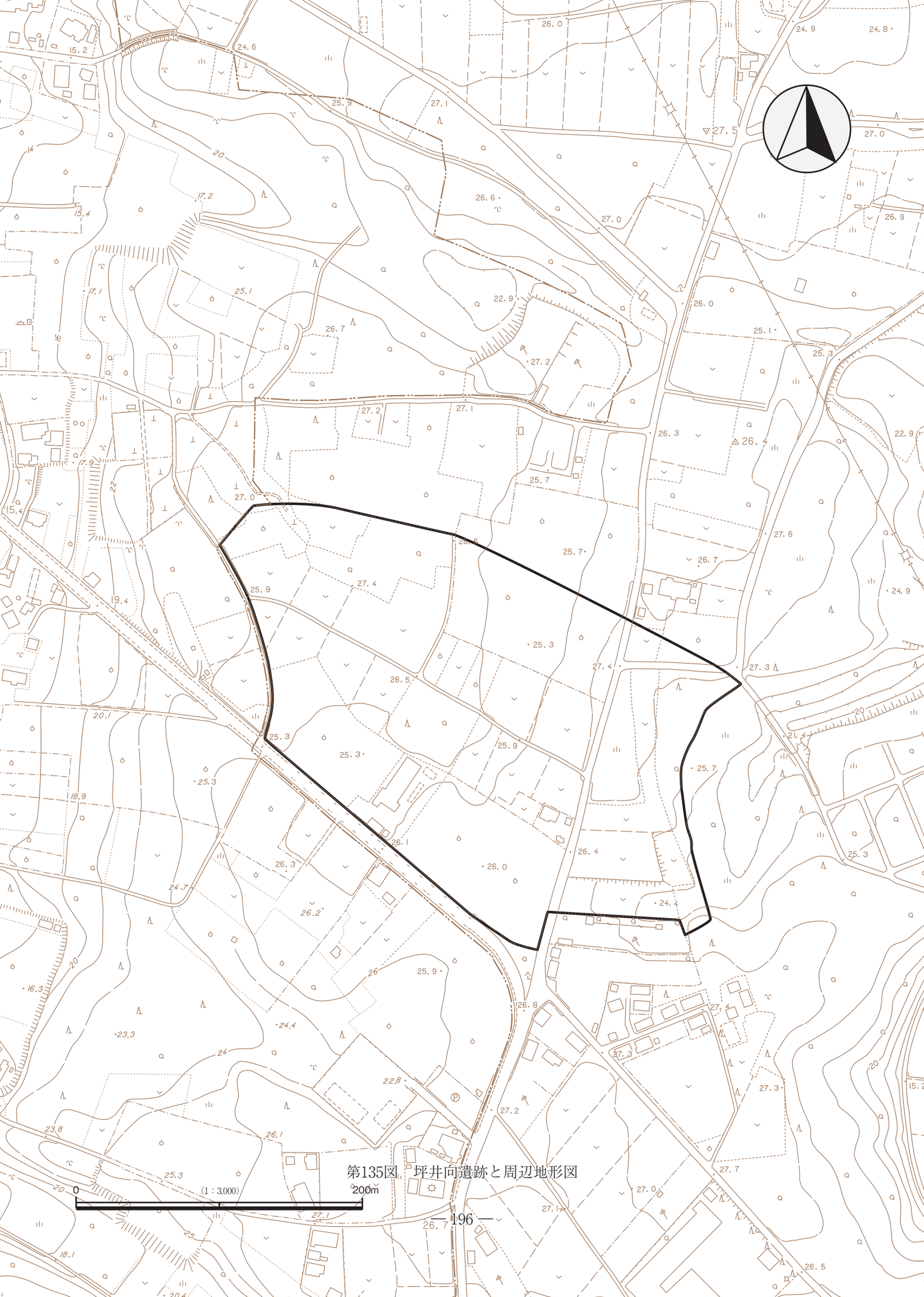
（２）平成25年度

期　間　平成25年４月１日～平成26年３月31日

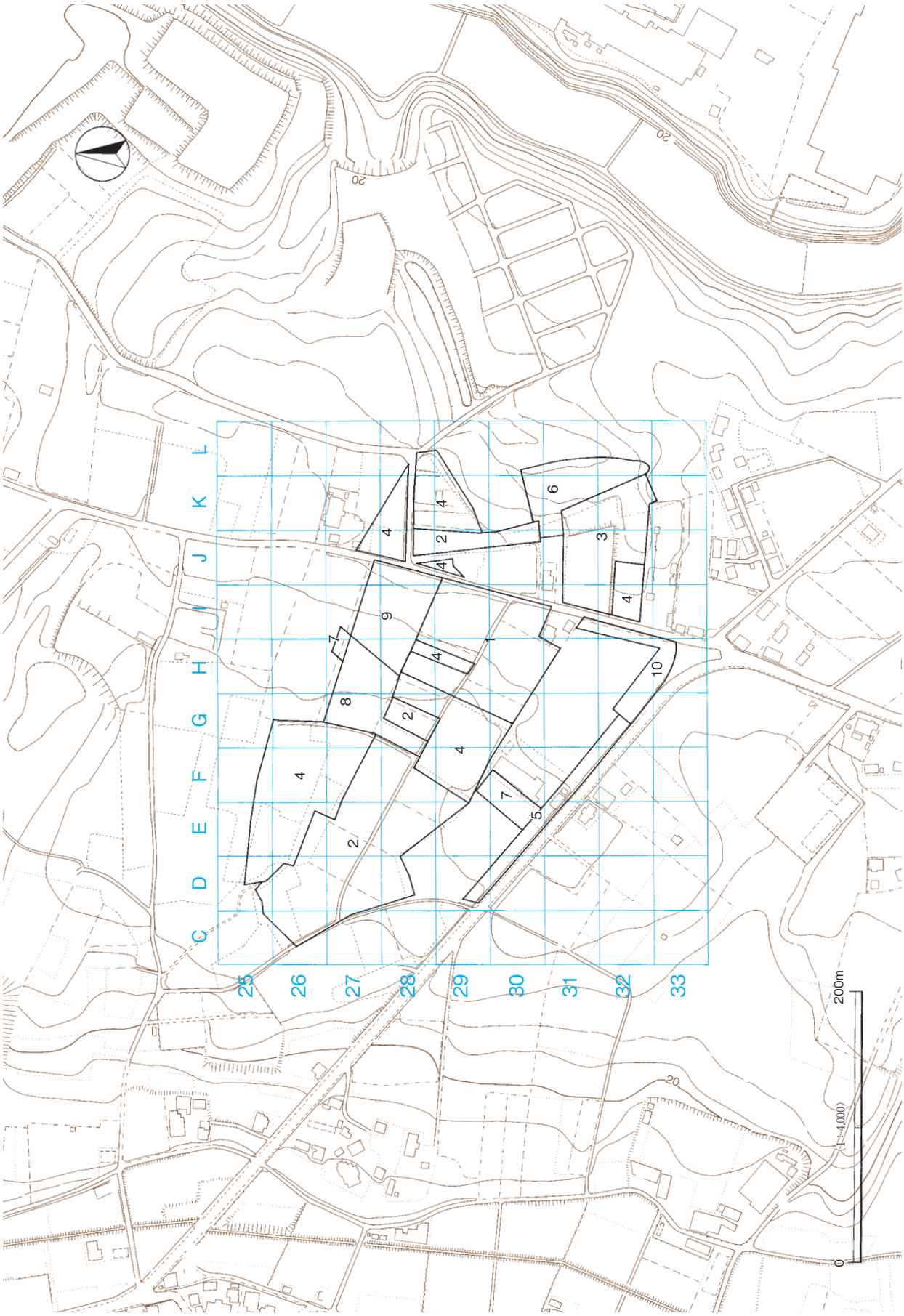
組　織　調査研究部長　伊藤智樹、整理課長　今泉　潔

担当者　主任上席文化財主事　森本和男、上席文化財主事　橋本勝雄

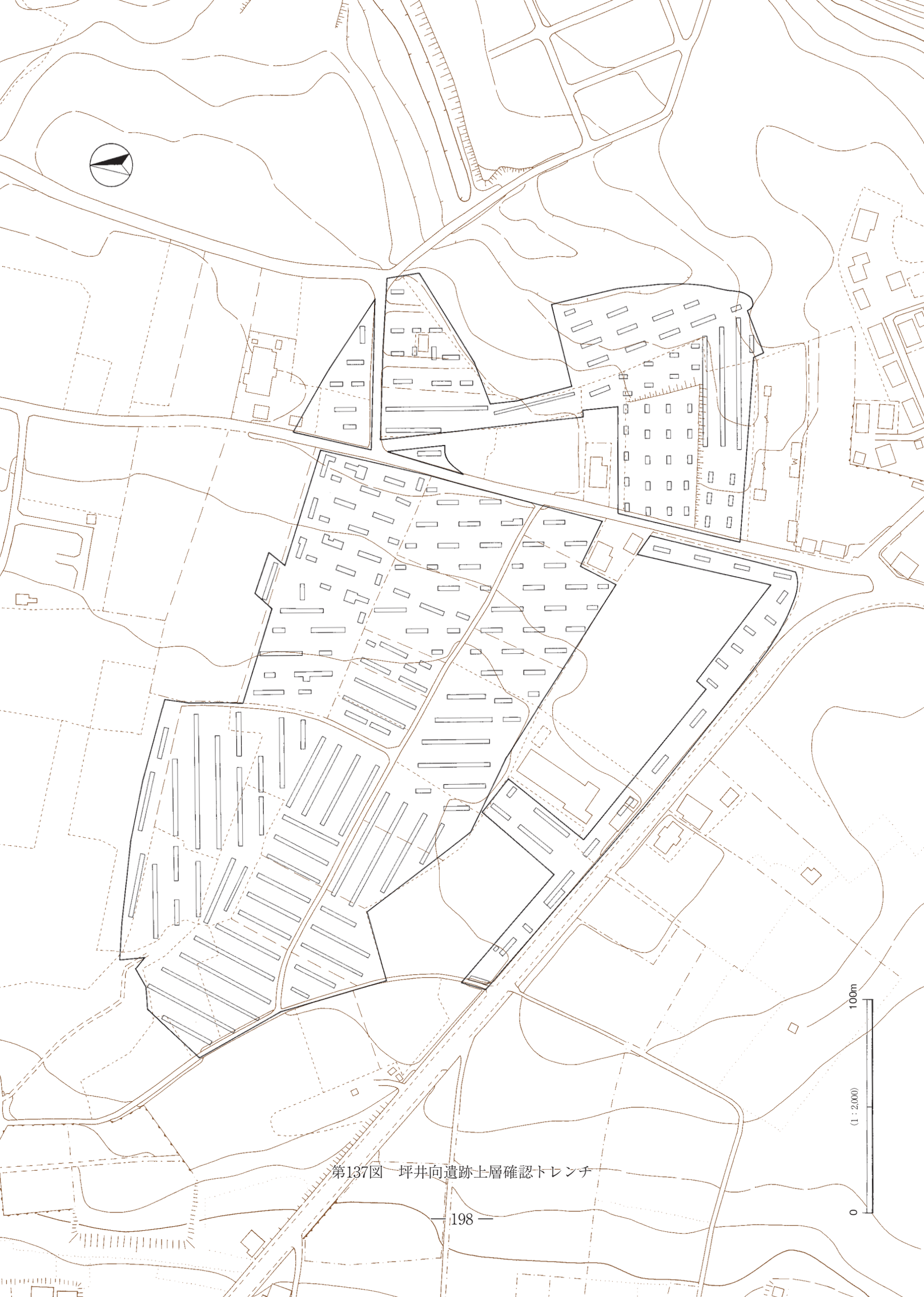
内　容　編集から刊行まで



第135図　坪井向遺跡と周辺地形図



第136図　坪井向遺跡年次別調査範囲とグリッド図



第137図　坪井向遺跡上層確認トレンチ

第138図　坪井向遺跡下層確認グリッドと本調査

第２節　旧石器時代

本遺跡では、台地平坦部から遺物集中地点（ブロック）が２か所検出された。ここでは、これらのブロックを中心として調査成果を順次記述する（第139図）。

両ブロックは同一層準にあり、互いに分布域を接している。石器の接合関係は確認できなかったが、位置関係と母岩別資料の類似性から、ほぼ同時期に営まれた石器製作跡と推定される。

１.第１ブロック（第140図～第142図、第54表、図版21・52 ～ 53）

１）概　　要

西に緩やかに傾斜する台地の平坦部に立地する。標高は約26mである。比較的小規模で遺物量も乏しい。本ブロックの南西側には第２ブロックが接している。

平面分布は長径約3.5m、短径約2.8mのほぼ円形を呈し、遺物分布に特に疎密の差はないが、ナイフ形石器や二次加工ある剥片などの利器が周辺に、石核・剥片類が分布している。同一石材の剥片類が多数分布しており、中には接合資料も１例ある。利器が少なく主として剥片生産の場を反映している。

出土層準は第２黒色帯下部のⅨa層～Ⅸc層であるが、特にⅨc層に密集している。出土遺物の高低差は約0.4mである。

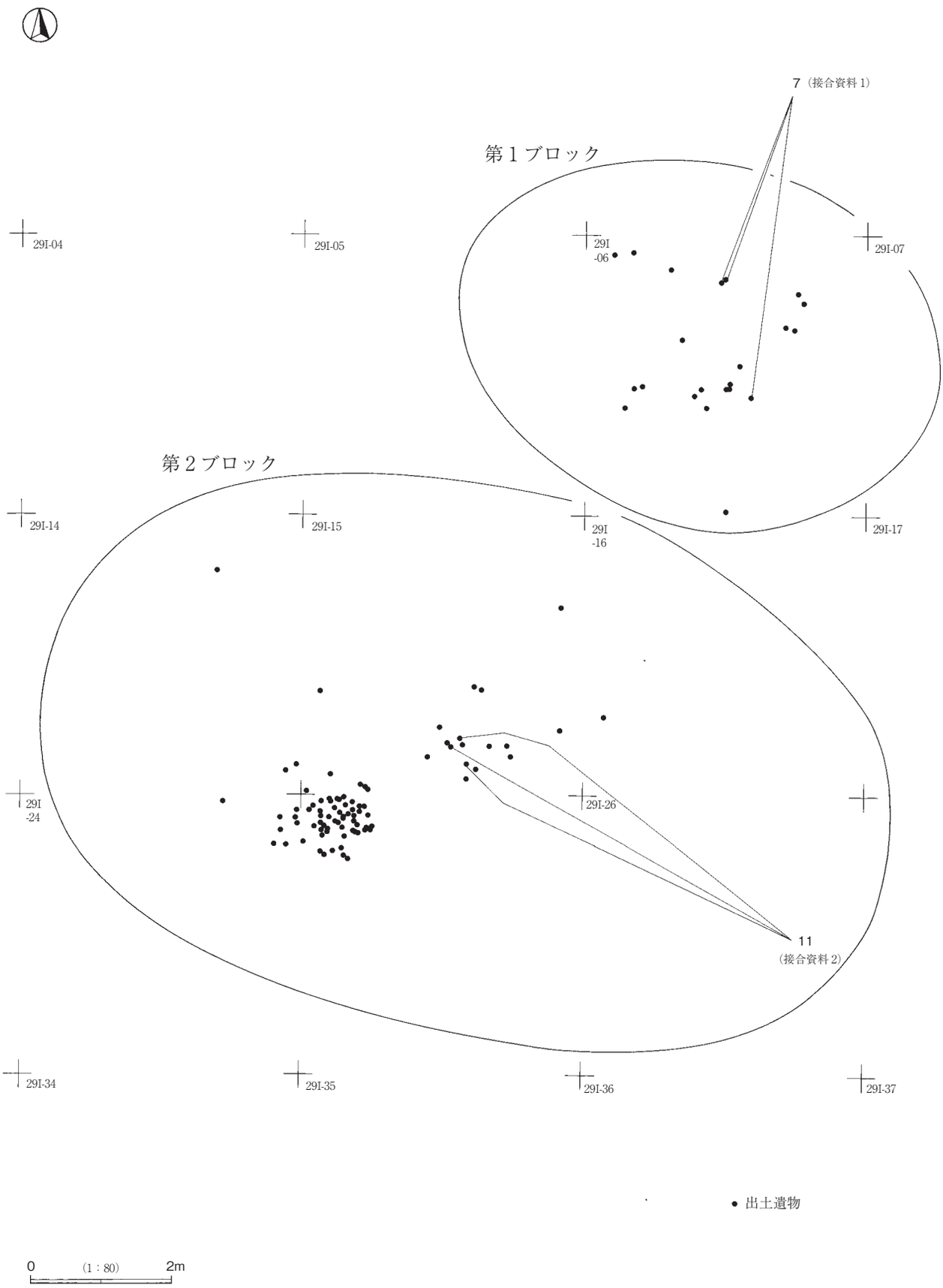
遺物は、ナイフ形石器１点、二次加工ある剥片１点、剥片18点、石核２点の合計44点が出土した（第54表）。石器石材は、すべて暗オリーブ灰のチャートである。多くの石器に礫面が残されていることから、当初は原石（亜角礫）の状態で遺跡内に搬入されたものと考えられる。節理や自然面を極力回避し、比較的良質な部分を選択している。母岩別資料の識別は不可能であり、同一母岩の可能性が高い。

２）出土遺物

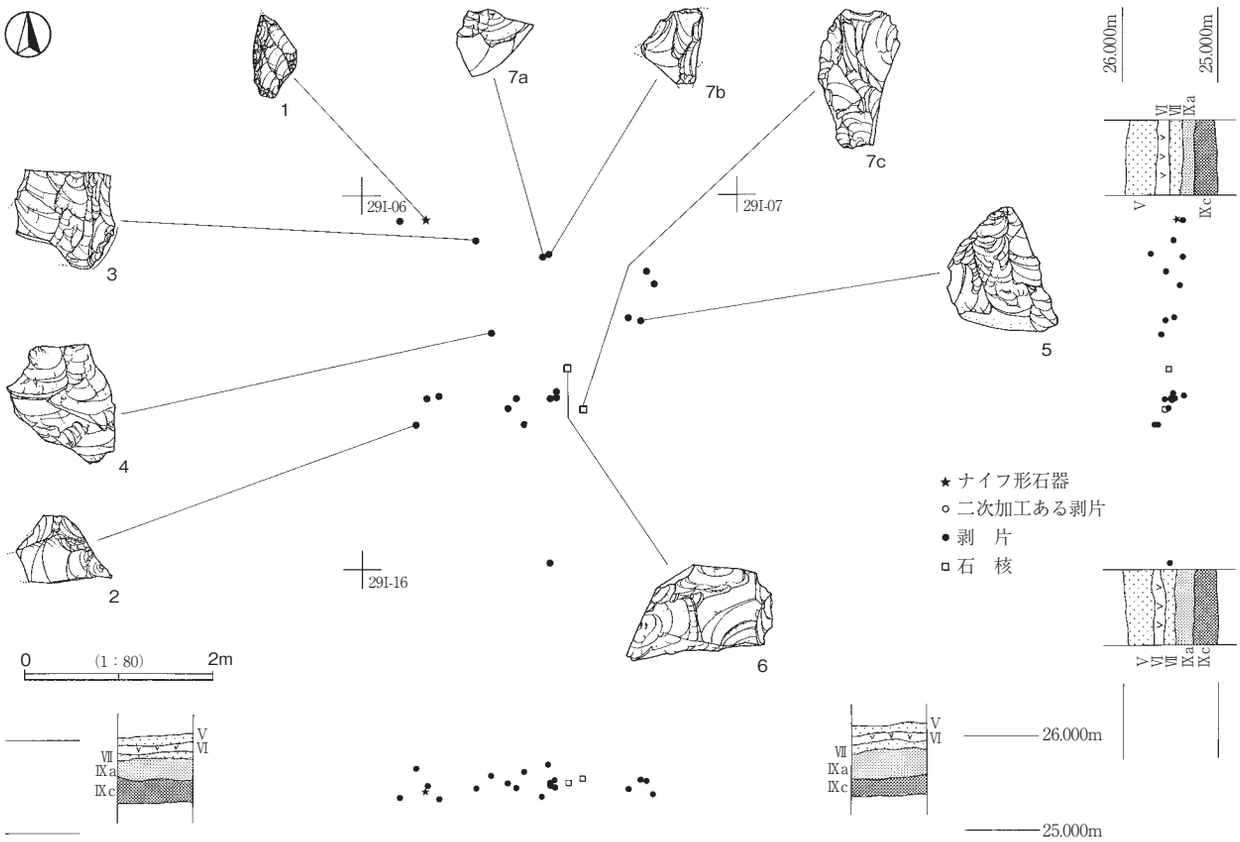
第142図１は小型のナイフ形石器で、切出形を呈し二側縁加工である。先端部が欠損している。３は二次加工ある剥片で、横長剥片の右下に連続的に二次加工が施されている。２、４～５は横長剥片である。６は剥片素材の石核であり、下端部が欠損している。７は剥片２点（７a～７b）と石核１点（７c）からなる接合資料である。求心的な打撃によって横長剥片を生産している。打面転移も頻繁であり、石核は多面体を呈している。

第54表　坪井向遺跡石器組成表（第１ブロック）

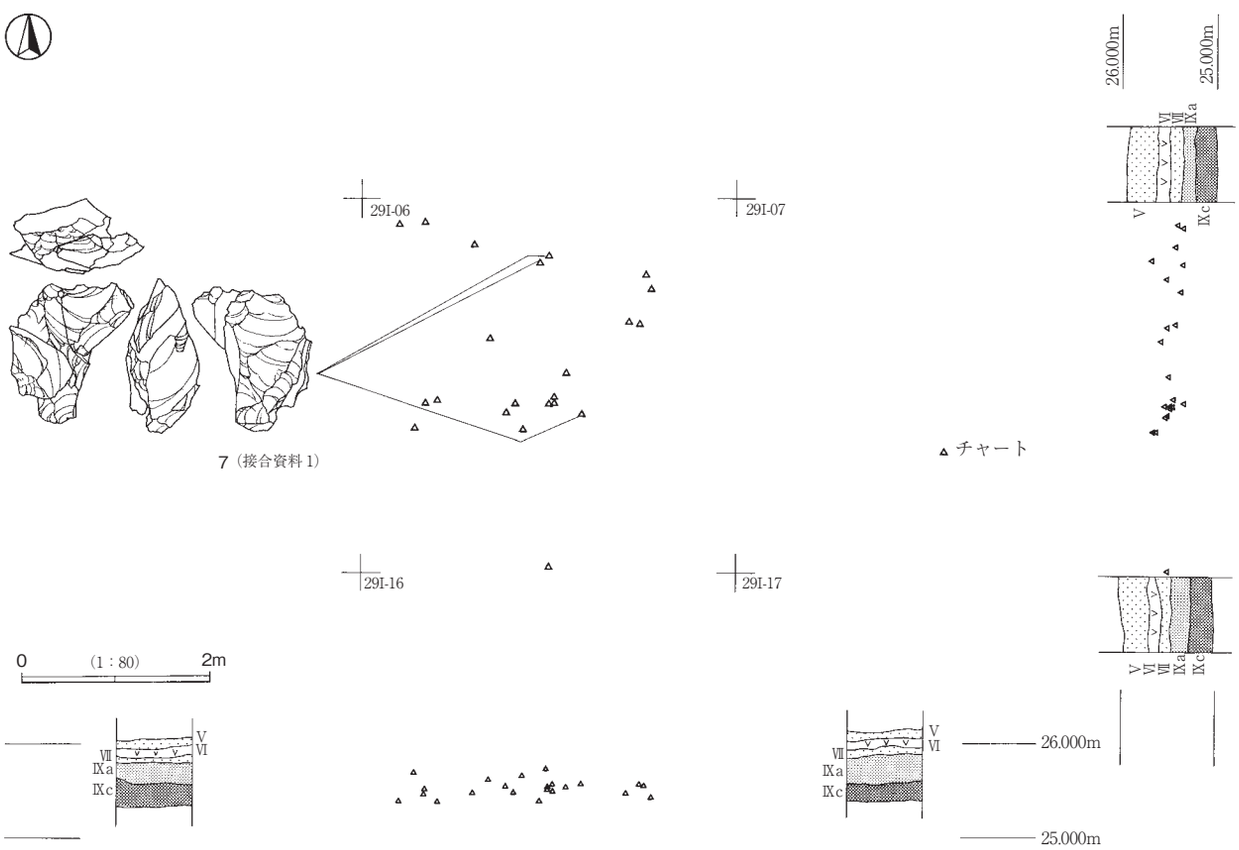
	ナイフ形石器	尖頭器	削器	二次加工ある剥片	剥片	砕片	石核	敲石	礫・礫片	計
黒曜石										
ガラス質黒色安山岩										
チャート	1			1	18		2			22
珪質頁岩										
流紋岩										
ホルンフェルス										
合　　計	1			1	18		2			22



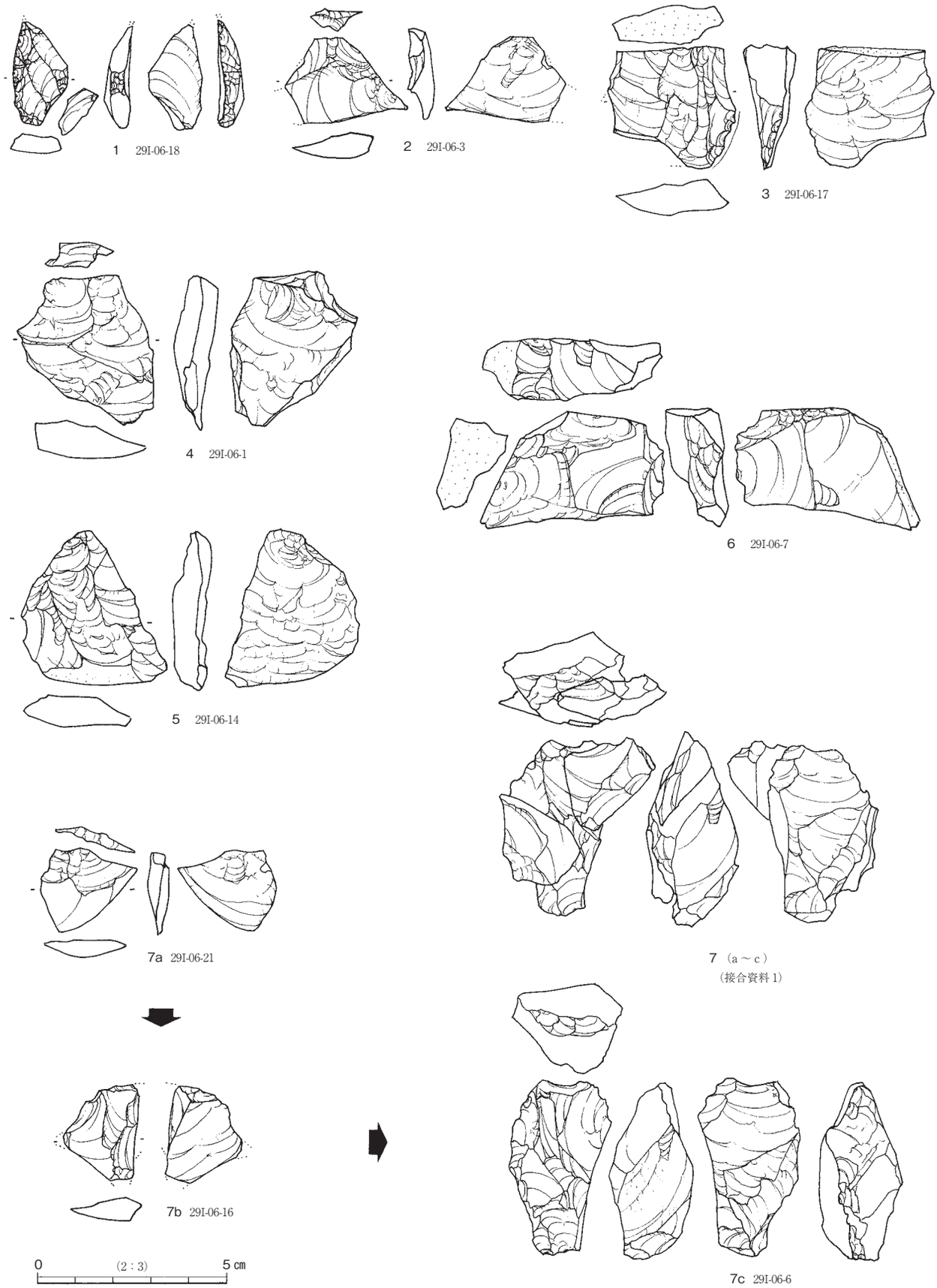
第139図　第1・第2ブロック出土遺物状況図



第140図　第１ブロック出土遺物分布図（１）－石器別分布図－



第141図　第１ブロック出土遺物分布図（２）－石材別分布図－



第142図　第１ブロック出土遺物実測図

２．第２ブロック（第143図～第146図、第55表、図版21・52～53）

１）概　　要

西に緩やかに傾斜する台地の平坦部に立地する。標高は約26mである。北東に隣接する第１ブロックに比べ、遺物量が多く分布密度も高い。

平面分布は径５mのほぼ円形を呈する。北西に約３m離れて敲石が分布する。子細にみれば、ブロック内はさらに南北２か所に区分することが可能である。

相対的に密度が高い南側（径約1.5m）には剥片類が、希薄な北側（径約1.2m）にはこれに石核２点が加わる。石核２点は共に集中部の外郭に位置している。出土層準は第２黒色帯下部のⅨa層～Ⅸc層にわたるが、特にⅨc層に密集している。出土遺物の高低差は約0.4mである。

遺物は敲石１点、剥片85点、砕片１点、石核２点の合計89点が出土した（第55表）。敲石関連の資料２点は流紋岩であるが、他はすべて暗オリーブ灰のチャートで、肉眼的には第１ブロックと同種と考えられる。第１ブロックと同様に多くの石器に礫面が残されており、当初はかなり大型の原石（亜角礫）が遺跡内に搬入されたものと考えられる。チャートの母岩別資料の識別は不可能であり、単一母岩の可能性も否定できない。

２）出土遺物

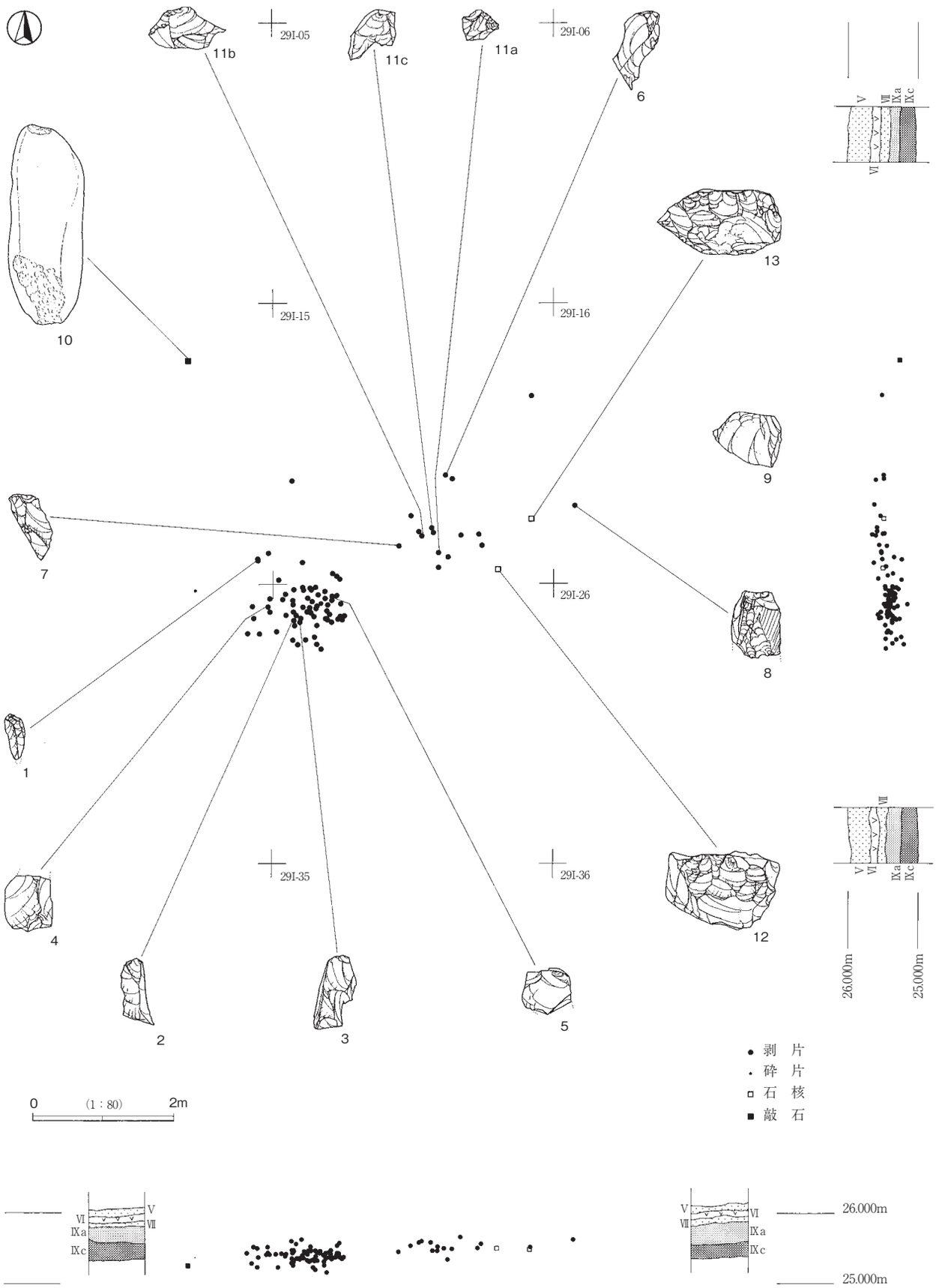
第145図１～９は横長ないしは寸詰まりの剥片である。石材に節理面の多いチャートを使用している関係で、不規則な割れや節理面が観察される。10は敲石である。石材は流紋岩であり、上下両端に使用による損傷の痕跡（敲打・剥離痕）をとどめている。このほか同一個体と考えられる砕片も出土しているが、接合はしなかった。11は横長剥片３点からなる接合資料であり、本ブロックの技術基盤をよく反映している。第146図12～13は石核である。共に打面転移が頻繁であり、横長剥片や寸詰まりの縦長剥片が生産されたようである。12は打面がネガティブな単一の剥離面となっており、主としてここを打撃することによって横長剥片が連続的に生産されたようである。13の打面には自然面が残存している。縁辺からの求心的な打撃によって横長剥片が生産されている。

第55表　坪井向遺跡石器組成表（第２ブロック）

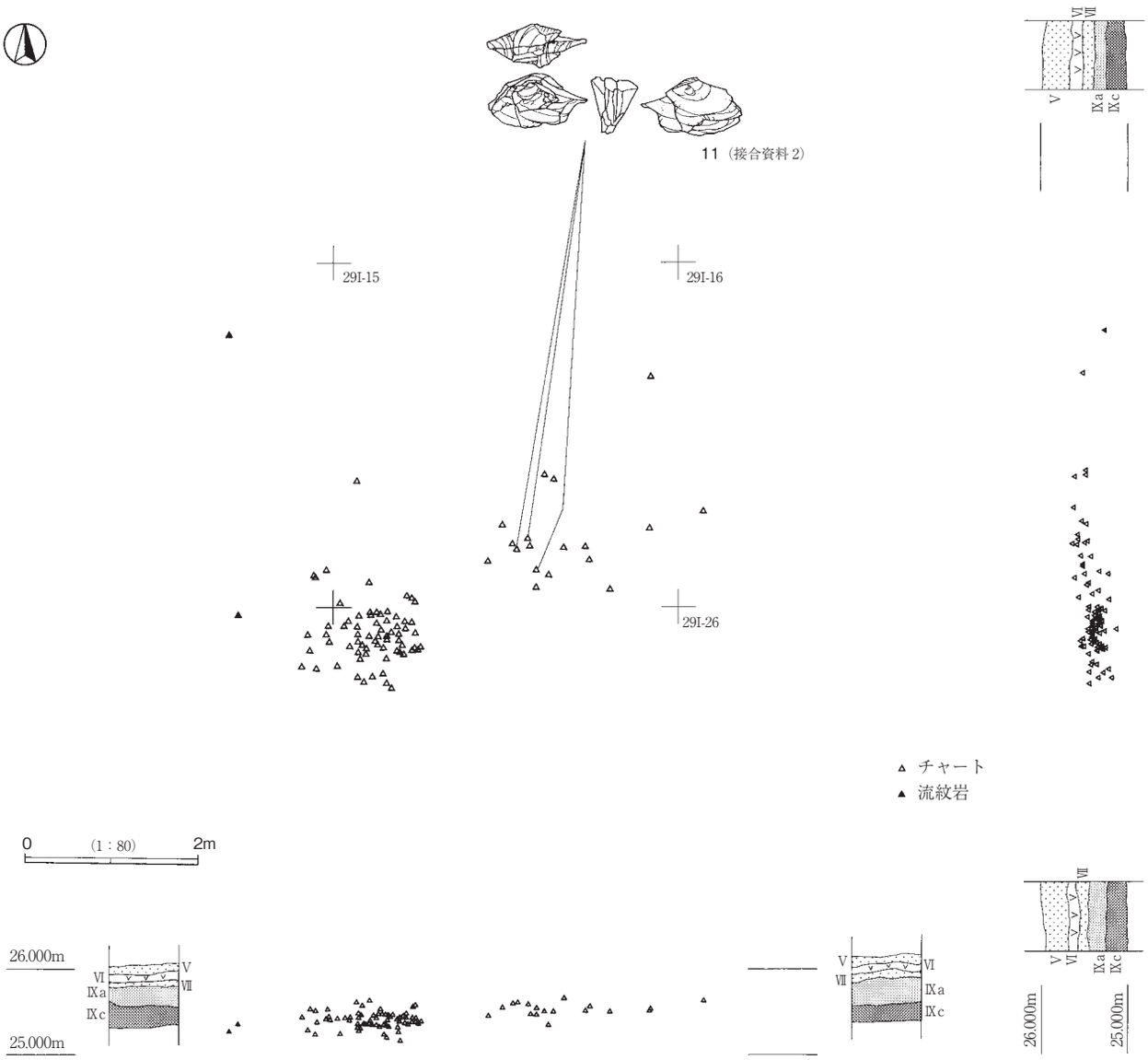
	ナイフ形石器	尖頭器	削器	二次加工ある剥片	剥片	砕片	石核	敲石	礫・礫片	計
黒曜石										
ガラス質黒色安山岩										
チャート					85		2			87
珪質頁岩										
流紋岩						1		1		2
ホルンフェルス										
合　　計					85	1	2	1		89

３．ブロック外（第147図、第56表、図版52・図版53）

ブロック外からは石器及び礫片が計16点出土した。内訳はナイフ形石器1点、尖頭器２点、削器１点、二次加工ある剥片４点、剥片４点、砕片２点、石核１点、礫片１点となっている。一方、石材は黒曜石７点、ガラス質黒色安山岩・チャート・珪質頁岩各２点、ホルンフェルス・安山岩・メノウ各１点となっている。黒曜石には、伊豆･箱根系（伊東市柏峠産）、信州系、及び栃木県の高原山系が見られ多岐にわたる。

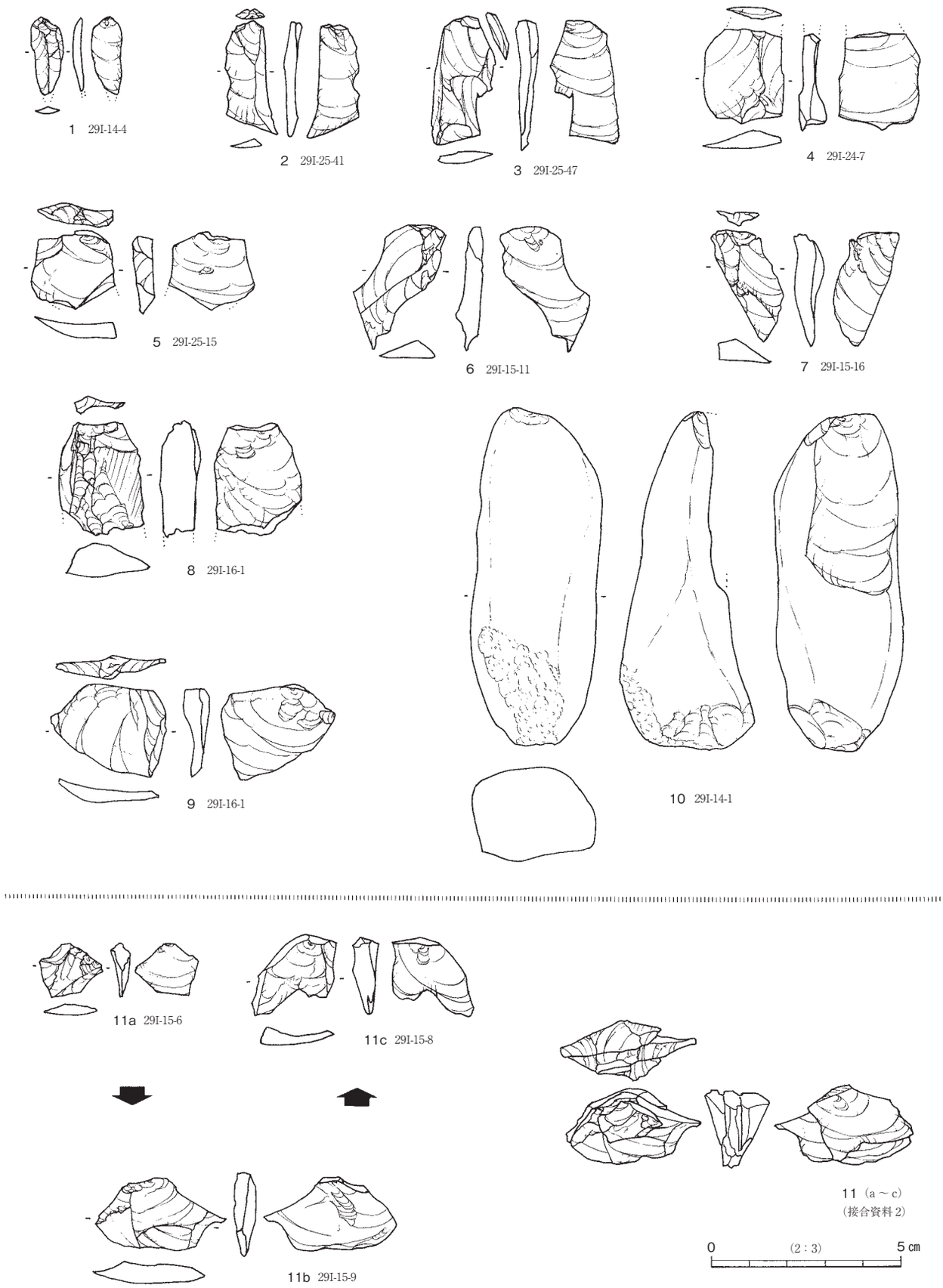


第143図　第２ブロック出土遺物分布図（１）－石器別分布図－

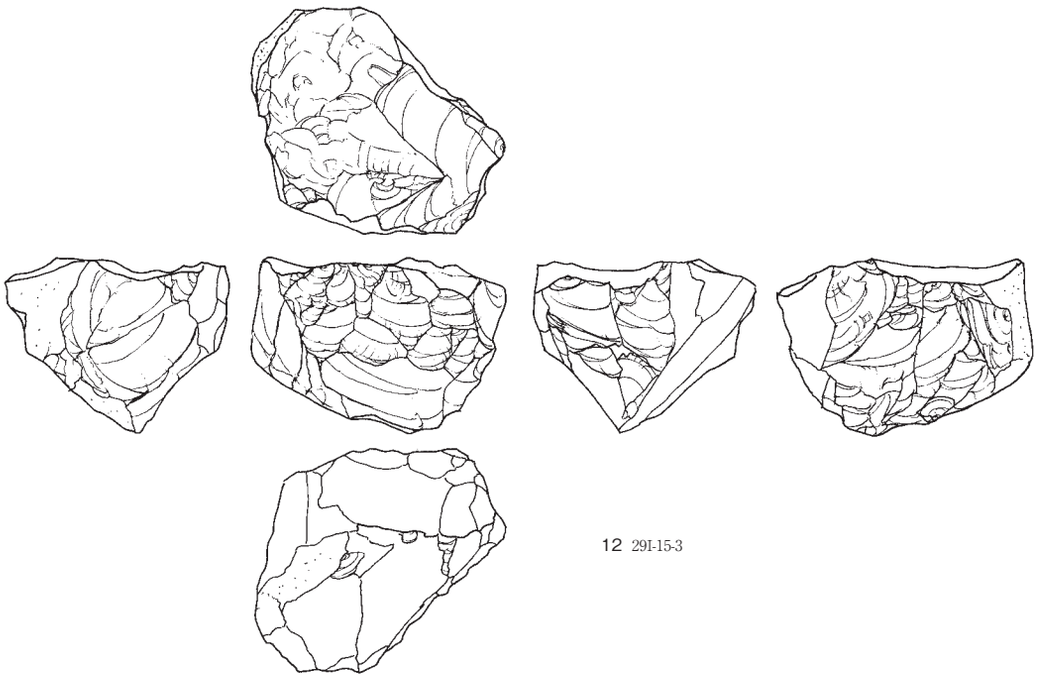


第144図　　第２ブロック出土遺物分布図（２）－石材別分布図－

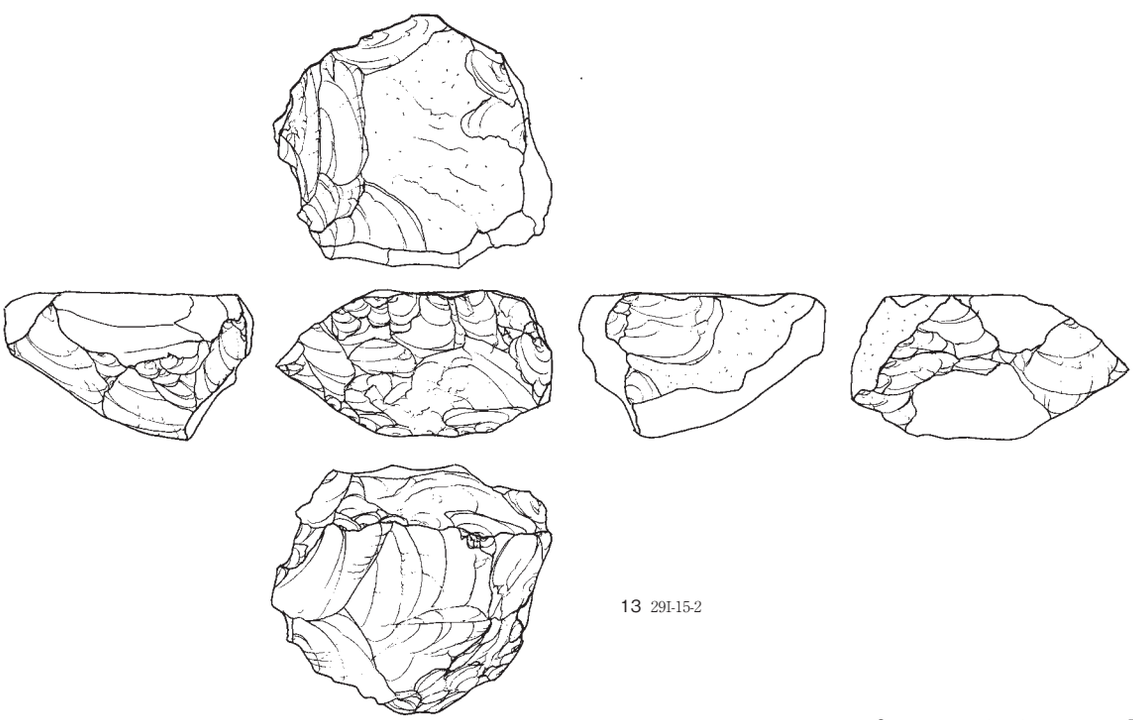
第147図１はナイフ形石器である。先端部の断片であり、石材は珪質頁岩を用いている。２・５は尖頭器である。２は片面加工の小型尖頭器で、完形品である。横長剥片を素材としており、斑晶に富み、漆黒色の高原山産黒曜石を用いている。５は両面加工の槍先形尖頭器である。下半部が欠損している。石材はチャートである。３は二次加工ある剥片であるが､ナイフ形石器の可能性もある。先端部が欠損しており、二次加工は二側縁に施されている。石材は珪質頁岩（いわゆる「白滝頁岩」）である。４は高原山産黒曜石を用いた横長剥片である。６・８は二次加工ある剥片である。６は削器等の利器の一部の可能性もあるが、断片的であるためこれに含めた。石材は高原山黒曜石である。同一地点からは、さらに黒曜石製の砕片１点が出土している。８は横長剥片の右側縁に部分的に二次加工を加えている。打角は比較的急角度である。７は削器である。小型で扁平な角礫から生産された横長剥片を素材として先端部に連続的な二次加工を施している。肉眼的には柏峠産の黒曜石と推定される。色調もさることながら、原石の形状もこの産地特有といえる。９は剥片素材の石核である。剥片の小口に交互に作業面を設定し、小型で薄手の縦長剥片を生産している。石材は信州系黒曜石である。



第145図　第２ブロック出土遺物実測図（１）



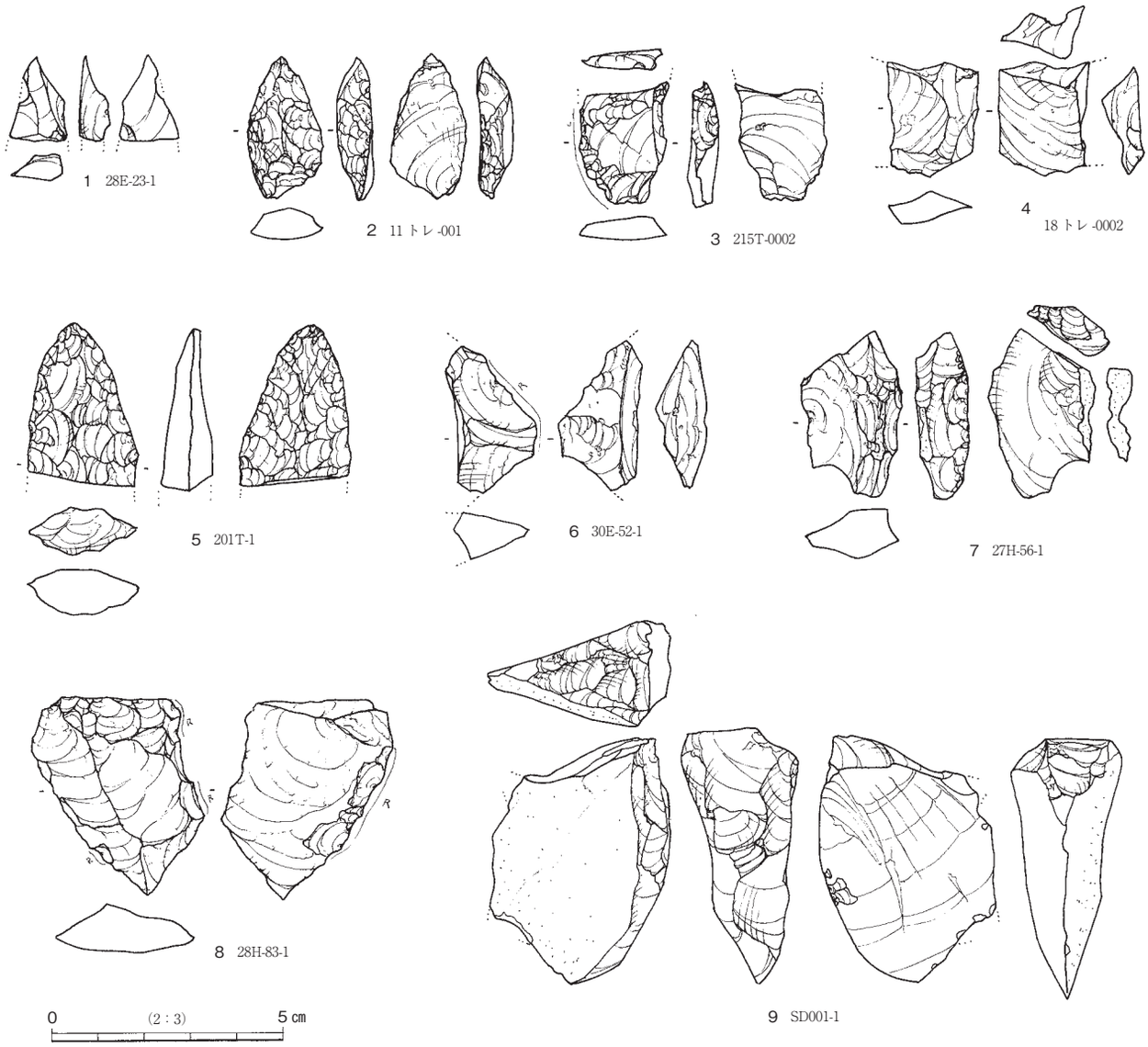
12 29I-15-3



13 29I-15-2

0 (2：3) 5㎝

第146図　第２ブロック出土遺物実測図（２）



第147図　単独出土・表面採集遺物実測図

第56表　坪井向遺跡石器組成表（ブロック外・単独出土）

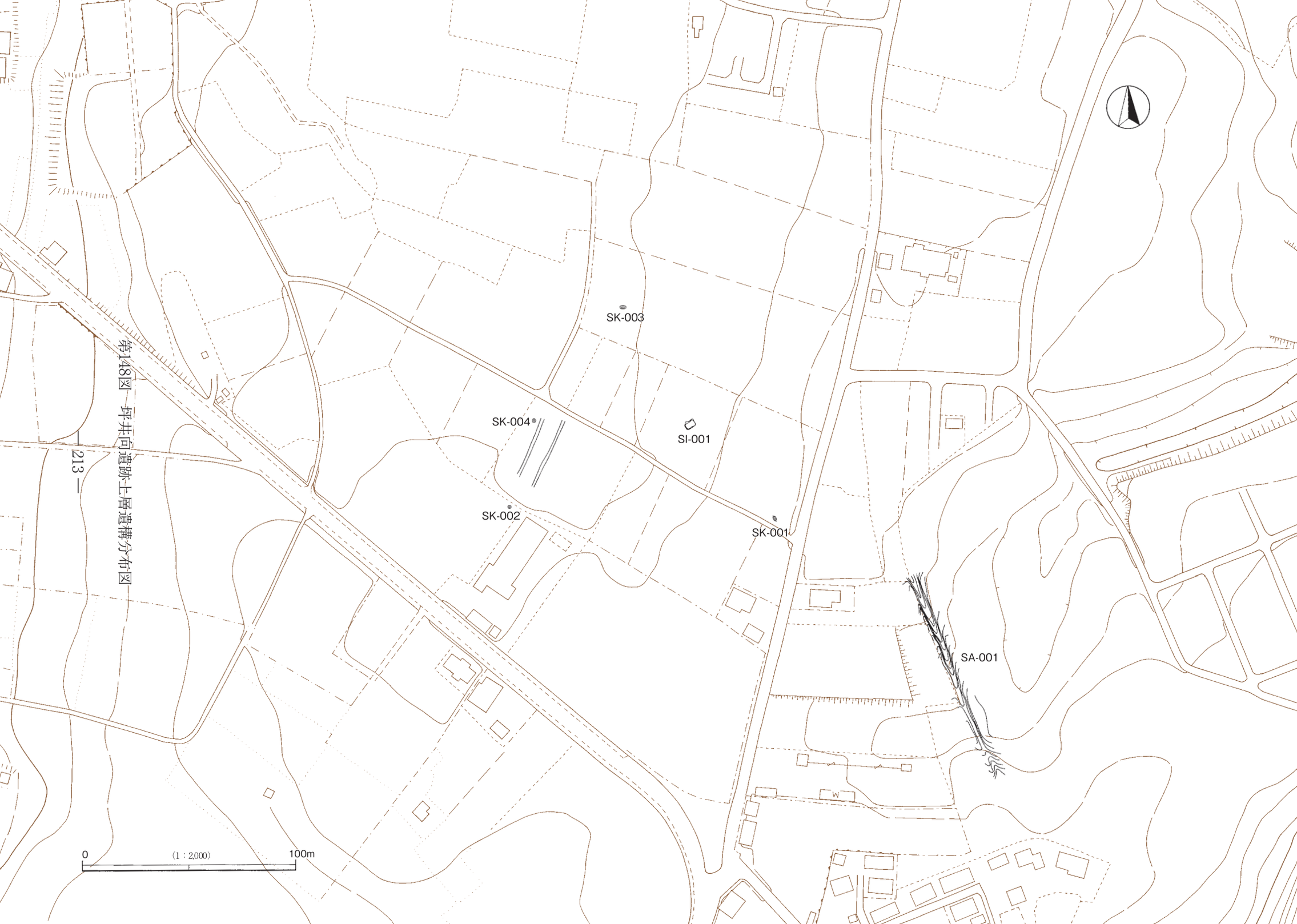
	ナイフ形石器	尖頭器	削器	二次加工ある剥片	剥片	砕片	石核	敲石	礫・礫片	計
黒曜石		1	1	1	1	2	1			7
ガラス質黒色安山岩				1	1					2
チャート		1			1					2
珪質頁岩	1			1						2
流紋岩										
ホルンフェルス					1					1
安山岩									1	1
メノウ				1						1
合　　計	1	2	1	4	4	2	1		1	16

第57表　坪井向遺跡（下層）出土遺物一覧

整理番号	ブロック	グリッド	遺物No.	挿図No.	器　種	石　　材	計測値（cm /g）				接合No.	備　　考
							長さ	幅	厚さ	重量		
1	第1	29I - 06	0001	4	剥片	チャート	4.0	3.5	0.8	10.68		
2		29I - 06	0002		剥片	チャート	2.0	1.7	0.5	1.38		
3		29I - 06	0003	2	剥片	チャート	2.3	3.3	0.7	3.79		
4		29I - 06	0004		剥片	チャート	2.6	1.9	1.0	4.32		
5		29I - 06	0005		剥片	チャート	1.5	1.3	0.5	0.96		
6		29I - 06	0006	7c	石核	チャート	4.7	2.6	2.2	23.73	No. 1-1	16+21 と接合
7		29I - 06	0007	6	石核	チャート	4.7	4.1	1.7	25.33		
8		29I - 06	0008		剥片	チャート	2.6	2.8	0.5	2.71		
9		29I - 06	0009		剥片	チャート	0.9	0.7	0.4	0.25		
10		29I - 06	0010		剥片	チャート	2.0	1.9	0.5	1.38		
11		29I - 06	0011		剥片	チャート	0.8	1.3	0.3	0.36		
12		29I - 06	0012		剥片	チャート	0.6	0.9	0.2	0.13		
13		29I - 06	0013		剥片	チャート	0.6	0.6	0.2	0.05		
14		29I - 06	0014	5	剥片	チャート	4.0	4.0	0.9	12.65		
15		29I - 06	0015		剥片	チャート	1.3	1.8	0.5	0.90		
16		29I - 06	0016	7a	剥片	チャート	2.5	2.0	0.7	2.96	No. 1-2	6+21 と接合
17		29I - 06	0017	3	二次加工ある剥片	チャート	3.1	3.4	0.9	10.43		
18		29I - 06	0018	1	ナイフ形石器	チャート	2.8	1.4	0.6	2.64		
19		29I - 06	0019		剥片	チャート	2.2	1.7	0.5	1.55		
20		29I - 06	0020		剥片	チャート	2.4	1.7	0.4	1.52		
21		29I - 06	0021	7b	剥片	チャート	2.3	2.6	0.5	2.33	No. 1-3	6+16 と接合
22		29I - 06	0022		剥片	チャート	1.6	3.0	1.0	4.90		
23	第2	29I - 14	0001	10	敲石	流紋岩	8.9	3.3	3.5	116.96		
24		29I - 14	0002		剥片	チャート	1.2	2.0	0.5	0.63		
25		29I - 14	0003		剥片	チャート	1.1	1.1	0.4	0.28		
26		29I - 14	0004	1	剥片	チャート	1.9	0.9	0.2	0.37		
27		29I - 15	0001		剥片	チャート	2.0	1.7	0.3	0.84		
28		29I - 15	0002	13	石核	チャート	3.1	5.2	5.4	112.82		
29		29I - 15	0003	12	石核	チャート	3.5	4.4	5.5	90.83		
30		29I - 15	0004		剥片	チャート	3.7	1.4	0.7	3.56		
31		29I - 15	0005		剥片	チャート	2.1	1.4	0.3	0.65		
32		29I - 15	0006	11a	剥片	チャート	1.3	1.7	0.3	0.76	No. 2-1	8+9 と接合
33		29I - 15	0007		剥片	チャート	1.1	1.4	0.1	0.18		
34		29I - 15	0008	11c	剥片	チャート	2.0	2.3	0.5	1.78	No. 2-2	6+9 と接合
35		29I - 15	0009	11b	剥片	チャート	2.1	3.5	0.5	3.43	No. 2-3	6+8 と接合
36		29I - 15	0010		剥片	チャート	1.4	1.1	0.6	0.86		
37		29I - 15	0011	6	剥片	チャート	2.8	2.9	0.5	2.19		
38		29I - 15	0012		剥片	チャート	1.7	2.9	0.8	3.18		
39		29I - 15	0013		剥片	チャート	1.6	0.8	0.3	0.34		
40		29I - 15	0014		剥片	チャート	1.6	1.4	0.2	0.53		
41		29I - 15	0015		剥片	チャート	1.3	2.1	0.9	2.01		
42		29I - 15	0016	7	剥片	チャート	2.9	1.7	0.6	2.32		
43		29I - 15	0017		剥片	チャート	0.6	0.9	0.1	0.07		
44		29I - 15	0018		剥片	チャート	0.8	0.4	0.2	0.04		
45		29I - 15	0019		剥片	チャート	1.2	0.9	0.3	0.31		
46		29I - 15	0020		剥片	チャート	1.3	1.5	0.3	0.29		
47		29I - 15	0021		剥片	チャート	1.3	0.9	0.2	0.25		
48		29I - 15	0022		剥片	チャート	3.5	2.7	1.6	6.98		
49		29I - 15	0023		剥片	チャート	1.6	1.7	0.4	0.62		
50		29I - 16	0001	8	剥片	チャート	3.0	2.3	1.0	6.76		

整理番号	ブロック	グリッド	遺物No.	挿図No.	器　種	石　　材	計測値（cm /g）				接合No.	備　　考
							長さ	幅	厚さ	重量		
51		29I - 16	0001	9	剥片	チャート	2.6	3.0	0.6	3.51		単独出土（クラム）（A）
52		29I - 24	0001		剥片	チャート	1.6	3.2	1.2	4.87		
53		29I - 24	0002		砕片	流紋岩	1.5	1.7	0.3	0.81		敲石片・29I-14-0001と同一個体
54		29I - 24	0003		剥片	チャート	2.0	1.8	0.5	1.37		
55		29I - 24	0004		剥片	チャート	3.4	2.5	0.5	4.43		
56		29I - 24	0006		剥片	チャート	1.4	1.3	0.4	0.44		
57		29I - 24	0007	4	剥片	チャート	2.5	2.2	0.6	3.29		
58		29I - 24	0008		剥片	チャート	1.3	0.9	0.4	0.34		
59		29I - 24	0009		剥片	チャート	1.3	1.4	0.2	0.34		
60		29I - 25	0001		剥片	チャート	3.6	2.5	1.2	9.48		
61		29I - 25	0002		剥片	チャート	2.7	2.1	1.1	3.62		
62		29I - 25	0003		剥片	チャート	1.5	1.4	0.3	0.81		
63		29I - 25	0004		剥片	チャート	2.2	2.4	1.0	4.75		
64		29I - 25	0005		剥片	チャート	0.5	1.1	0.2	0.16		
65		29I - 25	0006		剥片	チャート	1.1	0.8	0.3	0.20		
66		29I - 25	0007		剥片	チャート	0.8	0.6	0.1	0.05		
67		29I - 25	0008		剥片	チャート	1.3	1.7	0.2	0.45		
68		29I - 25	0009		剥片	チャート	1.2	1.2	0.2	0.30		
69		29I - 25	0010		剥片	チャート	2.0	3.2	1.0	4.82		
70		29I - 25	0011		剥片	チャート	0.9	0.9	0.1	0.13		
71		29I - 25	0013		剥片	チャート	1.8	1.6	0.5	1.58		
72		29I - 25	0014		剥片	チャート	1.7	1.9	0.1	0.41		
73		29I - 25	0015	5	剥片	チャート	2.0	2.2	0.5	2.45		
74	第２	29I - 25	0016		剥片	チャート	1.1	1.1	0.2	0.12		
75		29I - 25	0017		剥片	チャート	1.4	1.8	0.2	0.33		
76		29I - 25	0018		剥片	チャート	1.2	1.4	0.3	0.44		
77		29I - 25	0019		剥片	チャート	0.9	0.9	0.1	0.08		
78		29I - 25	0020		剥片	チャート	1.0	1.6	0.2	0.34		
79		29I - 25	0021		剥片	チャート	2.0	1.7	0.5	1.12		
80		29I - 25	0022		剥片	チャート	1.3	0.8	0.3	0.30		
81		29I - 25	0023		剥片	チャート	2.6	4.8	1.6	12.12		
82		29I - 25	0024		剥片	チャート	1.0	2.5	0.3	0.57		
83		29I - 25	0025		剥片	チャート	1.6	2.0	0.5	1.42		
84		29I - 25	0026		剥片	チャート	1.0	0.6	0.2	0.09		
85		29I - 25	0027		剥片	チャート	0.9	1.2	0.3	0.16		
86		29I - 25	0028		剥片	チャート	1.0	0.9	0.1	0.05		
87		29I - 25	0029		剥片	チャート	0.7	0.6	0.1	0.04		
88		29I - 25	0030		剥片	チャート	0.4	0.4	0.1	0.01		
89		29I - 25	0031		剥片	チャート	0.9	0.9	0.2	0.11		
90		29I - 25	0032		剥片	チャート	2.1	2.5	0.5	2.78		
91		29I - 25	0033		剥片	チャート	0.8	0.7	0.2	0.06		
92		29I - 25	0034		剥片	チャート	0.6	0.4	0.2	0.06		
93		29I - 25	0035		剥片	チャート	1.1	1.3	0.4	0.58		
94		29I - 25	0036		剥片	チャート	1.0	1.3	0.2	0.19		
95		29I - 25	0037		剥片	チャート	0.6	1.0	0.1	0.06		
96		29I - 25	0038		剥片	チャート	0.9	0.4	0.2	0.04		
97		29I - 25	0039		剥片	チャート	0.7	0.6	0.3	0.10		
98		29I - 25	0040		剥片	チャート	0.8	1.7	0.3	0.31		

整理番号	ブロック	グリッド	遺物No.	挿図No.	器　種	石　　材	計測値（cm /g）				接合No.	備　　考
							長さ	幅	厚さ	重量		
99	第２	29I - 25	0041	2	剥片	チャート	3.0	1.9	0.3	1.09		
100		29I - 25	0042		剥片	チャート	1.2	1.0	0.3	0.25		
101		29I - 25	0043		剥片	チャート	0.9	1.2	0.5	0.36		
102		29I - 25	0044		剥片	チャート	1.1	0.7	0.4	0.26		
103		29I - 25	0045		剥片	チャート	1.1	0.8	0.2	0.18		
104		29I - 25	0046		剥片	チャート	1.4	1.1	0.3	0.35		
105		29I - 25	0047	3	剥片	チャート	3.2	2.1	0.3	2.32		
106		29I - 25	0048		剥片	チャート	1.1	1.4	0.2	0.30		
107		29I - 25	0049		剥片	チャート	1.1	1.3	0.2	0.36		
108		29I - 25	0050		剥片	チャート	0.4	0.6	0.1	0.02		
109		29I - 25	0051		剥片	チャート	1.2	0.4	0.1	0.03		
110		29I - 25	0052		剥片	チャート	0.6	0.8	0.2	0.08		
111		29I - 25	0053		剥片	チャート	2.6	0.9	0.6	1.53		
112	単独出土・表面採集	27H - 56	0001	7	削器	黒曜石	3.4	2.3	1.0	6.58		
113		27H - 56	0002		砕片	黒曜石	0.6	0.4	0.1	0.01		
114		28G - 23	0001		剥片	チャート	3.3	2.6	1.1	9.72		単独出土
115		18 - トレ	0001		剥片	ﾎﾙﾝﾌｪﾙｽ	1.5	1.8	0.4	0.67		単独出土
116		18 - トレ	0002	4	剥片	黒曜石	2.3	2.0	1.0	4.48		単独出土
117		28D - 14	0001		礫片	安山岩	9.0	7.0	4.4	247.47		単独出土
118		28E - 23	0001	1	ナイフ形石器	珪質頁岩	1.9	1.2	0.6	0.87		単独出土
119		28H - 83	0001	8	二次加工ある剥片	安山岩	4.3	3.7	1.2	16.31		単独出土（ｸﾗﾑ）
120		11 - トレ	0001	2	有樋尖頭器	黒曜石	3.1	1.7	0.8	3.56		表採（ﾄﾚﾝﾁ出土）
121		201 - トレ	0001	5	槍先形尖頭器	チャート	3.4	2.4	1.1	7.98		表採（ﾄﾚﾝﾁ出土）
122		28E - 33	0001		砕片	黒曜石	1.8	1.6	0.4	0.77		単独出土
123		30E - 52	0001	6	二次加工ある剥片	黒曜石	3.0	1.7	1.1	3.82		単独出土
124		215 - トレ	0002	3	二次加工ある剥片	珪質頁岩	2.5	1.9	0.5	2.92		表採（ﾄﾚﾝﾁ出土）
125		201 - トレ	0001		剥片	ガラス質黒色安山岩	3.1	3.9	1.6	22.27		表採（ﾄﾚﾝﾁ出土）
126		4 - トレ	0001		二次加工ある剥片	メノウ	1.5	1.1	0.5	0.83		表採（ﾄﾚﾝﾁ出土）
127		SD - 11		9	石核	黒曜石	4.6	4.1	2.3	34.28		表採（ﾄﾚﾝﾁ出土）



第148図　坪井向遺跡上層遺構分布図

第３節　縄文時代以降

縄文時代以降の遺構として、縄文時代の陥穴３基、平安時代の竪穴住居跡１軒、中世の土坑１基、近世の野馬土手１条が検出された（第58表）。出土した遺物は少量で、縄文時代の土器・石器、平安時代の土師器、近世の泥メンコ、古銭などがあった。

遺構の分布状況を見ると（第148図）、縄文時代の陥穴（SK-001 ～ SK-003）は遺跡範囲の中央付近に点在していた。近世の野馬土手は遺跡範囲の南東側で北西から南東に向かって伸びていた。

第58表　坪井向遺跡縄文時代以降の遺構一覧

時代	挿図番号	遺構番号	種別	位置	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	調査次
縄文時代	第 149 図	SK-001	陥穴	30I26	2.3	1.6	2.6	第 1 次
縄文時代	第 149 図	SK-002	陥穴	29G78, 79	2.7	2.0	3.7	第 8 次
縄文時代	第 149 図	SK-003	陥穴	30F05	1.7	1.7	1.6	第 7 次
平安時代	第 152 図	SI-001	住居跡	29H05	5.0	3.6	0.2	第 4 次
中世	第 149 図	SK-004	土坑	29F08	2.0	2.0	2.1	第 4 次
近世	第 154 図	SA-001	野馬土手	31K, 31L, 32K, 32L	約 100.0	3.0		第 6 次

１　縄文時代

縄文時代の遺構は陥穴が３基検出され、遺物は土器、石器が少量出土した。なお陥穴については、遺物が出土しなかったため、遺構の時期を特定するのが困難であった。

遺構

SK-001陥穴（第149図、図版23）

平成９年度に検出された陥穴である。30I-26グリッドに位置する。長軸は北西－南東を向き、平面形状は長軸2.3m、短軸1.6mの楕円形を呈し、検出面からの深さ2.6mを測る。短軸断面は底部が口径に比べやや狭くなり緩やかなじょうご状を呈する。遺物の出土はない。

SK-002陥穴（第149図、図版23）

平成18年度に検出された陥穴である。29G-78・79グリッドに位置する。長軸は東西を向き、平面形状は長軸2.7m、短軸2.0mの楕円形を呈し、検出面からの深さ3.7mを測る。短軸断面は、SK-001同様底部が口径に比べやや狭くなり緩やかなじょうご状を呈する。遺物の出土はない。

SK-003陥穴（第149図、図版23）

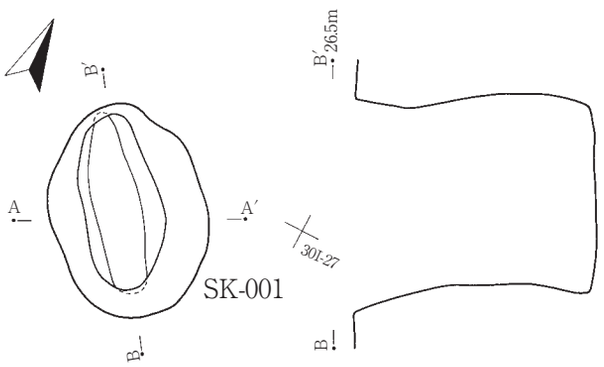
平成18年度に検出された土坑である。30F-05グリッドに位置する。平面形状は、直径1.7mのほぼ円形を呈する。検出面からの深さは1.6mを測る。断面形状は底部が口径に比べやや小さくなるが、ほぼ円筒形を呈する。遺物の出土はない。

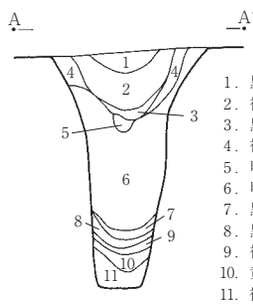
遺物

縄文時代の遺物の出土は少なく、その多くは図示できないほどの小破片が多かった。ここでは数少ない図示できる遺物を中心に報告する。

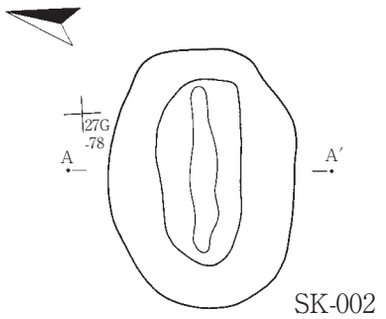
土器片錘と縄文土器（第150図、図版25）

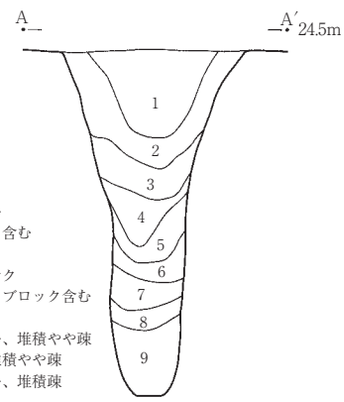
１・２は遺構検出作業中に検出された縄文土器片を利用した土器片錘２点である。いずれも縄文時代中期の土器片を用いたもので、断面への切り込みが明瞭に残っている。



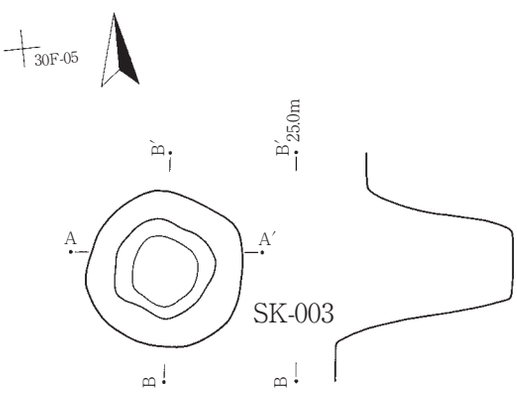


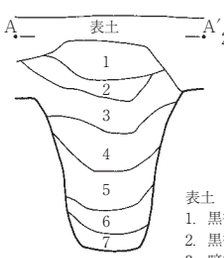
1．黒色土　焼土ブロック・炭化物粒子含む
2．褐色土　ロームを多く、黒色土少し含む
3．黒色土　炭化物粒子を多く含む
4．褐色土　ロームブロック含む
5．明褐色土　焼土ブロック・焼土粒子多く含む
6．明褐色土　ローム多く含む、堆積疎でサクサク
7．黒褐色土
8．黒褐色土　ローム粒子少し含む
9．褐色土　堆積疎でサクサク
10．黄褐色土　堆積やや疎
11．褐色土　黒色土を少し含む



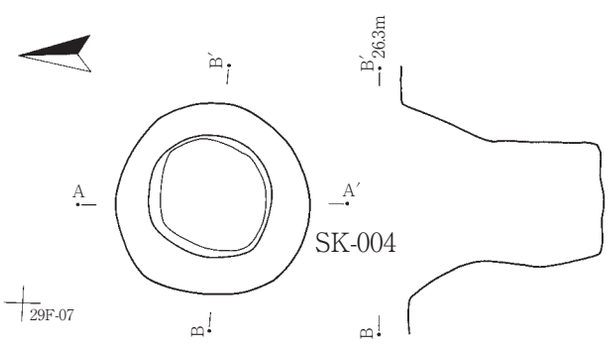


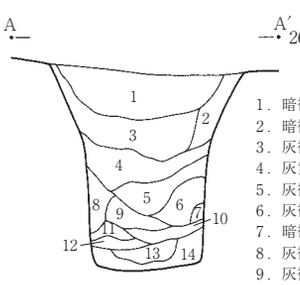
1. 黒褐色土　ローム粒子含む
2. 暗褐色土　ロームブロック含む
3. 暗黄褐色土　堆積やや疎
4. 暗黄褐色土　堆積疎でサクサク
5. 暗褐色土　黒色土・ロームブロック含む
6. 黄褐色土　堆積疎
7. 暗褐色土　ローム粒子含む、堆積やや疎
8. 黄褐色土　黒色土含む、堆積やや疎
9. 暗褐色土　ローム粒子含む、堆積疎



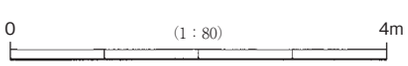


表土（耕作土）
1. 黒褐色土　ローム粒子含む
2. 黒褐色土　ローム粒子やや多く含む
3. 暗褐色土　ローム粒子含む
4. 暗褐色土　ロームブロック多く含む
5. 暗褐色土　ロームブロック含む
6. 黒褐色土　ローム粒子含む
7. 暗褐色土　ソフトロームブロック多く含む

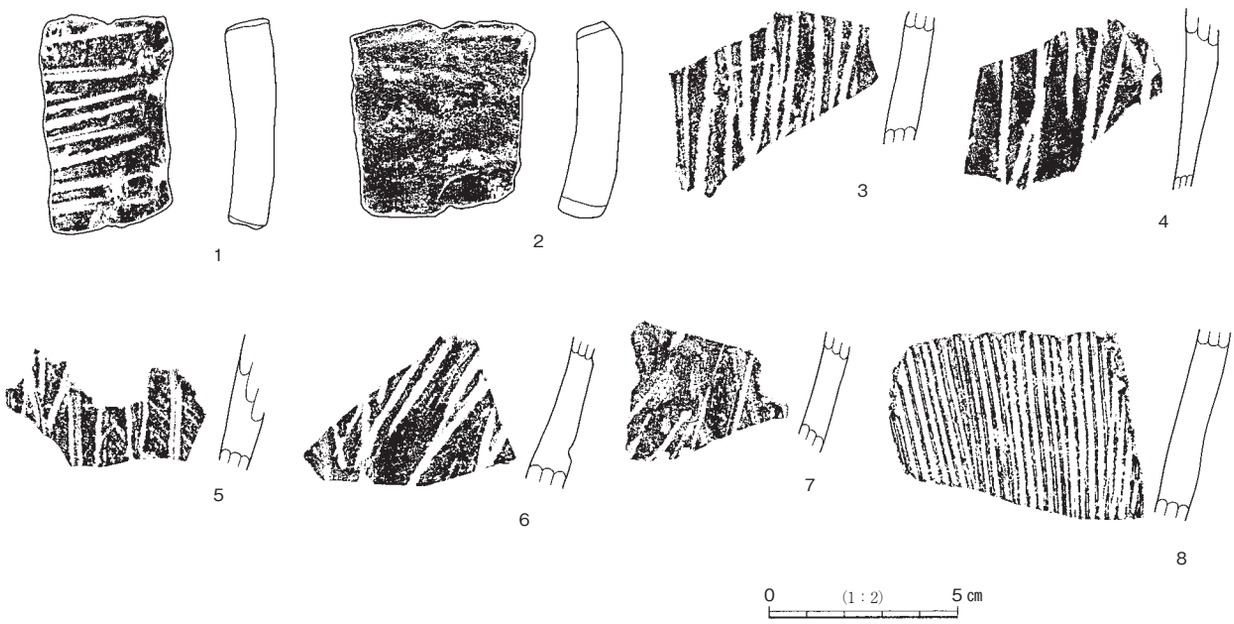




1．暗褐色土　ローム粒子・黄褐色土を若干含む
2．暗褐色土　黄褐色土ブロックを少し含む、堆積やや疎
3．灰褐色土　ローム粒子やや多く含む
4．灰黄褐色土　ロームブロック多く含む
5．灰褐色土　ローム粒子少し含む
6．灰褐色土　ロームブロックやや多く含む
7．暗褐色土　ロームブロック少し含む、堆積やや疎
8．灰褐色土　ロームブロック多く含む
9．灰褐色土　黄褐色土・ロームブロックを含む、堆積やや疎
10．暗褐色土　ロームブロック多く含む
11．暗褐色土　ロームブロック含む
12．灰褐色土　ロームブロック多く含む
13．暗褐色土　ロームブロック多く含む、堆積密
14．灰褐色土　ロームブロック・黄灰色土含む、堆積やや密



第149図　土坑・陥穴



第150図　土錘・縄文土器

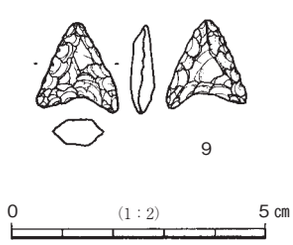
１は、口縁部附近の土器片を素材としており、長軸方向に２か所（一対）の切り込みを有する。長軸50.27㎜、短軸49.50㎜を測り、長短比は0.85となりやや長方形を呈する。重量は32.49ｇである。この土器片は土器正位置に対して長軸が平行な関係であり、周囲には調整がほとんど加えられていない。

２は、胴部付近の土器片を素材として、長軸方向に２か所（一対）の切り込みを有する。長軸長58.20㎜、短軸長35.35㎜を測り、長短比は0.60となりやや細長い長方形を呈する。重量は44.47ｇである。この土器片は土器正位置に対して直交する関係であり、周囲には調整がほとんど加えられていない。

縄文土器はSK-003土坑の付近からまとまって出土している。３～８はいずれも縄文時代中期の土器片である。３～７は、口縁から底部に向かって縦方向にへら状工具によって太い沈線が施されている。６は沈線が交差しており、底部付近の破片と推定される。７は無文の部分が多く沈線も浅く間隔も少しあいている。８は櫛歯条線が施されており、ほかの土器片とは様相を異にしている、器面も赤みを帯びている。

石器（第151図、図版25）

１点のみ図示した。チャートの石鏃で、トレンチから出土した。剥片素材で背面側に平坦な節理面が残存している。長さ18㎜、幅16㎜、厚さ1.5㎜、重量1.13ｇである。



第151図　石鏃

２　平安時代

遺跡範囲中央やや北側で、平安時代の竪穴住居跡が１軒検出された。周囲に同時期の遺構はなく、単独で検出された。竪穴住居跡からは土師器が出土した。

遺構

SI-001住居跡（第152図・第153図、第59表、図版24・図版26）

遺跡のほぼ中央、29H-05グリッドに位置する。カマドを北辺西側に持ち、北東－南西に傾く。平面形状は台形状を呈しており、長さは北辺が5.0m、南辺が4.5mを測る。検出面からの深さは最大で0.2mとなっており比較的浅い。柱穴は検出されなかったが、上端の幅20㎝～30㎝、床面からの深さ最大で６㎝の周溝が壁に沿って、南東隅の一部を除いてほぼ一周する。床面は、西側の周溝近くに硬化する範囲が認められるものの全体的には軟質である。カマドは北西の隅に認められる。検出時にはカマド本体はすでに壊されており、本来の形状は不明である。かろうじて袖部と火床部の痕跡を確認したにすぎない。

遺物

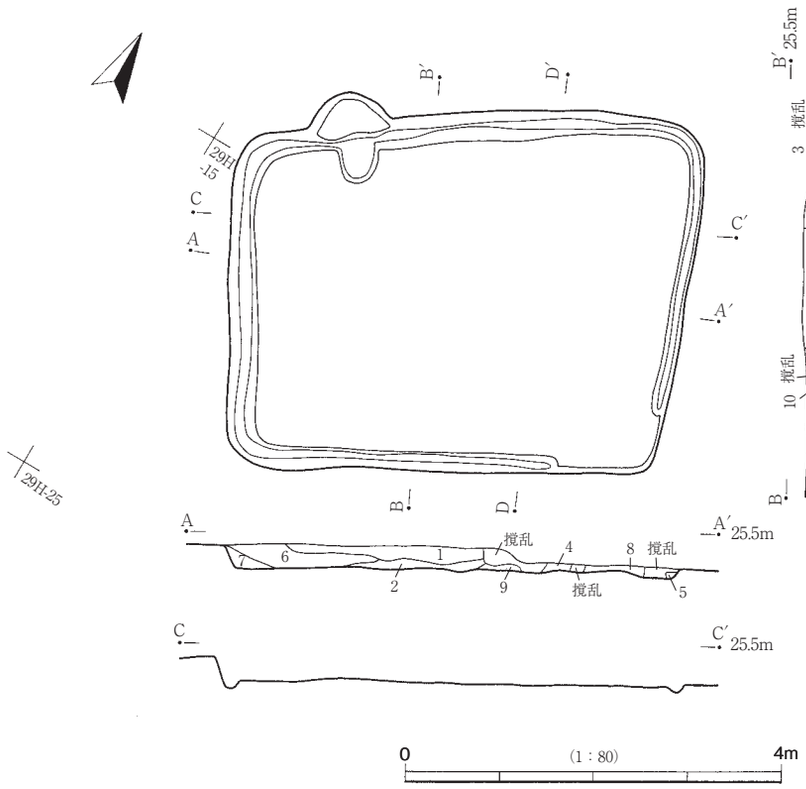
遺物はカマドの付近から多く出土した（図版24）。土師器のみで、須恵器は出土しなかった。

第153図１～９は坏である。すべてロクロ成形である。１は底部がわずかに上げ底で、底面に回転糸切り痕が残る。底部周辺から体部下端にかけてヘラケズリが施されている。体部は内側に湾曲しながら広がり口縁部附近ではゆるやかに外反する。胎土には石英、長石、スコリアを含む。２は底部がわずかに上げ底で、底面には回転糸切り痕が残る。底部付近から体部下端にかけてヘラケズリが施されている。体部は内側に湾曲しながら広がり、全体的に口縁部付近ではややゆるやかに外反するが、内面からは大きく外反する。胎土には石英、スコリアを含む。

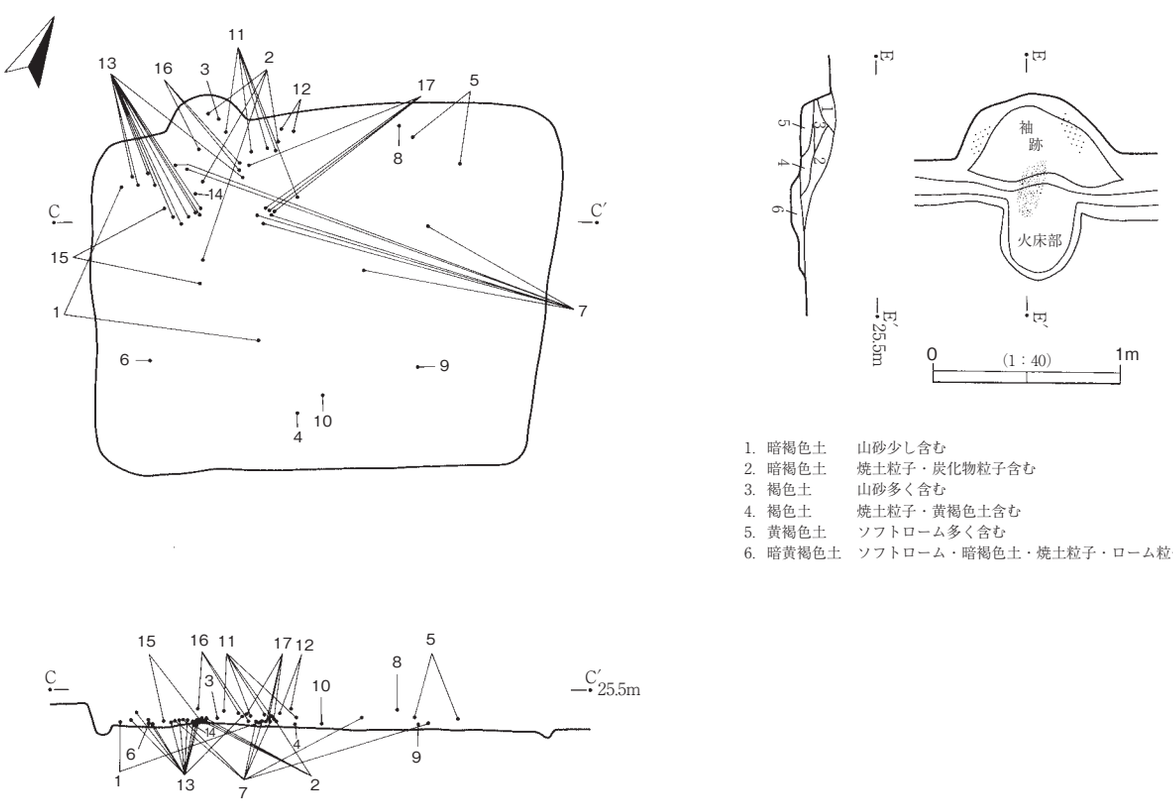
３は体部の一部が残るのみで体部下端から底部が欠損しており、詳細は不明である。体部は１・２と同様に口縁に向かって湾曲しながら広がり、口縁部はゆるやかに外反する。胎土には石英、長石、細砂粒を含む。４は底部がわずかに上げ底で、回転糸切り痕が残る。底部付近から体部下端にかけてヘラケズリが施されている。体部は内側に湾曲しながら広がり、全体的に口縁部付近ではややゆるやかに外反する。内面の調整にはヘラミガキが施されている。また、底部外面中央付近に、線刻でやや浅めに「＋」が施されている。胎土には砂粒、わずかに雲母が含まれる。５は底部がわずかに上げ底で、回転糸切り痕が残る。底部付近から体部下端にかけてヘラケズリが施されている。体部は内側に湾曲しながら広がり全体的に口縁部付近ではわずかに外反する。内面の調整には横方向のヘラミガキが施されている。胎土には石英、長石、スコリアが含まれる。

６は底部がわずかに上げ底で、回転糸切り痕が完全に残り、底部及び体部のヘラケズリは施されていない。体部は内側に湾曲しながら広がり、口縁部付近で、わずかに外反する。胎土には石英、スコリア、細砂粒を含む。７～９は高台付坏である。７は、唯一のほぼ完形の高台付坏である。高台は高く「ハ」字状に大きく広がる。底部外面はヘラケズリ・ナデにより調整されており、回転糸切り痕は確認できない。体部はわずかに湾曲しながら広がり口縁部付近でほぼ直線的に開口する。胎土には石英、長石、赤色スコリアを含む。８は坏の底部片である。高台は７同様に高く「ハ」字状に大きく広がる。底部外面にはナデが施されているが､回転糸切り痕が一部残る。体部は欠損しているが７と同様な器形を呈すると思われるが、大きさは一回り小さい。胎土には石英、長石、スコリアを含む。９は坏の底部片である。高台は高く「ハ」字状に広がる。体部は欠損しているが７と同様な器形を呈すると思われる。内面はヘラミガキが底部まで施されている。

10～16は土師器甕である。10は口縁部から胴部上半部である。口縁部外面には横位のナデが、胴部外面には縦方向のヘラケズリが施されている。内面は口縁部に横方向のナデが、胴部はヘラナデが施されて

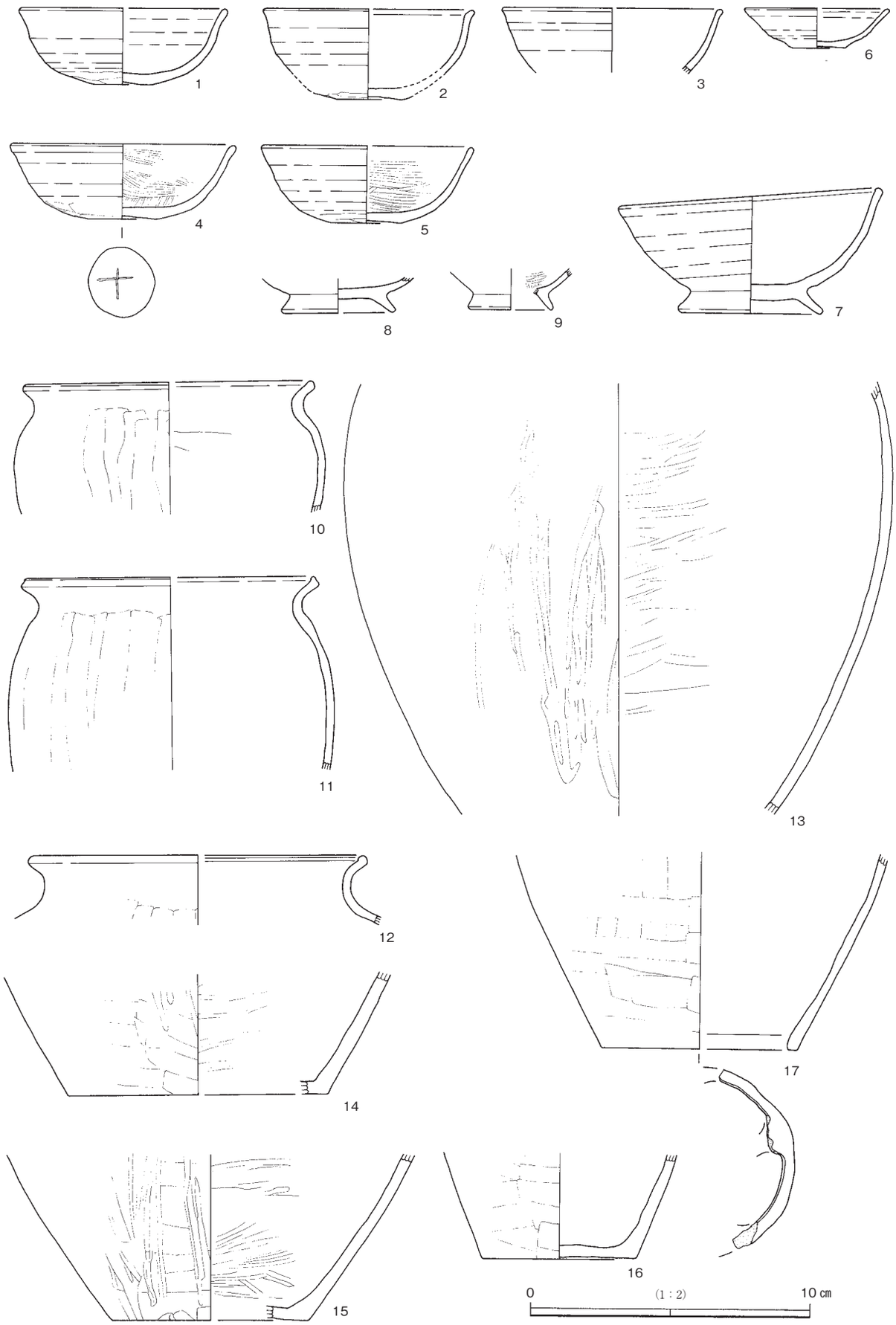


1．黒褐色土　黄褐色土若干含む
2．暗褐色土　黄褐色土やや多く含む
3．黒褐色土　黄褐色土・ローム粒子含む
4．暗褐色土　堆積やや疎
5．暗灰褐色土　黄褐色土・ローム粒子含む
6．暗褐色土　黄褐色土少し含む
7．灰褐色土　黄褐色土含む、堆積やや密
8．暗褐色土　黄褐色土やや多く、ローム粒子含む
9．暗黄褐色土　暗褐色土含む
10．黒褐色土　暗褐色土・ローム粒子少し含む
11．暗褐色土　ローム粒子・焼土粒子若干含む



1. 暗褐色土　山砂少し含む
2. 暗褐色土　焼土粒子・炭化物粒子含む
3. 褐色土　山砂多く含む
4. 褐色土　焼土粒子・黄褐色土含む
5. 黄褐色土　ソフトローム多く含む
6. 暗黄褐色土　ソフトローム・暗褐色土・焼土粒子・ローム粒子含む

第152図　SI-001住居跡



第153図　SI-001住居跡出土土師器

第59表　坪井向遺跡の平安時代土師器観察表

挿図番号	実測番号	遺構	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	色調内面	色調外面	混入物	調整内面	調整外面	底部切り離し	回転方向
1	4	SI-001	土師器	杯	(14.6)	(4.6)	5.5	35%	明赤褐色	明赤褐色	石英、長石、スコリア	ロクロ、ミガキ	ロクロ、手持ちヘラケズリ	回転糸切り	右
2	2	SI-001	土師器	杯	(14.8)	4.6	6.5	45%	赤褐色	赤褐色	石英、スコリア	ナデ、ミガキ	ヨコナデ、ロクロ、ヘラケズリ	回転糸切り	右
3	7	SI-001	土師器	杯	(15.6)	-	-	20%	淡褐色	明褐色	石英、長石、粘土粒	ナデ	ヨコナデ、ロクロ		
4	3	SI-001	土師器	杯	(15.8)	4.8	6.5	45%	淡黄橙色	淡黄橙色	砂粒	ミガキ	ヨコナデ、ロクロ、ヘラケズリ	回転糸切り	右
5	8	SI-001	土師器	杯	(14.9)	(4.9)	5.5	35%	明赤褐色	淡赤褐色	石英、長石、スコリア	ナデ、ミガキ	ヨコナデ、ロクロ、ヘラケズリ	回転糸切り	右
6	6	SI-001	土師器	杯	(10.1)	4.1	2.9	45%	淡褐色	淡褐色	石英、スコリア、粘土粒	ナデ	ヨコナデ、ロクロ	回転糸切り	右
7	1	SI-001	土師器	高台付き杯	18.5	9.9	7.7	90%	黄褐色	淡橙色	石英、長石、粘土粒	ロクロ	ロクロ、ナデ		
8	5	SI-001	土師器	高台付き杯	-	(7.8)	2.5	25%	淡黄橙色	淡黄橙色	石英、長石、スコリア	ナデ	ナデ、ヨコナデ	回転糸切り	右
9	9	SI-001	土師器	高台付き杯	-	(5.7)	-	15%	淡赤褐色	淡赤褐色	石英、スコリア	ミガキ	ナデ		
10	12	SI-001	土師器	甕	(20.2)	-	-	10%	褐色	黒色	石英、スコリア	ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、縦位のヘラケズリ		
11	11	SI-001	土師器	甕	(20.5)	-	-	10%	灰褐色	淡黄褐色	石英、長石、スコリア	ヨコナデ、ナデ	ナデ、ヘラケズリ		
12	10	SI-001	土師器	甕	(23.5)	-	-	5%	淡褐色	灰褐色	石英、スコリア	ナデ	ヘラケズリ		
13	16	SI-001	土師器	甕	-	胴部径39.4	-	10%	灰褐色	暗褐色	石英、長石、スコリア	ミガキ	ヘラケズリ後のヘラミガキ		
14	15	SI-001	土師器	甕	-	(18.6)	-	5%	灰褐色	淡赤褐色	石英、長石、スコリア	ヘラミガキ	ヘラケズリ後のヘラミガキ		
15	14	SI-001	土師器	甕	-	(14.0)	-	5%	灰褐色	淡赤褐色	石英、長石、スコリア	ヘラミガキ	ヘラケズリ後のヘラミガキ		
16	13	SI-001	土師器	甕	-	(11.0)	-	20%	淡黄褐色	暗褐色	石英、長石、スコリア	ヘラナデ	黄位のヘラケズリ	回転糸切り	右
17	17	SI-001	土師器	甑	-	(14.0)	-	10%	黒褐色	淡褐色	石英、長石、スコリア	ナデ	ヘラケズリ		

いる。胴部は球形を呈し、最大径を胴部上位に持つ。口縁部は大きく外反し、口唇部は内側にわずかに段を有し受け口状を呈する。胎土に長石、スコリアを含む。11は口縁部から胴部上半部である。口縁部外面には横方向にナデ、胴部外面は口縁部直下から縦方向にヘラケズリが施されている。内面は口縁部・胴部ともに横方向のナデが施されている。胴部は球状を呈し、最大径を胴部上位に持つ。口縁部は大きく外反

し、口唇部はつまみ出したように受け口状を呈し、内側に段を有する。胎土は石英、長石、スコリアを含む。

12は甕の口縁部付近である。口縁部内外面には横ナデ、胴部外面は口縁部直下から縦方向にヘラケズリが施されている。内面は口縁部・胴部ともにナデが施されている。胴部10・11と比べ、より球形を呈すると考えられる。口縁は胴部より直線状に立ち上がり大きく外反する。口唇部は内側に若干折り返すように作られ段を有する。胎土は長石、スコリアを含む。13は大型甕の胴部である。最大径を胴部上半に持つ卵形を呈すると考えられる。外面は横方向のヘラケズリの後縦方向のヘラミガキを施している。内面はミガキが施されている。胎土には石英、長石、スコリアを含む。

14は甕の底部付近である。焼成は良好で堅致である。外面は横方向のヘラケズリの後ヘラミガキ、内面はミガキが施されている。底部外面はヘラケズリが見られる。胎土は石英、長石、スコリアを含む。15も甕の底部付近である。焼成は良好で堅致である。外面は横方向のヘラケズリの後ヘラミガキ、内面は横方向のヘラミガキが施されている。底部外面はヘラケズリによる調整が施されている。胎土は石英、長石、スコリアを含む。16は甕の底部片である。胴部外面は横位のヘラケズリが施され、内面はヘラナデが施されている。底部はわずかに上げ底状を呈し、回転糸切り痕が残る。胎土には石英、長石、スコリアを含む。

17は甑の底部付近である。底部には、中央の丸い孔を囲むように楕円状の孔が４つあけられていたと考えられる。胴部外面は、上半部は縦方向、下半から底部にかけては横方向のナデを施している。内面はナデが施されている。底部外面はヘラケズリが施されている。

３　中・近世

中・近世の遺構としては、土坑と野馬土手が検出されたが、遺構にともなう出土遺物がなく、遺構の時期を比定するのが困難であった。

遺構

SK-004土坑（第149図、図版23）

平成14年度に検出された土坑である。グリッド29Ｆ-08に位置する。平面形は径2.0mの円形状を呈する。断面は上半部でやや広がるものの、ほぼ円筒状を呈し、検出面からの深さは2.1mを測る。底部は平坦でほぼ円形を呈する。遺物の出土はない。

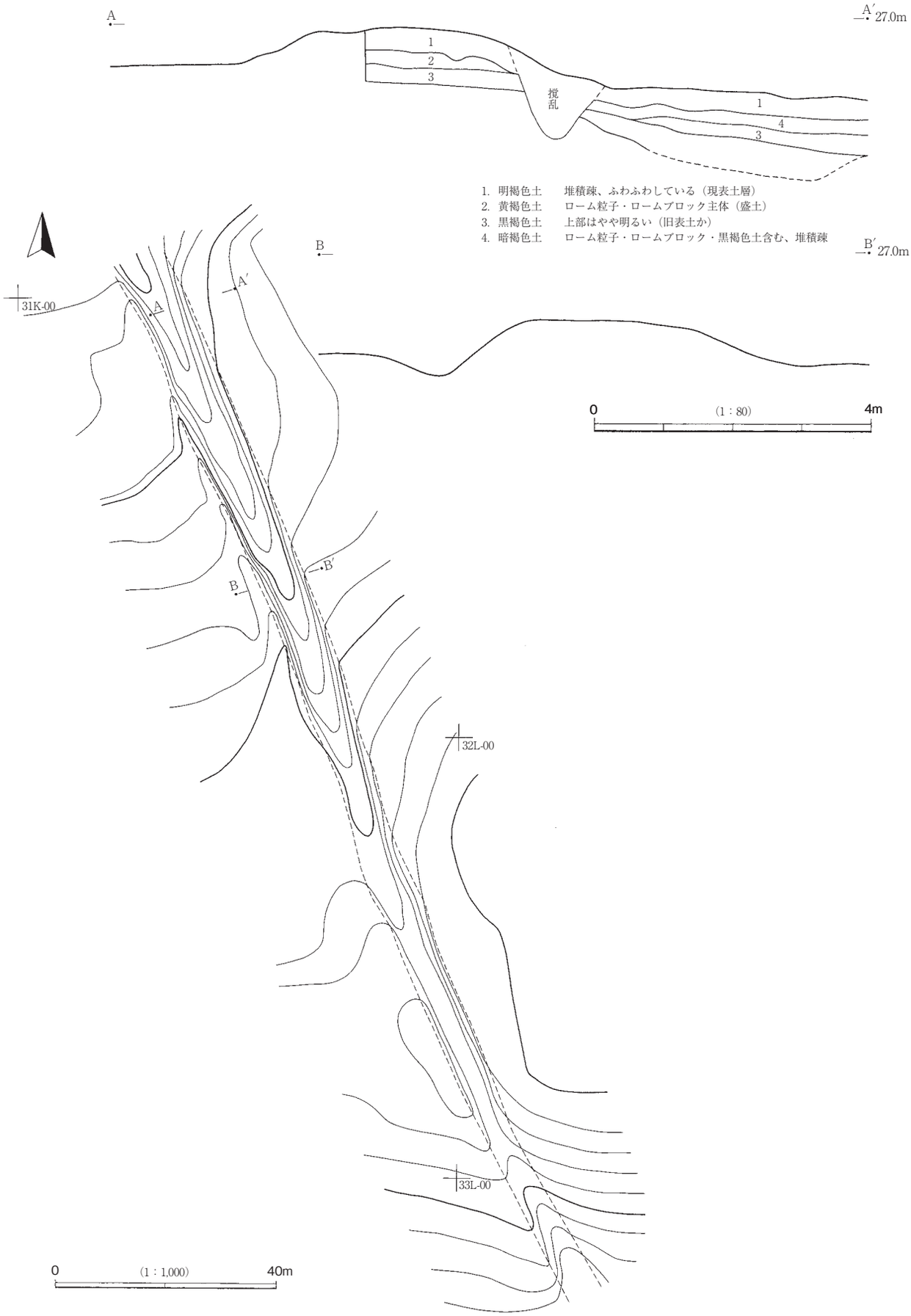
SA-001野馬土手（第154図、図版24）

近世の遺構は、遺跡の南東端に近い大グリッド31Ｋ～33Ｌに位置する。平成17年度の調査で調査区の西端に確認された。土手は幅約３m、高さ約1.5mの高まりを長さ約100mにわたり緩やかに南へ傾斜する台地の上に確認できた。土手は全体的に南に行くにしたがって徐々に低くなっている。確認調査では、土手の遺存状態が、最も良好な北端付近に、土手に直交してトレンチを設定した。その結果、土手の東側には小さく浅い谷が形成されていることや、土手が台地東端の縁辺部に沿って築造されていることが判明した。一方、野馬堀は、トレンチの断面から分かるように作られてはいないようである。西側は調査区外のためトレンチでの調査は不可能であったが、西側には、地表での観察及び測量の結果から野馬土手に沿って堀が存在することは、ほぼ確実である。

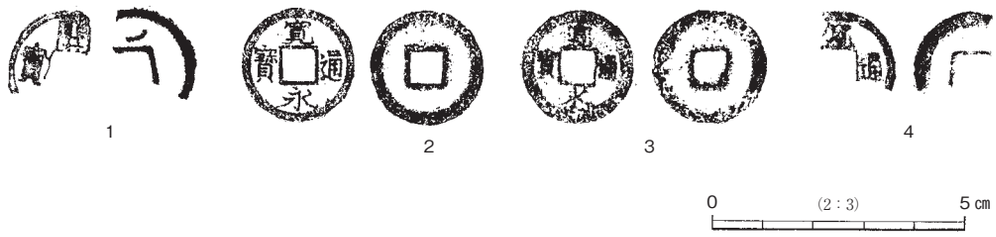
遺物（第155図・第156図、第60表、図版25）

中・近世の遺物として古銭と泥メンコがあった。

第155図の１～４は銭貨である。近世の溝状遺構の覆土等から出土した。１は溝状遺構（調査時SD-005）の覆土から出土した。半分以上を欠損しているが、表面に二文字が残る。「開」および「寶」と読めるこ



第154図　SA-001野馬土手



第155図　銭貨

第60表　坪井向遺跡の銭貨計測表

番号	種類	出土地点	遺物番号	残存率	縁外径 mm	縁内径 mm	郭外径 mm	郭内径 mm	縁厚 mm	肌厚 mm	重量 g	備考
1	開元通宝	SD005	0001	40%	(24.5)	(21.8)	(7.8)	(7.28)	1.0	0.25	(0.73)	
2	寛永通宝	207T	0001	100%	23.0	19.2	7.5	6.3	1.5	0.30	2.24	
3	寛永通宝	212T	0001	100%	22.9	18.1	8.1	6.1	1.6	0.55	2.75	鉄製
4	寛永通宝	209T	0001	33%	(23.3)	(17.3)	(7.8)	(6.5)	1.0	0.50	(0.76)	

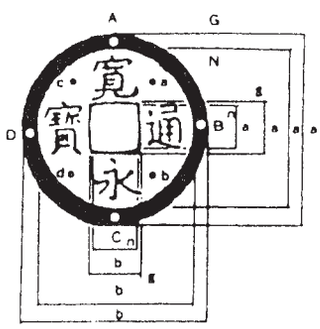
（ ）の数字は，推定値または現存値である。

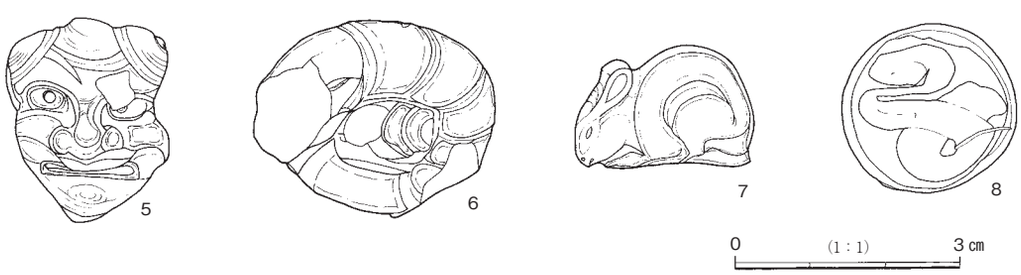
＊銭貨の各部側点については下記のとおりである。

外縁外径 $G = \frac{Ga + Gb}{2}$ ，外縁内径 $N = \frac{Na + Nb}{2}$ ，内郭外径 $g = \frac{ga + gb}{2}$

内郭内径 $n = \frac{na + nb}{2}$

外縁厚 $T = \frac{A + B + C + D}{4}$ ，文字面厚 $t = \frac{a + b + c + d}{4}$





第156図　泥メンコ

とから渡来銭の一つで、国内では比較的多く出土している「開元通宝」であろう。背面には孔の右側上部に三日月状の小さな凸が残る。初鋳は621年である。２～４は寛永通宝である。いずれも遺構検出作業中に出土したものである。２は、銅製の新寛永通宝である。完形である。３は、鉄製の新寛永通宝である。完形である。鉄製一文銭は元文四年（1739）から鋳造された。４は、銅製の新寛永通宝で、半分以上欠損している。

５～８は素焼きの泥メンコで、それぞれ特徴ある文様が見て取れる。５は鬼面で上端両側に角の突起が描写されている。長さ27.2㎜、幅21.0㎜、厚さ8.9㎜、重量2.99ｇであった。６は海老で、頭部が欠損している。胸部から尾部にかけて節および腹肢の描写が見受けられる。長さ26.7㎜、幅33.4㎜、厚さ8.5㎜、重量6.19ｇであった。７は白色の兎である。長さ16.0㎜、幅24.0㎜、厚さ6.3㎜、重量2.35ｇであった。８は円形の中に巳の薄浮彫が見られる。長さ22.5㎜、幅23.0㎜、厚さ8.3㎜、重量5.05ｇであった。

第４節　まとめ

１　旧石器時代（第157図、第61表）

坪井向遺跡では、立川ローム層中から二つのブロックと総数127点の遺物が検出された。これらの資料は、出土層準によって４つの文化層に区分することが可能である。

第１文化層は、第二黒色帯下部（Ⅸc層）から検出された第１・第２ブロックをあてた。第２～第４文化層はブロック外の資料であり、石器の技術形態学的特徴から帰属時期を判断した。本来の出土層位は、第２文化層が立川ロームⅣ下・Ⅴ層、第３文化層が立川ロームⅣ層上半、第４文化層が立川ロームⅢ層中と推定される。なお、この他に帰属時期不明の資料もいくつか見られる。

第61表　坪井向遺跡旧石器時代石器組成表（全体）

	ナイフ形石器	尖頭器	削器	二次加工ある剥片	剥片	砕片	石核	敲石	礫・礫片	計
黒曜石		1	1	1	1	2	1			7
ガラス質黒色安山岩				1	1					2
チャート	1	1		1	104		4			111
珪質頁岩	1			1						2
流紋岩						1		1		2
ホルンフェルス					1					1
安山岩									1	1
メノウ				1						1
合　計	2	2	1	5	107	3	5	1	1	127

第１文化層（第157図10～29）

本文化層は、第１・２ブロックの石器群計111点である。

石器組成は、ナイフ形石器1点、二次加工ある剥片１点、剥片103点、砕片１点、石核３点及び敲石１点、石材組成は、チャート109点、流紋岩２点となっている。敲石と砕片各1点は同一個体であり、その意味ではチャート一色、といっても過言ではない。

技術基盤としては石刃技法が陰を潜め、一般的な横長剥片生産を基調としている。石器組成については、Ⅸ層段階で頻出する石斧、台形様石器などが欠落しており、部分的な様相をみせている。また、利器はわずか２点であり、定形石器であるナイフ形石器も切出形を呈し、当該期の典型例とは言いがたい。いずれ

にしろ両ブロックでは、節理に富むチャートをもとに剥片生産がなされた痕跡をとどめているものの、質量共に零細であり一過性の居住域であった公算が高い。

本地区では最古の文化層であり、地区内ではほかに、本書の東向遺跡第１文化層、近隣には八千代市萱田遺跡群[1)～6)]や、八千代市芝山遺跡[7)]などがある。これらの遺跡では、しばしば大規模な環状ユニットが検出され、これに石斧、基部整形のナイフ形石器及び台形様石器などが共伴している。その意味では本文化層が環状の一部、という見方もあながち否定できない。

第２文化層（第157図６～９）

本文化層は、削器1点、二次加工ある剥片２点、剥片２点、砕片１点、礫片（被熱）１点の計7点で構成される。

石材組成は、黒曜石４点、ガラス質黒色安山岩１点、ホルンフェルス・安山岩各１点である。黒曜石はさらに高原山系３点と伊豆・箱根系（柏峠）１点に区分できる。後者は削器に使用されており、比較的希少性が高い。技術基盤としては横長剥片生産の痕跡をよくとどめている。

なお、類例としては、本地区では西芝山遺跡[8)]、西芝山南遺跡第２文化層[9)]、及び八王子台遺跡第３文化層[10)]があるが、西芝山遺跡が最も近似している。

第３文化層（第157図２）

小型尖頭器１点である。横長剥片を素材としており、片面加工が施されている。石材は高原山産黒曜石と推定される。本地区では、この他、西芝山遺跡（石器集中10）、西芝山南遺跡第３文化層、八王子台遺跡第１文化層がある。

第４文化層（第157図１）

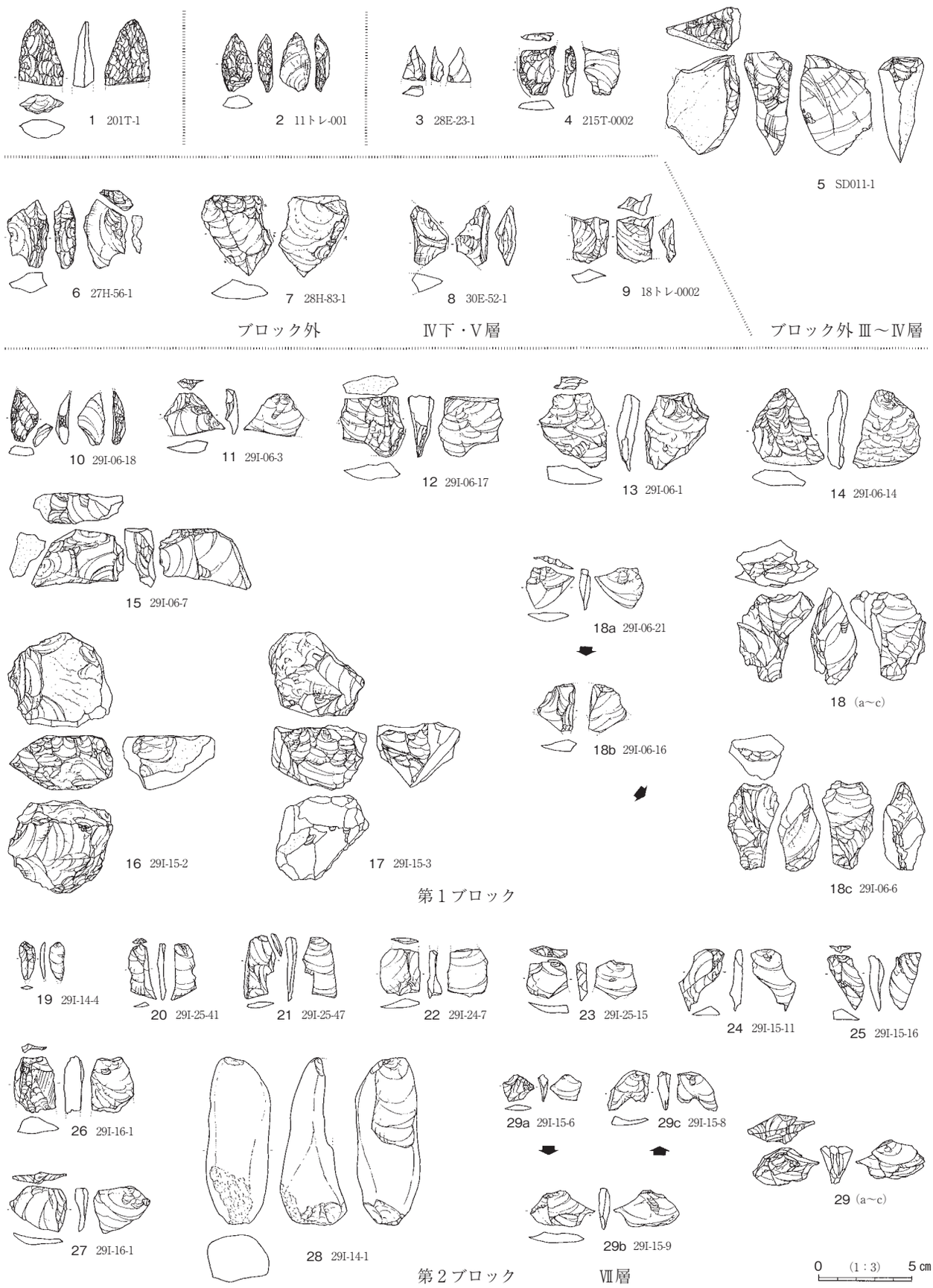
両面加工の尖頭器の残欠１点である。石材はチャートである。本地区では、これまで検出されていない。旧石器時代終末期の所産と推定される。

その他（第157図３～５）

この他に帰属時期が不明な資料７点を一括しておく。内訳はナイフ形石器１点、二次加工ある剥片２点、石核１点、剥片２点、砕片１点である。このうち二次加工ある剥片１点（第157図４）についてはⅣ下・Ⅴ層段階の可能性が考えられる。

今回の調査では、本地区最古の石器群（Ⅸ層下部）の遺物集中が複数みられ、当時の石器群のあり方を探る上で、貴重な資料が得られた。また一般に下総台地の石器石材は北関東系を主体としているが、地域を異にし、希少性の高い石材（柏峠産黒曜石）を見出すことができた。

注１　（財）千葉県文化財センター　1984　『八千代市権現後遺跡－萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅰ－』
２　（財）千葉県文化財センター　1985　『八千代市北海道遺跡－萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－』
３　（財）千葉県文化財センター　1986　『八千代市ヲサル山－萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅲ－』
４　（財）千葉県文化財センター　1987　『八千代市井戸向遺跡－萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅳ－』
５　（財）千葉県文化財センター　1991　『八千代市白幡前遺跡－萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅴ－』
６　（財）千葉県文化財センター　1993　『八千代市坊山遺跡－萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅵ－』
７　（財）千葉県文化財センター　1989　『八千代市仲ノ台・芝山遺跡』
８　（財）千葉県教育振興財団　2007　『西八千代北部地区埋蔵文化財調査報告書１－八千代市西芝山遺跡－』



第157図　坪井向遺跡旧石器時代石器群の変遷

9　（公財）千葉県教育振興財団　2012　『西八千代北部地区埋蔵文化財調査報告書２－八千代市西芝山南遺跡－』
10　（公財）千葉県教育振興財団　2013　『西八千代北部地区埋蔵文化財調査報告書３－八千代市八王子台遺跡－』

２　縄文時代以降

縄文時代の遺構として陥穴３基が検出された。中世の土坑としたSK-004も縄文時代の陥穴である可能性が考えられるが、円形でやや深さが浅いので中世の土坑とした。縄文土器には太い沈線文と櫛歯条線文が施文されていた。これらは、縄文時代中期の加曽利Ｅ式などに含まれる文様である。西八千代北部地区の八王子台遺跡で検出された縄文時代中期後半の集落と、ほぼ同時期の土器片ともいえるだろう。

平安時代の竪穴住居跡１軒が検出された。SI-001住居跡から出土した土師器は、ロクロによる杯の成形、杯底部の回転糸切り離し痕、杯および高台付杯の器形などの特徴から、９世紀末から10世紀前半の時期に相当すると考えられる。

近世の野馬土手が遺跡範囲南東側で約100mにわたって直線状に伸びていた。坪井向遺跡の東側には小規模な谷が接していて、野馬土手は台地と谷とを分けるかのように、台地縁辺に沿って位置していた。つまり台地と谷とを分かつように土手が築かれた可能性がうかがえる。また土手の西側にそって堀が掘られているので、台地側から見ると、堀と土手の高さによって、谷に向かって越えられないように工夫されたと考えられる。イノシシなどの害獣の侵入を防ぐというよりも、馬が谷に降りないように土手が構築されたのであろう。

『房総の近世牧跡』によると、坪井向遺跡に南接して古道が通り、下野牧はさらに南側に想定されている[1)]。坪井向遺跡は牧本体の内部に相当しないが、牧周辺部として馬の飼養に関連したのであろう。

注１　千葉県教育委員会　2006　『房総の近世牧跡』

第４章　川向遺跡

第１節　調査の経過

川向遺跡は事業地の北端に位置する。遺跡の総面積は約29,000㎡である。調査区は標高19m～11mの台地先端にあたり、南東から北西へ向かって緩やかに傾斜している（第158図）。調査前の現況は荒蕪地である。

発掘調査は平成17年度（2005年度）と平成19年度（2007年度）に実施された。調査面積の累積は約29,000㎡である（第159図～第161図）。確認調査（上層：2,994㎡、下層：1,125㎡）の結果、上層については本調査に至らなかったが、下層については平成19年度に実施され、その結果遺物集中地点が３か所検出された（本調査面積150㎡）。

整理作業は平成20年度（2008年度）に始まり、平成25年度（2013年度）まで実施された

以上の発掘調査・整理作業の実施期間・担当職員・内容は以下のとおりである。

（発掘調査）

（１）平成17年度

期　間　平成17年12月１日～平成18年２月28日

組　織　調査部長　矢戸三男，北部調査事務所長　古内　茂

担当者　研究員　大内千年

内　容　上層確認調査　2,098㎡／19,710㎡，下層確認調査　673㎡／19,710㎡

（２）平成19年度

期　間　平成19年９月18日～11月14日

組　織　調査研究部長　矢戸三男，北部調査事務所長　豊田佳伸

担当者　主席研究員　雨宮龍太郎

内　容　上層確認調査　896㎡／8,952㎡，下層確認調査　452㎡／8,952㎡，下層本調査　150㎡

（整理作業）

（１）平成20年度

期　間　平成21年２月２日～３月31日

組　織　調査研究部長　大原正義，北部調査事務所長　豊田佳伸

担当者　主席研究員　髙橋博文，雨宮龍太郎，上席研究員　井上哲朗

内　容　水洗注記から分類の一部まで

（２）平成21年度

期　間　平成22年３月１日～３月31日

組　織　調査研究部長　及川淳一，北部調査事務所長　野口行雄

担当者　主席研究員　宮　重行，上席研究員　内山　健

内　容　分類・選別の一部から実測の一部まで

（３）平成24年度

期　間　平成24年４月２日～平成25年１月31日

組　織　調査研究部長　関口達彦，整理課長　高田　博

担当者　主任上席文化財主事　雨宮龍太郎

内　容　実測の一部から編集まで

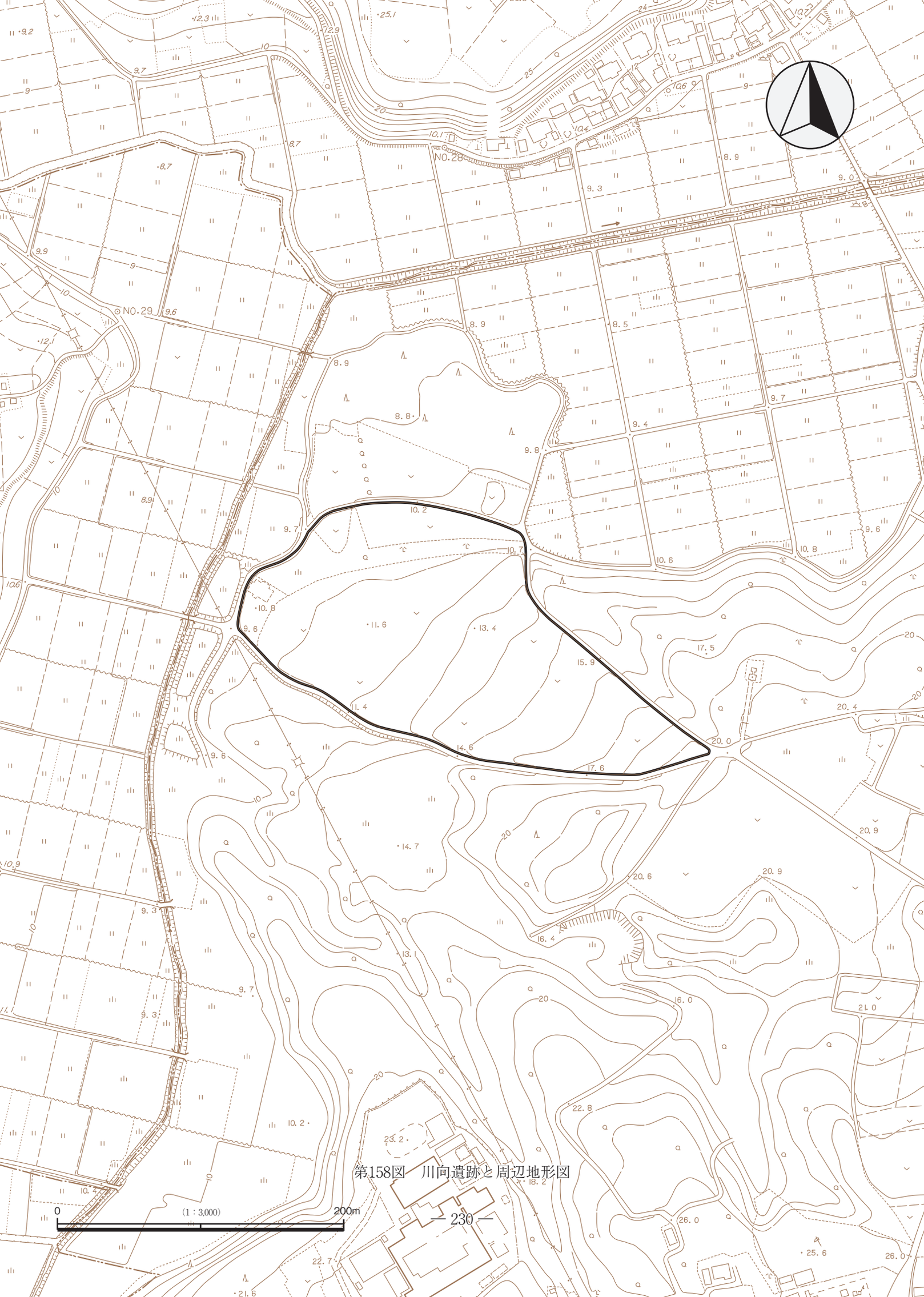
（４）平成25年度

期　間　平成25年４月１日～平成26年３月31日

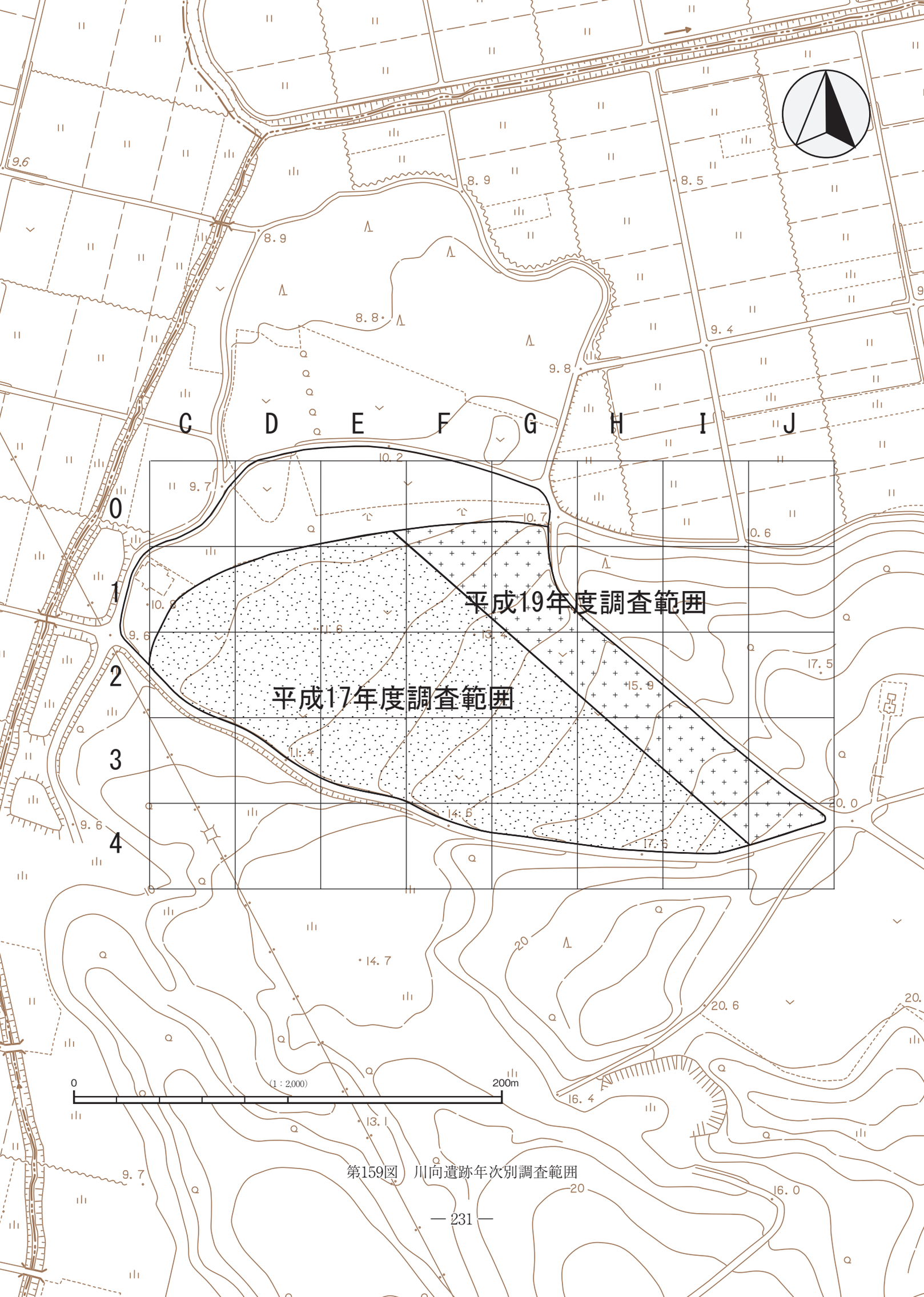
組　織　調査研究部長　伊藤智樹、整理課長　今泉　潔

担当者　主任上席文化財主事　森本和男、上席文化財主事　橋本勝雄

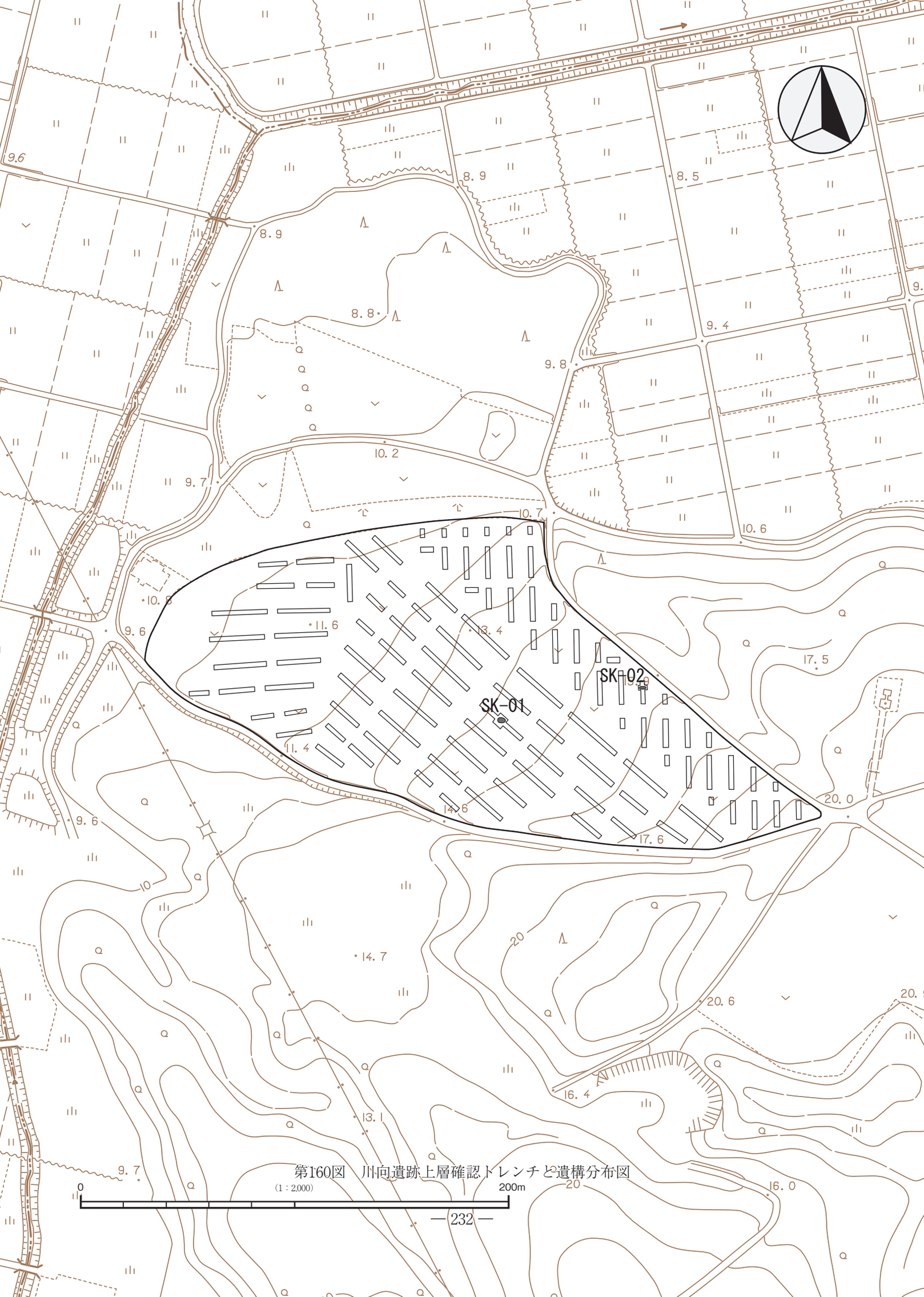
内　容　編集から刊行まで



第158図　川向遺跡と周辺地形図



第159図　川向遺跡年次別調査範囲



第160図　川向遺跡上層確認トレンチと遺構分布図

第161図　川向遺跡下層確認グリッドと本調査区

第２節　旧石器時代

本遺跡では、東側の埋没谷に沿って３か所の遺物集中地点（ブロック）が、そのほかの台地平坦部から散発的に遺物が検出された。ここでは、これらのブロックを中心として調査成果を順次記述する。

１　第１ブロック（第162図～第165図、第62表、図版27・54・56）

１）概　　要

北に突出する台地の先端部付近に立地する。標高は約12m、比較的小規模で遺物量も乏しいが、密集度は非常に高い。

平面分布は長径約４m、短径約1.5mの帯状を呈し、特に南側の径約1.5mの範囲に密集している。この範囲には石核のほか同一石材の剥片類が多数分布しており、中には接合資料も３例ある。剥片生産から二次加工に至る一連の製作工程を色濃くとどめている。

出土層準はソフトローム（立川ロームⅢ層）下部からハードローム（Ⅳ-Ⅴ層）上部であり、特に両者の境界付近に遺物が密集する。出土遺物の高低差は約0.3mを測り、比較的コンパクトである。

遺物はナイフ形石器３点、削器1点、二次加工ある剥片６点、剥片３点、砕片37点、石核７点の合計57点が出土した（第62表）。これらの石器石材は、黒曜石55点、チャート１点、黒色頁岩１点で構成される。単独母岩の後二者はともに石核である。黒曜石は半透明で斑晶も少なく高品質である。母岩別資料は、第64図１のナイフ形石器が単独母岩であったが、それ以外は識別不能であり同一母岩の可能性もある。

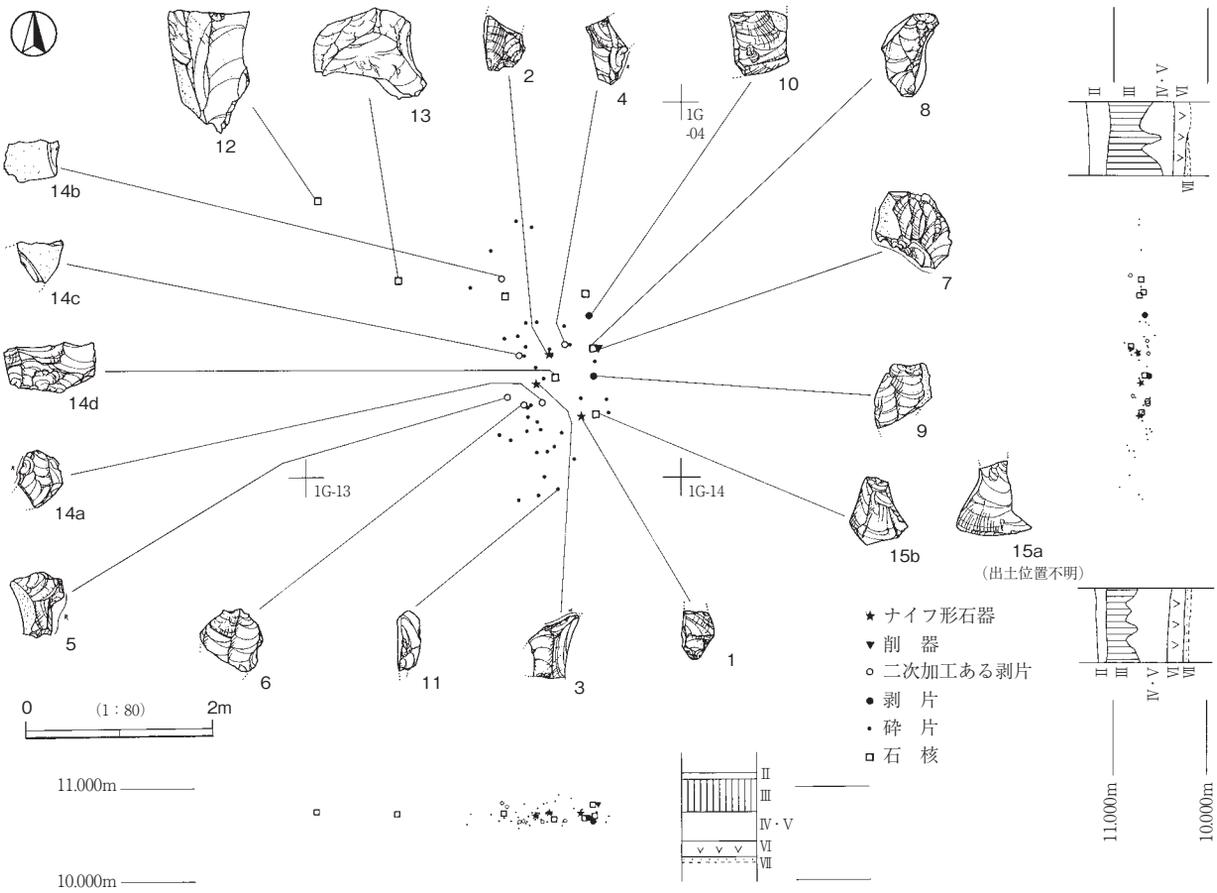
２）出土遺物

第164図１～３は小型のナイフ形石器で、いずれも黒曜石製である。１と２は二側縁加工であり、先端部が欠損している。３は先端部の部分加工であり、左側縁が欠損している。４～６は二次加工ある剥片である。４と５は削器の可能性もあるが、二次加工は部分的である。７は削器で、作業縁は鋸歯状を呈する。８、12、13は石核で、ともに横長剥片を生産している。なお12は黒色頁岩、13はチャートである。9～10は横長剥片、11は砕片である。11については背面に二次加工の痕跡が残されており、削器の調整剥片の可能性が高い。14～16は接合資料である。14は二次加工ある剥片３点（14a～c）と石核１点（14d）からなる資料であり、片面に礫面を残す扁平な剥片を素材として、連続的に横長剥片を生産している。残された剥片には、いずれも二次加工が施されている。石核は、断面転移が頻繁ないわゆるサイコロ状石核である。

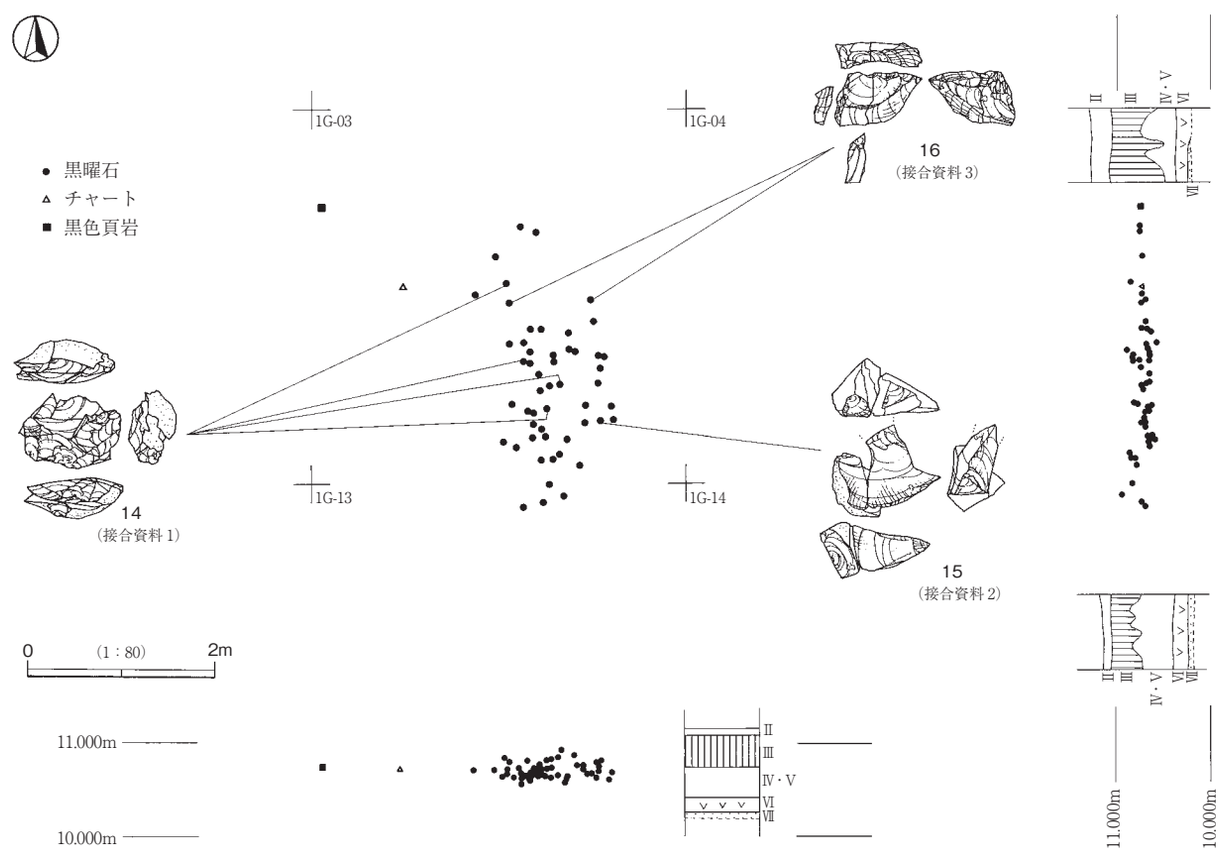
15は、横長剥片（15a）と石核（15b）、16は石核の接合資料である。16は剥片生産の際に偶発的な縦割れが生じたため左右に分割されている。以上の接合資料からは、執拗な剥片生産によって用材が使い尽くされていることが理解される。

第62表　川向遺跡石器組成表（第１ブロック）

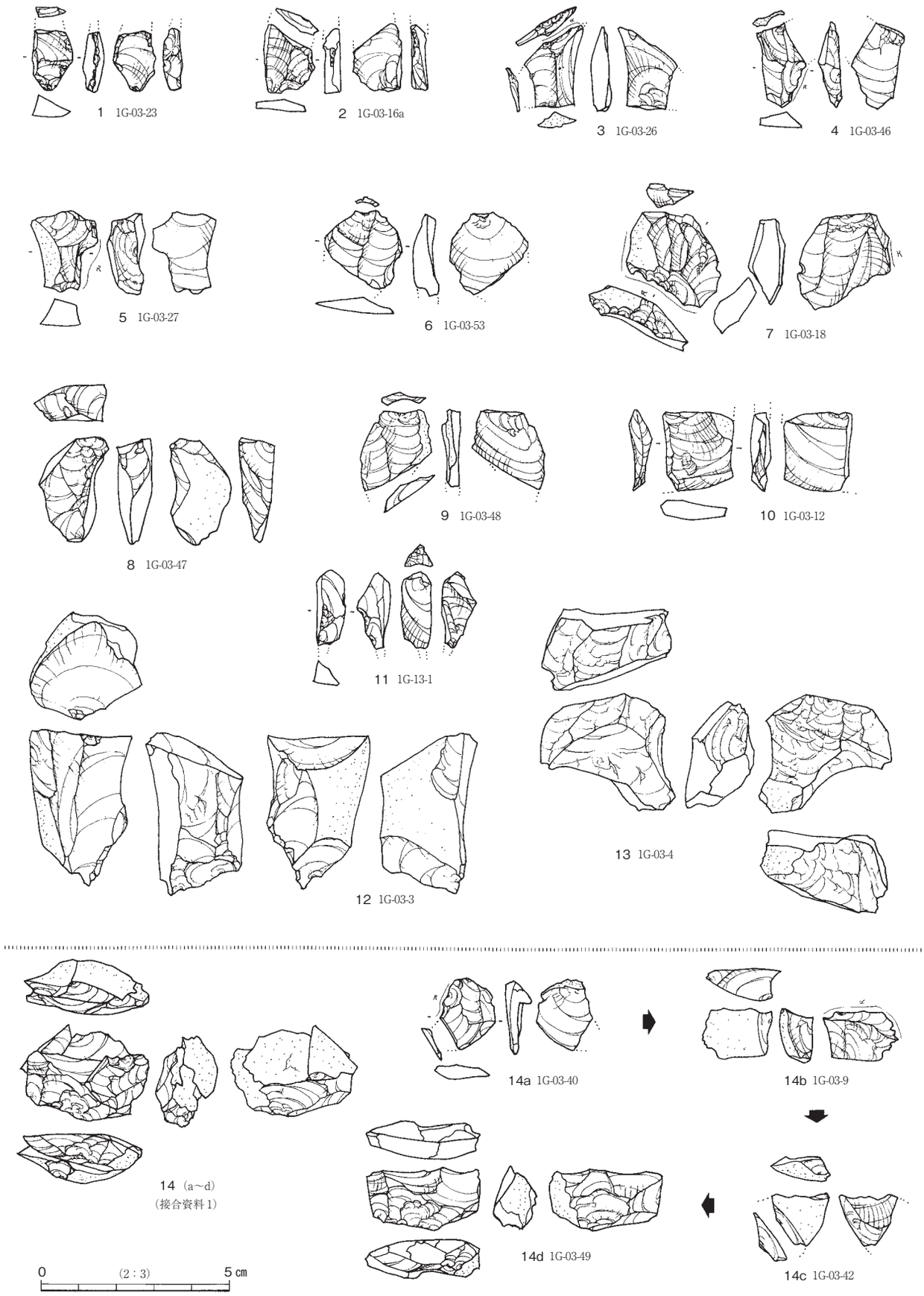
	ナイフ形石器	削器	楔形石器	二次加工ある剥片	剥片	砕片	石核	礫・礫片	計
黒曜石	3	1		6	3	37	5		55
ガラス質黒色安山岩									
チャート							1		1
黒色頁岩							1		1
珪質頁岩									
流紋岩									
ホルンフェルス									
合　計	3	1		6	3	37	7		57



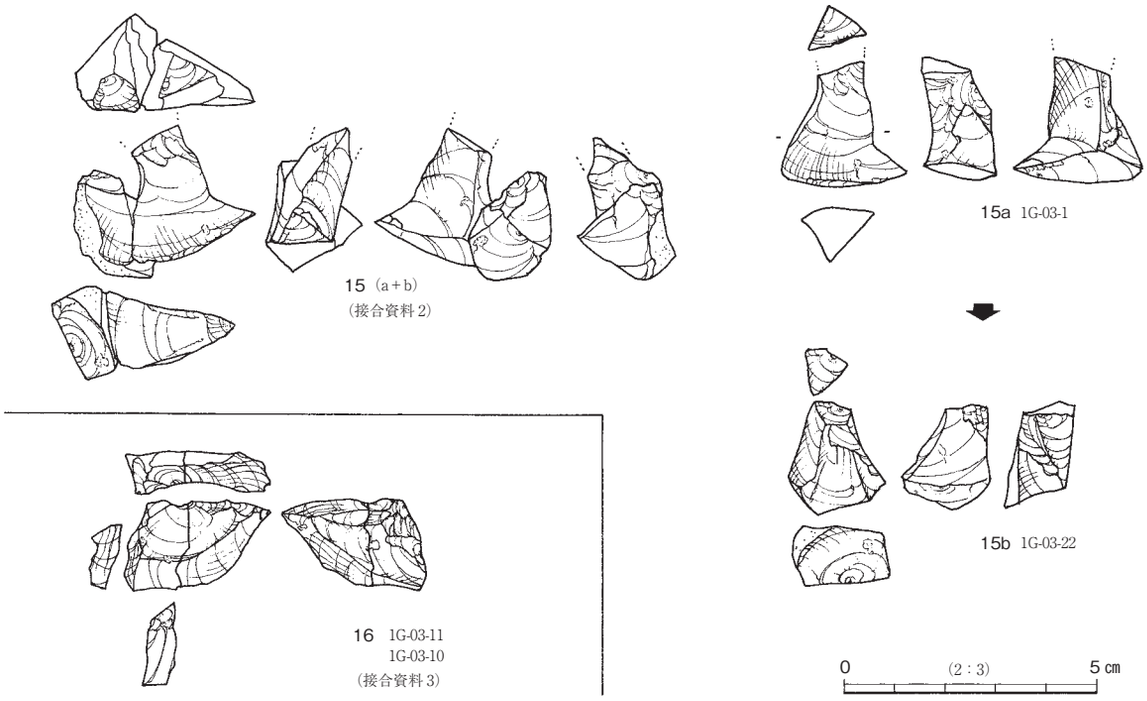
第162図　第１ブロック出土遺物分布図（１）－石器別分布図－



第163図　第１ブロック出土遺物分布図（２）－石材別分布図－



第164図　第１ブロック出土遺物実測図（１）



第165図　第１ブロック出土遺物実測図（2）

２　第２ブロック（第166図～第168図、第63表、図版27・54・56）

１）概　　要

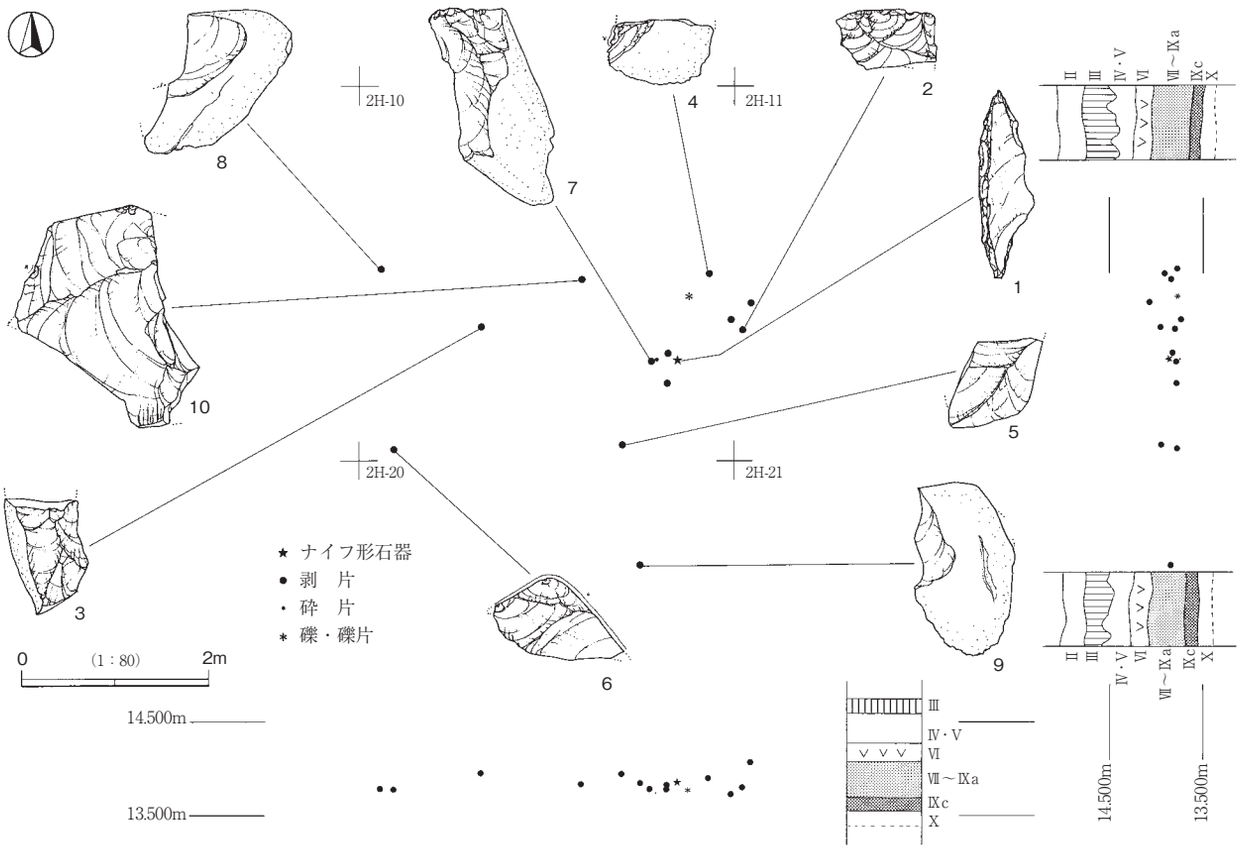
北に突出する台地の平坦部に立地する。東側には、かつて小支谷が存在したようである。標高は約14mで、第１ブロックに比べ高位に位置する。遺物量は乏しいが比較的広範囲に分布しており、疎密の差があまりみられない。平面分布は約４ｍの円形を呈している。分布密度は希薄で接合資料はない。垂直分布は第二黒色帯上部（立川ロームⅦ層）に集中する。遺物の高低差は約0.4mである。遺物はナイフ形石器１点、剥片15点、砕片・礫片各１点の合計18点が出土した（第63表）。これらの石器石材はガラス質黒色安山岩13点、チャート４点、ホルンフェルス１点で構成される。ガラス質黒色安山岩については母岩別資料の識別は不能であった。チャートは青黒色で同一母岩である。

２）出土遺物

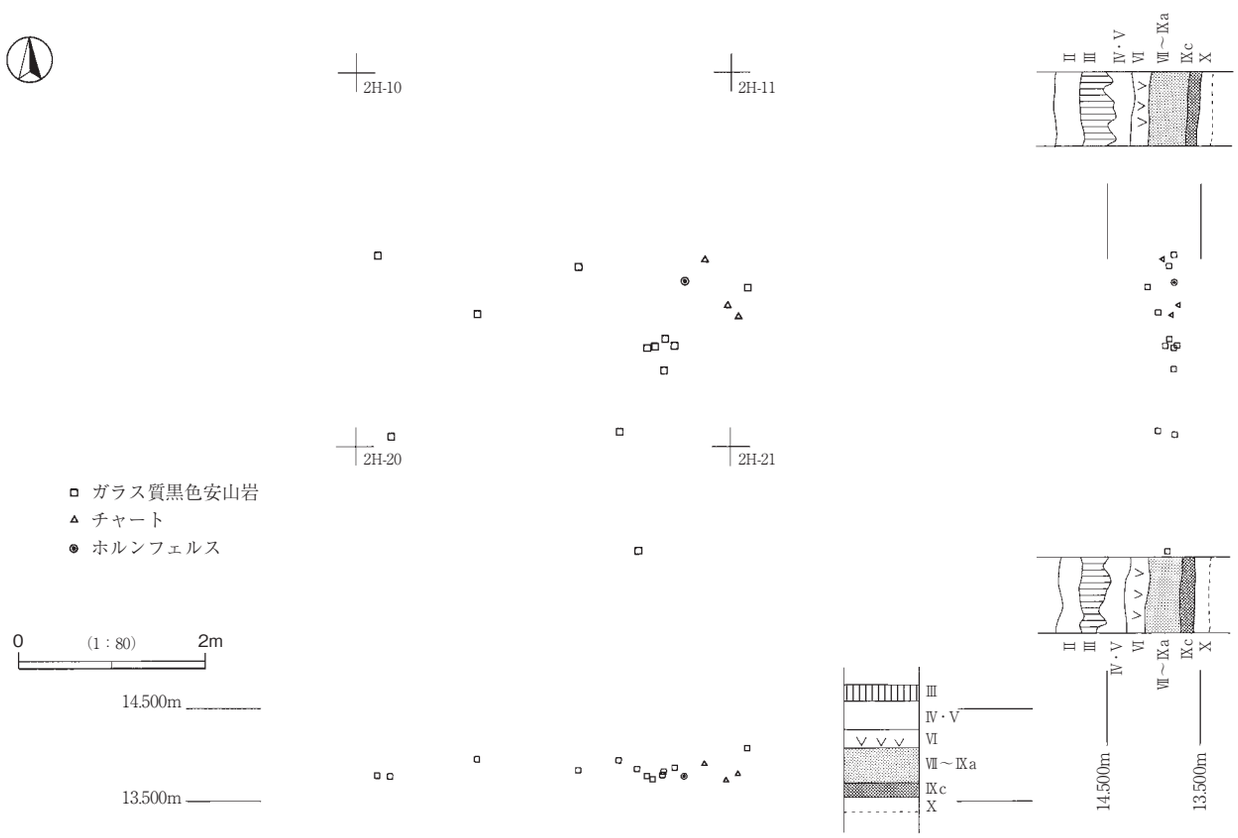
第168図１はナイフ形石器である。二側縁加工で左側に対向調整加工が見られる。素材はおそらく大型石刃であろう。２～10は剥片である。縦長剥片もあるが、真正の石刃は特に見られない。

第63表　川向遺跡石器組成表（第２ブロック）

	ナイフ形石器	削器	楔形石器	二次加工ある剥片	剥片	砕片	石核	礫・礫片	計
黒曜石									
ガラス質黒色安山岩	1				11	1			13
チャート					4				4
黒色頁岩									
珪質頁岩									
流紋岩									
ホルンフェルス								1	1
合　計	1				15	1		1	18

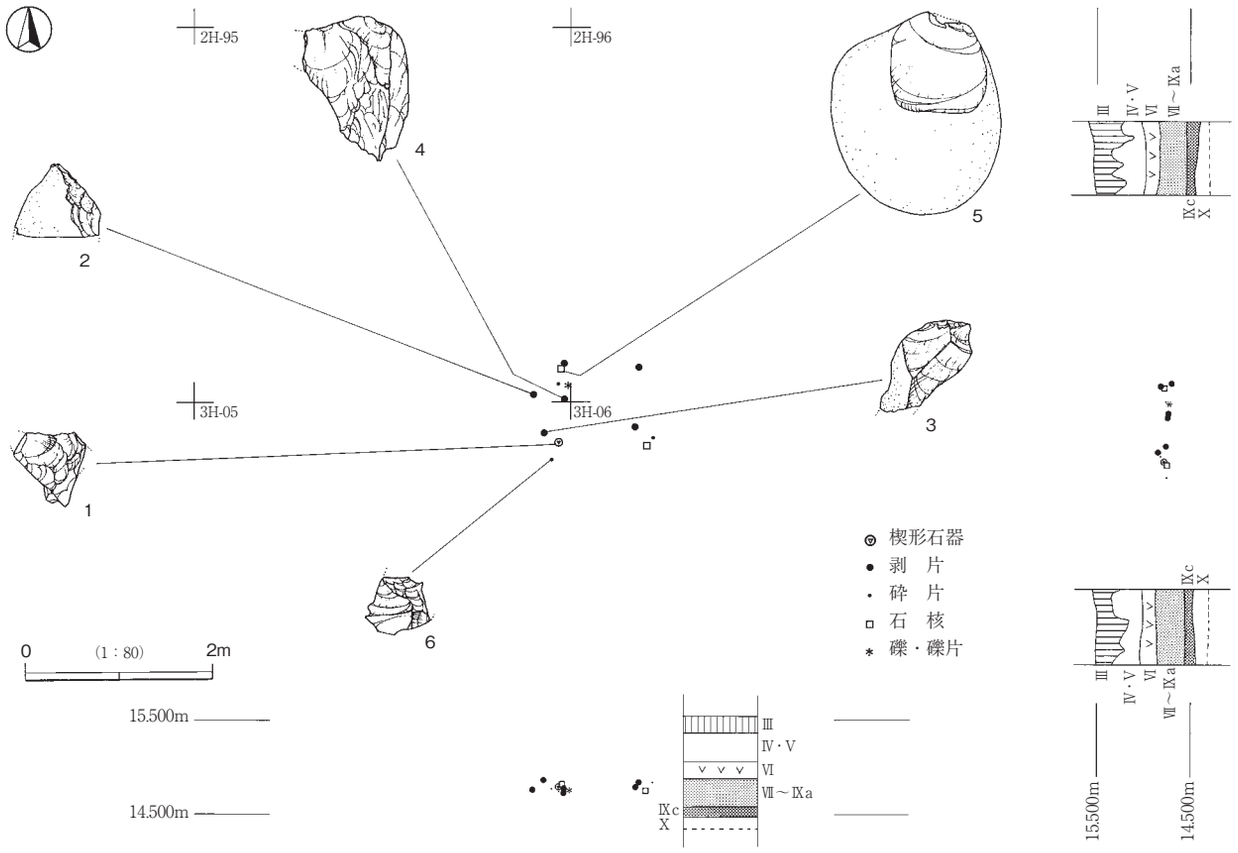


第166図　第２ブロック出土遺物分布図（１）－石器別分布図－

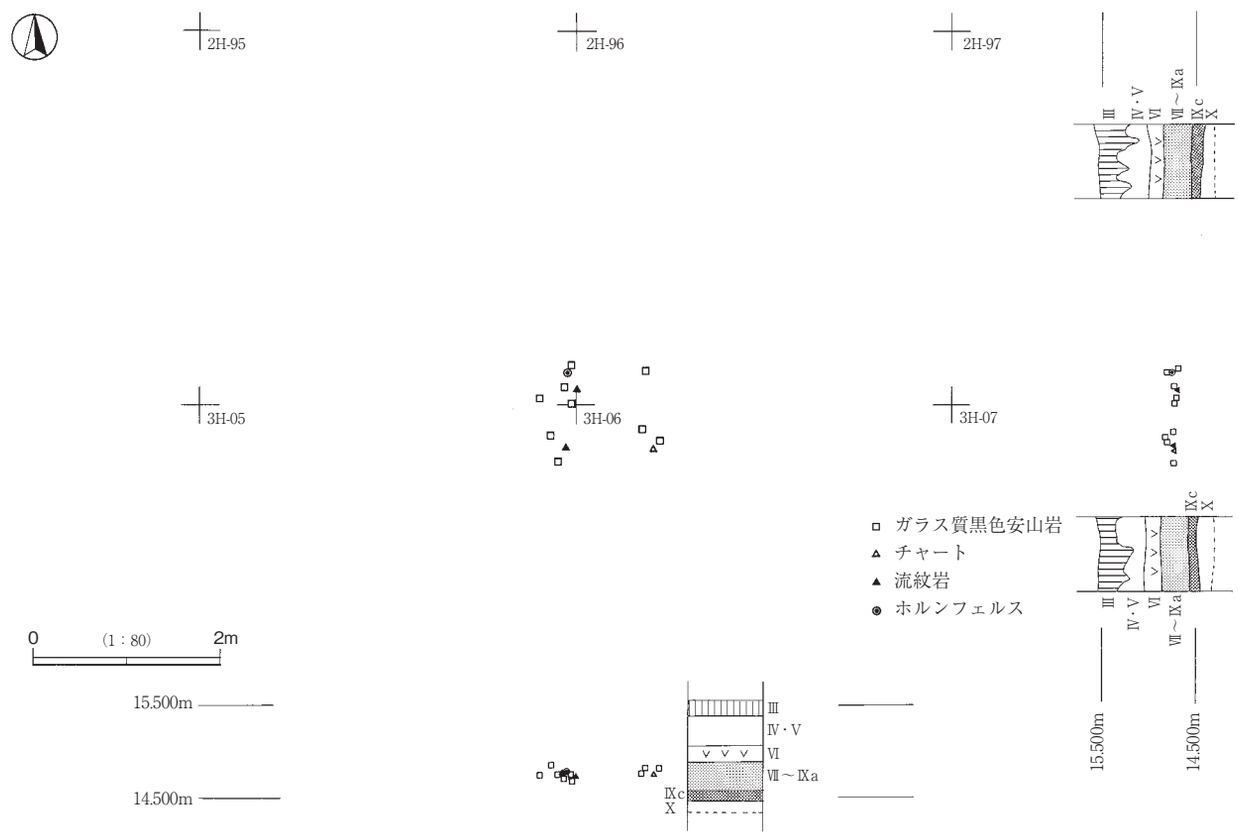


第167図　第２ブロック出土遺物分布図（２）－石材別分布図－

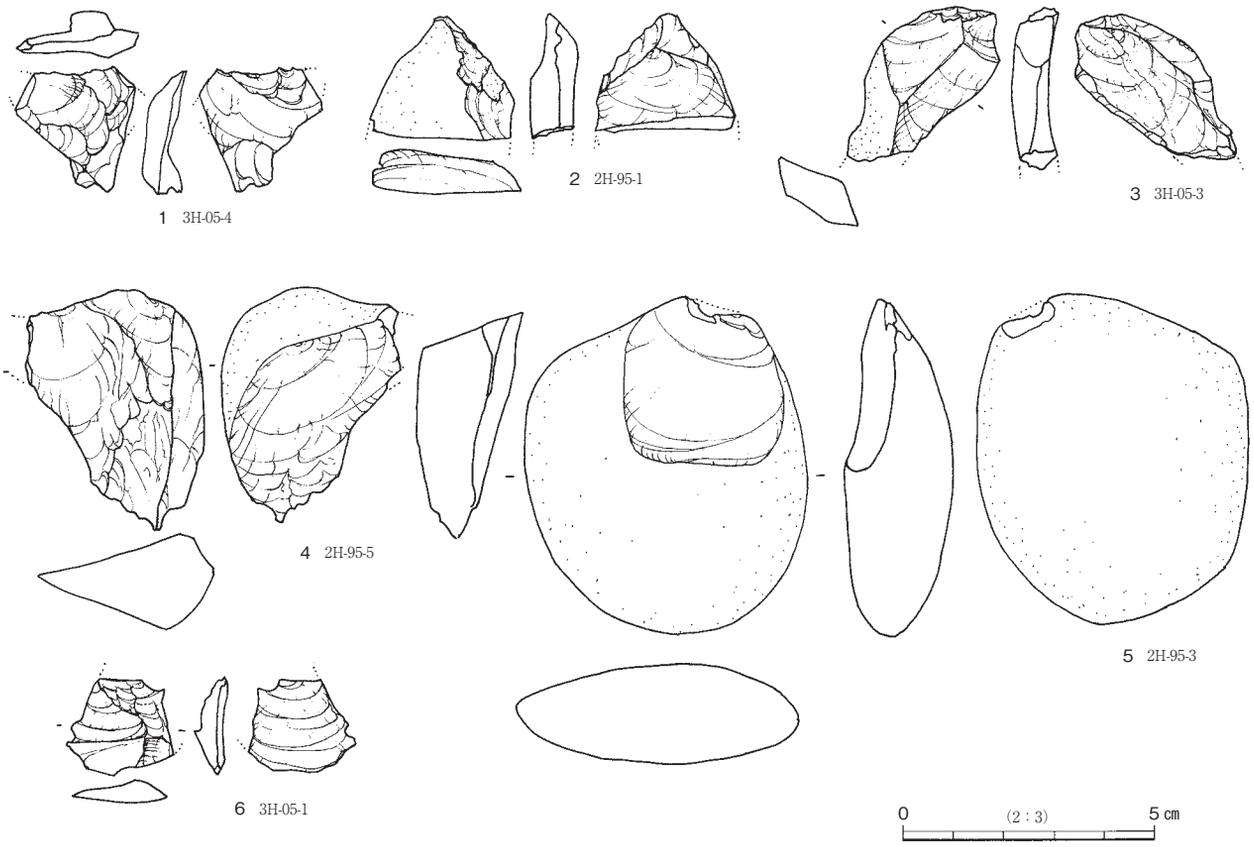
第168図　第２ブロック出土遺物実測図



第169図　第３ブロック出土遺物分布図（１）－石器別分布図－



第170図　第３ブロック出土遺物分布図（２）－石材別分布図－



第171図　第３ブロック出土遺物実測図

３　第３ブロック（第169図～第171図、第64表、図版27・54・56）

１）概　　要

北に突出する台地の平坦部にある。標高は約15mと本遺跡では最も高位に位置する。同一文化層の第２ブロックは本ブロックの北西約30mに所在する。遺物量が乏しいが集中度は高い。平面分布は約1.2mの円形を呈している。極めて小規模で接合資料はない。垂直分布は第二黒色帯上部（立川ロームⅦ層）に集中する。遺物の高低差は約0.3mである。

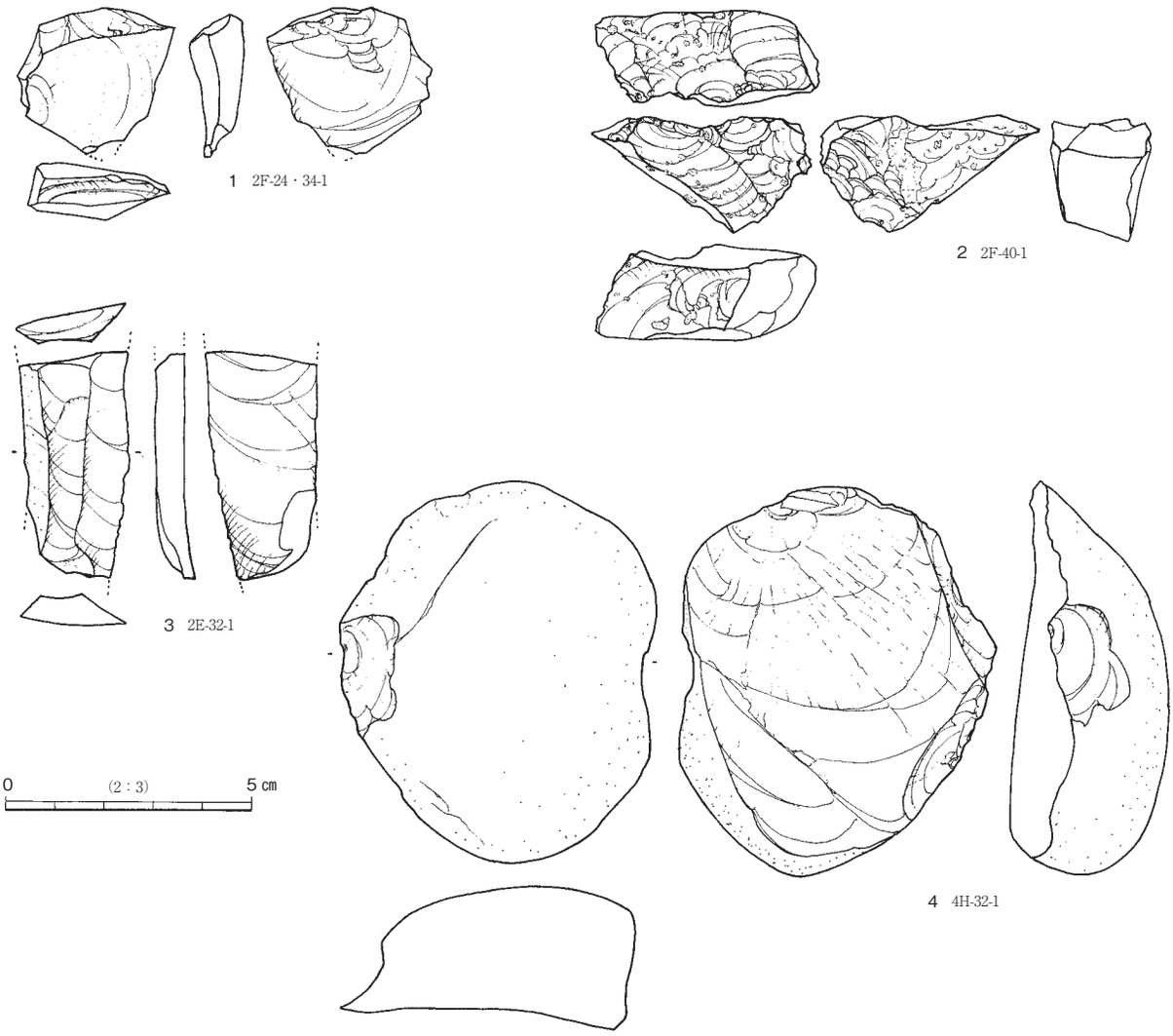
遺物は、楔形石器１点、剥片７点、砕片４点、石核２点、礫片１点の合計15点が出土した（第64表）。これらの石器石材は、ガラス質黒色安山岩11点、チャート１点、流紋岩２点、ホルンフェルス１点で構成される。ガラス質黒色安山岩は、基本的に母岩別資料の識別は不能であったが、砕片１点については単独母岩である。流紋岩２点についてはそれぞれ別母岩であった。

２）出土遺物

１は楔形石器である。白色系の流紋岩を石材として用いている。２～４は横長剥片である。いずれも自然面を一部残置しており、拳大の円礫を素材にしていることが理解される。５は石核である。ホルンフェルス製の扁平礫から横長剥片を剥離した痕跡をとどめている。６は打面部が欠損した砕片である。

第64表　川向遺跡石器組成表（第３ブロック）

	ナイフ形石器	削器	楔形石器	二次加工ある剥片	剥片	砕片	石核	礫・礫片	計
黒曜石									
ガラス質黒色安山岩					7	4			11
チャート							1		1
黒色頁岩									
珪質頁岩									
流紋岩			1					1	2
ホルンフェルス							1		1
合　計			1		7	4	2	1	15



第172図　単独出土遺物実測図

4　ブロック外（第172図、第65表、図版55・図版56）

ブロック外から石器６点が出土した。出土層位が判明している資料としては、立川ロームⅨ層から石刃（２Ｅ32）、石核（４Ｈ32）、立川ロームⅦ層から剥片（１Ｆ83）が各１点出土した。また、このほか採集資料として、石核、剥片、礫片（被熱・赤化）各1点がある。

１はチャート製の横長剥片である。背面側には節理面が残されている。打面には複数の剥離面があり、頻繁な打面転移のようすがうかがわれる。２は打面転移の頻繁なサイコロ状の石核である。いわゆる残核であり、この個体からは多数の横長剥片が生産されたと考えられる。石材は斑晶に富む漆黒色の高原山系黒曜石である。採集品ではあるが、諸特徴から本来の層準はⅣ下・Ⅴ層と推定される。３は黒曜石製の石刃である。斑晶がなく半透明で良質である。上半部が欠損しており、主要剥離面の下端部右側面には損傷（ガジリ）が見られる。４は円礫を用いた石核である。剥離面は単一であり、あたかも円礫を輪切りにしたかのようである。石材は粗粒の珪質頁岩である。

第65表　川向遺跡石器組成表（ブロック外・単独出土）

	ナイフ形石器	削器	楔形石器	二次加工ある剥片	剥片	砕片	石核	礫・礫片	計
黒曜石					2		1		3
ガラス質黒色安山岩									
チャート					1				1
黒色頁岩									
珪質頁岩							1		1
流紋岩								1	1
ホルンフェルス									
合　計					3		2	1	6

第66表　川向遺跡（下層）出土遺物一覧（第１ブロック）

整理番号	グリッド	遺物No.	取上No.	挿図No.	器種	石材	計測値（cm/g）				母岩No.	接合No.	備考
							長さ	幅	厚さ	重量			
1	1G03	1	1	15a	剥片	黒曜石	2.4	2.4	1.1	4.57		No. 2-1	
2		2	2		砕片	黒曜石	1.2	1.4	0.3	0.25			
3		3	3	12	石核	黒色頁岩	4.0	2.8	2.6	28.98	単独１		
4		4	4	13	石核	チャート	3.1	3.6	1.8	18.66	単独２		
5		5	5		砕片	黒曜石	1.3	1.1	0.3	0.23			
6		6	6		砕片	黒曜石	1.3	0.9	0.1	0.11			
7		7	7		砕片	黒曜石	0.9	0.8	0.2	0.07			
8		8	8		砕片	黒曜石	2.2	1.0	0.2	0.27			
9		9	9	14b	二次加工ある剥片	黒曜石	1.5	1.8	0.8	2.03		No. 1-1	
10		10	10	16	石核	黒曜石	1.9	2.8	0.8	1.76		No. 3-1	
11		11	11	16	石核	黒曜石				1.67		No. 3-2	
12		12	12	10	剥片	黒曜石	2.1	1.8	0.5	2.44			
13		13	13		砕片	黒曜石	0.5	1.1	0.3	0.09			
14		14	14		砕片	黒曜石	1.5	1.0	0.2	0.25			
15		15	15		砕片	黒曜石	0.5	0.7	0.2	0.03			
16		16	16	2	ナイフ形石器・砕片	黒曜石	1.8 0.8	1.4 1.1	0.4 0.2	a:1.00 b:0.08			複数個体
17		17	17		砕片	黒曜石	0.8	1.7	0.2	0.22			
18		18	18	7	削器	黒曜石	2.3	2.5	0.8	4.15			
19		19	19		砕片	黒曜石	1.1	2.5	0.4	0.69			
20		20	20		砕片	黒曜石	1.7	0.7	0.1	0.03			
21		21	21		砕片	黒曜石	1.7	0.8	0.3	0.30			
22		22	22	15b	石核	黒曜石	2.1	1.9	1.1	3.89		No. 2-2	
23		23	23	1	ナイフ形石器	黒曜石	1.6	1.0	0.5	0.78	単独３		先端部欠損
24		24	24		砕片	黒曜石	0.6	1.1	0.2	0.05			
25		25	25		砕片	黒曜石	1 0.9	0.6 0.3	0.1 0.1	a:0.03 b:0.02			複数個体
26		26	26	3	ナイフ形石器	黒曜石	2.0	1.6	0.5	1.14			
27		27	27	5	二次加工ある剥片	黒曜石	2.1	1.8	0.8	2.73			掻器？
28		28	28		砕片	黒曜石	1.8	2.5	0.2	0.26			
29		29	29		砕片	黒曜石	0.7	0.7	0.2	0.07			
30		30	30		砕片	黒曜石	0.4	0.8	0.1	0.02			
31		31	31		砕片	黒曜石	1.7	1.3	0.4	0.50			
32		32	32		砕片	黒曜石	0.8	0.6	0.2	0.04			
33		33	33		砕片	黒曜石	0.9	1.5	0.2	0.21			
34		34	35		砕片	黒曜石	1.0	1.0	0.2	0.15			
35		35	38		砕片	黒曜石	1.2	1.4	0.3	0.26			
36		36	39		砕片	黒曜石	0.9	1.3	0.3	0.35			
37		37	40		砕片	黒曜石	1.6	1.3	0.4	0.63			
38		38	41		砕片	黒曜石	0.9	1.9	0.5	0.47			
39		39	42		砕片	黒曜石	1.0	1.4	0.2	0.24			
40		40	43	14a	二次加工ある剥片	黒曜石	1.8	1.5	0.5	1.03		No. 1-2	
41		41	44		砕片	黒曜石	1.2	1.3	0.2	0.25			
42		42	45	14c	二次加工ある剥片	黒曜石	1.5	1.5	0.6	1.02		No. 1-3	
43		43	46		砕片	黒曜石	1.5	1.6	0.4	0.49			
44		44	47		砕片	黒曜石	1.5	1.3	0.5	0.76			
45		45	48		砕片	黒曜石	1.6	1.3	0.5	0.62			
46		46	49	4	二次加工ある剥片	黒曜石	2.2	1.3	0.5	1.18			
47		47	50	8	石核	黒曜石	2.8	1.5	0.9	3.65			
48		48	51	9	剥片	黒曜石	2.1	1.9	0.3	1.37			
49		49	52	14d	石核	黒曜石	3.0	1.7	0.8	4.46		No. 1- 4	
50		50	53		砕片	黒曜石	0.6 0.5	0.8 0.7	0.1 0.1	a:0.04 b:0.03			

整理番号	グリッド	遺物No.	取上No.	挿図No.	器種	石材	計測値（cm /g）				母岩No.	接合No.	備考
							長さ	幅	厚さ	重量			
51	1G03	51	54		砕片	黒曜石	0.8	0.6	0.1	0.05			
52		52	55		砕片	黒曜石	0.9	1.0	0.6	0.31			
53		53	56	6	二次加工ある剥片	黒曜石	2.0	2.0	0.3	1.45			
54	1G13	1	34	11	砕片	黒曜石	1.9	0.8	0.8	1.18			掻器刃部付近
55		2	36		砕片	黒曜石	0.5	0.8	0.2	0.07			
56		3	37		砕片	黒曜石	1.0	0.7	0.2	0.13			

第67表　川向遺跡（下層）出土遺物一覧（第２ブロック）

整理番号	グリッド	遺物No.	取上No.	挿図No.	器種	石材	計測値（cm /g）				母岩No.	接合No.	備考
							長さ	幅	厚さ	重量			
1	2H10	1	1		剥片	チャート	1.8	2.5	0.8	2.46	チャート１		
2		2	2		剥片	ガラス質黒色安山岩	2.9	2.0	0.5	2.40			
3		3	3	3	剥片	ガラス質黒色安山岩	3.8	2.5	0.9	9.98			
4		4	4	6	剥片	ガラス質黒色安山岩	3.1	4.1	0.7	8.12			
5		5	5	10	剥片	ガラス質黒色安山岩	7.1	6.0	1.6	48.82			
6		6	6	4	剥片	チャート	2.1	3.5	1.1	7.56	チャート１		
7		7	7		礫片	ホルンフェルス	3.3	2.4	1.2	14.02	単独１		
8		8	10	7	剥片	ガラス質黒色安山岩	6.9	4.1	1.2	22.90			
9		9	11	1	ナイフ形石器	ガラス質黒色安山岩	6.2	1.8	0.9	8.51	単独2		
10		10	12		剥片	ガラス質黒色安山岩	2.1	1.6	0.8	2.38			
11		11	13	5	剥片	ガラス質黒色安山岩	2.9	3.4	0.7	6.00			
12		12	15	8	剥片	ガラス質黒色安山岩	4.9	5.7	1.2	21.78			
13		13	16		砕片	ガラス質黒色安山岩	0.4	1.0	0.3	0.12			
14		14	17		剥片	ガラス質黒色安山岩	2.5	1.4	1.0	1.35			
15		15	18		剥片	チャート	1.3	2.2	0.6	0.80	チャート１		
16	2H11	1	8		剥片	ガラス質黒色安山岩	2.0	3.2	0.7	4.40			
17		2	9	2	剥片	チャート	1.9	3.2	0.8	5.42	チャート１		
18	2H20	1	14	9	剥片	ガラス質黒色安山岩	5.8	3.3	0.7	15.80			

第68表　川向遺跡（下層）出土遺物一覧（第３ブロック）

整理番号	グリッド	遺物No.	取上No.	挿図No.	器種	石材	計測値（cm /g）				母岩No.	接合No.	備考
							長さ	幅	厚さ	重量			
1	2H85	1	1		剥片	ガラス質黒色安山岩	2.9	2.4	0.4	3.23			
2	2H95	1	5	2	剥片	ガラス質黒色安山岩	2.5	2.9	0.9	6.87			
3		2	6		砕片	ガラス質黒色安山岩	1.1	1.2	0.5	0.63			
4		3	7	5	石核	ホルンフェルス	6.5	5.6	2.0	89.18	単独1		
5		4	8		礫片	流紋岩	5.2	5.2	1.6	57.68	単独２		赤化
6		5	14	4	剥片	ガラス質黒色安山岩	4.2	4.5	1.9	23.53			
7		6	15		剥片	ガラス質黒色安山岩	1.6	1.8	0.8	1.58			
8	2H96	1	9		剥片	ガラス質黒色安山岩	1.9	1.5	1.2	2.28			
9	3H05	1	2	6	砕片	ガラス質黒色安山岩	2.0	2.1	0.5	1.91	単独3		
10		2	3		砕片	ガラス質黒色安山岩	2.2	1.4	0.6	1.47			
11		3	4	3	剥片	ガラス質黒色安山岩	3.3	2.5	0.7	6.27			
12		4	13	1	楔形石器	流紋岩	2.4	2.4	0.7	2.03	単独4		
13	3H06	1	10		剥片	ガラス質黒色安山岩	1.9	1.5	0.7	1.51			
14		2	11		石核	チャート	6.8	6.7	3.7	220.95			
15		3	12		砕片	ガラス質黒色安山岩	1.2	1.5	0.4	0.52			

第69表　川向遺跡（下層）出土遺物一覧（単独出土）

整理番号	グリッド	遺物No.	取上No.	挿図No.	器種	石材	計測値（cm/g）				母岩No.	接合No.	備考
							長さ	幅	厚さ	重量			
1	1E74	1	−		礫片	流紋岩	5.8	4.7	1.5	40.17	—	—	トレンチ一括
2	2E32	1	−	3	石刃	黒曜石	4.6	2.2	0.5	6.88	—	—	Ⅸ層
3	1F83	1	−		剥片	黒曜石	2.1	1.8	0.9	1.66	—	—	Ⅶ層
4	2F24/34	1	−	1	剥片	チャート	2.9	3.0	1.0	8.84	—	—	～ 12.797
5	2F40	1	−	2	石核	黒曜石（高原山）	2.4	4.5	2.0	17.66	—	—	トレンチ（攪乱）
6	4H32	1	−	4	石核	珪質頁岩	7.6	6.0	2.8	168.63	—	—	Ⅸ層

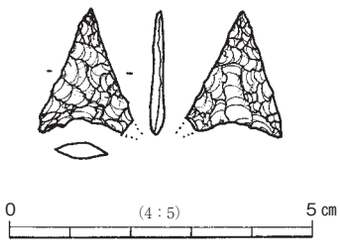
第３節　縄文時代

縄文時代については、遺構は陥穴２基が検出され、遺物はトレンチおよび表採で若干の縄文土器と石器が出土した。

遺構

SK-01陥穴（第174図、図版28）

調査区の3Ｇ-01グリッド付近に位置する。平面形は2.84m×0.49mの長楕円形を呈し、長軸方向はN- 82°-W、断面はＶ字形で、両端部の立ち上がりは緩やかである。確認面からの深さは50cmを測る。遺構内の堆積土層は、最上層が暗褐色土系、中間層はロームブロックが主体を占め、最下層には薄く黒色土層が入り込んでいる。遺物は検出されなかった。



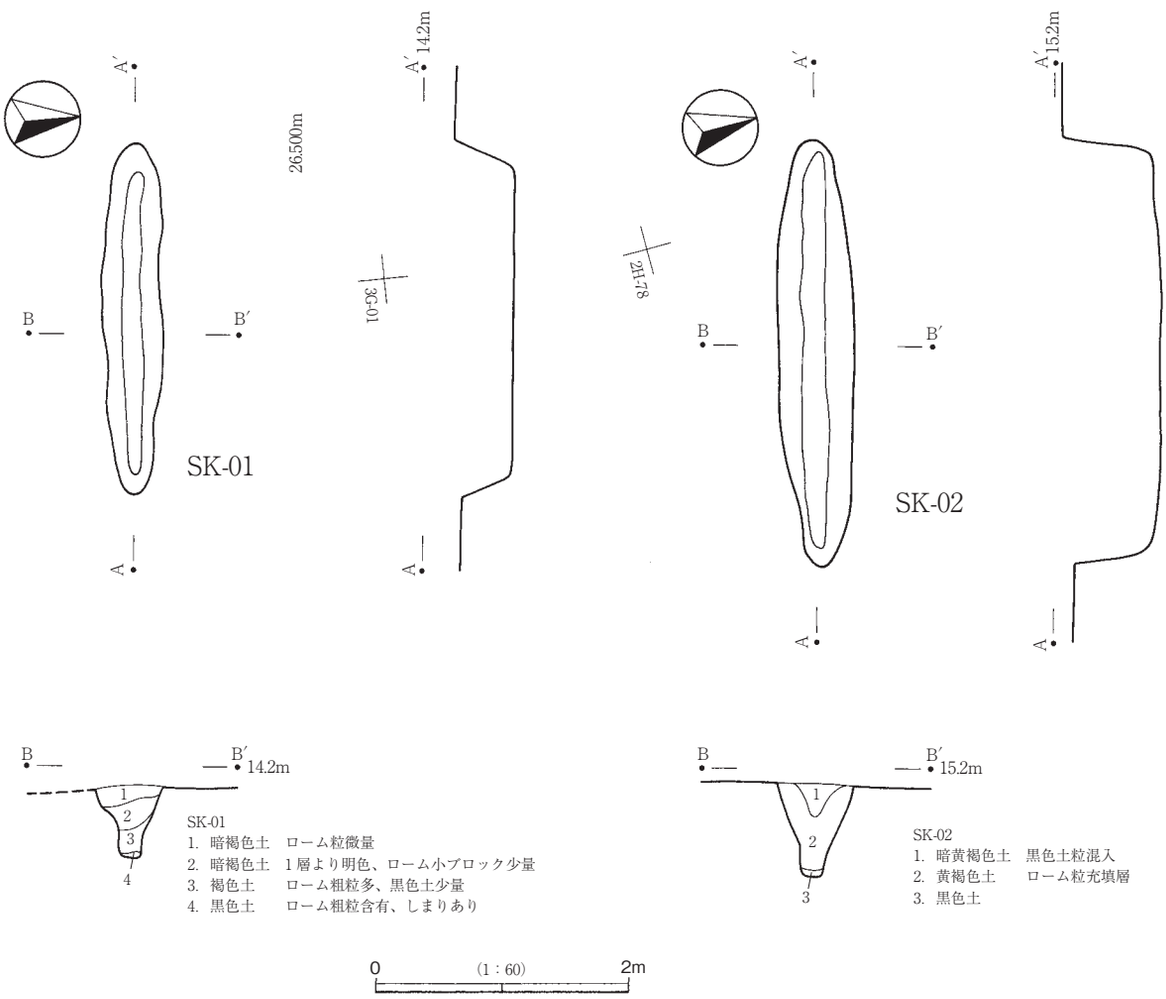
第173図　石鏃

SK-02陥穴（第174図、図版28）

調査区の２H-68グリッド付近に位置する。平面形は3.43m×0.63mの長楕円形を呈し、長軸方向はN-75°-W、断面はＶ字形で、確認面からの深さは74cmを測る。遺構内の堆積土層は，上～中層がローム粒主体で、最下層に黒色土層が薄く堆積する。遺物は検出されなかった。

遺物

２Ｇ-60グリッドから石鏃が１点出土した（第173図、図版25）。石材はチャートで最大長20mm、最大幅16mm、厚さ３mmで、重量0.56ｇである。



第174図 SK-01、SK-02陥穴

第４節　まとめ

１　旧石器時代（第175図、第70表）

川向遺跡では、立川ローム層中から３つのブロックと計96点の遺物が検出された。これらの資料は、出土層準によって３つの文化層に区分することが可能である。

第１文化層は、第二黒色帯下部（Ⅸ層）から出土した石刃と石核各１点をあてた。第２文化層は第二黒色帯上部（Ⅶ層）を中心として分布する第２ブロックが相当する。さらに、ソフトロームとハードロームの境界付近で出土した第１ブロックを第３文化層とした。

第70表　川向遺跡旧石器時代石器組成表（全体）

	ナイフ形石器	削器	楔形石器	二次加工ある剥片	剥片	砕片	石核	礫・礫片	計
黒曜石	3	1		6	5	37	6		58
ガラス質黒色安山岩	1				18	5			24
チャート					5		2		7
黒色頁岩									
珪質頁岩							2		2
流紋岩			1					2	3
ホルンフェルス							1	1	2
合　計	4	1	1	6	28	42	11	3	96

第１文化層（第175図34・35）

本文化層は、ブロック外出土の石刃・石核各１点である。

それぞれの諸特徴については、先述したので重複は避けるが、石刃は信州系の黒曜石、石核は鬼怒川系の珪質頁岩と推定される。

本地区の西芝山遺跡[1]と八王子台遺跡第６文化層[3]からほぼ同時期の遺物が出土しているが、零細な資料のため詳細は明らかではない。

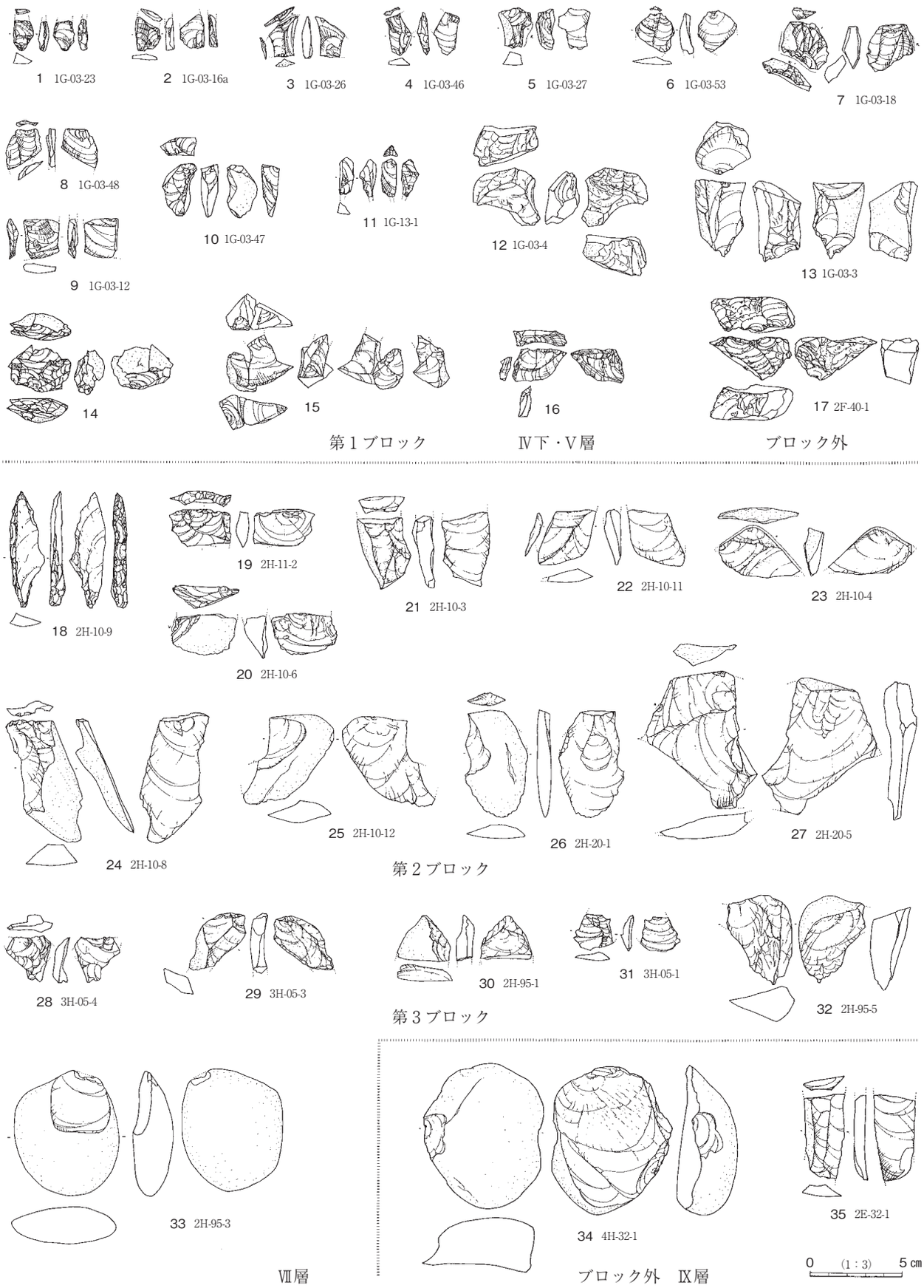
第２文化層（第175図18～33）

本文化層は、第２・３ブロックの石器群計33点である。石器組成は、ナイフ形石器１点、楔形石器１点、剥片22点、砕片５点、石核２点及び礫片２点、石材組成は、ガラス質黒色安山岩24点、チャート５点、流紋岩２点、ホルンフェルス２点となっている。利器の２点（18、28）はいずれも単独母岩であり、完成品として搬入されている。この時期にはガラス質黒色安山岩が多用されるが、石核はその後搬出されたようである。

技術基盤として石刃技法があるが、本遺跡では横長剥片生産の痕跡をとどめ、あまり明確ではない。またⅦ層段階で頻出する楔形石器は若干見られたものの「下総型石刃再生技法」[4]の痕跡はとどめていない。さらに当該期に特徴的な硬質頁岩も皆無であった。

両ブロックには、石器製作の痕跡はあるものの、小規模で零細な資料であり一過性のキャンプ地であった公算が高い。

類例としては、本地区の西芝山遺跡[1]、西芝山南遺跡第１文化層[2]、及び八王子台遺跡第５文化層[3]を



第175図　川向遺跡旧石器時代石器群の変遷

はじめ、八千代市北海道遺跡第３文化層[5]、市川市新山遺跡[6]、鎌ヶ谷市東林跡遺跡[7]、柏市石揚遺跡[8]、同天神向原遺跡[9] 等、主として下総台地の西部で多数報告されており枚挙にいとまがない。

第３文化層（第175図１～17）

本文化層は、第１ブロックの遺物にブロック外の石核１点（17）を加えた計58点である。

全体の約96％が信州系の黒曜石であり、これ以外には黒色頁岩製（13）とチャート製（12）の石核が各１点あるに過ぎない。黒色頁岩は利根川系であり、信州系黒曜石を含め群馬経由の石材流通が想定される。

利器は、ナイフ形石器３点、削器１点、二次加工ある剥片６点となっている。これらは、ナイフ形石器１点（1）を除けば同一母岩と推定される。また素材剥片や二次加工時の砕片（調整剥片）が多数見られることから、ブロック内で一連の石器製作が行われた公算が大きい。最終的に石核は打面転移の頻繁な小型のサイコロ状石核となっており、限られた石材を有効利用するために、良質な石材を徹底的に使い尽くそうとする製作者の意図をよく反映している。

類例としては、本地区では八王子台遺跡第３文化層、西芝山南遺跡第２文化層、西芝山遺跡があるが、本文化層のような信州系黒曜石を主体とした石器群は未検出であり、比較的希少な資料といえる。

この種の関連資料としては、県内の市川市権現原遺跡[10]、柏市若葉台遺跡５ブロック[11] をはじめ、埼玉県鴻巣市新屋敷遺跡Ｃ区[12]、同さいたま市明花向遺跡Ｃ区[13] 及び群馬県太田市花園Ａ遺跡[14] などがあり、基本的に以下の内容によって特徴づけられる。

・石器群は、ナイフ形石器、掻器、削器、及び角錐状石器等で構成される。ナイフ形石器は横長剥片を素材とした切出形が主体である。
・技術基盤は横長剥片生産技術を基調としている。
・石器石材のなかで最も多用されているのは透明度が高く良質な信州系黒曜石である。これに東北頁岩、北関東系の黒色頁岩・黒色安山岩が加わり東北・北関東との関係を論じる上で資料的価値が高い。
・遺物集中地点には礫群が共存する。

ただし、本遺跡の様相には、やや異質な点もある。すなわち数量の減少はもとより、石器の小型化、掻器・角錐状石器等の利器の欠落、ナイフ形石器の刃潰し加工の簡略化などが挙げられるのである。おそらくこのことは本遺跡の地理的位置と無縁ではなかろう。

本遺跡は、関連遺跡のなかでも最も原産地から遠距離にあり、そのため原材料の消費も進んでいたものと想定される。ちなみに長野県和田峠を基点とすると、直線距離でみると花園Ａ遺跡（約100㎞）、新屋敷遺跡Ｃ区（約120㎞）、明花向遺跡Ｃ区（約150㎞）、若葉台遺跡（約160㎞）、権現原遺跡（約170㎞）、川向遺跡（約180㎞）となり、あたかも石器石材の流通経路を示唆するかのようである。

このように、本遺跡にみられる数量の多寡をはじめ利器の欠落や石器の小型化等の諸現象は、黒曜石の原産地からの距離と方向にほぼ比例しており、本遺跡はいわば周辺地域の様相を呈しているといえよう。

以上のように、本遺跡の石器群には、総じて石器の小型化、器種の欠落がみられ、石材消費地である下総台地の状況をよくあらわしている。また、石材についても、信州系黒曜石のほかには、北関東系（ガラス質黒色安山岩、チャート、高原山産黒曜石、流紋岩）が大勢を占めており、下総の典型例といえる。

２　縄文時代

陥穴が２基検出された。遺構にともなう遺物が出土しなかったために、時期の確定が困であるが、一応縄文時代の遺構とした。やや深さが浅いが、細長く伸びる形態は通常よく見られる縄文時代の陥穴と類似している。

注１　（財）千葉県教育振興財団　　2007 『西八千代北部地区埋蔵文化財調査報告書１－八千代市西芝山遺跡－』

２　（公財）千葉県教育振興財団　2012 『西八千代北部地区埋蔵文化財調査報告書２－八千代市西芝山南遺跡－』

３　（公財）千葉県教育振興財団　2013 『西八千代北部地区埋蔵文化財調査報告書３－八千代市八王子台遺跡－』

４　新田浩三　1995 「下総型石刃再生技法の提唱」『研究紀要』16　pp,1－40　財団法人千葉県文化財センター

５　（財）千葉県文化財センター　1985 『八千代市北海道遺跡－萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－』

６　（財）千葉県文化財センター　1990 『市川市新山遺跡－北総開発鉄道埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－』

７　織笠明子　2010 「１.東林跡遺跡」『鎌ヶ谷市史　資料編１（考古）』 pp、18－93　鎌ヶ谷市

８　（財）千葉県文化財センター　1994 『沼南町石揚遺跡』

９　沼南町教育委員　1990 『大井東部地区遺跡群－大井東部土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』

10　市川市教育委員会　1987 『堀之内』

11　（財）千葉県文化財センター　1986 『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅴ－谷・若葉台・塚（1)・(2)・馬土手（1)・(2)－』

12　（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1996 『鴻巣市新屋敷遺跡Ｃ区』

13　（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1984 『明花向・明花上ノ台・井沼方馬堤・とうのこし』

14　笠懸野岩宿文化資料館　1993 『第5回企画展　群馬の岩宿時代』（花園Ａ遺跡）

第５章　庚申山塚群

第１節　調査の経緯

庚申山塚群は、昭和53年に刊行された『八千代市の歴史』（付録「八千代文化財所在地一覧表」）には、高木南部遺跡として掲載されており、図中には４基の所在が示されている。次いで、昭和60年に刊行された『千葉県文化財分布地図』では、「吉橋宮ノ前塚群」と「庚申山塚群」に分離されており、各２基が図示されている。このうち今回の対象は後者の２基である。

発掘調査・整理作業の実施期間・担当職員・内容は以下のとおりである。

（発掘調査）

（１）平成17年度

期　間　平成17年11月15日～平成17年11月18日

組　織　調査部長　矢戸三男、北部調査事務所長　古内　茂

担当者　主席研究員　岡田誠造

内　容　塚２基

（整理作業）

（１）平成25年度

期　間　平成25年４月１日～平成26年３月31日

組　織　調査研究部長　伊藤智樹、整理課長　今泉　潔

担当者　主任上席文化財主事　森本和男、上席文化財主事　橋本勝雄

内　容　編集から刊行まで

第２節　調査の成果（第176図・第177図、図版29）

当該地は南へ向かって低くなる緩斜面で、調査前は荒蕪地であった。塚と思われる地表の高まりが確認されなかったため、調査地西側の道路に平行するようにトレンチ２本を設定した。表土層の下に厚さ約20㎝の暗褐色土層、その下層にはソフトロームが検出された。それぞれⅡ層、Ⅲ層に相当すると思われる。いずれもトレンチを設定した範囲では均一に堆積しており、掘り込みや盛土の痕跡等は検出されず、塚の位置や規模を推定することはできなかった。また、遺物も検出されなかった。

掘り込みや盛土等の塚の痕跡が検出されず、また東向遺跡のSM-01塚のように、石段のような施設、板碑や石祠など近隣から持ち寄せられた石造物がなく、また周辺に集落が存在しないことからも、庚申山塚群にもともと塚があったと判断するのは困難となった。

第176図　庚申山塚群と周辺の地形

第177図　トレンチ配置図と土層断面図

第６章　八王子台遺跡

第１節　調査の経過

八王子台遺跡は西八千代北部地区の北西側に位置する。遺跡の総面積は約132,000㎡である。標高24m～27mのほぼ平坦な地形であるが、南東から北西へ、台地の縁辺に向かってゆるやかに傾斜している。

発掘調査は平成９年度（1997年度）に始まり、平成24年度（2012年度）まで16年間断続的に実施された。このうち平成９年度から平成23年度までの調査成果については、平成25年３月に報告書が刊行されている[1)]。今回はその後の調査成果を報告するものである。

平成23年度の八王子台遺跡（19）の調査地点は、八王子台遺跡の東端、平成24年度の八王子台遺跡（13）の調査地点は八王子台遺跡の西端付近にあたる（第178図）。

八王子台遺跡（19）の調査では、上層確認トレンチを設定して掘り下げると、表土以下の地層が撹乱されていることが判明した。下層確認グリッドを設定してさらに掘り下げても、撹乱された地層が地中深く埋まっていることがわかり、遺構および遺物の検出を断念せざるを得なかった。したがって確認調査を１日だけ実施して調査を終了した。八王子台遺跡（13）の調査では、上層の確認調査で縄文時代の竪穴住居跡１軒を検出し、住居跡の周囲を拡張して調査を実施した（第179図）。

なお遺跡範囲北側にある県立八千代特別支援学校に隣接して知的障害者通所更生施設「友愛みどり園」が建設され、その建設工事に先だち、遺跡の調査が平成13年に八千代市教育委員会によって実施された[2)]。1,520㎡の調査範囲から土坑約20基が検出され、遺物として縄文時代中期の加曽利Ｅ式の縄文土器と、10世紀の土師器が出土している。

（発掘調査）

平成23年度

（１）八王子台遺跡（19）

期　間　平成23年８月30日～平成23年８月30日

組　織　調査研究部長　及川淳一、北部調査事務所長　野口行雄

担当者　上席研究員　鵜沢正則

内　容　上層確認調査　114㎡／1,132㎡、下層確認調査　0㎡／1,132㎡

平成24年度

（２）八王子台遺跡（13）

期　間　平成24年５月７日～平成24年５月30日

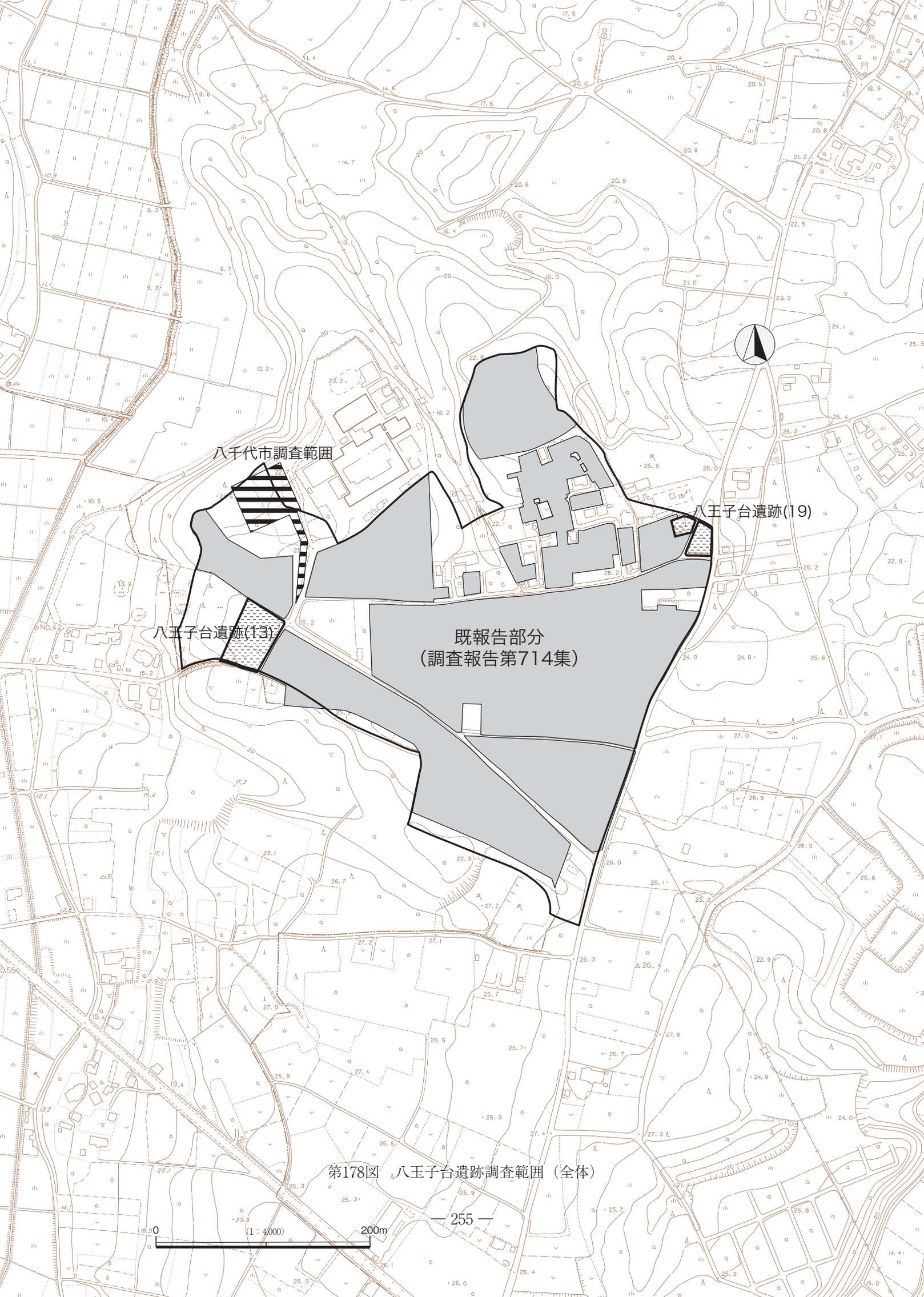
組　織　調査研究部長　関口達彦、調査課長　白井久美子

担当者　主任上席文化財主事　蔀　淳一

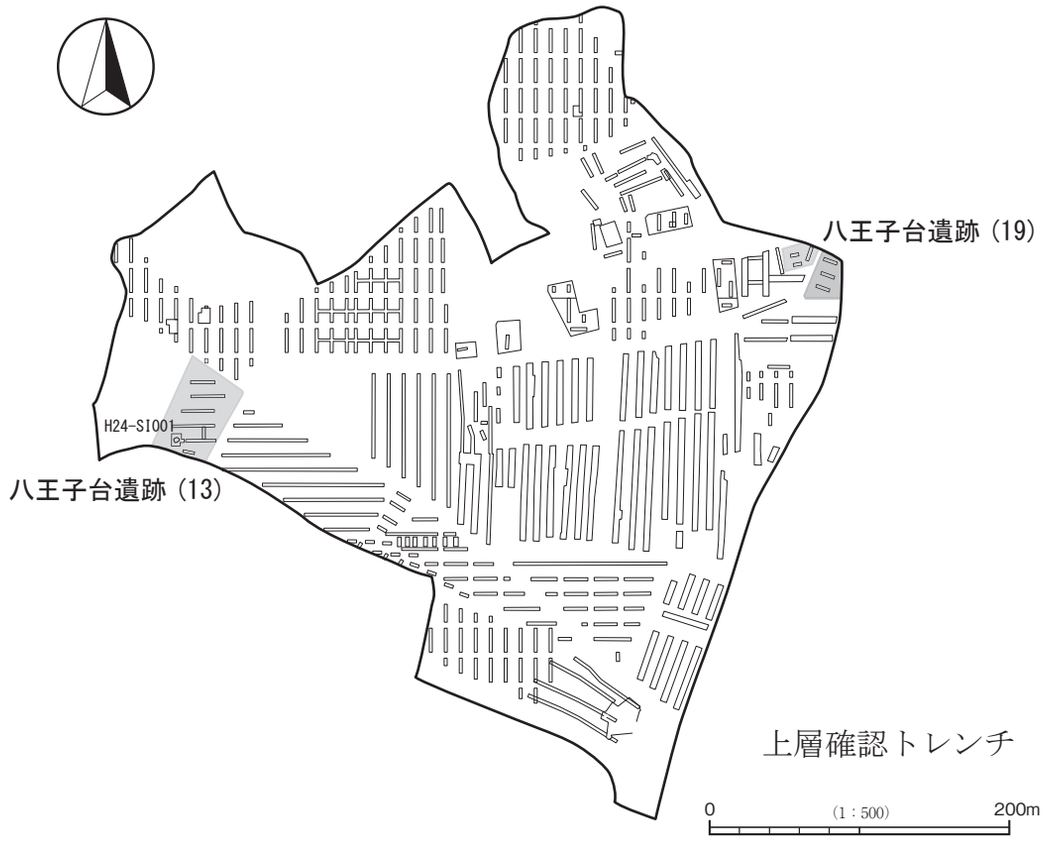
内　容　上層確認調査　274㎡／2,039㎡、下層確認調査　48㎡／2,039㎡

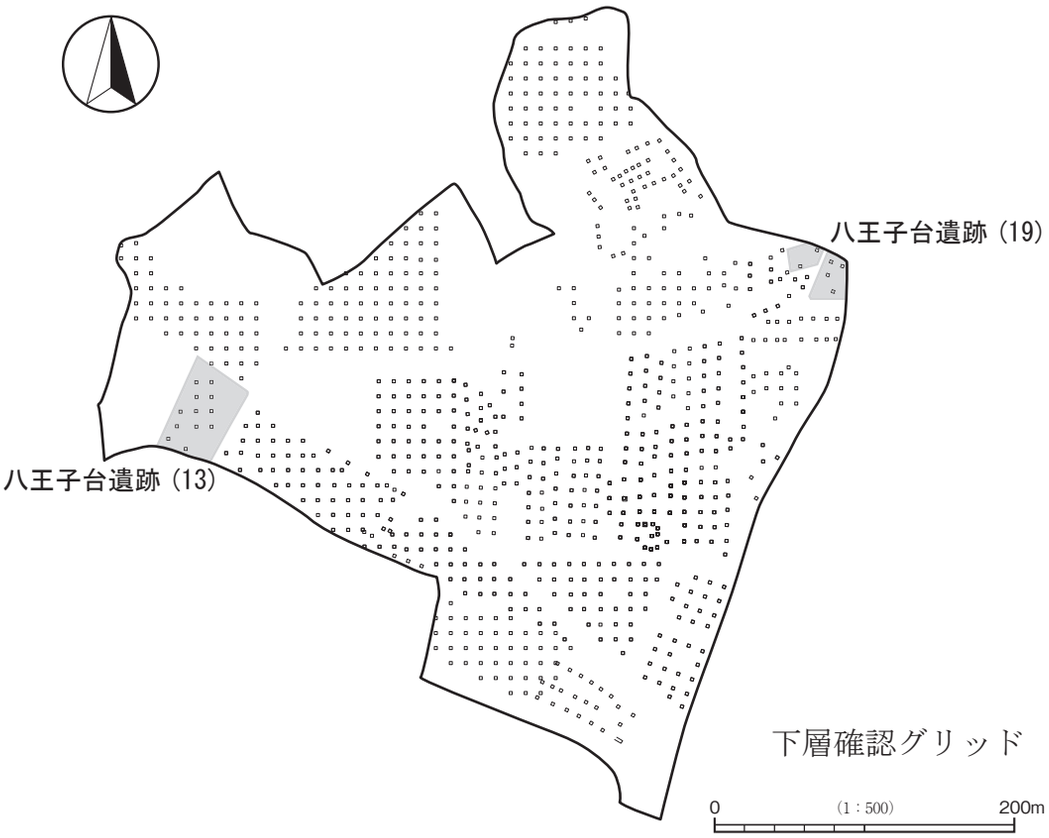
（整理作業）

（１）平成25年度



第178図　八王子台遺跡調査範囲（全体）





第179図　確認状況図（全体）

第180図　八王子台遺跡縄文時代遺構分布図（全体）

期　間　平成25年４月１日～平成26年３月31日
組　織　調査研究部長　伊藤智樹、整理課長　今泉　潔
担当者　主任上席文化財主事　森本和男
内　容　水洗から刊行まで

注１　（公財）千葉県教育振興財団　2013　『西八千代北部地区埋蔵文化財調査報告書３―八千代市八王子台遺跡―』
２　八千代市教育委員会　2012　『八王子台遺跡発掘調査報告書』

第２節　縄文時代

八王子台遺跡（13）の調査で縄文時代の住居跡１軒H24-SI001が検出され、竪穴住居跡および周辺から遺物が出土した。八王子台遺跡の縄文時代の遺構分布状態から見ると（第180図）、遺跡範囲の西端付近で孤立している。

遺構

H24-SI001竪穴住居跡（第181図、図版30）

遺跡範囲西端に近い17C-30･31、40･41に位置している。遺構検出時に北半分および周囲が重機のバケットによって撹乱を受けていた。元来のプランは、直径約4.3mのやや角張った円形だったと思われる。覆土の土層断面を見ると、撹乱土層が覆土の大部分をしめ、床直上のわずかな土層が撹乱を受けずに残存していた。床面には炉１基とピット15基が検出された。炉は住居のほぼ中心に位置し、長軸0.96m、短軸0.92mのほぼ円形をしていた。床面からの掘り込みの深さは0.18mであった。15基のピットのうち、P1、P3、P10、P14の４基は深さが30cm～40cmで、主柱穴と思われる。その他南壁付近に９基のピットがめぐっている。

遺物

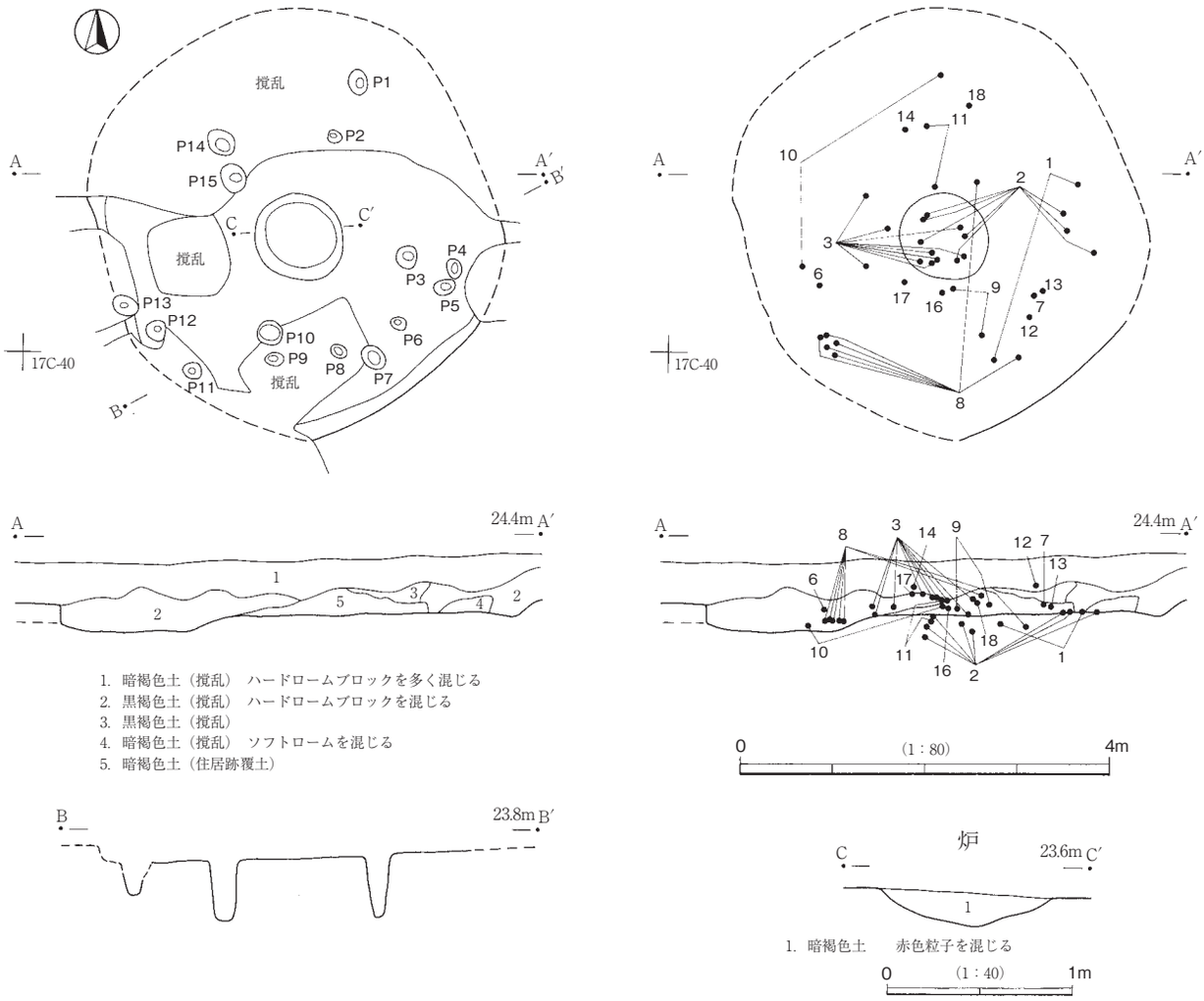
住居跡およびその周辺からおもに縄文土器と石器が出土した。図示した４、５、15、20、21の縄文土器と、35の石鏃以外は、すべて竪穴住居跡から出土した。ただし住居内の撹乱土層から出土した遺物が多かった。出土土器の様相から本住居跡の時期は、中期後半の加曽利Ｅ式期に比定される。

縄文土器（第182図・第183図、図版31・図版32）

１は口縁から胴上部までの深鉢である。口縁直下から地文縄文２段ＲＬを施文後、磨消弧線文を描いている。２は口縁から胴上部にかけて約1/2が遺存する。推定口径36.4cm、現存器高21.5cmである。口縁に波状突起を５単位配置し、その下に隆線でゆるやかに巻き込む渦巻文が置かれる。胴部には磨消懸垂文と対向するＵ字文と逆Ｕ字文が施されている。３は胴上部の破片で、磨消弧線文の下に隆線を横位に施し、さらにその下を縦位の隆線で区画している。

５は波状口縁で、口縁下に横位の沈線を施し、その下に磨消弧線文が施されている。６は口縁下に横位の沈線を施し、沈線で円形を描いて磨消弧線文が施されている。７は口縁部片、８～10は胴部片で磨消懸垂文が施されている。11は胴下部に磨消によるＵ字文が施されている。12～14は櫛歯条線系の粗製土器で、17～19は波状櫛歯条線が施されている。20の底部は底径5.8cm、21の底部は底径5.2cmであった。

22は球形の土玉で、径21mm、重量9.0ｇである。わずかに窪んだ刺突部分が１か所ある。焼成前に刺突されているが、単なる欠損なのか意図的な刺突によるものなのか不明である。



第181図　H24-SI-001住居跡

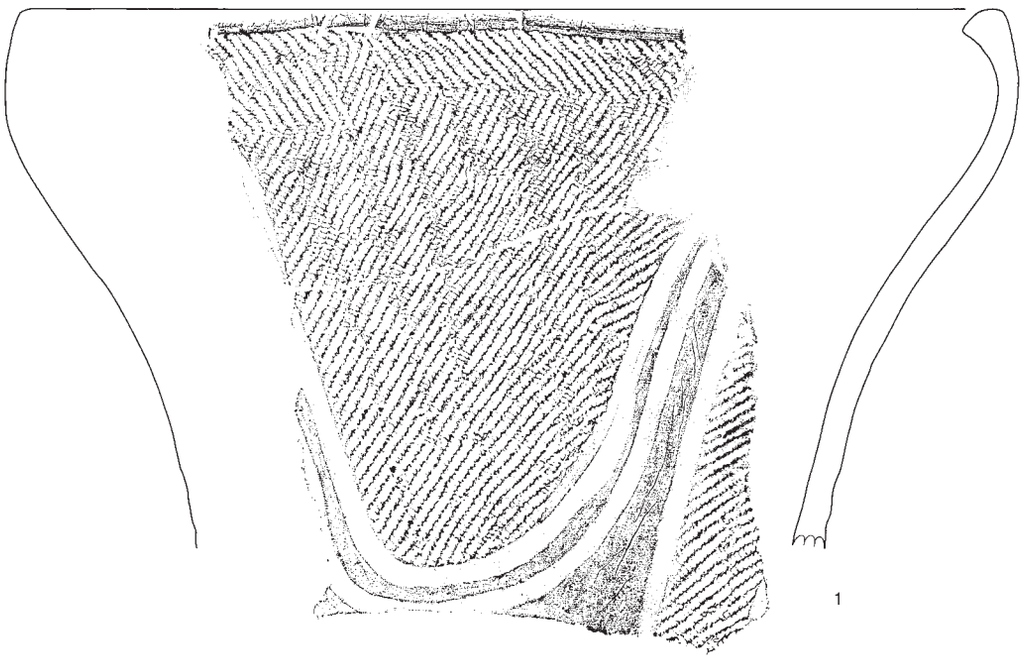
石器（第184図、第71表、図版33）

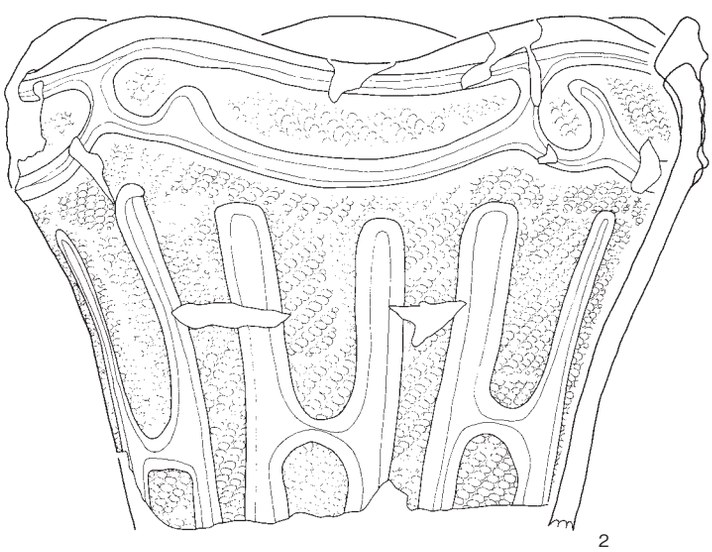
石器には石鏃、石鏃未製品、石錐、砥石があった。石材は、26の黒曜石製石鏃、34の砂岩製砥石を除いて、すべてチャートである。23 ～ 25、27 ～ 28は二等辺三角形の凹基無茎鏃である。26は先端が欠損している。31 ～ 33は石鏃未成品である。29 ～ 30は石錐で、29は石鏃の先端を調整して石錐に転用したものである。34は平板な砥石で、両面に摩耗痕があり、中央部分がわずかに窪んでいる。

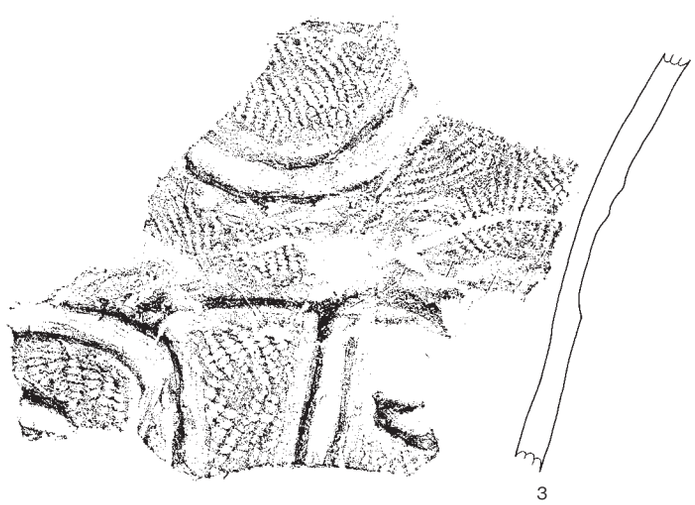
近世遺物（第185図、第72表、図版32）

近世の遺物が少量出土したので、ここで掲載しておく。図示したのは砥石、古銭、泥メンコである。

１～２は砥石で、表面に多数のキズが付いていた。２は寛永通宝で、縁外径24.3㎜、縁内径20.0㎜、郭外径7.3㎜、郭内径5.9㎜、縁厚1.4㎜、肌厚0.32㎜、重量3.49ｇであった。４は泥メンコで、隅丸長方形の枠の中に鱗の明瞭な魚が描写されていた。魚の下部には竹製の笊のような模様があり、また周囲の枠も笊の枠のようにも見えるので、この泥メンコは笊にもられた鯛を表現しているのかもしれない。

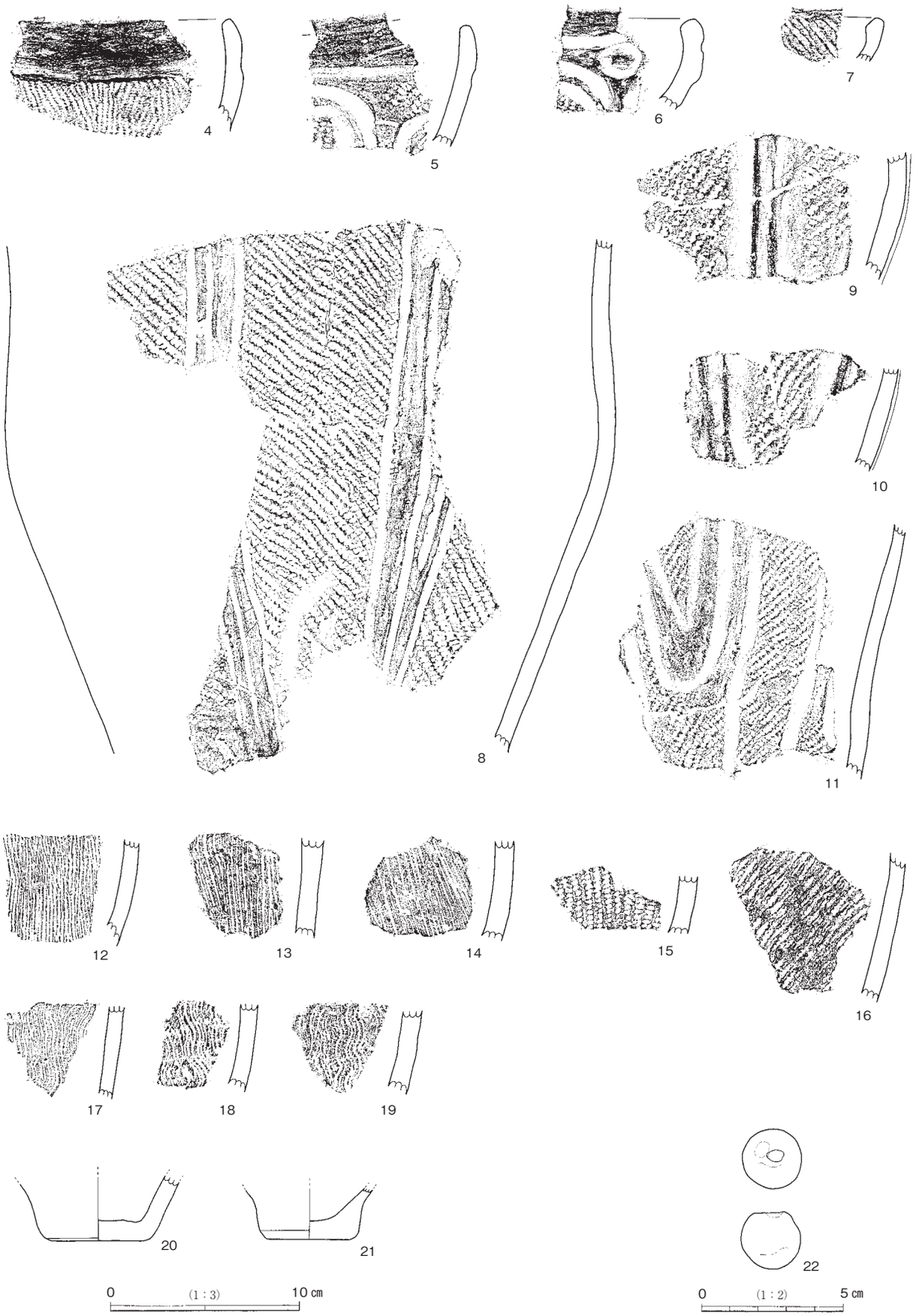




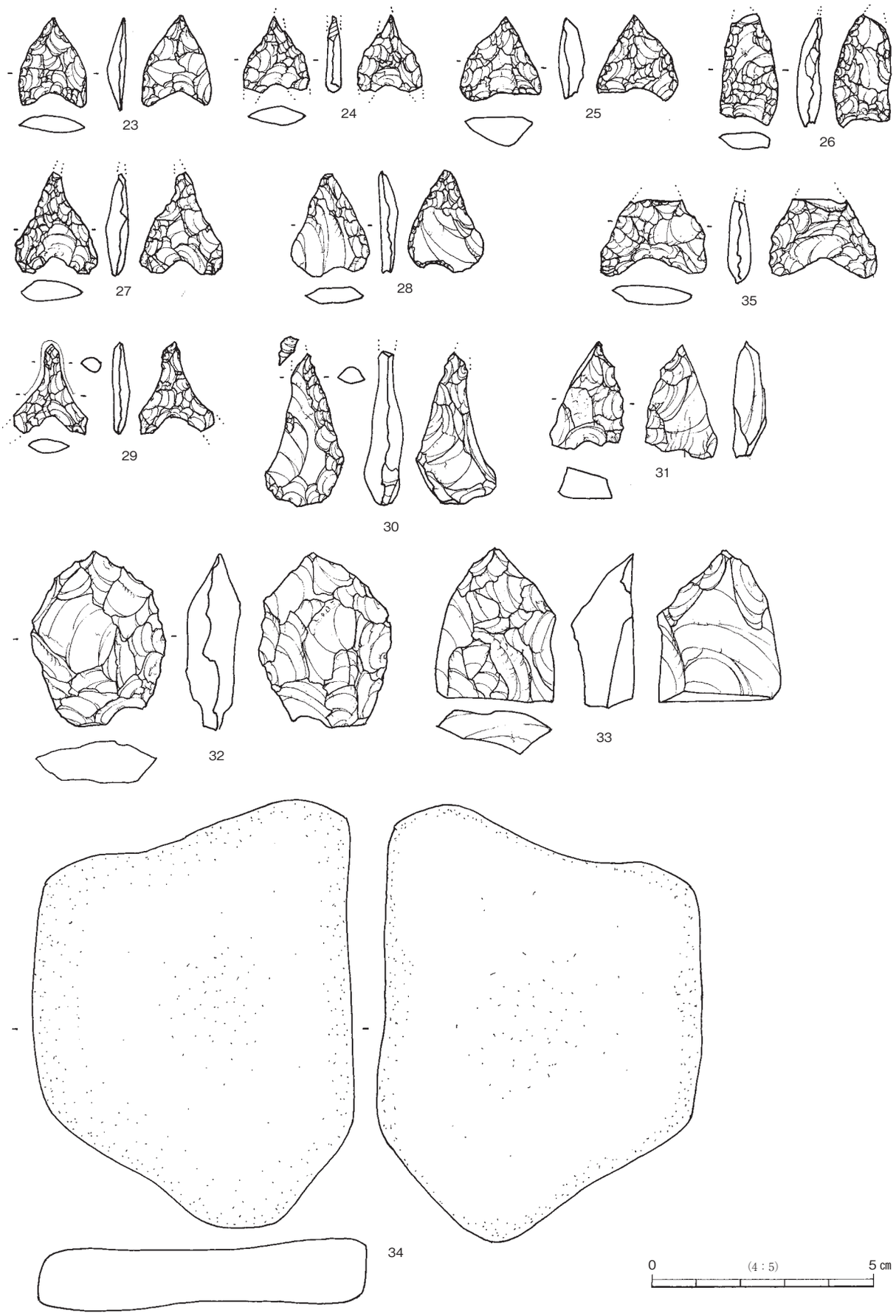


0 (1：3) 10㎝

第182図　縄文土器（1）



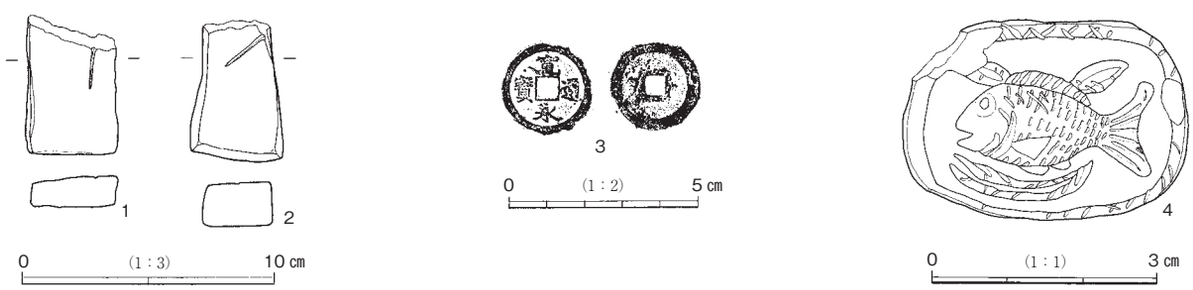
第183図　縄文土器（2）



第184図　縄文時代石器

第71表　八王子台遺跡の縄文時代石器

挿図番号	器種	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	出土遺構	調査年度	遺物番号
第184図23	石鏃	チャート	21.0	15.5	4.5	0.98	H24-SI001	平成24年度	SI-001-12
第184図24	石鏃	チャート	17.5	15.0	3.5	0.73	H24-SI001	平成24年度	SI-001-14
第184図25	石鏃	チャート	19.5	19.0	6.5	1.58	H24-SI001	平成24年度	SI-001-1
第184図26	石鏃	黒曜石	25.5	13.5	6.0	1.67	H24-SI001	平成24年度	SI-001-107
第184図27	石鏃	チャート	23.0	19.0	5.5	1.49	H24-SI001	平成24年度	SI-001-125
第184図28	石鏃	チャート	23.5	17.5	4.0	1.17	H24-SI001	平成24年度	SI-001-178
第184図29	石鏃(石錐に転用)	チャート	21.0	17.0	4.0	0.84	H24-SI001	平成24年度	SI-001-11
第184図30	石錐	チャート	34.5	12.5	8.5	3.78	H24-SI001	平成24年度	SI-001-93
第184図31	石鏃未成品	チャート	25.5	16.5	7.5	2.61	H24-SI001	平成24年度	SI-001-124
第184図32	石鏃未成品	チャート	40.0	31.0	12.0	13.49	H24-SI001	平成24年度	SI-001-22
第184図33	石鏃未成品	チャート	34.5	28.0	14.0	12.01	H24-SI001	平成24年度	SI-001-86
第184図34	砥石	砂岩	97.5	73.0	15.5	135.00	H24-SI001	平成24年度	SI-001-103
第184図35	石鏃	チャート	18.5	24.5	5.5	1.86	トレンチ	平成24年度	13-3T



第185図　近世の遺物

第72表　八王子台遺跡の近世遺物

挿図番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	出土遺構	調査年度	遺物番号
第185図1	砥石	砂岩	56.0	37.0	12.5	44.25	H24-SI001	平成24年度	SI-001-120
第185図2	砥石	砂岩	56.0	37.0	18.0	73.73	トレンチ	平成24年度	13-2T-1
第185図3	寛永通宝		※					平成24年度	一括-1
第185図4	泥メンコ		26.0	38.0	7.0	6.20	トレンチ	平成24年度	13-1T-1

※本文参照

第３節　まとめ

八王子台遺跡（19）と八王子台遺跡（13）の調査で検出された遺構は縄文時代の竪穴住居跡１軒で、出土した遺物はおもに縄文土器であった。先に刊行された報告書で、本遺跡の旧石器時代、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、中・近世について詳述されている[1)]。そこで本報告書では、既報告書の調査報告を基調にして、新しく検出された縄文時代の住居跡について記述しておく。

既報告書で縄文時代の住居跡17軒が報告された。竪穴住居跡の年代は、長山明弘氏の土器編年である加曽利Ｅ３式中１の段階にほとんど当てはまり[2)]、きわめて短期間に形成された集落とされた。さて新しく検出されたH24-SI001住居跡は縄文時代中期の住居跡であった。住居跡から出土した縄文土器を見ると、前回報告された縄文土器とほぼ同じような特徴をしめしていた。つまり磨消弧線文や磨消懸垂文がある。第182図２の波状口縁の下に描かれた渦巻文の巻き込みはやや弱くなっている。今回出土した縄文土器には、前回やや古い時期と報告されたH18-SI008出土の口縁のような、はっきりと巻き込む渦巻文が見あたらない。このような特徴から、H24-SI001から出土した縄文土器も、前回と同様に加曽利Ｅ３式中１の時期に相当すると見てよかろう。

竪穴住居跡の特徴として、土器片囲い炉と入口施設が前回の報告書で報告された。新しく検出されたH24-SI001住居跡については、炉を土器片で囲っていなかった。また入口施設については、明瞭な痕跡がなかった。住居跡周辺が撹乱を受けていたことから、入口施設が削平されたかもしれないが、ピットなどの状況から当初から入口施設は設けられていなかったと思われる。

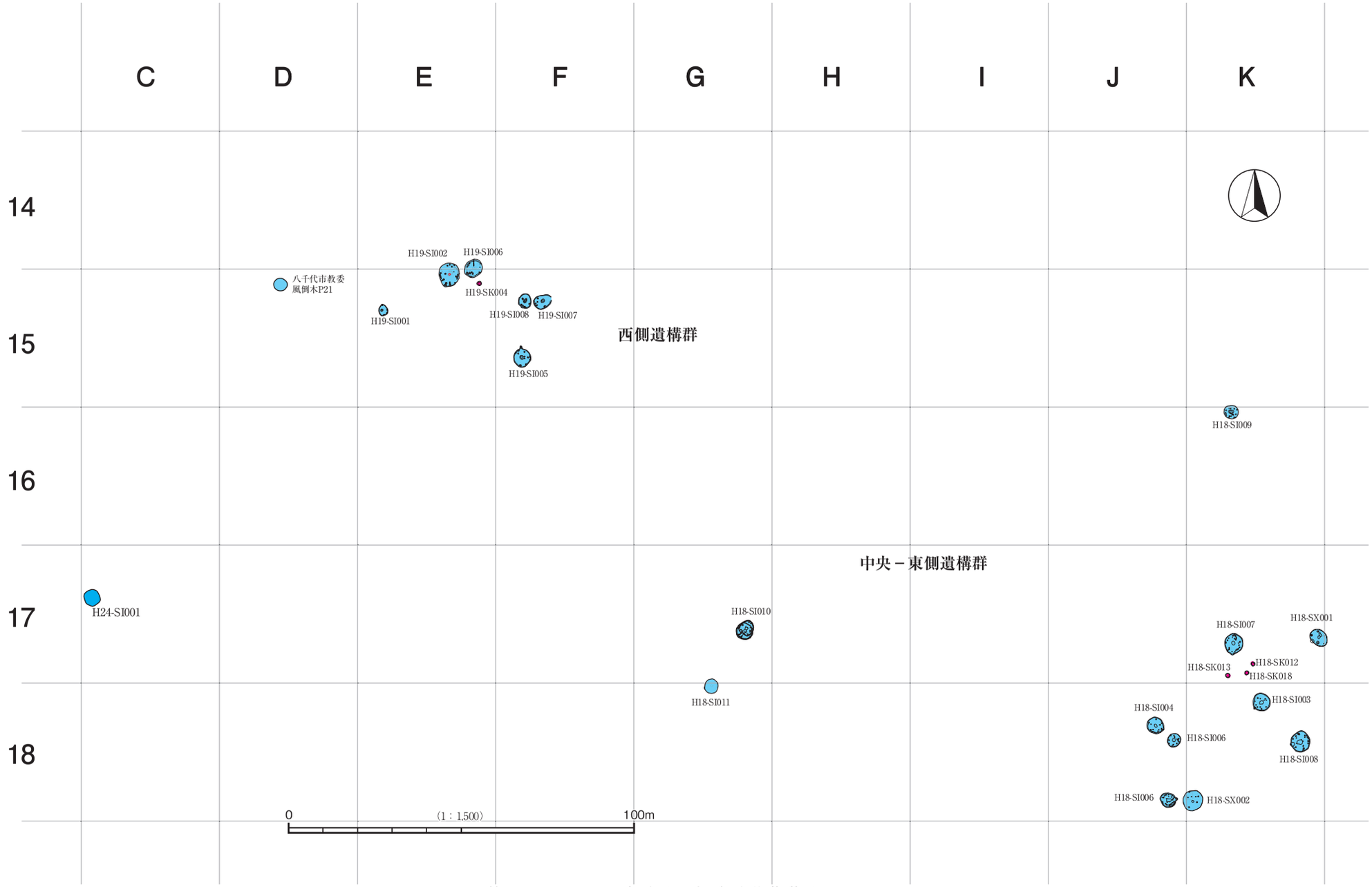
前回の報告で17軒の竪穴住居跡が、西側遺構群、中央－東側遺構群の２群に分けられ、散漫で分散的な集落だが、合計軒数からすると大規模集落にランクされると記載された。新しく検出されたH24-SI001は、集落の西端で単独に位置していた。台地縁辺に立地し、もしかすると周辺でまだ未発掘の住居跡が数軒存在するかもしれない。集落全体から見ると、中心に位置するH18-SI010から西側へ約200m離れた地点にH24-SI001がある。したがってH18-SI010を中心にすると、集落は東西に約360mの距離で広がっていたことになる（第186図）。

H24-SI001の検出によって集落の範囲がさらに広がり、分散の傾向が一層高まった。そして中心から西端のH24-SI001まで距離にして約200mの空間、また東側住居群まで約100mの空間、北西側住居群まで約100mの空間があり、H18-SI010の中心的存在意義が強まったといえるだろう。H18-SI010には土器片囲い炉と入口施設が設けられ、しかも唯一の拡張住居なので長期間の居住もしくは居住人口の増加も予測され、集落内で特殊な存在だったと思われる。中心的住居から距離をおいていくつかの住居群が形成された集落だった。空白の空間が広場なのか、あるいは住居群が集落内部のサブ集団を意味しているのか、これらの疑問点は八王子台遺跡の調査成果だけで推測するのは困難だろう。

八王子台遺跡の縄文集落は、縄文時代中期中葉の大規模な環状集落の後に出現した分散的集落の形態を示している。

注１　（公財）千葉県教育振興財団　2013 『西八千代北部地区埋蔵文化財調査報告書３―八千代市八王子台遺跡―』

２　長山明弘　2010 「加曽利Ｅ（新）式における土器系列の研究（１）」『古代』第124号



第186図　八王子台遺跡の縄文時代集落跡

写　真　図　版

図版1

遺跡周辺航空写真（2004年、1/10,000）

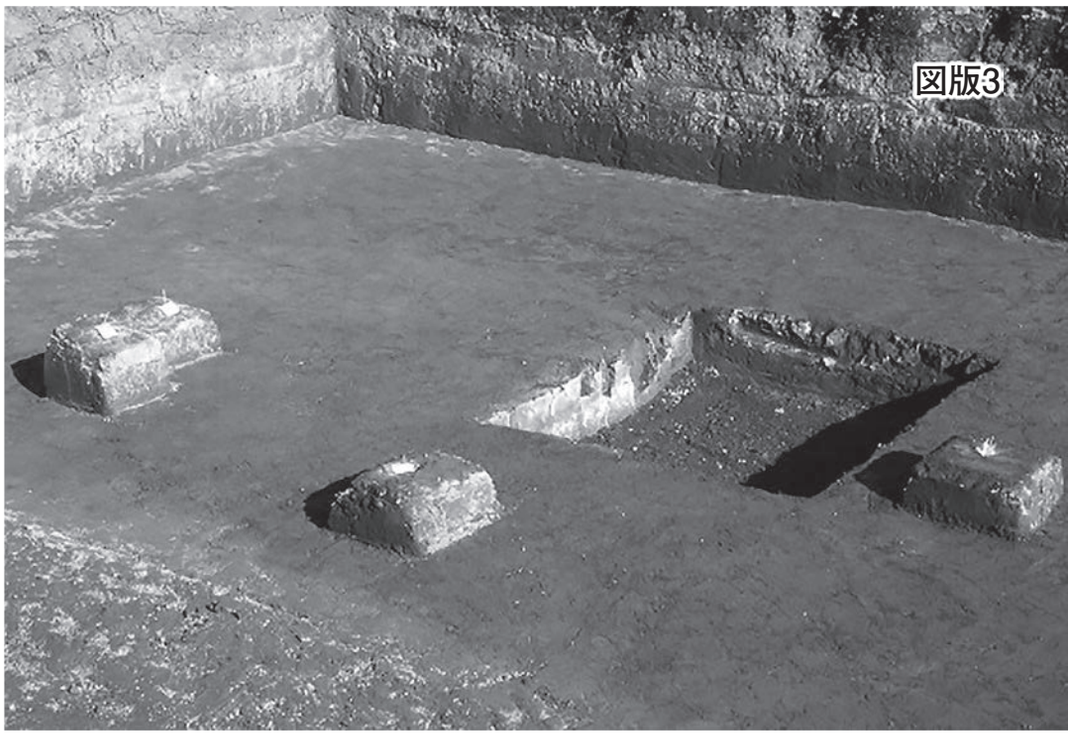
図版2

東向遺跡

立川ローム層基本土層
（11Q-06 グリッド）

第１文化層　16Q-Aブロック
南西から

第２文化層　4O-Aブロック
（平成21年度分）西から



第２文化層　10Q-Aブロック
西から

第２文化層　14Q-Aブロック
南東から

第２文化層　14Q-Bブロック
北から

図版4

東向遺跡

第３文化層　9L-A・B・C
9M-Aブロック　南西から

第３文化層　15R-Aブロック
第６文化層　15R-Bブロック
南西から

第３文化層　15R-Aブロック
第６文化層　15R-Bブロック
東から

東向遺跡

図版5

第３文化層　15R-Cブロック
北東から

第３文化層　17R-Aブロック
第７文化層　16R-Aブロック
北から

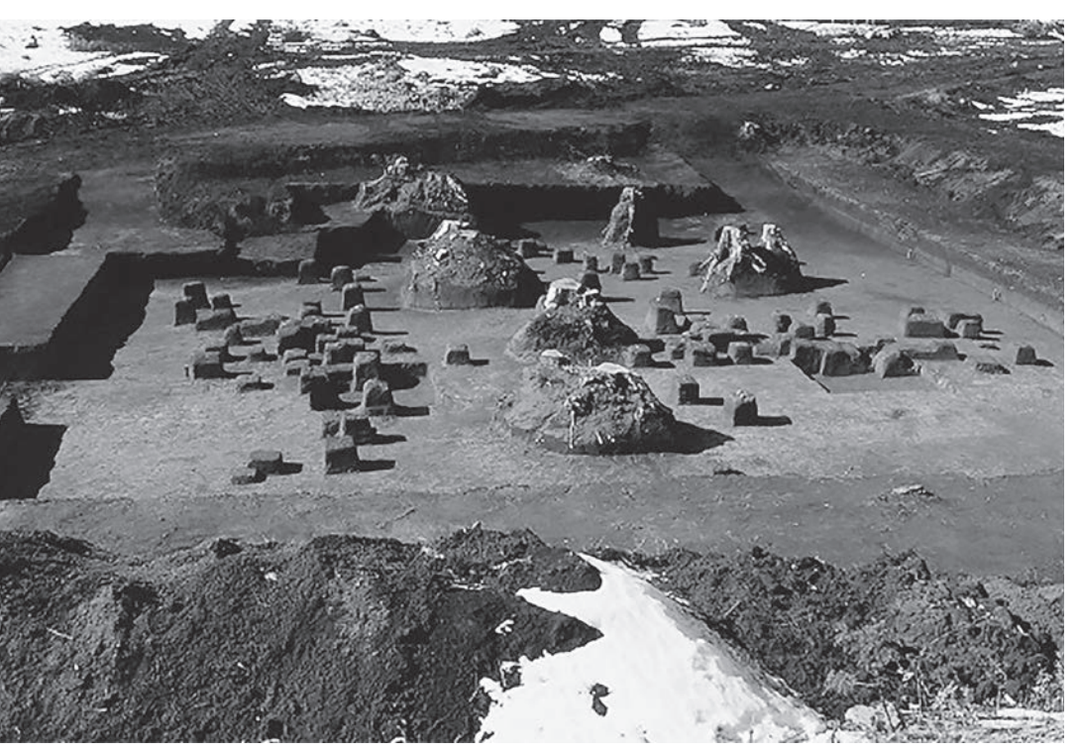
第４文化層　11Q-Aブロック
西から

図版6

東向遺跡

第４文化層　12P-A・13P-A
ブロック　南西から

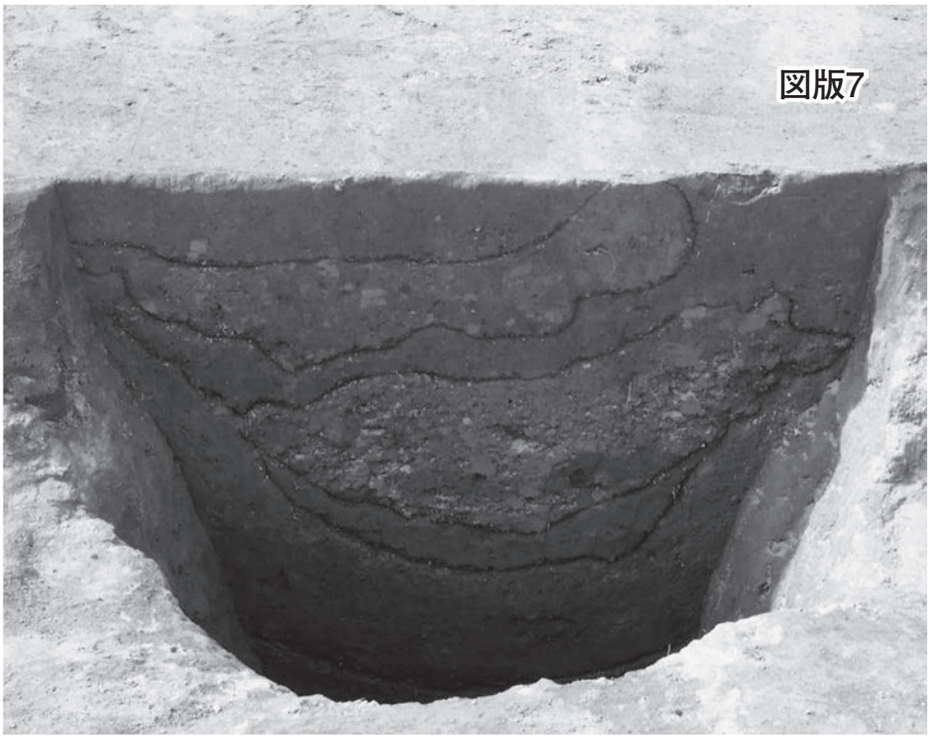
第５文化層　8K-Aブロック
第６文化層　8K-Bブロック
北西から



第７文化層　16Rグリッド
東から

東向遺跡

図版7



SK-01 陥穴
土層断面

SK-05 土坑

SK-06 陥穴

図版8

東向遺跡

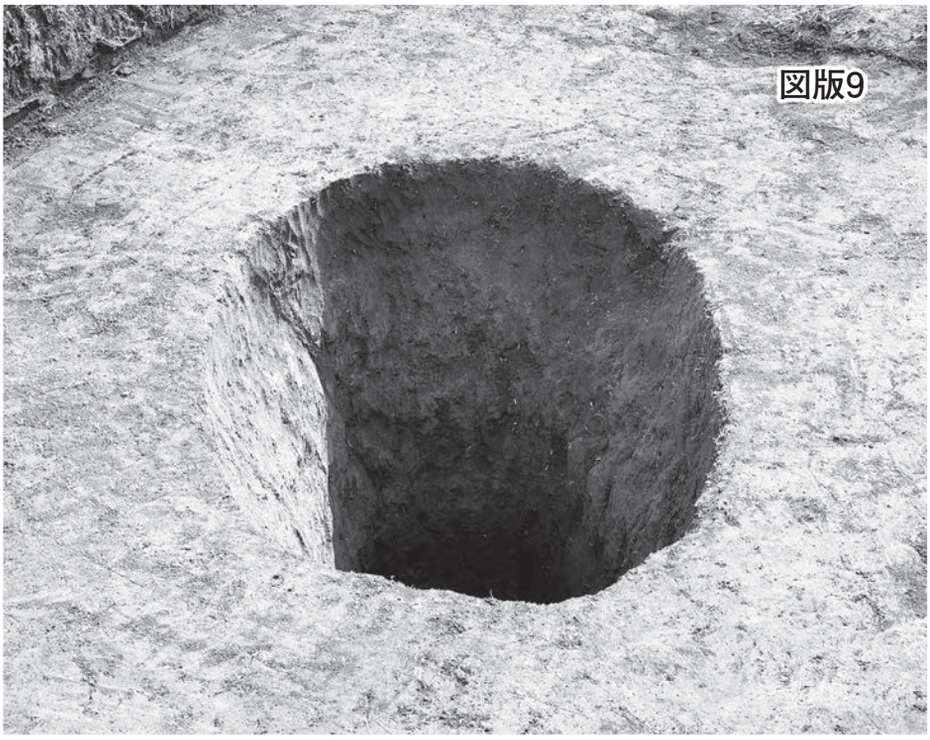
SK-07 陥穴

SK-08 土坑

SK-09 土坑

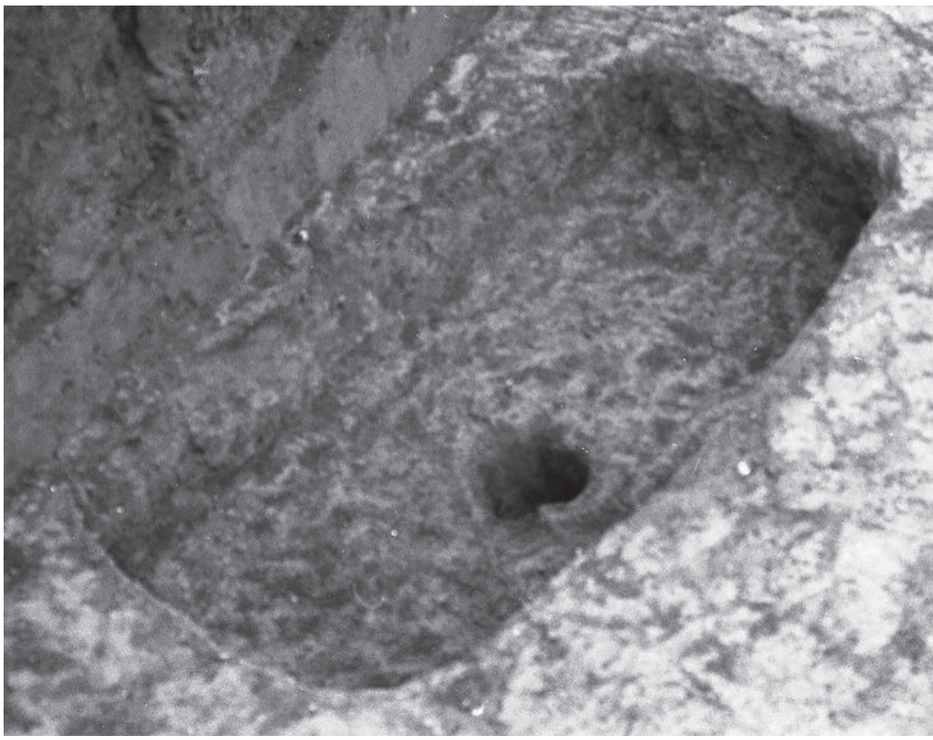
東向遺跡

図版9



SK-10 陥穴

SK-11 土坑



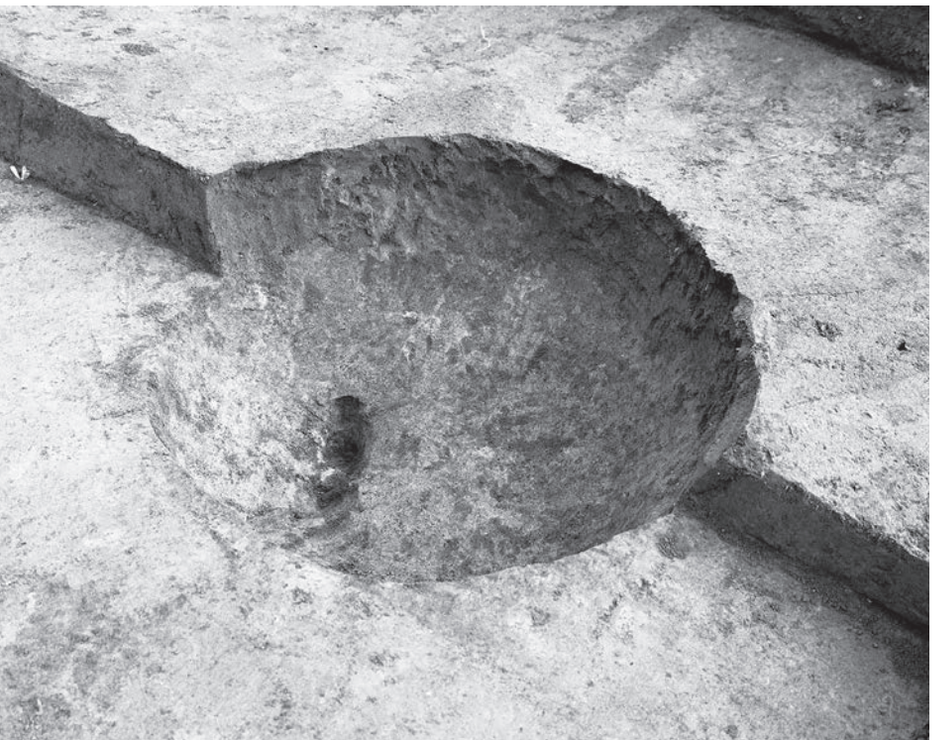
SK-12 土坑

図版10

東向遺跡

SK-14 陥穴

SK-14 陥穴
土層断面



SK-15 土坑

東向遺跡

SI-001 住居跡

SI-001 住居跡
遺物出土状況

SI-002 住居跡

図版12

東向遺跡

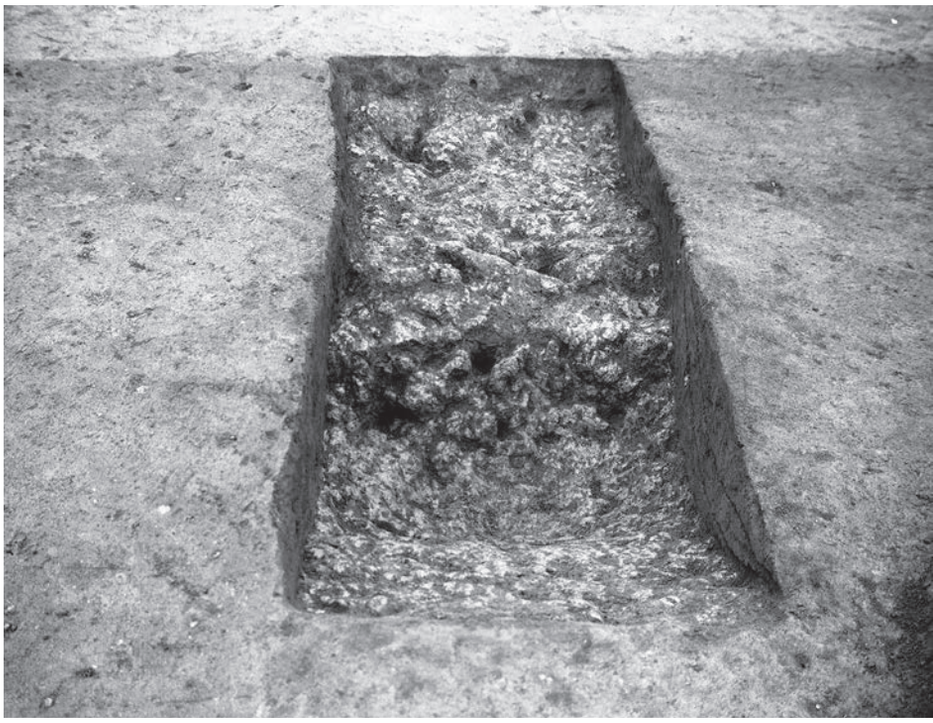
SM-01 塚

SM-01 塚
土層断面

SK-16 塚土坑

東向遺跡

SD-01 溝



SD-03 野馬土手・堀

SD-04 溝

図版14

東向遺跡

SD-05 野馬土手・堀
土層断面

SD-07 野馬土手・堀

SD-07 野馬土手・堀
土層断面

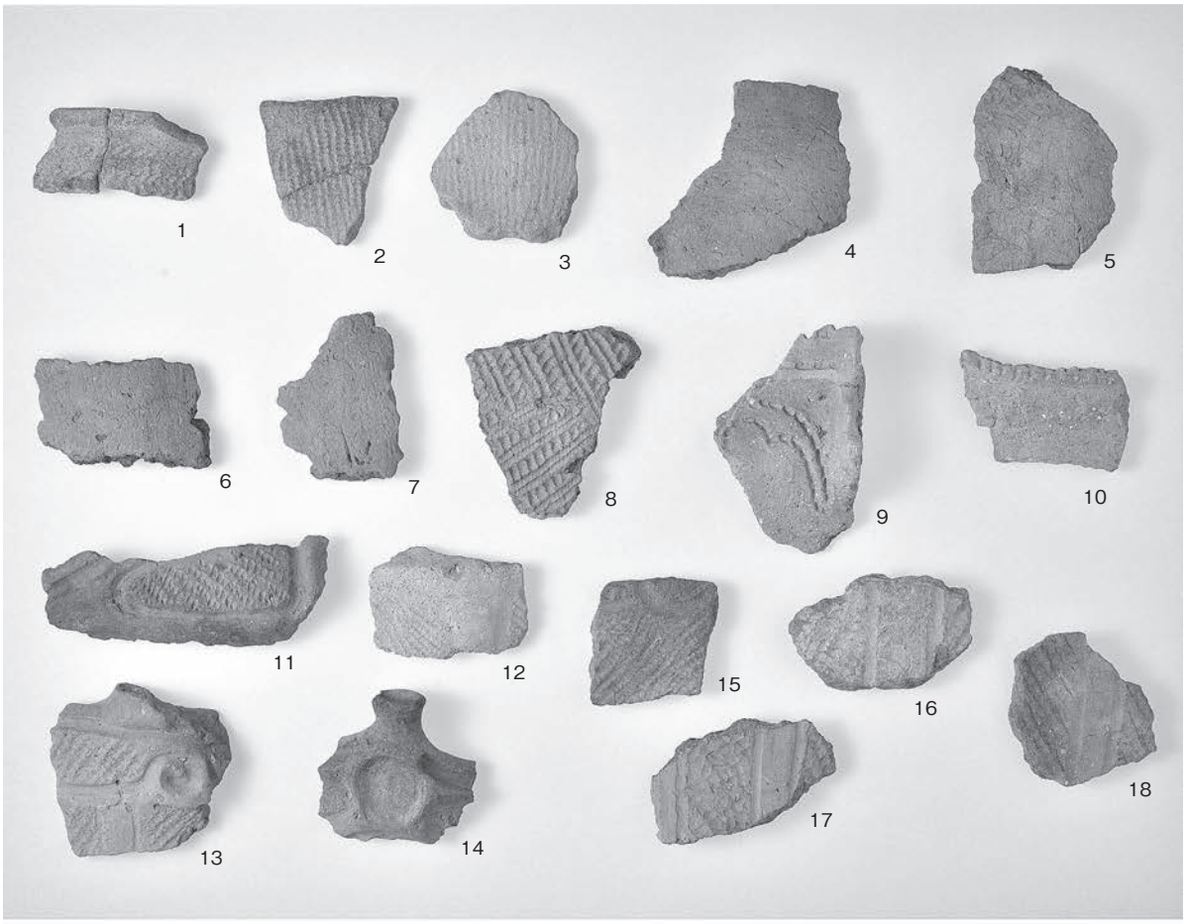
図版15

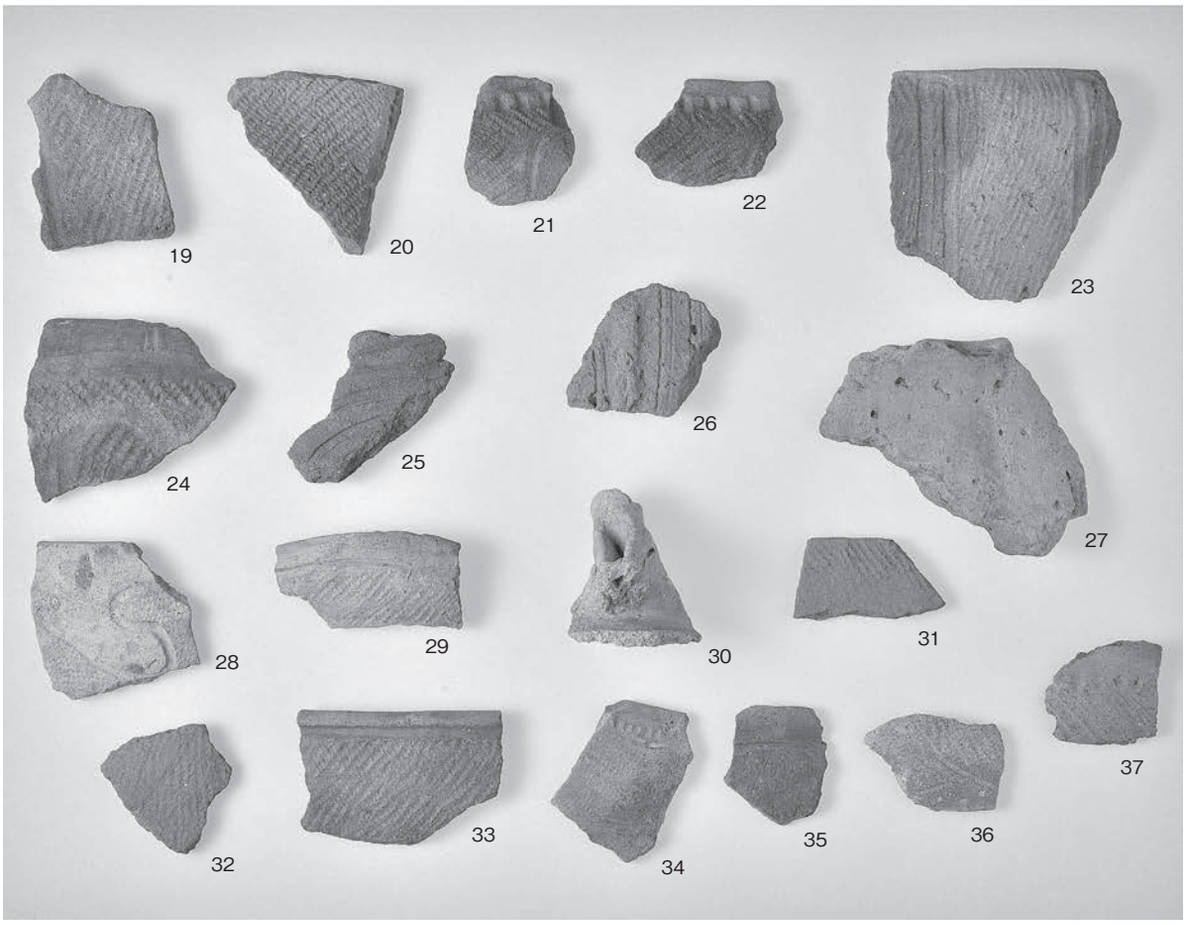
東向遺跡

SX-01 シシ穴

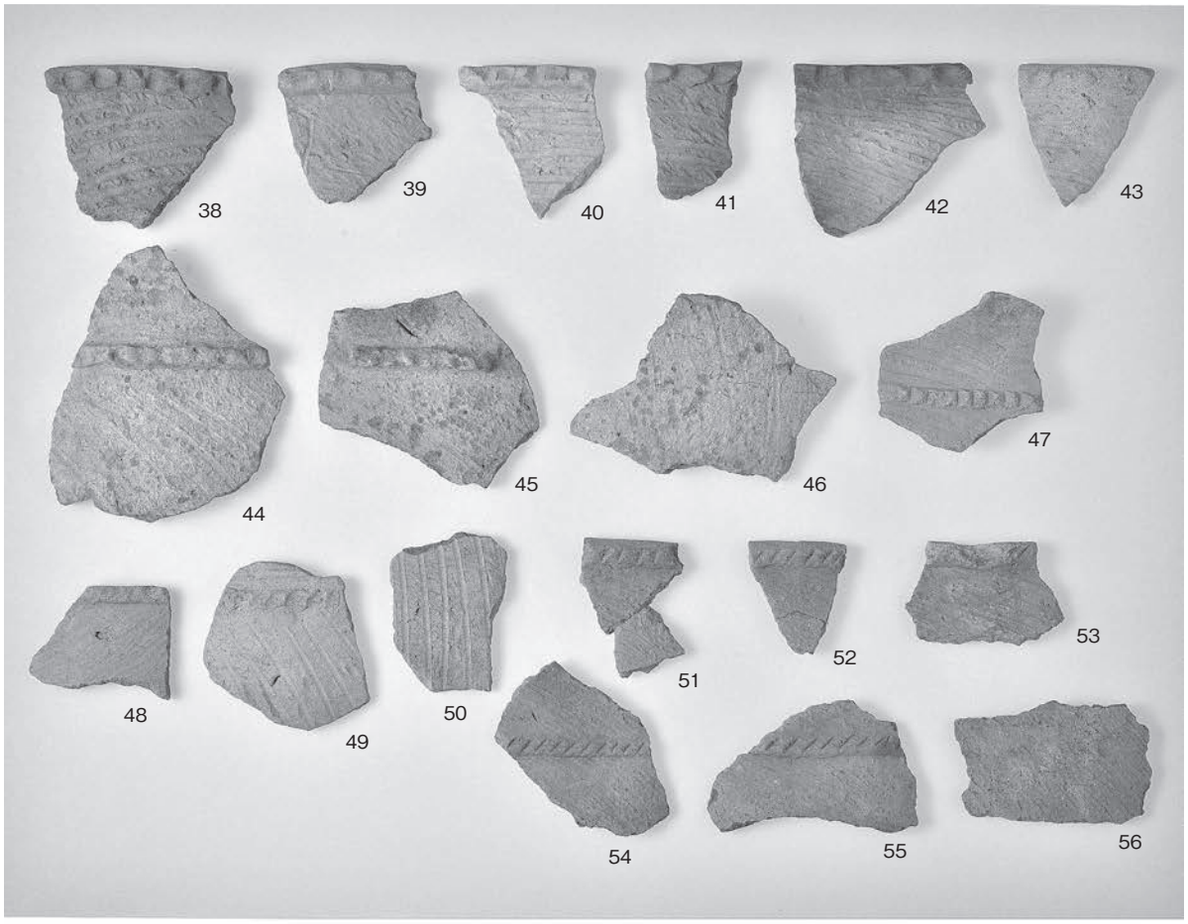
SX-01 シシ穴
土層断面

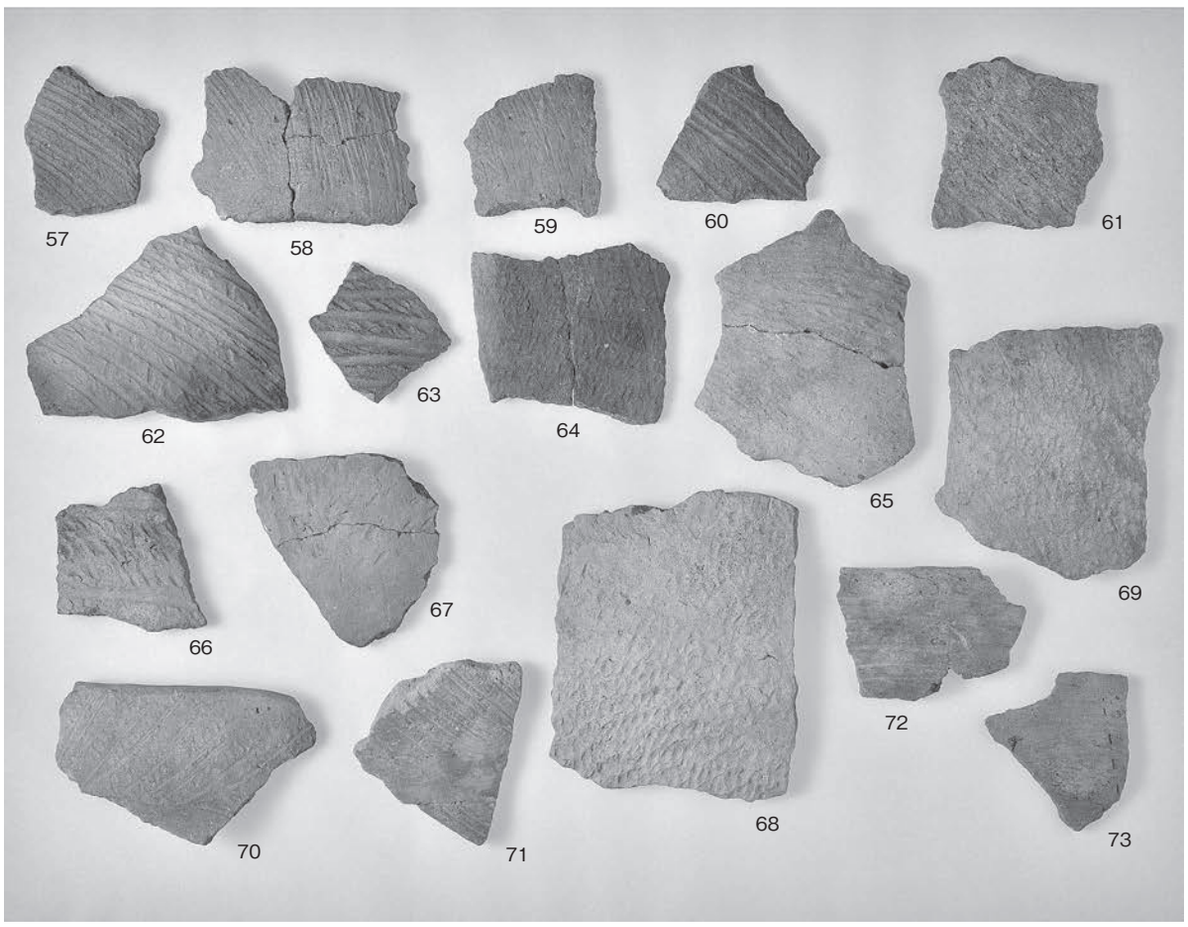
SX-01 シシ穴
遺物出土状況


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
15
16
18
13
14
17

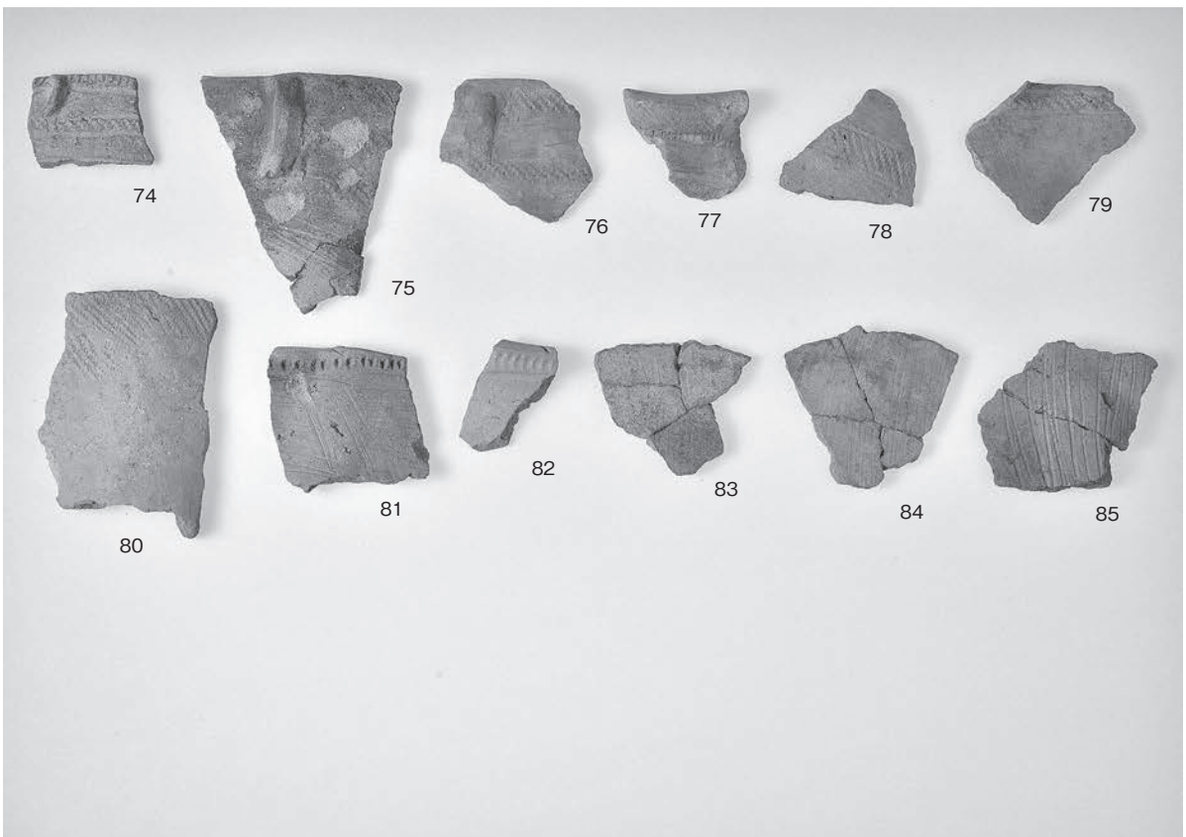

19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
37
32
33
34
35
36

縄文土器（1）

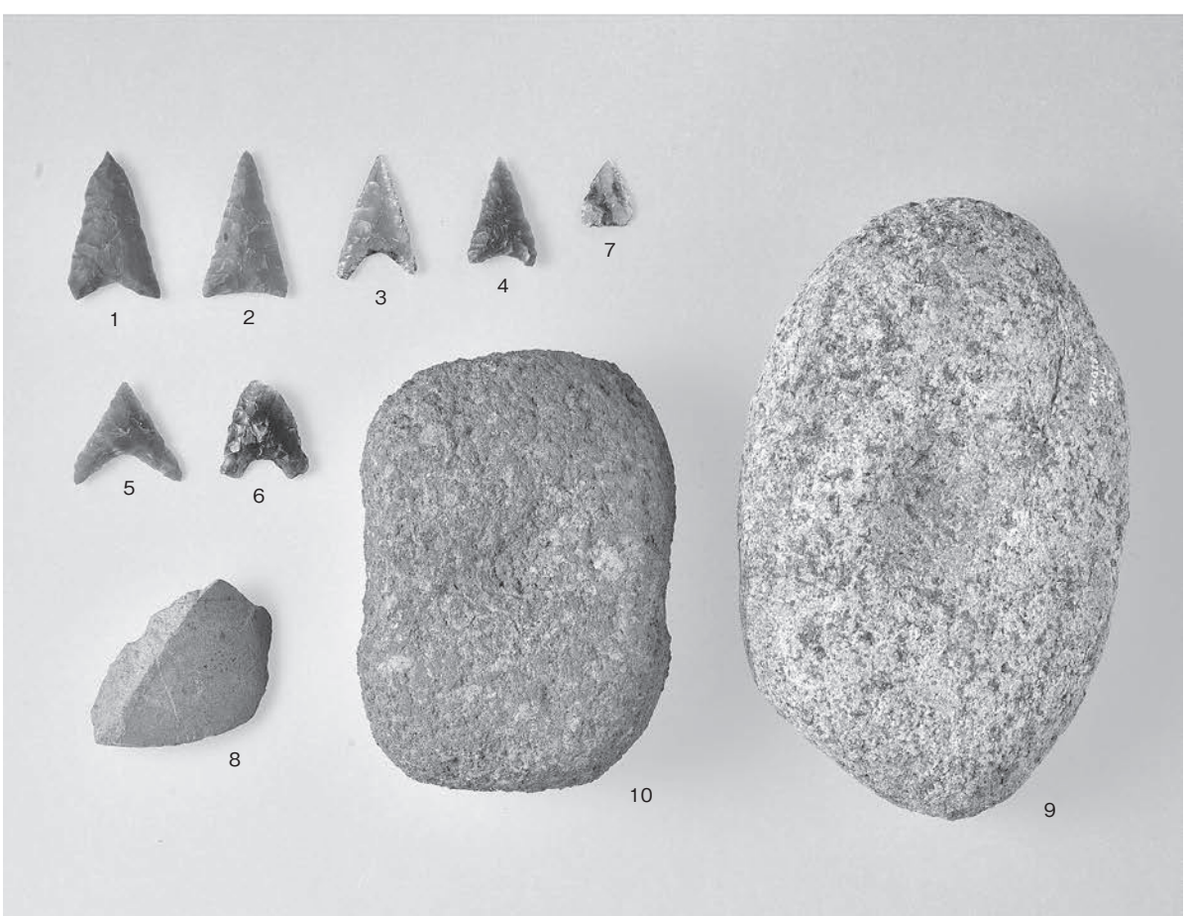

38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56


57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73

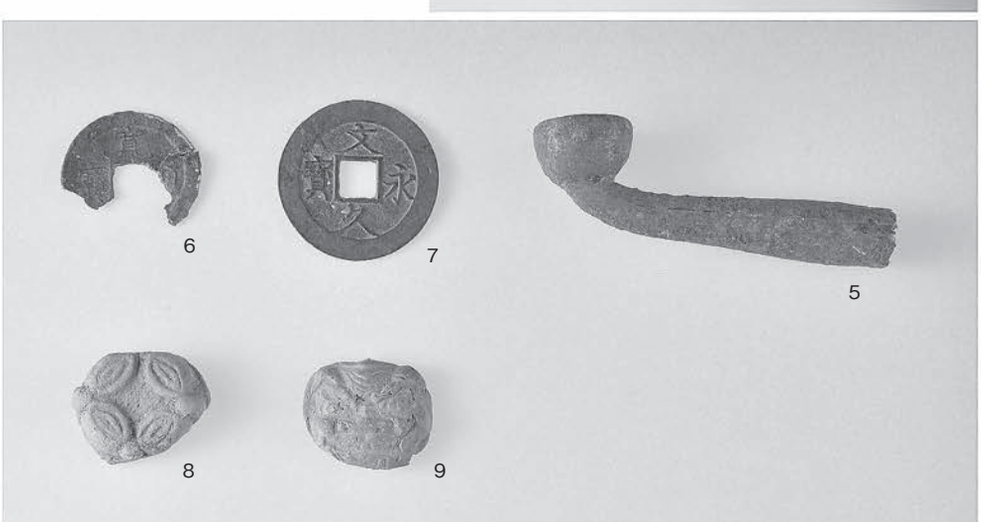
縄文土器（2）



縄文土器（3）



縄文時代石器



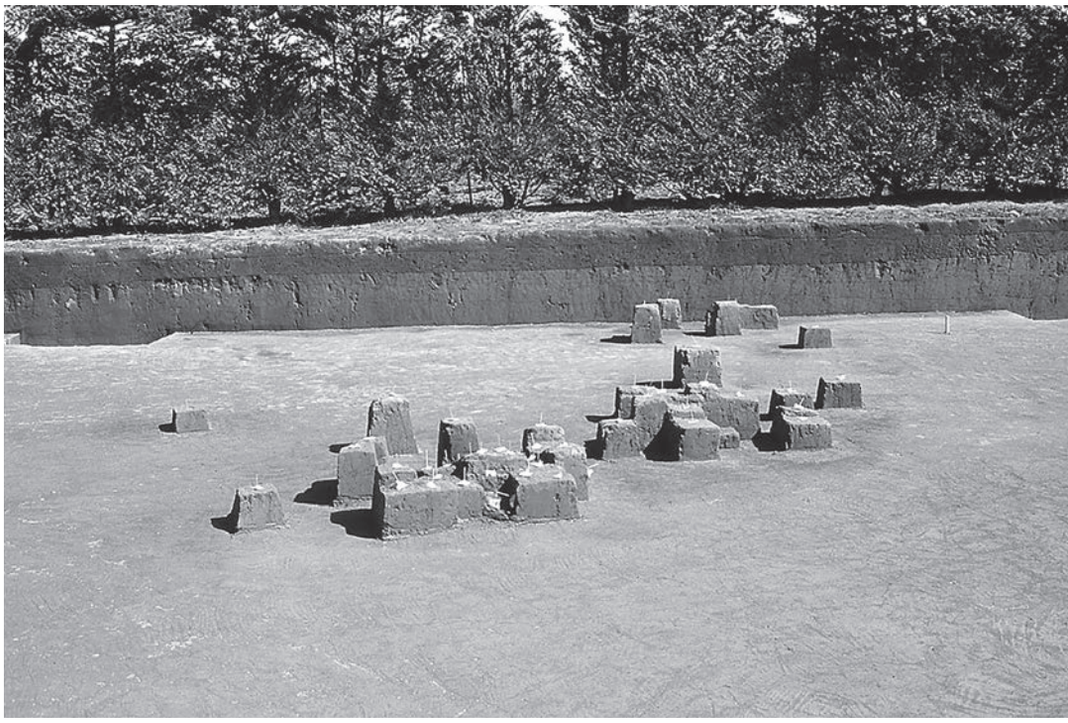
平安時代土師器、近世遺物（1）

近世遺物（2）

坪井向遺跡

図版21

土層（26F-45 グリッド）
西から



第１・第２ブロック
南から

27H-56グリッド
南から

図版22

坪井向遺跡

トレンチ12（第２次調査）

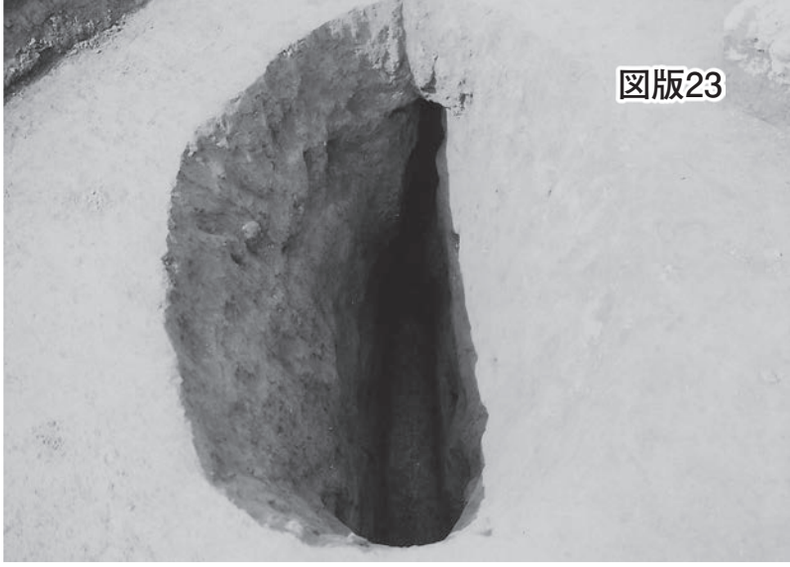
トレンチ19（第２次調査）

トレンチ２（第３次調査）

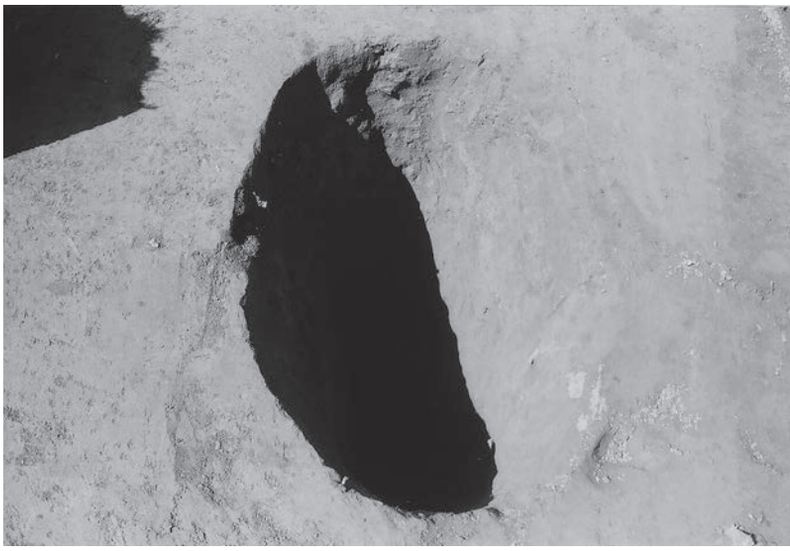
坪井向遺跡

図版23

SK-001 陥穴



SK-002 陥穴



SK-003 陥穴

SK-004 土坑

図版24

坪井向遺跡

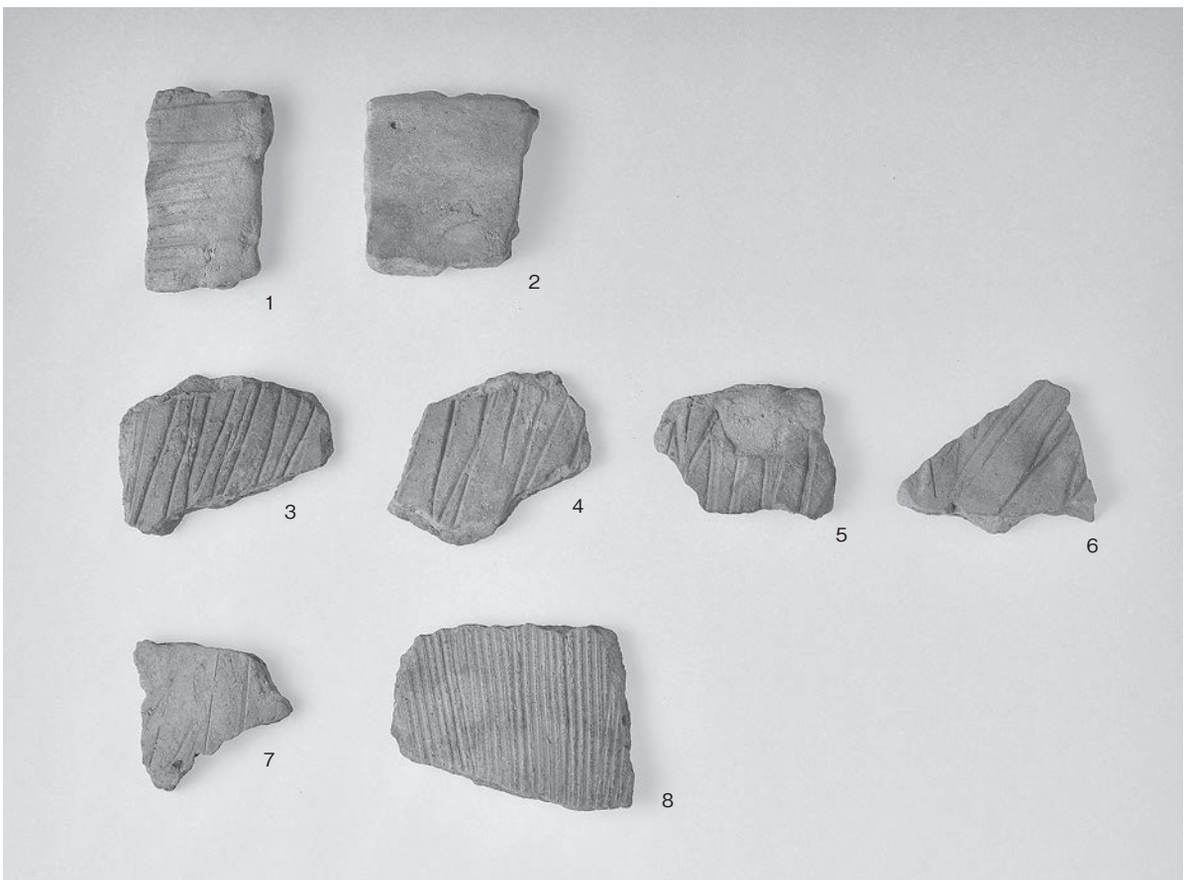
SI-001 住居跡
遺物出土状況

SI-001 住居跡

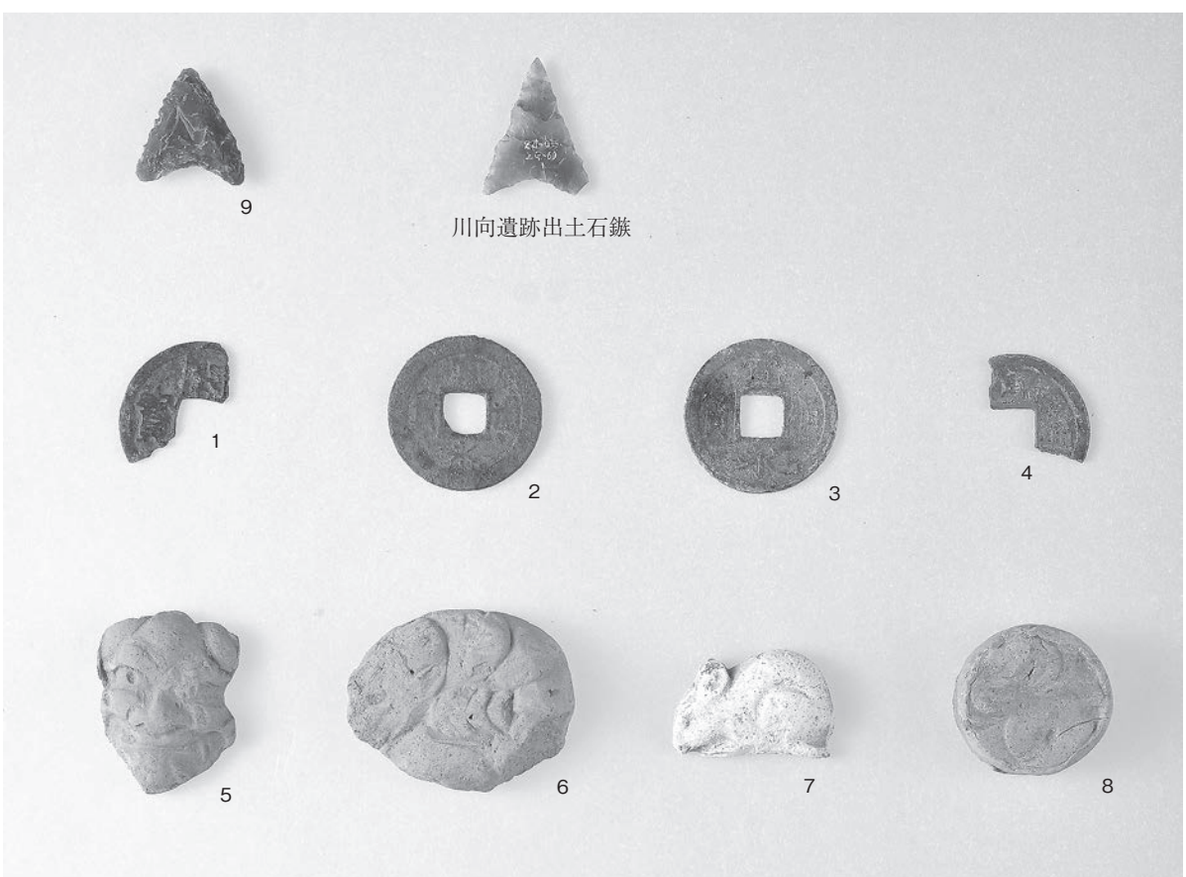
SA-001 野馬土手

土層断面

トレンチA



土錐・縄文土器



縄文時代石器（坪井向・川向）、近世遺物

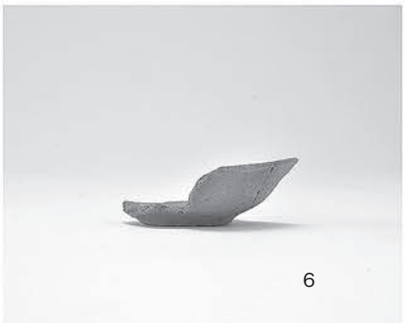
坪井向遺跡

1

2

4

5


6

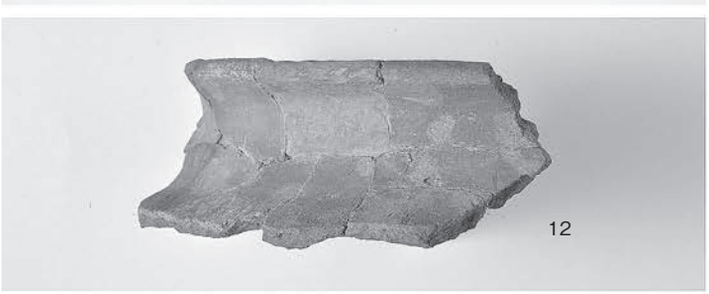
7

9

8

10

11


12

13

17

16

平安時代土師器

川向遺跡

第１ブロック西から

第２ブロック　西から

第３ブロック　南から

SK-01 陥穴
土層断面

SK-01 陥穴

SK-02 陥穴

庚申山塚群

図版29

調査前風景

確認トレンチ
（南から）

確認トレンチ
（北から）

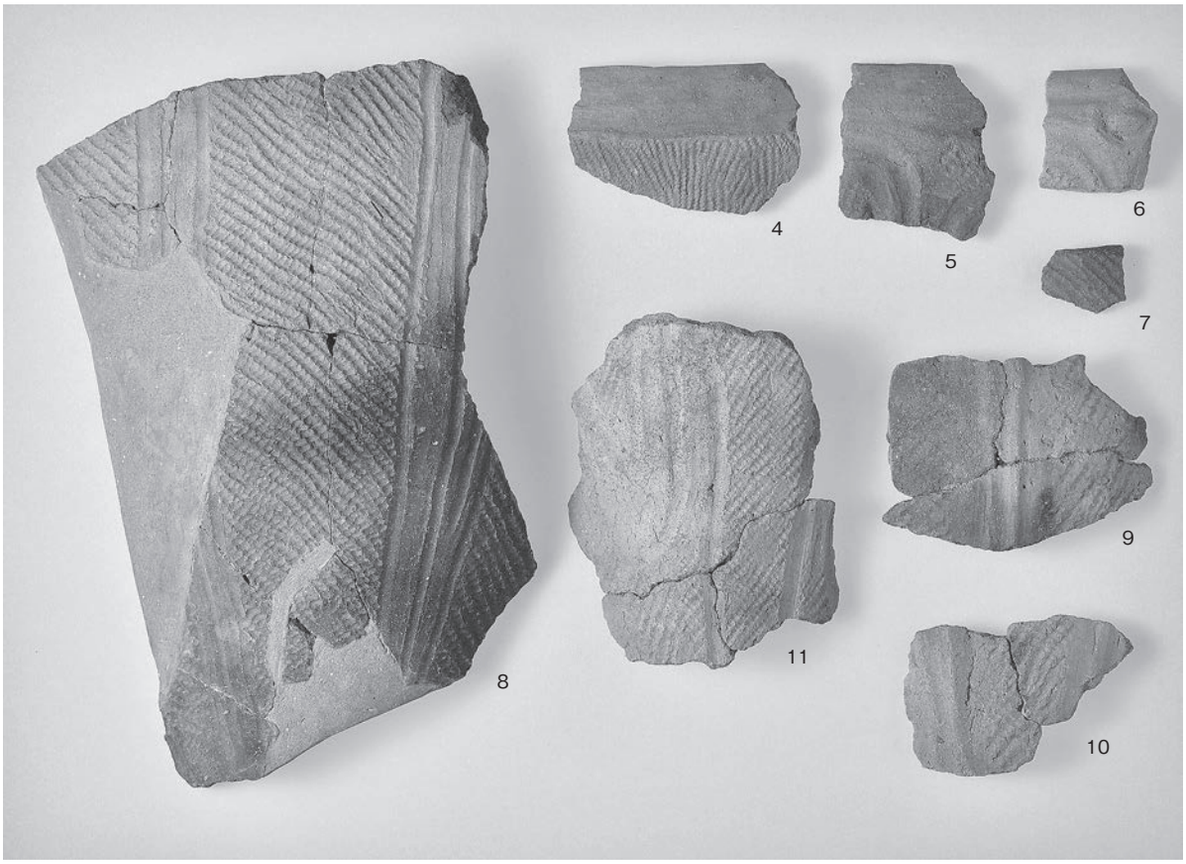
八王子台遺跡

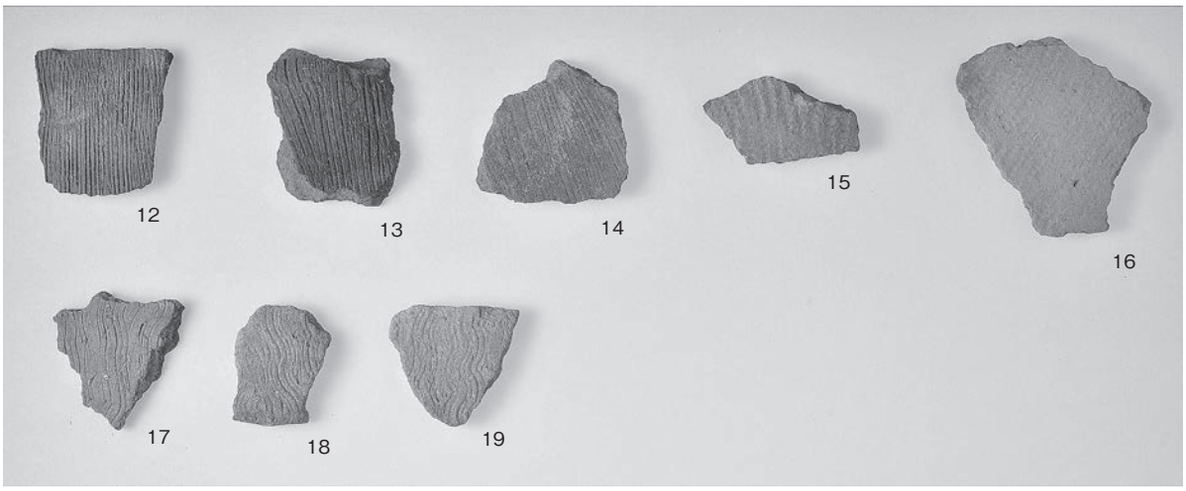
八王子台遺跡（13）
調査前風景

H24-SI-001 住居跡
土層断面と遺物出土状況

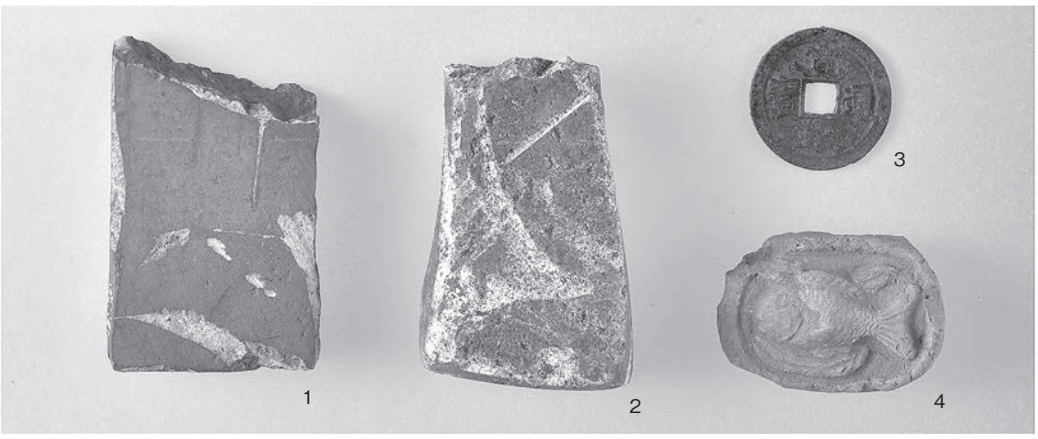
H24-SI-001 住居跡

縄文土器（1）

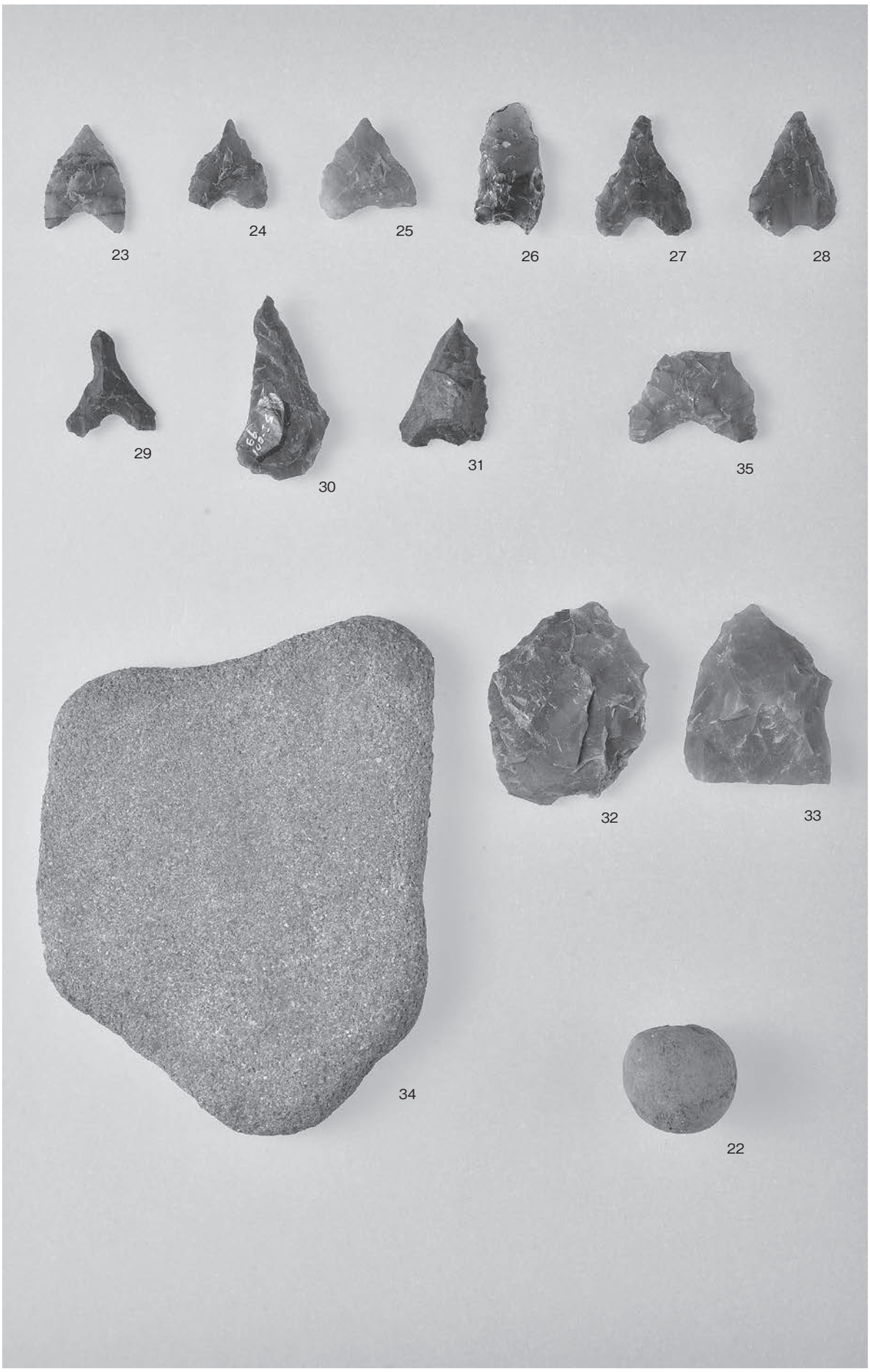




縄文土器（2）

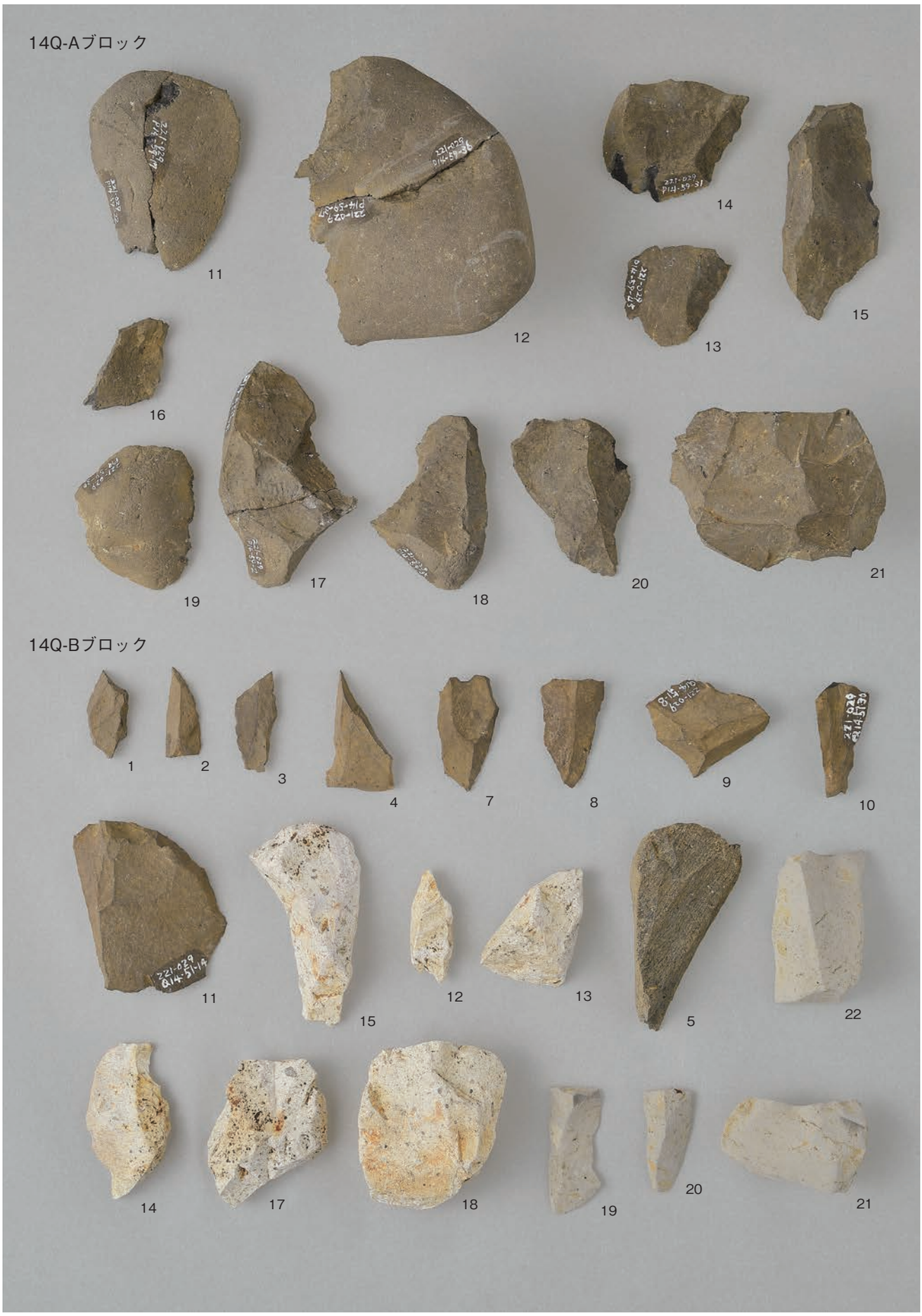


近世遺物



縄文時代石器

東向遺跡旧石器時代遺物（1）

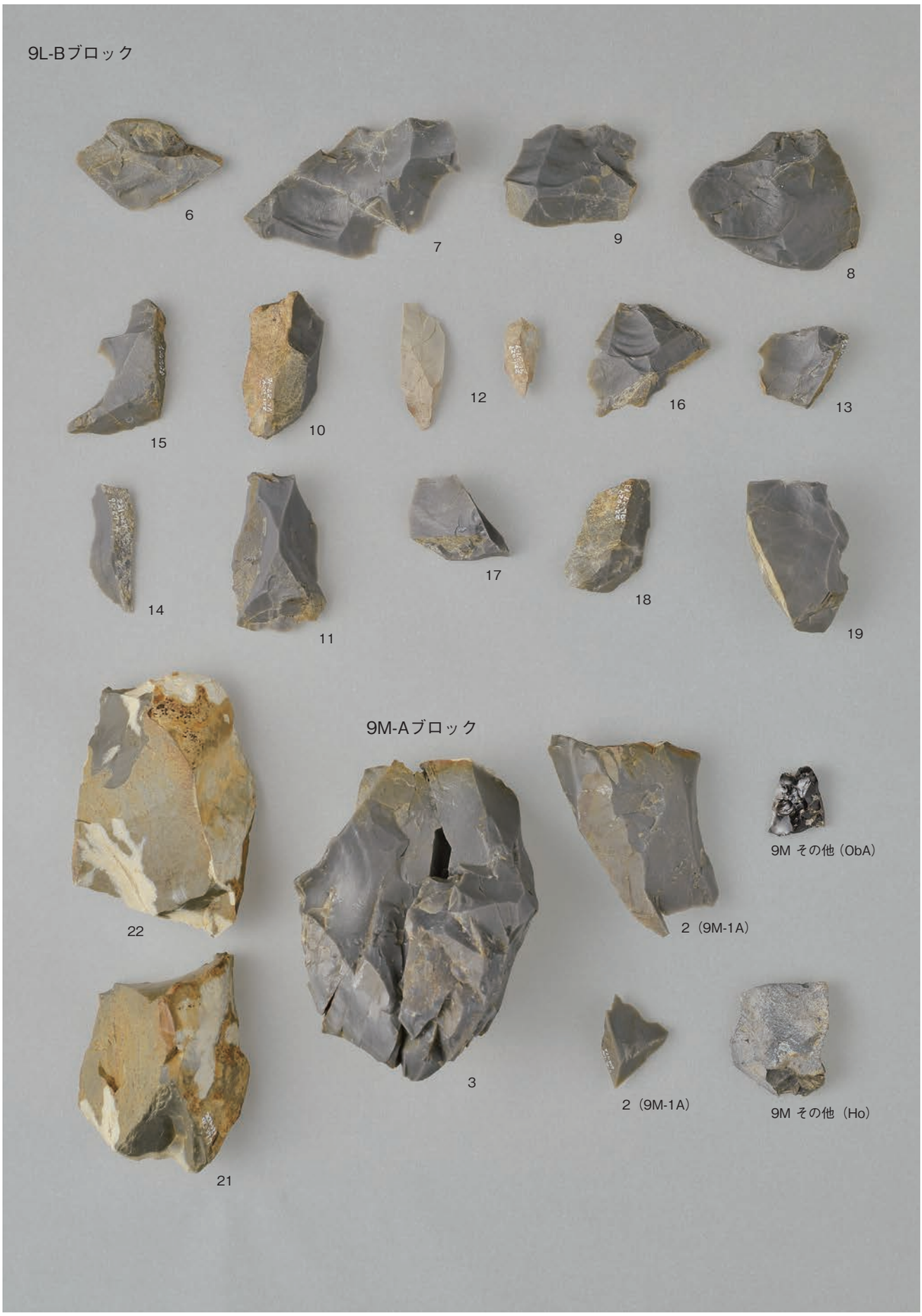


東向遺跡旧石器時代遺物（2）

東向遺跡旧石器時代遺物（3）

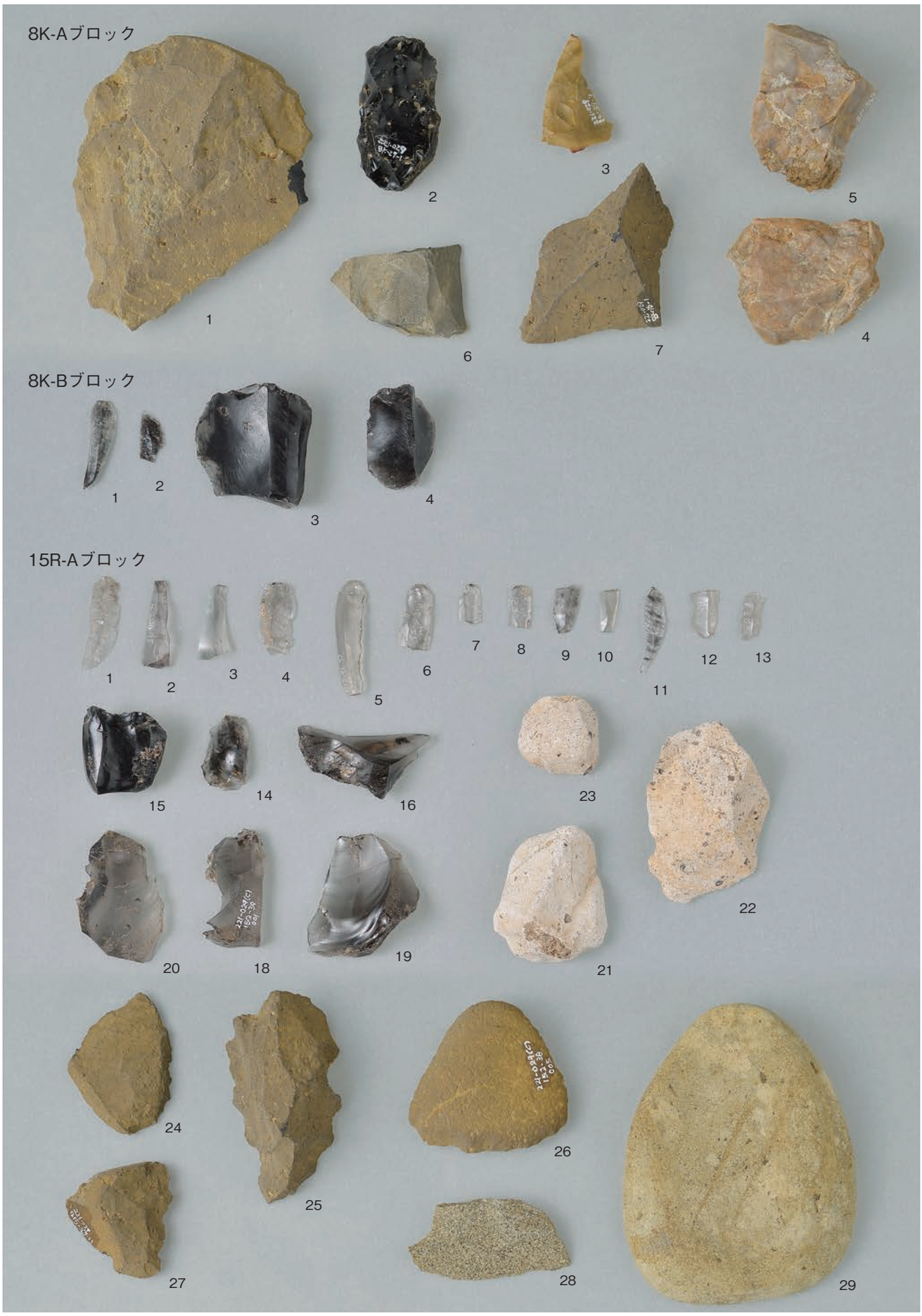
東向遺跡旧石器時代遺物（4）

東向遺跡旧石器時代遺物（5）



東向遺跡旧石器時代遺物（6）

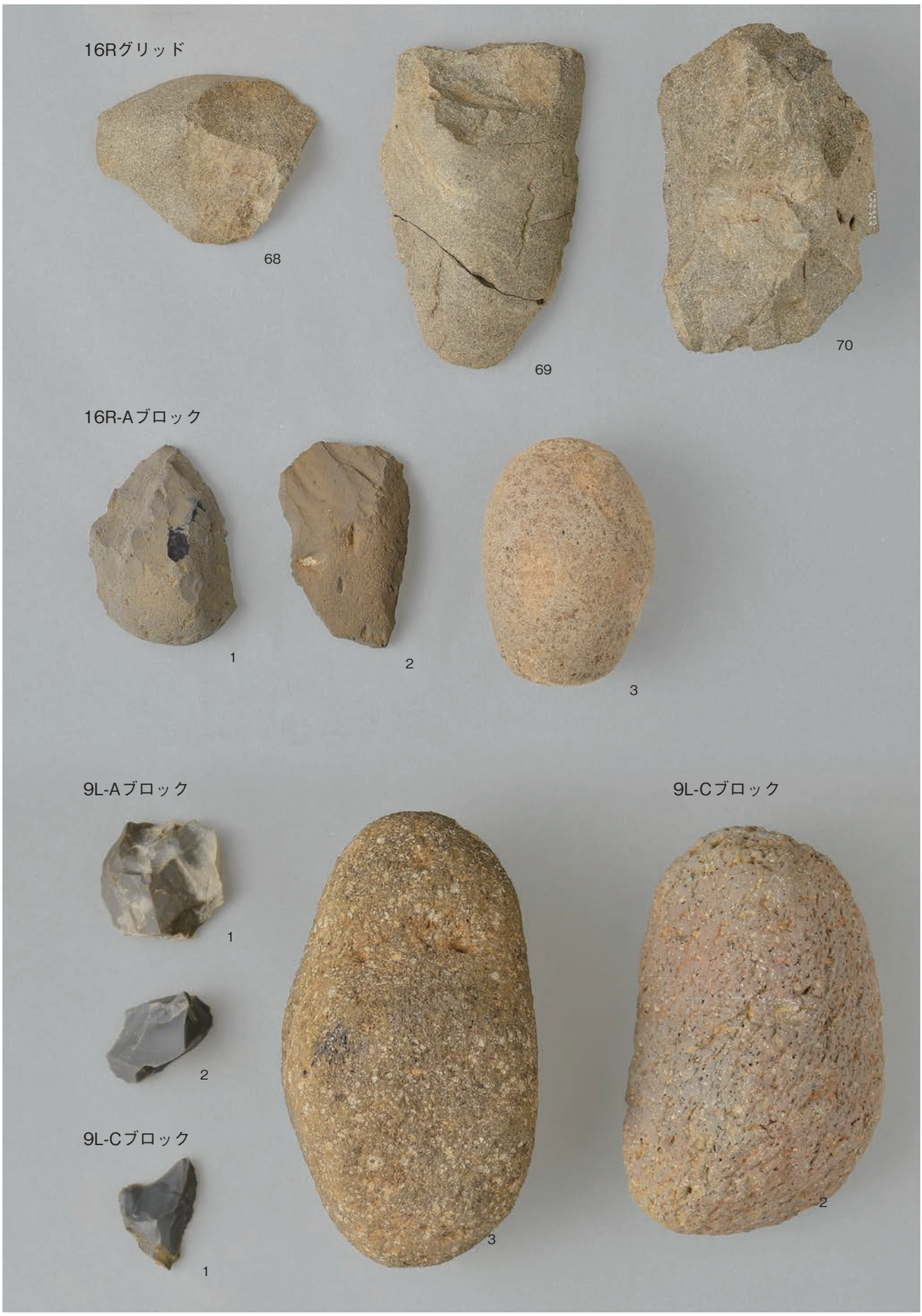
東向遺跡旧石器時代遺物（7）



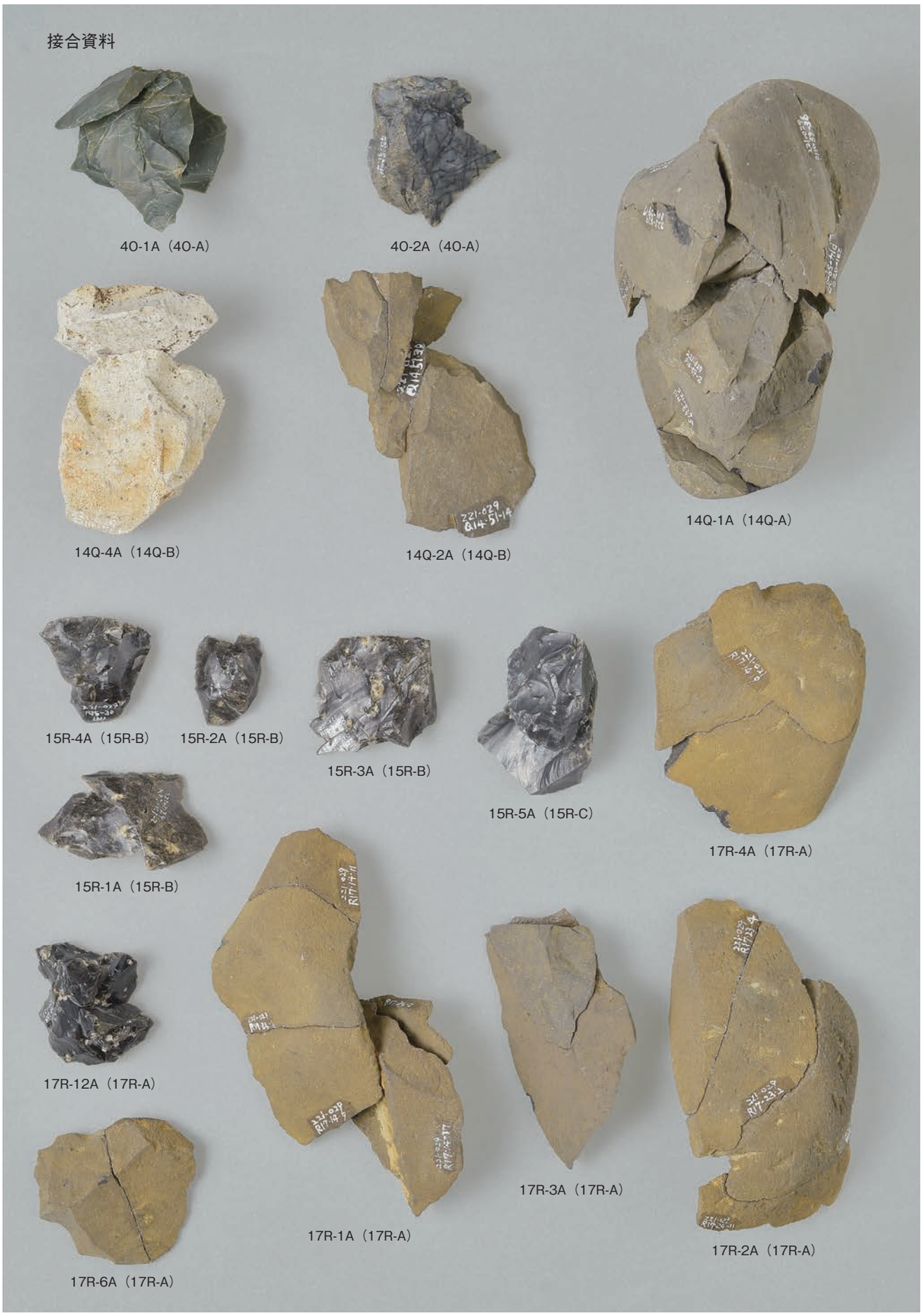
東向遺跡旧石器時代遺物（8）

東向遺跡旧石器時代遺物（9）

東向遺跡旧石器時代遺物（10）

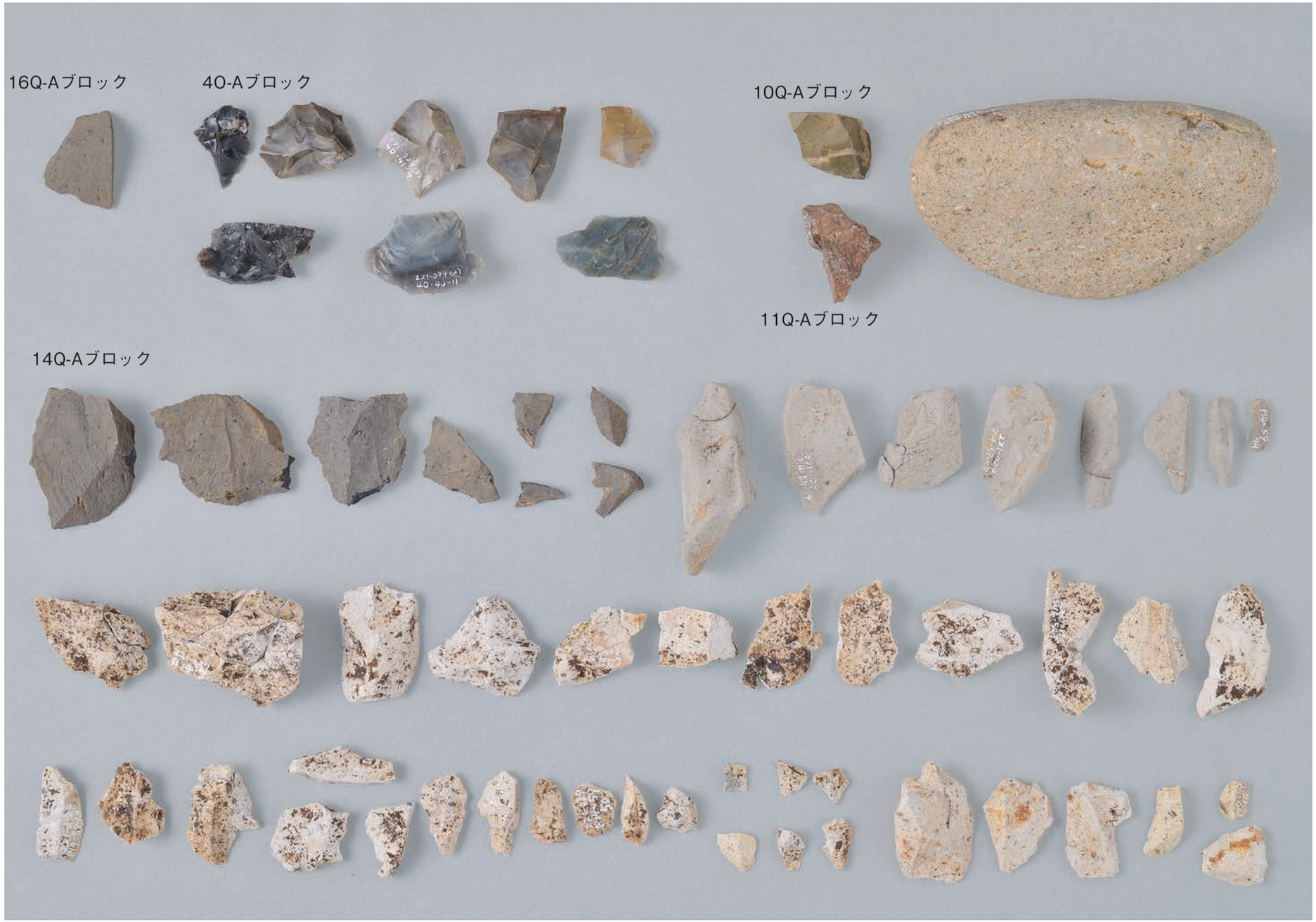


東向遺跡旧石器時代遺物（11）



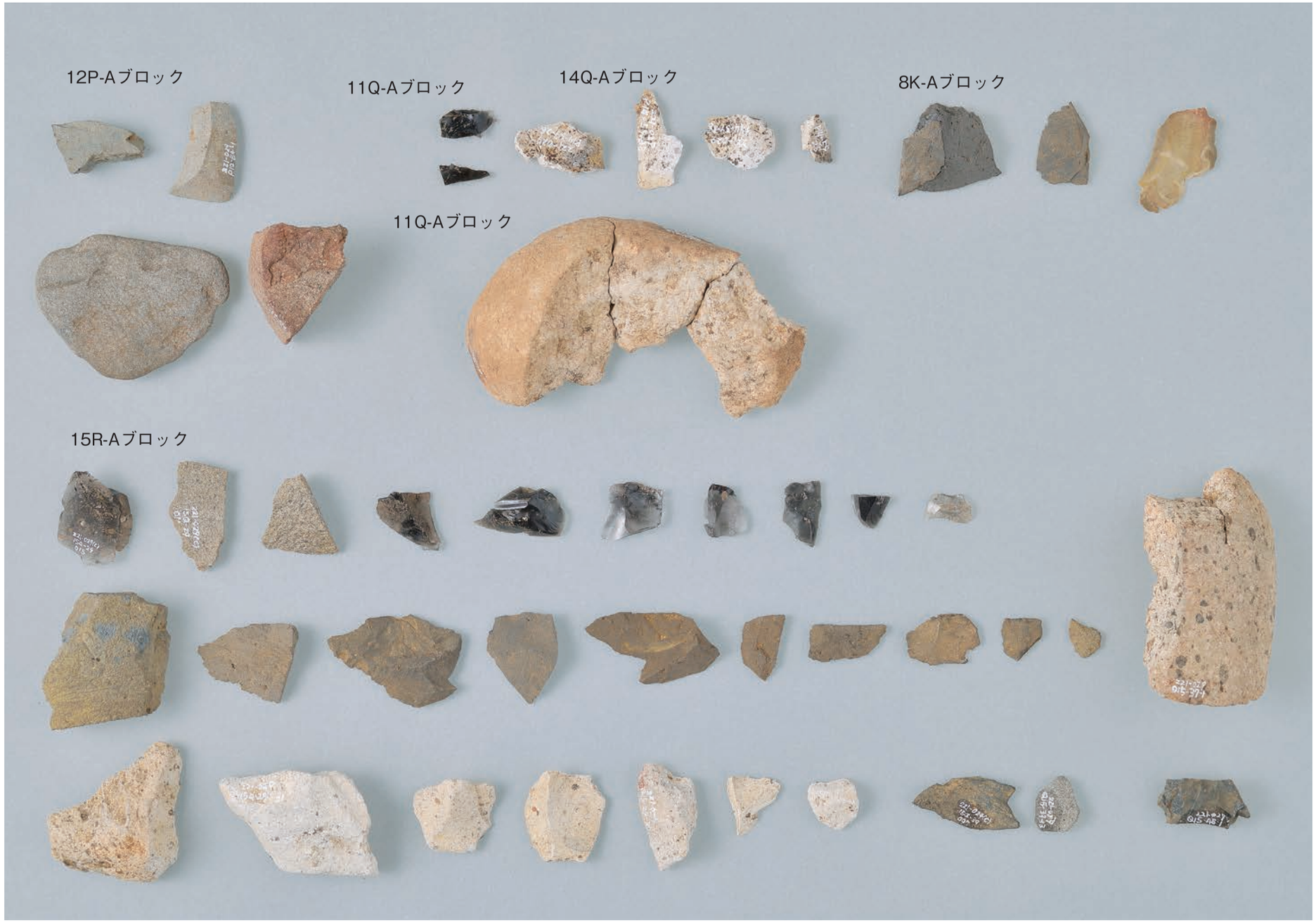
東向遺跡旧石器時代遺物（12）

東向遺跡旧石器時代遺物（13）



東向遺跡旧石器時代遺物（14）

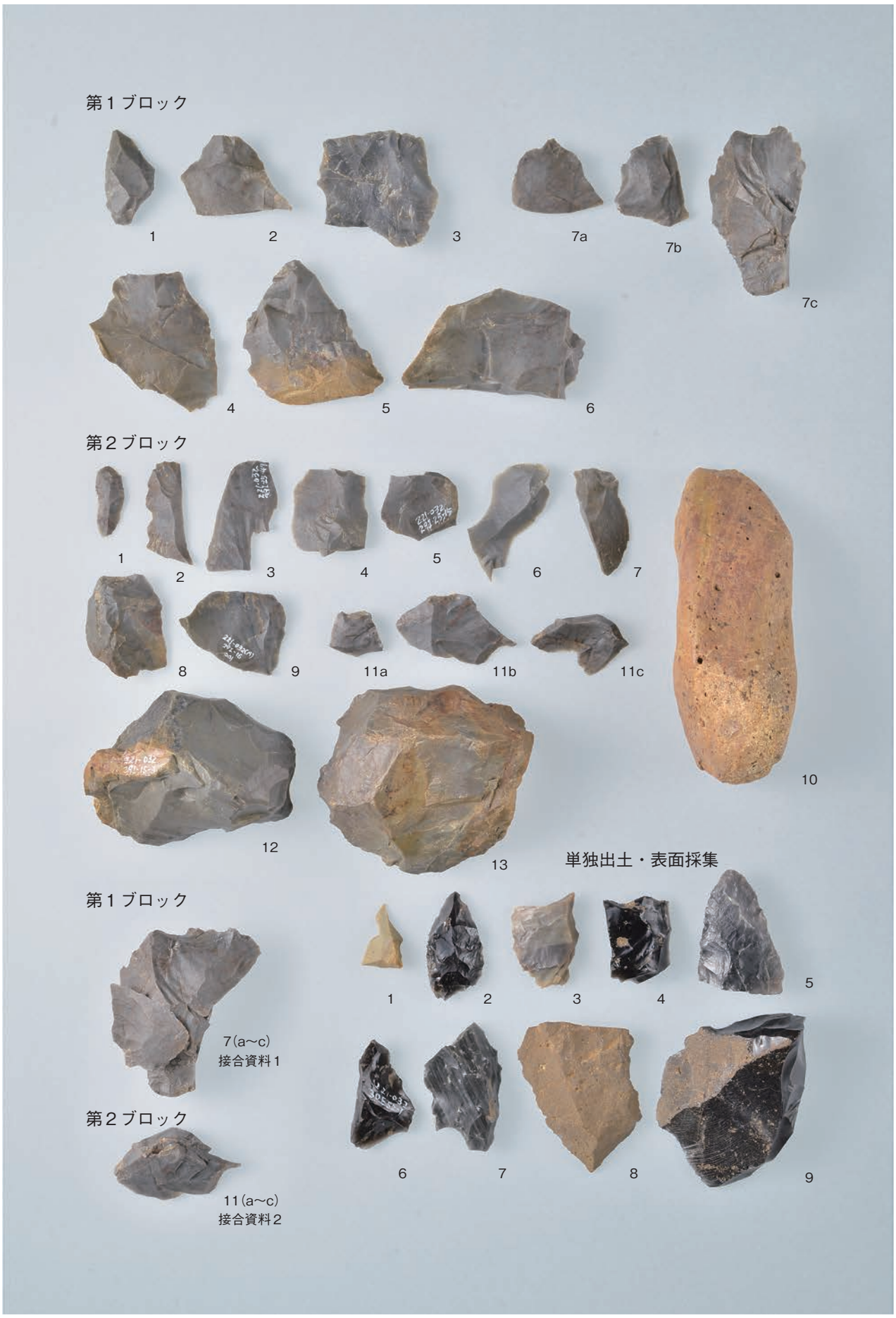
東向遺跡旧石器時代遺物（15）



東向遺跡旧石器時代遺物（16）

東向遺跡旧石器時代遺物（17）

東向遺跡旧石器時代遺物（18）



坪井向遺跡旧石器時代遺物（１）

坪井向遺跡旧石器時代遺物（２）

川向遺跡旧石器時代遺物（１）

川向遺跡旧石器時代遺物（２）

坪井向遺跡旧石器時代遺物（３）

報告書抄録

ふ　り　が　な	にしやちよほくぶちくまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書　　名	西八千代北部地区埋蔵文化財調査報告書
副　書　名	八千代市東向遺跡・坪井向遺跡・川向遺跡・庚申山塚群・八王子台遺跡
巻　　次	4
シ リ ー ズ 名	千葉県教育振興財団調査報告
シ リ ー ズ 番 号	第725集
編　著　者　名	橋本勝雄・森本和男・島立　桂・雨宮龍太郎・髙橋博文・蔀　淳一・倉内郁子
編　集　機　関	公益財団法人　千葉県教育振興財団
所　在　地	〒284 - 0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2　　TEL 043 - 422 - 4848
発 行 年 月 日	西暦 2014 年 3 月 20 日

所収遺跡（ふりがな）		東向遺跡（ひがしむかい いせき）	坪井向遺跡（つぼい むかい いせき）	川向遺跡（かわむかい いせき）	庚申山塚群（こうしんやまつかぐん）	八王子台遺跡（はちおうじだい いせき）
所在地（ふりがな）		千葉県八千代市吉橋字宮前3079ほか（ちばけんやちよしよしはしあざみやまえ）	千葉県八千代市大和田新田字坪井向1207-3ほか（ちばけんやちよしおおわだしんでんあざつぼいむかい）	千葉県八千代市吉橋3039-2ほか（ちばけんやちよしよしはし）	千葉県八千代市大和田新田1233-1ほか（ちばけんやちよしおおわだしんでん）	千葉県八千代市大和田新田1233-1ほか（ちばけんやちよしおおわだしんでん）
コード	市町村	２２１	２２１	２２１	２２１	２２１
	遺跡番号	０２９	０３２	０３６	０３５	０３１
経緯度	北緯	北緯35度44分39秒	北緯35度44分12秒	北緯35度44分46秒	北緯35度44分25秒	北緯35度44分27秒
	東経	東経140度4分19秒	東経140度4分4秒	東経140度4分1秒	東経140度4分11秒	東経140度4分5秒
調査期間		19971201～19980210 19990201～19990326 19991201～19991228 20010105～20010131 20031117～20040119 20040802～20040930 20041206～20041227 20050817～20060131 20060410～20060602 20061201～20061226 20070201～20070328 20070404～20070410 20070423～20070508 20071115～20071130 20090202～20090227 20091102～20091130 20091201～20100226 20100201～20100226 20100806～20100915 20100916～20100927 20101124～20101224 20110808～20110829 20110913～20110922 20110927～20110929	19971201～19980330 20000301～20000329 20020902～20030325 20030407～20030422 20050701～20050729 20060614～20060630 20070301～20070320 20100705～20100728 20100928～20101019	20051201～20060228 20070918～20071114	20051115～20051118	20110830～20110830 20120507～20120530
調査面積		153,978㎡	51,712㎡	28,662㎡	塚２基	3,171㎡
調査原因		区画整理	区画整理	区画整理	区画整理	区画整理

所収遺跡名		東向遺跡		坪井向遺跡		川向遺跡		庚申山塚群		八王子台遺跡	
種別	主な時代	包蔵地、集落跡	旧石器時代、縄文時代、平安時代、近世	包蔵地、集落跡	旧石器時代、縄文時代、平安時代、近世	包蔵地、集落跡	旧石器時代、縄文時代	包蔵地		包蔵地、集落跡	縄文時代
主な遺構	主な遺物	石器集中地点20か所、陥穴6基、土坑9基、住居跡2軒、塚1基、野馬土手堀8条、シシ穴1基	ナイフ形石器、縄文土器、縄文時代石器、土師器、陶磁器、泥メンコ、古銭、馬骨	石器集中地点2か所、陥穴3基、土坑9基、住居跡1軒、土坑1基、野馬土手堀1条	ナイフ形石器、縄文土器、縄文時代石器、土師器、泥メンコ、古銭	石器集中地点3か所、陥穴2基	ナイフ形石器、縄文時代石器			住居跡 1軒	縄文土器、縄文時代石器、泥メンコ、古銭
特記事項		近世のシシ穴を検出								縄文時代の集落を確認	

要　　約	本遺跡群は印旛沼水系に属する桑納川に開析された台地に位置する。旧石器時代の遺物集中地点（ブロック）、縄文時代中期の集落、平安時代の住居跡、近世の野馬土手・堀、シシ穴が確認された。

千葉県教育振興財団調査報告第725集

八千代市北部地区埋蔵文化財調査報告書４

－八千代市東向遺跡・坪井向遺跡・川向遺跡・庚申山塚群・八王子台遺跡－

平成26年３月20日発行

編　集　　公益財団法人　千葉県教育振興財団
文化財センター

発　行　　独立行政法人　都市再生機構千葉地域支社
千葉市美浜区中瀬１－3

公益財団法人　千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡809番地の２

印　刷　　大和美術印刷株式会社
木更津市中央１－1－６